

ストライクウィッチーズ  
ズ 君の明日は

桜子道 晴幸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ストライクウィッチーズの二次創作。統合戦闘航空団設立前のブリタニアで、バルクホルンたちが出会った扶桑の少年ウィッチとの物語。明日へと生きる少年少女たちの戦場は人としての何かを大切に抱いた日々の欠片である。険しい現実を、明日へと命をつなげるのか。

# 目次

第一話	出会い	1
第二話	結成	43
第三話	儂い	79
最終話	君は来ない	119
最終話改	祈りが届くなら	136
新たな翼		175
新たな翼	第二話	197
新たな翼	第三話	220
新たな翼	第四話	241
新たな翼	第五話	267
新たな翼	第六話	297
新たな翼	第七話	342

新たな翼	第八話	369
新たな翼	第九話	409
新たな翼	第十話	439
新たな翼	第十一話	473
籠の中の翼	第一話	513
籠の中の翼	第二話	546
籠の中の翼	第三話	582
籠の中の翼	第四話	614
籠の中の翼	第五話	647
籠の中の翼	第六話	691
籠の中の翼	第七話	724
籠の中の翼	第八話	756
籠の中の翼	第九話	788

籠の中の翼	第十話	—
籠の中の翼	第十一話	—
籠の中の翼	第十二話	—
籠の中の翼	第十三話	—
籠の中の翼	第十四話	—
籠の中の翼	第十五話	—
籠の中の翼	第十五・五話	—
籠の中の翼	第十六話	—
籠の中の翼	第十七話	前編
籠の中の翼	第十八話	後編
不滅の翼	第一話	—
不滅の翼	第二話	—
不滅の翼	第三話	—

12671229118711431102106910621024 980 941 903 862 823

不滅の翼	第四話	—
不滅の翼	第五話	—
不滅の翼	第六話	—
不滅の翼	第七話	—
不滅の翼	第八話	—
不滅の翼	第九話	—
不滅の翼	第十話	—
不滅の翼	第十一話	—
不滅の翼	第十二話	—
不滅の翼	最終話	—

1673164016001560152214781438139813531309

# 第一話 出会い

バルクホルン中尉はブリタニアで哨戒任務に就いていた。祖国は今やネウロイの巢と化し、帰るべき国と愛すべき妹は寝たきりの状態で憎悪と己の不甲斐なさを嘆いていた。そんなある日、警戒空域で何やら戦闘が行われていた。

「ん？ 戦闘か?!」

よく見ると同じくウィッチが一人で奮戦していた。助太刀すべく、通信を試みる。

「こちらバルクホルン中尉、援護する!」

勢いよくそう言うと、返ってきた言葉は意外な声音と短い単語だけだった。

「援護不要」

そう言われると無線は切れてしまった。この特徴的な低さと少しの甲高さは男性特有の声だった。いわゆるウィザードと呼ばれる存在である。初めて見たが、そのことより援護の必要はあるはずなのにそのウィザードは頑なに近寄らせなかった。

「援護の必要がありと考える！加勢する！」

「邪魔するな」

邪魔はしないと考え、自らも戦闘に加わる。ネウロイの未来位置に照準を合わせ、撃つと同時にウィザードも射撃して一気にネウロイは消滅した。加勢した甲斐があったと満足しウィザードに通信をする。

「援護の甲斐はあったようだな？」

「中尉、階級はあなたの方が上だからあまり言いませんが、要らないと言ったら要りません。では、失礼します。」

「なっ!?!」

ウィザードはそれだけ言うとすぐに離脱してしまった。バルクホルンは助けてあげ

たはずなのに文句を言われたことに腹が立った。加勢したから早く倒せたのであって、それにこしたことはないはずなのだ。しかし、男性であることと階級は下であること以外何も分からないウイザードに興味がわかないでもなかった。

基地に帰ると報告を済ませ、食事を摂る。同僚で部下のハルトマン少尉は怠け者でいまだに起きてこない。上司のミーナ大尉がいたため、そのウイザードの情報を聞くことにした。

「ミーナ大尉はここらへんの部隊にいるウイザードを知らないか？」

「あら、近隣の部隊にウイザードがいるなんて聞いたことないわね。部隊章は確認したかしら？」

「それが、無線で少し話したくらいで確認はしていないんだ。だから、今回は協同撃墜と報告したのだが、相手がわからないので困ったんだ。」

それと嫌なやつだと言うのは胸に留めて、ミーナ大尉でも知らない存在に関心は深まるばかりだった。

翌日はハルトマン少尉とペアで哨戒任務に就いたが、今度も戦闘が行われていた。

「ハルトマン！戦闘準備だ！」

「はーい」

腑抜けた声だが、これでも才能は抜群でガランド少将からの覚えもいいエース候補である。このペアでバルクホルンは加勢する姿勢を見せると、またあの声が出た。

「カールスラント機へ告ぐ、直ちに現空域を離脱せよ。」

ハルトマンが男の声に驚きつつも、支援を必要としないことにバルクホルンの指示を待っていた。バルクホルンは今度こそ正体を掴むために強引に割り込むことにした。

「邪魔はしない、撃墜記録もそちらで持つて行つてもらつて構わない！」

「え、いいの?!」

おそらく撃墜記録を奪われるのを嫌っているのだろうという予測のもとバルクホルンは支援を決める。すると、声の主から鋭い声が飛んできた。



「警告する、直ちに離脱せよ。従わない場合、攻撃も辞さない。」

緊張が走る。バルクホルンはなぜ支援を固辞し、あまつさえ味方の我々を攻撃対象にしようとするのか理解できなかった。ハルトマンは動揺を隠せず、バルクホルンに指示を仰いだ。

「ど、どうするの?!」

「い、いや!はったりだ!私の方が階級も上な以上、強権でもって収める!行くぞハルトマン!」

「う、うん!」

上空から逆落としになり、ネウロイを攻撃する。ネウロイは不意を突かれたのかコアを確認するまで外壁が壊される。すると、声の主が鋭い機動で横合いから一気に斬った。バルクホルンとハルトマンは刀という全時代的な道具で戦闘する行為を初めて目撃した。

「か、刀だ!?斬っちゃったよ!」

「ま、まさか…ネウロイを一刀両断だと…つまり、やつは扶桑のワイザードか！」

ネウロイの破片から声の主が出てくると、ぶっきらぼうに話しかけて来た。

「警告はしたはずだ」

怒気を孕んだ声にバルクホルンは身構える。しかし、ハルトマンが陽気に返し始めた。

「やつほー！無事に前線に離脱したよ！」

「なっ?!」

ハルトマンの言葉はよく考えると、離脱せよとしか言われてないためどこに離脱しようが勝手なのだ。そこを突いているわけだが、果たしてこんな無茶苦茶な理論を受け入れるのかと緊張は続いた。すると、声の主は諦めたように溜息交じりにこう告げてきた。

「…了解した。貴官の意見は尊重する。無事に帰還されたし。」  
「うん！じゃあね！」

バルクホルンはまさかの展開に開いた口が塞がらなかつた。しかし、相手の正体を明かすため質問する。

「ち、ちよつと待つてほしい！今回の貴官の功績を報告するため所属を問いたい！」  
そういうと声の主は、嫌そうな、気だるげに呟く。

「…扶桑海軍、少尉。赤松勇（あかまついさみ）欧州派遣艦隊、267空所属。」

やはり扶桑のウイザードで、航空母艦所属ということから北海から来ている単独部隊だと推測できた。そして、ようやく聞いた声の主の名前は扶桑特有の響きを持つものだった。

「あかまつ…いさみ少尉…了解した。貴官の奮闘を高く評価する。」

「もう行ってもよろしいか？」

「引き留めてすまない、行ってくれ。」

バルクホルンがそう言うとすぐに赤松は遠くの空に消えていった。バルクホルンたちは帰投し、報告を終えるとバルクホルンは赤松のいる部隊について調べようとする。しかし、その手間は近いうちに無駄足になることとなる。

「なぜ…なぜ、こうなった…」

目の前にいる少年は、まごごことなき赤松勇少尉だった。バルクホルンは苦笑いを堪えきれなかった。

「本日より配属されることとなりました。扶桑海軍少尉、赤松勇です。以後、よろしくお願ひします。」

こんなにも早く、しかも同じ部隊になるなんてだれが想像しただろうか。皆、一様に男性ウィッチに驚きはしたものの、戦力の強化はありがたかったことから歓迎ムードだった。さしものハルトマンとミーナもそうだった。

「これから私たちと行動を共にする扶桑海軍の赤松少尉です。みなさん、よろしくね。」

「やっほー！前に会ったよね？よろしくう！」

ハルトマンのあいさつに軽く会釈するに留める赤松は、バルクホルンを見つけると目を細めてじつと見つめ始めた。たじろいでしまうバルクホルンは少しでも威勢を張る。

「な、なんだ?!よろしく頼む…」

「バルクホルン中尉…ですね。以前は失礼しました。本日より仲間です。よろしくお願います。」

青天の霹靂のごとく律儀に頭を下げ、あのぶつきらぼうの話し方を止め、上司を敬う姿に普段なら当たり前のことだが慌ててしまった。

「あ、ああ…よろしく頼む…」

「トウルルーデ緊張してる？」

「し、し、してない！」

ハルトマンには揶揄される始末で本当に災難な始まりだった。バルクホルンはこの不思議な出合いを忘れることはできないと思った。

さらに、運命のいたずらはバルクホルンをさらにかき回す。赤松の基地の案内を任されてしまった。黙々とついてくる赤松にバルクホルンは緊張を隠せなかった。

「ハ、ハ、ハ、ここが共同の食事場だ。」

「ハ、ハ、ここは格納庫…」

「そして…」

普段よりどっと疲れた感じがしたが、案内は終わった。なんと赤松は案内している間一言も喋らなかつた。終始、バルクホルンが紹介するだけだった。そして、いたずらは続く。ミーナに赤松の技量を確認するようにと言われてしまった。

「飛行訓練でどの程度できるか見てあげて？」

バルクホルンはユニットを履き、隣でエンジンを回す男性ウィッチである赤松を見やる。整備員からの説明を受け、機器をチェックしている。バルクホルンは頭を振り、一切の思考を飛行のみに切り替える。ここは最前線で、必要なのは戦力のみだからだつた。

「では、行くぞ！赤松少尉！」

勢いよく飛び出て、訓練飛行場の障害物を避けて飛び、射撃訓練として遠くの的を飛行しながら撃つなど高等技術訓練までをしてきて思ったことは一つだった。

(「いいつ、うまい！」)

なんとバルクホルンの飛行に追従し、射撃も悪くない成績を誇った。さらに言うとうと、長年付き添ったペアのように意気はピッタリだった。ユニットの違いはあれど二番機

としての役割を弁え、決して邪魔をしない徹底ぶりは感心できた。

「これはなかなか…どうしてここまで知られていなかったんだ？」

赤松の質の高さを報告し、今度はハルトマンと模擬戦をするに至った。

「では、監督を私がする。二人は弾が切れるか被弾したところで終了する。いいな？」  
「はい…寝てたかったなあ…」

ハルトマンのいつもの態度は捨て置き、バルクホルンは赤松を注視する。やはり緊張などの色は見当たらず、訓練に真剣な様子が伺えた。少しはハルトマンも見習ってほしいものである。しかし、模擬戦ともなるとハルトマンもわずかに力が入る。バルクホルンは両者とも成長が気になった。

「では、始め！」

互いに一気に高度を取り、距離を縮めていくと先に射撃を開始したのはハルトマン



だった。飛行、射撃、勘が冴えるハルトマンの弾は赤松の周囲を横切り、すべて当たりはしなかった。これにバルクホルンは感心した。

（射撃を怖がらない度胸はあるな）

続いて、巴戦になるとさすがの扶桑海軍の名機である零戦は、ぐんぐんと旋回半径の短さを生かして間合いを詰めていく。これには堪らずハルトマンは下方に逃げる。カールスラントの機体であるメッサーシャルフは上昇力と下降に優れた一撃離脱を得意とする機体で、ハルトマンの戦術はそれによるものだった。

（ハルトマンも成長しているな…それにしても二人ともいい動きだ。）

ハルトマンが引き起こし一気に上昇すると、赤松もそれに追隨する。機体性能の差で、ハルトマンが先に上りきると反転し、攻撃をしかける。太陽を背にして、さらに反転を最小に抑えた技量はまさにハルトマンの成せる技だった。これは勝負ありかと思つたバルクホルンは目を見張ることとなる。すれ違い様の僅かな間にお互いペイント弾が当たっていた。バルクホルンは急いで終了すると、現場を確認する。

「当たったのは同時か！」

確認すると、ハルトマンはユニットに二発、赤松にはユニットと胴体に二発ずつ命中していたが、当たったのはほぼ同時であった。バルクホルンは引き分けにしようと考えていると赤松が口を開いた。

「ハルトマン少尉、負けました。」

「へっ?!」

あっさり敗けを認められてしまい、慌てて理由を聞く。

「いや、この試合はドロ―だ！命中は同時だったからな！」

そういうと、赤松は非常に困った顔をしながらこう答えた。

「失礼ですが、命中箇所では私は死亡です。ハルトマン少尉はよくても重症でしょう。」

戦場では私は死んでいます。」

命中箇所を目をやりながら赤松は引き分けをよしとしなかった。バルクホルンは戦場と模擬戦をどこか乖離して考えていたのでないかと己を恥じると同時に、赤松のその姿勢に感心していた。

数日後、格納庫に行くと赤松がぼんやりと一人外を見ていた。バルクホルンは赤松の経歴を知りたくなり、声をかけることにした。

「赤松少尉、ちょっといいだろうか？」

不意に話しかけられたが、驚くことはせずきちんと敬礼して返す姿はまさに軍人であり、どこかのハルトマンに見せてやりたい光景だった。

「そんなに畏まらないでいい。少し世間話をしに来たんだ。」

「そうですか……」

バルクホルンは恐る恐る聞いてみることにした。もちろん、バルクホルン自身にも触

れてほしくない過去はあり、そのことを決めるようであれば話を改める覚悟だった。

「少尉は、ここに来る前は何をしていたんだ？」

「ずっと戦場にいました。」

淡々と語る赤松の言葉は、どこで？という疑問を生じさせる。また、バルクホルンはそれ以上にウィザードという存在自体に興味を持っていた。

「ということとはウィッチの資質を見込まれてということか？」

「はい。周りに同性のウィッチはいませんが、男でウィッチということもあり、周囲からは半人前扱いばかりでした。」

「そ、そうか！（触れない方がいい話題だったか?!）」

話の選択を間違えたと思ったバルクホルンは話題を変えようとすると、赤松は懐かしそうな顔をしていたことに気づいた。

「戦争にはいつから参加した？」

「扶桑海軍の終盤です。」

扶桑海軍は、ネウロイと世界が戦争を初めて間もない頃の戦いである。そのころからの参加者ともなるとベテランの域を超え、古豪の域に達するため、赤松の技量の裏付けとなった。

「なるほど古強者というわけか。それならあの強さは納得できる。」

「あの頃が懐かしいです。」

ふと呟いた言葉は故郷を思う一人の少年のような面持ちだった。この戦争は長く続いているため、バルクホルンは赤松が長い期間扶桑に帰れてないのだと考えた。

「扶桑はどんなところだ？」

「はつきりとした春夏秋冬と長い歴史があり、侍とウィッチの文化が融合した慎ましい文化を持つ美しい国です。」

バルクホルンは初めて見る赤松の柔らかな表情に、仲間としての感情が芽生え始めていた。よくわからない人だったが、こんな人間味のあるとは思わなかった。

「確かに扶桑は我々欧州の者からすれば不思議なところだな。でも私は祖国がないから……その気持ち分からないでもないがな……」

「はい、カールスラントは奪還すべき場所です。」

今度は熱意に燃える目をする少年のコロコロ変わる表情に、バルクホルンは物珍しさに質問を続ける。

「そういえば、少尉はいくつなんだ？」

「数えて17、満16歳です。」

「私の1つ下か！」

年齢の近さに親近感を覚え、会話が弾んでいることにバルクホルンは気づかなかつた。

「扶桑ではなんと呼ばれていたんだ？」

「そう…ですね、名前が勇（いさみ）だったので音読みで（ゆう）と呼ばれてました。」

バルクホルンは短く発音しやすい呼び名を気に入った。扶桑の発音は欧州では発音しにくいいため、あだ名のようなものの方がありがたかった。

「もしよければいいんだが、私もそれで呼んでもいいだろうか？」

「…構いません。でも、久しく呼ばれていなかったのでむず痒いですね。」

バルクホルンはおそらく扶桑での仲間とのあだ名だろうと思い、自分も友人として「ゆう」と呼ぶことにした。しかし、仲間はどこか遠くに行ってしまったのだろうかと思ひ、なぜ一人で戦っていたのかを問うことにした。

「どうして一人で戦っていたんだ？」

「…一人ではありませんでした。」

バルクホルンは言葉を間違えたかと思い、言葉を変えてもう一度聞く。

「他の仲間はどこに行ったんだ？」

バルクホルンは聞いた瞬間の赤松の顔を見逃さなかった。顔から笑顔がすつと引き、悲しみとも怒りとも取れる表情は触れてはいけない核心をついてしまったのだとバルクホルンを焦らせた。

「す、すまない！辛いことなら言わなくていい！」

しかし、赤松は首を横に振るとポツリポツリと話し始めた。その姿は今も存在するなにかを見やるようだった。

「カールスラント撤退戦で部隊は全滅しました…文字通り全滅でした…」

「どこにいたんだ？」

「・・・ゼーロウ高地」



バルクホルンは一瞬で理解した。ゼーロウ高地とはカールスラント軍が国民避難作戦であるビフレスト作戦で、撤退し損ねた10万人の大部隊で、その撤退を支援するために皇帝が全力を注いだほどだった。しかし、ゼーロウ高地ではその戦力の3割を消失、事実上カールスラント軍は壊滅した。その撤退戦は過酷以外の何物でもなかった。そこに赤松はいたのだ。

「それは…」

「撤退に失敗して、取り残された我々は武器弾薬、医薬品などが尽き、隊員たちは次々と消息を絶ちました。」

それは死んだかどうかも見えていないが、確実に生きてはいないことの裏返しであった。しかし、赤松はそこにいた。生き残ってしまった。

「最後に残ったのが、隊長と二人のウィッチでした。」

「隊長…」

「隊長は私の姉でした。」

「姉?!」

驚きの事実である。姉がいて、その姉は死んだ。バルクホルンはどこか他人事ではないと感じていた。

「残された私と負傷したウィッチを守るため、姉は片足しかないユニットで武器を探しに行きました。しかし、帰って来ることはありませんでした。」

今も探しているかのような遠くを見る眼差しは、過酷な戦場を目にした兵士の目だった。

「その後のことは思い出したくもありません。一人は敗血症により死亡、見殺しにするしかできませんでした。もう一人の負傷したウィッチが痛みから叫び始め、ネウロイに見つかる可能性がある以上、声を止める必要がありました。」

「なっ!?!」

バルクホルンは決して言わなかったが、声を止める必要というのは息の根を止めることと同義であり、赤松は人を殺めていることになる。そんな境遇を辿っていたとは知ら

ず、無神経なことを聞いてしまったと考えたが、もう遅かった。

「何時間か歩いていると幸運なことに扶桑のユニットがありました。なんとか飛べると思い、自分のユニット対で拝借して事なきを得ましたが、帰ってからの地獄でした…」

バルクホルンはもう後戻りできなかった。聞く以外に身動きができなかったからだ。しかし、赤松だけは目の焦点が定まっているがバルクホルンがいらないかのような虚空を掴む瞳だったのをバルクホルンは恐怖として感じてしまった。

「帰還を喜ばれはしたものの、ユニットを見た整備員が言ったんです…」

「…」

「これ、隊長のだ」…ってね。私は得てして姉と最後に会うことが出来ていたのですが、周りからは姉を殺して奪ったユニットと見られてしまいました…まあ、一人も二人も変わらないから反論の仕様がありませんよね…」

そう言うと、肩を落としてバルクホルンを見た。その目は「どうせお前も軽蔑したんだろ」と言わんばかりの諦めの目だった。しかし、バルクホルンも愛しい妹を失いかげ、

祖国を失った。同胞を失う苦しみを知らないはずがない。その苦しみを盾に赤松の話  
を理解しようとした。戦場とは綺麗事だけでは済まないのだ。

「少尉は…ゆうは…悲しいか？」

絞り出したと言っているいいほど、緊張していた。手が白くなるほど握りしめられていた  
手に気付き、開閉させる。赤松は表情を変えずに口を開いた。

「それが…涙も出なかったのです。」

自分でも驚いたと言わんばかりの感情の喪失は、赤松の感情が振り切っているのだと  
示していたのだろう。しかし、バルクホルンは言葉として自分でさえ分からないことを  
他人に言えるのかと自問自答するしかできなかつた。上官として、年上としてなにかを  
してあげたかつたが、言葉は詰まり、手足は鉛のように重かつた。何か、何かできない  
かと考えていたが、それを見て赤松は立ち上がり、出て行ってしまった。声にできない  
言葉はバルクホルンの胸の底深くに渦巻いていた。

数日後、ネウロイが出現し、基地に警告音が鳴り響く。

「ネウロイ出現！待機中のウィッチは全員出撃せよ！」

ミーナとハルトマンが走り出し格納庫に向かう。バルクホルンもそれに続くが先日のことが未だにしこりを残している。

「赤松少尉は私の二番機に！バルクホルン中尉はハルトマン少尉と！行くわよ！」  
「トウルルーデー！行くよ！」

赤松はバルクホルンを見た気がしたが今度は何も言わずに走り去り、出撃してしまつた。バルクホルンも後を追いかけたが、空が重く感じるのだった。

ネウロイはブリタニアへとやって来ていて、今回は安定の配置である4人で出撃となった。最近では、赤松はミーナの二番機につき、ミーナから高い評価を得ていた。単機でも手堅く戦うスタイルだったため二番機としての役割を十全に果たす存在というのは、一番機としては背中を任せるに厚い信頼を置くことができる。その点、赤松はまさにといった存在になっていた。ミーナとの模擬戦では、先に弾切れとなつたためミーナに軍配が上がったが、ミーナの弾も一発も当たっていなかった。唯一、欠点を伸べる

としたら射撃が秀でていいるわけではないことだが、これは訓練でよくなるというよりは天性の勘もあるため才能の差であった。そして、今回の戦闘では相性が悪かった。今回のネウロイはなんと分裂型だった。多数に別れたネウロイは分散して進撃する。それを追うのに二手に別れたが、コアを持つネウロイが赤松・ミーナサイドに存在していたのが不運だった。

「あなたに背中を任せるわ！お願いね！」

「了解！」

幾重になる波状攻撃を耐え忍び、乗りきったところでミーナは反撃に出る。きちんと追隨する赤松に不運は訪れる。

ズシャツ！

二番機として前面の視界を限られた状況で、ミーナの補助射撃を行っていた赤松は、位置の関係で見ることができなかった重なった敵機に気付くことができなかった。赤松の攻撃で手前のネウロイを撃墜したところで、ミーナが後ろのネウロイに気付き、回避行動を取る。それを方向転換と捉えた赤松は攻撃に気付かず、攻撃を左腕に受けてし

まった。

「んぐつ!!」

「赤松少尉?!大丈夫?!」

「左腕に被弾…すみません。」

確実に左腕は動かすことができそうになく、今すぐに止血するべき負傷だった。しかし、敵がたくさんいる後退させるという判断は現状、難しいことだった。ミーナの固有魔法である空間把握でもまだ10機近くのネウロイがブリタニア本土を目指して進んでいた。ミーナは赤松を後退させるわけにもいかず、バルクホルンを応援に頼んだ。

「さすがに敵が多いわね…」

「左腕に応急措置を施しました。やれるだけやります。」

「それに頼る他ないわね…ごめんなさい。」

ミーナは勇を連れたって、ネウロイ集団を追った。勇は左腕を支えとして、射撃を開始した。元より射撃が秀でているわけではなく、怪我をしているため精度を欠いてい

た。それでも、ミーナとしては敵の動きを制限しているためミーナがそのすべてを撃破すべく動いていた。

「今のあなたに当てることは難しいわ！敵の動きを制限させて！もう少しでバルクホルン中尉も合流します！」

敵が基地まで目前に迫り、さすがのミーナでも基地に警告をし、対空射撃を勧告した。さらに、勇の腕に巻いた服も血で濡れてきており、限界が近かった。さらに不運は続き、残り3機のところでミーナのMG42が弾詰まりを起こしてしまう。

ガチャン！

「弾詰まり?!そんな！」

基地への爆撃進路についたネウロイは対空射撃をもろともせず突っ込んで行く。ミーナはただ見ているしかできないかった。しかし、予想外のことが起きる。勇が突っ込んで行ったのだ。



「赤松少尉！何をしているの?! 戻りなさい！」

「基地を防衛します。」

赤松はさも当然のように、血の滴る状態で追撃の手を緩めなかった。

「少尉?! 無茶よ！」

勇は猛然とネウロイを追従し、至近距離で射撃、2機を撃破した。しかし、残り1機が残り爆撃を行う直前にバルクホルンとハルトマンが間に合った。

「攻撃する! ゆう! 退くんだ！」

「撃つて下さい！」

敵を追う姿勢は頑として変わらず、自分もろとも撃つように煽る。

「ダメだ! 巻き込まれるぞ！」

「いいから! 早く!!」

バルクホルンとミーナ、ハルトマンは迷った。このまま撃てばネウロイだけを当てられる可能性もあるが、赤松に被害が出ないとも限らない。しかし、その思考の時間が決定的だった。ネウロイが爆弾を投下してしまったのだ。基地には轟音と爆炎が立ち上った。

その後、幸いにも爆弾は逸れ、滑走路の端に落ちたため事なきを得たが、ミーナやバルクホルンはそれどころではなかった。

「少尉、なぜ私の命令に従わなかったの?!」

ミーナが真剣な顔で赤松の命令違反を叱責するが、赤松は一向に退かない。

「少なくとも敵の攻撃目標を逸らすことができず、残念ながら爆撃こそ許しましたが、なんら批判されることをした覚えはありません。」

「そういうことじゃない!もしかしたら対空射撃や私の射撃が当たっていたかもしれないじゃないか!」

ミーナとバルクホルンはあんな無茶をしたことに驚き、命令違反を叱責したつもりだった。しかし、勇の反応は淡泊なものだった。

「それこそ言われている意味が分かりません。むしろ、なぜ撃たなかったのですか？」

勇の言葉には二人とも絶句してしまった。ただでさえ負傷し、継戦困難な状況にも関わらず命を投げ出すことを前提とした行動に一種の凶器を感じたからだだった。

「あなたを撃ってしまえば、貴重なウィッチとしての戦力が失われてしまいます。物は直せば元に戻ります。だから、命を無駄にすることを良しとしないのです。」

「無駄ではありません。負傷して使い物にならない、いわく付きのウィッチなんて……!？」

バルクホルンは我慢ができずに、勇の言葉を遮ってバルクホルンが平手打ちをした。バルクホルンには許せなかった。バルクホルンと同様に辛い過去を背負ったウィッチが、なんの憂いもなく死にいくことを同じ境遇のバルクホルンがさせたくなかった。

「お願いだから、そんな悩まずに死のうとしないでくれ…私も悩んでいる。私も私を許せていない。」

自分ももしかしたら同じ事をしたかもしれないからこそ悩んでほしかった。だから、一つ一つ絞り出した言葉は勇の心を捉え始めていた。

「ネウロイと戦って死ぬなら私も本望だと考えている…でも、人の手で、戦友の手を借りてまで互いが不幸になることはないじゃないか！」

「私は…この手で命を潰し、我が命のために生け贄にしたのです。そんな命、誰にとつても潰えて気に病むものではないですか…」

勇は自分の手を見て当時の自分を見つめていた。酷く冷たく自分の血ではないが、それまでは命として流れていた仲間の血。それを啜って生き長らえたところでそれは生きていけると言えるのだろうか。自分という生き物はかつてのもので、なにか恐ろしい化け物になってしまったのではないかという自己嫌悪に怯える毎日だった。

「だから、バルクホルン中尉…あなたが嫌いだった。」

「なにおう！」

バルクホルンに向けられた非難にハルトマンが腹を立てる。そして、それをミーナが止める。もしかしたらミーナも赤松の闇に気づいていたのかもしれない。

「待ちなさい！ハルトマン少尉！」

「なんでだろう！」

「待ってあげて……」

勇はバルクホルンと会った最初の戦闘を思い出した。

「あなたは私の戦闘に介入した。あのとき私はネウロイと心中しようとしていたのに、あなたが邪魔をしたんです。」

「そういうことだったか……」

あのとき言った邪魔するなどは戦闘の邪魔ではなかったことを今知った。そして、バルクホルンは勇の次の言葉を待った。

「二回も邪魔されたときは神様が試練を与えているのだと呪いましたよ。そして、極めつけがここです。最前線を希望したらまさかあなたがいる基地になるとは…そして、あなたに過去を話した。だから、いつ今日のような日が来てもあなたなら必ず撃つてくれるよう仕向けたのに、撃つてくれると信じていたのに…」

普段口数の少ない勇が話す内容は、とても多くの意味を含んでいた。これがバルクホルンより年下の少年が抱く闇だった。次第に増える口数は、少なからず勇の現実を歪めた過去の自分に語りかけているようで、バルクホルンは固唾を飲んで聞いていた。

「私はバルクホルン中尉やミーナ大尉も故郷や大切な人を失ったと聞いて、嬉しくなりました。この人たちなら私を撃つても大丈夫だろうと。でも、同時に怖くなりました…」

あの柔らかな笑顔の下に、このような思惑が渦巻いていたことをバルクホルンは信じられなかった。扶桑の話をしていたときの顔は紛れもなく本物だと感じていたからだ。それが怖くなったとはどういうことなのか。

「ミーナ大尉は、私の経歴を知つてなお、私を評価しました。私は経歴を詐称して撃墜数を少なくし、無能の肩書きを忍ばせておいたはずなのに……」

「私はあなたの経歴で判断するのではなく、あなたを見て判断したのよ。それは指揮官として当然のことよ。」

ミーナは公平な判断ができる人物である。この年で大尉となつた才覚は伊達ではない。

「そして、バルクホルン中尉、あなたですよ。あなたは私の姉に似ていた……姉を裏切つた私からすれば、あなたから向けられる好意が一番恐ろしかった。あなたにこそ私を撃つてほしかったのに……」

バルクホルンは興味本意で近づいたわけだが、意図せず赤松を苦しめてしまつていた。姉の話をしていくときの赤松の心情はどうだつたのだろう。想像に難くなかつた。

「あなたに「ゆう」と呼ばれる度に、姉に呼ばれているようで心が張り裂けそうでした。

それでなお、話をすると不思議と懐かしく思う自分が許せなかった！私にはもう、幸せなんて浸ってはいけない劇薬だというのに!!」

バルクホルンは赤松の叫びを聞いて決心した。一步、また一步と歩み寄り、俯く少年を抱き締めた。

「は……あ……」

「ゆう……いいんだ。もういいんだよ。」

バルクホルンの声は姉の声のように温かく、柔らかく優しさを包んだ言葉は、勇の感情の堰を押し流させた。

「ああ……ああああああ!!」

「ゆう、お前はよくやった。頑張ったな。」

「姉さん……姉さん！ごめん……僕……姉さんを……誰も守れなかった！」

今まで詰まっていた感情が滂沱の如く押し流れ、堰を切った涙は冷たい少年の心の氷



を溶かすようにゆっくりと流れた。それは赤松のフィヨルドのような氷河に削られた大地の傷を撫でるように溶かしていた。

「ゆう、もう一人なんかじゃない。仲間と協力して今度は守ってあげればいいじゃないか。お姉ちゃんはゆうならできると信じてる。」

「姉さん……わかったよ……今度は、きつと……」

そう言うと、バルクホルンはより強く抱き締めて、無言で寄り添った。

しばらくして、ミーナは赤松勇を傷病兵として扱い、基地の危機を救ったとして表彰の申請をしてくれた。ハルトマンはそれからちよくちよく遊びに来るようになり、病室でなにやら話している姿を目にした。それは見る人しかわからないが、端から見ると酷くつまらなそうに聞いているが、知る人はあれで笑っているのだ気づいていた。そして、バルクホルンはというと。

「ゆう、入るぞ。」

「どっぞぞ。」

今までのような感情をなくした表情とは打って変わって、人間味のある表情で出迎える勇がいた。

「調子はどうだ？」

「まあまあかな。傷は塞がったからあとは銃を持てるようになるまでリハビリだね。」  
「治ったら射撃について教えないといけないことがたくさんあるからな。」

まさしく上官、もとい姉のように自慢げに話すバルクホルンの姿に苦笑いしつつ、そんな会話も楽しんでいることに勇は気づけた。

「トウルルーデみたく二丁も持てないよ。」

「なに、日頃の訓練と強い精神を持てばだな…」

いちいち小言を垂れてしまうお節介な姉を横目に微笑みを携えたミーナが入室する。

「あらあら、すっかり赤松少尉のお姉さんね！」

「な、ミーナ！茶化さないでくれ！」

指摘されたことで顔を真っ赤にするバルクホルンを、やれやれと思いつつもありがたい存在として認識し始めた勇は助け船を出す。

「そうですよ、ミーナ大尉。本当の姉さんじゃない人に泣きつくなんて年頃の男子には堪えるものがあるんですよ！」

「表情豊かになってくれて嬉しいわ。そして、話があるのだけどいいかしら？」

会話から仕事のモードに入つたとバルクホルンはわかった。勇も分かったのか真剣な面持ちになる。ミーナはにっこりと笑顔のまま話始める。

「あなたの先日の証言から公式の撃墜数や戦闘回数を調査したわ。撃墜数は少なく見積もって80機、立派なエーススイッチよ。」

バルクホルンは目を見張つた。自分やミーナ、ハルトマンならいざ知らず、単機で出撃を繰り返していた勇は100機近くを撃墜し、これは単機ならではの不透明さを加味して少なく見積もられている。つまり本当に100機撃墜を果たしている可能性が高い

「エースなのだ」と解釈できた。

「ゆう、凄いことじゃないか！」

「数えたこともありませんでした……でも扶桑では個人の撃墜数はカウントしないので……」

最初に報告した数は明らかに少ない数だとは勇も理解していたが、まさかここまでの功績が残っていることに素直に驚いていた。

「欧州では大事なことよ。そして、ここから本題なのだけど私はこの調査した数ではなく、あなたの報告の数を本部に提出しようと思うのだけど大丈夫かしら？」

勇の報告ではおよそ30機近くの撃墜数を報告していた。これを不思議に思ったバルクホルンは尋ねる。

「それはなにか思惑があるのか？」

「ええ、真実を報告すれば必ず少尉は引き抜かれる。ならば、少ないまま報告すれば

残ってもらえると考えたの。あなたには不義理になるけれど、少尉さえよければどうかしら?」

赤松は間もなく返事をした。

「撃墜数に拘ることはしていません。むしろ、ここに居させてもらえるならその方がありがたいです。」

勇は真実を語り受け入れられた日から、この基地でこの仲間と共に戦いたいと思っていた。この提案はむしろ好都合だった。そして、ミーナはさらに提案する。

「それともう一つ…あなた統合戦闘航空団の一員になってみない?」  
「なんですか、それは?」

統合戦闘航空団とは多国籍のエースたちで構成されるエリート部隊のことである。勇もエースとして認識され、素の力量から是非とも欲しい人材であった。ミーナは戦略的観点から早めに人員を確保したい目論見もあったのだった。

「私に務まるのであれば喜んでと申しておきます。いらないとわかれば切り捨てて貰つても構いません。」

「そんな馬鹿なこと言うんじゃない！ゆうの凄さは誰だつて疑い用のない事実じゃないか！」

本気で怒つてもらえる存在に驚きつつも、勇は笑顔で頷く。

「ごめん……なかなか素直になるのが難しくて。」

素直な気持ちを吐露することがいまだ不馴れな勇を温かく見守ると、正式に統合戦闘航空団の申請がなされていく。勇は、人によつて失われた己を、人によつて取り戻しつつある現実を齒がゆく、そして眩しく受け入れていた。

## 第二話 結成

勇の腕も順調に回復し、訓練に戻れるようになると、予てよりの射撃訓練の習熟に入った。ブランクこそあったものの、それを感じさせない成長で、周りを驚かせた。

「今の感じを忘れるな！良かったぞ！」

「了解！」

ハルトマンは嫌々ながらも勇と訓練を続けて、二人の成長は目を見張るものがあった。元々編隊飛行などの技術は優れており、特に二番機としての役割が非常に評価されていることから、柔軟な思考と追従するだけの体力が秀でていた。それに、射撃の腕も磨かれ、今や誰が見てもエーススイッチだった。

そして、訓練も佳境に入っていたある日、基地にとある人物が訪ねて来た。

「すまない、この指揮官と話がしたいのだが、どちらに？」

扶桑の海軍の軍服を来た少女が訪れ、場は騒然とした。その理由は、欧州派遣部隊として、またストライカーユニットの開発に尽力した人物として名高い坂本美緒大尉だったからだ。

「ミーナ少佐に連絡しましたので、しばらくお待ち下さい。」

ミーナは第501統合戦闘航空団の指揮官として以前より昇進の打診があり、少佐となっていた。坂本は若い男性ながら少尉として登用されていることから不思議に思い、勇に声をかけた。

「もし、君はウィッチか？」

「はい、扶桑海軍267空赤松勇少尉です。」

「267空…たしかカールスラントで全滅したと聞いたが？」

勇は坂本とは違う部隊の出であり、坂本より後進で欧州に来たため、情報はあまり出回ってなかった。



「はい、私を残して全滅しました。今はこの基地に所属させてもらっています。坂本大尉はなぜこちらに？」

「そうか…それと、私を知っているのか？」

「扶桑で知らない人はいないはずですよ。映画にもなっていましたからね。」

坂本は勇も参戦した扶桑海軍の立役者で、その活躍から映画にも出演するスターだった。ちなみに勇は坂本とは別方面の作戦参加組で、面識はなかった。

「ああ、なるほど！あつはつはつは！私はこの基地に配属になると聞いて来たのだが…」

そうこうしているうちにミーナがやって来た。

「坂本大尉、ご足労様です。我が隊への着任歓迎します。」

「世話になる！」

豪放磊落な性格だと勇は思った。本当に統合戦闘航空団というものが多国籍による

エースの部隊というのをこの頃に知り始めることになる。

「ときに勇、カールスラントでは何をしていたんだ？」

「胸の好く話ではないですが……」

己の過去をこうも気楽に話せることは今までになかったが、自然と空気は重くなつてしまった。話終わると坂本は驚いたような、安心したような顔になると自身の話をする。

「私はリバウで小隊長をやっていたが、上手く行ったことなどなかった……あの時代、上手く行つてた所なんてなかったんだな……」

坂本も苦しんだ過去をもっているのだと知り、あの豪放磊落な性格もこれまでに培った彼女の処世術だとわかった。

「でも、この基地に来てから私は変わりました。命は散らすもの、誰かの為になれたのならそれも本望と思つていた私を強く諫めてくれました。今やみんなが闇を持つ中で、

互いに支え合っていていけるのです。私はこの仲間で未来を見てみたい…」

「武士は戦場でしか生きられない。私は数多の屍を越えていこう。」

扶桑という大陸と海を隔てたもの同士、分かり合える部分があり、仲良くなるのに時間がかからなかった。次にこの基地に来たのは夜間哨戒要員のサーニヤだった。

「オラーシャ陸軍…サーニヤ・リトヴァク中尉…です…」

酷く緊張している様子で、所在なさげな瞳はいつかの勇を彷彿とさせた。夜間哨戒はこれまで、射撃訓練を修了させた勇が時折行っていたため、引き継ぎとして当分は行動を共にすることとなった。

「リトヴァク中尉、私はあなたの2番機として行動すればよいですか？」

「あの…はい…」

男性と関わってこなかったからなのか、酷く怖がられているような勇だったが、階級が上な以上命令で態度を改めさせるわけにもいわず、気まずい雰囲気でも夜間哨戒が始

まった。

「夜にだれかと飛ぶなんていつぶりですかね？リトヴァク中尉はありましたか？」

「ないです……」

気まずい雰囲気にもまれ、自分と同じように話すのが嫌いなのではと思ひ提案する。

「私も口数が多いわけではないんですが、お邪魔であれば報告以外話さないようにしますか？」

サーニャは困ったようなわからないような顔で口ごもり、間を空けてこう話出した。

「本当は一人で歌を歌ってたんです。」

「歌ですか？オラーシャの歌は聞いたことありません。よろしければ聞かせていただけますか？」

サーニャは意を決したのか、呼吸を整えるとその細やかでゆつたりとした声で歌い始

めた。それは、夜の空に解けて消えていくにはあまりにも儂く、星に彩られたきれいな音色だった。聞き入っているうちに、終わっており拍手をした。

「大変よいものを聴けました。これなら夜でも寂しくありませんね。」

「両親に宛てた歌だから…」

勇はサーニヤがウラル山脈を越えたところに両親がいることを聞き、さきほどの歌が悲しい歌でもあるとわかった。ウラル山脈付近はネウロイの活動が活発であり、もし逃げられたとしてもこちらからは会いに行くのは困難であった。ここでもか弱き少女が胸を痛めていると知り、勇は少しでも元氣になればと過去話を始めた。サーニヤは深く聞き入っていた。

「リトヴァク中尉、決して傷付いた心は治りません。でも、ここで乗り越えることができたのなら、あなたは両親に会えた時、きっと自分のことを誇れる人になると思いますよ。」

「はい…勇さんもお姉さんや仲間のこと悲しいですか？」

勇は悲しみを共にすると誓ってからは必ずこう言うようにしている。

「悲しいです。ですから、彼女らが生きるはずだった明日を代わりに精一杯生きるんです。」

サーニヤはそう言うのと微笑み、月を背に空を飛んだ。

次に訪れたのはエイラだった。不思議な雰囲気醸し出す彼女は生粋のエースであり人と関わることをしなかった。戦闘では未来予知による個人芸もさることながら、その天才的な才能で文句なしの活動をすることから、周囲からは孤立しがちだった。そんな中、業務連絡で勇はエイラに声をかける。

「ユーティライネン少尉、一つ頼まれてくれますか？」

「な、なんだよ……」

酷く嫌そうな顔で答えられ、苦笑いしながら話始める。

「本日夜の夜間哨戒では冷えることが予想されるので防寒装備を頼まれたのですが、

ユーティライネン少尉の方が詳しくそうなので、もしよいものがあれば見せてもらえないかと……」

「あ、ああ……私が直接やるよ……」

男性でウィッチの勇が少し苦手なエイラは、早く話を切り上げるためにサーニヤの元に向かった。

「あいつ苦手なんだよな……うーんでも、やるって言った以上やるしかないんだな……マフラーでも貸すか……」

サーニヤの部屋に着くと、ドアをノックする。返事はなく、留守なのかと思ったが他の部屋にいたのを見たこともなかったのとおりあえず、部屋に置いておこうと扉を開ける。すると、そこにはベッドで横になるサーニヤの姿があった。

「うわっ!」

「ん……だれ?」

物音とエイラの声で起きたサーニヤは寝ぼけ眼で問うと、その可愛らしさにエイラの緊張はマックスになった。

「あ、あの男のやつからあんたに、防寒装備を頼まれた…んだな！ここに置いておくんだな！」

さつさと退散しようとしたエイラだが、サーニヤの一言で向かうべき場所を定めた。その顔はスオムス人でも見たことないほど燃えるような赤い顔だったという。

「マフラー…ありがとう…」

その後のエイラは、よく勇と一緒にサーニヤについて話す友達になり、自然と部隊に馴染んでいった。

次に訪れる隊員の前に、勇はその腕と容量の良さを買われ、坂本とガリアへと向かうことになった。なんでも奪還すべき場所があり、坂本が単独で突撃しようとしたため、慌ててミーナが護衛をつけたのだった。



「すまないな、急に付き合わせてしまった。」

「少佐、あなたの言動は周囲に与える影響が大きいと心得てほしいものだな！」

坂本もまた、統合戦闘航空団に入ったことで階級が上がり、少佐となっていた。また、ミーナも統合戦闘航空団創設にあたりすぐに中佐となっていた。

なぜバルクホルンが怒るのかと勇はおかしくなったが、今回は坂本と二人のため他の隊員も心配していたのだった。

「あまり無茶はしないこと。二人ともいい？」

「了解した。」

「必ず戻ります。」

こう言うと、ガリアへと向かって速度を上げた。

ガリアはネウロイに奪われ、敵の勢力圏とされていたが、その外縁部はいまだに膠着状態にあった。扶桑のユニットは零戦21型で、航統距離と機動力に優れたものだったことから、ドーバー海峡を越えても悠に戦闘が可能だった。そして、今は坂本の二番機として敵の勢力圏に入ろうとしていた。

「じきに戦闘になる。準備はいいか？」

「いいですよ。背中は何せて下さい。」

坂本はしっかりと頷くと、武器を構えた。リバウにいた頃は、リバウの三羽鳥と呼ばれ頼れる仲間もいたが、今は不思議とその気分になれた。目的地を定めると、そこには巨大なネウロイの塊が鎮座していた。

「あれが今日の目標だ。心してかかるぞ！」

「了解！」

勢いよく降下体勢を取ると、ネウロイも反応して攻撃を開始した。親玉の子機も出現し、瞬く間に乱戦へと発展した。

「敵のコアはやはりあの親玉だ！集中して叩きたいとこだが、この量では難しい！連携をしっかりとって確実に倒す！」

「子機は任せて下さい。なるだけ引き付けます。」

「頼りになる！」

坂本は刀を抜くと、背中的一切を勇に任せ突撃する。背後では坂本に近づかせまいと、勇が奮闘しているのがわかった。親玉からの攻撃を華麗にかわすとその一端を切り裂いた。

「やりましたか?!」

「ダメだ。手応えがない。コアは中心部にある。相当硬いぞ。」

「なら……これで！」

勇が取り出したのは、手榴弾をいくつも束ねたものでエイラから試作を兼ねて受け取ったものだった。エイラとはサーニヤの件で仲良くなつてからよくこういつた装備や武器などの改造物を受け取っていた。

「これで外殻を壊します。あとは坂本少佐に任せます。」

「任された！」

作戦を決めると、何も言わずに二手に別れる。坂本は上昇、勇は下降していた。ネウロイも咄嗟に二手に別れたが、これこそが作戦だった。戦力を分散させ、最低限の防御で乗り切ると勇はピンを抜き坂本から聞いていたコアの位置へ投げつける。大きな爆発が辺りを包むと、中にはコアが煌めいた。それを逃さず上昇から下降に切り替えていた坂本が刀を大きく振りかぶる。逆に上昇に転じた勇は、坂本を追って来たネウロイを撃破して援護する。すれ違い様のため追手のネウロイは蜘蛛の子を散らしたように逃げ仰せると、すかさず坂本がコアを切り裂いた。

ジャキーン！

「…作成完遂。帰還する！」

激戦を思わせない清々しさに勇も思わず、これが本物のエースだと感心していた。帰り道も警戒しながらの飛行だったが、坂本と勇は一仕事終えた清々しきで一杯だった。

「ゆう、今日についてきてくれて助かった。感謝する。」

「坂本さんと一緒に戦うなんて夢にも思いませんでしたよ。いい思い出になります。」

「まあ、最近来たばかりだから同郷の者がいてくれて少し安心してたんだ。ゆうが他

の者と間を取り持つてくれるから話もしやすくてな！」

軽口を叩きながら飛行するが、ふと坂本が神妙な顔つきになる。

「ゆうはどうして戦っているんだ？」

「きつと坂本さんと同じだと思えますよ。」

誰もが戦いたくて戦ってるわけではない。平和な世界なら誰しもがその生を謳歌するのに一生を費やすだろう。しかし、戦場を駆け巡る者にとって、戦う理由は一つしかない。

「私は当初、扶桑で一番のウィッチになつてみんなを守りたい：そう思つて戦つていたんだ。だが、欧州に来て仲間が傷ついていくのを見て、本当に私には力があるのかと自問自答するときがあつたんだ。」

坂本にも自分と同じことを胸に秘めていることを知り、いつもの豪快さからはかけ離れた坂本がいた。胸に秘めている思いとは、それは何かを誰かを守りたいという想いの

はずである。

「戦争をしていると、ふと自分は人間なのか疑わしくなります。今はそうでもなくなりましたが、ここに来たときはバルクホルン大尉によく叱られました。みんなが傷ついているのは分かりますが、それでも自分の歩んできた道のりは酷いものだったと思います。」

「私は指揮官として、誰かを導く存在に憧れていたんだがな……ここだとそれも理想で終わるかもしれん。」

坂本はいつになく弱気で今まで誰にも話したことがないような感傷に浸っていた。しかし、勇はそれを肯定も否定もせず持論を展開させる。

「理想は恐ろしいです。今まで自分が思い描いてきてものが、現実を前にするとこんなにも儚いものだったのかと幻滅しますから。」

二人して暗い雰囲気のところだったが、ふと勇は顔を上げて笑った。

「でも、ここのも思うんです。たかが自分の理想なのだ。この世界は厳しい。明日を生きることが難しい今ですが、きつと次の世代は新たな希望を胸に理想を抱くのです。う。それは、今を生きている我々を見て抱くのです。」

この言葉に坂本も顔を上げる。勇の言葉を胸に吸わせようと必死に耳を済ましていた。

「理想は幻想です。崩れやすく届かない儂いものです。ですが、思いもよらない形で満足できる現実を目にするとき、きつとそれが幸せになるのでしょう。だから、指揮官は理想を追いかけているから周りがついてくるんです。坂本さんなら、きつとみんなを幸せにできますよ。」

その言葉に坂本は自分は自分でいいのだと、強く自信を持てた。しつかりと未来を見据えた強い瞳は、たつた今横を飛ぶ勇を捉えてこう言った。

「着いていー！」

次に配属されてきたのは、ガリアのペリーヌ・クロステルマン少尉（次期中尉）だった。ペリーヌは配属されるなり、部隊の現状を見て辟易した。最前線かつエースが集まると言いながらも、体たらくな雰囲気と、名前も聞いたことのない男性ウィッチ、特に扶桑からのウィッチにペリーヌは嫌悪感すら抱いていた。

「どうして扶桑人なんかがここにいますの?! なんにも知らないくせに!」

扶桑は自分の国を獲られていないし、リベリオンと同様にウィッチを派遣する余裕すらある。そんな国が自分たちの国を奪われた者のために働くわけがないと、ペリーヌはそう思っていた。

「あ、ペリーヌ少尉! 基地について案内を任されたのですが…」

「結構よ! それと、少尉ではなく中尉です! ふんっ!」

「は、はあ…まだ少尉だと思おうのですが…」

殊更に男性ウィッチの勇は、存在価値すら疑っていた。どうせウィッチとはいえ補助員としての予備だと苛つきを隠さなかった。この現状にミーナは困り、適切な人材を見



出だせずにいた。

「どうしたものかしら…」

「ん？どうした？浮かない顔をして。」

「ああ、ペリーヌさんがね…」

ミーナは書類を見ながら眉を寄せる。ガリア令嬢でかつ高貴な使命感と祖国を奪われた憎しみで手が付けられないと坂本に吐露した。すると、坂本は配属に伴う特権から策を練った。

「そういえば、ミーナも私もバルクホルンもみな階級が上がったな。」

「ええ、この部隊に配属される以上、連合本部から昇進が認められるのよ。私の場合は兼ねてから昇進の予定があつたからまた昇進したの。」

ミーナは統合戦闘航空団を設立してから、二階級の急速出世を成し遂げていた。

「さすがの出世だな。」

「誉められたものじゃないわ。代わりの登用よ。士官階級のウィッチが深刻的に不足しているの。」

「なら、ゆうにも適用できるだろ?」

「…ああ!」

坂本の取った作戦とは、ペリーヌより先に勇を中尉へと昇進させ、命令として連れ出し、あとは勇の持ち前のコミュニケーション能力で和解を計った。そして、トントン拍子で事は運び、あつという間に勇は中尉になった。さらに、ペリーヌへの面倒も任せられたのだった。

「参ったな…嫌われてると思うんだけど…まあ、この際仕方ない!ごほん!…あの、ペリーヌ少尉!少しよろしいでしょうか?」

少しの間のおとに不機嫌そうに部屋から顔を覗かせたペリーヌは文句を言いかけて止めた。肩の貴章が自身の物より上を示す中尉になっていたからだ。いくらペリーヌとは言え、根は軍人であるため渋々従う。

(どうして私がこんなへんちくりんより下なんですか?!)

胸のなかで怒りがふつふつと沸き上がるが、グツと抑えて着いて行く。外に出ると日当たりのいい場所に小さな花壇があり、そこには申し訳程度に花が植えてあった。セントポーリアなどペリーヌが大好きだった花たちがそこに必死に咲いている様を見て、不思議と涙が溢れてきた。

「どうですか?ここに植えてみたのですが…案外心が安らぐものですね。ペリーヌ少尉の故郷では…」

そこまで言いかけると、勇は頬を叩かれた。一瞬何が起きたか分からなかったが、目の前を向くと涙を携えたペリーヌがこちらを睨み上げるようにして必死に何かを訴えていた。

「あなたはっ!私がどんな思いでこの花を見れるとお思いですか?!」

そう言うのと来た道を走って戻ってしまった。立ち尽くす勇は、叩かれた頬を搔きなが

ら眩く。

「失敗しちゃったな…」

ペリーヌは部屋で一頻り泣くと、悔しくて悔しくて堪らなくなつた。故郷を踏みにじられた自分を前に、故郷の花を植えて見せてくるなんて偽善以外の何物でもなかつた。やはり戦火を経験していない者とはやっていけないと思ひ、また嫌になつた。しかし、こんな顔ではいけないと顔を洗ひに行く。すると、そこには坂本がいた。坂本はこちらを見つけると話しかけてくる。

「やあペリーヌ。もう基地には慣れたか？」

「…坂本少佐もですか？」

ペリーヌはさつききの勇をふと思ひ出し、この扶桑人も気安く自分の踏み込んでほしくないところに土足で上がり込んで来るのかと思うと、言わずにはいられなかつた。

「坂本少佐も、ガリアのことなんてこれっぽちも考えたことありませんのね！」

声の大きさに坂本も驚いたようだが、何かを察すると笑顔を作りこう言った。

「ガリアのことはよく知っている。下手したら今のお前より知っているぞ?」

このことに堪忍袋の緒が切れたペリーヌは決闘を申し込む。

「決闘ですわ! 扶桑のだれか知りませんが、勝負して勝った方がなんでも言うことを聞いてくださいまし!」

「うむ! ウイツチたるもの空で勝負しなければな!」

こうして突如、模擬戦を開始したわけだが、始まる前に勇が声をかけた。

「ペリーヌ少尉、先ほどは失礼しました。お詫びに一つ助言を差し上げます。」

「…施しは受けませんわ。」

「施しではありません。フェアな情報です。」

ペリーヌは貴族である以上、施しは受けたくなかったが、それ以前に勝負には勝ちた  
いという思いが強かったため、渋々聞き入れることにした。

「…で、なんですか?」

「機体性能についてです。扶桑のユニットは機動力に優れています。旋回などの巴戦  
になった場合、離脱することを奨めます。」

「あなたは! 私に尻尾を振って逃げろとおっしゃるの?!」

これを自分への侮辱だと感じたペリーヌは、勇が嫌みなやつであると心底辟易した。  
しかし、反対に勇は至極真剣な眼差しで助言する。

「これは戦いです。どれだけ相手を知れるかが勝敗を分けます。」

ペリーヌは勇の出す真剣な眼差しに圧され、たじろぐが、プロペラを回し、言葉を交  
わさずに発進した。

外に出ると坂本が待機しており、ペリーヌが来るのを見るとまた笑顔で出迎えた。

「来たな！では、早速始めるとするか！」

「手加減はいたしませんわよ。」

「手加減など武士道の恥だ。全力で挑ませてもらう！」

この場に及んで潔い坂本を内心嘲笑うが、坂本はペリーヌが知り得る情報以上にやり手である。ペリーヌも全力で挑むつもりだった。こうして、模擬戦は始まりを迎えた。

まず仕掛けたのはペリーヌだった。一気に上昇し、坂本の後方から射撃体勢に入り、機を伺った。照準に入るようにギリギリまで近づくも坂本がそう易々と狙わせてはくれなかった。坂本は左旋回を始め、ペリーヌもそれに釣られる。強烈なGをなんとか堪えながらも必死に坂本の背後を取ろうと歯を食い縛る。しかしここで、ふと勇の言葉が過る。

「巴戦になった場合、離脱することを奨めます。」

こんなところで勇の言葉に頼りたくはなかったが、いくら追いかけてもこちらが徐々に不利になっている現状と、このままでは危機的状況になってから離脱するのは遅いと判断し、勇の言葉を信じた。一度下方に離脱し、背後を見るとやはりピツタリと着いて

きている。あのまま巴戦を続けていたら、離脱しようがどのみち終わっていたと肝を冷やした。低空に入り障害物を利用して、斜線から外れると、一気に上昇に転じ、雲の上までかけ上がる。ここでもしつかりと坂本は威嚇射撃で雲に逃げられないようにするあたり、やはり本物だと感じてしまう。それでもペリー又はここが勝負処だとなるべく坂本を引き付ける。いかにも降りきれなさそうな飛行で慢心したところを叩くつもりだった。

「いいわ…ついてらっしやい…そう…(こっ)！」

急激な上昇ロールにより、減速がかかりペリー又は坂本の背後を取る。目の前には坂本の驚く顔があり、ペリー又は勝ったと確信した。しかし、銃を構えるとそこにはだれも居なかった。しまったと思ったそのとき、背後から坂本の射撃が走った。咄嗟に舵を切り、逃げるがここまで詰められてしまうともはや袋のネズミだった。

(まさか、この私が負けるなんて！)

涙が溢れそうになるが、最後まで諦めない気持ちで左右上下に必死で機体を揺らして



足掻いた。そして、地面すれすれでもはやどこにも逃げ場がなくなり、ついに追い込まれた。それでもペリー又は諦めきれず、やけくそで上昇して一矢報いるために高度を上げた。

(何がなんでも一泡吹かせてみせますわ！)

エンジンが悲鳴を上げ、ギリギリまで上昇するとペリー又はエジソンの出力をカットし、落下体勢で反転、坂本とヘッドオンを取った。互いに向かい合い射撃する。ペリー又は意地でも当てるつもりで全弾発射し、二人が交差した後、決着は着いた。

「そこまで！勝者…坂本少佐！」

ペリー又は呆然とした。身体にはそこかしらにペイントが施され惨めな姿となっていた。対して、決死の覚悟で挑んだはずの坂本の身体には汚れ一つない姿があった。完全敗北である。

「そんな…私は…こんな…」

負けて泣くのは負け犬のすることだと必死に堪えても涙は溢れてくる。惨めな姿を坂本はきつと笑っているだろう。これを見た勇も笑うだろうと思うと悔しきで消えてしまいたくなった。そんなとき、坂本がペリーヌに声をかける。

「…ペリーヌ」

「…笑いに…きたんですの？」

「そんなことあるわけない。ペリーヌ、君は素晴らしいウィッチだ！」

坂本の称賛の言葉にペリーヌは驚いた。言葉だけ聞けばお世辞かとも思うが、坂本の表情からはその様子は一切感じとることができず、本心からの言葉だった。

「特に最後の反撃は、死中に活を求める泥臭さが貴族とは思えぬ立派なものだった！正直ここまでの戦いができるとは思ってなかったんだ！いや、ありがとう、ペリーヌ！」

「あ、へ、ああの…（こちらこそ…）」

すっかり毒気を抜かれ、顔を真っ赤にしたペリーヌは坂本に勧められるままに身体を

洗うことにした。身体を洗い、着替えを済ませて一向に嫌な気持ちがいなかった。むしろ、清々しさと満足感すらあった。坂本を田舎のわからず屋と思つてた自分は、ただ誰かに当たりたかっただけで、だれかに慰めてほしかったのかもしれない。そうであるならば、自分が今までしてきた態度はネウロイにとつて利になり、仲間にしては害悪にしかならない。それに気付いたペリーヌは坂本に謝罪しようと決意する。そして、坂本のいそうな部屋の前で咳払いをし、入室しようとする坂本とバルクホルンの声があった。

「少佐、この基地に風呂なんぞいらないと何度言えば分かる！」

「まあまあ、風呂は人の心と身体を清めてくれる。存分に心と身体を癒すことも兵士として大切なことだぞ。」

なにやらバルクホルンと坂本が言い争つてるように聞こえ、ペリーヌはそつと聞き耳を立てる。

「だいたい、この基地の運用に関しても少佐が以前のようにはガリアの南部を奪還するようなことがあつては、基地の戦力が大幅に低下するんだ！」

「だが、なんとしても守らねばならないことだつてあるだろう。」

ペリーヌはここで驚愕の事実を知る。ガリア南部とはペリーヌがブリタニアへ渡る前までいた場所であり、思い出の場所だった。それを奪還したのがなんと坂本だったのである。

「たとえそうだとしても、戦闘指揮官として、基地のことを考える器量があつてもいいじゃないか！ どうせ、ゆうのことも勝手な都合で昇進させたんだろう！」

「ゆうに関しては適材適所だ。バルクホルンも知つてるとは思うが、私と一緒にガリアへ行き背中を任せられたのも、隊員とのコミュニケーションを確立できたのもゆうのおかげじゃないか。」

ペリーヌはあの勇が坂本とガリア救援に向かい、あまつさえ坂本が背後を任せたといいう事実衝撃を受けた。自分は補助員としか考えていなかったあの男性ウィツチが、と考えると居たたまれなくなつた。

「ゆうのおかげで少佐の行動の余波が軽減されてるんだ！ 少しはゆうを労つてくれ

「！」

「それが言いたかったのか！」

「ち、ちがーう!!」

ペリーヌはこの場は一旦離れ、先に勇の下へ向かった。どこにいるのか検討もつかなかったが、ちょうどサーシャが歩いてきたため、恐る恐る話かける。

「あ、あの赤松中尉がどこかご存じない？」

「あ、あの…庭に…」

「あー!!」

サーニヤが言いかけたところで、エイラが大声を上げ走り込んできたことで中断してしまう。

「な、なんですの?!」

「やい、つんつんメガネ！サーニヤに一体何したんだ！」

「エイラ、私なにも…」

「サーニヤ痛くなかったか？で、何の用だ！」

頭が痛くなりながらも、もう一度勇の場所を尋ねた。すると、無言で中庭の方を指差し、舌を出しながらサーニヤとともに消えてしまった。わずかにイライラしながらも、中庭に向かうとたしかに勇がいた。なにやら座り込んで何かをしている様子だ。恐る恐る近づくと、勇のしていることに気づく。

「あ、あなた……」

「あつ！あの、ペリーヌ少尉!?!」

勇は急に現れたペリーヌに驚きながらも、背後に作業していたものを隠そうとする。隠しきれない大きさのそれはペリーヌを困惑させる。

「あなたそれ……」

「い、いえ……その別に嫌がらせではないのです。」

なにか怒られるのではとぼつの悪そうな顔をしているところが可笑しく、ペリーヌは

笑つてしまう。久しぶりに笑つた気がして、ペリーヌが笑つたことでさらにおどおどする勇の様子が可笑しくて笑いが止まらなかつた。一人困惑する勇の足元には、前回とは違い、庭一面の花が咲き誇つていた。

次に隊員となるべくして、基地に来たのは二人のウィッチだった。バイクで高らかに登場し、派手に着地する二人の姿はまさにお転婆。その凹凸コンビの名は、リベリオン合州国のシャーロット・イエーガー中尉（次期大尉）とロマーニャ公国のフランチェスカ・ルツキーニ少尉だった。

「よつと！私はリベリオン合州国陸軍シャーロット・イエーガー中尉だ！よろしく！」  
「私はね！ロマーニャ公国のおくルツキーニだよ！」

個性派の登場とあまりの元気を目の当たりにし、隊員たちは少し引いていた。そして、案の定基地の案内は勇に一任された。

「ここがシャーロット中尉とルツキーニ少尉の……」

「いやつふう〜！」ドサツ！

「ひゃっはー！」バフン！

部屋に案内してそうそうベッドにダイブし、説明をする前に腹が減つたと喚きだした。見かねたミーナが街まで車を出し、勇に二人を任せた。食糧を購入すべく、車を走らせたまでは良かったがここで予期せぬ事態が勇を襲う。規則正しく、かつ丁寧に運転する勇に痺れを切らし、突如シャーリーがハンドルを握り始める。

「もう見てらんねえ！ちよつと貸してくれ！」

「シャーロット中尉!?ちよつと運転中です！止めて下さい!!」

「おおう〜いつけえーシャーリー！」

必死に抵抗する勇を横目にルツキーニは盛り上がり、混沌を呈していた。上官命令を口にしたシャーリーにやむなく運転を譲るも、シャーリーの運転はスピード重視のスピードアタック。未舗装の道をつ走り、でこぼこ道もなんのそのと爆走で走りまくった。それでもなお収まらない二人の興奮に当てられ、勇はシャーリーに肩を組まれて笑い合う。これを人はスピードハイと言うのだろうか。

「あはははははは!!」



「ひゃーい!!」

「はははははははは!!」

猛スピードの運転が終わり、街に着くとさっそく食糧を買い込み、シャーリーたちの道草に付き合うころには打ち解けた勇は、帰り道の爆走でも最早動じず、世間話をする余裕すらあった。

「シャーロット中尉はスピード狂というやつですね。」

「シャーロットなんて堅苦しいのいいよ。シャーリーで!」

「私も〜」

互いに名前で呼び合う仲になり、会話も弾んで来た。シャーリーとルツキーニは勇に興味が届きず次から次へと質問していった。

「男性でウィッチってウィザードって言うのか?」

「使い魔は?」

「普段なにしてるんだ?」

「好きな食べ物は？」

爆走の運転の中、大きな声とテンションで質問に答え続け、基地に着く頃には喉が枯れかけていた勇を見て、仲間たちは買物は今後、勇に任せることを暗黙の了解としていた。この二人の存在は、勇をして楽しい存在と言えた。特に、勇はルツキーニのお気に入り、珍しい虫やいい寝床があれば勇を呼び、かくれんぼなど暇潰しに勇を連れ出し、それまで勇を頼っていたミーナに叱られ、バルクホルンに至っては八つ当たりをするためシャーリーと険悪な仲になってしまったのを勇は微笑ましく見ていた。そして、この隊員たちの戦果は瞬く間に欧州全土に知れ渡り、501はエース揃いのエリート集団と噂され、その実績の裏には必ず勇がいた。密かにミーナ宛に勇を引き抜く工作が行われたが、頑なにミーナ、バルクホルン、坂本がその悉くを握りつぶしていた。そこまで勇は、この501になくってはならない存在になりつつあった。

## 第三話 儂い

501基地では、今日も普段通り過ごしていた日常と普段通り戦闘に出撃する日々を過ごしていた。出撃のブリーフィングではミーナと戦闘隊長の坂本が指揮を執る。

「敵ネウロイはガリアからこの基地に向かって進行中。ローテで行きます。出撃準備！」

「ペリーヌはゆうの二番機に入れ！」

「ペリーヌ中尉がですか？逆ではないんですか？」

いつもはだれかの二番機に入るように指示されるといふより、ほとんど二番機を務めていたため、その逆になることに驚いた勇が坂本に質問する。

「ペリーヌにもお前から学ぶことがあるはずだ。しっかりとペリーヌに学ばせてくれ！」

「そんな…了解です。」

命令である以上、勇が無下にできるわけもなく小隊長としてペリーヌを率いることになった。ペリーヌはあれから少しずつ仲良くなり、今では互いを尊敬する間柄だった。すると、そこにバルクホルンがやって来た。

「気にするな。ゆうはいつも通りやればいい。」

「心配してくれてありがとう、トウルデー。まあ、みんながいるからそこまで不安じゃないよ。」

そういうと、にこりと微笑みバルクホルンは離れていく。ペリーヌの方を見るとやや緊張気味にこちらを見ていた。

「ああ……ここは一つ後ろをお願いします。」

「分かりましたわ！」

出撃して間もなくネウロイを発見し、突撃にかかる。坂本を戦闘指揮官とし、バリバリと敵の装甲を削る。ここでの勇の役割は敵の狙いを集中させないための遊撃任務

だった。いつもは二番機の位置でだれかをサポートするが、今回は指揮官機としての役割を十全に果たそうとペリーヌの動向にも注意しつつ空を駆け回った。周りにいる攻撃隊のシャーリーもその腕を認める一人だ。

「さすがだなあ。いつもと違う役割でもしつかりとやることやってんなあ。」

「私だつてやってるもん！」

元から勇を知り、戦闘を指揮する坂本と姉のバルクホルンもいつもと違う役割でも十全に与えられた任務をこなす勇に感心していた。

「やるじゃないか！」

「ふっ、いい動きだ。だが、肝心のペリーヌは…おつと？」

勇は縦横無尽に切れのある機動でネウロイの周りを攻めているが、ペリーヌがやや遅れ気味というよりは確実についていくので精一杯といった感じだった。しかし、戦闘中であることからそこまでのカバーはできず、ペリーヌは歯痒さを感じていた。

(はあ、はあ……早い！これが坂本少佐も認める勇中尉の力ですの?!)

勇の評価は、外から見れば地味で一番機の引っ付き虫程度であり、撃墜数もそこまで多くないが、坂本だけではなく、一緒に行動したことのあるものなら勇の評価は「信頼で言えばまず、勇。抜き身もまた鋭利な勇士」と言われる程には卓越したエースだった。それもそのはずであり、歴戦の扶桑海事変からの古強者であり、激戦のカールスラント撤退戦を生き残り、スーパーエースのバルクホルンから射撃を習い、坂本やミーナも念を押す状況判断能力とハルトマンやエイラも口を揃えて危険に真っ先に突っ込めるだけの胆力があるとの太鼓判の評価を得ている。それを一番機にしたらどうなるか。ペリー又はそれを身を持って体感していた。

「ペリー又中尉、まずはしっかりと来て下さい。射撃をしようとしてはいけません。」

「で、でも！」

「必ず好機が来ます。その時は自ずと撃てるとわかりますから、その時は全力でお願いします。」

ペリーヌはこの言葉で、とにかく勇に食らいつくことに専念した。周りを見て、的確にネウロイの攻撃を集中させるように仕向けた攻撃を同時に行う場馴れにペリーヌは驚嘆し、それを自分のものにしてしようと踏ん張る。そして、ハルトマンが勇の作った隙を突いて一撃離脱を仕掛けるとコアが露出。その隙を逃さず勇も射撃を開始する。ペリーヌも続くが、後方からの攻撃に気付き、勇をカバーする。

「後ろから来ますわ!」

「頼みます!」

ペリーヌはしっかりと勇の背中を守り、全員での攻撃がコアに命中し、戦闘は終了した。

帰還後、ミーナから慰労の言葉をもらい各自解散となると、ペリーヌは勇から声をかけられる。

「最後はありがとうございました。助かりました。」

「いえ、私はなにも…」

そう謙遜するが、至って自分は活躍していないため本心からの謙遜だった。しかし、勇はしっかりと誉める。

「いえ、しっかりと一番機の後について役割を全うできるのは、一番機にとつてなによりありがたいんです。経験の差でしょうからこれからこれからはっきり頑張っていきましょう。」

ペリー又は勇が本当に必要が故に呼ばれたのだと確信した。勇ほど、四方から必要とされ引き抜かれようとした存在はいないそうだ。スーパーエースのハルトマンやバルクホルン、エイラや坂本など名だたるエースを差し置いて欲される存在とは安心であった。それほどに勇の戦闘スタイルは確立され、洗練された一つの武器だったのだ。しかし、これが運命のいたずらを仕掛ける要因にもなっていた。司令室にて、ミーナが大きいため息をつく。

「はあ……ここまで執拗だったとはね……」

「今度はどうしたんだ？」



バルクホルンが疲れが溜まっているミーナを気遣う。

「はあ、バルクホルン大尉、勇中尉を連れてきてもらえる？」

「了解した。」

勇はルツキーニとの遊びに連れ回されており、バルクホルンに呼ばれるとすぐさま司令室に駆けつけた。

「ミーナ中佐、ただいま到着しました。」

「ありがとう。連合同司令部からの通達で今度発動するネーデルランド反抗作戦に勇中尉、あなたが指名されました。」

「なっ！」

勇だけでなくその場にいた全員が驚きを隠せなかった。ネーデルランドは今なおネウロイの手中にあり、常套手段では勝ち目はないと分かっているからだった。

「それはどういうことだミーナ！なぜ、ゆうなんだ！」

「落ち着いて。連合司令部からは必要な人材を指名されているのよ。」

ネーデルランドはカールスラントの北に位置する国で、現在ネウロイに占領中の地域である。バルクホルンはカールスラントでも北東部に位置する生まれで、ネーデルランドにはただならぬ思い入れがあつた。

「なぜ私じゃないんだ！カールスラントは目と鼻の先なんだ！私の方が適任じゃないか！」

カールスラントを奪還したいバルクホルンの強い思いを聞いてもなおミーナが首を振ることはなかつた。

「バルクホルン大尉のように故郷を取り戻したい同士がいるのは分かっているわ。でも、そういうウィツチこそ命令を無視しがちだということも分かっているの。だから、勇中尉なのよ。」

「では、一人で行かせるのか？」

坂本の質問は、501基地からの派遣は一人だけなのかということだが、普通は部隊を二分するような救援要請が入る。

「いいえ、今回は作戦指揮に私も同行します。基地の運営と戦闘は坂本少佐とバルクホルン大尉に任せるつもりです。」

納得がいかないとばかりに、ミーナに詰め寄り抗議するバルクホルンを抑えながら勇も考えを巡らせる。

「どうして私なんでしょうか？」

「坂本少佐と行ったガリア救援作戦が原因ね。」

実質二人で解放してしまった敵地奪還の功績から、政治の過激派を煽ってしまうことになったため、その立役者たる勇を使命してきたのだという。坂本もその思惑に気づいており、疑問を呈する。

「それなら私が使命されてもおかしくはないんじゃないか？」

「当初その案もあつたようだけど、最終的には勇中尉のみを使命することになったわ。まあ、勇中尉の少ない手柄と大きい功績にすがりたい連中の思惑でしょうけどね。」

「なら尚更ゆうは連れていくべきじゃない！もし、他の基地に取られたらどうするんだ！」

バルクホルンは勇を取られまいと嘯みつくが、勇もおそらくの検討はついていた。反抗作戦を行い、勇が不時着でもすればそのまま基地に留め置き、なんとでも言い訳ができるという算段だった。それほどまでに勇の功績が手の届く光だという証明でもあつた。

「そういうことなら、ゆうに手柄を上げさせればいいじゃないか！ゆうは他がおいそれと持っていけるような器じゃない！大切な仲間なんだぞ！」

勇の姉のような存在として、勇を手放すような事態は避けたかった。さらに、自分がいないような状態で持つていかれたら寝覚めも悪い。バルクホルンは必至に抗議したが、司令部からの要請ということもあり受け入れられなかった。澁々と不満を垂れながらバルクホルンは退出する。残った三人のため息が漏れる。

「ごめんなさい、あなたを守れなくて。」

「いえ、ミーナ中佐には日頃からお世話になっていますから恩返しだと思って頑張りますよ。」

勇は自分を救ってくれた恩人のためにミーナの申し出に応じる。

「そういつてもらえると助かるわ。でも、確かにトウルルーデの言った手柄を立てさせることを怠った私にも責任があるのよね…。」

隊長として、勇を部隊に率いれるためにあえて勇の撃墜数を減らして報告して過去があり、それが今回は裏目に出してしまったことになる。とミーナは自責を感じていた。

「命令である以上仕方ないさ。まあ、勇はどこにいつても信頼は厚い！活躍して自分の価値を高めてくるといいさ！はっはっはっは！」

「そう簡単ならいいのよね…」

「ははは…」

同行にさらにもう一人選ぶ必要があり、カールスラント以外のもので戦闘経験が豊富な者を選ぶとなると、シャーリーが選ばれた。エイラも候補に上がったのだが、サーニヤがいるため動こうとはしなかった。しかし、年齢的には古豪が選ばれ、不足はなかった。

出撃当日、ルツキーニがシャーリーとの別れを惜しみ、バルクホルンが勇との別れを惜しんで出発する。今回の作戦はネーデルランドへの橋頭堡を築くべく行われる作戦であるため、既存のルートではユニットによっては燃料が不足するため空母での出撃となった。北海から出撃し、ネーデルランド上空で制空戦闘と地上支援が求められる重要な任務だった。空母では、ミーナは指揮官として作戦説明に呼ばれたためシャーリーと艦内を探索した。

「やっぱり海軍の艦は設備もいいし、飯も旨いな！」

「リベリオンの海兵隊とは一緒にならなかったんですか？」

シャーリーと二人きりになるのも珍しかったが、陽気なシャーリーといてきまづくなることはなかった。

「あー何回か会った気もするけど飯に集中してて気にならなかつたな！あ、でも！一人で空母の飛行機を全部ぶっ壊したってやつの話なら聞いたことあるぞ！」

「それは…うちだったらしばかれてます…」

噴飯ものだが、さすがは物量の国だと感心した。しかし、シャーリーは勘がいい。今回の件について話を振ってきた。

「なあ、ゆうはどこかに引き抜かれるのか？」

「え、いやその予定はないですよ。」

シャーリーには話していない内容だったが、面倒見のいいシャーリーは今回の作戦の裏の目的に勘づいたようだった。

「ルツキーニが心配してたよ。遊び相手にいつも引つ張つられていくお兄さんが消えたら本当に泣くぞ？」

シャーリーはルツキーニの姉のような存在であり、おおらかで包み込む包容力に富んでいた。そして、案外隊員のことをよく見ている観察力に優れている。

「ゆうはさ、あのつんけんしてるペリーヌとも上手くやってるし、もの静かなサーニャとエイラもお前を頼りにしてる。ハルトマンや坂本少佐も口を揃えて信頼できるって言うし、あの強面バルクホルンなんかはお気に入りだ。私だって、ゆうがいるとじゃないや大違いさ。」

「過分な評価ですよ。でも、悪い気はしないですね。」

勇は気恥ずかしくなり、敢えて調子に乗ってみた。シャーリーには冗談が通じるのだ。バルクホルンではこうはいかない。試しに気取ってみたら、分厚い教練用の教科書の角で叩かれたこともあったのはいい思い出である。

「言うようになったなあこのこの……それにミーナ中佐もたぶんゆうを手放さないと  
いうより、申し訳なくてついてきたんだと私は思うよ。」

シャーリーはよく人を見ているものだと思った。実は勇もそう感じており、極力ミー



ナには明るく接していた。501は温かく、これまでのことを考えると破格の待遇に勇はしばしば困惑するほどの幸福感に包まれていた。だからこそ、自分のために困る人がいないことが勇の目指す目標だった。それもシャーリーは見抜いていたのかもしれない。沈黙のあとミーナが戻り、シャーリーは艦内の探索を続けると言い、席を外した。ミーナがため息をついて面倒な作戦会議の内容を話し終えるとミーナも沈黙してしまっただ。

「…ミーナ中佐、さつきシャーリーと話してましたが、私はどこにも移るつもりはありませんよ。」

「…ふふ、私もそうはさせないわ。」

どことなく真剣な様子の口調の勇と、突然の核心に迫る内容に一瞬の戸惑いを見せたが、ミーナはすぐに笑顔で返して見せた。そして、そんなミーナを安心させるべく、勇もミーナに決意表明する。

「昔の自分ならすぐさま迷惑をかけないように移動の手はずを整えたかもしれませんが、501には返しきれない恩があります。それを返すまではどこにも行きません。」

真つ直ぐな言葉にミーナも迷いを止め、作戦に集中した顔になった。

「今回の作戦、私が思うに成功は難しいわ。敵の戦力が不明な以上、状況が悪化すれば即時撤退の許可も取つてあるわ。誰も失つたりしないわ！」

硬い決意のもと出撃命令が下る。空母から出撃するとたくさんのウィッチたちが同時に空へかけ上る。艦砲射撃により沿岸場は砲撃され、その上で爆撃を加える手の入れようだった。そして、案の定敵の航空戦力が出現したところで勇たちの出番となる。

「ウィッチ隊各員攻撃開始！」

ミーナの一言で攻撃が開始され、初撃の勢いはまずまずだった。沿岸部に上陸した部隊も着々と準備を進め、あとは確保できるかどうかだった。しかし、ここで事態は急変する。カールスラントより急襲したとみられる大型ネウロイが確認され、ウィッチ隊員に負傷者が相次いだ。

「負傷したウィッチは直ちに後退、防衛ラインを守りつつ、手の空いたもので攻撃を仕掛けます！勇中尉、シャーリーさん！」

「おう！」

「了解です。」

三人は情報のあつた空域に向かうと確かに大型ネウロイが地上を攻撃しながら進んでいた。

「大型ネウロイを止めます！極力地上の支援も怠らないで！」

三人で大型ネウロイに挑み、地上部隊の防衛陣地の確保のための時間を稼ぐ。防衛陣地といつても、ある程度の領域と非武装地域が必要でそれを確認できなければ仮に沿岸部を取れたとしてもそれは陣地足り得ない。しっかりと攻撃をしかけてくるネウロイには退場してもらう必要があつた。

「敵の外殻は想像以上に硬いわ！カールスラントの未知の個体よ！注意して！」

「うわっ！こいつビームの威力が今までのと桁違いだ！」

カールスラントのネウロイは想像以上に厄介で、三人がかりでもやつとの思いで外殻を削る。しかし、その間に悲劇は続く。

「ミーナ中佐、陣地中央にて敵の主力が進行中！押されています！」  
「なんですって!?!」

敵の主力はこの大型ネウロイではなく、反対の正面から空と地上の両方で攻めてきていた。中央を押さええている部隊からは救援の要請がひっきりなしになり、戦線が延びきったところで叩かれるビフレスト作戦と同様の様相を呈していた。

「どうしていつもネウロイは！」

臍を噛む思いだが、目の前のネウロイを片付けられないことには板挟みになる。しかし、勇は積極的に出ようとする。

「ここは私がなんとかします！ミーナ中佐は中央へ戻り、指示を！」

「だめよ！ここが持たないわ！」

「ミーナ中佐にはやるべきことがあります！大丈夫！こいつならあと少しで倒せます！」

いつになく軽口を叩く勇の言葉を信じていいのか不安になったが、シャーリーも同意し、行くように促してくれた。

「隊長、ここは私とゆうに任せな！」

「ありがとう…すぐに追い付いて！」

「任せて下さい！」

「ゆうもいれば死ぬこたないって！」

笑顔で送り出され、ミーナは中央に戻るが、そこは戦線が突破されかかり、もはや限界だった。味方のウィッチもだいぶ疲弊し、地上では肖気も蔓延し始めていた。これでは全滅もあり得ると考え、即座に撤退を指示するよう司令部に進言する。

「防衛線崩壊！司令部撤退の指示を！」

「味方部隊の収容に時間がかかっている。それまで時間を稼げるか？」

「そこまで時間はありません。どれくらい必要ですか？」

「およそ1200」

残り20分もの間耐久するのは不可能に近かった。味方は崩れ、負傷者の運搬で闘えるウィッチの方が少なかった。これでは最悪の結末を迎えかねない。最悪の未来は、作戦に完全失敗し、勇を取られることだった。これ以上死傷者を出すわけにもいかず、指揮官として判断を下す以外道はなかった。

「ウィッチは所定の防衛ラインを放棄。最終防衛ラインで態勢を整えます！急いで！」

「それでは地上部隊に影響が出かねない！危険だ！」

「それ以外に活路はありません。速やかに行動を開始して下さい！」

「了解した。武運を……」

ギリギリの選択だが、これ以外取れる選択肢もなかった。残り10分となったが、一

向に撤収の完了が見えてこない。特にウィッチ隊員の戻りが遅くやきもきしていると勇が帰ってきた。

「只今戻りました！」

「途中で見つけたやつらも連れてきた！」

よく見ると後ろには傷付いたウィッチがおり、前線まで命令が行き渡らなかつたようだった。これもミーナの責任だと拳を握り混むが、時間が惜しかった。

「負傷者を連れて直ちに空母へ帰投しなさい！残りは私が探します！地上部隊は撤収が終わりそうなので、あとはウィッチだけです！」

「ダメです！ミーナ中佐！」

ここで、勇が待ったをかける。ミーナが振り替えると勇が真剣な眼差しで止めにかか

る。  
「ミーナ中佐にはミーナ中佐のすべきことがあります！」

「ここは指揮官が率先して指示を出すべきです！残されたウィッチを救援に向かいます！」

ミーナは責任ある地位の者として、ウィッチを救い、当初の絶対目標である勇を守り切るといふものを自分の中で確固たるものとしていた。しかし、勇はそれすらも反対する。

「それなら私が向かいます！ミーナ中佐は現在残されている大部隊を率いて下さい！今この瞬間の指示で皆の運命が決まるのです！」

勇の必死の説得に心が揺れる。確かに大方のウィッチは収容でき、残りは空母に帰還するだけだが、空母は移動しており、経験のあるものでなければ最悪燃料が切れて墜落する。そこには指揮官が必要であり、指揮官は安全な場所で適切な指示をしなければならぬ。しかし、ミーナのような現場を重視する指揮官からすれば受け入れられない逃亡であった。それに最悪の結末である勇が一人で行動することは避けたかった。ミーナは勇こそを引き留めるべく説得する。



「あなたこそもう魔法力が限界よ！ここは余力のある私が…」  
「ミーナ隊長！あなたはまだ周りが見えていないんですか!？」

胸ぐらを捕まれいつになく怒りを込めた力でミーナを睨む。勇の言葉はさらにミーナを迷わせる。

「ミーナ隊長！今この場にいるウィッチを救えるのは隊長！あなたただけだ！そして、これから救いに行くウィッチを救えるのは私だけだ！」

強い怒気とおそらく真理である言葉に、隊長としてのミーナの立場を見直させる勇の言葉に、ついにミーナは折れた。

「わかったわ…でも、必ず戻りなさい！約束は守るのが軍人よ！」

「了解！シャーリー大尉、負傷者は任せます。あなたのスピードが頼りです。」  
「わかった…任せろ！」

敬礼するとすぐさま反転し、戦火の激しい地域に突っ込んで行ってしまった。ミーナ

はそれから目を離すと振り返り指揮を執る。

「撤退します！」

勇は周囲を探索し、生存者がいないか確認する。すると、地上の建物から口笛が聞こえる。近づくくと3人のウィッチがおり、一人は負傷していた。安心させるべく、比較的軽症な者に質問する。

「既に撤退命令が出ています。今すぐ行きましょう！」

「敵がこの先の通りに構えているから抜け出さないの！どうすれば!？」

勇は自分が囷になると宣言し、報告通りネウロイを威嚇すると隙を作り、三人を逃がした。情報によるとあと二人の生存報告があり、2ブロック先にいるとのことだった。周囲を見渡すと確かにネウロイが殺気立っている箇所があり、そこに手榴弾をばらまいた。一気に殲滅し、確認すると一人の負傷したウィッチが必至に立て込もっていた。

「もう大丈夫だ！帰ろう！」

「もうダメかと…ふえ…」

「泣くのは生きて帰ってからだ！もう一人は？」

首を横に振り、戦死したことが分かった。さらに確認すると脚に怪我をしており、ユニツトも紛失していた。肩を貸し、退却しようとするとなウロイが集まり始めた。

「もう…だめ…」

「諦めるな！まだ生きてる！」

この感覚を久しぶりに感じてしまった。熱い血が頭に上り、心だけが異常に冷たくなるこの現象を勇は一度経験している。ネウロイが集まり始め、自分の身も危ういこの状況は昔のあの時と状況が酷似していた。今すぐにでも、この命の灯火を消すことはできない。だが、今の勇は一步を踏み出せる人間になっていた。

「シールドだけでも張れるか？」

「少しなら…」

その言葉を聞き、ウィツチを担ぐと走りだし、エンジンをぶん回して逃げる。ネウロイが四方から追っ手を放ち、まさに四面楚歌の状況だが勇は最後の武器と弾薬をぶちまけることで対応する。少しは追っ手との距離は稼げ、軽くもなったがそれでも一人を背負ってはいずれ追い付かれてしまう。とにかく早く、前だけを向いてひたすらにエンジンを回し続けた。弾薬がなくなれば銃で殴り、それも壊れたらあとは刀で斬りかかる。無茶苦茶な戦いで、しがみつくウィツチの手にも力が入ってしまう。

「いやあああ！落ちる！」ギユツ！

「く、苦しい！」

首が締まる形となり、ウィツチの力ともなればそれなりに意識も遠退いてしまう。しかし、それが幸いして、ネウロイの攻撃を間一髪でかわす。海洋に出たため、あとはひたすら超低空を飛行し、敵の攻撃をやり過ぎすだけだった。敵の攻撃はいつ当たってもおかしくはなく、勇も必死の覚悟だった。しばらくして、酸欠と披露で意識が朦朧とし始めたころにはネウロイが追撃を止めていた。

「起きて下さい！寝ちゃだめ！あそこに空母が！」

「はっ！」

目を覚まし、必至に思考を整理して眼を凝らすと遠くに空母があった。偶然とはいえ奇跡だった。しかし、そのあと少しが猛烈に辛く、魔法力もガス欠気味だった。それにダルく、目も霞んできてしまった。

(まずい…どうしてだ…)

「はっ！怪我してます！脇をやられてます！」

いつの間に撃たれていたのかわからないが、出血していたのに気付かないほど集中し、全力で稼働していたため多量の出血となってしまう。それでも最後の力を振り絞って空母の上空まで辿り着くと、そこにはミーナとシャーリーらが待っていた。

「おーい！こっちだこっちー！」

「よかった…」

甲板に大勢の人間が集まり、勇たちを迎えに来た。しかし、もう着くというところで

気が抜けてしまい、甲板までのスピードが足りず高度を落としてしまう。

「勇中尉?!」

「ゆう!?!」

しかし、甲板から見えなくなつてすぐ、もう一度浮き上がり、弾むようにして着地をし、すぐに倒れこんでしまった。すぐに衛生兵が担架で運び、ミーナが横で話をかけ続ける。

「ゆう! 戻つてきたわね! あなたが助けたウイッチはみんな無事よ! だから、あなたも大丈夫! しつかりするのよ!」

その言葉を聞いて安心して、勇は少し意識を手放した。

目を覚ますと、白いシートで囲われた部屋に寝かせられていることに気が付き、身体を起こすとダルさで足下が覚束ないことに気が付き、ゆつくりと辺りを見渡す。すると、他の床についていたウイッチや兵士がこちらに気が付き、目を真ん丸にすると大きな声で叫び始めた。

「おおい！英雄が目を覚ましたぞお！」

「軍医さん！軍医さん早く！」

軍医とミーナ、シャーリーが飛んで来て、勇の無事を確かめる。

「よかった…本当に…」

「ゆう！お前凄いぞ！やったな！」

訳もわからずただぼかんとしていると、周りの兵士やウィッチたちから拍手が徐々に大きくなり、口笛などの喝采に場は包まれた。すると、奥から艦長が現れ、手を差し出す。

「赤松勇中尉、貴官は本当によくやつてくれた！感謝の念に絶えない！貴官のおかげで我々は全滅を免れた。ありがとう。本当にありがとう！」

おまけに武功勲章や戦傷勲章、敢闘勲章などの勲章や表彰状が送られるだろうと盛大

に祝われ、勇はパニックだった。いわく、勇は大型ネウロイを地面に追い落とすと刀で両断し、地上ネウロイ共々粉砕。そして、撤退の時間を稼ぎ、逃げ遅れたものを助けだし、その全員が無事であった。さらに、その撃墜、撃破数は数えただけでも撃墜15地上撃破22救出4人と華々しい結果だった。勇は居たたまれなくなりながらも感謝を受け取った。代わる代わる兵士や救出したウィッチやその上官からお礼を言われ、もはやスターのような扱いだった。

「ふう…少しは休ましてほしいな。」

「誰でもあの奇跡を目の当たりにしたらさすがりたくなるものよ。」

「最後の滑り込みなんか映画のワンシーンみたいだったもんなー！」

誉めちぎられているが、ミーナも勇も本質は分かっているからこそ喜ばなかった。

「何人失ったでしょうか。」

「さあ、少なくともウィッチは6人戦死・行方不明、4人戦闘不能よ。結果としては戦力を徒に減らしたわ。」

「失敗ですね。大失敗…」



その言葉は空母の中に消えていった。この作戦は被害が少なく抑えられたが失敗以外の何物でもなかった。

基地に帰ると噂を聞き付けた隊員たちの厚い洗練を受けた。バルクホルンは怪我を心配しつつも功績を誉めそやした。他の隊員も流石だと勇を慰めてくれていた。

この件を機に、しばらくは勇への引き抜きは鳴りを潜め、勇は戦闘からは離れることになった。それでも記者などは華々しい功績を立てた勇の取材に赴き、出撃しないのならば取材を受けろと坂本に命令され渋々取材の波に揉まれる日々だった。

「撃墜数が通算150機を越えたとの声もありますねが本当なのでしょうか?！」

「扶桑では個人の公式な撃墜記録を認めていないためお答えしかねます。」

「ウィッチを4人も救出した赤松中尉にお聞きします! 救出した時、何を感じましたか?！」

「生きていてくれて良かった。それと、助けられなかった者たちに申し訳ない気持ちで一杯でした。」

矢継ぎ早の質問に困惑しながらも、勇は思ったことを述べていく。しかし、一向に記

者たちは華々しい戦果を尋ねるばかりで、勇は内心辟易していた。

「空母まで辿り着くには相当危険な状態だったと話題ですが、最後まで粘れた秘訣はなんでしょうか？」

「帰ること、約束したからです。」

「それは恋人なのでしょうか?！」

「仲間たちです。」

「国民に向けて一言!」

「大層なことは申せませんが…必ず勝つその日まで使命を全うする所存です。ですので、国民の皆さまには…」

永遠と続く記者の質問は華々しい戦闘の記憶や、救出劇、英雄単など勇の心はすっかり疲れてしまい、以降見かねたミーナとバルクホルンにより終了させられた。そして、しばらくは出撃を控えることになった。

「ゆう!見てくれ!」

「なんだいトゥルーデア?」

休暇中の勇に子どもが褒めるとばかりに自慢げに物を提示するかのようバルクホルンが訪れた。

「カメラだ！これはカールスラント製のライカだ！記者たちを怒鳴ったら記念に貰った。だからゆうにやろう！」

「そんなことしてたんだけ……」

久しぶりの休暇ではルツキーニに引つ張り回されたり、ハルトマンの部屋の掃除を手伝ったり、お風呂に入ったたり、坂本と稽古をしたり、ペリーヌから茶葉をもらい、それをサーニャとエイラたちと嗜むなど充実した時間を過ごしていた。バルクホルンは実はその瞬間をカメラで収めており、自然体の勇を被写体にすることに成功していた。実はもうすぐ勇の誕生日であり、それに向けてバルクホルンは張り切っていた。

「本当は私が撮ってやりたいところだが、ゆうの物だからな！」

「はいはい、じゃあ一緒に写ろうか？」

勇は呆れつつも、バルクホルンの行為が素直に嬉しく思い、二人で写真を撮ろうと提案する。

「なっ!?!いや、私はいい…」

「遠慮しないで!ほら、姉さん。」

「な、な、私は姉ではないぞ!」

そう言いながらも満更ではない二人は揃って写真を撮った。いろいろとバルクホルンのポーズ指示が入り、何枚も撮らされたが緩やかな日常を勇も楽しんでいた。

そして、このような事件があつてから、勇だけに頼るのは良くないと考え、今回の迷惑料としてブリタニアから一人ウィッチの派遣を要請した。すると、政府は渋々出すことを決定し、これが501の最後の隊員となる。まだ兵学校を出たばかりの新人だが、射撃は上手く、血筋も良いことから配属が決定した。ブリタニア北部の訓練場から飛行機で最前線まで来るため、護衛にリハビリも兼ねて勇が選出された。というのは建前で、今日が勇の誕生日であり、その間に歓迎会と誕生会をやらうと決まり、なるべく基地から遠ざけることを提案してのだった。

「今回も新たな仲間が加わるわ。迎えに行ってもらえるかしら？」  
「久々に空を飛ぶ気がします。了解です。」

ミーナをお願いされ、否応なく了承する。勇も久々に空を飛びたい気分だった。

「可愛いからって手を出しちゃダメよ？ トウルルーデに報告しますからね？」  
「しませんよ！」

そんな軽口を叩きつつ、準備をしていると坂本が報告をしてくれる。

「今日は天気も悪くないし、ネウロイが来る予報もない。まあ、最近は予報も当てにならないから護衛を出すわけだがな。よろしく頼む。」

「ただの護衛ですよ。気楽に行けます。」

坂本なりに久々に空に出る勇を心配してくれているようだった。

「出撃のときにゆうがないと案外背中が寂しいもんだぞ？」

そう言う坂本に勇は、坂本のピッタリの二番機を探さないと提案する。今回のウィッチもその視野に入れていた。

「じゃあ、坂本さんの二番機を探さないとですね。きつと面白いウィッチになるんでしょうね。」

「リバウの頃は一人、泣き通しだったぞ。」  
「それは手厳しい。」

朗らかに笑いかけ、坂本も勇ならばと安心して送り出す。風に乗って目的地を目指す。合流地点はブリタニア中東部の海岸沿いである。風を感じて陽を浴びながら勇は飛ぶ。

輸送機ではリネット・ビショップ曹長が一人壁に寄りかかっていた。

（わたしなかんがあので501でやっていけるのかな…）

訓練では固有魔法の能力を生かし、射撃では教官からお墨付きをもらったわけだが、

先日の戦いでは多くのウィッチが傷付いたと聞く。さらに、これからリーネが向かうのは精鋭揃いの猛者集団、第501統合戦闘航空団である。それを考えると憂鬱で、空を見て気分を紛らわす。そうしていると、機長から喜色の声上がる。

「いい天気…」

「おっ！リネット曹長、迎えが参りましたよ！」

前方を見ると確かに人影が近づいてきた。そして、無線に通信が入る。

「こちら第501統合戦闘航空団赤松勇中尉、そちらはリネット曹長で間違いないか？」

「こちらラビット1、リネット曹長輸送機です。あの赤松中尉に迎えにきて頂けるとは光栄です。よろしくお願いします。」

リーネも聞いたことがあった珍しい男性ウィッチの赤松中尉だった。いわく、歴然の古強者で、撃墜数は100機とも150機とも言われている本物のエースウィッチである。ネーデルランド反抗作戦では鬼神のごとき活躍をし、幾人もの命を救った英雄であ

る。そんな人物が自分を迎えに来たと思うと恐縮してしまった。

「こちら、リネット・ビシヨップ曹長です…よろしくお願ひします…」

「こちら赤松勇中尉です。こちらこそ歓迎します。」

怖いと思っていた予想とは裏腹に優しい声音と丁寧な言葉遣いであることにおどろいた。そして、リーネのいる窓際に近づき挨拶をしている姿は軍人そのものだがどこか優しい感じがした。落ち着いて、会話の内容を考えたりしていると、機と副機長などは勇の英雄譚を披露していた。

「赤松中尉はこれまで無敗のウィッチらしいぞ！前回の作戦もウィッチを救出したそうだし、さぞかしモテるんだらうな？」

「若干17歳でここまでの武功を挙げるとは流石は501のウィッチですね。」

機体の外では勇が並走し、時折周囲を見渡したりしている。こここらみればどこにもいる普通の軍人で、どうも実感が湧かなかった。噂からどんな傑物がいるのかと怯えていたが、案外噂は噂なのかもしれないと、そう思っていると勇から通信が入る。



「進路上に未確認機。他に航空機は飛んでいる情報はありますか？」

「目がいいですね。ここはブリタニアですからね、同じ航路の航空機の情報なんてあつたか？」

「いや、聞いてませんね。」

機長も副機長も情報を照会するが、この空域に別の航空機が飛んでいるという予定は確認できなかった。しかし、勇はその返答を聞くと顔を引き締め、声音が変わる。

「じゃあ、敵だ。」

突然トーンが下がり、劇鉄を上げると外の勇の顔は軍人の顔になった。しかし、ブリタニア上空でのネウロイならば警告があり、それこそ間違いだと誰しもがそう考えた。しかし、勇は副機長の静止の声にも迷わず突っ込み始めた。

「あつ！待って下さい！友軍の可能性も！」

「いや、間違いない。ネウロイだ。」

「分かった！進路変更！海に出るぞ！」

地上に被害が出ないよう海上に逃げるが、一瞬で戦闘の緊張感に包まれ、リーネは震える。

(どうして……ここにはネウロイなんかいないはずなのに！)

窓の外を凝視すると、確かにネウロイだった。ゴマ粒のような点からネウロイを察知し、すぐさま攻撃に移る姿勢は流星の勇だとだれもが感じ、また彼ならばと安心していった。

## 最終話 君は来ない

勇はすぐに基地に連絡し、救援を要請。すると、ミーナから10分ほどで到着するとの回答があった。輸送機を守りながらというのがネックだが、なんとかやり過ごせばあとは501で片付けられると思いい、覚悟を決める。相手は大型で火力が強く装甲も高い。なんとか相手の意識を輸送機に行かないようにするのが先決だった。輸送機を見ると急いで離脱しようとしている中で、一人の少女が不安そうに怯えているのが分かった。

「10分の勝負だ。やれる…」

ネウロイに向かって射撃するがあまり効果はない。近付いて効果を上げると、威力の強いビームで針ネズミのように攻撃してくる。機を伺い、何度も仕掛けていくうちに少しずつ輸送機に向かっていくことに気付く。

「くそっ！どうしてそっちに行くんだ！こっちだ！」

刀を抜き、大ダメージを与えるべくギリギリまで速度を増し、攻撃を最低限の挙動でかわすと魔法力を込めて振りかぶった。しかし、攻撃をしてから勇は暗黒の世界へと転落した。

リーネは離脱する輸送機から戦闘を見ていた。なんとも華麗な攻撃と回避で、単機奮闘していた。これがあの501部隊の実力なのかと驚愕しつつ、成り行きをハラハラと見守る。私にあんなことができるだろうか。そして、一人で闘える強い気持ちがあるのか。私にはあるのだろうか。そう疑問や不安を織り混ぜて戦闘を見ていると勇が一際目立つ大技を繰り出そうとしていた。

「なにあれ！きやつ!!」

勇が攻撃を仕掛けた瞬間のことだった。強い閃光と音により辺り一面は包まれる。幸いリーネたち輸送機にはさほど影響はなかったものの、直撃を受けた勇は重篤な影響をもたらしていた。視界と聴覚を同時に失い、勇はパニックに陥った。

(なんだ!?何が起こった?!何も見えない!わからない!)

フラフラと飛行しているのが遠目で理解でき、リーネは青ざめる。ネウロイはじわじわと迫り、確実に勇を攻撃しようとしていた。リーネは何もできないのかと己の無力さをただ見ているこの瞬間に染み渡っていた。

「ネウロイっ！くそっ！どこだ！」

四方八方撃ちまくり、少しでも威嚇するが、自分がどこにいて、ここが上なのか下なのかもパニックで分からなくなっていた。とりあえず正面にシールドを張り、飛んではいようとしますが、これが一番怖かった。少しでも進めば海や陸地に激突するのではない。ネウロイに攻撃されるのではないかと想像するとともに飛行できなかつた。なんとか落ち着こうにも近くで風を切るネウロイの攻撃に少しも精神は休まらなかつた。

(こんなときミーナ中佐の空間把握能力があれば……)

無い物ねだりしかできず、絶えず死への恐怖が勇の心臓を鷲掴みにし、足を止めてし

まっていた。そこをネウロイが見逃すはずもなく、無数の攻撃が降りかかる。ビームの先は勇の脇腹だった。シールドの外側からの攻撃で、目も耳も使えない以上避けることも敵わず、鮮血が飛び散る。

「うぐつがつ!!」ブッシャー!

痛みで何も考えられなくなり、高度を落とす。しかし、これ以上落ちたら墜落するかもしれないという恐怖のみが勇をその場に立ち止まらせる。実際、リーネから見れば高度は余裕があり、落ちる心配はないが、それは五感が働けばの話である。今の勇には痛覚と肌で風を感じるしかできなかった。夜間哨戒飛行でも何度か感じたことのある上下左右不覚の感覚に似ているが、突然の出来事という突発性と敵と対峙しているという緊張感が勇から正常な判断を奪っていた。

(もうやるしかない!)

そう決心すると、先ほどのビームの方向に向かってシールドを張りつつ突撃する。外れたらあとは波の音が聞こえるところまで高度を落としてやり過ぎす算段だった。何

も聞こえない今、通信は意味を成さないが、連絡を入れる。

「こちら、赤松機：原因不明の攻撃により前後不覚：視覚聴覚ともに奪われ、負傷しました。ミーナ中佐、坂本さん、トゥルーデ：あとは頼みます…」

この通信が届いているかどうかはもう関係なく、一か八かの攻撃に出る。シールドだけを頼りに全速力で突っ込む。それだけを考えてあとは銃弾をばらまく。引き金を握った感触がなくなるまで撃ち続ける。眼前にはもしかしたら障害物があるかもしれない、ネウロイが攻撃をしようとしているかもしれない、どこかもわからない空を飛んでいるかもしれない、海へ落ちているのかもしれない。ただ勇は、自分が前だと思う方へと突っ込んだ。

一方、ミーナたちは全力出撃の態勢で勇と輸送機を助けるべくこちらも全速力で向かっていった。しかし、勇へ連絡を入れるが一向に返事がない。あの勇がやられるなんてことはないと思っていたが、隊員はみな不安が滲み出していた。

「あのキーンって音のせいだよ！ゆうとの通信が妨害されたのかも！」

「かもな…なあ、隊長：ゆうは無事だよな？」

「もし困ってたら私がズバッと助けてあげるんだから！」

「少し心配…エイラがあんなこと言うから…」

「心配ないって…タロットで少し嫌なカードが出ただけなんだな…」

「勇中尉ならきつと大丈夫ですわ！そう簡単に負けるはずがありませんもの！」

各々が自分を鼓舞するように呟くが、一番焦っているのがミーナ、坂本、バルクホルンだった。

「ミーナ、どうだ？」

「一応、この先に2つの反応はあるわ。でも、挙動がおかしいの。まるで検討違いな方向に行ったり…」

二人が心配する様子を我慢できないように、バルクホルンが怒鳴る。

「ゆうは絶対に大丈夫だ！」

「トウルーデ…」



バルクホルンはなによりも仲間を大切に考えている。自分ばかりを責めていた日々を勇と居ることで前向きに向き合えるようになっていたこともあり、また弟のように可愛がっていた勇に対して少しでも大事なことを願っているのはバルクホルンだった。仮にもエーススイッチで、休暇明けとはいえそう簡単にやられるはずもないのだ。

「通信機がおかしくなっただけだ…なんでもなかったようにケロッとして現れるさ…」

吐き出すように言った言葉は、言っているそばから消えてなくなりそうな自信で霧散していく。その時、微かに通信が入る。

「ジジツ…不覚…視覚聴覚ともに奪われ、負傷しました。ミーナ中佐、坂本さん、トゥルーデ…あとは頼みます…」

確かに勇の声だったことに皆が耳をそば立てたが、負傷の一言で場が凍りつく。最後の一言はミーナをしても耐えきれなかった。

「こちらミーナ！聞こえているなら返事をして！勇中尉!？」

「おい！返事をしろ！どうしたんだ！」

「ゆう！ゆう!?! どういうことだ！無事なのか?! お願いだから返事をしてくれ！頼むっ  
てどういうことなんだ！ゆう!!」

叫び声ともいう切なさは無言によつてその危険度に置き換えられる。バルクホルン  
がいの一番に速度を上げる。つられて全員も無理にでも速度を上げて追従する。バル  
クホルンの心の中は不安で一杯だった。早く勇の顔を見て安心したかった。全員の願  
いも同じだった。

（ゆう…今日は楽しい日なんだぞ…お前がいないとダメなんだ!）

通信が終わり、引き金を引き続けている勇はふとバルクホルンの声が聞こえた気がし  
た。耳はいまだに聞こえないはずなのに、あの暖かい声は勇を安心させた。

「トウルーデ…いるのかい？」

ふと力が緩んでしまった。その時だった。かつてない衝撃がシールドを破り、勇を襲う。手元が弾け、あとは何も考えられなかった。ただ、猛烈な熱さに身を焦がし、痛みとともにどこまでも勇の意識は落ちていくのを、自分のことながら客観的に感じ取っていた。

(もう……ダメなのか?……しまったな、トゥルーデに写真あげそびれちゃったな……怒るかな?いや、きつとむくれるんだろうな……でも、きつと喜んでもらえると思うから渡したいな……はあ、幸せな時間だった。)

ネウロイはその後、501部隊により無事に撃破された。中でもネウロイの装甲に刺さっていた扶桑刀が決定的だった。かなりネウロイとしても弱っていたと見られ、全員の総攻撃で呆気なく撃墜できた。しかし、撃墜されたのはネウロイだけではなかった。赤松勇中尉、被撃墜、戦死。享年18歳、最終階級は2階級特進の少佐だった。扶桑海事変から欧州大戦まで戦い抜いた勇の死は、瞬く間に欧州、そして世界に広まった。墜落したとされる海域では現在も捜索活動が行われており、見つかったものは海中に漂っていた彼の軍帽だけだった。勇の戦死には異例の声明が数多く出された。扶桑は元よ

り、戦死した場所であるブリタニア首相チャーチルやブリタニア国王、ネーデルランド女王。そして、天皇陛下までもがお悔やみと称賛を送った。しかし、その華やかな舞台と裏腹に501基地には暗雲が立ち込めていた。勇が戻って来なかった日、燃料が切れるまで搜索し、基地にやむ無く帰ったあともバルクホルンを始め、隊員はみな外を眺めて待っていた。特にバルクホルンは滑走路で日が落ちてても待ち続けていた。ミーナと坂本は司令部からの報告を受け、絶句した。

「赤松勇中尉の戦死が確定した。501部隊は隊員1名戦死、速やかに所定の任務に戻り報告をされたし。」

無機質な声からは想像もできないほど、その一人の命は重かった。ミーナは受話器を置くと、そのまま動けなかった。坂本がミーナの肩に手を置いて、二人ともなにもできなかつた。リーネは501基地への着任を遅らせることになり、3日後に到着となつた。基地では勇が帰ってきた時のために祝いの席が設けてあり、その華々しさが逆に勇の存在を無性に盛り立ててしまい、誰の目からも痛々しさが発せられていた。そして、ミーナから報告があると全員を召集し、ミーナが口火を切る。

「皆さんに悲しいお知らせをしなければなりません。本日の戦闘で、我が501ストライクウィッチーズの隊員である赤松勇中尉が戦闘により…戦死しました。」

この一言で堰が外れたのか、ルツキーニが泣き出す。シャーリーが慰めるが、シャーリーも目に涙が溢れていた。サーニヤやエイラも肩を寄せ合い互いを守っていた。ハルトマンは不機嫌な顔を窓に向けミーナの話を聞かないふりをしていた。ペリー又は絶句し、あたかも希望は打ち砕かれたかのように感情が失せていた。そして、バルクホルンは堪えきれず叫んだ。

「そんなはずがあるか！勝手に決めるな！ゆうは…ゆうは帰ってくる！」

そう叫ぶと部屋を駆け出し、勇の部屋へと向かった。部屋の扉を乱雑に開けると、転がり込むように辺りを見渡す。静まりかえった部屋にはきちんと整理された机と寝床、本棚があるだけで生気がまだあるようにも感じられる部屋だった。しかし、部屋自体も主の存在を待っているかのように息を潜めていた。バルクホルンはつかつかと寝床に向かつて歩くと、寝床をひっくり返し、棚を力任せに倒した。その大きな音にミーナたちが駆けつけると部屋はぐちゃぐちゃに荒れていた。その中で、一人虚空を揺らぐ目で

探し続けるバルクホルンをハルトマンが止めにかかる。

「なにしてんだよ!？」

「うるさい離せハルトマン!」

ハルトマンの言葉も意に返さずバルクホルンは暴れようとする。ハルトマンは自分の力だけでは無理だと判断し、応援を頼む。

「誰か手を貸して!」

「わかった!バルクホルンよせ!」

「お、おう…手伝うよ。」

三人がかりで止めてもその怪力は少しも揺るがなかった。挙げ句にペリーヌも加わりようやく鎮静化させると、ミーナがそれすらも止める。

「みんな、止めなさい。」

「隊長!いいのかよ?!」

「もういいの…」

ミーナがそういうと、4人もバルクホルンを離す。バルクホルンが拘束から解かれ、上体を起こすとバルクホルンの目の前で屈み、目線を合わせる。そして、後ろからあるものを差し出すとバルクホルンは固まった。

「ミーナ…これは…」

「勇中尉のよ…彼はもういないの。」

それは勇の軍帽だった。ミーナが手渡すと、バルクホルンを抱き締める。それは強く強く抱き締める。すると、バルクホルンも止まっていた時間が動き出すかのように目尻からは滂沱の如く涙が流れた。勇の軍帽を握りしめ、顔を埋めるともういない勇の匂いと海水で濡れた潮の香りがして、それが堪らなく喪失感を醸し出した。ミーナ自身も不安だった心を抱き締めることで緩和させるように、バルクホルンの涙を肩で感じた。

「どうして…昨日はゆうの誕生日だったんだぞ…どうしてそんな日に…」

この世の不合理に涙を流さずにはいられなかった。涙を心のもやも一緒に流してくれることを願い、嗚咽を堪えることもせず、憚ることも厭わず泣いた。ただ、勇の軍帽についた残香だけが流れずにいつまでも漂っていた。

そして、坂本が散らばったものの中から一通の封筒を見つけた。中を見ると坂本の手が止まる。

「バルクホルン、お前にだ。」

坂本が差し出したのは写真と手紙だった。バルクホルンは奪い取るように受けとると、手紙を読む。そこには、勇の字で扶桑語で書かれた字の羅列があった。しかし、バルクホルンは扶桑語が読めない。よって坂本が再び受け取り、代読することとなった。坂本はゆっくりと読み始める。

「ゲルトルート・バルクホルン様へ

こんにちは、トウルデー。今日は私の誕生日です。誕生日に何をするのかとぼんやり考えてみただけでも、何かしてもらおうというのも恐縮するから私から手紙を書くことにしました。



私と会った最初の日のことを覚えているでしょう。あの日は私が死のうとした日です。毎日が怖くて悲しくて、悔しくて、眠りから覚めても現実には悪夢から覚めなくて、死ぬことだけが救いになると毎日思っていました。でも、トゥルーデに会ってから私の中の価値観は大きく変えられてしまいました。私の姉は戦争で亡くしてしまっただけで、姉に似たトゥルーデを見ているとどこか昔を懐かしむ気持ちが芽生えてしまいました。そして、その時の荒んだ価値観をトゥルーデはきちんと怒ってくれました。あの時、私の時間は再び動き出したんです。その時まで諦めの感情をぶつけられてきた私に、私の弱さを怒ってくれたのはトゥルーデ、あなたです。姉によく似ていると言いましたが、実は少し違います。私の姉はよく笑う人でした。トゥルーデも今、笑えていますか？姉と重ねてしまって申し訳ないとも思いましたが、案外心地好くて、つつい姉さんと呼んでしまいうようなのは内緒です。きつと笑った顔は軍人としてのバルクホルンではなくて、一人の女性としてのトゥルーデなんだと思います。だから、困ったらいつでも頼って下さい。話して下さい。泣いて下さい。笑っていて下さい。私ではまだ頼りにならないかもしれませんが、私にとつての大切な仲間として、姉として、一緒の時間を過ごしてほしい。いつか私の故郷の大好きな桜の花を見られる時が来ます。戦争という残酷な毎日を少しでも幸せな毎日にしてくれたトゥルーデに、私は精一杯のありがとうを伝えます。今日という日にありがとう。トゥルーデ、姉さん、また明日。

## 赤松勇

坂本は途中から潰れそうな声だったが、しつかりと読みきつた。隊員たちはそれぞれの思いでそれを聞いていた。そして、バルクホルン本人は俯いたまま、拳を握って我慢していた。坂本は、目を拭うと封筒の中の写真をバルクホルンの手前に差し出した。その写真には隊員たちが集まってなにやら食事をしているようだったが、その顔はどれも豊かな表情でバルクホルンもカメラの方を向いて微笑んでいた。当時撮られたことは覚えてはいるが、あのとときの自分はこんな顔をしていたのだと、相変わらず茶目つ気のある勇ならではの写真だと感じた。その写真を見て、胸ポケットにある本来勇に渡す写真たちを取り出した。そこには、どの写真にも笑った顔の勇と笑顔の隊員たちが、そして、バルクホルンと勇の二人で撮った幸福に満ち溢れた一枚が、屹立と輝いて写っていた。勇がいるから笑えた日常は、その写真の中にしかなかったが、その写真の出来事は確かに実在した。来る明日に勇だけがないのはあまりにも寂しく、今日だけはとバルクホルンは恨み事を口にする。

「ゆう・・・お前には明日がこないじゃないか…」

その言葉は、戦争という化け物に飲み込まれた一人の人間の命の炎をそつと吹き消すように、誰もが勇の死を受け入れる言葉だった。

完

## 最終話改 祈りが届くなら

大型ネウロイのビームが勇のシールドを突き破り、かつてない衝撃を勇を襲う。手元が弾け、意識はぶつつりと暗闇に吸い込まれる。勇は身を焦がしながら暗闇の中で考える。

(もう……ダメなのか?……しまったな、トウルルーデに写真あげそびれちゃったな……怒るかな? いや、きつとむくれるんだろうな……でも、きつと喜んでもらえると思うから渡したいな……はあ、幸せな時間だった。)

勇は重力に引かれながら海へ向かう。勇が心配していたより高度には余裕があつたようで、なかなか身を包むような冷たさがやってこない。もはや感覚まで失つたのかと錯覚したが、意識を持っている今、まだ生きてはいるのだろうと分析してみる。

(俺は死んだ……いや、死ぬのか。どっちなんだろう。どちらでもいいか、幸せな時間をもらえて幸せだったんだ。あつちの世界では姉さんたちもいるのかな? いや、さすがに俺は地獄行きだな。俺は許してはもらえないほど酷いことをしてきたんだから。罪

なんていくつあるか数えきれないだろ？ そうだ、当然じゃないか・・・）

過去の行いを振り返れば勇の贖罪がなんなのかは自ずと答えが出る。しかし、勇はどうしても胸のざわめきを感じずにはいられない。そのざわめきとは勇の心を、死を迎え入れる自分の心を揺るがす。揺るがすその何かに、勇は固く蓋をする。それは幾重にも重なるように嚴重に。今度こそネウロイのビームなんかじゃヒビも入らないほど固く。

（俺は！ 何人も見捨ててきたじゃないか！ 周りのみんなは俺をどう見た？ 「ネウロイの仲間だ！」 「ネウロイ以下のケダモノ！」 「人間の屑！」 「化け物！」 「扶桑男児の恥め！」 「家族まで殺した最低な男！」 「ウイツチの面汚し！」 「人殺しっ！」・・・そう、人殺し、なんだよな・・・俺はいつだってそうだ。この世には不変の理がある。それは、死だ。死は誰にでも平等に訪れる。ただ、俺は一人で逝く。誰も看取ってはくれない。）

今までに言われた言葉を心で繰り返す。心に刺さり、冷たく凍てつかせる。決して癒すことのできない汚点。だが、その汚点さえも勇の心を揺らし続ける。きつく締めた蓋にほたりほたりと沁みついて、滲むように。それはいつかは心に届いてしまうだろう。それだけは受け付けてはいけない。汚れ切った勇の心には受け付けていけない何かだ。

（もうやめてくれ！何なんだ！俺はもう死ぬんだ！やつと一人になれる！罪を贖えるんだ！時間に縛られないあの世という地獄が俺にはお似合いなんだ！地獄こそが俺にとつての天国であり、解放された、生きる場所なんだ・・・）

固く閉ざした蓋から漏れてくる何かから必死に落ち行く心を守る。深く、どこまでも暗い自分だけの心の中に染みてくる異質な存在を勇は拒絶する。それは触れただけで勇を立ち上がらせてしまう。生から解放された勇の弱さを隠すこの暗闇の繭からまた引き戻させてしまう強い力を秘めているのだと、直感で分かってしまったている自分がいる。それを感じてから揺れる心は留まることを知らない。今の自分の心は寒天のように揺れ続ければいつかは崩れてしまう、そんな脆い心だ。この闇にまみれた心こそ罪を数え、贖う使命を果たすだけの機械となる自分の役目は揺るがないはずだ。そんな心の牙城は今や危機にさらされている。勇は今にも滴りそうな雫を防ぐ傘を編む。

（俺は、もう戻れやしないんだ。神が俺を許そうと、俺が俺を許せない。この罪は俺だけのものなんだ。誰が邪魔できるものか！この名前も言うのを憚られる人殺し、心を失った怪物、名無しの怪物を許せるものか・・・俺は、俺の名前は、何だったか・・・俺は、

誰なんだ・・・)

名前も忘れかけ、自分という存在を打ち消す引き金にそつと指をかけたその時、蓋から漏れ出た雫は、勇の編んだ傘に静かに音を奏でて滴った。

ポローン

(なんだ・・・この光は？俺は確か視覚を失ったはず・・・)

一粒の雫は、一滴落ちるともう一雫、もう一雫と滴る。

ポローン

ポローン

(なんだ、なんなんだ！この、どうしようもない名もない存在に俺という意義を見出させる雫は!?)

もはや一滴などでは表現できないほど流れ出る雫は、固く閉ざしたはずの蓋のヒビを大きくしていく。そのうちシャワーのように流れ、勇の編んだ傘には音ではなく声と

なって勇の失われた聴覚を突き抜けてる。

・・U!

(音? いや、音にしては変だ。聞いたことがあるような?)

シャワーからもはや滝のように流れ出る雫たちは傘を歪ませる。そこから傘に響く声は明確な言の葉になって響き渡る。

・YOU!

(YOU? 否)

勇の中で否定の言葉が選択される。

よう!

(なんだって? 聞こえないよ!)

勇は聞きたくなくなってしまった。その先を呼ばれる気がして必死で辺りを見渡す。そ



して、初めて聞いたときのあの温かい風が肌を撫でるように直接勇の心に届く。

．．．ゆう！

それまで流れを防いでいた傘を突き破り届いた雫は勇にぶつかる前に爆ぜて溶け込む。そして、その音、声、言葉は勇の一番嬉しく、優しく、愛おしく、慈愛に満ちた、どうしようもなく呼ばれたい名前だった。

（そうか．．．俺の名前は、ゆう、赤松勇！でも、誰なんだ？誰が俺の名前を呼ぶ？）

その時、未だ暗闇の坩堝の中で一筋の光が差し込む。先ほどまで流れ込んでいた幾多の雫が、今は虹を作り、その虹を集めた先で一枚の紙が舞い踊る。それに誘われる様に勇はゆつくりと手をかざしながら近づく。

（この紙切れは一体？眩しくて見えない．．．なんだ？知っている気がするのに！誰が写っているんだ！）

勇は自然とその紙になにかが映り込んでいると感じた。いや、思い出したのだ。

（俺が写ってるぞ！でも、その隣には何が、誰が・・・駄目だ！思い出せない！俺の名前を呼んでくれるのは！）

その瞬間、一筋の光は蓋の隙間を一挙に押し広げ、辺り一面を曝け出す。そして、ようやく勇は思い出す。それは、思い出せなかったのが恥ずかしくなるほど愛しく思っていた希望の光。もはや、姿形を見るまでもなく、声だけで勇を救ってくれた恩人。勇はその写真を握り、しかし、くしゃくしゃにならないように加減しながらも胸に押し付ける。声にならない声を出して泣く。

（ああ・・・あなただ。あなたがいてくれた。一人で逝くはずの俺が、一人ではなかったんだ！あなたの名前は！）

その名を呼ぼうと試みる勇だったが、上手く声にならない。必死に叫ぶ。声にならない掠れた空気が押し出される。どうしてもその名を叫びたくて全てを出し切る。体内にある空気はもはやどこにもなく、力を尽きかけるまで力む。勇の名前を呼ぶ者、その

人にもう一度言いたくて魔法力までもを込めて叫び続ける。汗も唾液も無様に滴るが構わない。どんなに無様を曝そうと届きさえすればそれでいい。しかし、声は一向に出る気配はなく、力も魔法力も尽きかけ膝を折る。その時、一粒の涙が衝撃で滴る。いつの間にか表情筋によって押し出された涙だったのだろう。燃え尽きかけた勇が持つ写真にその涙は落ちた。

ポターン

落ちた瞬間、手に包む写真から漏れ出る光をみるため、そつと手を広げる。すると、光は流れ星のように噴出する。その流れ星の光る先には灯が煌めく。無数の煌めきに勇は目を見開く。いくつもの灯には勇の姉のような存在である人物や、501の仲間たち、そして、昔の記憶。そこには本当の姉さんの笑った顔。原隊である扶桑の戦友たちとの一時が映し出されていた。

(そうか、そうか・・・みんないるのか。俺はまだ生きていいのかな?)

その疑問を拾うように、もう一つの流れ星が目の前で揺らめく。

「ゆう、お前には明日が来ないじゃないか……」

その映像には手をつけて俯き、絶望した表情のあの人の姿があった。その姿を見た勇はようやく気が付いた。

(どうしてあなたが泣いているのですか……そうか、俺の、俺のために泣いてくれるのか。いや、いや！泣かせてはいけない！だって手紙に書いたじゃないか！笑つていてほしいと！)

思い出すと勇の心の牙城は内側から崩れ始める。固く閉ざしたはずの蓋を蹴り上げ、破壊する。もはや止まることは許されぬ。勇はもう一度生に執着する。そして、願う。

「お願いです！もし、もしこの愚かで矮小な私の一つの願いを聞き届けてくださるのなら叶えてほしい！どうか、どうかもう一度、姉さんに、トウルデーに、バルクホルンに合わせてほしい！もしこの祈りが届くなら他に何もいらぬ！手も足もお金も名誉も

いらぬ。ただ、バルクホルンに会いたい！」

億千万の彼方に願いを込めて祈る。神に祈るようなことはしてこなかった勇が、全ての八百万の神、万物の神に願いを捧げる。もはや声が出たことも些細な変化だった。殻を破り、過去を受け入れた勇は強く願う。ただ一点の望みは目の前で応え始める。目の前で写真が輝き始めたため、強く閉じた瞼を開く。すると、目の前には写真が光の塊となつて、一粒の流星の玉となつて勇の胸に吸い込まれていった。その瞬間、勇の胸に灯った明かりはもう一度力強く前へと誘う力の鼓動となつて動き出す。その力は勇を突き動かす。

「トゥルーデ、今行くね。」

その声は、世界の理を超えて顕現する。猛烈な重力に押しつぶされそうになりながら、その空間から這い出ること成功した勇を酷い頭痛が襲う。

「うう．．．なんだ、どうなつて．．．」

頭痛の最中、勇の頭の中に映し出される数字。そんな変な現象の中、あることに気づく。

(ん?!これは!?!潮の香り?!ここはこの世なのか!まさかっ!)

慌てて勇は自分の胸ポケットに手を当てる。そこには、バルクホルンに渡すのとは別に勇のお気に入りとして取っておいた、バルクホルンとのツーショット写真があるのを感じた。

(トウルルーデ、やっぱりいてくれたんだね・・・ありがとう・・・)

そんな感傷に浸っている勇のすぐそばを物凄い熱量が通り過ぎる。これは勇が何度も体験した忌まわしい攻撃。ネウロイの、それも大型ネウロイのビームである。そこで勇は気づく。

（俺は、あの時に戻ったのか!? 目も耳も聞こえないが、この空を飛ぶ感覚、魔法力を込める感触・・・俺は、戻ったんだ!）

感慨に浸る間もなく戦闘状態に引き戻される。勇はまたもや前後不覚の状態で放り出されたわけだが、何かしらの活路を見出さなければまた深淵のまた深淵に飲み込まれてしまう。だったらと、前回とは違う行動を試してみる。

（これで前回とは違う結末になるはず! さっきのビームの方向からして、逆側に全力で飛ばばあるいは活路が見出せる・・・はず!）

唯一の希望に賭けて全速力で飛行に集中する。

「これで変える! トウルルーデツ・・・」

先ほどの飛行感はなく、無人の地に立ち尽くす勇。そこで意識がもう一度自身の置かれた現状に立ち直る。

「俺は、失敗したのか……もう終わりなのか、せつかくもう一度の機会を得たのに……」

失敗を悔やんだことは幾度とあったが、今回の失敗は絶望などでは語れない自分への怒りに置き換えられた。あつさりど、あまりにも浅はかな終わりに狂いそうになる。

「くそっ！ どうして!?! 今度こそやり遂げると決めたのに！ もう戻れないのか……あれ？」

激しい怒りを覚えたと思つたら不意に意識が混濁する。目の前が歪み意識が飛ぶ。意識が飛び、朦朧としていると、またもや激しい頭痛に襲われる。それは先ほど感じた頭痛より酷く感じた。さらに、先ほどの無人の地などは見えなく、何も見えず、聞こえない世界だった。

（なんだ？ この感覚、この感触は？ もしかしてまた戻れ……うう……！）

『2』

またもや脳内に直接現れる数字。激しい頭痛に耐えながら先ほどの数字を思い出す。



「もしかして、この数字は残りの生き返れる回数?！」

疑問は確信に近づき、新たに考えを急速に巡らせる。チャンスが全部で3回与えられていたこの幸運に感謝こそすれ、もう死ぬのは御免である。打開策を急速に思考する。何としても生き残るためにはどんな可能性でも賭ける必要がある。

(考えろ!絶対に生き残るんだ!投げやりな思考は止める!諦めるな!)

一回目の生き返りの時と同じタイミングでやはりネウロイからの攻撃が来る。その方向は一回目の時と同じであることを確認し、生き返りを確信する。そこで、勇は全てを思考に専念するように蛇行飛行を始める。

(最初に死んだときは海に落ちるまでにかかなりの時間があつた!高度には余裕があるはずだから、臆さず下方にも回避行動を取るんだ!そして!)

勇は持てる全ての力を飛行に注ぎ込んだ。意識はもはや高度に囚われず、攻撃されないうように闇雲に飛行し、生き残ることに努める。しかし、ここで勇の身体が異変を訴え

る。

「ぜえ、ぜえ……（なんだ、さつきより体がだるくなってる……それに頭痛が引かない。）」

勇の身体は一回目の時からだいぶ疲労が溜まっていることに気づく。生き返りもタダではないことを認識したのだった。

（なるほど、そりゃあ一種の不利は被らないと理から逸脱してしまうものなあ……でも！そんなことに構ってられるか！しくじれば、そんな時は死ぬだけだ！）

覚悟を決め、次の思考を実行に移す。インカムに手を当て、通信を試みる。

「こちら赤松機、先ほどの通信通り、敵の攻撃により視覚、聴覚をやられた。現在、敵の攻撃を回避中。この通信が聞こえている者は何らかの反応をしてくれ。」

通信はするが、実際勇は返信を聞くことができない。では、どうするか。その方法と

は、返信による通信ノイズの強弱をインカムから直接耳小骨で感じることに伴う仲間の位置を探索することだった。現在、勇は高度を上下させる回避行動から、高度を維持したまま旋回を繰り返していた。

(この方法を思い出せてよかった。何事も経験しておくものだな！)

このノイズの強弱で探知する方法は、リバウで活躍したとされる、扶桑海軍最強と目される撃墜王、岩本徹子が実践したと言われる手法を坂本から聞いたことを思い出したのだった。実際は、リバウの電探施設が貧弱で敵の探知ができない状況で岩本が考案した、敵の位置を敵自体が出す妨害電波の強弱で位置を割り出すものだったが、今の勇にはどうでもよいことだった。

ジツジツ・・・ジジジ!

「(っ)ちかー!」

おそらく自分のインカムには声が届いているのだろうが、勇の聴覚は失われているため耳小骨に伝わる振動のみが頼りだった。それでも凡その検討をつけ、その進路に向

かつて回避行動を取りながら進む。徐々に強くなる振動に確信を着ける。

(よし！これでいける！今度こそ！運命に抗うんだ！) ブチっ！

しかし、勇に慢心は劇薬だった。一筋の望みは勇の回避行動を緩慢にさせた。それでネウロイの大規模攻撃が勇の頭部に直撃してしまっていた。またもや無人の地に立ち尽くす勇、今度も失敗したことにもはや自分の怠慢に怒りを禁じえない。手は信じられない力で握りしめ、唇からは血が滲むほど歯を食いしばっていた。

「あと少しだったのに!! 限りあるチャンスなんだぞ！しっかりしろ!!」

自分を叱り、緩んでしまった希望の心を戒める。次はどんな些細な希望だろうと掴んで離さないと固く誓う。そのためには手段を選ばない。すべてに強欲にかつ慎重に事を進める必要があることを再認識する勇は、強く願う。

「この運命に抗うには俺一人の力では足りない。お願いです。残りの一回、全ての力を私に貸してください！代償は取ってもらって構わない！」

そう声に出すと、今度は目が回り、頭が鉛のように重く吐き気までが猛烈に襲いながら最後の生き返りに放り出される。

「おぐえ．．．はあはあ、代償がだいぶ高くついたみたいだけど、何ができるのか．．．うっ！」

『一』

最後の数字が脳内に焼き付くように映し出される。本当にこれっきりなのは明確である。しかし、勇に諦めるといふ文字はない。最後の最後まで生きて生きて生き抜くのみである。

「これが正真正銘の最後の機会．．．必ず、必ず生き抜いて、会うんだ！」

心に秘めた思いを口に出すことで気だるい身体に鞭を打つ。そうしなければ、今にも倒れてしまいそうなほどの倦怠感と吐き気や頭痛に加えて、身体、特に内臓を刺すよう

な痛みが勇を襲っていた。

同方向、同タイミングで襲うネウロイのビームを避け、迷いのない回避行動を取る。夜間戦闘の経験から割り出される敵の方向に加えて、勇は新たな恩恵を受けとったことに気が付く。

「これはいい！ミーナ中佐の空間把握のような感覚が脳内に直接！あくまで視覚情報に頼らない情報源として活用しよう。」

新たに貸し与えられた能力は、いつか願ったミーナの空間把握だった。これは敵の位置が三次元で把握できる能力で目視と併用すれば、射撃などの精密射撃が可能となる魔法力だった。しかし、現在の勇は視覚がなく、能力が代替でしかないため、ミーナの純粋な魔法力の劣化版でしかなかった。そのため安易に信頼せず、己の感覚と思考を試すことを優先する。

「こちら赤松機、先ほどの通信通り、敵の攻撃により視覚、聴覚をやられた。現在、敵の攻撃を回避中。この通信が聞こえている者は何らかの反応をしてくれ。」

そして、先ほどと同様の通信を試みるが、工夫を凝らすことを忘れない。

「ついでに坂本少佐、もし私の姿が目視できたらそれ以降の通信をモールス信号の要領で符号で送ってください。」

坂本は魔眼の持ち主で、かなり離れた距離でも捉えることができる。それを利用して案内などをしてもらう手はずだ。先ほどの電波の強弱に加え、万全の体制を敷く必要がある。妥協などできないのだ。回避行動から旋回を始め、さっそく電波をキャッチする。位置を割り出したのはいいが、二回目の時はここでやられたのだ。気は抜けない。その時、ついにモールスらしき符号が振動として伝わる。その符号とは実に坂本らしく、単調だが分かりやすいものだった。

「R13 E t o B」

この符号は坂本と長くいるものでないと分からない符号であるが、要約するとこのようになる。

「(Right) 右13度方向修正 (Enemy) 敵、(Behind) 背後」

この通信に心から感謝し、位置を修正する。敵は勇の背後にいたため回避行動を忘れない。本来なら危険な位置取りをされている状況だが、この時に限っては相手の攻撃の範囲が指定される方が都合が良かった。最低限のシールドを展開して直撃を避けるように斜めに展開する。大型ネウロイの攻撃は直撃してはいけないと常識的に誰もが知っている。そのため、対処行動でしかないとため、次なる行動に移る。

「頼む！南無八幡大菩薩！この私に力を授けたまへ！」

扶桑に伝わる神でもなんでもよかったがとにかく新たな奇跡が必要の今、宗教に構って必要はない。そして、勇に次なる恩恵が齎される。

「ブハッ！・・・肺を持っていきやがった！でも、この力なら！」

力の代償に身体機能を著しく損傷させる、まさに命と引き換えの諸刃の剣であった。



今回新たに貸し与えられた力はエイラの未来予知能力だった。とはいうものの、空間把握と同様能力は劣化版であり、その能力は限定的だった。

「ぜえ、ぜえ……来るっ！動けええ！」

ポロポロの身体に鞭打ち、無理やり回避する。本当に直近の未来しか感知することができず、それにいち早く反応できなければ避けきれないほどだった。さらに勇の身体は限界が近づいていた。肺機能が著しく低下し、まともに思考することすら憚られていた。そのモヤがかかった脳内で必死に考え続ける。

（まだまだ！まだ終わらない！例え、死にかけてとしても生き残ればそれでいい！だから、それまで意識を保てくれよ！）

自分を咤激励するが、既に意識は半分ほど飛びかけ、手足が痺れ始め、魔法力も尽きかけていた。しかし、そんな限界状態の勇にモールス符号が届く。それは、あの人らしい文言だった。

「援護の必要ありと考える」

こんな時にあの人は、昔の仕返しをするようになるほどユーモアを持ち合わせる事ができるようになったのだと笑みが零れた。もしかしたらハルトマンかシャーリーの入れ知恵かもしれないが、それでも不思議と力が湧いてきた。そして、掠れた声で返答する。今度は素直になるのだ。だれも自分のこの言葉を我儘とは言うまい。だから、思いつきり叫んだ。

「助けてくれー!!!」

通信は電波に乗って仲間たちに伝わる。その声は待ち望んだものだった。全員が放たれた狂犬のように攻撃を開始する。

「敵は大型ネウロイただ一機よ！フォーメーションユリウス！攻撃開始っ！」

「コアは敵正面から見て右側にある！集中的に攻撃しろ！」

ミーナの指示で陣形を整え、坂本の魔眼でコアの位置を共有する。あとは、目標であ

る勇の援護であるがその担当はもちろんあの人物だった。

「エイラとサーニヤは距離を保って攻撃だ。シャーリー、ルツキーニは速さでもって攪乱、ペリーヌは隙を見て広範囲攻撃、ハルトマンは私についてこい！」

「えー！私だけ扱い雑なんじゃない?! トウルデーの横暴だ！」

「うるさい！カールスラント軍人たるもの・・・ええい！もういい！待ってる！ゆう!!」

愚痴を垂れつつもしつかりと増速したバルクホルンに追隨するハルトマン。ここに501の連携が炸裂することになる。

勇は聞こえはしないが、機関銃の炸裂する振動やロケット弾が着弾する衝撃を肌で感じていた。その心地はまさに夢心地と言え、こんなにも嬉しい銃火の響きは体験したこととはなかった。だからこそ、最後の最後で気が緩んでしまった。そうでなくとも、身体が限界を迎えていたため空間把握で察知した真後ろの敵からくる最大火力の攻撃に避ける術はなかった。

「しまっ・・・」

未来予知で察せられた極直近の未来に反応が遅れた勇の後悔の念が、死という現実を振りかざして訪れる。ぬかった、と見えない目を閉じ、最後の瞬間が訪れるのをわずかな回避行動で微々たる生存に賭けて動く。しかし、その最悪な瞬間は勇に刃を振りかざさずに終わる。

「シユトウルム！」

なんと最大火力のビームをハルトマンの固有魔法である「疾風」で打ち消したのだ。これにより最悪の事態は免れたが、未だ脅威は脱しておらず非常に危険な位置に敵がいるため、状況は逼迫していた。しかし、満身創痍の上、無理な回避行動で体が限界を迎え、僅かながら飛行できる程度の魔法力しか勇には残されていなかった。

(俺に必要なのは、あと幸運だけか・・・)

そう過っただけで意思が飛びかける勇にもう一つの奇跡が起こる。なんとネウロイが射撃により体勢を崩したのだ。その攻撃はとある対戦車ライフルの徹甲弾だった。

「こちら、ラビット1！英雄を支援する！」

「こちらリネット・ビシヨップ軍曹・・・微力ながらお手伝いさせていただきます！」

輸送の護衛をしたはずの機体とリーネが再び舞い戻り、勇に手を貸してくれたのだった。これで大型ネウロイは瀕死となり、あとはコアを破壊するだけだった。大型ネウロイの外殻は固く、そう簡単には破れないのだが、なにせウィッチは対ネウロイ用決戦兵士とも言える人類の切り札であり、その中でも勇の所属する第501統合戦闘航空団は選りすぐり中のエリート部隊なのである。

「見切った！」

坂本が一番分厚い装甲部分を切り裂き、コアが露出する。残るはコアの破壊のみであるが、勇はもはや意識を保つだけで精一杯だった。しかし、誰が決めるかはもう分かり切っていた。

「やっっちゃえ・・・ねえさん・・・」

愛する弟分の仇を取るべくコアの前に立ち塞がるのは、素手のバルクホルンだった。

「ああ、任せておけ！」

魔法力を両手の拳に乗せ、バルクホルンは全力でコアを破壊する。

「うおりゃあああああああああ!!!」

バルクホルンの一撃でコアは砕け散り、ネウロイは光の粒となって大空に散った。それを感じ、勇は最後の願いを蒙昧とした限界ぎりぎりの意識下で呟く。

「・・・生きたい・・・」

その願いは全て完璧に受諾された。

この日、第501統合戦闘航空団はブリタニア本土上空で大型ネウロイを迎撃、隊員

一名の戦線離脱の痛手を負いながらもこれを撃退。これを見た全ての人間に第501統合戦闘航空団の名声は轟いた。そして、その戦線を離脱するに至った英雄は……

「トウルーデ、分かった！分かったからもう包帯でグルグルにするのは止めて！衛生ウイッチに診てもらって傷も癒えたし、聴覚も戻ったし、視力も人並みだけに見えるようになったんだから！」

「いいや！お前はきつと無茶をする！動かないくらいが健康だ！」

病室でバルクホルンと戦場の様相を呈していた。あれからバルクホルンは過保護になり、今もいらぬ医療器具を満載にして看護していた。その度に包帯でグルグル巻きにされるため、もはやダルマ状態だった。その様子を生温かい目で見守る仲間たち。

「やーいお姉ちゃん」

「あらら立派な姉弟ねえ、うふふ」

「うじゆうく私も包帯グルグル仮面したいく」

一向に勇を助けようとはしないミーナたちを横目で睨みつつ、この現状を幸せに感じ

ていた。戦闘が終わり、勇は限界を超えた境地に居た。最後の願いは聞き入れられたかなど、意識が吹っ飛んでいた勇には確かな記憶はなかったが、今こうして生きているのだから願いは聞き届けられたのだ。あの日、最後に授かった恩恵はおそらく生命力だったのだろうか。勇は考えている。帰還した後の医者にはこう告げられた。

「失明、鼓膜損傷、肺の化膿による窒息、肺臓破裂、脳出血……どう考えても生き残れたのは奇跡としか言いようがない。それにこの回復力、前例がないことだ。」

医者はよく生き残れたと言うが、最後の願いは勇に命を与える代わりに勇の魔法力を全て吸い取っていった。勇は本当の過去の自分はあの空で死んだのだと考えている。過去に囚われた赤松勇は死んだ。今の赤松勇は心を手に入れた、本当の意味での生きて人間になったのだ。では、魔法力とは一体何なのだろうか。勇は少し分かった気がしていた。純粋な気持ち、子どもながらの無邪気な想いが魔法力の源なのではないだろうか。結果として、魔法力を失ったが、勇の心に一片の後悔はなく、心は晴れ渡っていた。そして、数日の入院を経て退院を迎える勇は、501基地に赴き転属の手続きをしに門を跨ぐ。もはや魔法力を失い、ウィッチでなくなった勇がここに居ることはできないのだ。懐かしい基地の間取りを眺めていると、隊員の食堂の前にバルクホルンが立って



いた。

「トウルーデ……ただいま。こんなところでどうしたの？」

仁王立ちで立ち尽くすバルクホルンは、ゆつくりと勇に向かい、そのまま勇を優しく抱きしめる。そして、勇の耳元でこう囁くのだった。

「おかえり。ゆう。」

目を見開き、抱きしめられたままその言葉を聞くことができず、生きていて良かったと、その一言で勇は救われた気持ちになれた。互いに涙を浮かべて暫し時が流れる。何度心の中でその言葉を反芻し、声を掛けようとする、ムードを台無しにする大声が突き抜ける。

「ハッピーバースデー、トゥーゆう！おめでどう！いえーい！」

「あなたたち！まだ勇中尉が来ていなでしよう！これではせつかくのサプライズが台無しですわ！」

何やらハルトマンとシャーリーとルツキーニの大合唱が始まったと思えば、キンキンと耳に響く怒鳴り声が聞こえてくる。バルクホルンは、わなわなと肩を震わせ、とても笑顔には見えない笑顔で勇を案内する。

「ト、トゥルーデ？あ、あれは一体・・・」

「は、ハハハハハ。き、気にするな！あれは・・・あれだ！歌の練習だ！」

誤魔化しきれてないその言い訳に苦笑が堪えられないが、促されるまま食堂に入ると、そこには隊員が勢ぞろいしていて、一斉に祝福される。

「「誕生日おめでとう！」」

正確には誕生日は過ぎていたが、負傷により病院にいたため、祝うことができなかつたのでこの日に勇を祝うことになったのだった。祝福の雨に勇は、今度こそ素直に笑う。

「みんな、ありがとう！」

一頻り祝われ、いつの間にか日が暮れていた。一応、戦時下であるため解散したが、勇はその足で司令室に向く。ミーナと坂本が机を挟んでこちらを見ている。勇はしっかりと入室の挨拶と敬礼を忘れない。そして、本題を切り出す。

「ミーナ隊長、本日を持ちまして第501統合戦闘航空団においての私の役目を全て終了いたします。これまで、大変・・・お世話になりました！」

軍帽を脱ぎ、90度にお辞儀を繰り返すと、坂本が脇に立ち、勇の手を握る。それは握手であり、別れと感謝の握手だった。そして、ミーナが立ち上がり告げる。

「確認しました。これにて、第501統合戦闘航空団赤松勇中尉のこの基地での全ての任を解きます。ご苦労様でした・・・よく帰って来たわね。おかえりなさい。」

ミーナが優しくそう呟く。こんなにも温かな指揮官はいないだろう。勇は満足し、ミーナとも固く握手を交わす。坂本も微笑み背中を押すように話しかける。

「ゆう、本当によくやった。今まで見てきた中でも真の軍人であり、武士（もののふ）だった！見事だ！」

互いに頷き合い、友情を確かめ合う。そして、もう一度ドアの前まで歩くと振り返り、敬礼を繰り出す。それをもって二人の有能な指揮官と別れを告げた。司令室を出ると待ち構えていたのはシャリーとルツキーニだった。

「ねえねえ、本当に辞めちゃうの？」

「ルツキーニ、それは言わない約束だろ？」

潤んだ瞳はまだ幼く、純粹な感情の発露からの言葉だった。そしてその言葉を優しく慰める保護者たるシャリー。二人とも陽気な性格からは思いもよらない行動で驚いたが、きちんと別れを告げる。

「ああ、名残惜しいけど、もうウィッチじゃないからね。でも、二人ともこれから世界の希望でいてください。変なこととして新聞に載らないでくださいよ？」

「ううう・・・むぎゆう！」

それを聞いてルツキーニは勇の胸に飛び込んできた。それを受け止め、頭を撫でてやる。例えば、ルツキーニとはよく遊んだ。子供の戯言と放っておくには勿体ないほど、探検はいろんな景色や発見を齎してくれた。ルツキーニにはいろんなものを見せてもらった本当の意味で感謝したかった。そして、シャリーからはコーラを受け取った。最初は慣れない黒色の水に戸惑ったが、今ではこの色こそが美味しさと思えるほどに馴染んだ味だ。そんな陽気な二人にも別れを告げると、今度はエイラとサーニヤが出迎えてくれた。

「あの、初めて夜の空を飛んでくれた日のこと、忘れません。お元気で。」

照れたように恥ずかしいようなその素直な言葉で伝えてくれるサーニヤにつられて、バツの悪そうにエイラも別れを惜しんでくれる。

「まあ、友達として、悪くはなかったんだナ・・・」

スオムス人にしては顔を赤くして伝えてくれる。そんなエイラにはお礼を言わねばなるまいと勇も返す。

「いえ、こちらこそ助けてくださってありがとうございます、エイラ。エイラの未来予知のおかげで命拾いましたよ。」

そう言つて歩き出すと、気づいたようにエイラが今度は青筋を立てる。

「……未来予知だつて?!私の能力をパクるな——!」

そんな声を聴き流しながら出口に向かうと、そこに青いお嬢様がもじもじと立っていた。だが、意を決するとしっかりと目を見据えて宣言する。

「わたくし、必ずガリアを取り戻して、復興させてみせますわ!あなたがそうしてくれたように、花を植えて待ちます!わたくしの故郷は華の都ですよ!」

そう高らかに宣言する様は、気高い貴族のそれに勇は脱帽して答える。

「花一面のガリアを見せてください。あなたの国を必ずこの目で。」

「もう見ていらつしやるではありませんの?」

勇は一度ガリアへと赴き、ネウロイを撃退したことがあつた。坂本と共同での出撃だったが、面と向かつてお礼を言われたのは初めてだった。加えて、このことをペリー又知られていたことに驚いてしまった。感謝という花束をもらい、次へと向かうと最後の出向える少女がいた。

「あ、あの!」

その少女は先日着任したばかりの新人。あどけない新兵のウィツチは怯え、縮こまっている。それを解すように優しく語り掛ける。

「リネット軍曹、助けてくれてありがとうございます。」

そう言つて軍帽を被り直すと、格納庫へと繋がるドアへと手をかける。夜なのに眩し

いその明かりの下に待ちわびたその人はいた。振り向く仕草、威風堂々たる佇まい、その全てがよく見知った一連の動作で流れていく。そう、この人こそ、勇の一番会いたかった人物との本当の再開である。

「ゆう、お疲れ様。扶桑に帰るんだな。よかったな。」

あまりにも心からの言葉じゃないと、この人を良く知る者じゃないと気づかない台詞。本音は「帰らないでほしい」のはずなのに。相変わらず頑固だなと微笑むと、そのことを察したのか、ムスツとした表情になり、勇に接近する。しかし、勇もそんなバルクホルンを安心させるべく話し始める。

「トウルーズ、俺、もう一度パイロットとして軍人になるよ。海軍の所属は変わらないから、坂本さんが推薦してくれたんだ。必ず、一流のパイロットになって戻ってくるよ。だから・・・」

勇も本当に言いたいことはこんなことではないのは重々承知だった。しかし、勇も頑固者には変わらない。似た者同士である。そんな変な雰囲気にも呆れたように「疾風」は



訪れる。

「ああもう！二人とも何してんのさ！早く言っちゃいなよ！『ありがとう』って！」

頭の後ろで腕を組んで、まるで早く寝させろと言わんばかりの傲慢さで二人を後押しする。それによつてさらに距離の縮まる二人。顔を真っ赤にして言いかけた言葉は同時だった。

「生きていてくれて、」

『ありがとう！』

「助けてくれて、」

その後、第501統合戦闘航空団のバルクホルンの寝室には扶桑から送られてきた桜と勇が写った写真が窓辺で風を受けてさんざめいていた。

完

## 新たな翼

魔法力を失い、501統合戦闘航空団を抜けた勇は遠路、扶桑に帰国していた。帰国してからはウィッチとしての役目は終わったが、欧州での功績から希望の兵科に移ることができた。これも坂本の推薦あつてのことだった。もちろん、ウィッチを辞めても空に居ることを辞めたくなかった勇は、迷わず航空科を選択。晴れて戦闘機搭乗員の道へと進むことができた。階級は501JFWの時とは一つ下の少尉が実階級となるが、欧州での戦果や実績を考慮して、特務中尉の階級となっていた。そして今、勇は零戦の操縦訓練として古参搭乗員と模擬戦を行っていた。

「ぐくぐく……！まだまだ！あつー！」

拭き流しを用いた模擬戦は、勇の吹き流しに銃弾が貫通し、勝敗は決した。地上に降りると勇はげんなりとして戦闘機を降りる。教官は勇が向かわずともやってくるのだ。そして、間もなく地を揺らすような声で怒声が飛ぶ。

「おい、坊！あの旋回の機動はなんだ？あれじゃあ犬でもお前の尻にかぶりつけるぞ！お前の欧州での経験は女の子との散歩か?!」

大声でのしと歩く姿はまるで熊のようで、その口の悪さは士官のなかでもトップクラスだろう。それでも勇は慣れた方で、ため息を我慢して反論する。

「お言葉ですが、犬は空を飛ばませんし、私の名前は勇です。いい加減覚えてください。それに私が弱いのではなく、教官が強いのです。あと、ウィッチに手を出したら厳罰ですよ。」

反論しつつも謙遜なしに褒めるその実力は扶桑といえども屈指の実力者である。その教官の名は「赤松貞明」。扶桑海軍変以前から戦争に参加している古参中の古参搭乗員であり、戦闘経験から導き出される戦闘技法には目を見張るものがあるが、軍紀違反に命令無視、女遊びに酒乱と手のつけようのない悪童である。また、戦闘だけでなく柔道、剣道、水泳なども有段者で、全部合わせて十五段などとも言われる無茶苦茶な人物が勇の教官であった。これも坂本の余計な一言によるものだった。

『赤松繋がりでも赤松貞明中尉に操縦を習うといい。私は会ったことはないがかなりの実力者だと聞く。しつかり鍛えてもらえ!』

この一言さえなければ、と勇は心から感じていた。赤松が所属するこの部隊に配属され、師として仰いだ一日目にされた命令がウイツチの誘拐であった。これは言葉の綾ではなく、本当に誘拐まがいの行為を迫られたのだった。

「おい、俺と苗字が一緒の……えー親戚じゃねえよな? まあいい。ウイツチだったんならその辺のウイツチ引っかけて連れてこい。連れてくるまで帰ってくんない。」

初日に無茶苦茶な命令を出されたが、扶桑では上官の命令は絶対である。絶対である以上やらねばならない。しかし、そんなことやったことのない勇は懇願の眼差しで赤松を見る。すると返ってきた言葉は見事に期待を裏切るものだった。

「あ、そうそう。うちは門限16時だから。それ過ぎたら営倉行きだかな。気いつけろ。」

少しでも期待した自分に怒りを覚えたが、命令はこなさなければならぬ。勇は実直に考えを巡らせる。勇のいる基地は海軍の基地であるが、有事の際に備えて陸軍とも関係構築しているため、基地は近い。ウィッチは勇が所属する基地には存在しないが、陸軍はウィッチの養成所としても機能しているためその一点に賭けるしかなかった。勇は即座に行動に移す。

外出許可証を受け取り、いざウィッチ探しに奔走する。しかし、勇の豪運は今日に限って冴えわたっていた。基地を出て3分でお目当てのウィッチを見つけたのだった。すぐさま声を掛ける。

「すみません！陸軍の方でしょうか？」

声を掛けると、そのウィッチは勇の方へ振り返る。そう、勇の豪運は冴えわたっているのだ。その人物とは、扶桑でなくとも轟く、黒江綾香陸軍少佐その人なのだから。

「お呼びだろうか？」

勇は思わぬ有名人を引き当てたことに驚きつつ、任務をこなすべく動き出す。

「失礼いたしました！私は近隣の基地に所属していません、赤松勇特務中尉です！黒江少佐とお見受けします！どうか私と来ていただけませんか？」

緊張しながらも必死な形相に黒江も勇についていくことを受諾する。基地まで連れて行くと守衛の者まで黒江に敬礼をして通してしまふ始末であつた。それだけ黒江という人物の知名度の高さが伺えた。そして、勇は配属初日にして伝説を作つた人物として覚えられることとなつた。そして、現在に至るのである。

「まだ初日のこと根に持つてんのかよ・・・あんな大物本当に連れてくるなんてとんだ災難だつたぜ。」

そい言いながらも、基地司令に見つかり怒られた際にも赤松は「まつたく、基地じゃなくて個室につれてこいよな」などと呟いた本物の大物である。とは言え、訓練は順調以上の速さで進み、速成教育の枠を超えた速度で勇のパイロットとしての腕は上達してゐた。ウィッチとしての経験もあり、操縦の基礎さえ学んでしまえばあとは水を得た魚のように独学で習得していったのだつた。それを見た当時の教官が、訓練の必要なしと

判断し、現在勇が所属する精銳の第53航空戦闘隊に配属が決まったのだ。ここには海軍の精銳が揃っており、勇も予科練の頃とは段違いの技量に日々精進の毎日を送っていた。すると、赤松とのやり取りを見た好青年たちが近づいて来る。

「松さん、新人にあの機動は無理ですよ。第一あんな機動私も初めて見ましたよ。」

毎回勇と赤松の口喧嘩を仲裁してくれるこの人物もまたこの基地の精銳の一人である、太田敏夫飛曹長である。この人物は扶桑海事変で名を挙げた坂本美緒や笹井醇子とも作戦で護衛を果たした強者だった。そして、猛者が続く。

「ありやあ、まっちゃんだけにしかできん芸当だからなあ。いくら欧州帰りといえど初見じゃ見切れんじやろうて。」

「たしかに、松さんあの日はさすがに基地司令にこつてりと絞られましたしねえ。あの黒江少佐を連れてくる期待の新人に八つ当たりするのも納得ですよ。」

老練な風貌をする人物は高塚寅一飛曹長であり、この人物は仁義に厚く、勇の過去を知って勇の面倒をよく見てくれる人物である。さらに、温和で優男風なこの人物は羽藤



一志三飛曹である。優しくいつも日向ぼっこをする性格と苗字の羽という漢字から「はとぼっぼ」から取って「ぼっぼ」と言われているが、これら二人も歴戦の勇士であることには違いはない。そんな猛者集団の中に放り込まれた勇も、数力月の時間を共にすることで次第にこの部隊の雰囲気慣れていった。赤松の粗暴な振る舞いに付き合わされる勇と、それを温かく見守るといふ光景はいつしかこの基地の名物となり、今では勇と赤松を赤松コンビと呼んで面白がっている。

「へんつー初見だろうと対応して切り返さなきゃ戦場じゃあ真つ先に死んじまうからな。そこらへん分かってんだろうな坊。」

未だに勇のことを認めてないのか、一向に名前と呼んでくれない赤松だが、これでも勇の経歴を聞きそれなりに配慮しているつもりだった。たしかに面白半分で命令をしているのは確かだが、決して無茶ではない、と思っている。そこに二人の思考に大きな隔たりを生んでいるのだが、赤松はそれに気づくことはなかった。そして、訓練が終わったものように基地司令である源田実大佐との会議が行われるため、勇たちは会議室に集合した。源田司令は厳かに説明を始める。

「諸君も知っているとと思うが、現在の欧州情勢はお世辞にも好転しているとは言い難い。各地で部隊やウィッチが活躍しているだろうが戦況を動かすほどの物はないと言っている。各国の選りすぐり集団を運用している彼の501統合戦闘航空団なるものも存在するが已然ガリアの奪還には至っていない。」

勇がああ501統合戦闘航空団を脱退していい時間が過ぎたが、未だ世界情勢は逼迫していた。現在、勇の代わりに扶桑から新たな人員が配属されたとの報告はあつたが、既存の航空戦力も蔑ろにはできない戦果を挙げた。しかし、源田司令も切れ者で扶桑でエリート部隊を結成することを考案し実現した功労者である。であるはずなのに……

「まったく儂のエリート部隊のアイディアを盗みおつてからに！儂ならもつとうまく部隊運用をして今頃ガリア開放の道筋を立てているぞ！」

この源田という人物もまた変人であり、毀誉褒貶の激しい人物とされている。ウィッチの部隊の司令も経験しており、欧州で有名になりつつある、管野直枝少尉もこの人物に尊敬の念を抱き「おやし」と呼ぶほどである。しかし、本質は自分の最強部隊で世間

を席捲したいという願望を持つ扶桑浪漫を持つおじさんである。そして、源田司令の話の佳境も過ぎたあたりで本題に入る。

「おほん！本題だが、我が部隊にもついに欧州派遣の大命が下った。」

欧州派遣の言葉にどよめく一同。勇もついにあの舞台に戻れることに胸が熱くなった。源田司令はその熱を払うように言葉を続ける。

「それに際し、我が部隊は53航空戦闘隊から遣欧艦隊第343空に改称となる。戦闘機搭乗員や整備員など含めて空母乗り組みとなる。また、空母には既存の戦闘部隊も存在し、その人員も我らの傘下に入る。」

ここまでを聞いてもついに本格的に扶桑の戦闘機隊としての晴れ舞台だけに胸の高まりが鐘を鳴らしていた。さらに新たな人員の拡充と、破格の待遇だった。勇はまた欧州に行けることに胸を躍らせ、欧州のある人物に思いを馳せる。

数日中に勇たちは準備を完了させ、空母に向かうため佐世保軍港に向かう。本来、沖繩に近い鹿屋基地に向かうはずであったが、空母が現在出港中であるため外洋での合流

になるためというのと、赤松が「鹿屋にはウィッチの女の子がいねえ！」と騒いだため変更となったのだ。佐世保に到着した一行はひとまず各々自由行動となる。これから長い間を艦の上で過ごすさなければならぬため、少しの休息をもらえたのだった。勇は一人もしくは太田らと行動を共にしようと思っていたのだが、期待は裏切られるものである。

「おい坊、一緒に歓楽街に出て可愛い姉ちゃん探そうぜ！」

既に酒臭い赤松に肩を組まれ、逃げ出そうにも逃げ出せない状況に陥っていることに遅まきながら気づいた勇は周りに助けを求め、しかし、これも無常に打ち砕かれる。他の隊員は赤松に付き合うのは御免だとはかりに距離を取っていた。伊達にエースの勘は危険を回避するべく冴えているのだ。これを諦めた勇は仕方なく、本当に仕方なく赤松の赴くままに付き従うこととなる。

「まずはそこらのウィッチにちよつかいかけようぜ！」

「絶対に嫌です。赤松隊長だけでやってくださいよ。」

「そう言うなつて。ここにはたしか昔ちよつかいかけたウィッチがいるはずなんだ！」

「そんなことしてたんですか・・・」

呆れる勇を気にもせず、ずかずかと敷地に侵入する赤松。心なしか嫌な予感がするが、こんなときにも剛腕な赤松につられるまま同行する。すると、そこでは学生と思しきウィッチがユニットを履いてなにやら訓練の最中のようなようだった。そこにずんずんと目を輝かせながら進んで行く赤松にもうなにも感じない勇は、目の前の白い士官服に身を包んだ女性に気づかずじつにいた。こちらが無遠慮に近づいてきたのに驚いたのか、少しばかり動揺しながらかつ怒気を孕んだ声で怒声が響く。

「こらー！そのお前らここでなにをしてるか！」

やはりというか普通に怒られた勇と赤松は悪びれる様子もなく歩みを止めない。勇は謝罪の言葉を考え、おそらく赤松は口説き文句を考えているのだろう。そんな二人に痺れを切らした士官が走って向かってくる。周りの学生も不審そうな目でこちらを見ているのが痛々しかった。

「こらっお前ら！普通怒鳴られたら止まるだろ！謝れ！詫びろ！土下座しろ・・・っ

てあああ!？」

途中から変な声を上げたことをそつと無視し、無茶苦茶怒っているその女性に謝罪すべく、ごく自然な所作で謝罪の姿勢を見せる勇はもはや歴戦の謝罪ニストといえるだろう。しかし、そんな状況にも動じない勇の上官たる赤松がその全てを灰燼に帰す。

「この度は大変申し訳なく・・・」

「おう、新藤！なんだかい胸してんな！」

その一言で場が火山の如く爆発した。新藤と呼ばれた女性は怒りが中で爆発したようにわなわなと震え、こんにもおバカな一言を上官に向かって言える上司を持った自分に恐怖した勇の心が爆発したのだった。しかし、そんな爆心地にいながらもどこ吹く風の涼しい顔をした赤松は火に油を注ぐ。

「いやー新藤、お前でもいいんだけどやっぱ若い子がいいっていうかさ、食べごろの子紹介してもらえないかねって思ってたわけさ！がはは！」

この人はどこまで命知らずなのだろうと心胆寒からしめる発言に、もはや倒れたくなる衝動に駆られるが、そつと目の前の女性を見ると冷徹な目で殺意すら湧いた眼差しで懐の刀に手をかけていた。

「殺す……」

「あああー！待ってください新藤・少佐！これは言葉の綾というものでして！」

「あ？言葉の綾ってどういう意味だ、坊。」

「隊長は黙ってて！」

助け舟を入れている自分に涙を禁じえない勇だったが、少しでも現状打破すべく言葉を尽くす。

「新藤少佐！こちらご存じかもしれませんが、赤松貞明中尉と、同じく赤松勇特務中尉であります！……へはウィッチの訓練の立ち合いに……」

「おい坊！立ち合いってお前、誰かと結婚すんのか?!ちよつとその娘紹介しろ！唾つけとくー！」

「お願いだから黙っててくださいいよおおおおお！」

こんな茶番に呆れたのか怒りが頂点を超えてむしろ悟りを開いたのか、新藤は眉間を抑えて大きくため息を吐いた。

「もういい。両赤松中尉は邪魔をしないよう見学するように。まったく……それと貴様、あとで私の部屋に來い。」

「お？いいことあるのか?!」

「ないっ!!」

ぴしやりと言い放ち校舎へ向かう新藤を横目に、勇は赤松と新藤の間柄を知りたくなつたが、君子危うきに近寄らずであると自分を戒めた。そして、勇たちは本当にウィッチの訓練を見学することになり、予定が崩れたわけなのだが、崩した当の本人はだるそうに酒盛りをしていた。

「ああー退屈だ。見てるだけなんてこんなにつまらないことはない。」

「それもこれも隊長が蒔いた種なんですからしつかり責任取ってください。」



女の子、殊ウィッチにはなぜか美人が多い。佐世保にはリバウの英雄と謳われる雁淵孝美少尉がいたことでも有名である。現在は502統合戦闘航空団に配属が打診されているなど、その美しさに拍車をかける実力者である。それをこんなにも異性目当てで押し掛ける男性の魔の手から学生ウィッチをどうして放っておけようか、否、放つておけない。勇は赤松が誘うものなら本気で止めるつもりだった。しかし、赤松の口から出るものは毒気が抜かれるものだった。

「かあく最近じゃあ、強いウィッチが軒並み前線に駆り出されつちまったからここに居るのはひよっこばっかだなあ・・・戦争も終わればこの子らも普通の暮らしができるのによ。」

ぼつりと吐き出されたその言葉は、普段では想像もつかないような赤松の心根だった。そして、ゆつくりと立ち上がると徐にウィッチに近づき始めた。今度こそ手を出すのではと冷や冷やしたがそれも杞憂だった。赤松は今訓練していたウィッチに話しかけると何やらアドバイスをしているようだった。手のジエスチャーが機動に関するものだったことからそれが伺える。案外新人思いなのかもしれないと思ったが、勇は自分のことを振り返るとそこで考えるのを止めた。

「新人のウィッチに手は出さないで下さいよ。」

「俺はこんなちっこい娘には興味ねえやい。でも胸はいいサイズしてんだわ。」

魔の手から救うべくそのウィッチを見ると、幼さが残る学生で、栗色の髪と小動物を彷彿とさせる姿に良心の呵責が彼女を逃がすことに決める。

「君、早く訓練に戻りなさい。」

「おい嬢ちゃん！名前だけでも聞かせろ！」

「隊長?!」

名前だけでもと縋る醜い赤松に勇は呆れるも、純粹無垢なウィッチは丁寧の名乗ってしまふ。

「私、雁淵ひかりですっ！アドバイスありがとうございました！」

どこかで聞いたことのある苗字だと思っ前に、ペこりとお辞儀してまた訓練に戻る少

女に鼻の下を伸ばす上官に喝を入れる。

「あんな純粹そうなウィッチに唾つけないでください。」

「短時間で名前教えてくれるウィッチに悪いウィッチはいねーよ。もしかしたらこの俺の男らしさに惚れたのかもしれないねーじゃねーか。」

呆れて掛ける言葉も見つからず慄いてしまった勇を陰に、赤松は颯爽と校舎の方へ飛んで行ってしまったのに勇は気がつかなかった。

赤松は校舎を散歩するように歩いていると、それをまたもや発見した新藤に校長室に連行されていた。二度と見るこゝろのないと思っていた赤松の顔には期待の眼差しで輝いている。赤松の目の前に立ち尽くし、もはや怒りも通り越して真顔になった新藤は昔を思い出す。まだウィッチとしての戦闘経験に恵まれなかった時代、洋上航法の訓練を実施したところ、生徒のウィッチがコースを誤り、戦闘機隊の厄介になったことがあった。そのとき生徒を導いてくれたのが赤松であった。赤松はしょんぼりする生徒を前に階級が上の新藤に向かってこう言い放った。

「どこのぼんくら教官が教えたのか知らねーが、生徒の不始末は上官の務めだ！責任

取ってもらおうか！」

この言葉にはしよんぼりしていた生徒も驚き、新藤も面食らったのだが、堂々とした立ち振る舞いに、そうするのが当たり前であるように思えてしまい、おずおずと出てしまったのだった。すると自分より階級の上である新藤を前にしてもその振る舞いを直さず、むしろその体格を押し出し、胸を張った姿に新藤は圧倒されてしまった。いくら上官といえど心は少女であるため自然と萎縮してしまふ新藤をじろりと睨み、手を挙げると握りこぶしを作り振り上げた。上官に対する暴行を前に誰も動けない状況だったが、その後の信じられない行為に全員が驚愕することとなる。

ムニユ

「ん?!」

「やっぱちつちええな！これだからひよっこウィッチの上官は肝っ玉もちいせえんだ。」  
「なっ!?!」

信じられないことにいきなり新藤の胸を鷲掴みにしときながら、暴言を吐き捨てる赤松の行動を瞬時に抑える者がだれもいなかった。確かに新藤もまだ幼く、大きいとは言

えない胸を貶された上に暴言を吐かれたとあつてはいろいろなプライドが傷ついた。激怒して魔法力を込めて殴りかかるが赤松はこれを回避。さらに追撃をかけるが赤松の体術の前にはただの力業はその本領を發揮することはなかった。

「貴様つ！そこに直れ！そして謝罪しろ！叩き切つてやる!!」

「なんだなんだ!?!あ、すまねえ！女子は玉ねえな！」

「そこじゃないいいいい!!」

火にもはや火薬をぶち込む赤松と、それに激怒する新藤を抑えるためによく動き始める他の者たちで一挙にその場は騒然となった。以降、赤松には厳罰が下つたが気に食わなかつたのか、辞表を提出し始める赤松に、上層部は頭を抱えた。赤松は確かに問題を起こす人物だが、それ以上に戦闘機搭乗員として優秀だった、いや優秀過ぎた。そのためなんとか赤松を説得し、新藤の所属する部隊と距離を空けた基地に配置したという過去があつた。

その過去をふと思ひ出しただけでも新藤は湧き上がるものがあつたが、そこはぐつと抑えつつ赤松を睨む。やはりその恵まれた体格と傲岸不遜な顔には見上げるしかできないことに悔しさがあつた。

一方の赤松は、まじまじと見てくるウィツチの新藤が、自分に気があるのではないかと思ひ始めていた。部屋に連れ込まれたことといい、近距離と言える距離で一心に自分の顔を覗き込む少女が、もしかしたら接吻を期待しているのではないかという妄想に取りつかれる。赤松はこんな時に鈍感な男ではないため、新藤に接吻をしようと顔を近づける。

「はっ?」

何が起きてるか理解できない新藤だが、確実に予想外のことが起こっていると瞬時に判断し、距離を取るべく赤松を押しつけようとす。しかし、赤松の手が新藤の肩を押えており、一緒になって床へと転がってしまう。その光景はいかにも新藤が赤松を押し倒しているようでさらに、赤松の手がまたもや昔のように新藤の胸を掴んでいた。

「き、貴様またも私を愚弄するか?!」

「む? 昔より大きくなつたか? こりやあめでてえ! 今夜は赤飯だな!」

「殺す! 絶対ころs・・・」

新藤と赤松の間にアクシデントが発生している真っ只中、勇は行方不明の上官を探すべく校舎を探索中であつたが、突如校長室で大きな物音が聞こえ、急いで確認に向かう。そこには勇の上官である赤松の上に馬乗りになつて胸倉を掴み、少し赤松の胸の部分がはだけた姿になつたあられもない情事の光景を目撃してしまった。勇は今まで培つた戦場での反射神経を全力で生かして瞬発的に目を逸らし、扉を閉める努力をする。

「失礼しました。ごゆっくり。」

「あつーこれはつーちがつー！」

新藤の弁解も空しく、勇は扉を閉める。勇は戦場慣れした立派な兵士であるため、戦場から離れた新藤には太刀打ちできないスピードが備わつていたことが不運だと言えた。閉まつた扉に伸びた手はゆっくりと赤松の胸に降り、その真紅に染まつた顔面は恥ずかしさと憤怒の色に染まる。しかし、赤松は動じないどころか催促する。

「おいどうした？まだ始まらないのか？ちと邪魔は入つたがあとで坊には文句言つとくから……つてなんで殴ろうとして……おいっ止める!？」

この日、赤松は現場に居合わせた者たちに救助されるような形で新藤と離され、即刻自由時間を取り消され基地に帰還するように命令が出されてしまった。しかしここまでお咎めがないのは、新藤自身が自分の恥態を曝すのを拒み、迷惑行為として追いつたためである。勇にはとんだ迷惑だったが、上官である赤松はこう呟いたという。

「坊があそこで入らなければ・・・」

そんなこんなで佐世保を出発した勇たちは、すでに外洋で待機している新造空母「飛龍」に着艦することとなる。空母への着艦自体は経験があつたため赤松の小言も少なかった。しかし、空母の甲板では幾人もの見物人が待機しており、それなりの緊張感をもつての着艦だった。着艦は上手くいき、着艦フックに引つ掛かり、甲板員が後を引き継ぐ。そのとき勇は鋭い視線を感じ、視線を甲板に巡らせる。そこには腕を組み、しっかり勇を見据える二人の存在があつた。勇は視線が合つた二人を不思議に思いつつ端に下がる。赤松もその人物たちに気づいたのか、どことなく気構えた様子だったと感じた。あの豪放磊落を体現する赤松が気構えるほどの人物たちに勇は緊張を覚え、これからの欧州派遣に赴くこととなるのである。



## 新たな翼 第二話

勇たちは空母「飛龍」に到着し、さつそく新たな隊員たちとの交流に混ざることとなった。新たな隊員たちは既に空母乗り組みだった者たちで、実戦経験を積んだ実力者揃いである。中でも先ほど勇に鋭い視線を向けた二人は中心人物である。一人はこの空母「飛龍」の戦闘機隊長を務め、我慢強い性格から「仁将」とも称される「林義重大尉」。そして、空戦において断固たる攻撃精神とその勇猛果敢さから「空戦の神様」と呼ばれる「杉田庄一中尉」である。この二人が主だった人物だが、この部隊の練度も一級品の強者ぞろいだった。なんと、元は空母「赤城」乗り組みだった戦闘機隊メンバーで構成されており、あの宮藤芳佳軍曹の初出撃時に坂本美緒とともに出撃し、そのネウロイの攻撃から生き残り、選り抜かれた最精鋭の搭乗員だ。そんな二人のうち林は椅子に深く座り勇たちを眺めており、杉田は勇と赤松のを見かけるとゆつくり近づいてきた。すると赤松が勇の前に歩み出て、杉田と対面する。勇は自分を庇うように出てくれた上官を初めて尊敬したかもしれない。太田や羽藤、高塚らが見守る中、緊張を破ったのは赤松だった。

「よう、てめえ撃墜数は？」

赤松は自己紹介も握手もなくネウロイの撃墜数を聞き出した。男なら言葉じゃなく撃墜数だと言わんばかりの粗暴さに杉田は口角を上げて答える。

「少なくて80、未確認合わせて120。」

「ほお・・・俺は300だ。」

胸の張り合いに赤松のとんでもない誇張された数を聞いて、杉田は怒るでもなく手を差し出した。それに赤松も応える。

「嘘つけ。戦闘機で俺より落としたやつを聞いたことないぞ。」

「ネウロイに聞いてみる。俺の名前を聞くだけで逃げてくぞ。」

がっちり握手しながら与太話を繰り広げていると、林が満を持するという形で登場する。赤松と杉田の前に立つと、突然二人の頭を殴りつけた。勇はもちろん周りも驚いたが、それを気にするでもなく林はにっこりと笑顔を浮かべると、大きな声で宣言する。

「俺が戦闘機隊の隊長、林だ。今日からお前たちは仲間だ。その杉田と赤松両中尉を中隊長として各員励め。扶桑男児は口ではなく戦果で示せ。その実力があると俺は確信している。」

そう言うときまた元の椅子にどっかりと座ってしまった。勇も含め全員が親分がだれか一発で分かる形に緊張が解かれ、交流は恙なく行われた。勇も新たな仲間たちとあいさつを交わしたが、赤松に突然首根っこを掴まれどこかへ連れて行かれる。

「隊長！猫みたいに摘ままないでください！自分で歩けます！」

「これから新しい隊長に挨拶するんだ。もう俺のこと隊長って言うなよ。」

「え……」

突然の赤松の真剣な言葉に、勇は自分の隊長である赤松を見る。そこには岩のように固く逞しい、勇が師と仰いだ勇士の顔立ちがあるだけだった。勇は赤松に連れられるままに部屋に入るとそこには、先ほどの杉田と林、源田司令。そしてこれまた大柄な人物が待っていた。その人物は明らかに階級が違う、普通なら勇が関わることのない雲の上

の人物が勇を待つていたのだ。勇は急いでその人物に敬礼をする。

「赤松勇特務中尉、ただいま着任の挨拶に参りました！」

「うむ、楽にしまえ。君のことはよく聞いているよ、勇中尉。赤城艦長の杉田くんからよく頼まれている。安心しまえ。」

急な展開と赤城の艦長から自分の名前が出たことに驚きを隠せなかった。杉田艦長とは面識がなかったはずであったからである。勇が不思議そうな顔をしているのを読み取ったその人物は面白そうに顎に手をかけ、事情を話してくれる。

「名乗るのが遅れたが、私がこの飛龍艦長の山口多聞だ。赤城艦長の杉田くんは知り合いでね。坂本少佐からの伝言で言付かったまでだ。」

勇は坂本が自分を気にかけてくれる嬉しさと同時に、この飛龍艦長の名前を聞いた衝撃の方が大きかった。山口多門提督、ウィッチに多大な理解を示す皇国海軍少将で、その豪傑っぷりはまさに將軍の器が似合う傑物である。そんな人物が勇に用があるとはどういうことなのか、また赤松がここへ連れてきた本当の理由が知りたくなった。

「発言をよろしいでしょうか。」

「許可する。」

「私のような若輩がなぜこの場に呼ばれたのでしょうか？」

この質問を予期していたようににつきりと微笑む山口は、源田に促す。すると、世界地図を広げ始める源田はせかせかと準備し、終わると山口に準備完了の頷きで返した。山口はそれを受け取り、説明に入る。

「現在、世界の主な戦線はブリタニア戦線及びガリアに巣くうネウロイの巣。そしてカールスラントを始めとする多数のネウロイ集団、東欧及び北欧方面、そしてアフリカだ。我々の欧州派遣の目的は各地の戦力拡大である。」

一つ一つ指揮棒で差された場所は奪還すべき人類の故郷であった。しかし、各地の戦力拡大とは一体どういうことなのか。勇の更なる疑問を山口が答えていく。

「現状、投入すべき戦力の地区はガリア方面、北欧方面、アフリカ方面の三か所だ。そこ

に我々戦闘機隊を各地に分散配置する。よって三部隊の中隊長は林大尉、赤松中尉、杉田中尉の三名とその部隊が赴くことになる。」

「なるほど、この飛龍に戦闘機しか配備されていない理由が分かりました。」

実は、この飛龍には搭載機数が45機あり、その全てが戦闘機「零戦」で構成されていた。山口が言う構想を実現するには制空戦闘を主に担当するため、艦爆などの機体の一切を乗せず、戦闘機の集中運用を目指すということだった。しかし、勇の質問に山口はまだ答えていない。勇は再度質問を繰り返す。

「繰り返しになりますが、なぜ私がこの話を聞くことになったのでしょうか。」

この質問で山口は真剣な表情となり、また赤松はどこか寂寥感を醸し出しているように勇は感じた。そして、この質問には源田が答える。

「赤松特務中尉は、ウィッチの経験則からいろいろと戦闘には慣れているだろう。その判断から、貴官には林大尉の副官になってもらうことにした。戦闘機隊長の副官として、存分にその実力を発揮できるのは赤松勇中尉、君しかいないと赤松貞明中尉からの

進言で決定した。」

この言葉に勇は衝撃を受けた。まさか、自分の上官であり、師と仰いだあの赤松貞明が自分を手放すなど考えもしなかった。良くも悪くもいろんなことを教えてもらった日々は、本当のところ勇も悪い気はしていなかった。それだけに、赤松自ら他の隊長に自分を寄こすなど青天の霹靂だった。勇は赤松の方を向くと、赤松はバツの悪そうに手を振って弁明する。

「坊ならどこに行っても上手くやれる。俺の弟子だからな……」

そういうことではないのだと、本音は声に出したが、その本音はついに口から出ることはなかった。山口は勇の肩に手をかけ、期待する。

「欧州での活躍は聞いている。撃墜数130機以上の我が隊きつての新人を、一番活躍できる場に置くことが最善であると判断した。是非とも君には期待しているのだ。ウィッチと戦闘機パイロットとしてもエースになつてくれることを期待している。」

「はい。」

返事に力が入らない。期待されているのにこんなにも虚無の重圧を、期待という名の重圧をこんなに嬉しくないと感じたのは初めてだった。横目に入る赤松は既にタバコを蒸かして天井を見ていた。源田も山口も喜ばしいことのように言うが、勇はなにか欠けたような気持でその日を過ごしたのだった。

数日後、順調に東南アジアのマラッカ海峡を抜け、スリランカ島で補給を終え、編隊飛行や訓練などの準備を積んだ343空は、オストマン国入り口の紅海に差し掛かろうとしていた。それまでの日々は山口多門と源田航空参謀の下、過酷ともいえる訓練が続いていた。いわゆる月月火水木金金である。この訓練では一流の搭乗員といえども疲弊し、山口のことを「人殺し多門丸」などと呼ぶ者もいたほどだった。勇も必死に訓練をこなし、時に新たな隊長となった林の副官として仕えた。しかし、勇の心は何か物足りず、何かを求める毎日だった。また、それに気づかない元53航空戦闘隊の仲間たちではなかった。

「せっかくの栄転だっていうのにお、なんだかんだ言つて松さんとの赤松コンビが決まってたのお。」

「寅さん、それを言うなら松さんも最近妙に張り合いがなくなっちゃって元気が空回り



してるんですよ。なあ、ぼっぼ？」

「ああ、今日の訓練でいつもの勇中尉の位置に誰もいなくて切れ散らかしてたよ。まあ、俺が悪いんだけどさ……」

実は勇だけではなく、赤松の方にも弊害が出ていた。勇はウィッチの経験を生かした、長機のカバー能力が断トツに優れていた。単機での格闘戦闘では赤松のようなエースパイロットに技量で負けていたものの、それは機体の操作に注いだ時間が違うからであって、格闘戦で惜しいところまで行く勇のセンスは新人と違うには詐称を疑われるほどのものだった。501での経験と実績は伊達ではないのだ。そして、その勇のいる安心感は赤松をしても劇薬であった。なにも言わなくても意図を汲んでくれ、最適な位置・タイミングでの補助・射撃はやりやすさが段違いだった。一方、勇が仕える林隊での勇はと言うと、上手く林との連携に欠いていた。

「勇、さきほどの位置での補助は不要だ。むしろあのタイミングでの介添えは3番機の邪魔になる。」

「はい……」

「そんなことでは俺の副官は務まらんぞ。なにか言いたいことがあれば言っておけ。」

「……いえ、今度は上手くやって見せます。」  
「そうか。」

勇はこれまで上手く連携はできてきたことに誇りを感じていた。どんな無茶な機動だろうとついていける自信はあるし、徹底して2番機としての役割を全うすることにお墨付きを得ていた自分が、連携で指摘されたことに困惑していた。林は技量、指揮ともに秀でた指揮官である。それなのに、自分の思うタイミングや位置が上手くかみ合わないのだ。まるで勇の補助がお節介のような動きに映ってしまうのだ。どうしたものと歩いていると、正面から訓練を終えた杉田が現れる。

「おう、赤松のとこの！どうしたそんな暗い顔して？」

「杉田中尉……それが」

勇は林の中隊での自分の在り方について話していることにした。杉田は勇からすれば話しやすい人物で、林は今の直属の上官であるから話しづらく、赤松には現状を話しづらいため杉田には自然と話す気になれたのだ。勇の悩みを聞いた杉田は簡単に助言をする。

「お前は考えすぎなんだよ。気楽に一番機について行きやあいんだ。一番機が撃つたらお前も撃つ。それで協同撃墜になる。」

「そういうものでしょうか。私は副官として・・・」

「ああじれつたい！じゃあ、今から俺についてこい！」

そういうと杉田は勇を連れて戦闘機に乗り込んだ。実際に杉田が勇を見てくれることになったのだ。実は杉田は林からも相談を受けていた。林からは勇という優秀な素材をどう扱うかに困っていたのだった。その上、勇は今までの波乱万丈な生活で、一般人と少しかけ離れた常識を有していた。ある時、林は勇が持ってきた飲み物を飲もうとしたら中身が酒だったことがあった。その時は「勤務中に飲酒など何を考えている」と怒ったら、勇は「酒は水だと教えられたのですが」と答えたという。赤松の影響だろうが、常人の考えから逸脱したことに勇自身気づいていないことにもすれ違いが起きていた。そして、杉田は今しがた訓練を終えた吹き流しを操縦するパイロットにもう一度訓練を頼み、勇を観察することにした。

「お前がどんな風に飛びたいかは知らんが、とりあえず俺についてこい。決して俺の背

後から消えるな。そして、俺が撃つまで決して打つな。」

それだけ言うときっさきと空に上ってしまった。勇も慌ててついていき、杉田の指揮下に入る。吹き流しを流す訓練機が見え、杉田が攻撃の合図を出す。勇は言いつけをしつかり守り、背後にぴったりとつく。急降下、急上昇などの姿勢から攻撃を繰り返し、勇は杉田の機動に慣れていった。すると、杉田から連絡が入る。

「次はお前が思うタイミングで攻撃しろ。」

「わかりました。」

杉田の言われた通り、今度は勇の思う最適なタイミングで攻撃に入る。501でも経験した射撃体勢やタイミング位置取りを考え、射撃する。すると、杉田の撃つタイミングと同時に、吹き流しはあつという間に穴だらけになった。勇はこれまで上手くいかなかった連携がこうも上手くいったことで、久々の高揚感を覚えた。杉田も素直に称賛してくれる。

「よくできた。あれができるのはうちでもそういないだろう。」

「ありがとうございます。でも、どうして上手くいったのでしょうか？」  
「それはな、さつきも言ったが考えすぎなんだよ。」

考えすぎと言われるが、勇は林の時も同じような行動を取っていたはずだと不思議に思う。しかし、杉田は確信したように解説する。

「俺はお前に、ついてこいと言った。その時のお前の行動は実に実直だった。そして、お前の思うタイミングでの攻撃も完璧だった。」

「ではなぜ？」

「それは・・・。」

その答えを杉田が言う前に緊急電が二人に入る。

『緊急！現在所属不明機が我が艦隊に向けて飛行中！おそらくネウロイと思われる！現在、急行できる者が貴官らだけだ。二人に偵察を頼みたい！できるか？』

突然の敵襲撃の報に緊張が走る。勇は杉田の反応を待つと、杉田はすぐさま反応す

る。

「できるできないかじゃねえ！やるんだ！行くぞ勇！」

「はいっ！」

この即断的な反応と敵への攻撃精神こそが杉田の「空戦の神様」と呼ばれる由来の要因である。勇も勢いよく返事をする。速度を上げて、報告のあった方角へと翼を向ける。

雲を抜けて、紅海の入り口付近で敵を探す二人だったが、先に敵を発見したのは勇だった。

「2時方向敵機です！数はおよそ・・・」

「3機だな！よく見つけた！報告次第攻撃するぞ！」

「ですが、それでは数の上で不利になります！ここは一旦増援を待つて・・・」

そこまで言わずに杉田は敵に向かって突っ込んで行ってしまった。慌てて指揮官である杉田に追従する。ネウロイの上方から一気に逆落としての形で攻撃を仕掛ける。勇

は杉田との先ほどの訓練を思い出し攻撃する。最初は杉田の後にしつかりとついて射撃機会を伺う。杉田が攻撃を仕掛けたのを確認し、勇も合わせて発砲する。すると、まず一機を撃墜する。奇襲に気づいたネウロイはすぐに散会し、逃げ惑う。杉田は逃げ遅れた方のネウロイに照準を合わせると下方からぐんぐん近づき、ネウロイに手が届くような距離で射撃、そして撃墜する。その背後では、回り込んだネウロイが杉田の背後につくように旋回していた。しかし、ネウロイの眼前に突如もう一機の零戦が入り込みタイミングをずらされる。ネウロイが慌てて射撃した頃には、減速ループによりネウロイの後方に一気に回り込んでいた。ネウロイもそれに気づいて回避しようとした時点で勝敗が決していた。背後に勇、そしてネウロイの直上には縦旋回を終えて射撃体勢に入った杉田がいたのだ。これで絶対に回避不能な十字砲火が完成したのである。

「勇！今だっ!!」

「はいっ!」

二人の攻撃は見事に嵌り、ネウロイは光の屑になって消失した。勇と杉田はネウロイの襲撃をたつた二人で撃退してのけたのだった。

「勇！よくやった！よく俺についてくれたな！」

「はいっ！ありがとうございます！杉田中尉のご助言分かった気がします！」

飛ぶ前とは打って変わって勇の表情は明るいものだった。勇は杉田が先ほど言いかけた助言がこの戦闘で何だったのかわかった気がした。すると、勇たちに林から通信が入る。

「こちら林中隊長、林だ。そちらの状況は？」

「こちら杉田。3機の敵の来襲を確認。それとその3機の撃墜を報告する。」

その報告をするが、勇はこれまでの経験から意見具申する。それを林は冷静に考察する。

「こちら赤松勇特務中尉から意見具申、今回の敵は偵察型と思われます。おそらく本隊が控えているものと考えます。」

「意見具申受諾。これより戦闘機全機は警戒行動に移行。敵本隊を迎撃する。杉田中隊長はそのまま第二中隊を指揮、勇中尉は俺の下に帰ってこい。」



勇と杉田は分かれ、林の下へ向かう。勇はもう自分の行動に自信を持ち直した。林は合流すると、勇の自信に満ち溢れた顔を見て確信する。

「ようやく副官の仕事は果たしてくれそうだな?」

「遅くなって申し訳ありません。しかし、もう心配ありません。お任せください!」

林は遅くなった副官に満足し、敵の搜索を行う。全45機、3個中隊からなる編隊は林、赤松、杉田を筆頭に部隊を率い、敵を搜索する。すると、一番先に敵発見の報を入れたのは赤松の中隊だった。

「こちら赤松中隊、敵本隊を発見。小型8中型2の計10機で飛龍北東約30キロ地点を高度4000で飛行中。まだこちらには気づいていない。」

「林、了解。攻撃態勢が完了次第攻勢に移る。第一中隊は先陣、第二中隊は制空担当、第三中隊は遊撃隊として敵の行動を制限せよ。」

「赤松了解!」

「杉田了解!」

「では、攻撃開始！」

各隊の役割を割り振り、各々の任務を果たすべく一斉に攻勢を開始する。勇は林の副官としてしっかりとついていく。ネウロイの上空で一斉に第一中隊全15機は攻撃を仕掛ける。狙いは中型だが、周りの小型も攻撃に加える。そのうち勇は林の狙いに合わせて中型に狙いを定める。

「攻撃、攻撃、攻撃!!」

中型と言えどその大きさは馬鹿にできず、例え照準がいつぱいになろうともしっかりと接近しなければ致命傷たり得ない。そのことを理解している勇はしっかりと20mmの機関砲を至近距離で連射する。ドドドという音を立ててネウロイの装甲を削る。一航下して戦果を確認すると小型2機を撃墜したが中型は高度を落とすだけで、撃墜には至らなかった。しかし、その攻撃により小型ネウロイは勇たちに追撃をかける。勇たちはしっかりと体勢を整えるべく行動に移るが、そこに杉田率いる第二中隊がしっかりと小型を狙っていく。小型は第二波の攻撃で更にその総数を減らし、中型ネウロイが孤立する。その隙を逃さず勇たちは再度攻撃を仕掛けるが、さすがのネウロイもやられる

だけではない。きちんとビームを放ち反撃の姿勢を見せる。第一中隊はビーム攻撃を掻い潜るべく小隊ごとに下方から攻撃する。しかし、攻撃が散発的になってしまったため、その効果はいま一つだった。

「ちっ！一筋縄ではいかぬか！」

「大丈夫です！きちんと美味しいところを持っていくことに長けた人が来ますから！」

そう言って上昇を続ける勇たちの背後を見ると、中型を勇たちが釣り上げたことにより胴体下部が露わとなった無防備なネウロイに悪魔たちが群がる。

「俺、参上!!」

しっかりと見せ場をもらって働かない勇の元上官ではないのだ。いつの間にか装備してきた零戦三号爆弾（クラスター爆弾の一種）を中隊全機が発射する。ど派手な発射音とその航跡に白い雲をたなびかせ、轟音とともにネウロイの装甲を食い破っていく。一機のネウロイが耐えられずに撃破され、残された一機を平らげるべく攻撃態勢に移っていた勇は、自分を放り出した上官に見せつけるべく果敢に攻撃する。

「見てますか！元隊長！後悔してももう遅いですからね！」

ネウロイの正面から一薙ぎに一閃し、コアを貫くとネウロイを全機撃墜した。これに後に噂されることもなる、戦闘機隊による10対0の完全勝利伝説である。

「やるじゃねーか、勇。」

赤松の初めて勇を名前で呼んだその言葉は、自分のコックピット内だけでしか聞こえないように呟いた。

勇たちが母艦に戻ると万歳三唱が巻き起こった。今まで苦しめられてきた敵を殲滅できた喜びは大きかった。そして、勇は急いで林の下へ向かう。林も来るのを待っていたのか、勇を見つけると微笑んで迎える。林の目の前まで来たところでしたっかりと敬礼する。

「隊長！私は分かった気がします。」

「聞こう。」

「きつと・・・隊長が馬鹿正直なのだと思えます！」  
「へっ!？」

勇の澄ました顔から発される爆弾発言に林と云えど素っ頓狂な声を上げざるを得なかった。しかし、勇は自信をもって告げる。

「でも隊長の戦い方は嫌いではありません。編隊飛行のお手本のようで練度の高さが一目でわかる、規律ある隊にいられて私は本望です！」

「そ、そうか・・・」

満足したような顔をする少年に、隊長である林は空返事をするしかできなかつた。これからいろいろと教えなければならぬことがあると前途多難な少年だと痛感したのだ。また、それを聞いた太田、高塚、羽藤らはというと、頭を抱えつつ笑い合うのだった。

「勇中尉・・・言っちゃったよ・・・」

「ありゃあ、松さんに影響されちゃったようじゃのお・・・」

「ははは、ここまでのいらないとこを継承しなくても・・・あっ!!」

覗いていた羽藤が後ろの存在に気づいたときにはもう遅かった。腕を組み、眉間に皺を寄せ阿修羅のような顔をする隊長がそこにいた。

「おい、ぽっぽ? いらないとこだと? そりやあどこだ、言ってみろ。」

「あ、いや、それは・・・」

「松さん、落ち着いて。俺たちの隊だけ撃墜数少なかったからって・・・」

「おい太田!! そりや禁句じゃ!」

「・・・ほほう? 坊がいなくなつてから少し腕が鈍つたようだな? ああん?」

そう含みのある冷酷な笑みに背筋を凍らせる一同は、冷や汗を流すと諦めて俯いた。その後、勇の耳にも聞こえる悲鳴が轟いたが、勇は林に飲み物としてお酒を出しているところだった。もちろん、林はまたもや飲み物が酒であることを予期できるはずもなく盛大に嘖き出すことになる。赤松の影響を色濃く受け継ぎ、それを当たり前だと思いつつ純粋な少年の苦難と、それに付き合う上官の出来上がりである。

こうして、欧州派遣艦隊の新編扶桑海軍343航空隊は紅海近海での完全勝利を収め

て初陣を飾った。それぞれの中隊の隊長の名前が林、赤松、杉田と木に由来することから「杉松林航空隊」と呼ばれ畏敬の対象となるのはまだ先の話である。この先、勇たちはアフリカの喜望峰を越えて欧州に向かうこととなる。しかし、その先に待ち受けるのは人類が戦う魔境である。これに挑む勇の心境は、ウィツチの時とはまた違う決死の覚悟であるの言うまでもなかった。

## 新たな翼 第三話

紅海沖空戦に勝利した勇たち343空は喜望峰を抜け、ジブラルタル海峡付近に差し掛かろうとしていた。ここからの海域はネウロイが頻繁に攻撃してくる前線海域となる。実はここで杉田庄一中尉率いる部隊が北アフリカ戦線に向かうことになっていた。紅海沖空戦を経てついに扶桑海軍343空の一部隊が戦線に投入されることに勇たち343空にも熱が入る。特に杉田隊は長駆3000kmを飛行してトブルクに向かう。現在の西アフリカのサンタクルス島海域から出発するため、今日が杉田との最後の航海となるのだった。

「ついにためえも行くんだな。気張れよ、杉田。」

「おう、赤松も達者でな。」

赤松と杉田は親友のような間柄になっており、朝陽を浴びて甲板で寝っ転がっていた。そこに朝練として一人の少年が現れる。



「あれ、杉田中尉、それに松さん。こんなところでなにをしてるんです?」

勇は赤松を隊長呼びを卒業していた。寝ころび勇の顔も見ずに二人はああ、と空返事する。二人は居住まいを正し、勇も座らせると杉田がどこからか取り出した酒を出し、ぐいつと飲む。次に赤松がそれを引き継ぎ、勇に手渡す。どういふことかよく理解できない勇だったが、酒を目の前に出されたらやることはひとつだ。

「ご相伴にあずかります。」

二人と同じように一氣に煽ると一升瓶は半分ほどなくなっていた。三人は朝陽を前にしんみりとして波風を聞いていた。それが何かの前触れだとも言うかのように波は穏やかだった。波だけは・・・

「貴様ら・・・また勇中尉に酒を飲ましたな?」

「あ・・・」

「忘れてたぜ・・・」

赤松達の背後には怒りに揺れる林が仁王立ちしていた。林は度々勇に出される休憩用の水と称する酒に手を焼いていた。さらに、勇に酒を飲ましていたのが赤松であったことに勘づき勇への禁酒令を出していた。勇自体は酒は法律的に禁止されているのは承知だったが、軍にいる以上、上官の命令には逆らえないため渋々付き合っていたが、勇自体酔うことはなかった。それはさておき、林の見ていないところで勝手に飲酒を進めた元上官と中隊長はというと。

「いや、これは餞別だから！」

「これは酒じゃなくて、水に酒を入れただけだ！」

「喧しいッー！」

醜く反論していたが、林の一喝で二人の威勢は沈黙した。その後、二人を鉄拳制裁する音が響き、勇は知らん顔した。

そしてついに、杉田率いる第三中隊がアフリカのトブルク基地に向けて出立する時刻となった。そこには未だ引かないたんこぶをこさえた杉田が凛々しく源田司令に挨拶を行い、恙なく終わった。第三中隊は現地の部隊に転換され、指揮系統も現地部隊任せと丸投げ状態だったが、貴重な航空戦力であるのに変わりはなく、補給物資と戦力補充

に現地の指揮官は咽び泣いたという。(実は喜んだのではなく、海軍戦力の介入に手間が増えてやけくそになったという話もある。)勇も杉田が行くというその時となり、一抹の寂しさと頑張つてほしいという戦友の抱く気持ちとなった。

「杉田中尉、短い間でしたが……」

話しかけようとしたところでその言葉を杉田に遮られる。杉田の大きくごつい手が勇の頭を乱暴に揺さぶった。

「お前こそいっばい敵をぶっ飛ばしてこい！俺はアフリカを救つてくる。」

「(武運を……)」

杉田の大言壮語には力があり、胸に響く優しさに勇と当初悩んでいた時期に助けてもらつた時や酒を飲まされた時など、ささやかな時間だが戦場で過ごす時間より何倍も優しい時間を過ごせたことに感謝した。杉田はそれだけ言うとは颯爽と戦闘機に乗り込み、部隊を引き連れてあつという間にアフリカの大地に向けて見えなくなつてしまった。勇たちはその姿が見えなくなるまで見送っていた。出会いから別れまで風のようで、勇

は杉田を尊敬していることに気づかなかったほどであった。

一方、赤松たちも出立の時期が近付いており、転属先はヒスパニアである。ブリタニアの方が激戦区ではあるが、ブリタニア政府はこれ以上他国の部隊を自国に入れることに嫌悪感を抱いており、しかし戦力は欲しいという矛盾を抱えていた。そこで間を取ってヒスパニアというわけである。ヒスパニアからはピレネー山脈を越えてガリアは目の前であるため、ガリアの敵戦力の側面を脅かす存在となるのである。そこを担当するのが赤松率いる第二中隊である。この部隊は赤松を始め、勇が所属していた部隊が中心に構成されており、勇にとって馴染み深い部隊との別れでもあった。

「ついにみなさんともお別れですね。」

「勇君との出会いは新鮮だっただけに、寂しくなるなあ。」

「なーに、戦っていればいつかは出会えるじやろうて。」

「勇中尉ならきつとそつちでも上手くやれるさ。」

太田や高塚、羽藤らが別れを惜しんでくれる。彼らもヒスパニアに出向くのである。扶桑海事変以前からの古強者ならきつと活躍は勇のところまで轟くだろう。だが、そんな吉報が轟いても今一つ盛り上がり欠けてしまう。もちろん、あの人物のことであ

る。

「あの、松さんは？」

「ああ、隊長は辛気臭いの嫌いだからな。本当はお別れ言いたいはずなのに。」

「本当ですか？」

太田の言葉に少し嬉しくなってしまう。しかし、勇にとつて赤松とは軍人として、パイロットとして勇に基礎を教えた人物であり、今までとは違った世界を見せてくれたかけがえのない存在だった。あんなに豪放磊落な性格から繰り広げられる繊細な空戦技術と編隊飛行のカリスマ的指導は赤松あつてっこその芸当だった。そんな赤松は空母乗り組み、部隊が分かれてから絡むことも少なくなってしまった。そして今、別れもなしに旅立とうとしている。太田らは照れ隠しと言うが、きつとそうではないことを彼らも分かっているのだろう。なぜなら、赤松貞明中尉という人物は・・・悪童だからである。

「こんなところにいましたか、松さん。」

「みつかつちまったか。」

見つかるような所にいつもいるのだから見つけてくれと言っているようなものだが、本題はそこではない。場所は艦首、遠くを眺めるようにして勇を見ない。それでも勇とは心を通じているような感覚は、長い間師弟関係をしていれば気づくものであった。そして、勇が切り出す。

「松さん……いえ、隊長。聞きたいことがあります。」

「……」

赤松は次の言葉も知っているとやわんばかりに何も言わなかった。勇の言葉は潮風に流されるようだったが、しっかりと続ける。

「なにか私に隠していることはありませんか？」

「まあ、ないと言ったら？になるわな。」

歯切れの悪いときは決まって赤松は勇の何かに関わっている。嫌な予感がしてはぐらかされないように赤松の目を見て訴える。すると観念したのか、はたまた元々言うつ

もりだったのか大きく息を吸い込むとポツリと言葉を紡ぎ始める。

「あれは坊、お前がうちのところに配属されてきた時のことだ。20歳にも満たないひよつこで、しかも特務だが中尉の小僧がうちみたいな精鋭揃いのところに連れてこられてさぞ偉いとこのボンボンかと思ってたんだ。」

配属されるときに勇が元ウィッチであるなんて誰も知らない。故に勇がこの年でこままでの階級になるのは明らかに異常である。それは背後のなにかを勘ぐられても仕方無いことだった。そして、赤松はその時の様子を思い出すかのように話す。

「でもいざ来てみたら一目見た瞬間からただもんじゃねえと思つたさ。ああ、あの時の女引っかけてこいと言つたのは今でも悪いとは思つてねえから安心しろ。それでだな、そう思つた俺は源田司令に言つたんだ。『どうしてあんな一度死んだようなやつを引き入れたんだ』ってな。あながち間違つちやいねえと思うが、第一印象は良くなかつたんだぜ?」

少しでも明るくしようとしているが目が笑っていない。それに「死んだ奴」という表

現を使われたのは赤松が初めてだった。所々突つ込みたいところはあるが、初めて赤松の口から自分の感想を聞けた気がして嬉しくもあつた。しかし、赤松の目は光を嫌い始めた。

「俺はウィッチが嫌いだ。」

その言葉に勇は衝撃を隠せなかつた。その理由は二つある。一つは赤松が大好き、特にウィッチを好んでおり見かける度にまたは見かけていなくともウィッチがいるところに飛んでいくのだ。二つ目にウィッチそのものが嫌いであるという風には今の今までその気配すら感じさせなかつたことだ。そのことに目を丸くしていると赤松の目が笑つた。

「佐世保の訓練学校でウィッチがいただける？あそこにいたウィッチの一人でもまともに飛べるとしたら、そいつは必ず戦いに出向くだろう。世間がそうさせるのか、国とか世界がそうさせるのか。はたまたウィッチは気高いからなのか俺には難しくて分からないけどよ、もし俺があそこの教官だったら飛べる奴から叩き落す。」



最後の言葉には力が籠っていた。言われてみれば確かに赤松は訓練学校でこう呟いていた。「戦争も終わればこの子らも普通の暮らしができるのによ」と。戦争という営みが齎すものは普段の思考とはかけ離れていると赤松は知っているのだろうか。普通の暮らしとはなんなのか勇には理解することができなかつた。戦場での時間があまりに長すぎ、過酷な状況で生きるか死ぬかの選択の毎日を送ってきた勇としては、この言葉に違和感を覚えたのだった。

「つまり、ウィッチを戦争に送りたくないということですか？」

「つまるところはそうだな。これは綺麗ごとだし、戦争にウィッチが必要なのも扶桑海事変の時に嫌と言うほど思い知った。」

「じゃあ、どうして・・・」

疑問の先を勇は飲み込んだ。言葉にしてしまうと赤松の考えている世界が自分の世界に干渉してきそうな気がしたからだ。それは勇にとって耐えがたい恐怖であり、そこそ喚き散らして遮りたいほどだった。赤松の見える世界は平和で人は日々娯楽や恋、勉強に勤しむ余暇を享受できるかもしれない。しかしそれは勇にとって未だかつて体験したことのない人生で、その未来を掴むために戦ってきた自分としてはもう戻るこ

とのできない樂園なのだ、心が拒絶してしまう。赤松はそんな世界に怯える勇を見て、隠してきたことの中核に触れる。

「源田司令に聞いてお前が元エースウィッチだというのは知っていた。お前が世界で活躍してきたことも理解してる。坊のおかげで救われた人間がいることもな。」

「それって……まさか?！」

赤松の指す人物が勇の頭の中で克明に浮かび上がる。それは勇にとって常に尊敬し、姉と敬う戦友、バルクホルンだった。どうして赤松が勇の元居た部隊である第501統合戦闘航空団を知っているのか、バルクホルンとの関係を仄めかす言い方をするのか勇の不安は加速する。

「ゲルトルート・バルクホルン、カールスラント空軍大尉。随分いれこんでるじゃねーか。」

その不気味な雰囲気を含んだ言葉に思わず勇は動いてしまっていた。それは勇の初めて理由の説明できない他者への暴力であった。殴った右手の拳がジンジンと痛むが

それ以上に頭と心が熱かった。肩で息をし、目の前で口内を切ったのか血を流す上官である赤松を見下ろす自分が嫌に客観的に見ることができた。まるで自分が他人のような感覚だった。それでも思い切り殴られた赤松はよろけることもなく、居住まいを正すと話を続ける。

「・・・悪いが彼女から来た手紙は全部俺が焼いた。それだけじゃねえ、彼女宛にもう手紙を書かないように進言する手紙も送った。まあ、悪いとは思ってる。」

言われてみればバルクホルンからの便りは一度も見たことがなかった。来ていたことに少しの喜びの感情があつたが、それを上回る怒りと疑問が押し寄せた。どうしてこんなことをするのか勇は考えようとする、が一向に考えは纏まらない。それどころかやり場のない怒りが拳を動かしてしまふのを必死に抑えていた。勇はせめて理由は教えてくれるのだろうかと言う怒りに満ちた表情を向ける。

「まあ、理由はさっきのと同じだ。俺はウィッチが嫌いだからだ。お前が彼女と文通しようとして一向に構わないがウィッチなら話は別だ。ウィッチってのは必ず戦場にいる。美しく気高いウィッチは戦場では女神だ。そんな存在が普通の女の子みたいに、一人の

人間として生きているのに俺は堪らなく苛立つ。それは生意気だからなんて理由なんかじゃねえ。」

勇が怒りと疑問の渦に在中、赤松は自分の信念の中で怒っているのだ。赤松は一息吐くと言葉を繋げる。

「世界はどうしてウィッチみたいな存在を作ったんだ？若くて小さくて幼くて儂くて脆くて、そして強い。そんな矛盾をこの世界は許容している現状はどう見たって異常だろ？なあ、俺はおかしいのか？」

その赤松の疑問は自分自身と誰かに問うているが、その答えを出せる者はここにはいない。強くて信頼できる隊長である赤松が抱いている不安とは、勇がかつて抱いていた生きるのを諦めかけた自分に囁いているようで聞き入っていた。

「だから俺は決めたんだ。ウィッチの活躍はもういらぬ。ここからは男の、それも大人の仕事なんだとな。坊には悪いが彼女の手紙は見せられねえ。もし見ちまえば会いたくなるからな。それはきつと世界が平和になったときの約束なんかじゃなく、その時

が来るように今頑張らなきゃいけないくなる原動力になっちゃまうからだ。」

勇は心底ある言葉を我慢した。その言葉を赤松に言わなければもう二度と会えない気がしたからだ。赤松は気づいているかもしれないが、赤松の目指す世界は絶対に訪れない。勇には断言できる。それは元ウイッチとして全てのウイッチが抱いている想いだからだ。

「隊長・・・あなたの幻想は傲慢です。これは断言できることですが、いずれこの戦争は終わるでしょう。私は元ウイッチとして、今は一人の人間として言えることがあるとすれば、力のある者がそれを行使しなければならぬのです。それは隊長も同様です。隊長には隊長の描く世界のために力で切り開こうとするように、力は力を引き寄せるんです。その力には二種類あると思います。一つは守るため、もう一つは抑えつける為。私は前者であるように生きているつもりです。隊長はそうじゃないのですか？」

その言葉に赤松の視線は泳いだ。同じ力でも使い方によっては善にも悪にもなる。だれしも力を欲するが、それは何のためなのかを常に自らに問いかけられる人間は存外に少ない。勇にはよく理解できたことだった。勇は同じく迷う隊長に秘密を打ち明け

る。

「信じてもらえるかわかりませんが、隊長には話しておきます。実は私、何度か死んでい  
るんです。」

この言葉に赤松は納得したような不思議に思うような曖昧な表情で聞いていた。

「最初に死んだのが、戦場で一人になって誰からも見えない存在になったとき。あとは  
本当の意味で戦闘で死にました。それはもう酷い死に方でしたし、三度も死にました。  
それでも私はその死から脱することができました。どうしてもと思いませんか？」

「・・・ウィッチだからか？」

その嫌悪感とも取れる声音に勇は満足したように答える。自信は力になりえると確  
信したからだ。

「いいえ、単純なんです。生きていたかったからですよ。ただ、ただそれだけのことなん  
です。」

「……この世では傲慢な考え方だな。贅沢だ……だが、清々しいな。俺でも理解できたぜ。」

そう言うどことなく笑えてきて、二人して笑い声を上げた。不気味なほどこれまでの重苦しい雰囲気を破壊するように笑った。一頻り笑うと赤松は吹っ切れたように勇の肩を力強く握ると微笑みかけるように諭す。

「俺は俺の生き方を変えるつもりはない、が考え方を変えてみるのは悪くねえ！お前の言うウイツチとやらを見てみたくなかったぜ！いつかは紹介しろよ？」

「絶対に色目は使わないでくださいよ？」

いつもの調子に戻って勇は元気よく突っ込む。赤松はこうでなくてはと勇は改めて赤松という存在が羨ましくなった。それは次の言葉に裏付けされた。

「勇、お前の生き方は常に考え、ああでもねえこうでもねえって迷いながら、間違えながら進まなきゃなんねえ。強くなけりやままならねえ世の中だ。だから、勇は勇の思う正しい方に進め。それが間違ってたら俺がぶん殴って元のところまでぶっ飛ばしてやる。」

それがお前にできる最後の説教だ。どんなにひねくれても必ず守るべきものだけは守り通せ。呪縛のように染みついて離れないだろうが、それが力を持った者の定めだ。」

常に自分の前を飛んでくれる安心感はこの強さから来ているのかと納得できた。赤松はどんなに離れたとしてもおそろくずつと勇の師匠なのだろう。それならばと、勇はしっかりと弟子として教えをもらい実践すべく返すことにする。

「了解しました！しっかりと間違えさせてもらいます！」

「おう！しばしの別れだ！クソ優秀な弟子野郎！」

「はい！しばしの別れです！クソ傲慢な尊敬する隊長殿！」

互いに敬礼を交わすと、あとはもう顔を合わせることもなく互いの道へと歩き出した。その言葉通り、赤松たち第二中隊はヒスパニアに向かう。彼らのエンジン音は唸るように欧州の空に存在感を放ちながら吸い込まれて行った。

そして、勇たち第一中隊の目的地はというと極寒の国、スオムスは南にあるヘルシンキ空軍基地である。現在、ネーデルランドからバルト海はネウロイの勢力圏内にあり、バルトランドの西端にあるベルゲン沖の北海から出撃し、およそ1000 kmを飛行し



て目的地に向かう。空母飛龍での母艦生活も終わり、ついに戦場である。勇としては懐かしの欧州の地でもある。戦う高揚感と希望を胸に母艦に別れを告げる。そして艦長の山口多門提督と343空司令官の源田から激励を受ける。

「本日まで諸君らを運んできたことに、艦隊を代表して誇りに思うことを示そう。存分にやってきたまえ。」

「各地で奮戦する仲間とともに我ら343空はあると思え。私は政治の都合上第二中隊の配置されたヒスパニアに駐在する。戦闘において臆する君たちではないと思うが、くれぐれも活躍してもらいたい。諸君の武勇を期待している。終わりっ！」

「敬礼っ！」

激励が終わると隊長の林が号令をかけ、一斉に指揮官に傾注する。士気も上々、血気盛んな精鋭集団が母艦に別れを告げる。目指すは北欧、激戦区であるヘルシンキである。途中ストックホルムを抜け、安全地域を経由してヘルシンキに向かうためカウハバに立ち寄る。カウハバは現在507統合戦闘航空団の所在地であり502統合戦闘航空団のあるペテルブルグからも比較的近い要衝である。もう間もなく到着するであろう距離まで来ると部隊長である林がカウハバ基地に連絡を入れる。

「こちら扶桑皇国海軍欧州派遣艦隊343空第一中隊飛行隊長の林大尉だ。カウハバ基地応答願う。」

「こちらカウハバ基地、隊長の穴吹大尉です。連絡承つてます。付近を飛行中の隊員が出迎えますので従つてください。」

通信に出たのは扶桑では知らない者はいないと言つていいほどの有名人、穴吹智子陸軍大尉。別名「扶桑の巴御前」その人であつた。「扶桑海の閃光」という映画でだしも一度はその活躍ぶりを目にしたこともあれば、扶桑人形のモデルともなつたその美貌でも知られた人物である。勇は一度穴吹が所属する部隊の別称を聞いた気がしたが、ここでは気にしないでいた。そして、案内役として現れた隊員は鮮烈と言うほかなかつた。上空から近づいてきたかと思えば、逆落とりの状態のまま編隊のど真ん中を一気に通過し、隊員たちの度肝を抜いた。当の本人はその後、隊の一番前に現れると陽気な口調でおどけていた。

「ハーイー！扶桑のみなさん！私がキャサリン・オヘアね！基地まで案内するからついて来るね！」

あまりのフランクさに毒気を抜かれた勇たちだったが、それが冗談だと気づかずに気を抜いたのが運の尽きだった。なんとオヘアは気のままに飛行を始め、鼻歌交じりに「ちゃんといつてきてくださーい！」などと迷惑極まりない態度で部隊を困らせた。そして、基地が見えたことに安堵しキャサリンが先に着陸態勢に入ると何やら地上の様子騒がしくなった。どうやら地上の隊員が大きくバツを示している。さすがに危険信号だろうと勇たちが考えていると大音量で無線が響き渡る。

「こらあああ！オヘア止まりなさい．．．止まれって言っただけでしょうがあああ!!」

先ほどの巴御前の声が憤怒の化身となっているのにも関わらずキャサリンは着陸を始めてしまった。その結果は言うまでもなく大惨事だった。滑走路が一部整備中だったらしく、事前に違う場所を着陸場所に指定していたのをオヘアは失念していたのとだった。着陸に失敗したオヘアは泥んこで、整備しかけた滑走路は修復前より悪化し、ただの穴に大変身した。勇たちは真っ青になりつつ、智子の溜息と怒り交じりの声に誘導されて指定の場所に着陸した。オヘアは恥ずかしげもなく頭をポリポリ掻きながら出てくる。

「とんだ落とし穴もあったものね。きつとビューリングが仕掛けたに違いないね！」

勇はこの部隊の別名をようやく思い出すことができたのはオヘアのセリフを聞いてからだった。第507統合戦闘航空団、別名「いらんこ中隊」。ここに立ち寄ったことで心休まるものではないことを確信した勇だった。

## 新たな翼 第四話

いらんこ中隊のあるカウハバ基地に到着してからというもの、勇たちは心休まる暇がなかった。着陸に失敗したオヘアは智子に折檻され、基地で休憩をと言われたが碌に設備が整っていないため大人数が休憩する余裕などなかったのである。しかし、そんな様子を優雅に眺めているのがエリザベス・F・ビュリング中尉である。彼女もヒスパニア戦役からの古豪であるとのことだが、慌ただしい基地の喧騒に目もくれずタバコを蒸かし、コーヒーを飲むなどそれはそれは寛いでいた。呆れた林がビュリングに話しかける。

「すまないが、隊長代理と話したいのだが案内を頼めないだろうか。」

「・・・ふう、手隙の者であれば紹介しよう。」

「助かる。」

ようやくまとも？な人物がいたかと安心したのも束の間、ビュリングは話しかけてきた林に手を指し出すと何かをせがむように無言の圧力をかけ始めた。

「・・・なんだ？」

「手を取ってほしいのではないでしょうか？」

勇も淑女の嗜みなのではと察し、林に口添えをするとビュールリングはため息を吐きながらブリタニア語で遮った。

「はあ、私がそんなに淑女に見えたなら手の甲にキスの一つでも頼もうか。ただ、髭がジヨリジヨリしそうだから蕁麻疹が出るだろうな。ああ、それを考えただけでお前たちは婦女暴行罪で軍法会議だろうがな。」

悪辣な妄想で、上官である林に対して脅迫まがいのセリフが飛び出し一同は面食らう。しかしビュールリングはそれも冗談だと素の顔のまま本音をぶちまける。

「扶桑人は本当にジョークが通じないな。智子といいハルカといいもう少し融通の利く生き方をしてもらいたいものだ。ああ、でもそれだと騙すのが面倒になるな。よしそのままの馬鹿正直な人種でいてくれ。」

素の要求がもはやなんなのか分からなくなってしまったが、ビューリングは案内役を紹介する手数料として煙草を要求した。終始ビューリングのペースに乗せられたままだったが、なんとか案内役を紹介してくれた。なんでも同じ扶桑の方が気が合うだろうと氣遣つてくれた。勇は文句を言いながらも根はいい人なのだと感じた。しかし、それも儚い幻想なのだと早々に打ち碎かれる。案内役として出てきたのは迫水ハルカ海軍軍曹だった。見た目はまだ幼く、ほんわかとした印象だったため、林は年の近い勇に話すように指示した。実のところ林は既にこの基地の現状にお腹いっぱい状態だったことは言うまでもない。勇はハルカを見つけると早速この基地の話の出来る人物に合わせてくれるように頼もうとした。

「あの、迫水軍曹でしょうか？ 343空の者なのですが・・・」  
「ふしゃー!!」

話しの最中に突如猫のような唸り声を上げて勇を威嚇し始めたハルカに、勇はもう白目を？くしかなかった。

「あ、あのこの基地の代表と話がしたいんですけど……」

「この男、私のスイートハニーである智子さんに用があるですって!?!この泥棒猫!しっしっです!」

話しも通ず、同じ国の者とは思えない意思疎通ぶりに意識が軽く飛びかける勇だったが、そこに偶然ロマーニヤ人と思しきウィッチが通りかかる。そっちに助けを求めようとするがこれもあえなく失敗に終わる。

「ああ!チュインニさん?!聞いてくださいよ!この軍人、私の智子さんに……」  
「智子は私のだから。」

場が凍り付く。勇は気配を消してその場から静かに退室した。静かに扉を閉め、ため息も出ない疲労感に苛まれていると白い肌と白みがかった金髪をなびかせるスオムス軍服に袖を通したウィッチが通りすぎる。

「あの……お困りですか?」



初めてまともな言葉を聞いたと思ひ振り返ると、バインダーを手にしたいかにも生真面目そんな人物が勇の前に立っていた。ようやくまともな会話ができると思ひ、さつき基地の指揮官と話がしたいことを話す。すると驚くほどあっさりと話すが進み、林の下に連れて行く。

「隊長、ここの基地司令のアホネン大尉です。」

「おおーやつとか！」

仁将と呼ばれた林ですらこの基地の雰囲気には辟易していたようで、本音が出てしまっていた。しばらく話をしてくると言い、林とアホネンが席を外す。ようやく勇も自由時間を取ることができ、安息の場所を探す。中は未だに整備や兵士の交流で騒がしく、仕方なく外に出る。これまで長い間会場で過ごしていたため地上の安定感と澄んだ空気かとも新鮮だった。見渡す限りの平原と森林に雄大な自然を感じ、一時の静けさを堪能しているると不意に声を掛けられる。

「あら、あなた・・・どこかで見た顔ね。」

「穴吹大尉?!失礼しました!343空第一中隊の副長を務めています、赤松勇特務中尉

です。」

自然を堪能するあまり周囲を警戒しておらず、上官の登場に少々驚いてしまったが智子は気にもせず、勇の顔を見てうんうんと唸っている。すると合点が行ったのか勇の肩を掴んで目を輝かせた。

「あなた．．．扶桑海事変のときの！」

勇にも実は心当たりがあつた。扶桑海事変の後半から戦争に参加した勇はあの「山」と呼ばれた超大型ネウロイとの決戦である「挺身作戦」にも参戦していたのだった。そこで所属は違うが一度智子とも肩を並べて戦つたことがあつた。まさか智子がそのことを覚えていたとは思わず、勇も驚いてしまう。

「まさか覚えていらつしやるとは思いませんでした。穴吹大尉もお元気そうで何よりです。」

「元気なのはそうだけど．．．でもあなたたしかウィッチじゃなかった？」

ウィッチとしての能力を喪失した勇の現在の状況に至るまでを掻い摘んで話すと、感慨深げに残念だったわねと独り言ちていた。

「じゃあ、お姉さんは元気なの？」

この言葉に勇の背筋は凍り付いた。勇の本当の姉の存在を知る人物はもうほとんど残っていない。勇の姉と智子の間にどんな関係があったのかは勇にはわからなかったが、今はその質問には答えたくなかった。

「ね、姉さんとはどこで知り合ったのですか？」

「知り合ったなんてたいそうなものじゃないけど、挺身作戦の最終局面で『恵美さん』には助けてもらったのよ。」

久しぶりに聞いた姉の名前に勇は感情が迷子になる。勇にとって唯一の家族であり、一番大好きだった姉の名前を呼んでくれる人がこの世にまだいたことに嬉しく想い、またその大好きな姉はもういないことに対する悲哀が混在していた。

「それにしても恵美さんの弟に会えるなんて偶然ね。顔立ちも少し似てる・・・面影があるくらいね。恵美さんはどっちかという可愛い系だったけどあなたは美人よりね。私の好みの顔よ。」

「え？」

突然の告白にたじろぐ勇だったが、その顔を見た智子も今しがた自分の発言を思い出し、顔を真っ赤にして釈明する。

「あああ!!これはその、ち、違うの!好みっていうか、私男の人が好きただけだから!」  
「え・・・」

もはや勇は絶句してしまった。智子はさらに自分の恥態を曝してしまったことにやかんが湧きそうなほど顔を真っ赤にして言葉にならない悲鳴を上げている。

「ち、ち、ち、違うの!これはいつもの癖で、いや、この基地がおかしいのよ!私がこの基地に染まるですって・・・私穢れたわ・・・」

一人で撃沈したかと思うと、今度はその人形のような顔をキツと釣り上げて勇の肩を揺すって記憶を抹消しようとする。

「忘れなさい!!今話したことは全部!でないとお姉さんにあることないこと吹き込むわよ!」

脅迫をされブンブンと揺らされた結果、勇はつい本音が出てしまう。

「姉さん、は、死に、ましたっ、あがつ!」

「え?どういう、ってああ?!」

勢いがつき過ぎてしまい、勇は押し倒される形となってしまった。勇はいらないうことを口走ってしまったという大きな後悔とともに目を開くと、眼前に迫った智子の唇がそこにあつた。間近で見るとやはり美しいという言葉以外が出てこないが、それよりも口走ってしまったことをどう取り繕うか考えを巡らせていた。

「いつつ……はっ!……ごめんさい、じゃなかった。あんたさつきなんて……」

異性の顔が近かったため智子は顔を朱色に染めるが、先ほどの勇の言葉の追及に移ろうとした。が、ここはカウハバ。常に危険が危ないのである。

「おーいハルカ、お前のお姉さまが男食おうとしてるぞ。」

「お姉さま!!!」

「げっ!?! あんたたち?!」

あつという間に出来上がった即席修羅場の渦中にいた勇だが、智子たちがじゃれ合っている間にこっそりと抜け出そうとした。それに気づいた智子がハルカにくつつかれながら勇に目を向ける。視線を感じた勇は智子に軽く会釈すると申し訳なさそうに眩く。

「そういうことなんです。」

そう言う勇は振り返ることはなかった。智子はその寂しそうな目からあの言葉が真実なのだと理解した。同じくビューリングはどこか自分と似たような境遇の目を感じ

じ取っていた。

「あの男、死ななければいいのだがな。」

勇が戻ると林とアホネンの話は終わっておりすぐに出発とのことだった。林としても一刻も早くこの場から立ち去りたい気持ちがあったのかもしれない。勇もすぐに準備すると整備された零戦に乗り込んだ。滑走路を走り、林の後について編隊が集結するのを待ちながらふと基地を見下ろすと智子がいた。その眼差しは少し不安げな顔だったかもしれない。勇はその顔を頭から振り払って本来の目的地のことに切り替えた。向かうはヘルシンキである。カウハバ基地からはほんの少し先であり、ここからは本当に激戦区である。勇は気持ちを引き締め、心に誓う。

(今回こそは勝ってみせるぞ)

勇の決意は北欧の寒空に吸い込まれていった。

ヘルシンキ基地には既に進出している設営隊の人員の他、司令部要員が派遣されていた。林が早速挨拶周りに出かけ、勇は基地周辺を散策することにした。林の副官として

本来ついていくべきだが、中隊として配属された時点で勇は副官から副長に昇格していた。そのため勇は基地周辺の地理状況や環境を知っておくべきだと思ひ散策することにした。すると後からついてきた少年に声を掛けられる。

「副長！ここにいらっしゃいましたか！」

息を切らせながら勇を呼びに来た少年を見て勇は少々憂鬱な気持ちになった。その気持ち顔をに出さずに一応上官として毅然とした態度で応じる。

「どうしたんだ、藤野三飛。」

「はっ！報告します！現在、我が部隊の戦闘機全機が整備確認作業に入りました！隊員は宿舎にて休息しております！」

全ての語尾に！が入らないと気が済まないような話し方とわざわざ急いで報告することでも内容を全力とする藤野という少年に、勇は同世代ながら暑苦しさを感じていた。年は勇より一つ下の17歳だが、勇と違い未だ戦闘経験がない新兵である。勇は頭を抱えて了承と苦情を伝える。



「藤野三飛、報告ご苦労。それと、初めての戦地だからといってそこまで肩肘張る必要はない。落ち着き給え。」

「はっ！しかしここは最前線です！それ相応の態度で臨むべきかと愚考します！」

勇はため息を抑える。緊張が続きすぎるといざというときに疲れて敵の発見が遅れましたでは本末転倒であることを勇はよく知っている。だからこそ、勇は落ち着くよう指示したつもりだったが、この藤野という存在は若きだけに有り余る元気を撒き散らすのだから質が悪い。勇はやれやれと思いつつ、同世代の好で助言する。

「では、藤野三飛は警戒態勢を維持したまま仮眠に入るように。以上。」

「はっ……あ、ですが警戒態勢は維持で、仮眠？あれ？」

矛盾した命令に困惑しているが、勇は知らん顔でその場を退散する。そして、散策をしながらこの場所での任務を確認する。勇たち第一中隊に与えられた任務は、ヘルシンキを最終防衛拠点として大陸本土への橋頭堡を築くことだった。現在、大陸本土への拠点を有しているのは第502統合戦闘航空団のあるペテルブルグ基地だけである。5

02 統合戦闘航空団の主任務はペテルブルグから南下し、カールスラント方面への進行ルートを確認することにある。そして、ここヘルシンキは大陸とバルト海を挟んで北欧の空を守る玄関口と言える立地である。そのため、対岸に橋頭保を確保すれば502との挟撃も可能となるため、重要性の高い任務と言えるのだった。勇はそのことをしかと心に刻み、ヘルシンキ基地での初日を終えた。

翌日、設営隊が設置した監視所と簡易レーダーサイトが敵の存在を知らせる警報がけたたましく鳴り響いた。この時のために訓練を繰り返してきた第一中隊の行動は早かった。全員が戦闘機に乗り込み、上空で編隊を組むまで9分とかならずに空に上がった。

「勇中尉、各小隊との連絡を密にさせる。一人も欠けさせるな。」

「了解です。各小隊長との報告をまとめて連絡します。」

もはや慣れた手順と言えるほど勇も副長の仕事に身についていた。戦闘機隊は全員で12人おり、三人一組の4小隊分ある。中身も精鋭と言って差し支えない人員であり、前日にあれだけ騒いでいた藤野も実は予科練では主席で卒業したほどの腕の持ち主である。しかし、ここは戦場であり、いつだれが死んでもおかしくないのが当たり前の

世界である。だが、貴重な人員を可能な限り損失を防ぐために行われた策と言うのが、搭載型通信機と編隊飛行による編隊戦術である。元来零戦には通信機はあつてないような性能であつたが、343空ではそのような前時代的なスタイルは払拭されていた。さらに、赤松考案の編隊戦術の履行も進められていた。予てより、赤松の進言していた若し搭乗員が自信過剰に突っ込んでやられるといった初期の戦死率が高い傾向にあることを理解したうえで、それをベテランと組ませて未然に防ぐという効果も期待されていた。

「こちら第一小隊副長、勇だ。各小隊応答せよ。」

「こちら第二小隊沖海、異常なし。」

「こちら第三小隊神、二番機が引込み脚の故障で引き返しました。」

「こちら第四小隊大関、藤野が異様に張り切っていること以外委細問題ありません。」

一機の故障と一匹のバカがいること以外問題ないことが分かった勇はため息を小さく吐くと林に報告する。

「隊長、一機故障のため引き返しました。それ以外問題ありません。」

「了解した……と言いたいところだが、一人報告漏れがいるのではないか？」

林は藤野のことを知っているのか、勇に確認を求めた。勇はやれやれと藤野本人に視線を繋ぐ。

「藤野三飛、こちら副長のいさ……」

「副長!! 現在周囲の索敵中! 異常ありません!」

「……藤野三飛、話は最後まで聞くように。君は大関小隊長の三番機だ。しっかりと付いていくことだけに集中してくれ。初陣だからと言って張り切りすぎないように。」

「ネウロイなんぞに墜とされるようなヘマはしません! 任せてください!」

これは厄介だと小隊長の大関に注意を促すように指示をすると勇は周囲の警戒に戻った。こういった張り切った輩と言うのは大抵無茶をして墜とされるのだ。一度は痛い目を見た方がいいと勇は割り切った。数分の間、警報のあった地域を警戒していると前方の遙か彼方から小さな黒点が見え始めた。勇はすぐさま林に連絡を取ろうとすると林も同時に気づいたようだった。

「勇中尉、いいか。敵は全て倒す。仲間はずべて守る。簡単だろ？」

「はい、簡潔明快な指示です。まずは左翼の隊形の崩れたところを叩きますか？」

「いい判断だ。敵数はおよそ小型機20機だ。左翼を叩けば15機程度でおよそ同数になる。我々の練度ならばできると信じている。」

作戦は決まり、敵の気づいていない上空に回り込む。勇は二度目の欧州に来て初めての戦闘の鐘を鳴らす瞬間を静かに待った。中隊の全員が林の指示の一言に全ての神経を注ぐ。そして、林は厳かに命令する。

「攻撃、開始。」

その命令を聞き、どう猛な群れは一斉に襲い掛かる。編隊の端にいる敵機は落伍しやすく、カバー範囲外になりやすいため攻撃個所としては最適である。勇たちはネウロイたちの上空から逆落としの形で奇襲に成功した。2, 3機が光の塊となって消えていく。後は各編隊による連携がうまくいけば問題ない。そう、上手くいくはずだった。

「至急！中隊長へ！第四小隊長の大関から林大尉へ！」

「どうした!？」

切迫した声音で大関は通信してきた。林と勇も一気に緊張をほとばしる。大関はこれまであまり慌てたことのない、胆力のある小隊長である。その大関が切迫するとは何事かと耳を傍立てる。

「藤野三飛が……見当たりません！」

「なにつ?!」

「もう墜とされたのか?!」

勇は先ほど痛い目を見ればいいと思つたことを心底悔やんだ。こんなにも早くに仲間を失うとは思わず、勇は唇を噛んで己の薄情さを恨んだ。しかし、現在は戦闘中である。気に病んでばかりもいられない。勇はモヤを振り払って戦闘に集中する。

「敵機散会！中隊を二分し、各個撃破せよ！」

林の号令とともに己のやるべきことに集中する。第一小隊と第二小隊は連携して敵

を墜としていく。敵がおよそ半数になったところで敵も態勢を立て直し始め混戦となる。そして、第一小隊と第二小隊の間にネウロイが入り込み同士討ちを恐れて連携が乱れてしまった。

「まずいな……」

「隊長、私がやります。」

「頼むぞ。」

勇が林から了承をもらい、単独行動に出る合図をした。勇は赤松との訓練時代こういった対処をよく行っていた。赤松自身がよく敵の大編隊に単機で乗り込み攪乱する戦法を取っており、勇もそれに慣れていたからである。鋭い角度で縦旋回をし、第二小隊との間に入り込んだネウロイを一撃で叩く。攻撃は針の穴を通すような技でもあり、また度胸がなければできない芸当である。勇は狙いを定めてネウロイに向かって射撃する。その刹那勇は驚きの光景を目にする。

「よしっ！撃墜、ん?!」

「よくやった中尉！どうした？被弾したか?!」

「い、いえ！あのそれが・・・」

勇は編隊に戻り再度後方を確認する。そこにはいるはずのない人物が悠然と飛んでいた。

「どうしてここにいる・・・藤野三飛」

「はっ!?これは副長ではありませんか?!大関小隊長はどこに・・・」

「なんてことだ・・・」

「ふっ、ははは！生きていれましただ。」

結局、藤野を第一小隊で預かり、そのまま戦闘を継続した。次第にネウロイも四散し撤退していった。撃墜数は全体で13機にも及んでいた。そして、基地に帰ると藤野は小隊長の大関に絞られていた。

「藤野！お前目はどうしてんのか?!」

「すみませんでしたっ!」

「反省しろ！今日は晩飯抜きだ!」



そこに勇と林もちょうど立ち寄り、林が収める。

「まあまあ大関一飛、彼は今日が初陣だ。誉められたものではないが生きて帰ってこれたのは僥倖だ。それに今回お題を副長に出していたしな。そうだな、副長？」

「はい・・・敵は全て倒す、仲間はずべて守る・・・です。」

「であれば副長も同罪だ。己の慢心に気づかないようではまだまだだぞ。」

「はい、しかと心に刻みます。藤野三飛、すまなかつた。」

藤野はプルプルと首を振り、涙目で勇を見ていた。勇は仲間を失う喪失感はずれよりも知っているはずだった。己の増上慢には呆れるばかりだと内心独り言ちた。すると藤野が勇の下へ駆けてきた。戦闘前はあれだけ意気込んでいたのに今は借りてきた猫のように大人しいことに勇は少しばかり心を和ませた。

「藤野三飛、生きていて良かった。次もよろしく頼む。」

勇はそう言うのと宿舎へと足を向けた。後ろで藤野が頭を下げた気配を感じたが決し

て振り返らなかつた。

今回の襲撃による損失はなかつたものの、343空第一中隊に与えられた任務は欧州本土への橋頭保を築くことである。よつて勇たち第一中隊は本土の制空任務へと主眼を切り替えることとなつた。そのため第一から第四小隊までのそれぞれの部隊に役割が割り振られることとなる。主に第二、第三小隊が制空任務を第四小隊が対地任務、そして第一小隊が指揮任務を担うこととなる。指揮と言つても周りの状況を見て制空にも対地任務にも転換する万能小隊である。また、昨今の事件を鑑み藤野を第四から第一小隊の勇が監督する人事異動が行われた。

「勇副長！今度は情けない醜態は曝しません！」  
「そうか、期待している。」

少しはまともな面持ちになつたものと勇は感心するとともに、緩んだ気持ちを再び引き締めた。偵察情報によると、対岸の欧州本土を原点として半径1キロには大きな敵勢力は確認されなかつた。もし襲撃が成功し橋頭保を確保でき次第、基地人員を輸送する算段のため今回の作戦は否応なしに隊員の士気を高めた。さらに、距離の問題もおおよそ解決しており、少し旧式化してきているが十分に戦闘可能な零戦21型のため目下

重大な問題は対地任務だけだった。ここで新兵器として三号爆弾の対地改良型である三号爆弾改を実践投入されることが決定した。この兵器は三号爆弾が対空目標に向かつて広がるクラスター爆弾とは違い、地上目標に向けて一直線に向かう代物だった。勇はこの兵器を詰めるだけ搭載し、対地任務の要として用いるつもりであった。

「副長、そんなに積んで大丈夫なんですか？」

「地上型ネウロイの数にもよるだろうが、多いことに越したことはないさ。慣れてくれば藤野三飛にも扱ってもらおうからよく見ておくんだな。」

そう言うのと藤野は目を輝かせて頷いていた。相変わらず藤野は犬みたいなやつだと勇は内心微笑んだ。そして、ついに作戦は実施される当日となり、ヒスパニアにいる司令の源田からも檄文が届いた。内容は豪快な源田らしく「徹底的に残さず平らげろ」との簡潔なものだけに隊員は皆口を揃えて「おやじはわかってるな」と一体感を見せていた。部隊は進発し、眼前に広がる欧州本土を目指して綺麗な編隊を組んで悠然と飛んでいく。

「副長、状況知らせ。」

「はい、現状天候は晴れ、進路上に敵機は確認できてません。また、全小隊から報告がありいまだ落伍者はいないとのこと。以上報告終わり。」

「よろしい、警戒を怠るな。」

いつもの確認作業だがこういつた基本を疎かにする者から死んでいくことをよく知っている勇はこの行為に満足していた。また、連れの藤野も今回は万全を期すのとことから盛んに背面飛行などを行い下方の警戒をしてくれている。一部の隊員はそれを見て臆病だと笑うが勇はそうは思わない。下こそ飛行機乗りの死角であり、索敵こそ墜とされないコツであるからだと思っているからである。その証拠に勇は今まで一度も背後からの奇襲で墜とされたことはない。だからこそ、藤野の行動を成長の一部だと捉えていた。すると下方を警戒していた藤野から緊急電が発される。

「こちら藤野！下方に敵と思しき影を補足！」

「よくやった藤野！隊長、どうします？」

「敵数知らせ！」

「敵数およそ3！」

無闇に突つ込んで毘だった時のことも考えられる程度に余裕のある部隊とは恵まれたものだ。そう勇は思い、林の意図を汲んで上空を警戒する。なぜなら下に意識を向けて上空に敵が潜んでいる可能性が捨てきれないからだだった。しかし、それは杞憂のようだった。勇が林に報告すると林は即座に決断を下す。

「これより攻撃を開始する。予定通り第二、第三小隊が先手だ。撃ち漏らしがあつた場合第四小隊が仕留めろ。第一小隊はこの場で待機だ。」

各小隊長が了承のバンクを振ると一斉に行動に移る。それを羨ましそうに眺める藤野を勇は諫めながら警戒態勢を維持する。先遣隊が既に交戦状態となつたのを見ると、奇襲されたネウロイがノロノロと上がってくる。それをきちんと始末する第四小隊がいるあたり、布陣としては成功のようだ。勇たちはやることもなく眺めるだけになってしまっているが、それも仕事の内だと満足した。およそ数分もすると全機撃墜の報告と部隊の状況が端的に報告された。落伍者もおらず、全機任務を続行できるとのことだった。林は満足そうに頷くと欧州本土を見据え、作戦の完遂を確信した。

この日、勇たちは欧州本土の侵攻に成功した。局所的ではあるがたつた一部隊が欧州の土を踏んだという歴史的快挙に世は湧いたのだった。勇たち部隊や人も、そしてネウ

ロイまでもがであることはまだ誰も知る由がなかった。

## 新たな翼 第五話

遂に欧州本土への土を踏んだ勇たち343空の第一中隊は、ヘルシンキ基地の目と鼻の先にあるタリンに拠点を構えた。そこから地上目標に対して効果のあつた三号爆弾を使用した作戦が功を奏し、タリンに続きヒーウマー島、サーレマー島を攻略。次いで元オラーシャ領のリガを攻撃目標に定めた。ちなみにリガは元扶桑海軍のウィツチ隊（坂本、竹井、西沢ら）が拠点としていたリバウ基地と近い拠点である。ここは完全にウロイの本拠地となり、盛んに敵襲があるがもはや反撃に湧いた世界の羨望の声が留まることを許さなかった。中隊長である林はこの急激な前進計画に頭を抱えていた。さらに林の頭を悩ませる問題として、第一中隊が世界の（ウィツチ以外で初の）反撃成功部隊であることに気を良くしたお偉方がいち早くリガを攻略せよと無理難題を吹つけてきたのである。それに付随して343空司令の源田大佐が現地視察を行わなければなくなり、その道中の護衛任務も担わなければならなくなったのだ。これは誰から見ても過重任務である。勇は今度こそお茶ではなく酒を湯のみに注いで林に差し出した。

「隊長、お疲れ様です。」

「あ、ああ。まったく上ときたら現場の意見を聞こうともしない。」

珍しく愚痴を吐きながら勇から差し出された酒を疑いもせずありがたそうに飲んでいる当たり、林も相当疲労が溜まってきていると考えられた。勇もここ連日の出撃と略による地上整備に明け暮れており、人員や設備の補充だけで四苦八苦していた。その上、お偉方の都合で作戦時期が早められ、そのおかげでうちの司令が危険に晒されるのは決して気分の良いことではない。しかし、上層部にも一定数の非ウィッチ戦力での攻略に拘る者もいるのは確かである。一時、ブリタニアのマロニー大將が失脚したことによりその意見も下火になりつつあったが、我々がその先駆けとなってしまう、いいように扱われている現状に勇は憤りさえ感じていた。そこで勇は林の愚痴ついでに妙案を提案した。

「でしたら逆にこちらの都合の良いように上層部を使って差し上げましょう。」

「ほう、何か妙案があるようだな。」

「はい、現状部隊の設備状況や補給にも支障が出ています。我々を担ぎ出すのならその代金を支払ってもらいましょう。」

「なるほど、面白い考えだ！いざというときの切り札とさせてもらおう。」



そう二人でほくそ笑んでいると、それを遮るように基地のサイレンがけたたましく鳴り出した。何事かと林と勇は機体に向かい走り出し、情報を収集する。情報によると基地のレーダーに大型のネウロイ反応があり、勇たちのいるサーレマー島に向かって飛行中とのことだった。この事実にも勇と林の表情は強張った。大型ネウロイは未だ戦闘機のみでの撃墜記録はなく、現状ウィッチとの協力または戦闘団の定番と言われている。しかし、現状ネウロイはサーレマー島に接近しつつあり、カウハバ基地の智子たちに増援を頼んだとしても基地が危険に晒されることは明らかだった。林は急いで各所に指示を出す。

「通信員は至急カウハバ基地に救援を連絡！戦闘機搭乗員は遅滞戦闘で構わん。ネウロイがこの島に接近するのを限りなく遅らせろ！他基地要員は退避行動を取れ！」

そう命令すると林も戦闘機に乗り込んだ。勇はウィッチ時代の経験から大型ネウロイの脅威については十分に理解していた。そのため、独自に各員に忠告を連絡する。

「こちら副長の勇だ。敵は大型ネウロイだ。攻撃力・防御力はこれまでのネウロイの比

にもならない。ほぼ戦闘機だけで撃墜するのは不可能だ。また、ビームの威力は絶大、編隊戦闘では逆に分が悪い。小隊ごとに攻撃せよ！諸君ならできると信じている！」

「聞いたな！副長の訓示をしかと心に刻んでおけ。諸君は一騎当千の古強者である。誰一人欠けることなく今晚の夕食の席に付けることを楽しみにしている！」

訓示が終わり、各員が気を引き締める中、前方に大きな影が見え始めた。それは単機で威風堂々の様相で、勇たちの戦力が分かり切っているかのようにその巨軀を黒光りさせながら近づいていた。勇たちは大型ネウロイより上空に上り、戦力を二分して迎え撃つ算段を立てた。みるみるうちにその巨軀の存在感を見せつけるかのように接近してきたネウロイに満を持して攻撃命令が出される。

「全小隊攻撃開始！」

各小隊が攻撃を開始したが、その巨体故の防御力により攻撃が通ることはなかった。その真実に全員は息をのんだ。勇と林は分かっていたが、今まで小型機かよくて中型機を相手したことがあったが、大きさによる距離感を使い見切れていないのだ。さらに防御力の高い装甲により弾かれているのだ。また、大型ネウロイも反撃とばかりにあら

こちらからまるでハリネズミのように攻撃を開始していた。

「ちっ！攻撃は至近距離で攻撃するんだ！500いや、300m以内まで近づけ！俺が手本を見せる！」

勇がそう言うとき第一小隊が勇を先頭に攻撃を開始した。藤野も必死に勇についてきているあたり成長していると言えるのだが、今はそんな感傷に浸っている余裕はなかった。ぐんぐんと大型ネウロイに近づき、攻撃もすると回避する名人芸を繰り返し出し、勇はここぞというタイミングで引き金を絞った。それに続けて第一小隊も射撃する。三機の一斉射撃はさすがに効いたのか、大型ネウロイの装甲に傷がつき、回避行動を取り始めた。

「すごい！やつめ、回避行動を取り始めましたよ！」

藤野が興奮気味に叫ぶが、勇には大型ネウロイの進路はさして変わらないことに臍を噛む。その後も何度も攻撃を繰り返すが、決定打にはならず数分が経過していた。あと数分で基地が攻撃圏内に入ってしまうことを悟った林は基地に連絡する。

「こちら林、カウハバ基地からの応援はいつ来るんだ?！」

少し怒声交じりに捲し立てたが、基地の通信員から返ってきた返事はその怒りが一気に吹き消されるほどの内容だった。

『こちらサーレマー島!カウハバ基地に救援要請は送り、カウハバ基地からは了承の旨は得られたのですが、欧州東方軍司令部からその要請が却下されました!』

「な、んだと・・・?!」

欧州東方軍司令部からの要請はこうである。343空第一中隊の命題は「非ウィッチ戦力のみでの反撃及び都市の奪還」である。よってウィッチ戦力の救援依頼は避けたいため東方軍司令部から戦力が送られるということだった。その信じられない内容に憤りも忘れて焦りさえ含んだ通信を林は投げかける。

「では!その応援とやらはいつ来る?!」

『およそ1200・・・申し訳ありません、大尉。』

絶望の二文字が目の前に映し出されるようだった。あと数分もしないうちに基地は火の海に包まれるというのに、要らない政治的配慮とやらで最も近く確実な救援は握りつぶされこととなったのだ。勇は林に急いで意見具申する。

「隊長！言うことを素直に聞いてやる必要ありません！基地がやられれば元の木阿弥です！カウハバ基地のウィッチとなら必ず奴を．．．そもそも！我々を担ぐならその対価を求めようと話していたではないですか!?!」

そこまで言うと林は勇の言葉を遮って低い声で命令を下す。その声は苦しくも覚悟を決めた声音だった。

「．．．命令は命令だ。我々だけでやるしかない。」  
「隊長?!」

「副長！やらねば我々がここにいる意味がなくなるのだ！副長、お前が頼りだ！今日だけは無茶を許可する！何としても基地に奴を近づけるな！これは命令だ！」

「ここまで隊長である林に言われてしまつては勇とてやらざるを得ない。目を瞑り、深く息を吐くと勇も覚悟を決める。

「では……やれと、そう命令されるのでしたら……いいのですね?！」

「もう一度は言わん。」

「……了解しました。第二から第四小隊は第一小隊を援護、敵機直上からの直下降で仕留めます。それと、攻撃後の単独行動を願います。」

「やむ負えまい!許可する!」

「了解!」

相変わらず無茶な戦法だと自嘲する。この戦法はウィッチ時代にも対大型ネウロイへの切り札として攻撃方法だった。むろん優れた戦闘センスと運動神経と計算能力が求められる。幸い戦闘機搭乗員となった勇はもう隊の中でも屈指のパイロットとなっていた。しかし、危険な戦法であることには変わらない。また、他の仲間を囿にしての作戦など副長のすることではない。しかし、やらねばならない現状勇は決行する。第一小隊以外が気を惹いてる間に急上昇し、大型ネウロイの直上に出る。タイミングを見計らつて一気に降下すると、大型ネウロイの先端と翼部分との間をすり抜けるように、爆

撃機ならコックピットにあたる部分のみを集中攻撃する。勇の攻撃は見事に先端に全て命中し、後続の林と藤野はなんとか翼の付け根など重要個所を攻撃していた。大型ネウロイの叫び声のような音が聞こえ、勇が振り返ると藤野が攻撃した翼の付け根にコアが露わとなっているのが確認できた。勇は急旋回で一射撃するとコアは砕け、大型ネウロイは爆発四散した。

「やった……やったんだ!!」

藤野が感動している声が聞こえる。他の隊員も雄たけびを上げている。勇は荒い呼吸を整え報告する。

「敵機、撃墜。」

「……了解。警戒を怠らず帰還する。よくやった。」

酷く疲れたような安堵したような声で林は命令する。しかし、勇には林が何か憤ったように聞こえていた。

基地に帰還し、報告を済ますと東方軍司令部上層部は大層ご満悦だった。我々非

ウィッチでもやればできるではないかと鼓舞するように大型ネウロイを戦闘機部隊が単独で撃破した事実を大々的に報道した。翌日の新聞記事にの一面に載った一文にはこう記載されてあつたという。

『英雄的献身により戦闘機隊単独で大型ネウロイ撃破！』

一方のサーレマー島基地では新聞記事に湧く世間とは対照に暗い雰囲気蔓延していた。サーレマー島の滑走路脇に二柱の墓標が立っていたためであつた。その墓標には二人の英雄の名が刻まれている。「沖海少尉」「今井一飛」。この二人は第二小隊であり、小隊単位で飛行していたため大型ネウロイの一撃で小隊長の沖海が蒸発、二番機は今井一飛が片翼をもがれ墜落していった。世間がこの大戦果に湧きたつ中、まさに軍神になつてしまった二人を追悼した第一中隊は素直に喜ぶことができなかった。中でも勇は周りを囮として扱つてしまったことに酷く心を痛めていた。熟練で精鋭の戦闘機搭乗員が二人も失われた悲しみは部隊を暗くしていた。

そして、林はというといつそう厄介な立場に立たされていた。部隊宛に表彰状が届けられた時など、その紙切れを破り捨てようとしたほどだった。しかし、それでは死んでいった仲間が浮かばれないと思いとどまったが、今回の件で大型ネウロイを撃破できる



部隊と認知されてしまったのである。林は救援が遅れたこと、面倒な手を回したことを正式に抗議し、その対価として対大型ネウロイ用のウィッチの術式を込められた弾薬をたんまりと確保することに成功した。それが功を奏したのかはたまた悪運を運んでくるのか、大型ネウロイはサーレマー島を目指して襲撃するようになってしまった。また、源田司令が現地で指揮を執ることとなり、一週間後ガリアからここサーレマー島に着任する運びとなった。それまでに基地の防衛能力を強化せねばならず、依然として大型ネウロイの脅威に打開策を見いだせずじいた。

「隊長、大型ネウロイのよる被害の報告が上がりました。」

「副長・・・今日は何機だ。」

「今日は一人と3機です。」

「二人だと?・・・ふつ、そうなのかもな。」

大型ネウロイの迎撃に上がる度に損害が出ており、人的被害は少なく抑えつつ撃破ではなく、撃退という形で辛うじて対処していた。しかし、今日は一人の戦死者が出ていた。怒りを抑えた口調が勇には酷く苦しく聞こえた。

「今日の撃退方法……手塚二飛曹の行動はまさに我が基地を救う為の英雄的行為だと報告しておこう。必ず恩給が出るように手配する。」

林はまるで誰かを慰めるように呟く。それは死んでいった者たちかもしれないが、勇には林が己の非力さを嘆いているように映った。大型ネウロイの撃退方法は、勇が実行した垂直降下でコアのありそうな部分を集中攻撃するして一撃離脱する戦法であったが、コアのある場所などは検討もつかず、おおよそ当てずっぽうのため非効率的な自殺戦法と言えた。事実、今日戦死した手塚二飛曹は垂直降下で避けきれなかったのか、あるいは意図的だったのか大型ネウロイに体当たりでの攻撃によりその命と引き換えに基地を守った。その光景を見た林や勇を含めた隊員たちの落ち込み様は凄惨であった。部隊の状況を鑑みると、現状3人が戦死、つまり一小隊がいなくなつたのである。それはただの隊員ではなく、扶桑海軍変以来のまたは選りすぐりの精鋭や古参兵であることはその損害の大きさに拍車をかけていた。

「なあ副長……もうあの戦法はやめよう。」

「しかし、あれ以外の方法で大型ネウロイに有効な手段はありません。むしろあの戦法のおかげで被害が軽減されていると言つても過言ではありません。」

「だが、あの戦法は危険すぎる！事実手塚二飛曹は戦死したのだぞ！」

林は怒りを露わにして勇に迫った。勇はそんな林の気持ちも尤もだと理解しつつも反論する。

「隊長、我が隊の練度だからできる戦法なのです。それに手塚二飛曹は……最後に長符を打っていたとのことです。」

「なに……」

長符とはモールスを打ちつばなしにすることで、それが意味することは「我、これより自爆特攻せり」である。つまり、手塚二飛曹は分かっついて突っ込んだことになる。勇は基地の通信員からの連絡によりそれを知った際の通信員たちの悲痛な表情を生涯忘れることは出来ないかと悟った。林もまた目を見開いて呆然としている。勇は極めて軍務上を装って隊長である林に助言する。

「隊長は優しすぎます……手塚二飛曹の心意気を汲んでやって頂けないでしょうか。」

それを言った瞬間、勇は林によって殴られた。勇は殴られたことに驚き、自分が床に倒れたことに気づかなかったほどだった。林は血が滲むほど手を握りしめて、勇を睨みつけていた。

「……隊長？」

「副長、あの戦法は禁じる。」

「しかし！」

「二度も言わせるな！俺はカウハバ基地に行つて三号爆弾への魔力封入を要請してくる。それまでこの基地は任せたぞ。」

「隊長いけません！三号爆弾への魔力封入が上層部にバレたらそれこそ隊長職を？奪されてしまいます！」

三号爆弾は一定数の効果を上げていたが、大型ネウロイにはその装甲の表面を削る程度で今や無用の長物になり果てていた。さらに、先日の上層部の妨害の対価として受領した術式を封入した弾薬ですらギリギリ入手することができたのだった。あくまでも勇たちに課された命題は非ウィッチ戦力による反撃なのである。しかし、林はそれすら厭わず身を挺して運命を変えようとしていた。

「カウハバ基地で無理なら502に頼むまでだ！あそこはそれなりの対価を払えば何とかしてくれると専らの噂だからな。」

502統合戦闘航空団、カールスラント空軍大尉であるグンデユラ・ラル率いる部隊は、「ブレイクウィッチーズ」と称されるほど勇敢であるが、物資の消費が激しく、補給にいつも四苦八苦している。それを利用してこちらが必要な物資を入手する手段は暗黙の了解で行われているが、343空の第一中隊においてはそもそも課せられたものが異なる。勇は即座に反論する。

「それでは確実に処分されてしまいます！隊長がいなくなればこの部隊はどうなるのですか?！」

「私が処分されるまでこの部隊が保てばそれでいい!!隊員たちは家族だ！これ以上失うことは隊長であるこの俺が許さん！」

自己犠牲を払おうとする林に勇は怒りが込み上げてくる。いつかの自分がそうだったように、きつとミーナやバルクホルンたちも今の様な気持ちだったに違いない。だか

「らこそ、勇は一步も引く気はなかった。」

「隊長、隊長がいなくては、親を失った家族は離散するしかないのです。それでも隊長はやるとおっしゃるのですか？」

「くどいっ！」

「そう・・・ですか。それなら隊長の副官でもある私にも覚悟があります・・・垂直降下戦法を続行します！」

勇が堂々とそう宣言すると林は固い表情のまま対立の姿勢を露わにする副官と睨み合った。幾秒かの時が経っただろうか。二人は視線を変えずに互いに互いが自分の考えを改めないことを理解した。それは正に決別であった。

「・・・私はカウハバに向かう。いらんことに固執して大事な隊員を失いたくはないからな。」

「そうですか。自己犠牲なんてもうまっぴらなので、そんな指揮官はこちらから御免被ります。」

「頑固者」

林は隊員を失いたくないと言う尤もな言い分に、かつて自分も経験した自己犠牲という周りの気持ちを考えない行動を嫌う勇の両者とも間違っていないだけにどちらも譲ろうとしない。譲ろうにも生来の頑固さ故認めようとしなかった。互いにこれが最後の会話になることも知らずにである。

林は輸送機として運用されている一式陸上攻撃機に搭乗して翌日にはカウハバ、502基地のあるペテルブルグに向かってしまった。勇はそんな林を見送らず、機体の整備に明け暮れていた。

「……」

「副長、隊長行っちゃいましたよ？」

「藤野、隊長は隊長の任務があるだけだ。だから……気にするな。」

「だいぶ口論なされたようですが……」

藤野は勇と年齢が近いだけあって勇も最近はよく話すようになったが、相変わらずお節介な性格の様だった。もはや勇の副官のような存在になりつつあった。そんな藤野だが、勇と小隊を共にしてからというもの成長が著しく、いまや大型ネウロイに臆す

ることなく勇と共に突っ込んで行く最初の頃のような醜態を晒すことなどない優秀なパイロットとなつていた。

「いつからお前は俺に口答えできるようになつたんだ？いいからほつといてくれ。」

「しかし、先日の出撃で一小隊分の戦力が消失し、我が方の戦力は林大尉を除くと大幅に下がることになります。沖海少尉、今井一飛、手塚二飛の三名が戦死し、中隊長代理を勇中尉にしますと第二小隊長は榊少尉、第三小隊長は大関少尉の三小隊編成となつている現状、第一小隊は林大尉が不在のため定員を満たしません。これは由々しき事態です。」

藤野は勇に命を救われたとき以来、勇を心底崇拜しており、小隊の定員を満たさないことで自分が異動になることを恐れての発言だったことに気づいた勇は眉間を摘まみながら答える。

「そうか・・・第一小隊は俺と藤野の二人でいいだろう。隊長の考えは別として、任務が終了すればまた戻ってくるのだから。」

「そうですか！ありがとうございます！了解しました！」



満面の笑みを浮かべ勢いよく敬礼すると持ち場に戻っていく藤野を見て、勇は軽い頭痛を覚えつつ僅かに心が和んだ気がした。しかし、悠長に事を構えてはいられなかった。林の独断行動は源田司令がこの基地に来るまでの僅か数日しか猶予は残されておらず、逆に勇たちには源田が来るまでに大型のネウロイへの対抗策及び前進拠点であるリガへの進出の目途を立てておかねばならなかったのだ。つまり、この基地での最上責任者は勇となってしまう現状、指揮官として皆を率いていく立場となってしまうのだ。この上ない立場を押し付けた林にいらつく勇だったが、部隊が危険な状態にあるため早急な対応策を練っているが、勇としても林のような打開策はなく、現状維持が精一杯だったことがなおさら腹を立てさせた。

(頑固者め・・・)

一方、林はというと機上の人となっていた。一式陸攻に搭乗し、荷物のように運ばれる感覚は久方ぶりで自分が運転しないという行為が妙に罪悪感を掻き立てた。所謂職業病である。そんなことを考えているのももつたいないと思ひ、林は勇と口論になってしまったことを振り返る。出会った頃から尖った才能を見せつけ、自分の部隊に移動に

なってきたときは赤松貞明の推薦と言うこともありどんな厄介者化と心配してみれば、お堅い戦法で自分と歩調が合わず、互いに苦勞しながらも、周りの隊員と交流していくにつれて自分のやり方を、自分の在り方を見つけていった時の少年のような輝きは今でも忘れることができない。さらに、今では自分の右腕として隊を率いる人物にまで成長し、口論になり何も言わないで来てしまったが、部隊を任せるのにこれほど心配のいない人物は他にいないであろうと安心していた。常に自分の後ろにいて、時には己の力量で戦況を切り開くことのできる赤松勇という人物に林は全幅の信頼を置くほどになつていたと今になって認め直す自分がいた。それが、上層部のいらぬ政治的配慮とやらで部隊が危機にさらされ、勇と口論になつてしまい迷惑この上ないこの現状に林は軍帽を深くかぶり直した。敵に臆することなど生涯で一度もなく、周りからの評価では「仁将」などつけられているが、林にだつて我慢できないことくらいあった。自分の行動は現状を打破しうる唯一の策なのだが、これを勇に反対されることが我慢ならなかった。勇には後ろに、自分の考えに賛同してほしかつたし、自分についてきてほしかつた。だが、この輸送機にはだれもいない。この空っぽな空間が寒々しく、林には耐えがたかつた。

「隊長、もう少しでカウハバ基地に到着します。」

「頑固者め……」

「はっ？何か言われましたでしょうか？」

「……何でもない。」

勇と林の同じ言葉は時を同じくして空しく空に吸い込まれていったのだった。

時と場所は変わり、連合軍東部軍司令部にてリガ前進拠点攻略に向けた会議が開かれていた。

「我々人類の大いなる先駆けのために、何が何でも非ウィッチ戦力による攻略が不可欠である！そのために扶桑海軍343空第一中隊には早急にリガを落としてもらいたい！」

そう息巻くのは東部軍参謀の牟田口廉也陸軍中将であった。この人物は扶桑本土から栄転という名の左遷された人物であり、女遊びや思い付きの作戦などの各方面からの評判に優れない愚将だった。しかし、とりわけ記憶能力に秀でており、陸軍の歩兵経典など諳んじられるほどであり、上司に取り入ることや自分の戦果を増すことにおいて非凡な才能を発揮していた。しかし、勇たちが所属しているのは海軍であり、陸軍である

牟田口にとやかく言われる理屈はないのだが、非ウィッチ戦力という文言が各方面の軍人や政治家にとつて垂涎の的となつているため牟田口に続くものも多かつた。そこで満を持して反論したのが源田だった。

「お言葉ですが、最前線で戦つているのは我が扶桑海軍の将兵であるということをお忘れか。さらに無駄に非ウィッチ戦力に拘るなど愚の骨頂、言語道断である。今すぐ現地に協力できるウィッチ戦力を投入してください。」

「非ウィッチ戦力であるということは既に決定事項なのだ。ウィッチでなければ東部軍の戦力を持つて歩兵や航空戦力を投入可能ではある。なぜ源田司令はウィッチ戦力に拘るのか。いささか反人類的発言ではないかね。」

「なんだと!？」

この反論の応酬を東部軍総司令官のオラーシャ陸軍大将のジューコフは頭を抱えて聞いていた。どちらの言うことも一理あり、非ウィッチ戦力による攻撃が成功すればそれはそれで魅力的な、人類にとつては希望の星になることも確かだった。そして、秘密裏に仕入れた情報によると343空の指揮官である林大尉が独自にウィッチ側と交渉していることも確認している。しかし、現段階で投入可能な兵力（非ウィッチ戦力）は

大陸本土の橋頭保を確保するのに十分なものとは言えず、むしろここで徒に戦力を投入することは避けたかった。

「諸君らの言い分はよくわかった。しかし、どちらかだけを採用するというのには問題が多すぎる。よって、限定的戦力の投入を検討する。具体的には1週間後に歩兵及び砲兵の混成旅団と航空艦隊を宛がうものとする。そして、それまでの期間に343空の存在が危機的になった場合、この戦力は間に合わないことが予想される。よってその間ウィッチ戦力の運用を認めるものとする。該当の統合戦闘航空団のウィッチに派遣要請を出したまえ。」

このジューコフの言葉ですべてが決まり、源田は3日後に前線視察と激励のために勇んでいるサーレマー島基地に飛ぶこととなった。しかし、これに気を良くしない者がいるのだった。

「ちつ、結局は陸の戦いが勝敗を決するというのに海軍のデカ口は・・・そうだ！名案を思い付いたぞ！副官!?副官はいるかあ!!」

牟田口の策略が巡る中、林は急遽源田を迎えに行く算段を計画し、司令部に暗号電文にて報告した。というのも、現状を素直に話せるのは司令である源田しかおらず、誰にも聞かれたくない話を緊急で行うには同じ飛行機に乗るしかない。そのためにわざわざ基地司令部要員は別の輸送機にさせる徹底ぶりだった。そして、既に協力を取り付けた502統合戦闘航空団の内、航続距離の長いユニットを有する管野直枝少尉と下原定子少尉をヘルシンキに呼び寄せた。当初限りあるウィッチ戦力を限定されたとはいえ一時期でも借り入れるというのは相当な困難だった。隊長のグンデユラ・ラルに至っては酒やチョコレートなどの嗜好品を全て巻き上げる算段だったが管野の協力を取り付ける際、模擬空戦の決着次第では妥協してもいいとのことで一戦交えてきていた。その勝敗はもちろん管野と下原がヘルシンキに来ていることが物語っている。しかし、林はこうも感じていた。管野直枝という人物はうら若き少女でありながらきちんとした素養があり、乱暴でガサツではあるが空戦技術とその度胸においては勇に通ずるところがあり、きつといいペアになることが伺えた。そして、現在はカウハバ基地に来ていた。

「・・・となると、我々もその作戦に一枚噛んでほしいと、そう仰るのですね。」

「そうなる。もちろん謝礼と言う形で何らかの恩は返すつもりだ。そちらの言い分も十分考慮しよう。」

「そうですか……まあ、こちらとしては各かではないのですが、隊員たちが何とというか……それは承知してくださいますよね？」

林も以前この基地に来た際にここの隊員たちの態度は十分に理解していた。しかし、それでも大型ネウロイの脅威に比べたらどうということとはなかった。だからこそ、階級も年齢も下の本来守るべき対象である少女に頭を下げて頼んだ。

「この通りだ。我々の隊員を、助けてほしい。」

「……本来我々は北方軍司令部の管轄なのですが、いえ、いいでしょう。ここは人徳です。林大尉のその心に免じて応援を出しましょう。」

「ありがとうございます。アホネン隊長。」

温かな人情を感じ、林は本当に戦争しているということを改めて恐ろしいことだと認識した。

そんな会談をしているうちにあつという間に源田を迎える日になってしまった。林は既に機上の人となり、源田と合流していた。

「久しいな、林くん。」

「司令も変わらないよう。」

短い言葉ながら互いの再開と、これから始まる戦争への困難を分かち合っていた。そして、勇の待つ基地に向かうべく先を急ぐ。そのことは勇のいるサーレマー島にも伝わっていた。

「副長、隊長と司令を乗せた輸送機がこちらに向かったとのこと。」

「そうか、万が一のこともある。護衛を出すわけだが……そんな余剰戦力あるわけもなし。どうしたものか。」

既に第一中隊は定員割れも甚だしく、現在8人のみの戦力しかないと司令たる源田と隊長の林を護衛する戦力を持ち合わせていなかった。しかし、要人を乗せているため危険な進行ルートで来るはずもなく、勇は暗号電文による進路予想図の道中に護衛機を向かわせる最小限かつ最大の戦力を投入する予定だった。しかし、藤野の言葉でその予定は大きく疑うべきものになってしまう。



「しかし、9時22分にヘルシンキ沖を南西に30キロ行った所で合流なわけですから、戦闘機でならすぐですよ。護衛機を出すべきです。」

「そうだな、そこまで近いなら・・・ん？藤野、今何と言った？」

「はい、9時22分にヘルシンキ沖を南西に30キロ地点で合流です。」

「・・・どうしてそれを藤野、お前が知っているんだ？」

「え、どうしてもこうしても通信で報告が・・・はっ!？」

藤野もようやく事態が最悪になり得る可能性があることに気づいたようだった。それもそのはずである。本来、通信は秘匿され、なおかつ要人の移動ともなると細心の注意が払われなければならないのだ。それがこともあろうに一般通信で報告されているのである。ネウロイに通信が傍受されていた場合、それは勇たち343空の指揮官が根こそぎ攻撃されることを意味する。冷や汗が一気に噴き出すのを感じながら、急いで指示を出す。

「藤野！お前はすぐにウィッチの応援を要請しろ！あとは総員出撃だ！基地要員は避難させるぞー！」

頭をフルで稼働させ最適な行動を取るべく動き出す勇だったが、緊急の行動であつてもしかしたら襲撃はないかもしれない。しかし、だからといって行動しないわけにはいかなかった。だが、勇の予想は最悪の形で実現してしまう。基地通信員が勇の前に転がり込んでくる。

「副長!!緊急です!リガ方面から大型ネウロイと思しき反応が二つ、急速接近中です!」  
「なにっ?!こんなときにそれも二機だと?!」

まさに絶望的な状況だった。しかし、林たち輸送機は守らなければならず、この基地も同時に守らなければならない。藤野や隊員たちが見守る中、勇は肩をワナワナと震わせながら命令する。

「第一、第二小隊はここで基地防空戦闘を行う。第三小隊は司令と隊長の護衛だつ!」  
「副長・・・それだけでは。」

藤野を含め他の隊員も自分たちだけではとても防ぎきれないことを目で訴えてきていた。しかし、勇としてそのことは百も承知であり、これが最善の策なのだということも

分かっていた。ただ、これを命令するかどうかが指揮官たる役目だった。つまり、仲間に死ねと命令することである。

「基地通信員は可能な限り応援を呼び続ける！隊長がもしかしたらウイツチや応援を頼んでいるかもしれない！諦めず、最後まで己の任務を果たせ！もうこれ以上誰も失いたくはない、だが、命を懸ける他生きる道はないんだ！」

勇の鬼気迫る言葉に隊員たちは覚悟を決めたように口を結ぶ。勇もその雰囲気を感じ、命令する。

「全機、発進準備……」

「はっ！」

全員即座に自分の愛機に乗り込みにかかる。その走る姿は一つの迷いもなかった。そして、勇も自分の機体に入り込むと初老の整備員が話しかけてきた。

「副長、隊員たちをよろしくお願いします。」

しっかりと目を見据え放ってくれた言葉は温かく、また帰ってこなければと本能的に勇は思った。そして、次々と発進していく戦闘機を見送る基地要員がこぞって見送っていた。その隊員たちは皆口々にこう叫んでいた。

「343空第一中隊、万歳！」

「万歳！」

「「ばんざーい！」」

必ず帰ると別れを告げ、勇たち第一、二小隊は基地の南側から接近する大型ネウロイに狙いを定め、大関少尉率いる第三小隊は源田と林の輸送機護衛に向かっていった。

## 新たな翼 第六話

一方、機上の林と源田はというと、基地現状の意見交流を行っており、勇たちの危険信号に気づくはずもなかった。

「では、牟田口中将が非ウィッチ戦力に拘っている第一人者と言うわけですか・・・これは厄介ですな。」

「牟田口くんはおろか、一定数の非ウィッチ戦力希望はどここの国にもいるからな。こちら側が一枚岩でなくてどうするのやら・・・」

「司令、地上より通信らしきものが入っています。」

一式陸攻の通信員が話しかける。普段なら内容や送り主などの詳細を報告するはずがなんと煮え切らず、林が注意する。

「所属と管姓名くらいきちんとなんて伝えろ。」

「まあまあ林くん、なんだね？」

「はい、申し訳ありません。おそらくサーレマー島からの通信だと思われているのですが……  
感度が悪く。」

機材の故障と敵の妨害電波の両方を懸念する二人は、急いでその両方に対処できるような指示を出す。林が代わりに出ようと受信機に手をかける。そこから聞こえてくるのはノイズばかりでほとんど聞き取ることができなかった。しかし、おそらく人間が発したような言葉の切れ端が唯一聞こえるのだった。

『……ちら、……隊……ジジツ……襲……退避……ガガガッ!』

「なんだ? 機長、なにかおかしいぞっ!」

「はいっ! あっ! 前方より味方機を確認! バンクを振っています!」

零戦が近付いてきたことにホッと胸を撫で下ろす機内は、零戦の慌てぶりに気づくことができなかった。第三小隊の小隊長である大関は必死に無線で呼びかけているがなかなか通じないことにやきもきしていた。バンクを振って敵の存在を知らせるもバンクを返しはするが、回避する素振りは見えないことから真意は未だ伝わっていない。これでは間に合わないと悟り、一度輸送機の直前をギリギリで飛行し、注意を惹きつける。

機長と思われる人物に向かって引き返す旨を伝えるとようやくわかってくれた。輸送機がゆつくりと旋回していると、三番機の八島が突如前方に出てくる。この行為に大関の背筋はなにか這いあがる冷気のようなものを感じた。すぐさま大関たち第三小隊は急上昇をかける。その様子を見て林も大声を張り上げる。

「敵機直上ッ!!」

太陽から小型ネウロイが複数襲来してきているのがだれの目にも捉えることができず。一体どこから来たのか、なぜここに敵がいるのかなど様々な憶測が過るが、そんな憶測すら本能からくる危険信号によって打ち消される。林の体は全身全霊をもって死という恐怖が支配する。しかし、その恐怖の元凶たる小型ネウロイは太陽の中からその黒い身体を煌々とどす黒く輝かせながら突っ込んでくるのだった。

この少し前、大型のネウロイの反応に向かう勇たちは緊張を宿しつつ周囲を警戒していた。間もなく会敵するはずだが、たった5機の戦力では大型ネウロイ一機を相手取るのすら不可能である。それが二機もいるとなると勝算はいかほどか、それを考えるだけでも憂鬱だった。しかし、その憂鬱をかき消す光景が目に入る。直線上の彼方に今は小さいが黒い固まりが二つ見ることができた。勇は仲間へ警告をする。

「見えたぞ！決して無理に押すな！敵の侵攻を抑えるだけでいい！応援が来るまで何と  
しても持ちこたえろ！」

合計5機の戦闘機は無謀にも大型ネウロイに向かって突き進んでいく。勇の言葉も  
既に心に馴染んだころ、ある異変に気付くのだった。

「副長！なんだか敵の様子が変です!!」

「まさか・・・嵌められた?！」

大型のネウロイが二機来襲しているのかと思いついていたが、片方の黒い大きな塊を  
よく見ると、少しづつ形が変形している、ずれていることに気が付いた。そう、これは  
小型ネウロイが密集して飛行し、あたかも大型ネウロイのように見せることで敵の存在  
を欺く偽装だった。それに気づいたときにはもう遅かった。その小型ネウロイの群集  
は一斉に散会を始めたのだった。

「くそっ！みんな、すまない・・・はっ?！」



勇たちを襲うかと思われた小型ネウロイたちは勇たちを相手にもせず一気にすり抜けて行ってしまった。突然の意味不明な行動に一瞬思考を奪われかけたが、どうしてその行動を取ったのかを考えるとその恐ろしさとネウロイがまるで自分たちを眼中にもいれていないかのような、そんな感じがして堪らなく腹が立った。

「くそっ！ 奴らの狙いは司令機だ!!」

「副長！ 間もなく大型ネウロイと交戦が始まります！」

「わかってる！ 基地に連絡・っ?!」 ビュン！

大型ネウロイは勇たちに邪魔はさせまいと攻撃を開始してきた。勇たちも急いで散会し、攻撃を開始したが一向に胸に響く警告音が鳴りやまないのだった。しかし、勇は諦めずに報告する。

「こちら343空第一中隊指揮官代理の赤松中尉！ サーレマー島基地応答願う！ 応答願う！」

「こちらサーレマー島基地、副長どうかしましたか。」

「至急連絡を！隊長が搭乗している輸送機に敵小型ネウロイが多数向かった！報告と近隣の基地から応援を要請してくれ!!」

攻撃をかわしながら必死にそう叫んだ。事の重大さに基地要員は気づくだろうが、今回ばかりはウィッチの出番だと、政治の話などお構いなしにそう願わずにはいられなかった。隊長である林が処分を受けることになると、この状況を鑑みれば部隊の全滅よりかは十分ましである。林の判断が正しかったと、今更反省したところで後の祭りだが、今の勇にはそんな後悔より隊長と自分たちの命がまさに潰えようとしていることに抗うことが先決だった。

(隊長……すみません。あなただけでも、いや、必ず生きて見せます！)

生きることの大切さを知っている勇からすれば、生きることが諦めることは絶対にできなかつた。しかし、絶望的なまでの脅威が勇の前に大きく立ち塞がっていた。

時は少し遡りヘルシンキ基地では、管野と下原が出撃準備をしていた。本来、出撃は3日後なのだが何日も待たされているため哨戒飛行と言う名目が出撃していたのだつた。

「はあ、俺としたことが戦闘機相手に後ろを取られるたあな・・・」

「管野さん、あれは完全に相手が格上の存在でしたね。うふふ」

そんなことを言いながら林との模擬戦を思い出し、確かに戦闘機如き鉄の塊がウイツチに勝てるはずがないと侮っていたのは事実だった。だが管野も一度決着がついてからごちやごちや言うのも決まりが悪いと思ひ、素直に従ったのだった。しかし、あの林という人物が言うには自分より凄ひパイロットがうちの部隊にいるとのことだった。それを聞いて管野は一度見てみたいと思つたのだった。

「へっ！今度は負けねーぜ！戦闘機だろうがなんだろうが、この拳があれば・・・」

「管野さん、ちよつと!?!」

『こちらサーレマー島基地、我敵の大規模襲撃に曝されり！至急応援を求む！繰り返す・・・』

目標の基地からの連絡だった。管野と下原はすぐにヘルシンキ基地に問い合わせる。

「こちら下原！サーレマー島基地が敵の襲撃に曝されています！至急私たちが向かいま  
すー！」

『了解した。よろしく頼ん．．ん？少し待て。』

「なにもたついてるんだ！早く行かねーと！」

焦る管野だったが、すぐに基地からの返答が来た。しかし、その応答に通信員も困惑  
したように返答する。

『あーその件だが、救援は必要ない。』

「なぜです?!」

『それがなんでも現在その空域には極秘作戦が進行しているらしい。だから救援は却下  
だ。』

「なんだそれっ?!助けを求めてんだろうがっ！」

『すまない、一介の管制官には判断しかねる。』

突如入った横やりに救援を阻まれたように感じた二人は顔を見合わせる。出撃は認  
められないが、確かに助けを求められているのだ。下原は何か考えを巡らしているが、

管野は一刻も早く向かってあげたかった。

「下原！かまうこたあねえ！行つちまおうぜ！」

「・・・」

「下原!!」

「分かりました。基地にはこう連絡しましょう。こちら下原、これより哨戒飛行を続行します。」

『それは・・・どうなっても知らんぞ。』

「はいっ！哨戒任務の許可はそちらの指揮官からいただいていますので！」

下原の機転により哨戒任務として出撃できることになった。管野は下原の思慮深さには恐れ入ったが、そう感心している暇もないため進路に向かった。

時を同じくしてカウハバ基地では智子とビューリングが出撃準備に取り掛かっていた。

「あんた今の通信聞いたわね！あらかじめ林大尉に言われて準備していて良かったわ。」  
「まったく厄介ごとを持ち込みやがって。智子、お前はあの少年が気になるんだろ？」

「そ、そんなことないわよ！この馬鹿！」

「顔に書いてあるぞ。愛しの人ってな。」

「この偏屈ウィッチめ・・・」

そんなやり取りをしていると大慌てでアホネンが飛び込んできた。それは慌てた様子で盛大にこけた。

「あいたたた・・・」

「隊長、大丈夫？そこ、どこかのおバカさんが潤滑油を塗って誰かを転ばせようとしていたから滑りやすいわよ。」

「心外だな。転ばそうなんて幼稚ないたずらはしないさ。ただ、いつも智子が隠し持っている嗜好品の一つでも落としてくれたらと思っただけ・・・とハルカが言っただぞ。」

「あんたね・・・」

どうしてこの基地はいつも誰かに一泡吹かせようとするのか意味が分からない智子だった。そして、飛び込んでこけたアホネンが痛がりつつも起き上がる。

「あいててて、うう心配してくれてるんですかあゝってそうじゃなかった！出撃は中止ですー！」

「どうしてよっ。」

「上からお達しがあつたんです。目標空域で現在極秘作戦が展開中だそうです。」

アホネンの簡潔な説明に二人とも疑問符が浮かぶ。極秘作戦が行われていようと応援を求められているのであれば駆けつけるのが道理である。それが妨げられるということが指し示すこととは、つまり上層部にとって都合なことが展開されているからである。しかし、現場の兵士でかつ直接助けを求めてきた林の所属する基地からの救援である。これで助けなかったでは不義理になってしまう。智子はもう一度許可を取る。

「隊長、私たちは行くべきだと思うわ。助けに行かず後ろ指指されるよりかはましだもの。」

「確かに、恨みは後から効いて来るとこの基地に来てから存分に思い知ったからな。」

智子に続きビューリングも出撃に賛同の意思を示す。こういう時は意見が合うのが智子とビューリングの不思議な縁である。しかし、アホネンはそれを聞いてなお首を縦

に振らなかつた。

「許可できません。」

「どうして?!」

「私たちが所属するのは北方軍司令部。ですが、林大尉の基地は東部軍の指揮下なので、ここでいざこざを起こしては私たちが大変なことになります。」

アホネンの言うことは正論だった。約束したとはいえ、直接行つてはいけないと釘を刺されてはいくら智子たちでも身動きが取れなかつた。盲目的になつてしまつていたのかもしれないが、智子を含め全員が陰鬱な面持ちだった。

「ホントに、軍隊つて……ごめんなさい。ゆう……」

時は現在に戻り、勇たちは苦戦を強いられていた。そびえ立つ大型ネウロイは一つもくたびれた様子がなく、対する勇たちは魔法弾をいくら叩きつけても一向に怯むことのないネウロイに嫌気がさしていた。垂直降下戦法も徒労と化しており、コアが一向に見つけることができずにいた。



「藤野！応援はまだ来ないか?!」

「今のところはなにも！」

「くそつ、俺たちを見捨てる気か?!俺らがいなきや非ウイツチ戦力云々も言えなくなるっていうの!!」

そうこうしているうちに弾薬を撃ち尽くす者や被弾するものが出始めた。

「第三小队西池二飛、被弾！」

「すみません副長！」

「俺たちが援護するからそのうちに基地へ戻れ！」

「ですが！」

「駄目だ！これは命令だ！」

西池は渋々了承し、敬礼を捧げ基地に戻って行った。これで残るは4機のみ。絶望的な状況なのには変わらないが、攻撃力が減るのは苦しかった。そして、さらに困難は続く。

「副長……我、残弾なし。我、残弾なし。御機嫌よう。」

そう告げると第三小隊長の榊少尉は垂直降下でネウロイに突っ込んで行ってしまった。

「榊少尉?! 待て駄目だあー!!!」

ズドーン

轟音を立てて特攻を敢行した榊はもう見えなくなっていた。生き残ると約束した仲間が一人消えてしまったことに悲しみと怒りが沸き立ってくる。しかし、その怒りと悲しみの感情を今ぶつける暇はなかった。頭を無理やり切り替え大型ネウロイを観察する。今しがた榊が突っ込んで行ったネウロイの尾翼部分が赤く輝いている。勇は目を見開き号令を出す。

「尾翼部を狙えええ!!」

一斉にありつただけの魔法弾を撃ち込む。ネウロイは痛そうに悲鳴を上げている。しかし、大型ネウロイは反撃に大威力ではなくハリネズミばりの攻撃を四方八方撃ちまくってきた。その時、勇の三番機の位置に入ってきていた熟練の小田一飛が爆散する。勇と藤野はその光景を目の当たりにしながら攻撃を続行する。もはや勇は必死だった。絶対に死なないと決めた自分だったが、今は本当に死ぬ気で攻撃を仕掛け続けていた。引き金を握力の続く限り握り続けた。藤野も追従してくるのが感覚的に分かった。

「墜ちろおお!!!」

勇は最後のチャンスとばかりに垂直降下からの即時離脱を試みた。しかし、榊と小田の犠牲も虚しく大型ネウロイは生き残っていた。もうこれまでかと諦めかけたその時、上空から閃光が下りてくる。

ズダダダダ!!

「おりゃー!!! 剣一閃!!!」

大型ネウロイだと言うのに主翼部分を一気にもぎ取るほどの威力の攻撃は明らかに

人間業ではなかった。その時の藤野の無線でようやくその正体を認識するほど勇の頭の中は真つ白だった。

「ウィッチです！ウィッチの応援です！」

改めて確認すると見慣れたユニットが目に入った。欧州に最初に来た頃から履き慣れたユニットである零式艦上戦闘脚だった。そして、それを駆使して大空を駆るのは正しくウィッチだった。この時ほどウィッチの存在に感謝したことはなかっただろう。大型ネウロイは形勢が不利になったのを悟ったのか方向を転換し、撤退に移っていた。

「待ちやがれ！」

少女が叫んでいるのを見てふと我に返る。勇は急いで無線で大型ネウロイの弱点を知らせる。

「やつのコアは尾翼部分だっ！」

「下原！」

「はいっ！」

下原と呼ばれる少女とその少女は一気に間合いを詰めると、海軍の二種軍服に身を包んだ少女が牽制役を務め、もう一人は天高く上り、なにやら拳が輝いているようだった。二人の息が合った攻撃に呆気に取られていると、先ほどと同じように上空から逆落としになって少女が尾翼部分に向かって突っ込んで行った。

「うおおおおおお!!」

拳に魔法力を纏わせて攻撃に特化させる技で大型ネウロイは光の粒となって消えた。勇も藤野もそれを一瞬たりとも逃さず見ていることしかできなかった。すると、拳でネウロイを屠った少女が近づいて来る。勇は頭を切り替えて感謝の言葉を述べる。

「こちら扶桑海軍343空第一中隊副長の赤松勇特務中尉だ。応援本当に助かった！ありがとう。」

「第502統合戦闘航空団の管野少尉とこっちは下原少尉だ。つたく、本当に大型ネウロイと戦闘機だけで戦ってやがったのか。」

「ということとは林大尉の要請で？」

「ああ、そうだよ。」

勇は安堵した。林が全ての話を収めてくれていたのだと、そう思うと今自分が生きていることに感謝した。安堵した気持ちを抑えて詳細を聞くことにした。

「よかった。では隊長も司令も無事か・・・本当によか」

「あ？隊長って何のことだ？」

その言葉に勇は凍り付いた。よくよく考えると確かに第三小队からの報告がない。そのことを考えると勇は無線に震える声で語り掛けるしかなかった。

「じゃ、じゃあ、林隊長と源田司令の乗った輸送機をあんた達は見てないって・・・そういうことか？」

「ああそうだよ。第一、要人の輸送がその極秘作戦とやらならそつちに護衛を回せつんだ。」

勇はもうどうにかなってしまいそうだった。無線に怒鳴りつけるようにしてウィツ

千の少女たちに言ってしまう。

「隊長と司令を見ていないって、それに大関少尉たち第三小隊は?! どうしてこっちに来ちまったんだ!!」

ウィツチの二人は驚いたようにこちらを見ていた。藤野は状況を理解しているため俯くしかできなかった。ワナワナと拳を震わせるもなにも情報がないのであれば自分が赴くしかない。勇は藤野に後を任せると顔で伝えると、分かったように小さく頷くのだった。

(隊長・・・無事でいてくれ!)

「おいおい、何だってんだよ。こちとらせっかく応援に来たってのに。」

「管野さん、あれが林大尉の言っていた・・・」

「ああ、確か・・・」

「赤松勇特務中尉・・・我々の副長です。」

藤野がぼつりと教える。せっかく果てしなく無謀で多大な被害を被った戦いが終

わったというのに、藤野は勇がこれから感じるであろう感情を推し量ると涙を流さずにはいられなかった。

そして、勇は目標地点の付近に向かって急いでいた。もう残弾も残っていないが、仮に今もお戦っているのなら体当たりだろうと攪乱だろうとやろうと考えていた。しかし、海に出ても目標地点の近くになっても戦場は見当たらなかった。最悪の事態としてもし輸送機が撃墜されていたとしても死亡している可能性も絶対ではない。なにかその痕跡がないかと必死に探していた。どうしても林に会いたい。会ってきちんと謝罪したい。自分が頑固なせいでもう二度と話すこともできないのは嫌だった。林に会いたい。そう願っているとヒーウマー島から無線が入ってきた。

『こちらヒーウマー島監視所。上空の戦闘機へ、先ほどこちらに零戦が一機不時着した。おいで願う。』

勇は急いでヒーウマー島に着陸した。もしかしたらなにか手がかりがあるのではと思いきい急いで戦闘機を降りる。すると責任者が出てきて事情を話してくれる。

「ヒーウマー島沿岸監視所のビレル少佐だ。大変なことになったな。」



「は？何のことでしょうか？教えてくださいませか?!」

「なんだ知らんのか？輸送機がネウロイの襲撃を受けてな、護衛機もいたみたいなのがほとんど撃墜されてしまったのだ。」

勇は目の前が真っ白になった。ただ、生存者がいるというその言葉だけを待っていた。

「こちらも急ぎ生存者確認のために水上機を出して搜索したのだがな。まあ、先ほど無線でも言った一機の零戦のみがここに不時着したというわけだ。他の生存者は・・・残念ながら。」

勇は膝をがっくりと落とした。もう何も考えられず、地面を踏みしめる気力も奪われてしまった。ビレル少佐が肩を揺すってくれているが、勇の意識は林の朧げな輪郭を思い出すので精一杯だった。すると、施設の中から自分を呼ぶ声があった。

「副長!!」

扶桑語で自分の役職を呼ぶ人物がここにいるとなるとそれはもう第一中隊の隊員しかいない。氣力を振り絞って声のする方に首を向けると、頭を包帯で手当てした第三小隊の八島がいた。僅かな希望に八島の下へ駆け寄ると八島も勇のもとへ駆け寄ってきた。

「どうした八島?! 隊長は?! 第三小隊はどうなった?!」

「副長お．．．すみません! すみません．．．許してください!」

八島は泣き崩れてしまった。何のことを言ってるのか勇は理解しなくなかった。頭の中に浮かんでくる全滅という二文字を強制的に消去してはまた浮かんできてしまい、自分でも分からない怒りが募っていく。

「八島あ!!! 泣いててはわからん!! 隊長はどうしたんだ!! 生きているんだろ?! 隊長が死ぬはずなんて．．．」

「副長、わだじは．．．守り切るごどが．．．できませんでしたあ．．．」

勇はもうここからの記憶はなかった。気づいたときにはヒーウマー島から戦闘機に

乗ってサーレマー島基地に戻っていた。戻ってきたときには藤野と西池、ウィツチたちが出迎えていた。ヒーウマー島からの水上機に乗って八島も到着したようので急いで基地要員と下原に手当てされていた。管野が勇に近づいて来る。

「おい、しつかりしろよ！赤松！」

「……応援感謝する。貴官らは無事に帰還されたし……」

生気のない声でそう呟くと、通信員が駆け寄ってきて東部軍からの通信が入ったとのことでの対応にあたる。その姿を見た管野はこう呟いた。

「あれが『荒鷲の副長』かよ……本物だけど、虚しいな。」

「ええ、気の毒でなりませんね。それと管野さん、ユニットどうします？」

「あつ……またサーシャに怒られる……まあ、持って帰るにしても怒られるならここに置いたままにすれば、またここに来た時に使えるだろ。」

「どうなつても知りませんよ。」

この日の戦果は非公式に勇たち第一中隊が大型ネウロイ撃破、小型ネウロイ複数撃墜したと報道された。しかし、現状は司令と指揮官を含め6人の戦死が確認された。事実上の壊滅である。当初12人いた第一中隊は副長の勇と藤野、西池、八島の4人となつてしまい、稼働機も4機のみと全滅に近い被害を被つていた。辛うじて基地の防衛には成功したが、指揮官を失つた第一中隊はもはやどうすることもできないでいた。

翌日には指揮官を乗せた輸送機が撃墜されたため、東部軍から人員が派遣された。その人物とは牟田口陸軍中將であつた。失意の中喪に服す時間もないまま、上級将校が現れたため勇たち残された第一中隊人員は牟田口を出迎えていた。

「ふむ、ここに噂の海軍343空の基地か。なんとも見すばらしい。どれ隊員たちを元気づけてやらねば。うひひひ」

牟田口は基地人員を集めると弁舌を始めた。

「諸君っ！先の戦闘の詳細は聞いた。実に惜しい人物を失くした。私としても心を痛めんばかりである……だが……」

牟田口の言葉に最初全員が涙を堪えた。しかし、続く言葉に全員の心臓は驚掴みされるように締め付けられるのだった。

「だが、この愚か者どもめがあ!!指揮官も碌に守れぬ無能どもめ!」

全員の顔は青ざめると言うより啞然としていた。この人物が一体何を言っているのか誰も理解できなかったからである。だが牟田口の言葉は止まらない。

「貴様らの精神はたるんどる!ウイツチなんぞに頼るだど?!恥を知れ!今日の報道でワシがどれほど労力を割いたことか!貴様らの戦果にしてやったワシに感謝しろこの能無しどもめ!」

止まらぬ罵詈雑言に耐えるしかなかった。藤野なんかは今にも陳情を訴えんばかりに拳を握りしめていた。ただ責任者である勇を見て誰も口を開かずにいた。その勇はというと何も言わずただ拳をぎゅつと握り耐えるだけだった。

「指揮官は前に出ろ!」

大声に全員の視線が勇に集中する。勇は無言で前に出ると、牟田口の目を見て立ち尽くす。牟田口はそれを見てニヤリと嫌らしい笑みを浮かべ、腰に下げていた鞭のような棒を振りあげると、勇に向かって振り下ろした。バチンという打撲音は木霊する光景を一同が沈痛な面持ちで見っていた。その度に牟田口の口角は上がり、あたかもこの状況を楽しんでるかのようだった。一頻り叩き終えると牟田口は満足そうに言い放つ。

「諸君つーこの汚辱を晴らすにはリガに前進拠点を構築するほか道はない！死ぬ気でかれ！さすれば貴様らの死んでいった無能な魂ですらようやく靖国にいけるといふもの。よいな？」

先ほどの茹蝟のように怒った形相から今度は仏のように微笑む表情の裏に悪魔が潜んでいると全員が感じた。しかし、叩かれて顔が青紫に腫れた勇はもう一度牟田口に向き直る。

「牟田口中将殿……我々は必死に戦いました。それはもう自らの命に代えて任務を遂行してまいりました。だから、無能な魂と言ったこと、訂正して頂きたい。」

「き、貴様……この恥知らずがあつ！」ボカッ！

さらに強く叩かれる勇。だが、何度ふらついても絶対に立ち上がり牟田口に同じ言葉を繰り返すのだった。それを見かねた八島が庇うように前へ出る。

「中将殿つーご勘弁ください！これでは今後の作戦に影響が出ます！我々でリガを攻略します！してみせます!!」

「ほう、物わかりの良い者もいるよ。ふひひ、では4日後、地上部隊をリガに送る。もうこれは決定事項なのだ。制空権と地上攻撃しつかりと頼んだぞ？」

4日という絶望的な日数を聞いて全員青ざめる。不可能なことを言われているのは分かってはいるが誰も反論できない。また勇が叩かれると分かっているからだ。牟田口はニツコリ不気味な笑みを浮かべて言い渡す。

「大型ネウロイをも撃墜する諸君の奮闘に期待するつ！あとそうだな、前任者がいないのであるならワシがこの部隊を接収する。部隊名が必要だな……そうだつ！貴様らごときには勿体ないが、新聞に良い言葉が載っておったわ！この部隊を以後『荒鷲隊』と

命名する！ワシのためにせいぜい尽くすように。うひひ」

狂気の指揮官が着任してしまったサーレマー島基地は「荒鷲隊」と名称を改名し、地獄の四日間に従事した。朝晩を問わず出撃し、地上目標に対し爆撃や銃撃を加えていった。しかし、このような不遇な環境下でも不思議なほど部隊の結束は強く、皆勇を責任から解放してあげたい一心で付き従っていた。やがて期日の四日が経過し、ついに地上部隊がリガに上陸を開始することとなった。しかし、勇はずっと静かなままだった。

「上陸よーい!!」

東部軍の臨時編成部隊がついに上陸を開始した時、ネウロイはすでに駆逐されていた。上陸した兵士は皆拍子抜けしたという。これにより牟田口は東部軍内での評判はうなぎ登りに上がった。壊滅しかかった荒鷲隊でのリガ沿岸地域の制圧という偉業は牟田口を有頂天にさせた。これにより牟田口は前線拠点を構築した英雄とあだ名され、報道陣に持て囃されにさつさとサーレマー島基地を後にしようとした。

「赤松中尉、よく成し遂げてくれたぞ！君こそ世界の窮地を救った英雄である。我々人



類はこの地よりネウロイを駆逐するであろう。今後とも尽くしたまえ。くひひ。」

勇はこき使われた挙句に恩賞もなしと散々の使い捨ての駒にされたが、なにも反論できなかつた。しかし、牟田口の余計な一言が勇の心に火を付けた。

「あんなちんけな上官よりワシの方がよっぽど人類に有益じゃな。この世から消して正解じゃったわい。ふひひ。」

その一言で勇は顔を上げた。この牟田口という人物こそ、源田と林の乗る輸送機の行動日程を通信に流した張本人であり、あまつさえウィッチ部隊を引き留めた人物、その人である。勇は久しぶりに目の前が真っ赤になるような怒りが込み上げた。今まで散々ひどい目に合わせられてきたが、人命まで手にかけてとはいかに人の所業とは言え許すことは出来なかつた。震える手を制することもせず、怒りに任せて背中を向けた人の被った悪魔に一太刀浴びせなければ気が済まなかつた。隊長である林から受け取った軍刀に手をかけ、その刃の白い輝きが垣間見えたところで待ったが入る。邪魔する者でさええ切ろうとしていた勇が憤怒の表情を向けた人物は藤野だった。

「隊長……駄目です。どうか収めてください！」

「藤野！止めるな！俺はあいつだけは許すわけにはいかないんだ！天誅なんだ！」

「いつか必ずあいつの悪行が世に知れ渡る日が来るでしょう。だから、今は我々と共に生きてください！今隊長に居なくなられたら、我々は本当の意味で生きたまま死んでしまいます！だからどうか……」

藤野の説得で勇は青筋が引かぬうちにゆっくりと刀を収めた。そんな寸劇が繰り広げられていることも知らず、牟田口は徐に勇に向き直ると笑顔で昇進の話を持ち掛けるのだった。

「そうじゃ！赤松中尉、貴様を現時刻をもって大尉に昇進させる。英雄のこのワシが推薦するのだ、誇りに思うとよいぞ！かっかっか！」

そう高笑いすると車を発進させ、姿は見えなくなつた。勇は荒鷲隊の隊長として、亡き林と同列の位に並んだことを恥じ入るばかりだった。

そこからの荒鷲隊の活躍は目を見張るものがあつた。現地部隊からは黒いネウロイを追い払う存在として「ブラックイーグル（黒鷲）小隊」と呼ばれたりしていた。しか

し、その裏では勇たちは蓄積された疲労や重責と言ったもので追い詰められ、些細なことでも気に障るようになってしまった。

「隊長っ！」

「……その隊長呼びはやめてくれ。俺たちの隊長は林大尉ただ一人だ。」

「あ、すみません……」

「……で、なんの用だ？」

「西池二飛が腹痛とめまい、頭痛を押して出撃していきまして……本人は大丈夫だと言っているのですが心配で。」

「そう……か。そうだったのか。俺はそんなことにも気づけなくなっていたんだな。」

パイロットにとって体調管理は大切なことで、いつ上空で体調を崩して墜落してもおかしくない上、それは死を伴う危険なことであるからだ。勇は自分のことで精一杯で貴重な仲間の体調面まで気を配る余裕がなくなっていることに気が付いた。これでは隊長の代わりを務めるのは失格だなど、勇は自嘲した。だがこの世の不運は勇たちにまだ働けと無情にも強制しているかのように、戦場を用意していた。

ウウウウウ

「敵襲う!!!」

その日はそれまで順調だった攻略地点の要塞化の目途が立った日に訪れた。オラーシャ陸軍のポポフキン中佐、前線指揮官はいつもに増してネウロイのおどろおどろしきにすぐさま勇たちに救援を要請した。その命令を受領した勇たちはすぐに出撃に取り掛かった。そのとき勇は朝に藤野から聞いた西池の体調の様子を窺うために声を掛けた。

「西池二飛、体調がすぐれないようだが？」

「大丈夫です。これしきのことです。休んでいては小隊長やみんなが報われません。」

「お前まで失ったら俺らはまたもや置いてけぼりだ。決して無理はするな。生きて帰れ。いいな？」

「私にはまだ死んでいった仲間たちの餞も満足にできていません。それが済むまでは八島共々生き抜いてやりますよ！」

西池の無理をして作った笑顔が勇の心に冷や水を注ぐ。頑張らなければいけない状

態を作った本人が自分だからこそ、その頑張りが痛ましかった。そして、西池は実は八島と同期であり、また同郷の仲間でもあった。それを考えると簡単に死んでくれるような連中ではないと勇も少し安心したのだった。

「じゃあ今日も頼むぞ。整備のおっさんが今日の飯は大福だと言っていたからな。」  
「それじゃあ張り切らなきゃいけないですね！」

大福と言うのは今日日ご馳走だった。普段から寂しい生活を送る勇たちに少しでも元気を出してほしいとの親心で、基地要員により好意で大福が振る舞われることになった。荒鷲隊の平均年齢は約21歳ととても若い隊員で構成されている。整備員や炊飯を担当する兵士から見ればまだ子どもと言つていい年齢だった。そんな基地を後に、西池は二度と基地に戻ってくることはなかった。

夕飯の席に座ると、四人分の大福が机に並んでいた。それを目にした勇はどうしようもない無力感に襲われた。藤野も大福に手が伸びていなかった。八島は泣きながらドンと机を叩くと立ち上がり言つた。

「西池は大福を食わんと言つとりました！腹が痛い！だから、俺が奴の分まで食いま

す！」

そう言うと、泣きながら大福を一口に詰め込んだ。腹の奥底から漏れ出る嗚咽を抑えるように大福を詰め込んでいた。勇たちはついに三人になってしまった。

その日から、ポポフキン中佐の進言により陸上兵力の増援を東部軍より要請することになった。輸送船やカタマーなどがサーレマー島に到着し、一時の賑わいを見せていた。そして、翌日には準備を整えた増援部隊がリガ前進拠点に向け出港し、勇たちも上空支援のため出撃していた。しかし、その時勇の無線に緊急電が割り込んできた。

『こちらリガ前線拠点司令ポポフキン中佐！至急応援を、ウがつー！……』

その通信の後に遅れて爆発音が響き、目指す対岸に大きな火炎が形成された。勇は何事かと急速に脳を回転させる。答えは明白で敵の攻撃に前線が崩壊したことまでは容易に想像がついた。考えるべきはこれからである。前進を継続か撤退であるが、前線が崩壊した以上、撤退すべきだと考えた。急いで上陸指揮官に通信を試みる。

『こちら荒鷲隊、前線は崩壊したと愚考します。撤退の指示を！』

『撤退の指示は出ていない。前進を続けろ。』

上陸部隊は報道に湧く牟田口の栄光を自分たちにもと考える上層部のごり押しだったために、撤退の二文字は眼中になかった。それでも勇はこの戦力だけでは勝てないと、再度撤退を促す。

「ですが我々の戦力だけでは到底太刀打ちできません！どうか撤退を！」

『それは上官に対する侮辱か？それとも抗命か？敵前逃亡と見做せば対空機銃の餌食だぞ？言葉は選んで言いたまえ。』

勇の必死の説得も成就せず、あまつさえ撤退すれば仲間から撃たれるとの警告に狂気を感じた。ここまでできてはやるしかない、そう腹を決めて勇は二人に通信を送る。

「こちら勇、これより上空援護及び上陸部隊の地上援護を行う・・・過酷な任務になるだろう。だが、どうか俺についてきてほしい。君たちをこれ以上危険に晒したくはなかったが・・・」

もしかしたら本当に誰も返つてこれないかもしれないと思った。これまで必死に生きて、いろんな人に守られて、いろんな人の屍の上に生きてきたのに自分の命令で命の灯を消してしまうのは本当に忍びなかった。だが、その思いは歌声によつてかき消された。

『貴様と俺とは 同期の桜』

同期の桜が無線から聞こえ、それは藤野の声だった。続いて八島も声を重ねる。その歌声に勇はもう言葉はいらないと分かった。覚悟を決めていざ突撃を開始した。

爆炎の向こうからはネウロイの大群が押し寄せているようだった。それに追われるように基地から兵士たちが海岸に向かって避難して来る様子が伺えた。勇たちはそんな彼らが無事にサーレマー島まで避難するまでの間戦線を持ちこたえることが任務だと感じた。上陸艇が間もなく上陸するということでネウロイの猛攻が始まった。ビームや機銃掃射が海岸線を薙ぎ払うように飛び交った。上陸用舟艇が何隻も炎上している。兵士は海に飛び込み、他の船に泳いで逃げるしかできなかった。勇たちは海岸付近に出てきたネウロイを掃射する。



「撤退までの時間稼ぎだ！ありったけぶち込んだら我々も撤退する！」

今回に限っては守るべき存在に自分たちの命も含まれると思うと攻撃に集中できた。地上型ネウロイを何匹も消し飛ばすと、敵も学習したのか一次後退を開始する。すると、後方より小型ネウロイの群れが飛び出す。これも今までのネウロイの常套手段だと勇たちも一度態勢を立て直す。しかし、如何せん戦力差が大きくすぐに攻撃から防御に専念せざるを得なくなる。いつの間にか勇の背後には3機のネウロイが張り付いていた。

「副長！背後に三機ついてます！」

「藤野！お前も自分の心配をしろ！俺は俺で何とかする！」

勇は攻撃を避けるべく海面ギリギリまで高度を落とす。プロペラが海面を叩く音が聞こえるがネウロイはまだついてきていた。

「しつこいやつらめ！これならどうだ!!」

勇はそこから僅かに機首を上げた。すると零戦の腹側の尾翼で海面を割る。強い水飛沫が背後のネウロイを襲う。ピツタリ背後を飛んでいたネウロイが体勢を崩し海面に激突、さらにその後ろのネウロイまでもがそれを避けるために高度を取ろうと機首を上げた。そこを逃がさず、海面に触れたことにより急速に減速した勇は前へ突き出たネウロイの腹に一連射する。見事にネウロイが光の粒になる。それを目撃した藤野は芸術的なまでの勇の行動に感心するが、すぐに危険が差し迫っていることに気づき、勇に警告する。

「副長！まだ後ろに!!」

「なっ?!」

全部で三機いることを失念していた勇はひやりとして後ろを振り返る。コックピツトから見える黒く輝くネウロイは正に勇を狙っていた。勇は咄嗟に操縦桿を捻る。その瞬間焼きごてを押し付けられるような痛みが大腿部を貫く。ちらりと目をやると赤い血液が左足を伝って足元に溜まっていた。間一髪胴体などの主要個所は避けられたが、機体に異変を感じた。燃料タンクなどの致命傷にはならないが一向に速度が出なかつた。藤野が攻撃を避けながら警告する。

「引き込み脚が出てます!!」

被弾したことで引き込み脚が飛び出てしまっていた。これでは満足に速度が出ず、格好の的である。勇は周りをもう一度見渡す。炎上した上陸用舟艇、海岸に倒れる無数の兵隊、白波を立てて引き返す船の姿が目についた。勇自身はこう感じた。自分はよくやった、がここまでであると。多勢に無勢で、あとは最後まで足掻いても撃ち落されるのが関の山だった。藤野を見やると、必死にこちらに来ようとしているが敵の攻撃に晒されており、来ることは出来そうもなかった。八島は既に黒煙を吹いており、もう長くはなさそうだった。せめて部下の二人だけでも助かってほしい、そう願った。しかし無情にも後ろにネウロイが来た。操縦桿をぐりぐり回すが一向に振りほどけない。ネウロイのビームの輝きすらゆつくりとした動きで見え、勇は人生で何度目の死を迎えようとしていた。

「くそっ……ごめん姉さん、約束果たせそうにないや。藤野、八島お前たちは生きてくれ……」

弱気だと自分でもそう思ったが、無意識に言葉が出て来てしまった。無線からは藤野の声が聞こえてくる。必死に自分のことを叫んでくれているのだろう。力がふと抜けそうになるが、その声の非常識さから耳にいやでも集中せざるを得なくなる。

「ああああああああああああああああ!!!」

思ったより長い絶叫だった。その声の主は藤野ではなくなんと八島だった。黒煙を吐いた機体を操り勇の方へ向かってくるではないか。後ろのネウロイにその声が聞こえたかどうかは分からないが、八島の殺気を放った突撃で攻撃位置を捨てて八島の対応に追われていた。

「俺らの最後の希望に近寄るなああああああああ!!!」

八島の絶叫は必死に勇を守るために張り上げられていた。どうしてこんな自分を、と疑問が渦巻くがこの隙に撤退を開始する方向に思考が動き始めた。

「八島あ！もういい！撤退だ！」

「はあいつ！」

「藤野、了解です！」

死にも狂いの攻撃にネウロイは攻撃の手を緩めていた。その隙に勇を始め戦場を脱出し始める。藤野も無事についてきたことを確認する。勇は痛む脚にも気に留めず、とにかくサーレマー島を目指した。

「八島助かった!!これよりサーレマー島に帰還する！二人ともついてこい！」

「はいっ！ですがまだ後方に敵が追撃してきます！」

「絶対に速度を落とすな！機体がどうなろうと基地を目指せ！墜ちても泳いで帰ってこい！ここまで来て死ぬことは許さんぞ！」

勇も生きるために必死だった。しかし、藤野と八島に比べてどうしても速度が出なかった。二人と徐々に距離が開き始める。それと同時にかなり距離があつたネウロイに追い付かれるようになっていた。藤野も助けようにも自分の機体も燃料タンクがやられており、基地までもつかすら怪しかった。最後まで八島は勇を助けようと勇に近づき始めた。勇は並び始める八島を窓越しに殴るゼスチャーで追い帰そうと拳を振り上

げる。

「来るな！俺に構わず先に行け！」

その迫力をもろともせずずっと寄り添うように飛行する八島。そつと無線に声が入る。

『副長、いえ隊長。私の最高の隊長。私の機体はもう持ちません。』

八島の機体を見ると所々被弾しており、エンジンもガタガタと非規則な振動を立てていた。そして震えるような、清々しいような声に勇は何度も見てきた「自爆」の二文字が過る。

「そんなこと言うな！必ず生きて帰れ！もう少しで基地なんだぞ！」

『隊長、これでは全員帰れません。基地に奴らも招待しちまう。後生です。やらせてください。』

「駄目だ！お前はまだ西池の分も生きなきやならん！これは命令だ！」

勇の言葉になおも反抗する八島はいつその時のためにと言った雰囲気で勇の目をしつかりと見据えて敬礼を添える。

『みんなの分まで生きなきゃいけないのは、これから生きていかなきゃいけないのは隊長、あなたです。あなたなだから今まで生きてくれました。もう十分生きました。隊長に私の命を差し上げます。どうか大事に使ってください。』

「なにを、なにを言っている・・・」

『今までご一緒できて、光栄でした！どうか生きてください！』

そう言うと黒煙をもくもくと立てながら上昇を始めた。その影を眺めながらどうしようもない勇は叫ぶことしかできなかった。

「ふざけんな！勝手に命なんて預けるな！お前は、お前の人生を全うしろ！俺は・・・俺はそんな崇高な人間じゃない！頼むから行かないでくれ、八島あ!!!」

勇が叫び終わっても八島は戻るつもりはなかった。弧を描くように後方に向かうと。

一番手前のネウロイに狙いを定めた。数機のネウロイは気づいて避けたが、反応に遅れた2機のネウロイは八島の機体と共に爆散して爆ぜた。爆ぜた瞬間を見て、勇は心がいつになく痛み始めた。まだネウロイは追ってきけていたが、こんなにも胸が熱く、痛くなったことはなかった。勇は最後に残された、最後の良心である藤野を守り抜くと心に誓った。

また、藤野もその光景を見て胸を熱くしていた。自分も勇と歩んできた数奇な運命を迎れば、命を捧げられる。今までの勇を見れば八島の行動も十分に共感できる、しかし、自分は勇と共に切り開くこの先も一緒に居たかった。この隊長ならきつと自分に未来を見せてくれる。そう感じていた。林が亡くなつてからも他の隊員が団結できたのも勇がいたからだ。だから、今この時、藤野は迫りくるネウロイから勇を守りたかった。死んでほしくない、自分を導いてくれる存在を失いたくないと藤野は強く願った。この願いは奇跡的に同時だった。その願いは世界に認められ、二人の胸の中に宿る。

「な、なんだ?！」

「これは・・・!?まさか!」

ネウロイからの攻撃が迫る中、胸の高まりと溢れる力を二人はそつと開放する。ネウ



ロイのビームが零戦の後方で弾き返される。ネウロイは驚いたように、もしくは諦めたかのように引き返していった。静寂が包む中、二人は驚きの出来事に目を何度も瞬かせただけだった。自分の後方に魔法陣が展開されているのだ。そして、溢れ出る力は胸を熱くする。藤野が困惑したように聞いて来る。

「ふ、副長、これは一体……」

「ああ……世界が俺たちの願いを聞き入れたぞ。」

二人の頭と臀部には荒鷲隊の象徴である鷲の羽が生えていた。

## 新たな翼 第七話

「ここ第501統合戦闘航空団が存在するヴェネツィアでは新たに人員が配置されることになり、そのウィッチの到着を待っていた。そんな待機中の人物の中にはミーナ・デイトリンドン・ヴィルケ中佐や坂本美緒少佐、ゲルトルート・バルクホルン大尉がいた。」

「それにしてもあれから2年か。懐かしいな。」

「それにしても驚くべき人物ね。まさかまたウィッチとしての彼に会えるなんて夢にも思わなかったわ。そうよね、お姉さん？」

「ミーナ?! 茶化さないでくれ! だが、正直嬉しい誤算だ。これで戦力が一層充実するだろう。」

ミーナの手元には綺麗な履歴書があり、その顔写真には懐かしの人物が写っていた。かつてこの501統合戦闘航空団の初期メンバーとして活躍し、無念にもウィッチの能力を失った伝説の人物だった。噂によれば再度ウィッチ化を果たし、各地で活躍。その

活躍は各地で轟き、撃墜数は前人未到の770機とされている超が付く大物に成長していた。そんな懐かしい元メンバーに思いを馳せていると基地に輸送機が到着する。

「来たわね。さあ、迎えに行きましようか。」

輸送機が滑走路に着陸し、扉が開く。そこから出てくる人物はその場にいた人物が予想していた体格より一回りも二回りも成長した赤松勇その人だった。軍服に身を包み、階級章には少佐の星が輝いていた。ゆっくりと階段を降り、隊長であるミーナの下にやってくるると自然な所作で敬礼をし挨拶をする。

「扶桑海軍少佐、赤松勇です。本日より第501統合戦闘航空団に着任、特殊遊撃任務の任につきます。」

「501にようこそ、勇少佐。着任歓迎するわ。久しぶりね。」  
「はっ、ミーナ中佐もご健勝そうでなによりです。」

しっかりと握手を交わしかつての友情を確かめる。やはり男子らしくすつかり成長し、身長はミーナが見上げる姿勢となり、声も幾ばくか低くなったようだった。

「ゆう、久しぶりだな。」

「坂本少佐もご活躍は新聞でも確認しましたよ。」

「もう階級も同じ少佐だ。それに敬語もいらんぞ。」

「わかった。」

坂本も挨拶をし、しっかりと握手して厚く、逞しくなった体躯に感心する。そんな中最も勇に会いたい人物が堪えられないように声を掛ける。

「ゆう!!」

バルクホルンは嬉しさと懐かしさや感動が一気に押し寄せて自分でもどんな表情になっっているか分からなかった。だが、決して凛々しいものとは言えないだろう。その証拠にミーナが早くも苦笑いしていることから分かってしまい、顔が熱くなっってしまう。余計に気恥ずかしくなった。しかし、勇はバルクホルンを見据えるとゆっくりと近づいて抱きしめた。

「姉さん……何にもまして会いたかった。」  
「ゆう……私もだ。」

感動の再開にだれも口をはさむ野暮はしなかった。少しの時が流れ、勇が離れるとその頬には一筋の光が流れたがだれも指摘はしなかった。感動の再開も済ませ、今度は講堂にて勇の挨拶となった。ほとんどが顔見知りであるが、一応現状の勇の紹介も兼ねて全員を集めた。もちろん勇も会ったことのない人物も含まれていた。  
講堂に集まる前、宮藤芳佳はリネット・ビショップ曹長に尋ねる。

「ねえリーネちゃん、今度来るウィッチ?の人ってみんな知ってる人って言うてたけどどんな人か知ってる?」

「うん、芳佳ちゃんが来る前に501を抜けちゃったからね。でも、私がここに着任するときまでにも大活躍してて、私の命の恩人でもあるんだあ。」

「へえ、リーネちゃんの命の恩人なら優しい人だね!よかった、怖い人が来たらどうしようかと思ったよ。あのペリーヌさんが緊張しているから。」

そこでペリーヌを見ると、本人はその会話を聞いていたのかむきになって否定する。

「緊張なんてしてませんわ！これはその・・・もう！素晴らしい人とだけ言っておきますわ！」

「すごい・・・あのペリーヌさんが素直に人を褒めるなんて。」

「なんですって?!」

そんなやり取りをしていると講堂に着く。席に座るときつそくミーナとお目当ての人物が入室する。扶桑人特有の黒髪と白い軍服に身を包んだ男がミーナの後ろについて歩く。宮藤はふとその人物と目が合う。宮藤は微かに漂う目の端の冷たさのようなものを感じた。しかし、そんなことはさておきすぐに勇の紹介が始まった。

「こちら本日着任した扶桑海軍の赤松勇少佐よ。主な任務は特殊遊撃任務と言って、要はここを拠点に自由に出撃が可能な人員よ。我々にも力を貸してくれるとのことなのでみんなよろしくね。あとは自己紹介よろしくね。」

「紹介に与りました、赤松勇です。皆さんおひさしぶりです。またウィッチとして501の皆さんと戦えると思うと嬉しく思います。またお世話になります。よろしくお願います。」

勇が自己紹介を終えると早速質問などに移った。そこで宮藤は質問を投げかけてみる。

「はい、宮藤さん？」

「あ、宮藤芳佳といいます。赤松さんはどういったお人なのでしょう。」

その質問にペリーヌが呆れたようにやや切れ気味で答える。

「はあ、あなたって人は……いいですこと！彼は私たちと同じウィッチ、いえウィザードと呼ばれる存在です。それも一度魔法力を失い、戦闘機パイロットとしても活躍し、その後ウィッチとして復活！最近は各地で活躍して今や撃墜数は770を超え、世界の救世主と言われる「荒鷲隊の軍神」でしてよ！同じ扶桑人としてしっかり覚えておきなさい。」

ペリーヌがすらすらと説明するが、当の本人は鼻頭をポリポリとかいて気恥ずかしそうにしている。ペリーヌは勇の武勇をどこからか入手しているらしかった。そこで

茶々が入る。

「ツンツンメガネのくせに人を褒めちぎるなんて坂本少佐とゆうの二人だけなんじゃないかあ。」

「あなた！人のことを何だと思つてらっしやるの?!」

ここまでがテンプレートのように思える勇は本当に戻つてきたんだと言う安心感に包まれた。そして、宮藤の質問とペリーヌの過大評価を訂正する。

「ああ、なんだか誇張されているようだが俺はそんな大層な人間じゃない。同じ扶桑人として気軽に接してほしい。また、君たちの教育係もミーナ隊長から頼まれている。これからよろしく頼む。宮藤軍曹。」

笑顔が清々しい軍人の様で宮藤はすっかり勇のことを優しい人だと感じた。これにて紹介は終わり、各々勇と談笑していた。勇はもみくちやにされながら和やかに時は過ぎて行つた。

その夜密かにミーナと坂本、勇の三人が司令室に集まっていた。その部屋は月あかり



だけが差し込むだけの明かりしかなかったが、それだけ内密の話をするのに雰囲気はピッタリのものだった。ミーナが口火を切って話は始まった。

「それでああなたの履歴書には綺麗ごとが並べ立ててあるけど、これは事実なのかしら？」  
厳かな雰囲気の中、ミーナの静かな口調は闇夜に溶けてしまうような勇に吸い込まれていった。

「事実は書いてあります。それ以上のことであることを聞きたいのであれば軍機に触れない程度ならお話しできます。」

「つまりは隠し事があるということね。」

「なあゆう、私たちとの仲じやないか。良ければ話してみてくれないか？」

ミーナと坂本の前に置かれた勇の履歴書にはこう記されていた。

『・サーレマー島基地にて司令及び指揮官の故意喪失

・大尉拝命

・原隊343空第一中隊壊滅

・無断逃走

・連合軍に身柄拘束

・少佐拜命

・501基地にて特殊遊撃任務受領』

これは明らかにおかしい人事異動と階級の昇級だった。そもそも拘束されてから昇級していることがおかしく、時系列が合わなかった。また各地で噂になるような武勲が一切記載されていないかった。何か勇自身が闇を抱えるとしたか思えなかった。

「私からお話しすることはありません。命令の通り動くだけです。」

「あなたの本当の任務はなんなの？」

「本当とは？」

ミーナは特殊遊撃任務という任務自体を疑い始めていた。ミーナたちがいる統合戦闘航空団自体、隊長であるミーナが尽力してようやくかき集めた部隊である。そんな部隊を内側から壊されてはかなわない。ミーナが勇を警戒するのは当然のことだった。

「悪評が出回っていることには謝罪申し上げます……が、ミーナ隊長もあまり私に関わ

ることは良案とは思えないと愚考します。」

「あら、それは脅しかしら?」

「どう取つていただいても構いません。ただ、他の隊員と極力衝突はしないことはお約束できます。」

「・・・それは助かるわ。坂本少佐はなにかあるかしら?」

「いや、ゆうが元気ならそれでいい。ゆう、お前もそれで損はないんだな?」

坂本の問いには勇は答えなかった。ただ、これ以上は聞くなと言う拒絶感があった。ミーナは勇を退室させると大きいため息を吐く。坂本がそつと肩に手を寄せる。ミーナのデスクから新たな書類を出すともう一つのため息が零れる。赤い文字で「極秘」と書かれている書類はミーナが独自ルートで入手したものだつた。

「はあ、思った以上に勇少佐の過去は深い闇に包まれているわ。でも調べただけでも戦果は故意的に紛失されているものが232件、司令部からの抗命による批判が13件、他現地指揮官からの推薦状や感情の類が7件と明るく褒めることができない存在のようね。」

これにより頭痛の種が増えたミーナだった。

翌日から勇は通常のローテを組まれた編成に組み込まれることとなったが、妙に単独もしくはハルトマン、ミーナとのペアが多くなっていたことに気にする様子はなかった。しかし、驚くほど基地に順応する勇にミーナは警戒をしているのがあほらしく感じるほどだった。というのも、宮藤の作るご飯に舌鼓を打ちその日の夕食は5度もお替りしたほどだった。

「な、これは・・・」

「お口に会いませんでしたか？」

「いや、いやこれは・・・ここまでか。これほどなのか！」

ものすごい勢いで食していき、その日から食事が楽しみの方になつていく勇を見て基地の隊員は愉快気に馴染んで行っているのだった。そして、宮藤とリーネ、ペリーヌの訓練を担当した日にはその醜態を見て表情が死んでいた。さらにそれを見学するミーナと坂本に凄い勢いで抗議をしてきた。

「ミーナ中佐！坂本少佐！あれはどういうことだ?!」

「まあ、宮藤は元は民間人だし、二人は一度軍籍を離れているからな。仕方ないとはいえこれでは使えないな。」

「使えないどころではない！もう一度訓練学校からやり直させろ！」

恐ろしい形相で講義し、口調まで荒つぽくなっている勇を始めて見たミーナは驚いたが、坂本は気にせず話を真に受けている。ミーナの中の勇は礼儀正しく言葉遣いも丁寧な好青年だった。

「そうだな・・・訓練学校に行っているは今後にはいろいろ支障が出る。」

「こんなことでは棺桶がいくらあっても足りないじゃないか！」

「ふーむ・・・」

「あの美緒・・・」

「ああミーナ、そうだなあそこに頼むしよう。」

「そういうことじゃ・・・」

宮藤たち三人はアンナ・フェラーラという魔女に訓練を頼むこととなった。ミーナの心労が増えたが三人がいないうちに他の隊員と勇の交流は進んでいた。というのも久

しぶりに編隊飛行をしようとなつたバルクホルン、ハルトマンの二人と飛行していた時のことだった。ミーナからの匿名の通信がバルクホルンに入つてからだつた。内容は『勇の今の戦闘能力が知りたい。だからハルトマンと模擬戦をしてほしい。』というものだった。バルクホルンは快く承諾し、いつもの訓練かのように模擬戦を指示する。ハルトマンは嫌々だったが、勇は何とも言えない表情をしていた。バルクホルン自体も人類でもハルトマンと自分の300機撃墜の記録は他の誰にも簡単に抜かせるものではないと考えていただけに、勇の撃墜数770機は驚異的なものだった。だから、どのように勇が成長したか見てみたくなつたのだつた。ちょうどペイント弾を装備しているため、すぐにも模擬戦が始められた。バルクホルンがルールを改めて説明すると二人は了承する。ここに人類ツートップの模擬戦が始まつたのだつた。

「よーい、始めっ！」

二人は勢いよく同高度から発進した。グルグルと旋回し、互いの後ろに着くべくしのぎを削っている。先に旋回を止めたのはハルトマンだった。

「先に後ろを取つたのは勇か。」

「ええ、これは見ものね。」

しつかりと見物するミーナと坂本は冷静に戦況を分析していた。空中戦はさらにヒートアップしていた。背後を取られたハルトマンが急降下をするとユニット性能の差から引き離されてしまう。勇は潔く後を追うのを諦め、距離を取る。そこを逃さず急降下で速度を付けたハルトマンが追う形となる。すると勇は捻りこみによりハルトマンの背後を取ろうとする。しかしハルトマンも急減速で取らせない。勇はまだ背後が取れないことを悟ると、急上昇をかける。ハルトマンは太陽の陰になった勇を狙えず予想を付けて牽制する。すると突然勇が目の前でハルトマンに向かって銃を構えていた。

「まさかつ！木の葉落としっ?!」

坂本が驚愕の表情を浮かべる。

ハルトマンはこの状況に驚き、咄嗟に自分の固有魔法を使用してしまう。

「シユトウルム！」

疾風に揺れる木の葉のように勇が体勢を崩す。その隙を逃さずハルトマンが射撃する。しかし、その弾は全て虚空を掴むだけだった。ハルトマンは目を見開いたが、その時ハルトマンの心をぎゅっと驚掴みするような恐怖が支配しかけた。冷や汗とともに振り返ると、そこにはどこから湧いたのか勇がびったりと逃げられない距離でハルトマンに銃を向けていた。ハルトマンはそこにいるのがもはや人間とは思えなかった。魔王かなにかではないかと錯覚するほどの殺気だった。そこで模擬戦終了のホイッスルが鳴る。

「そこまでっ!」

「へっ!」

ハルトマンは呆気に取られて変な声が出てしまっていた。勇はと言うとゆっくりと銃を降ろすと、ハルトマンに礼を述べる。

「ハルトマン、流石だったよ。まさかあそこで固有魔法を発動されるとはね。」

いつものような優しい口調に安心していると、微かに勇はこう囁いた。



「でも、俺じゃなきゃ死んでたぞ。」

その言葉に乗せられる殺気ともいえる重圧にハルトマンは先ほど感じたものと同じ感情が湧く。ふと勇を見るともう先ほどと同じような優しい表情に戻っていた。ハルトマンは勇に少なからず前と同じではない勇を感じていた。バルクホルンと嬉しそうに話す勇についてしまった。

「ねえ、あんた誰だよ。」

そういった瞬間の勇の悲しそうな驚いた表情を見逃さなかったが、バルクホルンが仲裁に入る。

「こらっハルトマン！もう模擬戦は終わったんだ！熱くなるなんてお前らしくない！」  
「ちがつ・・・そう、かも・・・はああ、なんだか疲れちゃったよ。あたし先に降りてるね。」

「あつこらハルトマン！まったく！ゆう、ハルトマンの奴にはあとで言っておくから。」

「トウルルーデ、別に気にしてないから大丈夫だよ。それよりここでのネウロイについて教えてよ。」

バルクホルンの話もそこそこに勇はバルクホルンと仲良くおしやべりに興じてしまった。そんな中ミーナと坂本が話し合う。

「まさかあそこまでの実力だなんて・・・」

「それにハルトマンの最後の攻撃の時、どうやって回避したのか私には見えなかったわ。」

「うん？そうか、ミーナには見えなかったか。」

坂本の煮え切らない様子にミーナは勇の実力の底知れなさに、さらに警戒するのだった。

翌日、宮藤達のいる場所にネウロイが襲来するが、彼女たちはそれを撃退。無事に成長して帰還した。さらに数日後、暑い盛りの頃、基地は薄着のウィッチたちであふれていた。一方の勇はシャーリーと一緒にユニットや武器の整備にあたっていた。

「いやーやつぱり私のマーリンエンジンは今日も最高だな！なあ、ゆうのユニットもいじってやろうか？」

「いやいい。それよりそつちの器具を借りてもいいか？」

「おう！ほらよつ．．．てどうしたんだ？」

「．．．いや、俺はいつか捕まるかもしれんと思つてな。」

「ん？」

シャーリーは男性である勇がいるにも関わらず下着のまま開放的なグラマラスな体を曝け出していた。そこにバルクホルンが飛んでくる。

「シャーリー！お前と言うやつはそんな薄着でっ！ゆうに変なものを見せるな！」

「変なもんつてお前なあ．．．まあいいじゃないか。」

「よくない！」

「そう言つてるぞハルトマン？」

「へ〜？あつう。」

「お、お前たちと言うやつは．．．」

ハルトマンやルツキーニまで薄着の状態でバルクホルンは頭が痛くなった。そこに宮藤とリーネが昼食を持ってくる。

「皆さんご飯ですよ。つてこの箱はなんですか？」

「それは試作機のジェットストライカーだ。」

宮藤の疑問に答えた声の主は坂本だった。続いてミーナも書類を持って格納庫に入ってくる。シャーリーたちに薄着でいることを指摘するとジェットストライカーについて説明をしている。それに興味津々のシャーリー。すると辛抱堪らないといった様子で試乗を申し出る。

「時速700キロ!?なあ、これ私に乗せてくれよ。」

「いや、これはカールスラントの機体だ。だからカールスラント人である私が乗るべきだ！」

バルクホルンがムキになって対抗するが、シャーリーも負けじと言い返すといった押し問答が繰り返されている中、抜け駆けでルツキーニが脚を入れてしまう。

「いっちばーん！」

その瞬間ジェットストライカーは起動し、青白い魔法陣を多重に展開し始める。しかし、そこでルツキーニはストライカーから飛び上がって逃げ出してしまふ。それをなだめるシャーリーと煽るバルクホルンという謎の構図が繰り広げられている光景を眺めながら、勇に坂本が話しかける。

「あのジェットストライカーについてゆうはどう思う？」

「ジェットか・・・いつか時代を作る代物だとは思うけどな。だが、今の俺には乗る機会はないさ。まだ零戦があるしな。」

「そうか？ゆうなら喜んで乗りたがると思っていたがな。」

「・・・俺も零戦も老いていく存在なのかもしれないな。」

「何か言ったか？」

「いや、何でもない。」

一瞬勇が悲しそうな表情をしたが、坂本には気づくことは出来なかった。そこからバ

ルクホルンとシャリーアのジェットVSレシプロ機の様々な競争が繰り広げられる。しかし、そのいずれにおいてもジェットは抜群の性能をたたき出した。それを見た勇はこう呟いた。

「ジェットか・・・あれがあれば一切合切を振り切れるのかもな。」

バルクホルンとシャリーアの競争が激化していくにつれバルクホルンの体調が衰弱していくが、勇はこのとき連合軍総司令部から密命を受けてとある場所にて活動していた。

「最近、ネウロイの襲撃頻度にブレがありすぎる。俺の予想では・・・」

勇が活動している中、バルクホルンはついに魔法力の過剰供給により墜落してしまふ。原因はジェットストライカーが以上に魔法力を吸収してしまふ仕組みであると判明し、当分の間バルクホルンは飛行禁止処分が言い渡され、ジェットストライカー自体がお蔵入りとなってしまう。その間バルクホルンは自分のストライカーを扱えなかつた己の無力さを後悔し、トレーニングに励むがユニットに問題がある以上乗り手で

はどうしようもなかった。そんな中突如超高速ネウロイが襲来し、ミーナ、坂本、ハルトマン、エイラ、ルツキーニ、シャーリーが迎撃。敵本体に攻撃を仕掛けるも分離し、各個高速で基地に突撃を敢行し始めた。

「シャーリー！お前のスピードを見せつけてやれ！」

「了解っ！」

坂本の指示の下シャーリーが自慢の高速でネウロイを追い詰めるが、不規則挙動で一向に捕まえることができずにいた。

「くそっ！動くなよ！はあ、はあ……」

「……っ！」

それに耐えられずにバルクホルンは宮藤とミーナの静止を振り切り出撃してしまう。

「駄目よトゥルーデー！あなたはまだ万全じゃないのよ！今度は本当に暴走してしまうかもしれない！」

「すまないミーナ！あとで罰は受ける！」

『その罰俺も共に引き受けよう。』

「ゆう?!」

突然の勇の登場に一同は動揺するが勇の支援があると分かれば作戦の成功率が上がる。これに気を許したバルクホルンはジェットストライカーの鎖を引きちぎると全速力で発進してしまう。一方のシャリーは未だネウロイに有効打を与えられないでいた。そんな中一つの通信が入る。

『これより支援攻撃に入る。弾着まで4，3，2・・・今だトゥルーデー！』

「ああー！」ズドンっ！

勇の攻撃は正確に細型になったネウロイの進路を妨害しつつその体勢を崩すことに成功していた。そしてバルクホルンがその正面から被弾面積が増えたネウロイを大口径の30ミリ弾で貫いたことで作戦は決した。

「すげえ・・・やったぞバルクホルン！」



『支援完了・・・なんか様子が変じゃないか?』  
「ん?」

シャーリーは勇に指摘されバルクホルンを見ると、バルクホルンはうなだれてジェットストライカーに魔法力を吸い取られ暴走していた。急いでシャーリーと勇はバルクホルンの救出に向かう。位置的にバルクホルンを追う形のシャーリーと迎える勇と言う位置関係だったが、時速700キロ近いバルクホルンを受けとめられないため勇も同航する形で先を飛行していた。

「ゆう!そつちでバルクホルンを受け止めてくれ!」

「そうしたいが思ったよりも速度が出ている!横から手を出すとジェット気流でトゥルーデの体がバラバラになってしまうかもしれない!」

「なんだよそれ!?!」

「二度後方から近づく!万一に備えてシャーリーも頼む!」

勇の作戦でバルクホルンを止めようとするがチャンスは一度きりであり、それもタイミングを間違えると自分も怪我をするリスクがある危険な賭けに出た。バルクホルンが

ついに勇の後方に迫る。相変わらずのジェットストライカーに苦笑いする勇だったが、ゆっくりとバルクホルンの体に手を寄せる。バルクホルンの体ごとゆっくりと減速方向に持ち込もうとするが、あまりの速度に零戦が悲鳴を上げていた。

「くそっ！持ちこたえてくれ！」

しかし、零戦は限界とばかりに蓋板が歪み始める。そこにシャーリーが追い付き始める。だがあと少しのところまで追いつかない。勇は意を決し自分の体を持って空気抵抗をあげてを試みる。

「やめろゆう!?体もたないぞ?！」

「口よりも速度に集中しろ！俺はどうなっても構わん！」

「くそおおお!!!」

シャーリーは勇の言う通り速度にのみ魔法力を集中させる。その思いが届いたのかシャーリーのP-51ムスタングがソニックブームを発生させながら追いつき始める。バルクホルンを減速させるために勇も体を張っているが既に限界が近づいていた。

「止まれええ!!!」

そして、ついにシャーリーがバルクホルンのユニット緊急脱出装置に手をかける。勢いよくユニットがバルクホルンの足から外れ海へ落ちていく。その勢いを殺すように勇とシャーリーに挟まれたバルクホルンはとても気持ちよさそうにシャーリーの胸をもんでいた。時を同じくしてシャーリーは至近距離にある勇の顔にたじろぎながら作戦の成功にほっとしていた。勇もホッと一息つくど、ようやく異性の顔が近くにあることを考えないようにしていたシャーリーの耳をその息が掠める。

「ひっ!」

顔を真つ赤に赤らめさせる横でルツキーニが講義をするところまでお約束であった。

「それ私のお!!」

基地に戻るとバルクホルンは意識を取り戻し、ミーナに怒られバツとして大量のイモ

の皮むきを命じられていた。その大量のイモの出どころはというと、ハルトマンの双子の妹であるウルスラ・ハルトマン中尉だった。

「この度はお騒がせしてすみません。このこは本国に持ち帰ります。」

「いや、私こそ試作機を壊してしまった。すまなかつた。」

「いえ、バルクホルン大尉がご無事で何よりです。」

ハルトマンに妹がいることに宮藤らが驚愕しているとき、ウルスラがふとある人物に気が付く。

「あら、あの人確か・・・なるほど、こんなところにいたのですか。」

ウルスラが見据える先にはバルクホルンの陰に隠れるように黙々とイモの皮むきをする勇の姿だった。

## 新たな翼 第八話

501統合戦闘航空団では物資、特に食糧事情がひっ迫していた。そんな中買い物役としてシャーリー、ルツキーニ、宮藤、勇が選ばれた。

「おっ買い物！おっ買い物！」

「行つてきまーす！」

（芳佳ちゃん無事に帰ってきて・・・）

各員の欲しい者リストを手に勇み足でトラックに乗り込む宮藤。基地手前まで普通に運転するシャーリーだったが、基地が見えなくなった瞬間そのスイッチが押された。

「ふっふっふ・・・今日こそタイム更新だぜ！」

「お、やるのか？」

「やっちやえシャーリー！」

「え、なにを・・・」

若干一名なにをするか分かっていない人物を乗せたまま、そのトラックは暴走列車のごとくタイムトライアルを始めたのだった。でこぼこ道や急カーブもなんのそのと、ついには道から道へとジャンプする異常ぶりに宮藤は死屍累々の様相だったが、他三人は大いに盛り上がっていた。

「もう止め・・・うぶ」

「いやっほー!」

「いっけえシャーリー!」

「ワープしろそこだっ!」

宮藤の道中の微かな記憶では一番はしゃいでいたのはなんと勇だったが、それは見なかったことにした。そしてようやく街に到着し、買い物をごなしていく。中ではバルクホルンから頼まれた妹用のかわいい服を見繕っていたが、バルクホルンを姉と慕う勇は既にバルクホルン用にも買い物を買わせていたのだった。

「シャーリーさん、この服似合うと思いますか?」

「ああ？んく宮藤なら似合うんじゃないか？」

「違いますよ。バルクホルンさんの妹さんにです。」

「バルクホルンのおく?! だっはっはっは！」

そんなやり取りが行われている中、退屈してしまったルツキーニが店の外で少女が黒づくめの男二人に襲われているのを発見してしまった。なにも言わずに飛び出していったことに宮藤もシャーリーも気づかない。しかし、自分の買物物をさっさと済ませた勇は外で待機していたため外に飛び出たルツキーニのお守としてついていくのだった。

「あちよー！」

「え?! あの?!」

「行こっ！」

ルツキーニがあつという間に男二人をのしてしまふとその少女の手を取りどこかに去ってしまう。それを目撃した勇はその行為の愚かさに目を覆う。一般市民に扮装していてもその気品のある態度と真紅の赤い髪をもつ少女の正体を勇は知っていた。その人物とは、ここヴェネツィアの王女ともいえる位に在位する存在であった。倒れた男

たちをそつと起こすとまず謝罪する。

「くそつ何者だ?!」

「この度は身内がとんだご無礼を。しかし、あの少女は決して公女殿下に害のある人物ではありません!この私、荒鷲隊長の赤松勇連合軍中佐が保証いたします。」

「あなたは様は?!分かりました。マリア公女殿下をよろしくお願いいたします。」

久しぶりに自分の役職を打ち明けたものだど遠い目をした勇だったが、ふとこんな素直な謝罪をしたのはいつぶりだろうかと懐かしい気持ちにもなった。

（ああ、そういえば前にきちんと謝ったのは赤松隊長だったか。それ以外だと藤野、お前だったな……）

ルツキーニとマリアの後をつける勇だったが、ルツキーニはミーナから渡された有り金をありつたけ使いロマーニヤを存分に楽しんでた。あの交渉強かな公女が素の笑顔を振りまいてるところを見るにしばらくは勇も放任していた。ルツキーニは様々なところを観光し、最後に塔の展望台にマリアを連れ立った。



「ねえマリア！ここが私の一番好きな場所だよ！」

「まあ、すごい！ここに民草が暮らしているのですね。私の目指すべき道が分かった気がします。」

「ん？マリアは難しいこと言うね。」

「ここにいたかルツキーニ。」

マリアとルツキーニの後ろから勇が現れる。マリアはその顔を見てすぐに勇の正体が分かったようだった。勇はそんなマリアの怪訝な表情に見向きもせずルツキーニに話を振る。

「勝手に行ったらみんな心配するだろ？」

「あつそうだった・・・あ、ゆう・・・お金全部なくなっちゃった。どうしょ・・・」

「お金ならある人にもらえばいいだろ？」

「それもそつか！」

そう言うと勇は公女をチラ見する。マリア公女はフンと顔をそむけたがこれは期待

できそうだと勇は悪い顔をする。そんなことをしていると街中の警報が鳴り響く。ネウロイの来襲を告げる警報だった。その警報で塔の下では宮藤とシャーリーが追いついたようだった。あらかじめ勇がここに来るように伝えていたためちよほどのタイミングで来たと言えた。

「マリア！ 私行かなくちゃ！」

「えっ?! どういうことですか?!」

「私ウイッチだから！ 行かなくちゃ！ だって私の街だもん！」

ルツキーニの本当の正体を知り驚愕するマリアだったが、塔からあつという間に滑り落ち、ストラライカーを履き空へ駆けのぼる少女を見て真実が変わる。そして、後ろでは勇がマリアに控えていた。マリアはゆっくり振り返ると勇はかしづいて公女であるマリアに上奏する。

「マリア公女殿下、彼女の非礼を私が代わりに詫びます。」

よくもまあいけしやあしやあとやるものだどマリアは思い、ため息を一つつくがルツ

キーニとの時間は正直楽しかった。それを思えば目の前にいるこの人物がだれであろうと今ばかりは許せる自分がいた。

「あなたのこれまでの行いを私個人は好きにはなれません。」

「ご尤もです。」

「・・・ですが、感謝もしているつもりです。」

「勿体なきお言葉です。」

「感謝を言われる覚えはありません・・・ただ、あのような清いウィッチがあなたを信頼していることを私は信用したいと思います。」

「ご期待に沿えるよう尽力いたします。」

「当然です。期待とは諦めから出る言葉なのです。この諦観が本物にならないことを切に願います。」

勇は一礼すると軍帽をかぶり直し、音もなくマリアのもとを離れた。マリアはもう一度ため息を吐くと、今行われている空中戦に思いを馳せるのだった。

間もなくして勇も空中戦に参加する。宮藤とシャーリーが今まで姿を見せなかったことを抗議する。

「ああ勇さん!? もうこっちは心配したんですよ!」

「そうだとケーキうまかったんだぞ!」

「それは結構。だが今は戦闘に集中だ。」

突つ走るルツキーニを諫めつつ、四人での連携を繰り広げる。宮藤とシャーリーが牽制し、勇が市街に攻撃が行かないように攻撃を一心に引き受ける。シールドを斜めに張り、全てを街の外に逸らしていくといった名人芸を繰り広げていると最後の締めと言わんばかりにルツキーニが仕留めに係る。

「私のロマーニヤから出ていけ!」

この日、ロマーニヤ市街に侵入したネウロイは501統合戦闘航空団によって即座に撃退された。ルツキーニは持たされた全財産を使い果たし、ミーナに説教をされ泣かされていた。しかし、勇が持ってきた帳簿を目にしたミーナの目の色が変わったことでルツキーニは水の入ったバケツを持つという罰で許されていた。さらに、その裏のラジオ放送ではロマーニヤ公女殿下であるマリア公女からお言葉があり、その言葉の中には

ルツキーニの名があったことにより一同は騒然となる。それと同時に送られてきたイモで満載のコンテナが基地に降り注いだのだった。その中に二通の手紙が内包されているのをミーナが発見する。一つを開封するとミーナは疑問に満ちた顔で勇にその手紙を渡した。それを嫌な顔で受け取るところ書いてあった。

『insomma, e' tonto, manone, stupididi(要領は悪いが馬鹿じゃない)』

それを見た勇は笑いながらその手紙を海にぶん投げたのだった。そして、もう一通が問題だった。ミーナはその夜自室で坂本とその内容について知恵を絞らせられることになる。そこにはこう書かれていた。

『幽霊に気を付けろ』

それから幾ばくかの日が経ち、部隊はネウロイの迎撃に対応していた。しかし、一向に小型ネウロイを攻撃しても撃退できないことを疑問視した坂本は本体が別にあると推察した。魔眼で探索するとコアに位置が超高空にあることを発見し、一時帰還を余儀

なくされた。基地ではその対策会議が催され、成層圏にあるとされるコアの破壊を務めるのは攻撃力に特化した武器を持つサーニヤが選ばれた。もう一人の防御をする人材の候補に宮藤と勇が選出された。

「サーニヤの護衛だがまずは、お前だな。宮藤！」

「はい……え、私ですか?！」

「お前の防御力ならサーニヤを守れるだろう。そして、ベテランから考えるとゆう、お前になるな。」

「だれもやらんと言うなら俺がやるしかなくなるか。」

「勇さんの方が適任だと思います。」

宮藤はそう言つて勇の方が適任だと推挙するが、はっきり言つて宮藤の方が防御能力が高いシールドを張れるのも事実だったが、如何せん経験値が足りないところが論点だった。しかし、そんな論争に待つたが入る。

「ちよ、ちよつと待つんだな! 私! 私! 私がやるんだな!」

エイラがサーニヤの護衛ならと出しゃばってきたのだった。しかし、エイラは今まで被弾することがなく、その分シールドも張ったことがなかった。そのためきちんとシールドが機能するか不安視されていた。そんな不毛な論争をしているとエイラが勇に物申す。

「だったら！ゆうに模擬戦で勝ったら私に行かせてほしいんだな！」

勝手に蚊帳の外にされていた宮藤がほっとした表情をしていたが、そのエイラの提案により急遽勇とエイラの模擬戦が開始されることになった。やる気満々のエイラと気だるげな勇と対照的ではあるが、ミーナの裁量により決定してしまった。ハルトマンとの模擬戦と同様のルールで行われるが、エイラには勇に勝つ未来しか見えていなかった。また、実際の勇の力量を知る者もいなかった。全員がその模擬戦に注目していた。

「まったくこの基地は厄介な相手ばかりで困る・・・まあ、負けはしないだろうな。」

勇がぼそりと呟く中、模擬戦開始の合図が響く。その合図と同時に両者が一斉に動く。まず先に仕掛けたのは勇だった。エイラの後ろにつくと射撃を開始する。しかし、

それを未来予知によりエイラは華麗に避けていく。

「さすがのエイラさんですね！やっぱりエイラさんが勝つんですかね？」

「いいや、勇の実力も未知数だ。この戦い、分からんぞ。」

「いやいや少佐、ゆうはハルトマンにも勝ったんだ。ゆうが優勢だろう。」

若干一名身内鼻肩が入っていたが、誰しもがこの戦いの行く末を正確に予想できる者はいなかった。また、空ではエイラが全て勇の攻撃を回避し反撃していた。

「私がサーニャの護衛をやるんだー！」

しかし、エイラの攻撃もまた勇は全て回避していた。そのことに少し警戒するエイラだったが、自分のいる先に厚い雲があるのを発見する。勝負場はここだとエイラは雲の中に突入する。

（ふっふっふ〜！私にはゆうがどこにいるか凡その予想ができてしまうんだな〜これは勝ったんだな！）



エイラは自分の勝ち筋にほくそ笑んでいた。魔法力に集中し、勇の居場所を探る。

「いたんだな！これでサーニヤの護衛は私のものなんだ・・・なっ！」ダダダダ！

エイラが自信をもって勝利を確信する Peyton 弾を放つが一向に勇が撃墜判定を出さない。おかしいなと思っているエイラの未来予知に突如警笛が鳴り響く。急減速してその場に留まると、それまで行こうと考えていた空間に Peyton 弾が走っていた。エイラはその光景に困惑が隠せなかった。

「どうして私の居場所がわかったんだ?！」

困惑しているとまたしても未来予知に警笛が鳴る。またも急激に回避運動を取ると正確に先ほどまでいた場所に Peyton 弾が降り注いでいた。エイラはこのままでは自分が攻撃され続けしまうと不利を悟り、雲の中から出ることを決意する。雲から出ると勇をしっかりとエイラの背後についてきた。それにまたも驚かされてしまう。

「どうしてなんだ！私には未来予知ができるのに?!」  
「それに拘るからだ。」

馬鹿にしたような声が聞こえ、エイラは自分の驕りに気づいた。それではと未来予知に頼り切ることを止め、エイラ本人の空中戦のセンスをもつて勇と対峙することを決めた。エイラも勇も一向に退かない戦いが繰り広げられ、眼下で見えている宮藤たちは大盛り上がりだった。

「すごい！すごいです！」

「さすがゆうだ！」

「大きな口を叩いていらつしやるんだから勝つてみせなさい！」

「エイラ・・・頑張れ。」

サーニヤの応援が聞こえたかどうかは分からないがエイラは勇に肉薄する。未来予知も今後の勇の行動パターンを全て網羅したビジョンを見せ、今度こそエイラは勝利を確信する。

「私の勝ちだあ!!!」

勇の行動範囲すべてに満遍なく射撃し、エイラは勇のペイントまみれになった姿すら想像できた。だが、現実とは違っていた。いつの間にか勇が視界から消えていたのだ。ハツとして後ろを振り返るとそこにはおぞましいほどの魔法力を身にまとわせた勇がニヤリとした笑みを浮かべて顕在していた。恐怖すら感じるその姿にエイラが一瞬間の作が遅れるのを勇が逃さず、エイラの肩に手を乗せる。その瞬間こそ、エイラが一番の恐怖を増長させた瞬間だった。そして、耳元で勇がエイラに呟く。

「俺にはもう人の心が残っていないかもしれない。だからお前は勝てんのだ。俺に勝ちたくば人を止めてからだ。」

その言葉がどういう意味なのかは計り知れなかったが、エイラはきつと勇には勝てないんだということが分かった気がした。エイラが負けを確信すると勇が突如降参宣言をする。

「俺の負けだ。」

「えっ?!」

「弾詰まりだ。」

突然のことにエイラが混乱していると、それをもって模擬戦が終了してしまった。宮藤たちは一体どうなったのか分からずもやもやが残ったが、エイラの背後を取った勇の姿を見て興奮していた。

「うじゅ!? 負けちゃった?! どゆこと?」

「エイラの背後を取ってたんだから事実上ゆうの勝ちなんじゃないか?」

「でもあの状況から全て回避したってことですよね? それもすごいです!」

「私なんか、最後の回避の瞬間も見えなかったよ!」

「ええ? そもそもどうやってあそこまで移動したんだよ?」

「エイラが頑張ってくれた・・・よかった。」

様々な感想が飛び交い、サーニヤはエイラが一応勝ったという事実喜んでいた。また、最後の一瞬を疑問視するのがミーナだった。

「エーリカに続きエイラさんも・・・美緒、あなたなら勇少佐に勝てるかしら？」

この質問に坂本はしつかりと、そしてはつきりと断言する。

「私どころか501総出でかかっても勝てるかどうか怪しいだろうな。」

その言葉にミーナはかつてない衝撃を受ける。まさか坂本だけでなくここにいる全員でも勝てないほどの人物がなぜここまで大人しくしているのか、またどうしてこの部隊に配属されたのかを考えるだけ恐ろしく思えた。しかし、今は目の前の作戦に集中すべきと現実逃避する。

その模擬戦の後、なんとエイラがサーニヤの護衛を辞退した。それに驚いたのはサーニヤ本人だった。

「エイラ！ どうしてせつかく掴んだのに辞めてしまうの？」

「どうしてって・・・私はゆうに勝てなかったから・・・」

「結果はどうあれエイラは護衛になれるじゃない！ どうして自分で諦めるの?！」

「サーニヤには分からないよ！」

エイラはサーニヤがどうしても勇の底なしの強さに気づけないのか、また自分より遙かに上の存在がいながら自分がサーニヤを守ることができているのか不安で大きな声を出してしまった。言い切ると同時に少しの罪悪感と枕が飛んでくる。エイラが唯一被弾した瞬間だった。そのあまりに理解できない出来事に啞然としていると、目の前のサーニヤは悲しい目をして部屋を出て行ってしまった。部屋に残ったのはエイラとサーニヤが去り際に残した言葉だった。

「諦めるからできないんじゃない……」

その後、エイラが辞退したことにより宮藤がサーニヤの護衛を担当することになった。なお勇が辞退が許された理由は「寒いのは苦手だった」である。宮藤と共に発射される姿をエイラは下から眺めることしかできなかった。全員で上空まで運び第一陣、第二陣と離れていく。エイラは最後までサーニヤの姿を目で追っていると、ふとサーニヤがエイラを見た。その時の目の奥に映る自分の姿にエイラは居ても立っても居られなかった。気づいたときにはサーニヤを追っているエイラがいた。

「サーニャは私が守るんだあー!!」

周りは大慌てだったが、一人だけその姿を興味深く観察する人物がいた。

「それでもなお飛ぼうとするか・・・だからウィッチは嫌いなんだ。」

その言葉は周りの騒音によって誰の耳にも入ることはなかったが、ミーナのみその口元をはっきりと凝視していた。その後、無事に成層圏にコアのあるネウロイは撃退され、エイラはサーニャを守り切った。

その晩、ミーナは今日の戦闘詳細をまとめていた。多様化し迎撃を困難にさせるネウロイの続発は看過しがたい問題だった。しかし、それ以上にミーナには目の前に立ちただかる幽霊に頭を抱えていた。

「これが報告書で、こちらがユニットの整備報告書になります。」

目の前で淡々と書類が提出されていくが、その人物は幽霊とあだ名され、ミーナにとって現状一番の悩みの種である人物だった。

「報告ご苦勞様。もう戻って休んでちょうだい。」

「それができれば苦勞しないんですがね。」

事実、この基地の戦闘隊長であり階級的に二番目の坂本はこの手の書類作業を苦手としていた。ミーナとしては勇と一緒に作業するのは心労的に避けたいところであったが、書類作業を手伝ってくれている点においては正直助かっていた。だが、ミーナとしても勇と長い間二人きりであるという危険を冒したくはなかったため作業の打ち切りを提案する。

「今日は本当にみんなも疲弊しているわ。あなたも休まないと明日に響くわよ。」

「それでは今日はこれまでといたします。ミーナ中佐もご自愛ください。」

ミーナはようやく人払いができたと一安心した。勇は退室するべく準備している。机に勇のペンが転がっているが失念しているだろうと、そう思うのと同時にミーナの心は今しがた退室しようとする背中がちよつとした好奇心が湧いてしまっていた。



「幽霊・・・ね。」

そう小声でつぶやき、いたずら心に机に忘れたペンを勇に向かつて放る。もし勇が本物の幽霊ならすり抜けて行つてしまふだろうと、疲れた脳みそで考えてしまふ。放物線を描いて勇にペンが当たると直前、ミーナは幽霊と言われる勇の姿を見失う。目を見開き先ほどまで勇が歩いてきた空間を見つめる。見つめてもやはり勇はその場に存在しなかつた。ミーナの瞳は驚愕の現実も把握するべく室内を駆け回る。しかし、ミーナは勇が幽霊であればどれほどよかつただろうと心底感じる羽目になる。勇は先ほど歩いてきた場所から2メートルほど離れた位置に立ち、ミーナの視線と交差していた。互いに一瞬の驚愕の表情を浮かべ、まさに時間が停止したといつてよかつた。

「なっ!?! どうして・・・」

ミーナは慌てて机に隠してある拳銃を取り出す。今の勇の位置ならおおよそ歩幅で5歩以上の距離があり、瞬時に飛びつくことは出来ない。そう瞬時に考えを巡らせ拳銃を勇のいた空間に構える。安全装置を外すほんの少しの合間に勇の存在を確認する。勇が今ミーナに飛びかかろうと行動している未来を想像していたが、それは目の前に広

がる勇の冷たい表情によってぶち壊される。拳銃がぐしゃりと音を立てて握りつぶされるのが伝わる。一体どうやってあの距離を自分より早く動けたのかミーナの頭の中を駆け巡る間もなく、勇によってミーナは壁に押し付けられる。勢いよく背中を壁に押し付けられ、両手を勇の片手で抑え込まれていた。

「ぐっ!!」

鈍痛に顔をしかめるも勇に目を向け直す。目の前の勇は怒りを纏わせたような殺気を隠していなかった。ミーナの瞳を覗き込むように、またその瞳に引き込まれてしまいそうになるほど勇の瞳は勇の瞳を覗き込む自分の姿しか映っていなかった。

「どうしてこんなことをした？」

不意に勇から冷たい声が囁かれる。一瞬なんのことも分からなかったが、勇が瞬時に行動できたことはおそらく勇の魔法力に依るもので、それは勇の中で秘密にしていることなのであることが予想できた。その上でなぜペンを投げつけ、拳銃を手を取ったかという質問だと判断した。震える声を表に出さないようにするので精一杯だったが、必

死に自分を律する。

「あなたがペンを忘れていたから・・・」

「だからって銃を出すのか。」

冷たさが声に乗っかっているようだった。確かに拳銃を仲間に向けることは普通ではあり得ない。しかし、ミーナの心の中には勇が消え、自分を振り返る瞬間の瞳がこの世の者とは思えなかった。元々幽霊だとは噂されていたがそれ以上の怪物に自分は触れてしまったという恐怖が拳銃を取り出す結果となってしまった。勇は呆れたように話を続ける。

「見られた以上始末するか・・・だが惜しいな。」

勇はなんだかぶつぶつと呟いている。今の状況、勇のさじ加減でミーナの命は瞬時に消えてなくなってしまう。しかし、ミーナもこうなったら自分の今までの疑問をぶつけざるを得ない。

「あなた一体何者なの?!」

「俺か?俺は何物でもない。強いて言うなら昔ミーナが見た、赤松勇『だった』少年の成れの果てだ。」

だったという文言にミーナは納得してしまう。今の勇は昔仲間だったどの勇にも属さない。ただ、面影が揺らめいているようにしか見えなかった。

「なにがあなたをそうも変えてしまったというの?」

「なにが・・・なにが?だと?」

ミーナの質問に勇の表情に怒りが上乗せされるのが掴まれている手の強さに現れていた。痛みには耐えつつ勇を睨み返す。

「あなたが変わった理由・・・それは上層部のせい?それともそれに至るまでの戦闘のせい?」

「誰かに責任を転嫁できれば今の俺はもうとつくに欧州の空に散っているだろうよ。じゃあ、誰のせい?もちろん俺だよ・・・俺のせいなんだよ。」

悲しさを感じさせない抑揚のない声はミーナの心に突き刺さる。勇自身の行いの結果、目の前にいるような勇が醸成されるだろうか。ミーナには決して勇単独でこうも変質してしまったとは思えなかった。

「あなたの履歴は調べさせてもらったわ。戦闘機隊に配属され、343空第一中隊の副長として林大尉亡き後その職務を引き継いだ。その後、リガ攻略戦に参加。少数の戦力でこれを達成したが作戦は失敗。その撤退の際にウィッチに再度覚醒したわ。僚機の藤野曹長とその後行動を共にするも作戦中に戦死。それにより第一中隊のパイロット全員が戦死したことに憤慨したあなたは、当時所属していた部隊の指揮官を殺害し逃亡。何らかの過程を経て少佐に昇進。ここ501に配属された…あなたが『幽霊』と呼ばれるに至る理由は十分に散りばめられていると思うのだけど？」

今までに調べた勇の過去をざっと口頭で伝えてみる。順風満帆な軍人過程とは言いがたかったが、それを慰める隙を勇は見せてこなかった。それ以上に不気味さを纏った勇をミーナは嫌ってさえた。そんな勇は歪んだ笑みを携えて言い返す。

「くくく．．．ミーナ、お前に何が分かる？林隊長を失ったときに俺が何を感じたと思う？仲間を失くした時なを考えたと思う？一番の戦友、藤野が死んだとき何を言われたと思う？俺は何をしたかったと思う？」

今の勇の瞳にその思い出が蘇るように揺らめいていた。勇は昔、自分の所属していた部隊がカールスラントで全滅し、自分一人が生き残ってしまった。その頃の勇は生きることがどうしようもなく苦しく、死に縋る毎日だった。それを新たに仲間と言う存在に生きる希望を見出し、生きるという人生の意義を見出したはずだった。しかし、今の勇は生きてみた結果に失望しているように思えてならなかった。

「あなたが何を感じ、考え、思い、悩んだかは私には分からない。でもあなたは生きてここに帰ってきた。なのになぜあなたはこの世に生きようとしなの?!」

ミーナは自分で言っていて勇が幽霊と言われている理由が分かった気がした。勇は自分たちが生きるこの世という存在に諦めているのかもしれない。もしくは自分の手ではどうしようもない存在に寄りかかっている自分が許せないのだろう。

「生きてみたさ。自分なりに必死に生きた。ただ、人間の、ウイッチじゃない自分には何の運命も覆す力は存在しなかった。付きまとうのは欲に塗れた人の思惑と仲間の無常な死だけだ。生きることの大切さを知っているだけに生き残ることに全力に、遮二無二になったさ。でも人の力には限界があった。どう足掻こうとも個人の力量は現実に変化をもたらず影響を与えない。たった少しの奇跡ですら人の手では作れないのさ。」

ウイッチと非ウイッチの両方の軍人生命を経て勇の思い描くウイッチの存在がいかに絶大で、また人から隔絶した存在であるかがよく理解できた。人間の理を越えた存在がウイッチだとすると、人間と言う存在があまりにもちつぽけに霞んでいた。だから勇はウイッチに憧れた。

「あれほど望んだウイッチは簡単に俺の目の前に奇跡を齎した。ウイッチを軍人は女神だと言うが、本当だと思つたね。ウイッチがいれば林隊長も仲間も死ぬことはなかっただろう。ウイッチさえいれば・・・だがウイッチはいつも遅れて現れる。現れた戦場が救われるんだ。こんな理不尽な女神が本当に女神だと？俺のそこはみんな死んでも来なかつたのに!!」

ミーナは勇の絶叫を嘯みしめて聞いていた。ウィッチにも管轄があり、その数にも限りがある。だがウィッチのいる戦場は大なり小なり戦況に影響を与える。なぜならウィッチがネウロイに対する人類唯一の存在であるからである。

「こんな茶番に俺は失望した。人が抗えない絶対的な力がありながらも人の理で生きているウィッチという存在は茶番そのものだろう？ それでありながらウィッチは己の戦場を聖域のように、自分の生きる場所だと言わんばかりの顔で戦う．．．そんなバカげた存在に俺は、俺と藤野はなってしまった。あれほど待ち望んでも救ってくれなかった存在に、嫌いになり切れない存在になっちまったんだよ．．．」

勇は当時の悲観的でありて希望の象徴であるウィッチに最後の最期でなってしまったことを悔いているような嘆いているような当時の感情で呟いた。

「でもそのおかげであなたは今ここにいます。生きてここにいます。仲間を失った悲しみは痛いほどわかるわ。」

「分かっちゃいないな．．．俺はウィッチである俺が一番嫌いだ。痛みが分かる？ ふざけんな、ウィッチになった藤野が死ぬとき俺になんて言ったと思う？」



勇は瞳に戦火の炎を灯しながらウィッチになった当時を語り始める。

リガ攻略戦が失敗に終わり、勇と藤野がウィッチに覚醒したことは即座にサーレマー島基地に広まった。最初は勇も藤野も自分がウィッチになったという事実を受け入れられなかった。だが、サーレマー島基地にはリガから避難してきた兵士が大挙として押し寄せてきており、そのほとんどが負傷兵か装備も持たない兵士だった。リガ攻略が失敗に終わったことで東部軍はサーレマー島基地も敵支配領域からの攻撃を受けると判断し、総員の撤退命令が発令された。その殿として勇と藤野が真っ先に指名されたのは言うまでもなかった。幸運なことに以前502の管野が来た際に残っていた零戦のユニットを修理しており、ウィッチ経験のある勇がそれを履いて出撃することとなった。

「隊長、すまねえ・・・あんた達を残して俺らだけ本土に引き上げるなんて・・・」

整備のおやじが勇に詫びを入れるが、勇は仕方のないことだと割り切っていた。

「非戦闘員が残ったっていいことないですから。おやっさんはみんなをしつかり本土に

連れ帰ってください。」

「それは当然だ。当然なんだが……」

おやじは涙を流して勇の肩を抱く。どうしても勇のことが不憫でならず、心残りがあつたようだった。勇もつい謝罪の言葉が出そうになつてしまつた。守つてやれなくてごめんさいと。しかし、そんなことを言つてはこの心優しいおやじに心残りができてしまう。それだけは隊長としてしたくなかつた。当初の脂ぎつた恰幅の良い面影はどこへやらと言わんばかりに頬が？せこけたおやじの姿を見るのはいたたまれなかつた。

「おやつさん、もう行かなきゃ。」

「ああ、ああ……隊長どうか死なんでください。また、どんなに壊したつて直してやりますから！」

そう言うのと仲間の整備員がおやじを引つ張つていった。最後まで仲間たちは手を振つてくれたが、勇にはその姿を直視することは出来なかつた。藤野は予備の零戦で出撃の準備を終えていた。藤野は誰とも別れを交わさなかつた。

「隊長、出撃ですか。」

「ああ、お前は良かったのか?」

勇は藤野の心が読めなかった。昨日戦友の八島を失い、二人だけの荒鷲隊となつてしまい、ウィッチとなつたがまだまだ脳も体も受け入れているわけがなかった。

「隊長とならどこへでも。それにウィッチなら無敵ですよ。」

藤野はそう笑っていたが、ウィッチがどういふものなのかすら分かっていないだろうと勇は不憫に思った。なんとしても藤野だけでも生きて連れて帰ろうと固く誓った。

「そうだな。ウィッチに不可能はないからな……じゃあ、仕事の時間だ。」

こうして勇と藤野はサーレマー島基地からの撤退の時間稼ぎとして殿軍を務めることになった。部隊が撤退するまでの間、敵の陣地に強硬偵察や遅滞戦闘など様々な戦場を駆け巡った。勇は久しぶりのウィッチの戦いぶりに精を出したが、藤野は戦闘機での

出撃のため従来の戦法を工夫して戦っていた。と言うのもウィッチ化した藤野は戦闘機に乗っているためストライカーユニットを自分の魔法力で動かしているわけではな  
いたため防御や攻撃に特化した魔法力配分を確立していた。しかし、依然として二人の間  
には問題が付きまどっていた。

「くそっ！従来の魔法力の半分も出せないじゃないか?!」

「敵、三時方向及び七時方向、十一時方向から接近中！隊長どうしますか?!」

二人の魔法力は勇が当時ウィッチだったころの半分程度のものであった。また、藤野は  
ウィッチになってから日が浅く、魔法力のいろはすら知らない状態での戦闘だった。お  
そらく藤野も勇同様本来のウィッチの半分程度の魔法力しか使えていなかっただろう。  
四面楚歌の状態では勇は最後の指揮官として知恵を振り絞って考えた。ここでは即座の  
判断が命を救うと分かっていたが、分の悪い賭けに挑むことにした。

「基地に五号爆弾があったはずだ！それを奴らにお見舞いしてやる！」

「じゃあその間の支援は任せてください！」

「おう！任せたぞ！」

勇は基地に残された対地爆弾を用いて攻撃を仕掛けようと提案した。ウィッチであり、ユニットを駆使すれば離着陸は容易であるが、その間を狙われたらひとたまりもない。二人の連携をもって成功する作戦を実行に移してみることにした。

「たしかここら辺に……あつた！五号爆弾！」

五号爆弾とは500キロ爆弾の通称であり、零戦が爆装した際の上限装備だった。もちろん機動性は悪くなるが自分の技量なら有効活用できると考えた。上空を見ると必死に藤野がネウロイと戦闘を繰り返していた。

「藤野！今行くぞ！」

「お願いします！もう持ちません！」

腕にずしりと重み加わり、魔導ユニットが苦しそうに咆哮を上げるの無視してぶん回す。一度空高く飛び上がるとこれまで藤野に集っていたネウロイが一斉に鈍重な勇に集り始める。サッチウィーブの要領で勇が行動を起こすまで藤野が勇の背後を守る。

すると勇が急降下を始める。

「藤野！急降下の後爆弾を投下し、地上及び後続のネウロイをまとめて粉碎する！お前は残ったネウロイを片付けろ！」

「任せてください！」

勇は藤野の了承を受けると勢いよく急降下を始め、地面と寸でのところで低高度での飛行に移行する。都合のいいことに地上のネウロイの攻撃が勇の後続のネウロイに直撃する。しかしそれでもなお鈍重な飛行をする勇の後を追う。そこで勇は後続のネウロイを確認して爆弾を投下する。

「これでも喰らえ！」

投下した爆弾は地上のネウロイを吹き飛ばし、勇の後続のネウロイをも爆風によつてかき乱す。その一瞬を逃さず勇は後ろを向いて攻撃する。勇の後ろに続くネウロイは一瞬にしてそのほとんどが消し飛んだ。残りを藤野が片付けると考えたその瞬間、勇の眼下で不穏な動きを察知する。急いで身をよじると先ほどまでの飛行コースに地上か

ら猛烈な攻撃が雨あられと撃ち込まれた。これに勇はドキリとする。勇は地上に潜むネウロイが想像以上にいたことを認識する。急いで藤野にも報告するが時は既に遅きに徹していた。

「藤野！林の中にネウロイだっ!!!」

「えっ……」

戦闘機という特性上コックピットの下側は完全なる死角だった。よろよろと飛ぶネウロイを銃撃している藤野は勇の一言に青天の霹靂の如き衝撃を物理的に受ける。

「うがっ!!!」

「藤野お!!!!」

藤野の真下から攻撃が撃ち込まれ、藤野の機体は炎上。そのまま林の端に墜ちて行つた。勇は自分の心臓が張り裂けそうになりながらさすがに後を追う。今見た光景が信じられなかった。

「頼む頼む頼む!!」

誰にお願いしているかは分からなかったが縋らずにはいられなかった。零戦の残骸が広がり、無残にもその破片が辺りをチリチリと燃やしている現場を発見すると勇の喉元に何かが詰まった感じがした。近づくると零戦の風防は粉々に砕け半開きになっていた。急いで中にいる藤野を確認する。

「藤野!大丈夫・・・か」

勇が見た光景は見るも無残な藤野の上半身だった。下半身は血だまりの中に埋もれており、胴体からは腸が血を脈打たせながら下半身を繋ぎとめていた。勇はコックピットの中から藤野を出すことも、止血しても無駄であることを瞬時に理解した。それでも藤野に声を掛けずにはいられなかった。

「藤野!藤野!?!返事をしろっ!!」

すると藤野はゆっくりと目を覚まし勇を探す。



「隊・・長？どこですか？」

「ここだ！」

「ああ隊長・・僕、どうなっちゃいましたか？」

未だに自分の状態が分からず、その上ガラス片が目刺さったのか血で濡れた目を探していた。勇は藤野の手をしっかりと握り自分が傍にいることを証明する。

「お前は・・俺の傍にいる。ほら、ここにるのがわかるだろう？」

「はは、やっぱり隊長が傍にいと安心しますね。」

「そうだろう？お前はどこにもいかないだろう？な？」

勇は必死に声を掛け続ける。その間も藤野の出血は着実に藤野の体外に排出され続けていた。

「なに言ってるんですか。僕は・・あれ？どうして八島がいるんだ？」

藤野は見えない目で既に死んだ八島を見ていた。ついにあちらの世界に繋がってしまつたと勇は藤野を引き留める。

「おいっ！俺はここだぞ！藤野はまだこつちに必要なんだ！」

「隊長、八島はまだ死んでいなかったんですよ！ほら！西池も一緒ですよ！」

「駄目だ！連れて行かないでくれ！藤野だけは！」

勇が必死に懇願するも既に藤野に勇の声は届きそうになかった。勇は藤野の手を強く握って注意をこちらに向けさせる。

「命令だっ！藤野！こつちを向いてくれ！」

勇が血まみれの藤野の服に顔を埋めると、ふと優しい手つきで勇の手を握り返される。ぱつと顔を上げると目の前には落ち着いた表情の藤野がいた。それはまるでこれまでの疲れが取れたような清々しきささえ混在していた。

「隊長・・・僕は隊長と一緒にならどこへでも・・・行きますよ。約束・・・したじゃない

ですか。」

「藤野……」

藤野の顔からは血の気が失せ、唇は真っ青になり呂律も回らなくなっていた。

「隊長……あなたと一緒に……どこへでも行ける気が……するんです。でも……少し、疲れました……」

「藤野お……」

藤野は虫の息になりつつある意識を可能な限り言葉を紡ぐことに注ぐ。情けない声の勇に問いかけるように藤野は血のあぶくを吐き出す。

「隊長……ウィッチに……不可能はない……って……ウィッチは……どこ……ですか……」

藤野はそう問いかけると、もう喋ることもできないほど呼吸が浅くなってしまった。その質問に勇は答えてあげることができずに、ただ自分の拳銃を取り出すのだった。そ

れが勇にできる唯一の藤野への答えだった。藤野の胸に拳銃を押し当てると、勇は最期の別れを告げる。

「さすれば、一番の戦友よ．．．すまない。」

ズドンと鈍い音が勇の手を静かに伝わった。その振動が勇の心の中の何かをずらし、てしまった。今すぐに消えてなくなりたいと打ち震える思いは、藤野の命の炎の残り香を漂わせ、勇の胸に染み入る。勇の心に染み込む藤野の残り香は勇の心の灯に触れると再び炎を大きく灯すのだった。それはまるで蠟燭の煙に火を当てるとその煙を頼りにもう一度火が灯るのに似ていた。勇はそんな残り香に大きな火を灯すかのように叫ぶのだった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお  
!!!!!!!」

この咆哮は勇の姿をより遠くに飛ばすのだった。それが勇と藤野の二人の魔法力の結晶である「瞬間移動」の誕生の瞬間だった。

## 新たな翼 第九話

ここまでの勇と藤野との過去の話を聞いたミーナは、勇の「瞬間移動」という魔法力の存在に驚かされた。また、それ以上に勇の行動原理が分からなくなっていた。大事な仲間を失い途方に暮れて自棄になったのか、はたまたそれを指示した上層部に対しての敵愾心なのかミーナには測りかねていた。ミーナはその真意を伺いつつ、勇の隙を見つめるため話を続ける。

「あなたの過去については残念に思うわ。でもあなたは私に同情してほしいというわけではないんでしょう？」

「愚問だな。」

そう言い切る勇は、暗い室内の中でその瞳を爛々と輝かせミーナの瞳を覗き込みながら言い放つ。

「俺は俺が嫌いだ。ウィッチであるという俺の存在……ウィッチそのものに辟易してる。」

さつきも言ったが、ウィッチは戦場の女神だなんだと謳われているが現実はややかしに過ぎない。その証拠にどのウィッチもあの場に助けに来なかつたし、俺も藤野を助けることは出来なかつた。つまり、ウィッチは幻想だ。」

ウィッチは幻想だと言い切る勇だつたが、その瞳は怒りと悲しみに混在したどちらとも取れないものだつた。ミーナ自身も助けられなかつた命は数えきれないし、バルクホルンだつて一時期妹を守り切れなかつたことを酷く悩んでいた。勇が一人で抱え込む問題ではないし、自分が抱く誇大妄想の類とも受け取れた。しかし、勇はそこからウィッチという希望に縋り切つてしまつたのだろう。その結果、ウィッチに失望し、壊れてしまつた。ミーナは勇の心を切り開くために対話を続ける。

「じゃあ、あなたはその幻想と言い切る存在として何を成すつもりなの？それは私たちに害を及ぼすものなの!？」

ここ501の基地にいる以上、坂本を始め隊員たちに危害が加えられては堪らない。そんなミーナの疑問に勇はくつくつと笑みを携えて嘲笑さえ見せるのだつた。

「くくく……ミーナ、残念だがお前たちに危害は加えないと最初に言つたはずだ。だが、俺はやるぞ！俺はこの世界のウィッチ全てを、そう全てを！元の平凡な少女に戻す！ウィッチが戦場の女神だと？笑わせる！この世界に女神などいて堪るか！もしこの世界に女神がいるとするのなら止めてみる！今一度ウィッチがありふれた何の変哲もない少女であると世界に思い出させてやる！」

勇はまるで世界に演説するかのようになつた。ミーナはその姿を見て狂気を感じた。もし自分たちが勇と対立したら、坂本が言つたように勝ち目がない。今の勇にはそれが実現できてしまいそうなほどの熱量と力が備わつてしまつた。そう感じてならなかつた。しかし、ミーナも勇が描く先に自分たちが立ち並ぶことを思い描く一人のウィッチである。一向に隙の無い勇に向けて少しでも虚勢を張る。

「……あなたはその先で怪物にでもなるつもり？それでも私たちウィッチたちは進み続けるわ。例えあなたがウィッチを憎んでいたとしても。」

「俺の邪魔をする？」

ミーナの言葉に反応した勇の手に力が入る。ミーナの腕はぎゅうぎゅうと物凄い力

で締め付けられる。勇がミーナの顔に近づいて心に染み入るように脅しにかかる。

「もし邪魔をするというのならお前には今のうちに消えてもらわないとな。」

ミーナは圧倒的な存在にこうも簡単に消されてしまうという事実には涙を浮かべるしかなかった。勇はそれを冷徹な目で見降ろしていた。しかし、勇が何かを言おうとしたその時だった。司令室の扉がノックされたのだった。返事がなくとも入ってくるころからおそらく坂本だろうとなぜかミーナは冷静に判断できた。その判断が冷静にできたからこそ、坂本が来たことによる安心感と危険を伝えたいという感情が交錯した。しかし、その感情もさらに打ち消す強い衝撃がミーナを襲う。

「おーいミーナ、設営班からの風呂の報告があ……るんだが……」

坂本が扉を開き、網膜に映し出された光景は一瞬間が処理を放棄したと思えるほど理解するのに時間がかかった。こんなことは戦場ではあつてはならないが、坂本にも理解の範疇を越えた光景だったのだ。なんと勇がミーナに覆いかぶさるように深く接吻をしていたのだった。坂本はようやくその行為が接吻であると気が付くと、いたたまれな



くなり部屋を後にするのだった。

「お邪魔だったようだな．．．失礼。」

静かに閉められたドアと共に勇がミーナの唇からその唇を離す。必要最低限の情報拡散を心掛ける勇はこの状況を隠匿するため咄嗟にミーナとそういった行為に及んでいると錯覚させることにしたのだった。

「ふう、坂本は相変わらず鼻が利くのか、それともただの間が悪いのか．．．ん、ミーナ？」

勇が冷や汗を拭うとその正面には頬を朱色に染め、気が抜けたミーナがいた。勇は掴んでいた腕から手を離すとミーナはするすると壁を背に座り込んでしまった。あまりの衝撃に脳の処理能力がパンクしてしまったのだらうと察した勇は、もう一度意識が朦朧とするミーナの脳に言葉を植え付けるため囁く。

「俺はいない者として扱え。俺の目標を達するまでお前らが邪魔しない限り、俺もお前

たちの障害にならないだろう……って聞いちゃいけないか」

瞳が忙しく小刻みに揺れている様子から、この言葉も聞こえていないだろうとため息をつく。勇はもう一度ミーナの唇に手を触れ、その柔らかで紅を帯びた女性の温もりにもう一度自分の唇を沿わせた。

「んっ……」

「……お前もただの少女に戻るべきなんだ。俺が、終わらせてやる」

カウハバでも感じたその感触は、接吻を施した相手の反応を彷彿とさせた。あの事件以来カウハバ基地には立ち寄ってはいないが、二度とは戻らないことを思えばの行為だったと振り返ってみたりした。そして勇はミーナを残した部屋を後にした。その部屋には乙女とその残り香が漂っていた。

翌朝、ミーナは内心を表に出さないよう取り繕っている合間に設営班からの報告に目を通す。坂本は早朝の訓練に勤しんでおり昨夜の出来事については聞いて来なかった。むしろそうしてくれる方がありがたいのは事実だが、どうしてもモヤモヤしてしまう。密かに顔を赤らめたりしている自分に気づき、大きいため息をついてみる。そういえ

ば、最近はずスクワークが増え肩が凝っているような気さえた。その原因の一端をになつている勇はと言うと、朝早くに出撃任務を下達されたとのことで出撃してしまつていた。

「はあ……守るべきもの、守られるもの……ね」

ミーナの呟いた言葉は坂本の入室のノックによつてかき消されていた。

一方、出撃中の勇は歓喜していた。今日の前に広がる光景は勇が求めていた戦場そのものだった。あまつさえ目を輝かせながら勇は不敵な笑みを携えていた。勢いよく突撃した先にあるものを目掛けて他の雑多なネウロイをいなしつつ、その目標と定めた物のみを考える。勇の脳内では今後の行く末を想像するだけで笑みが零れてしまうほどだった。

「見つけた！」

勇の行動が他人に理解されないことは、自分自身よく理解しているが、勇はもう迷わなかった。赤く輝く物体に手を伸ばし、それを取り上げた時、先ほどまで無数に存在し

たネウロイは一匹たりとも勇の周りに存在しなかった。その手に持つ赤い輝きに見られる勇は口角を上げ胸に抱く。その時、胸に抱かれたネウロイのコアは一層赤く輝いた。ズシンと胸に響く鼓動はコアと勇の心に回廊を繋げるかのように染み渡っていた。

「これでようやく・・・ああ、待ってろよ。みんな・・・」

一方そのころ、501基地ではとある事件が起きていた。基地内部に超小型ネウロイが侵入し、機械類に深刻なダメージを与えていた。この超小型ネウロイは謎にウィッチたちのズボンに潜り込み、ウィッチたちの生理的障害となっていた。

「あくまでもぞする!!!」

ことあることのウィッチたちのズボンに侵入し、怒りを買うネウロイだったが、遂にはミーナのズボンに侵入した際のごたごたで潰されたため消滅した。この功績によりミーナはネウロイの総撃墜数が200機を達成し、表彰されミーナに更なるストレスを与えたのだった。

超小型ネウロイ侵入事件から数日経ったある日、勇がようやく501基地に帰還した。定期連絡はあったもののミーナが勇の所在を知るすべはなかったため、ミーナは気がではなかった。

「ただいま帰還した。」

「・・・おかえりなさい。話は聞かせてもらえるのでしょうか？」

「聞く耳があるのなら。」

勇が身支度を整える間に坂本とバルクホルン、シャーリーなど大尉以上の者を司令室に集めた。これはミーナの護身用のためという理由と階級の上の者に勇の知見を伝えるためである。司令室のドアがノックされ、勇が入室すると空気が変わる気がした。勇が一枚の書類を机に差し出す。

「これは……」

「読めばわかります。」

普段と違い勇の雰囲気にはシャーリーやバルクホルンが顔色を変える。ミーナが代表して書類に目を通すと驚愕の情報が羅列されていた。ミーナが書類を机に置き、勇に目を戻す。勇の表情はいつも以上に冷たく、しかし興奮しているように見えた。

「これは事実なの？」

「署名通り、連合軍参謀本部の承認済みです。」

「ミーナ、どういうことなんだ。」

坂本が堪らずミーナに問う。ミーナは顔を下に向けたまま。書類の事実を語る。

「……赤松勇少佐は、地中海某地域にて敵新勢力を発見……これと戦闘。」

ミーナはここで自分の常識が次の事実を言うことを妨害される。ミーナ自身、この情報は信じられなかったが信じる他なかった。他の隊員が固唾を飲んでその答えを待つ中、ミーナが口を開く。

「同日、勇少佐が単独撃破。同地域は解放されたわ。」

ミーナは言葉を放ったが、その受け取り方は人それぞれだった。シャーリーは大喜びで勇に対して感嘆の声をかけていた。バルクホルンは勇の目を見てまるで偉業を成し遂げた親類に投げかけるような眼差しをしていた。一方、坂本は考え込むような姿勢を取っていた。ミーナは勇から目を離せずにいた。目の前の人物は本当に化け物なのか、それとも英雄なのか見極めかねていたからだった。

「それじゃあ両大尉は退室して頂戴。詳細と今後については佐官で話し合いたいと思います。」

「ミーナ！作戦中のユウの戦果については私も興味がある！今後の戦闘の参考にするため残っても構わないのではないか？」

バルクホルンが話に食いついて来るが、バルクホルンがいては都合が悪かったため退室を促した。不満ありげな表情を隠さないバルクホルンを嗜めるようにシャーリーがバルクホルンを連れて退室してくれた。ミーナと坂本、勇の三人になった部屋は先ほどとは打って変わって静かになった。ミーナがどう聞いていこうかと考えていると坂本が口火を切った。

「ユウ、なぜ一人で رفتんだ？」

「なぜ？」

ミーナが思いもよらない質問を坂本が投げかけたことで勇もその問いを問い直した。ミーナとしては一人でネウロイの巣を撃滅する能力に恐れ慄いて今後どのような行動を取ると宣言するのが論点になると考えていた。

「ユウ、お前は確かに強くなった。だが、決して一人で戦いはするものじゃない。ここは、501はお前の居場所ではなかったのか？」

坂本は純粋に聞いているように見えた。その問いがミーナの疑問の本質に沿っていることに驚いてしまうほど、純粋な問いだった。勇は目を瞑り、吐き出すように坂本の問いに答える。

「俺の居場所は今はない。お前たちのことは大切に思っているが、俺は俺の成すべきことを遂行したいと考えている。」



「そうか・・・私たちでは力不足だったか。」

「俺とは違う・・・それだけだ。」

ミーナの目には勇と坂本だけが分かる言葉だった。二人してどうして扶桑のウィッチはこうも複雑なのかと嫌になる。ミーナはこれからの勇の処遇について聞くことにした。

「それであなたはこれからどうするつもりなの？」

「しばらくはこっちに世話になるつもりです。しかし、決戦は近い・・・そうお考え下さい、ミーナ中佐。」

「そう・・・では私、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐から、連合軍赤松勇中佐に要請します。」

勇の本職である職名を言われ勇はミーナを睨むが、ミーナに同様の素振りは見られなかった。勇は苛立ちを隠して沈黙する。

「あなたにはしばらくの間私たちに協力してもらいます。ここは私たち501、ストラ

イクウイツチーズの基地です。勝手な真似は許しません。ここにいる以上、あなたは私の指示に従ってもらいます。いいわね？」

例え勇が来るべき決戦に戦力として投入することは分かったが、そのことを理由に勝手な真似をしてもらってはミーナとしても面白くない。だからミーナとでもここで楔を打って勇の行動を制限しておく必要があった。しかし、勇もそれは分かっていたのか素直に応じたかに思えた。

「了解しました……ただ、私の身边を調査するのは止めた方がいい。これは警告である。」  
圧倒的な気迫に鬼気迫るものを感じたが、ミーナは顔に出すことなく頷くことで了解の旨を伝えると司令室から退室した。事情を察した坂本だけがミーナの傍に寄つてくれる。

「ミーナ、大丈夫か。」

「ええ、彼を、勇中佐を止められるのは私だけだもの……」

「ああ、ユウもきつと苦しんでいるんだ。私たちがユウの居場所になってやろう。」

この日から坂本は日頃の訓練をさらに激しくしていくのだった。少しでも勇の見える景色を共有するためとは言え、その無理な訓練は次第に魔法力の限界にぶつかるのだった。

「烈風斬!!!」

海が割れ、衝撃が骨身に染みるほどの斬撃はそれを見ていた宮藤を感動させた。

「坂本さん！私にもその技を教えてください！」

「お前には無理だ！」

冷やかに突き放す坂本だったが、内心は勇のこともそうだが自分に焦っていた。いつ自分の魔法力が限界を迎えるか分からない中、少しでも世界の開放に貢献したい、501の仲間でいたかった。その想いが勇の孤高さと相反する位置にいる羨望の思いだと言うのは分かっていたが、勇は坂本が見ても異色な存在感を放っていた。その姿を見て坂本はいても立ってもいられなかったのである。

一方、宮藤は己の力不足が原因で坂本に認められていないと感じ、訓練に励むのであった。しかし、最近感じられていたユニットへの魔法力伝導が上手くいかないことに疑問を感じていた。

「私、どうしちゃったんだろう。」

「どうかしたか？」

突然声を掛けられたことに驚きながらも、隊唯一の男性の声にすぐにその正体は分かかった。

「赤松さん！驚かさないとくださいよ！」

「驚かせたつもりはなかったが……まあいい。調子が悪いようだな。」

「はい……どうも最近ユニットに魔法力を流しても力が抜けちゃうと言うか、私どこか変なんですかね？」

素直に疑問をぶつけると勇は考え、徐に宮藤の背中の中の真ん中に手を当てた。突然のことにまたもやびつくりする宮藤。

「あ、赤松さん?!なにをつ?!」

「な、なんだこれは・・・」

逆に驚く勇の反応に、宮藤は自分の体に何が起こっているのか不安になった。

「私何か病気なんですか?」

「い、いや・・・すまない。俺にはどうしようもないな。」

「ええ?!病気なんですか?」

困惑する両者だが、勇は落ち着きを取り戻すように深呼吸する。勇の感じたものは莫大な魔法力から生じる眩しさだった。勇はウィッチの魔法力を触れることで色や形として認知できるようになっていた。勇のように二回目のウィッチ化した例はなく、確証もないが、魔法力体系に何らかの影響が生じることが分かっていた。そのため自身の魔法力を練り続け、高度に操ることで全盛期と遜色ない、またはそれ以上の技や力が出せていた。瞬間移動などは別のものとして、宮藤のものは何にも染まっていな純粋な白の魔法力だった。それでいて絶大な潜在魔力に慄いてしまった。

「あの……どうして背中を触っただけでわかるんですか？そういう診察方法があるんですか？」

「ああ、これは心臓とかに近い場所は魔法力の流れがよくわかるんだ。」

「なるほど……赤松さんも見てあげますよ！」

突然の反応に勇も一瞬反応が遅れたことが失敗だった。宮藤は勇の胸に手を当てるのと一瞬治療魔法が発動してしまった。その反応に宮藤は目を見張ったが、それ以上に勇が目の前から消えてしまった。辺りを見渡してもそこに勇の姿はなかった。

「あれ?!赤松さん!?!どこですかあ〜?おかしいな……今の今までここにいたのに。それにあの感触……」

宮藤が辺りを探す中、勇は久しぶり心臓が張り裂けそうになるほど収縮を繰り返していた。冷や汗をびっしりとかいていた。

(まずい……なにかは分からんが、俺の中の何かが反応した?でもどうして治療魔法が

発動したんだ？ どうして俺は逃げたんだ？

勇は自分の心が宮藤の魔法力に反応したことに驚かされた。しかし、気持ち当即座に切り替え宿舎に戻ろうとした。振り返るとそこにいたのはおどおどとした少女、リーネだった。リーネは勇に気づくと近寄ってきた。

「あ、勇少佐！ 芳佳ちゃん見ませんでしたか？」

「ああ、今しがた外にいたぞ。」

「そうですか！ ありがとうございます。」

丁寧にお辞儀をすると駆けだす少女は、昔見た常に怯える存在ではなくなっていた。そのことに気づいた勇は走り出すリーネを見ていると不意にリーネが振り返る。

「あのっ！ 勇少佐！」

「ん？」

「いつもお一人でネウロイと対峙されていると聞きました。私、そんなこと一人じゃできないから、初めて会った時もそうでしたけど、なんていうか……ありがとうございます」

ました！」

勇はリーネの突然の感謝に驚きを隠せなかった。ここ数年で久しぶりに聞いた感謝の言葉をすぐに認知できなかつたほど「ありがとう」の心の籠った言葉は勇の中で錆びついていた。勇が目を見開いているともう一度リーネはお辞儀をして今度こそ宮藤の下へ駆けて行つた。急な心の動揺を鎮めようと食堂でコーヒーを入れていると夜間哨戒のサーニヤがやってきた。今日はよく人と会うなと思つていると、サーニヤがコーヒーの香りに鼻をひくつかせているようだった。

「……サーニヤ中尉、紅茶でも飲むか？」

「あ……じゃあいただきます。」

久しぶりの勇との会話に気恥ずかしさが滲み出るサーニヤだったが、勇が紅茶を出す和香りを楽しみつつ口を付けた。ロマーニヤと言えど夜の空は寒い。出撃する前になにか温まる物を飲むだけでも違うのは勇も良く知っていたが、こんなにゆつくりとした時間は久しぶりだった。するとサーニヤが静かに口を開いた。



「おいしい・・・」

「それはなによりだ。」

「なんだか、勇少佐の入れてくれる紅茶は優しい味がしますね。ありがとうございます。ありがとうございます。」

「またもや感謝され、あまつさえ優しいとまで言われたのは記憶にないほどだった。こそばゆいような感覚に追われながらサーニヤを見送る。今度こそ寝ようと寝室に向かう途中、目の前の部屋からゴミが飛び出してきた。生気を失った目を向けると案の定、ハルトマンがゴミ屋敷から出てきた。」

「あくトウルルーデに怒られるくあ、ユウ！いいところに！」

「ハルトマンに捕まり嫌々ながらも部屋の掃除に付き合う。あまりの惨状に勇は海軍式の片付け方を伝授する。」

「いいか、ハルトマン。いい片付けの方法を教えてやろう。」

「えっ！なにになに?!」

「・・・床に落ちているものは全てゴミだと思え！」

「うわ〜!!」

窓から焼却炉に向かってありったけの魔法力を用いてぶっ飛ばすと少し部屋に空間が生まれる。その後もハルトマンの悲鳴を聞きながらも片付けに専念すると、ようやく人間が居住できるスペースができた。一息つくくとハルトマンがお礼を言う。

「いや〜助かったよ。ありがとう！」

「勘弁してくれ。」

「でも安心したよ。」

「ん?」

ハルトマンは月夜に照らされながらにつこりと笑う。心からの笑顔は勇には些か眩しかった。

「ユウがまた帰ってきてくれて！」

帰ると言う言葉は勇には必要のないものだと思っていた。ここ501の基地はあくまで仮の住居で、自分の目的を果たすための足掛かりでしかない。しかし、この目の前にいる人物は勇が帰ってきて当たり前の存在であるかのように振る舞うではないか。勇にはこの笑顔が嫌に心に響いた。

「ただいま・・・とでもいえばいいのか？」

「うん！おかえり！」

ハルトマンはその笑顔のまま横になり、寝る体勢に入ってしまったため勇も部屋を後にした。

(さすがはウルトラエース。一撃離脱がお上手なことだ・・・)

嫌な感心をしつつ自室に入り今度の今度こそ就寝しようとする、部屋の中に誰かがいる気配がした。気を抜いているわけではないが、自室に入られるのにはいい気分はない。腰の拳銃に手をかけ、気配を消してドアノブに触れようとしたその時、中から声がした。

「ユウ、私だ。」

その声の主は勇が一番心安らぐ人物のものだった。そう、バルクホルンである。拳銃を急いで戻し、ドアを開くとそこにはベッドに腰かけたバルクホルンがいた。

「トウルーデ……どうしてこんな時間に？それにこんな時間に俺の部屋にいたら規則違反じゃ……」

「ユウ、私に隠していることはないか？」

勇はドキリとした。部屋にはここの隊員には見られてほしくない書類がある。それを見られたとすると、例え姉のように慕っているバルクホルンといえどただでは済まないかもしれない。勇自身、バルクホルンだけは手に掛けたくなかった。

「隠し事って何さ？俺は元々違う任務でここに居させてもらってるんだから命令系統が違うのは分かるだろ？」

「それは知ってる。」

「じゃあ、何が知りたいのさ？」

勇はバルクホルンに何も言わないでほしかった。何も知らないでいてほしかった。何も知らなければバルクホルンが悲しむことは何も起こらない。そもそも勇にバルクホルンを悲しませることはしたくなかった。だから内心、これから言うであろうバルクホルンの言葉を待つこの瞬間が何よりも勇を緊張させた。

「私が知りたいのは・・・今のお前の気持ちだよ。」

「俺の・・・気持ち？」

バルクホルンは勇に近づくと勇を見上げるようにして瞳を覗き込んでくる。いつの間にか勇とバルクホルンの身長差がついたものだと思つたのが失敗だった。その焦りをバルクホルンは見逃さなかつたからだ。

「ユウが扶桑に帰つた時、私はお前がパイロットになつて大変な毎日を送っているだろうと思ひ、何度か手紙を書いた。しかし、それは届くことはなかつた。」

確かに、バルクホルンからの手紙はあの赤松貞明が握りつぶしていたため、勇に届くことはなかった。また、バルクホルン自身、赤松貞明からそのことを聞き知っているはずだった。

「私もいらぬ心配をしていたと反省したさ。お前の上官は案外いい人のようだったからな。」

赤松貞明がどんな内容の手紙を送ったかは知らないが、もう手紙を書くのは止めてほしいという趣旨の内容だったと言っていただけに、勇は赤松の送った手紙の内容が気になった。

「パイロットのお前にも居場所ができたんだと安心した。きつと立派なパイロットになつて活躍して名を馳せるとも思ったよ。まさか再びウィッチになつて私たちと同じ場所に帰ってくるなんて夢にも思わなかつたし、突然のことに驚きつつも感涙に耐えきれなかつたよ。」

それはさすがのバルクホルンだと、身内びいきのお人好しだと勇は内心微笑んでしま

う。だが、バルクホルンは惚気てばかりではなかった。

「だがな．．．ユウ。私は少し盲目になっていたんだと、最近になって気づかされたよ。」  
「何が？」

「ユウ、お前がここに居場所を求めているにだ。」

勇はバルクホルンの目を直視することができなかった。今日を合わせたらなにか見透かされてしまうような気がしたからだ。思い当たる節はあまりなかった。自分の任務と目標のため、完璧にこの基地の隊員との繋がりを維持したはずだったからである。確かにミーナは勇の狂気に気づいてしまったが、それには釘を刺しておいたはずで情報漏洩はあり得なかった。坂本だつて魔法力の限界を誤魔化しつつ自分と戦っているからこそ、焦りの部分が勇と重なって見えてしまったことは、特に失点ではなかった。それなのに、なぜ目の前の人物、ゲルトルート・バルクホルンは気づけたのだろう、その一点のみが勇の脳内を駆け巡った。

「なに．．．言つてんだよ。俺はここに居るじゃないか。」

「そうじゃない！」

バルクホルンの大きな声にハツとして顔を上げて目を見てしまう。その瞳には疑いや蔑みとは全く別の涙が浮かんでいた。勇はこの涙の理由が分からなかった。

「あの日、この基地に来た時、ユウと私は涙を流して再開を喜んだはずだ！だが、ユウの心はどこにもなかった！」

その一言に勇は己の失点を理解した。表面上は仲間だと取り繕っていたが、自分の中で一度も「仲間」という言葉を使つてこなかったからだ。常に心のどこかに距離を置き、「隊員」と呼んでいた。一番近い存在であるバルクホルンにはその心に勘づいてしまったのであろう。

「いつから気づいたの？」

「・・・そんなに前からではない。確信を得たのはお前が返つてきた時だ。」

「えつと、詳しく教えてもらえるかな？」

勇はもう隠しても無駄かなと思った。いつバルクホルンが襲い掛かってきてもいい



ように体内で魔力を纏わせて臨戦態勢を整える時間稼ぎをし始めた。

「さっきの戦闘報告の時だ。あの時までには私もユウは変わらないと盲信してた。だが、一人でネウロイの巢に攻撃を仕掛けて、帰還したユウの目つきは……嬉しそうだった。」

比較的表情はあまり表には出さないことを心掛けていた勇だったが、まだまだ甘かったようだと言及した。確かに興奮した時は顔がにやけてしまうのは悪い癖だろう。そして、勇は魔力を全身に行き渡らせるのが完了しつつあった。あとはバルクホルンの出方次第である。

「それだけで気づいたの？」

「当たり前だ。私はユウの‘お姉さん’なんだから。」

そう言うとバルクホルンがゆっくりと勇に近づいてきた。前進に力を込め迎撃準備に移る。バルクホルンの怪力は近距離ではなかなか厄介な相手だからこそ全力で臨むつもりだった。しかし、バルクホルンに敵意が一切感じられなかった。するとバルクホルンは勇の少し前で立ち止まると手を広げた。

「ユウ、帰っておいで。」

それはまるで勇が最初に仲間と打ち解けた時に、バルクホルンが勇を優しく包み込んでくれた時の光景と酷似していた。勇の目の前に再び光が差し込んだ瞬間だった。しかし、勇はその輝きに包まれることは出来なかった。

「俺にはすべきことがある……ここにはもう帰れない。だから……さようなら、姉さん」

そう言い残すと勇は瞬間移動でバルクホルンの前から消え去った。勇の部屋には一人残されたバルクホルンがただ虚しく残されただけだった。今夜の月は一層輝くだけだった。

## 新たな翼 第十話

翌日、ブリーフィングルームにて一同は扶桑海軍の戦艦大和一団が集結していることを知らされる。勇も同席していたが、一番端でひっそりと話を聞いていた。そこに緊迫した通信が入る。

『こちら扶桑海軍大和、弾薬庫にて暴発！負傷者多数発生！』

この一報に一同は驚愕する。それはそれまで沈黙を保っていた勇も同様だった。

「私が行きます！飛べなくても治療位ならできます！」

「私も行きます！」

「俺も行く」

魔法力が安定しない宮藤と連れ添いのリーネが立候補する中、勇も名乗りを上げる。ミーナはそのことに一瞬驚いたが、事態は一刻を争う為、勇を二人の護衛役として同道

させることを了承する。勇は医療品を担げるだけ担ぎ、武器の類も置いての出撃とした。また、宮藤は覚束ない魔法力に不安を覚えながらようやく大和上空に到達する。

「あれが大和・・・大きい！」

「リーネちゃん行こう！」

「こちら第501統合戦闘航空団、赤松勇少佐。大和の負傷者救援に来た。」

『こちら大和、赤松勇少佐か・・・よし、着艦後負傷者を頼む。』

連絡を終えると宮藤とリーネはすぐに負傷者の下に駆けつけ手当を始めた。一方、勇は戦艦大和艦橋にいた。

「やあ、勇中佐。久しいね」

「杉田艦長、赤松勇連合軍中佐ただいま負傷者救援に参りました」

「君が人助けとはね。それとも別の目的かな？」

勇はこの人も食えないなと思いつつ顔色を変えず目的を果たす。

「例の、あれ、は無事ですか？」

「・・・やはりそちらが目的だったか。ああ、無事だよ。この大和はこの先の決戦に必要な不可欠だからね。もちろん君もね」

そう微笑んで目の前の物を見据える杉田の目には仰々しい機械群がそびえていた。勇もその光景を目に焼き付けて決意を固める。勇の若くして他人を威圧させる眼光をもろともせず杉田が話しかける。

「そういえばまた宮藤軍曹に助けられてしまったな。」

「また、ですか？」

勇は杉田が赤城艦長時代に宮藤に救われたことを知らなかった。杉田は朗らかに笑いながら宮藤について語り始める。

「前のお礼は陸軍の扶桑人形だったか！今度は何にするかな」  
「今度は海軍のものなんていかがでしょう？」

そんな笑い話を勇は受け流していると、杉田が勇に501との関係について聞いて来る。勇にとつて昨日の夜のこともあり少し話しづらい話題だった。

「そういえば勇中佐、501の隊員はどうかね？」

「どうかね、と申されても。仮の基地ですので任務以外の行動は取っていません」

「そう固い回答が聞きたいわけではなくてね……だって501への出向は君たつての希望だろう？」

勇は杉田という男が自分のどこまで知っているか未恐ろしくなった。確かに勇は過去の功績から希望の配属場所に出向することが許可されたため501を希望していた。そのことを知っている杉田に畏怖しつつ、ため息交じりに応える。

「戦友に別れを告げる為です。しかし、もう済みましたので」

「別れか……君にはそういうことになるのかもな」

勇は別れという単語を用いたことで改めて自分の行動と欲求を回帰させることができた。もう勇は目標を見据えて迷わないことを胸に刻み込んだ。勇の胸は強い鼓動と

ともに熱くなった。それは大和に搭載された機械も同様に輝いた気がした。

一方、宮藤とリーネは負傷者の手当てに奔走し、宮藤の圧倒的な治癒能力に事態は沈静化に向かっていった。

「ふう、これでこの人も終わり。次の人は？」

「これで最後です。」

「芳佳ちゃん凄いな！ たった一人で！」

「よかった……」

ようやく一息ついたその時、艦内に警報が鳴り響いた。

『ネウロイ接近！ 総員戦闘配置に付け！』

「ネウロイっ?!」

艦橋でもネウロイの接近に動揺が隠せなかった。

「なぜこの海域にネウロイがっ?!」

「くそっ!この決戦兵器の大和に勘づいたか?!」

「杉田艦長、私も出ます!」

「武器も持たずにかね?」

勇が出撃しようとするも、医薬品を最大限運んだため武器の類は扶桑刀と拳銃のみしかなかった。それでも勇は大和を守るため出撃を決心する。

「今この大和を失うわけには参りませんので」

「そうか・・・頼む」

「はい」

勇は杉田に敬礼をすると急いで出撃準備に取り掛かる。格納庫から出撃すると既にリーネが交戦中だった。リーネの装甲ライフルでは分が悪いのは目に見えていたが、勇自身も武装はリーネにも劣るため有り合わせの戦術で時間稼ぎするしか手立てがなかった。



「リーネ、宮藤はどうした？」

「芳佳ちゃんはやっぱり飛べないみたいで」

「そうか・・・ならば我々で足止めするしかないか。サポートを頼むぞ」

「武器もなしですか?!」

リーネは驚きを隠せなかったが、勇なら何かしらの手立てがあるかもしれないと思っていると、すぐさま勇がリーネの目の前から忽然と姿を消した。

「えっ?!どこに?!」

リーネがあたふたしていると勇は既に攻撃を開始していた。一瞬で間合いを詰め、至近距離で拳銃を打ち込んでいる。リーネも急いで援護射撃を開始する。しかし、その装甲は固く、一向にネウロイの進行は止まらなかった。その時大和が艦砲射撃を繰り出す。予め警報が出されていたためリーネは回避をするが、またもや勇の行動に驚愕させられた。なんと勇は大和から放たれた弾道に追従し、着弾し、削られた装甲にすかさず追撃をかましていた。

「勇少佐!? 攻撃に巻き込まれます! 退避してください!」

「まもなく大和がネウロイの射程圏外に出る! おそらく最後の反撃だ! つべこべ言わずに攻撃の手を止めるな!」

鬼気迫る勢いの勇に気圧されてリーネも攻撃するが、まるで勇についていけなかった。そして、ついに大和が完璧にネウロイの射程圏内に出たことを確認した時にはリーネは肩で呼吸していた。

「はあ．．．はあ．．．全然ついていけない．．．」

リーネの目には物凄い勢いで攻撃を繰り返す勇の姿を映していた。既に拳銃の弾薬も尽き、刀での攻撃をしていた勇は、瞬間移動を繰り返しながら大型ネウロイに切りかかっていた。しかし、致命傷は与えられずやきもきしていた。

「くっそ! こんなことなら機関砲は置いて来るんじゃないか．．．しかし、いつものことだ。通じないのなら戦術を変えるだけだ!」

刀を収めると今度は己の魔法力を集中させ、拳に集めた。その瞬間勇の拳は青白く輝き、さも502の管野のように拳に魔法力を纏わせると大型ネウロイに突っ込む。

「墜ちろっ！」

鈍い音がして大型ネウロイは悲鳴を上げて高度を落とす。その光景にリーネは目を白黒させるしかなかった。

「すごい……あれが世界一の戦い方……」

リーネが呆気にとられているほんの一瞬の隙を突いて、大型ネウロイが今度はリーネに攻撃を放ってきた。突然のことに勇も対処が間に合わず、リーネも咄嗟のシールドしか展開できなかった。

「うう……もう、だめ……」

先ほどの戦闘で疲弊しきつたりリーネは攻撃を受けとめきれず、シールドが破壊されて

しまう。

「リーネ!!!」

「芳佳ちゃん・・・」

ゆつくりと海に落ちて行くリーネを勇は見ていることしかできなかった。しかし、ここで奇跡が起こる。大馬力のエンジン音と共に颯爽と現れたのは飛べないはずの宮藤だった。

「リーネちゃん!!!」

「芳佳ちゃん?!」

「もう大丈夫だからね!」

墜落寸前のリーネを助けた宮藤は、その新型のユニットを力強く羽ばたかせ、大型ネウロイに突っ込んでしまった。勇は宮藤の新たな姿を目に焼き付けるのだった。

「よくもリーネちゃんを!!!」

「まさかあれは震電か?!」

シールドだけで勇が削り切れなかった装甲をいとも容易く貫き、内部から破壊する姿は勇をして驚愕させた。勇は信じられないとばかりに、新人だったはずの宮藤の圧倒的な何かに心が動かされていた。

(なぜだ?!なぜあんな新人が?!俺は宮藤が羨ましいのか?いいや違う!!俺の方が強いはずなのになぜ宮藤ができたんだ!分からない・・・)

その後、基地に無事に帰投した宮藤とリーネは疲労のためすぐに寝入ってしまった。そして、格納庫では三人が話し込んでいた。

「J7W1震電」

「これが扶桑の新型・・・」

「ああ、宮藤博士亡き後、開発が頓挫したと聞いたがな」

「まるで宮藤さん専用機ね。あなたもご苦労様、勇少佐?」

「ああ・・・」

先ほどの戦闘がいつまでも頭の中を駆け回り、勇は空返事を繰り返すばかりだった。そして、自分の固有魔法も曝け出してしまった以上、追及されるのは時間の問題だった。

「リーネさんから聞いたわ。あなたの攻撃の手数、さすがは世界一の撃墜王ね」

「・・・瞬間移動のことですか。当たらずとも撃墜できなければ元の木阿弥ですがね」  
「冷めてるわね。それにしても宮藤さんはお手柄ね。もう一人前かしら」

そのミーナの言葉に勇も坂本も口を開けなかった。

数日後、ミーナは作戦計画の伝達のため作戦本部に飛んだ。今回、マルタ島に新たなネウロイの拠点が見つかり、その奪還作戦を行うことになったからである。足元の脅威に気づけなかったことに士官連中は落胆を隠せなかった。

「灯台下暗しとはこのことだな。まったくいつも上の連中の無茶に突き合せられるこっちの身にもなってほしいものだな」

「まあそういうなバルクホルン。決戦前に気づけたことを幸運に思おう」

憤るバルクホルンを坂本が嗜めるが、勇も今回の体たらくには思うところがあつた。

「概要はミーナ中佐が帰つてきてからとして、我々だけで奪還作戦を完遂できるほどの勝算があるのだろうか。まあ、なにか思惑があると見て間違いないだろう」

「それは上が私たち以外の戦力を保持しているとの見通しがあつての物言いか?」

バルクホルンは勇を見ずに質問する。坂本も勇とバルクホルンの若干の雰囲気の違いに勘づいているのか肩をすくめるだけに留まつていた。

「そう見るのが妥当だろう。最新兵器か、はたまた強力な助っ人か・・・」

「どちらにせよ私たちはこき使われるということだな」

いつもと違う雰囲気なのに勇とバルクホルンの意思疎通が完璧なことに、坂本は苦笑いを隠せなかつた。そして、ようやくミーナが搭乗する輸送機が見えた。また同時にその機体から誰かが飛び降りるの光景は勇が予言した通りの災難の予兆であつた。

「すごい！飛び降りてきた!」

「ふう、私はハンナ・ユステイナー・マルセイユ。アフリカ部隊から来た。よろしく頼む」

疾風迅雷のごとく現れた人物への反応は人それぞれだった。バルクホルンやハルトマンなどは旧知の仲ということもあり頭痛の種が増えたという表情だった。また、宮藤やリーネなどはそのマルセイユの風貌から羨望の眼差しを向けていた。当の本人であるマルセイユはというと、元上官であるバルクホルンの怒りの眼光を無視し、ライバルと言えるハルトマンとの邂逅に耽っていた。

「ハルトマンっ！久しぶりだな！」

「あゝ久しぶり……」

「また撃墜数を増やしたみたいだな！勝負しよう！」

「えー嫌だよ」

バルクホルンの眼光をもらともせず無邪気にはしゃぐ姿にミーナと坂本は眉間を摘まむだけだった。場所を移し、ブリーフィングルームへと集まった隊員は、今回の作戦内容をミーナから聞く。



「今回の作戦は奪われたマルタ島の奪還です。ネウロイは島の沿岸にドーム状の障壁を展開しており、外からの進入は困難です。そのため海中から内部に侵入。外部は陽動とし、内部からの攻勢をメインとします。なお、海中からの進入と行うことで扶桑の伊400型潜水艦の格納庫から二名のウィッチを射出します。」

「海中の進入と行うことで、その難易度は未知数だ。そこでそのメンバーは熟練の者を選びたい。バルクホルンとハルトマンに任せたいと考える」

ミーナの作戦説明と戦闘指揮官としての坂本の提案にほとんどの者が納得しかけた時、ミーナが訂正を入れる。

「ええ、今回の作戦に限り、本部の要請がありました。部隊間の戦力協力を名目にアフリカ部隊よりハンナ・ユステイーナ・マルセイユ大尉がこの作戦に参加します。よって、501からは1名の選出です。バルクホルン大尉、お願いできる？」

「ああ、了解した」

妥当な判断かと思われたが、一人がそれに異議を唱える。もちろんその人物とはマルセイユだった。

「いいや、バルクホルンでは無理だな」

「なんだと?！」

「聞こえなかったか? お前では私に釣り合わないと言ったんだ」

「上官に対する態度が相変わらずのようだな!」

「元、上官だろ? それに今は階級も同じだ」

一触即発の中、ハルトマンが見かねて声を上げる。普段寡黙な分、その行動は周りから異様に映った。

「ああもう分かったよ! 私がやるよ!」

「そうこなくっちゃやな! 私と肩を並べられるほどの実力者はお前しかない!」

「・・・そうかな。もう一人いると思うけど」

ハルトマンの視線の先にマルセイユも視線を移す。そこには一人の男性が佇んでいた。その姿を見てマルセイユは途端に背筋が凍り付くような感覚に襲われた。

「な、誰だ?! 男じゃないか!」

「ユウだよ」

「ユウ?」

「教えてやろう。あれは世界一の撃墜王、赤松勇だ」

バルクホルンのどことなく勝ち誇ったような顔が気に食わなかったようだが、マルセイユは勇の持つ圧倒的なオーラに警笛を鳴らしている自分に気が付いた。

「赤松勇……もしかして、'荒鷲隊のゴースト'か?!」

その異様なネーミングに一同は懐疑的になる。先ほどまでの自信をかなぐり捨てて恐怖するマルセイユの対象である勇に視線が集まる。勇は日光の陰からゆっくりとマルセイユの近くに歩み寄るとマルセイユを覗き込むように見つめる。それは蛇に睨まれた蛙の様だった。

「懐かしい名だ。君が何者かは知らないし、知るつもりもないが作戦に参加する以上失敗は許さない。それとも俺が直々に作戦について、'指導'が必要かな?」

威圧的な態度に気を抜いたら食われてしまいそんな殺気にマルセイユは首を振るの  
で精一杯だった。こうして作戦参加者はマルセイユとハルトマンに決定し、作戦まで連  
携を高める訓練が日々行われ始めた。自信家のマルセイユらしく、常にハルトマンへ勝  
負を持ち掛けていたある日の訓練で事件は起きた。気球を撃墜する連携射撃訓練で一  
気に片付けた二人の力量に全員が感心していると、突如マルセイユがハルトマンの背後  
に回り射撃の構えを取ったのだ。

「訓練中止！二人ともすぐに降りなさい！」

ミーナにたっぷり説教を食らった二人は部屋で愚痴を挟みつつ過ごしていた。

「ミーナに怒られちゃったじゃんか！」

「やっぱりミーナは怖いな」

「本気だともっと怖いんだぞ！」

「・・・怖いと言えば、ハルトマン。お前は赤松少佐は怖いと思わないのか？」

ハルトマンにとっては話の飛躍に一瞬戸惑ったが、普段の勇を思い出し、印象を語る。

「昔はもつと優しい感じだったよ。それこそトウルデーが手懐けたんだけどね」  
「バルクホルンが?!」

このことに驚いたマルセイユは、バルクホルンの所業に彼女の評価を見直すことになったという。またハルトマンも逆にマルセイユの勇への評価が知りたくなった。

「ハンナはユウのこと何か知ってるの?」

「…彼は、赤松少佐とは直接の面識はないんだ。だが、うちに扶桑の戦闘機部隊があつてな、そいつらとは仲良くやっているんだが、口を揃えて別格がいると言っていた」

「それがユウなの?」

マルセイユが言うアフリカに駐屯する部隊とは、勇の所属していた343空第二中隊である。マルセイユは彼らの口ぶりを思い出し、またそのほかの情報とも勇を照合しての人物像を持っていた。

「指揮官の杉田はいいやつだ。しかし杉田は赤松少佐の名を出すといつもの明るさがすつと消してしまふんだ。まるで幽霊でも見たかのような・・・」

「だからゴースト?」

「それだけじゃない。赤松少佐は以前アフリカ戦線に参加したことがあるらしい。極秘作戦だったからその詳細はうちの隊長と將軍の話を又聞きしたに過ぎないが、僅か一週間で私たちが3か月かけて成し遂げた戦果を出したらしい。私は最初、そんな強者がいることに歓喜した。だが少佐は強いだけじゃなかった」

マルセイユまでもがその噂を未だに信じられない様子だったが、ハルトマンは勇の本当の姿に興味があつた。

「うちの將軍をな、脅迫したんだそうだ」

「ええ?! ロンメル將軍だよね?!」

「ああ、まあ真相は分からないが、噂では作戦の開始段階でうちの部隊との協力を打診したら・・・」

「まさか、拒絶したの?」

ハルトマンが最初に勇に出会った頃の勇の反応に似ている気がしたため胸騒ぎを覚えた。急かすように答えを促すハルトマンとは対照に、マルセイユはゆっくり当時の感情を思い起こすように言葉を紡ぎ出す。

「拒絶だけならまだよかつただろうさ。返事と共に拳銃と弾丸が一発だけ届けられたんだ」

「どういうこと？」

「返事にはこうあったそうさ。『協力は断固拒否する。もし一発でもこの作戦に関与したならば、この弾丸があなたの頭に届くことになるだろう。私には即座にあなたの傍に行くことができるし、そのことに誰も気づかない。気づいたとしてもその時にはあなたはもうこの世にはいないだろう』……」

ハルトマンまでもその文言に戦慄を覚えた。將軍という人物であろうと暗殺すると宣う異常性と勇が結びつきそうだった自分自身にも驚いていたほどである。本当にあの勇がその人物であるのかは分からないが、あの夜に部屋の片づけを手伝ってくれた勇と模擬戦をした時のあの威圧感を持った勇とが、その情報にある勇の像と結びつくかせぬぎ合っていた。勇のあだ名とも言える、'ゴースト'に納得の説明だっただけにその前

の文言が気になった。

「ゴースト……前に言ってたあだ名ってなんて言ってた？」

「ああ？ 『荒鷲隊のゴースト』か？」

「うんそれ。荒鷲隊って何のこと？」

「うむ……私も詳しくは知らないんだ」

全てを知るわけじゃないマルセイユに全て教えてもらうことはできないと諦めかけたハルトマンは質問を終えようとした。するとマルセイユが思い出したように呟く。

「荒鷲隊と言えば……どこかで聞いた気がするな。あれは確か……ああ！本部で聞いた何かの兵器の名前だ！」

「兵器？」

「ああ、アラワシが成功の鍵とかなんとかって……まあ上層部の暗号なんかかもしれないかな」



そんな話をしていると警報が鳴り響く。同時に出撃予定時刻になったためミーナが部屋に入る。二人は顔を見合わせて出撃準備に取り掛かる。部屋を勢いよく出るのを見たミーナは小さく呟いた。

「荒鷲隊のゴースト……そういうことだったのね」

作戦は開始され、ハルトマンとマルセイユは潜水艦の格納庫の中で互いに確かめ合う。もちろん撃墜数勝負を盛り込んだ意気込みもあったが、それ以上に今回の作戦は互いの強さだけが試されると覚悟していたため、艦内は緊張感に包みこまれた。

「約束守ってよ」

「もちろんだ」

艦内の出撃用意の警報が鳴り、潜水艦が浮上。それと同時に二人は射出され、ネウロイのドーム状の内部に放たれる。ネウロイが慌てふためきながらコアを守らんと一斉に襲い掛かってくる。それを外部からミーナの空間把握の固有魔法で確認する。

「敵数は？」

『50!』

『いや45だ!』

「え?!どっちなんですか？」

「どちらも正解よ」

「二人が撃墜してるんだ」

「すごい・・・」

世界の中でも屈指の実力者の攻撃は圧倒的だった。瞬く間にドーム内の敵を片づけるとコアを破壊し、同地域を開放してしまった。お互いに25機ずつの撃墜を確認し、ミーナが安堵しつつ作戦終了を告げる。しかし、二人は顔を見合わせると二人の作戦を実行する。

「これで作戦を終了します。二人ともご苦労様・・・っ?!二人とも終了よ!」

ドームから出てきてもなお二人の速度は変わらず、猛り狂ったように勇のいる方向に突入しようとしていた。慌ててミーナが制止させようとするも、当の勇はため息を吐き

ながら安全装置に手をかけていた。それを見たミーナは事態を重く受け止めたが、それは時すでに遅かった。二人が高速で危険なほど勇の至近を通り抜けると、勇も二人に追いつき始めてしまった。ミーナとバルクホルンは止めようとするが、坂本がそれを止めさせた。

「美緒?!」

「少佐?! あれは実弾だぞ?!」

「やらせてやれ。勇が了承したことだ。」

「でもっ!」

「大丈夫、だれも傷つかない」

坂本の確固たる自信にミーナとバルクホルンは渋々了承する。既に三人による、おそらく世界でも類を見ないほどの実力者による空戦が行われようとしていた。

「ハルトマンいいか? まだ少佐の実力の全貌が見えない以上、最初から全力を出すぞ!」  
「分かってるよ! それに多分だけど全力でも互角に持ち込めるかどうかだよ」

「それほどか?」

「うん」

「わかった」

ハルトマンとマルセイユは互いを信じ、勇に戦いを挑む。勇自身は零戦の速度とは思えないほどのスピードで二人を追っていた。二人が上昇したため勇も追従すると、二人は左右に分かれる。勇は的を絞って一人を追う。

「食いついたぞー！」

「うんー！」

左右に別れた後、互いにぶつかると同時に水平方向に旋回を開始する。すれ違いざまに攻撃をする手立てだった。徐々にハルトマンの前方に勇を背後に連れたマルセイユが見える。銃を構え、勇から自分の姿をマルセイユに被るようにし、マルセイユは勇の視線を遮るように飛行する。ちょうどよいタイミングが訪れるまでがマルセイユの恐怖の時間だった。いつもなら高次元軌道で攪乱できるが、今回は視界を遮ることが目的のため、飛行が安直になりがちで、勇の実力が確かならいつ射撃されてもおかしくなかった。

「ハルトマン頼むぞ！」

「任せて！」

タイミングを完璧に掴んだマルセイユは解放されたかのように高次元機動を取り、勇の前から姿を消そうとする。その途端にハルトマンがすれ違いざまを射撃する。集的に放たれた弾幕は勇の取り得る軌道にばらまかれ、凡そ回避は困難に思われた。しかし、蓋を開けて見れば勇は悠然とその攻撃を回避していた。

「どういうことだ?!まるで消えたみたいだぞ!そうかつ!前に言っていた固有魔法か!?!」

「そう!『瞬間移動』ってやつ!」

「くそう!あれを回避されるとは・・・」

「ハンナ!?!来るよ!」

戦術が覆されたことに驚きを隠せなかつたが、ハルトマンの警告で急速に頭を切り替える。いつの間にか背後を再び取られていたことに気づき、回避に専念する。急激に制

動をかけて勇の背後を取ろうとする。それを見ているミーナたちも興奮を隠せなかった。

「撃ちました!? 撃ちましたよ?! いいんですか?!」

「はあ、後で処罰を下します」

「それにしてもすごいな・・・ハイジ―バレルロールで切り返し状況を覆したぞー!」

「ああ、それでもユウが優勢なのには変わりないな」

「あれが前にリーネが言ってた『瞬間移動』ってやつか。あの時私がやられたのもあれだったんだナ」

「二人を相手に優勢を誇るなんてさすがは勇少佐ですわ!」

「どっちも頑張れえ!!」

「どうしたら決着が着くんだけ?」

「・・・どちらかがシールドを張ったらだろうな」

応援の声もさることながら、二人は一向に勇を崩せずにいた。また、奇妙なことに勇は未だに一発も二人に攻撃をしてきてはいなかった。ハルトマンとマルセイユは汗を滲ませながら最後の大攻勢に打って出ようとしていた。

「ハルトマンっ！お前に合わせる！」

「頼んだよ！」

ハルトマンが先に急上昇し、それに続く形でマルセイユ、勇の順に並んでいた。振り切れないギリギリのスピードでマルセイユが勇に背後を取らせる。マルセイユもここまで危険な飛行をしようとしている自分に驚いていたが、相手が相手なだけにもはやなりふり構っていられなかった。意を決すると木の葉落としの要領をマルセイユなりにアレンジした技を繰り出す。急制動に普通の相手なら目の前に落ちてくる機体に目を逸らしてしまうか、体勢を崩すはずだった。しかし、木の葉落としの最中に身体を捻って銃を構えるが、勇はそれを見越して勇も木の葉落としを繰り出していた。

「なんてやつだ!?!だが・・・ハルトマン!!」

「シウトウルム！」

「来いっ!!」

ハルトマンが逆落としに急降下をされており、マルセイユの体制と合致する最高のタイ

ミングで攻撃を仕掛けてきた。以前の模擬戦の時は瞬間移動で回避されていたことも考慮した上での戦術のため、マルセイユとハルトマンの位置とタイミングは完璧と言えた。ここでシュトウルムが回避されたとしても、マルセイユが既に射撃体勢を取っており、いくら瞬間移動といえど木の葉落としをした直後は急激な動きは出来ない為、二重の包囲網と言えた。勝ち筋が見えたと、二人も観戦している誰もがそう思った。しかし、現実には目を疑う光景を映し出していた。

「終わりだ」

シュトウルムで体勢を崩していたはずの、二人に完璧に包囲されたはずの勇は逆に二人を完璧に超至近距離で捉えていた。それは誰もが二人が本来撃墜されると確信できるほどの距離だった。勇は静かに銃口を二人に向けており、その視線はどこまでも暗く冷たかった。二人はその視線に心が驚揺みされそうになり、無意識にシールドを張っていた。しかし、一瞬の間が空いてミーナが終了の合図を下す。

「そこまで。三人ともこれにて今作戦の全てを終了します。帰ってきなさい」

「・・・了解」



その後、作戦は無事完遂され、マルタ島は奪還。三人はこつてりとミーナに説教されたという。その頃、格納庫では坂本とバルクホルンが勇の武器の前で語らっていた。

「少佐、結局ユウは一発も撃たずに二人を同時に撃墜判定を出したわけだが・・・」

「私は最初から心配していなかったさ」

「どうしてだ？」

「ユウは今回の作戦に関与するつもりはなかったらしい。その証拠にほら」

坂本が勇の武器を指さす。バルクホルンが勇の武器を覗き込むと驚きの事実が発覚する。

「なっ?!これは!!」

「そう・・・弾は入っていなかったのさ」

勇の使用する20mm機関砲は坂本たち扶桑海軍のウィッチが使用するホ号改13mm機銃よりも大威力のものだった。その弾倉にはただの一発も弾が入ってすらいな

かった。坂本は出撃する際、整備員が訝しむように武器を勇に渡す様子をみていたため、今回の行く末が予知できたという。

「じゃあ、ユウは全部ハツタリで二人を?!」

「そういうことになる。私もさすがに驚いたがな・・・」

「ユウ・・・お前は一体私たちをどう思っているんだ」

格納庫には二人の心音が溶け込んだいった。

翌日、マルセイユは元の部隊に帰還するため輸送機に搭乗するところだった。ハルトマンは自分たちの作戦が失敗に終わったことの責任を感じてか、自ら汚部屋を掃除していた。そして、マルセイユは清々しい表情でミーナに別れを告げる。

「世話になったな」

「もうお世話はごめんです。アフリカに帰るのね。もう少しゆっくりしていけばいいのに」

「私は忙しいのさ」

そう恰好を付けるマルセイユはポケットから一枚のサイン入りの写真を取り出すとミーナに渡す。ミーナは苦笑しつつそれを受け取る。

「本人に直接渡せばいいのに」

「まあ、あいつのことを正当に評価しただけさ」

「正当に？」

「・・・あんな怪物を手懐ける奴にはちよっかいても易々かけれんからな」

怪物と言う単語からその該当人物がだれか分かったミーナは、少しバルクホルンと勇の関係を誤解していることに苦笑いした。そして、マルセイユに向かって一つ訂正しておくのだった。

「怪物と言うけれど、彼、案外優しいのよ」

「・・・嘘をつけ。まったくミーナには敵わないな」

「ええ、あの人を、守る、のは私たちだもの。だって・・・仲間だから」

「・・・そうか」

マルセイユは機上の人となり、決戦の前段階が全て片付いた。遂に決戦である。ミーンは基地を振り返り、仲間たちの顔を思い出す。その顔触れは最高の仲間たちであり、坂本やバルクホルンやハルトマン。そして、その枠の中には勇の顔も入れていた。

「私が、私たちが決着を付ける」

その決意を意にも介さない人物は自室でベッドに腰を下ろして拳を胸に気を高めていた。心臓が熱く、高鳴っていた。勇の目指す未来をその拳に込めて誓う。

「俺が、俺だけで決着を付ける」

勇の瞳は一瞬赤く輝いて凍てつく。決戦に渦巻くそれぞれの苦悩と期待は全て勇が握っていると言っても過言ではなかった。その自信が勇にはあった。勇は基地の外を見下ろす。そこにはただ悠然とアドリア海が漣を打ち付けるだけだった。

# 新たな翼 第十一話

「烈風斬っ!!」

大型ネウロイの出現に対応していた501は、坂本の必殺技で終止符を打つ。いつものことながら坂本の無茶苦茶な戦法に宮藤は尊敬の眼差しを送っている。また、同時に坂本の魔法力の限界が近づいているのも知る者だけが察せられた。

「魔法力の限界か・・・」

後日、遂に司令部から決戦の招集が下達され、ミーナ、坂本、勇が輸送機で向かうこととなった。その間、宮藤達残された隊員は風呂で最後の基地生活を堪能しようとしていた。

「こんな朝早くからどうしてお風呂に?」

「坂本少佐から決戦に向けて英気を養うよう言われてな。これがこの基地での最後の風

呂になるかもしれんからな・・・」

宮藤の質問にバルクホルンが湯船につかりながら答える。他一同もそれぞれ堪能しているようだったが、最後という言葉にこれまでの思い出が過っていた。

一方、司令部では勇は別体系の任務群出身ということもあり途中でミーナたちと別れていた。そして、司令部の会議室ではまさに決戦の内容が伝えられていた。

「我々はロマーニヤを解奪還する」

「はい！」

「作戦内容は、戦艦大和率いる扶桑海軍を主力とし、敵ネウロイの巢を撃滅するものである」

伝えられた内容にミーナと坂本は疑問を口に出さないわけにはいかなかった。

「それでは私たちはこの作戦に関与しないということですか?！」

「作戦の主役ではないというだけで、作戦の援護を担ってもらおう」

「大和は通常兵器であって、ネウロイに効果的な打撃を与えられるというわけではありません！」

「通常兵器ではないのだよ」

ニヤリと将軍が口角を上げると同時に脇に控えていた軍人が姿を晒す。その人物はミーナと坂本兩人が驚くべき人物であった。

「杉田艦長・・・それにユウ?!」

杉田とともに肩を並べる勇の姿はいつもの階級のものではなかった。中佐の階級章をつけた、連合軍軍人としての勇がそこにいたのだった。そして、杉田が作戦について話し出す。

「我が大和は、ウォーロック実験からのデータを引き継ぎ、より高性能な装置を開発。10分と限られた時間ではあるが完璧にコアコントロールシステムを起動することができる魔導ダイナモ・・・通称『アラワシ』によりネウロイを撃破します」

「血迷ったか！」

「坂本少佐、君は退役して然る年齢だろう。理解したまえ」

「ウィッチに不可能はありません！真烈風斬さえあればっ！」

坂本の意見も至極当然で、ウォーロックによる被害を受けた501としては確証の無いネウロイの技術を用いることは避けたかった。さらに最近の坂本の魔法力の様子を見るに、將軍の言葉も的を得ていると言わざるを得なかった。そして、ミーナが勇に對しての疑問をぶつける。

「彼はどういった役割でここにいるのでしょうか？」

「赤松中佐、君から説明したまえ」

「はい……コアコントロールシステム、『アラワシ』によって制御された大和を誘導、攻撃を指揮する者として、コアの主人たる私が大和に乗艦し、巢の破壊を実行します」

ミーナにはそのコアの出どころに心当たりがあった。以前勇が単独撃破したネウロイのものだと推察できた。ミーナは齒を食いしばって怒りを堪える。自分の決意がこゝも勇と言う一人物によって変えられてしまうことが悔しくてならなかった。



「コアの主人と仰いましたが、そのような事実無根の妄想と、実践を想定した訓練やその後の対処プランなどを過分にも私は存じ上げません！不確定要素は可能な限り排除すべきかと愚考しますが？」

「ネウロイに勝つにはネウロイの力が必要なのだよ」

「・・・赤松中佐、あなたも同じ考えですか？」

勇を睨み対けるようにミーナは勇に対峙する。勇は表情を動かさずに解答する。

「ウィッチは主戦力足り得ない・・・いや、戦場に必要ないと考えます」

その言葉にミーナは齒噛みしつつ、最後の質問を投げ返る。この返答によつてはミーナの今後の方針が一変するからである。

「では質問を変えます。あなたを仲間だと思っていた者は救われないのでですか？」

勇をしつかりと見据え解答を待つ。坂本もミーナの意図を知り、静観していた。だが勇は変わらず冷たく返答する。

「私はあなたたちを仲間だとは思わない。ただ、私が救うのは世界でありあなたたちだ」  
勇の言葉を最後に会議室は沈黙に包まれた。沈黙を答えとした將軍は最期の通告を二人に下す。

「これで会議は終了する。ロマーニヤ解放が成されなければ、その時はロマーニヤも我々もお終いだ。心せよ」

「・・・了解しました」

決着が着いたかに思われたが、ミーナが最後に付け加える。

「赤松中佐にこれは501統合戦闘航空団隊長、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケからの命令を伝えます・・・きちんと『ただいま』を言ってから戻りなさい」

最後の一言に勇はムスツとした表情を見せるが何も言わずに退場し始める。坂本は不満げな様子だったが、あそこで対立するのは今後の作戦進行上よろしくない。ミーナ

はあえて了承することで場を収めた。会議室を尻目に見た時、最後に映ったのは勇の後ろ姿だった。

司令部から帰投した二人はすぐに隊員たちを集めて作戦の概要を説明する。もちろん批判が殺到することは目に見えていた。

「ミーナそんな作戦を易々と受け入れてきたのか!? ユウが大和に乗艦するだ?! 一人だけでやらせる気か!」

「そんなわけないじゃない!!」

ミーナも心の中の感情を吐露する。それはどうしようもなく抗えない事実に従うしかない現状にだれしもが抱く不安だった。しかし、ミーナも隊員たちも負けるつもりはない。その葛藤が勇に帰結することを皆が理解していた。

「だれも……だれも失わせないわ! 誰一人として!」

「そうです! 私たちならできます! 501のみんななら! 12人なら!」

ミーナの決意が一人の少女を立ち上がらせた。宮藤の声に隊員たちも立ち上がる。

ミーナは勝利を掴むために仲間の存在を強く再認識した。それと同時に宮藤が二人の存在に一抹の不安を覚えるのだった。

(勇さん、坂本さん……?)

勇は司令部で作戦まで待機していた。501の基地に帰っていないことから、バルクホルンたちは自分を責めているかもしれないと考えたりもした。しかし、それ以上に今回の作戦で勇の思い描く未来が手に入ることを思えば些細なことだった。すると一人の老将軍が勇に声を掛けてきた。この老将軍こそ、勇がこれまで無茶をしてきても各機関を抑え、好きに活動できた功労者だった。

「赤松中佐、君のおかげで今作戦の目途が立った。君の提供してくれたコアがあつてこそ我々はネウロイに我々の手で終焉を突き付けることができるのだ！我々人類の願いを君と共有できることを私は嬉しく思う」

「勿体なきお言葉です。私ができることはこの作戦に、これからの全ての戦いに勝利を齎すことです」

「君の働きに特別の感謝を示そう。501も支援にいることだし、作戦の成功を祈つて  
るぞう」

501の隊員がこの作戦に関与することを勇は予てから拒絶していた。そのため支援と言えど勇は嫌悪感を示し続けていた。

「將軍、501の彼女らですがやはり作戦に参加させるのですか？」

「彼女らは君が突っ込むまで君を護衛する役目がある。さすがにこの役目を完璧に努められるのは彼女らを置いて他におるまいて」

勇は落胆しつつ、既定事項に立てつくことはしない。その代わり將軍が勇に対して忠告を残す。

「まったく君と言う男は・・・各地で指揮官を脅したり、現場をかき乱した火消しをさせられた私の身にもなりたまえ・・・まあ、私はそんな君のウィッチに対する優しさに周りの意見とは違うからこそ助けるのだがね・・・君は今回の作戦を成功させると世界から狙われることになる。それこそ戦力として名実ともに世界最強になるからな。この

意味はわかっているね？」

勇もこのことは理解しているつもりだった。ネウロイに対抗できる手段で、かつ絶対的な力となればどこの戦場でもその戦力は魅力的であり、垂涎の的だろうことは容易に想像できるからであつた。しかし、勇はそのデメリツトを抱えたとしても成し遂げたい目標があつた。

「はい、よく理解しています。一刻も早くこの腐つた戦争を終わらせて、全てのウイツチが、全ての人が平和を享受できる世界を作るためならば、例えこの身が引き裂かれたとしても私は全ての火種を消し去ります」

「理解しているのならよろしい。だがゆめゆめ忘れぬことだ。世界とは生き物、全てが思い通りになるとは限らんど。もしかしたら君に牙を向くだろう」

あくまで勇をつけ上がらせないための言葉だが、今の勇には絶対の自信があつた。自身があればこそ、勇は何が起きようと自分の手で解決できると確信していた。

「私が今の私である限り、牙ごときで貫けるほど私はやわではありません」  
「ふっ、若さとは素晴らしきかな・・・」

作戦内容が知らされた日の晩、501基地では隊員が寝静まった頃に坂本が一人格納庫にいた。自分のユニットである紫電改に脚を入れると魔法力を注ぎ込む。発進に必要な回転数に至らず苛立ちを魔法力に込めてぶん回す。やつこのことで発進したものの、外に繋がる通路の先にはミーナが立っていたため避けようとするも体勢を崩してしまっていた。

「うっ!!気づいていたのか・・・ミーナ」

「まるで諸刃の剣ね。烈風丸はあなたのウィッチとしての寿命を縮めているのよ」

ミーナの説得に坂本は尚も諦めずに烈風丸を鞘から出して構える。しかし、その輝きは己の魔法力の欠片をも吸い尽くしてしまっていた。

「美緒、もうやめて!」

「頼むミーナ!私も12人の中に居させてくれ!頼む・・・」

ミーナが坂本の姿に耐えられず、坂本を優しく抱擁する。いつもの坂本ならこんな情けないと捉えられる姿を晒したりしないはずであるが、勇の今日の姿や自分の魔法力の限界が自分の居場所の不透明さを強く想起させてしまっていた。ミーナは今度は強く坂本を抱きしめ耳元で囁く。

「さつき勇中佐から通信があつたわ。美緒のこと心配してくれたみたい。」

「ユウも気づいていたのか・・・」

「ええ・・・『真烈風斬は打たずに終わる』ですつて。まったく彼らしいわ」

「ああ、そうだな・・・ユウも私たちの大切な仲間だからな」

翌日、遂に501は決戦の場へと出撃した。海域には地中海艦隊が並び、空母天城に並行した魔導ダイナモ、通称「アラワシ」が搭載され勇が乗艦する旗艦大和が聳えていた。

「でっけえ艦だな!？」

「あそこにユウがいるのか・・・」



「私たちは私たちの任務をこなすのよ」

大和の艦内では魔導ダイナモ『アラワシ』の前に一人佇む男の姿があった。大和のすぐ横をウィッチである501が飛び抜けていく。その姿を見ながらも一度自分の目標を思い返す。

「もう少しだ・・・お前たちは俺が開放する。」

想いを強くしていると通信が空母天城の杉田から届けられる。

『赤松中佐、こちら杉田だ。今どうしている?』

「作戦に備えています。なにも問題ありません」

『そうか・・・君に一つ言っておきたいことがある』

いつになく杉田が感傷的な雰囲気ですら勇に語り掛けていることが気にかかったが、そのまま通信に耳をそばだてる。

『これは人類の戦いであつて君だけの戦いではない……君は今を生きなさい』

杉田の言葉の真意を噛みしめつつ、ネウロイの巢に接近するとネウロイ側から攻撃が仕掛けられ、遂に決戦が開始された。501が散会し、大和に近づけさせまいと奮闘しているのが見て取れた。その姿に勇は齒噛みしつつその時を待った。

「今だけだ……今日この時を持つてウィツチのお前たちの‘使命’、とやらは俺が取つて代わる！だから、坂本……死ぬなよ！」

隊員たちが一所懸命に戦闘を続けるがネウロイの攻撃の勢いは止まらなかつた。しかし、それでもなお奮闘するウィツチたちの姿は昔自分が所属してた彼女よりもっと強く見えた。その理由を勇は知ろうとしなかつたが、少しだけ分かつてしまった気がした。そして、坂本が仲間の窮地を助けるため烈風斬を繰り出そうとする。その瞬間、坂本の刀は弾かれ大和の前方に突き刺さつた。

「少佐?!大丈夫?!」

「私は、私はもう12人の中にはいられないのか……」

坂本が失意に沈む中、遂に勇の乗る大和が満を持して出撃する時が来た。

「大和、ネウロイ化準備完了！」

「赤松中佐！いいか!?!」

「やっってください！」

勇の了承が得られると天城から遠隔操作で魔導ダイナモ『アラワシ』にスイッチが入れられる。徐々にネウロイ化する大和をその場の全員が見守る中、勇は『アラワシ』を制御し続ける。

「坂本、もういいんだ．．．トゥルード、お別れだ！行くぞ！大和！『アラワシ』!!」  
「大和浮上つ!!」

杉田の号令を受け、勇が『アラワシ』に命じると、その黒鉄の城は浮上を始める。その光景を天城に退避した隊員たちが驚愕の表情で感想を伝え合う。

「すっげえ・・・」

「いつけえ!!!ユウ!」

「サーニャ見ろ見ろ!」

「もう見てるわ・・・」

ネウロイ化した大和のその異様さと常識外れの光景に誰しもが興奮していた。敵が接近してくるのと判断した勇は『アラワシ』に命じて対空射撃を開始する。

『『アラワシ』に命じる!全火器対空目標各個に定め!対空射撃開始!』

15cm副砲や10cm対空砲、25mm三連装対空機銃、13mm対空機銃が一斉に火を噴く。その圧倒的な火力で敵をなぎ倒しながら進む姿は大和の凄さを見せつけるかの様だった。

「なんとという火力だ・・・」

「あそこにユウもいるんだよね」

「ああ、ユウが大和を操っているんだ」

勇が乗艦していることを含め、大和の快進撃は止まらなかつた。いくつものネウロイの攻撃に晒されても即座に修復し歩みを止めなかつた。

「これがネウロイ化した大和の力だ．．．人類の本気を見せてやる！」

「ネウロイ化が解けるまであと3分！」

「赤松中佐、突っ込めえええ!!」

「行けえええ！大和お！俺の勝ちだ!!」

ネウロイの巢の核に突撃した瞬間強烈な衝撃に襲われ、勇の視界は暗転した。そして、杉田の掛け声が放たれる。

「主砲斉射あ!!!」

その掛け声は大和、そして勇に届くことはなく大和は沈黙したままだった。何事かと全員が焦り始める。そこへ天城の技術員が絶叫と共に報告する。

「魔導ダイナモ『アラワシ』反応しません！砲塔沈黙！駄目です！赤松中佐とも連絡がつかありません！」

「くそっ!!なんてざまだっ!!!」

ネウロイの巢からは再び無数のネウロイが大和に殺到し始め、爆撃を続ける。杉田は勇の消息が不明な以上、これ以上の作戦続行はできないと判断する。

「諸君・・・大和の、赤松中佐の反応がない。残念だが作戦は失敗したものと判断する。全艦一六転回頭・・・無念だ」

その言葉にルツキーニが泣き始める。シャーリーが慰めているがその表情にはやりきれなさが表れていた。それは他の隊員も同じだった。

「本当に終わっちゃうの・・・」

「おい！ユウ!!?返事をしろ！ユウ！」

「ユウがまだ大和に残ってんじゃないか！」

ミーナも坂本も作戦の失敗を受けとめきれず、上空でホバリングしつつ大和に視線を送ることしかできなかった。こんな最悪な形で勇もロマーニヤも守れなくなることをだれが想像できただろう。しかし、坂本だけは諦めていなかった。

「まだだ!」

「美緒?!」

「私が『アラワシ』に直接魔法力を流し込む!」

『坂本少佐、無茶だ!』

坂本はその忠告を無視し、ミーナから離れて大和に向かってしまう。天城甲板では宮藤が坂本の行動に気づいてしまう。

「坂本さん!行っちゃだめです!だってもう魔法力が・・・」

「宮藤・・・気づいていたのか。だが私は行かねばならん。武士は戦場でしか生きられないのだ。私も12人の中に居させてくれ・・・」

「坂本さん!!」

宮藤の言葉は届かず、既に留まることを知らない坂本は最期の魔法力を絞って大和に向かう。そのすぐ後をミーナが追い、坂本を止める。

「止まりなさい！」

「ミーナ……」

「自殺行為よ！行くことは許しません！」

必死に戦友であり、大切な存在が留まるよう説得するも覚悟を決めた坂本には届かず間合いを詰められてしまう。

「皮肉なものだ。魔法力がなく、最後まで戦わなかった私だけが魔法力を残すことになったのだから……」

「美緒……」

「行かせてくれ、ミーナ！」

ミーナはこの作戦にいろいろなものを賭けていた。それこそ誰一人として失うつもりも、作戦を成功させることも、坂本をそして勇を救うことを。そして今、その全てが



失敗しようとしていた。ここで坂本まで行かせてしまったら、それこそ全てが水泡に帰すことになるのだった。しかし、目の前にいる坂本というウィッチは501の一員であり、ウィッチであろうとし続けようとしている。ここで止めては坂本の唯一の願いもなかがしろにしてしまうこの葛藤にミーナは苦渋の決断を下す。

「……必ず生きて帰ってきて……これは命令よ」

「ああ、ありがとうミーナ」

ミーナの顔ももう見ることもなく一人のウィッチは大和へ向かってしまった。

坂本はもう迷わなかった。大和に乗り込み、艦橋に向かうと勇を探した。するとそこにはネウロイに浸食されかけた勇が刀に手をかけて座っていた。

「ユウ!? どうしたんだ?!」

坂本が必死に呼びかけても勇は目を閉じたまま起きることはなかった。首の上まで浸食されているところを見るにまだ完璧にネウロイ化しているわけではなかったが、これでは『アラワシ』が起動するはずもなかった。坂本は自らの魔法力を用いて『アラワ

シ』に立ち向かう。

「私がお前に力をくれてやる！起きろ！大和!!」

その頃、天城艦内で『アラワシ』の反応が出現する。坂本が乗り込みに成功した事実とこれで攻撃できることへの期待が場を沸かせ、坂本と現場は一体になる。

「『アラワシ』の反応ありました！出力上昇中！」

「これでいけるぞ！」

「ネウロイ化が解けるまで残り30秒！」

「間もなく臨界!!」

「私の魔法力をくれてやる！まだだ！もつと．．．もつとだ！」

坂本の魔法力を食い続ける『アラワシ』はその力を急速に取り戻すが、それでも物足りないのか坂本まで取り込もうとする。

「そうか、私も取り込むのか．．．ユウ、お前の力を借りるぞ！」

「いつでも行けます！」

「坂本少佐！撃てええ!!」

「撃てええ!!大和お!!!」

大和の46cm主砲の一斉射の威力は凄まじいものだった。あたりを爆発と閃光が包む中、勇の意識はうつすらと白み始めていた。

（あれ、俺はどうしたんだ・・・なんで動かない？この魔法力・・・まさか坂本か？どうして坂本を俺の中で感じるんだ？）

爆炎が晴れようとしている中、他の隊員は坂本と勇の安否を心配する。そして、勇の頭の中に一つの声流れ込む。それはとても懐かしく、勇が探していた人物のものだった。

（隊長！起きてください！）

（その声！まさか藤野か?!）

勇は忘れもしない最後の戦友である藤野の声に驚く。藤野の姿は見えないものの、その声は昔の藤野のものに間違いはなかった。

(隊長！ウイツチが来ましたよ！ウイツチです！)

(馬鹿を言うな・・・ウイツチは来なかったじゃないか)

勇は藤野と交わした最期の言葉を今も鮮明に覚えていた。また、勇はもうウイツチを信じておらず、そのウイツチである自分を徹底して嫌悪し、そんな自分を変えようと粉骨砕身してきた。そんな勇に藤野は明るく声を掛け続ける。

(何を言っているんですか！ウイツチは来ましたよ！)

(わからん奴だな。ウイツチが来なかったからお前は死んだんだぞ！)

霞む視界の中、藤野の姿が徐々に鮮明になる。そんな藤野はあの時のように馬鹿みたいに明るく、慌ただしく勇の手を引いて起こそうとする。

(僕は死んでなんかいませんよ！だって、隊長が覚えていてくれているじゃないですか

！)

勇はその言葉にはつとずる。目の前の藤野は恨みなど微塵もない晴れ渡った顔で微笑んでいる。勇はまじまじと藤野の顔を覗き込むと藤野はしつかりと勇の手を掴んで語り掛ける。

（隊長が覚えていてくれる限り、荒鷲隊は生き続けます。だから僕たちはみんな生きていますよ！ウイッチはやっぱり来てくれたんです！）

（俺はお前を、みんなを守れなかったんだぞ？）

藤野の顔を見ないように勇が顔を下に向けると、藤野はゆっくりと立ち上がりそんな勇を置いて歩き始める。藤野の影が離れたことを感じた勇は藤野の追憶を追ってしまふ。それがもう二度と見ることでできない存在であると知りながら、時間がそれを許さなかった。視界が白み始めるころ、藤野は振り返り言葉を送る。

（もう、僕を背負わなくていいですよ。ウイッチが来てくれましたから。隊長、さようなら……）

(頼む！藤野！俺を許してくれ!!)

(隊長……ウィッチに不可能はないって『言いましたよね？あなたの』ウィッチはどこですか……)

その言葉と共に勇の意識は現実引き戻される。大和の艦橋で倒れていたようで、現状がどうなっているのかわからなかった。急いで戦闘指揮所に上り、外を確認する。そこには驚きの光景が広がっていた。

「な、なんだこれは?!坂本っ?!」

勇の目の前に広がる光景には巨大なネウロイのコアのとっぺんに坂本が張り付けられているものだった。大和を動かしたところから察するに、坂本が勇のところまでやってきたことは確かだが、それでは坂本がネウロイのコアに持つていかれたことに説明がつかない。その時勇はハツとして自分の魔法力を確認する。

「……まさか!?!あいつ、俺の『瞬間移動』を奪っていきやがったのか!?!」

勇は自分の固有魔法である『瞬間移動』を発動しようとしたが一向に発動できなかった。それどころか身体がだるく、いつもの7割程度しか魔法力を発揮できなかった。このことから坂本が、坂本の残り僅かな魔法力だけでは『アラワシ』を満足させられず、勇の魔法力を奪っていったと判断できた。怒りが込み上げてくるが自分の今の状況ではどうしようもなく、ただ立ち尽くして坂本を見上げることしかできなかった。

「坂本さんっ!!」

その時、銃声とネウロイの子機が攻撃に移ったことで眼下に宮藤が上昇してきていることに気が付く。それも宮藤一人の単機であり、状況は絶望的だった。

「宮藤！止めろ！お前だけじゃ無理だ！引き返せ！」

勇の必死の叫びに気が付いた宮藤は、勇が生きていたことに安堵した表情を浮かべつつ、圧倒的な不利な戦況と残り僅かな魔法力をフル活用して事態に当たっていた。

「勇さん！生きていたんですね！良かった！」

「馬鹿か！いくらお前の魔法力が膨大だったとしても坂本のところまで行けっこない！」

「やっぱり勇さんは勇さんです！」

「な、何を言っている・・・」

「仲間じゃないなんて言っておきながら、私たちを心配してくれているじゃないですか！やっぱり勇さんは優しい勇さんです!!」

宮藤の頑なな態度と意味のない信頼に呆れる勇と同時に坂本が目を覚ます。坂本も勇同様忠告をする。

「宮藤諦めろ！このシールドがあつては辿り着けない！倒すことなど不可能だ！」

坂本も勇と同様の意見を述べるが、宮藤は決して諦めなかった。それどころか必死に近づこうとさえしていた。



「ウィッチに不可能はありません！」

その言葉に勇と坂本は胸を貫かれる。坂本は自分がかつて宮藤に教えた言葉が返ってきたことに、また勇は藤野が最期に残した言葉を宮藤に言われたことに返す言葉が亡くなってしまった。そして、そんな戦況に光が差し込む。宮藤の周りの敵機が根こそぎ吹き飛んだのだ。

「わたくしたちもいますわよ！」

「みんな！」

そこには既に魔法力切れで退避したはずの501の隊員たちがいた。そしてすかさずミーナが部隊を前進させる。

「行くわよ！フォーメーション『ヴィクトル』宮藤さんを援護します！」

「了解！」

勢いよく羽ばたくウィッチたちは疲れを感じさせない動きで、先ほどまで威勢を放つ

ていたネウロイを圧倒していく。そんな姿を見て、勇は起こっていることが理解できなかった。

「どうしてだ・・・なぜ彼女らは飛べるんだ。なぜ宮藤をそこまで信じられる!」

そこで勇は過去の宮藤に触れた時のことを無意識に思い出す。膨大な潜在魔力と共を感じた純粋な白い魔法力。それは彼女の心を表していたのかもしれない。扶桑の言葉に「無邪気」という言葉がある。邪気が無いという簡素な意味だが、これが指し示す言葉こそ宮藤のような存在だと妙に納得できてしまった。行動と理念が完璧に一致した時、ウィッチというのは力を得て飛ぶ、いや、ウィッチを飛ばすのだ。勇は宮藤の姿とかつての信頼できる仲間たちに目を向ける。宮藤を必死に、そして団結して援護している。

「あなたの可能性を信じるわ!ネウロイを倒して、宮藤さん!」

「さっさとやつつけちやおうぜ!」

「私たちが道を作る!」

「宮藤なら楽勝だよ〜ん」

「頼みましたわよ！」

「芳佳ちゃんなら大丈夫！」

「今日のお前はついてるぞ！」

「いつけえ！芳佳あ！」

「頑張つて！芳佳ちゃん!!」

その一つ一つの言葉に想いが乗り、全員が一つの目標へと進んでいた。そして着実に進む宮藤を見て、勇は無意識に身体が動いていた。同時に宮藤は大和手前の敵に四苦八苦ししていた。

「あともう少しなの！」

その時、宮藤の周りのネウロイが光の粒になって消えていく。目を向けるとその攻撃場所には勇がいた。

「宮藤！烈風丸のところまで急げ！ここは俺が死守する！」

「勇さん!？」

「お前なら打てる！なにもかもぶつけて倒せ！そして、坂本を頼む!!」  
「はいっ！」

宮藤が目を輝かせ烈風丸のところまで飛んでいくと、それに群がろうとするネウロイを大和の対空機銃で牽制する。最後に大和の命令系統を自力で強制的に繋げ、勇の魔法力だけを頼りに全ての目標を補足、攻撃していた。その膨大な情報量と使用魔力に脳が焼かれる思いだったが、血涙や鼻血を吹こうとも勇は全力で宮藤に想いを託したのだ。た。

「抜けないっ！お願い頑張って震電!!」

魔法力と震電の力を全力で注ぎこむ宮藤を目にし、勇は攻撃を続けながらさらに意識を烈風丸に集中させる。

「限定的にネウロイ化を解除・・・っ！」

勇が強引に大和の命令システムに割り込み、艦前方の烈風丸の周りだけネウロイ化を

弱めていく。これも勇が常日頃から魔法力の運用に拘り、鍛えてきた賜物だった。そして、遂に烈風丸を引き抜くことに成功した宮藤は坂本の下へ急ぐ。その宮藤の膨大な魔法力と烈風丸の輝きはまさに天に届くほどだった。それを見ていた坂本がなおも宮藤を止めようとする。それは烈風丸の特性を知っていたからこそその忠告だった。

「止めろ宮藤！烈風丸はお前の魔法力を吸い尽くすぞ！」

「構いません！」

強がる宮藤だったが、烈風丸は確かに宮藤の魔法力を急速に吸収し、飛行が覚束なくなっていた、それでも宮藤は前へ進み続ける。

「それでみんなを守るなら・・・願いが叶うなら！」

宮藤はコアが悲鳴を上げて接近を拒絶する断末魔に近いものを聞きながら、自分の願いを望む。

「お願い烈風丸・・・私の魔法力を全部あげる。だからその代わりに・・・ネウロイを

倒して！私に真烈風斬を打たせて!!!」

願いを聞き入れるかのように烈風丸は輝きを放ちそれに応える。宮藤はコアに突撃し、コアは最期の足掻きとシールドを張る。

「うおおおおお!!!」

宮藤の叫びを推進力にシールドはいとも簡単に破れ、遂にコアに到達する。そして、扶桑の最終奥義『真烈風斬』は放たれる。

「宮藤・・・!」

「烈風斬つ!!!」

コアに真烈風斬が打ち込まれると同時に、辺り一面のネウロイが光と化し、辺りもまるで昼に咲く花火のように白ばむ。ネウロイ化が解けた大和が海面に落ち行く中、サーニャの固有魔法によってネウロイの存在が完全に消滅したことを確認する。

「三人は？」

ミーナが心配そうに辺りを探す。全員が光の粒の中に目を凝らす中、目に良いリーネが声を上げる。

「あそこっ！」

光の中には坂本、宮藤、そして勇の姿があつた。ゆっくりと落下する中、勇と坂本が疲れ果てた宮藤を引き寄せようとしていた。

「宮藤……」

「宮藤！」

「あつ……坂本さん！勇さん！」

ようやく気が付いた宮藤を坂本と勇がしっかりと抱える。坂本は心配そうに自分の疑念を投げかける。

「宮藤・・・お前魔法力が」

「いいんです。みんなを守れたから・・・願いが叶ったから！」

宮藤は自分の魔法力がなくなってもそれを事も無げに一際嬉しそうに坂本に言う。そんな宮藤を見て坂本は感謝する。

「ありがとう」

そして、坂本が不安を口にする。それは勇も同様の不安だった。

「だが私たちはもう飛べないぞ？」

そう言う宮藤はまたにつこりと笑い、その不安を取り払う。

「大丈夫です。私たちは12人なんです」

その言葉に勇はもう流すことはないと思っていた涙が溢れ出す。夢の中に出てきた



藤野の言葉で、過去に藤野が最期に言った一言は憎しみからのものではなかったと、今更ながらようやく気づけたのだった。あの時、藤野が勇に言った本当の『意味』とは、今まさに勇たちに近づいていた。だからこそ勇は感謝する。これまでの苦境を変えてくれたウィッチに対して、なにより勇の仲間たちに。そして、これから訪れるであろう困難に対しても。

「ありがとう」

その感謝は三人を助けに来た仲間たちの激励の言葉にかき消されるようだった。各々が激励し、宮藤に坂本に群がる。そして、一人のウィッチが勇に近寄る。

「トゥルーデ……」

「……おかえり」

決別したはずのバルクホルンが優しく、そして強く勇を抱きしめる。これほど温かな気持ちになれたのは久しぶりだった。そしてミーナがやってくる。坂本と勇は抱えら

れながらもしつかりとミーナの目線を受けとめる。

「ミーナ……命令通りだ。私は返ってきた」

「みんな……『ただいま』」

二人の言葉に、ミーナは気丈に顔を強張らせる。しかし、自身の感情を堪えきれず二人に抱き着く。

「おかえりなさいっ！」

感傷に浸る中、ロマーニヤ出身のルツキーニが自身の故郷を取り戻したことの喜びを爆発させる。

「やったああああ!!! ネウロイが消えたよ! ロマーニヤが解放されたー!!! やった! やった! やった!」

そのうるさい声は誰の耳にも喜びにしか聞こえなかった。1945年7月、このオペ

レーション「マルス」において宮藤・坂本の両名が魔法力を喪失。作戦参加艦艇も大きな損害を負った。しかし、ヴェネツィア（ロマーニャ）上空のネウロイの完全消滅が確認された。これをもって正式に第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』は解散と同時に、勇の所属する架空の部隊も解散した。参加ウィッチは以下の通りに報道されたという。

第501統合戦闘航空団隊長、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐

坂本美緒少佐

ゲルトルート・バルクホルン大尉

エーリカ・ハルトマン中尉

シャーロット・E・イエーガー大尉

フランチェスカ・ルツキーニ少尉

サーニャ・V・リトヴァク中尉

エイラ・イルマタル・ユージェイライネン中尉

ペリーヌ・クロステルマン中尉

リネット・ビショップ曹長

宮藤芳佳軍曹

連合軍特殊遊撃任務師団、赤松勇中佐

## 籠の中の翼 第一話

ロマーニヤ奪還作戦を終えた勇の身柄は一時連合軍に拘束され、その特殊任務は解任された。それと同時に勇の処分として連合軍中佐の階級の？奪と、原級も大尉に降格された。逆に言えば、その程度で処分が済んだのが奇跡だった。勇のこれまでの功績は決して素直に褒められたものではなく、現地部隊との軋轢も生じていたため今回の作戦の有責を問われれば余罪約万で軍法会議もあり得たほどだった。それでもミーナや勇の恩恵を受けた現地指揮官やロマーニヤ公女まで減刑を求め、その他多数の声から処分は免れた。しかし、勇自身の「特殊遊撃師団」という部隊から各方面から一個師団の戦力と認められるほどの圧倒的な才能を手ぶらにしておくにはあまりにも厄介な存在だったため、これまでに軋轢を生んだ部隊への謝罪へ向かうこととなった。まずは近場の第504統合戦闘航空団に向かうこととなった。

「久しぶりね、赤松少佐？」

優し気な笑みを携える人物こそ、扶桑海軍竹井淳子少佐だった。勇は竹井の笑みの裏

側に潜む怒りに恐縮しつつも自分の与えられた役目を果たそうとする。

「その節は大変ご無礼を．．．今は大尉として当時の謝罪をしに参った次第です」

「そう、まあ私たちとしてもトラヤヌス作戦では被害を被ったとはいえ、あなたには隊員を救ってもらいました。だから、当時のことは水に流しましょう」

「寛大なご配慮痛み入ります」

勇は504が当時のヴェネツィアに巣くついていたネウロイの巣に現れる人型ネウロイとのコンタクトを図るトラヤヌス作戦に一枚噛んでいた。その時の目標こそ、人型ネウロイの情報とそのコアを調査することだったのだが、それを巡り504と険悪な関係になってしまっていた。結局、ヴェネツィア上空のネウロイの巣は新たな強大なネウロイによって一蹴されてしまいご破算してしまっていたが、その際勇のダメージコントロールが的確だったこともあり、甚大な被害は免れていた。

「それと美緒は元気にしている？」

「坂本少佐は一度扶桑に戻り、今後は後人の育成に当たるとのことです」

「そう．．．美緒らしいわね」

竹井が話題を変えてくれていることに感謝しつつ、坂本の戦友である竹井に勇は好印象を抱いていた。

「それで、あなたは今後どうするの？」

「しばらくは各部隊を周り関係改善に努めよとの指示を受けています」

「それは残念ね。暇ならうちに来てもらいたかったのだけれど」

竹井のお茶目で抜け目なさにミーナに通ずるものを感じ、冷や汗をかく。勇は鼻をかきながら招待を断る。

「お話は嬉しいのですが、ミーナ中佐に任務が終わり次第顔を出すように言われておりまして・・・先約を無下にはできません」

「そう、あなたは居場所を見つけたのね」

「はい・・・見つけてもらったという方が正しいですが」

嬉しい話を終え、勇は次の部隊へ足を向ける。そこは以前勇が参加したアフリカでの

「ストーム作戦」が行われた場所だった。行くことを現地部隊に伝えると責任者が出迎えてくれるという返答から勇は緊張を強いられる。その理由は、責任者がロンメル將軍、パットン將軍、モントゴメリー將軍の三將軍が勢ぞろいだったからである。胃痛を堪えながら現地に到着すると指揮所には豪勢なほどの人員が配置されていた。中に通されるまで奇異の目に晒されながらもようやく部屋の前に到着する。以前の勇なら他の人物など眼中になかったため人目を憚ることなく行動していたが今は違う。喉が渇きながらも入室の挨拶を始める。

「扶桑海軍、赤松勇大尉入室します」

「入れ」

重厚な声で通された部屋の中は層々たる顔ぶれが揃っていた。三將軍が三方向に深々と座り、入室してきた勇を凝視していた。

「この度、お恥ずかしながら以前の失態とご無礼を働いた贖罪に参りました」

素直に自分の行いを詫びた方が話早いと言うのは建前で、それしか頭に浮かんでこ



なかつたため簡潔にした。そんな勇をジロリと睨む三將軍の重圧は勇に生睡を鳴らせた。するとパットン將軍が立ち上がり勇に近づいた。拳の一つくらいは覚悟していたため齒を食いしぼる勇に、意外にも友好的に肩に手を置いたパットン將軍はガハハと笑った。

「君が『荒鷲隊のゴースト』だったか！間近で見たのはこれが初めてだな！」

青天の霹靂に勇は呆氣に取られる勇を置いてけぼりにする三將軍は笑い話としての勇の所業を語り出す。

「いやあ、あの時我々に脅しをかけてくる人物がどんな奴かと思えば……なんのどうして普通のウィッチじゃないか！ガハハ！」

「二人で我々の三ヶ月分の仕事をこなしていくのだから、モンティなんぞ、総司令部からの我々への批判なんじゃないかと怯えてたほどだ！」

「なんだとロンメル！お前こそ部隊から「ウィッチに現を抜かすな」なんて叱責されていたらじゃないか！」

「それこそパットンだ！赤松少佐の戦いを後学と称して自分の部隊のウィッチにコーラ

片手に鑑賞させていただろう！」

三将軍が取っ組み合いを始めたのをみて勇は自分の行いがそこまで深刻に捉えられているわけじゃないことを確信し安心する。三将軍が落ち着いたころ、気を取り直して土産話を披露する。

「これは私からのお詫びとして受け取っていただきたいのですが、私のできる限りの協力をさせて頂きます」

その話に三将軍は目の色を変えた。どんな無理難題が来るかと思い、身構えているとその内容に呆気にとられてしまう。この将軍はどうも人を呆れさせる天才らしい。その内容とは、ストームウィッチーズのエース、ハンナ・ユステイーナ・マルセイユとの模擬空戦だった。

「そんなことで良ければ喜んで引き受けさせていただきます。他にございますか？」

その言葉に三将軍は真剣になる。今の話は冗談で今度こそ本気の注文かと思った自

分を叩きたかった。三將軍の要請は同時に発せられた。

「君のサインが欲しい」

意味が分からずポカンとしてしていると三將軍は立ち上がり、我先にサインをねだる。

「俺が一番先だ！赤松大尉の初のサインはこのパットンのものだ！なんならいくらでも食料、弾薬を提供する！」

「ずるいぞパットン！なら私はテイガー戦車をやろう！」

「物で釣るなんてやはり浅ましいな！俺は我が部隊自慢の淑女であるウィッチの接待権を付けるぞ！」

またもや取っ組み合いを始める三將軍にもう何も驚かない勇を他所に、一人のウィッチが入室する。そのウィッチは入室するなり三將軍を一喝する。

「こらあー!!!国家財産を売ろうとするなあー!!!」

その人物こそ、アフリカ部隊の隊長である加東圭子陸軍少佐だった。扶桑海の三羽鳥の一人である加東は、扶桑海事変の「挺身作戦」に参加し、扶桑における最多撃墜王その人だった。本人は既に二十歳を越えているが、アフリカ部隊をまとめる指揮官として戦闘の矢面には立ってはいない。

「まったく揃いも揃って……ごめんなさいね。」  
「いえもう慣れましたので」

加東は苦労性のようだったが、ここまで將軍相手に強く出れる人物もそうはいないだろうと人柄の良さを感じ取った。その加東が三將軍を置いて外に連れ出す。さんさんと降り注ぐ日光は肌を刺すようで、空気には砂が混じっている。そんな中、加東は勇を日陰に連れて休憩させる。

「あの人たちが集めると碌なことがないのよ。せつかく赤松……今は大尉ね。あなたが来てくれたんだから時間は有効に使わないとね」

そう言うとき加東はある場所に連れて行く。そこには目につく建物もなく、あるのは木

や石で積み上げられた所謂墓標だった。

「ここには343空の第二中隊の人が眠っているわ」

その言葉に勇は加東を凝視する。加東は勇を見ずにその墓標を眺めている。勇ももう一度墓標に目を向けると既に字面が消えかかっており、亡くなってからしばらく経っていることが伺えた。勇はその墓標に手を添える。

「彼らの最期は？」

「大丈夫、ハンナが看取ってくれたわ」

「そうか・・・彼女には直接挨拶したいですね」

ウィッチが女神と言われる理由はいくつかある。それは戦場に福音を齎す、つまり勝利の象徴というものと、戦死者の最期を看取るとその者は天国に行けると信じられてる民間信仰的背景があるからである。その点から言うと、ここアフリカは正に女神が必要だった。広大な陸の大海が広がる砂漠では誰かが最期を見てくれる保証もなく、また祖国から遠く離れた地での死は、死者にとって最大の苦痛である。その苦痛を取り払うの

がウィッチであることを勇も理解していた。だからこそ、マルセイユのしてくれた行動には深く感謝する必要があった。

「失礼する。マルセイユ大尉はいるか？」

「なっ?!?どうしてあなたが・・・」

マルセイユは勇にトラウマがあり、また当時は少佐と言う階級から普段の態度は影もなかった。また、そんなマルセイユの姿を見て仲間たちも注目し始める。

「ティナどうしたんです?」

「ライーサー!」

僚機のライーサー・ペットゲン少尉が来るとすぐにその陰に隠れることから勇に疑いの目が集中する。しかし、ライーサーは勇の姿を見るなり驚いてマルセイユを問いただす。

「ティナ! 赤松少佐ではないですか! 世界一の撃墜王の!」

「えっ! あの男性の方がですか?!」

驚いている小さく黒髪の少女は扶桑陸軍の稲垣真美軍曹だった。同じ扶桑人にも関わらず勇を知らないことにライーサは首を傾げる。

「どうして真美ちゃんが赤松少佐を知らないの？海軍とは言え同じ扶桑人でしょ？」

「はあ、男性でウィッチというのは私も知りません」

稲垣の言葉も正しく、勇は扶桑でも特殊な立ち位置であり、男性でありながらウィッチというのは大衆迎合的な扶桑からすれば異端な存在で、悪く言ってしまうえば臭いものには蓋をするかのように勇の存在は公にはなっていない。そこで加東が咳払いしつつ説明を入れる。

「おっほん！えー彼は赤松勇大尉。ロマーニャ解放の折にわけあって今の階級に落ち着いています。そして彼が今回ここに来たのはハンナ、あなたにお礼がしたいからだそうよ。」

「なに？私にか？」

怯えつつも自分に害意がないと分かり、ライーサの後ろからおずおずと顔を出す。

「先日の態度は失礼した。今回はそのお詫びと、俺の仲間を弔ってもらった礼を言いに来た」

「ああ・・・この前はこの前だ。もう水に流すさ。それに礼を言われる筋合いはない。私には私のできることをしただけだからな」

「それでもだ。彼らは俺の大切な仲間なんだ。丁重な弔いに感謝する」

しっかりと帽子を取り、お辞儀をする勇にマルセイユは狼狽えてしまっても、仲間の手前かつこ悪いところは見せるわけにもいかず頬を赤らめながら感謝を受け取る。

「礼と言つてはなんだが、これを受け取つてほしい」

「これは・・・扶桑刀か？」

勇が渡したのは500機撃墜の折に授与された「武功拔群」の文字が柄に貼られた扶桑刀だった。マルセイユはその刀をまじまじと見つめている。しかし、そのような代物に加東が忠告する。



「ちよつと！それって恩賜されたものでしょ!?簡単にあげていいの?」

「構いません。恩賜されたというにはあまりにもお粗末な理由ですから」

「と言うと?」

「前人未到の500機撃墜を公式に認められたわけですが、どうも素直に褒めたくなかったようで・・・勲章や表彰の類をしない代わりにこの刀一本が無造作に机に置かれていたというわけです。なので大層なものではありません。それに私は自分の物がありませんから」

勇への過去の扱いは嘆かわしいものだが、勇が良いと言うならということでも丸く収まった。さらに言えばマルセイユ自身が自分の扶桑刀というものを大層気に入ったという方が大きかった。そして勇は三將軍から言われた要求である、マルセイユとの模擬戦を伝えるも、マルセイユは以前の空戦にトラウマを持っていらっしゃるらしく、またマルセイユが負けると分かっている空戦は現地の部隊の士気の低下を招く恐れから却下された。それからは用事も済んでしまったためその場を後にしようとする。すると加東再度勇を呼び止める。

「第二中隊には寄って行かないの？」

「残念ですが、次の予定が詰まってまして・・・会いたいのには山々ですが」

「そう・・・それは残念ね。次はどこに行くつもりなの？」

「次は502に行く予定です。その次は507ですかね」

カウハバという単語に加東が反応する。実を言うと507については勇は行きたくはなかった。過去にカウハバで事件を起こしていたからであった。しかし、それを知りはずもない加東は勇に話をせがむ。

「507に行くってことは以前にも行ったことがあるんでしょう？ 智子はどうだった？」

智子とは加東と同じく扶桑の三羽鳥と謳われた穴吹智子陸軍大尉のことである。第507統合戦闘航空団、通称「サイレントウィッチーズ」の所在地はカウハバ基地であり、502基地とも若干近い距離にある。その指揮官である穴吹智子の様子を聞かれるのが勇にとってなにより心に来るものがあった。

「穴吹大尉ですか・・・ええっと、仲間と愉快にしていましたよ？」

「どうして疑問形なの？まあ元氣そうならよかったわ！」

その言葉に勇は胸を痛める。しかし、いつかははじめをつけなければいけない問題でもあるため、ここでは一旦保留と言うことにしたのである。最後に別れの挨拶を交わすと、加東は何気なく勇に声を掛けた。

「お姉さんにもよろしくね！」

この言葉にいつしかの穴吹とのセリフが被ってしまった、勇は身体をびくつかせる。冷や汗が吹き出そうになる感覚を気取られないように片手をあげて応えた。

その後、頭を冷やして落ち着いた三將軍の下をもう一度訪れ、マルセイユとの模擬戦は叶わなかったことを伝える。すると三將軍は大層悲しそうにしていたため、勇がある提案をする。それを聞いた三將軍は目を輝かせてその提案に乗るのだった。その提案とはこの後に行く予定の502部隊の道中にカールスラントへちよつかいをかけると言う大それたものだった。それは三將軍による勇への賭け事であった。

「時に赤松大尉。現在の撃墜数は？」

「そうですね、公式撃墜記録は846機です」

この報告に三將軍は捲し立てる。この賭け事が後のベルリン奪還作戦の人事に影響するのはまた別の話である。そして、勇はアフリカを離れることにする。移動手段は自力であり、ここでも勇の扱いの粗野さが分かるが、中継地点での整備と休憩を兼ねているため勇はのんびりと移動することができた。勇は砂が混じる空を飛びながら辺りを警戒しつつ飛行していると左前方に複数の飛行隊を発見する。警戒しているとそのシルエットがバンクしていることに気づく。勇も接近して注視してみるとその光景に目を見開く。

「杉田隊長……」

なんと会うことは出来なかつた343空第二中隊の杉田たちであった。実は加東が密かに勇が来ていることを連絡していたのだつた。久々の再開に勇の胸は込み上げてくるものがある。見える機体数は三個小隊分、つまり9機であり、待機している人間がいるのかもしれないが、先ほど見た墓標は二つであつたことから3人が戦線離脱したこ

との方が事実として捉えることができた。そんな悲しい現状が理解できたが、杉田たちはその翼を大きく振ったり、綺麗なアクロバット飛行を見せつける。

「杉田隊長……よくぞ無事で……俺も生きています。生きていますよ」

勇が手を振ると、それを見て満足したのか杉田たちは旋回して引き返す際にもう一度バンクを振って砂漠の空に消えて行ってしまった。勇は仲間の姿を目と心に焼き付けて次の502へ足を向ける。その時の勇の心は砂漠の空模様のような気持になれた。

502に行く途中、勇は三將軍の約束通りカールスラントに向かい、ちよつかいをかきようとしていた。途中で購入したカメラを携え、敵を倒しながらカシャリと撮影していく。カメラの設定に悪態が出ながらも勇は撮影を続けていく。そんな中、遂に目的地付近まで到達に成功する。

「あれが……懐かしい街並みだ。いつか取り戻してやる……ん？あれはなんだ？」

勇の視線の先にある不思議な物体には心当たりがあつた。それを撮影しようとするのと突如無数のネウロイが出現した。勇は必死にシャッターを切ると残りの燃料を考え

退くことにする。敵勢力圏を出る最後まで勇はその地域の光景のことが気にかかっていた。

そして、そんな賭け事の真似事を終わると遂に502部隊へと足を踏み入れる。無線で502に呼びかけると不愛想な隊長らしい簡潔な言葉が返され、基地への着陸を許可される。着陸を済ませると勇は一息つく。それは疲労からの物ではなく、ため息に近いものである。その理由は勇がこの基地でやらかしたつけを清算しに来たためであった。

「よく来たな、赤松勇大尉。来るのを楽しみにしてたぞ。」  
「そ、それはどうも・・・ラル少佐」

この502の隊長であるグンデユラ・ラル少佐こそ、ミーナから散々注意を促され、勇も要注意人物として絶賛身構えている人物である。そんな隊長が自ら出迎えることなどこの後に起こる不吉なことの前兆であると容易に想像できてしまった。

「早速だが、ここに来た理由はもう知っている。単純にいこう。出す物を出してもらおう」

普通の軍人ならこの不遜な態度はあり得ないものだろうが、この勇の目の前の人物がそれが許される、いやまかり通つてしまふ人物だった。勇は若干顔を引きつらせながら話の主導権を取り戻そうと努力する。

「まあそう性急にならずにならぬ．．．そうだ！ここに來る道中に面白いものが．．．」

「世間話をしに來たわけでもあるまし。それで出すのか？出さないのか？」

「ぐ．．．何のことでしょうか？」

あくまで知らないふりをしてみるも、勇はこの手は悪手だと知っていた。むしろこれからの話題に持つていくことが目的だった。

「ほう．．．そういう態度に出る訳か．．．ならば仕方ない。先生」

「はい。赤松勇大尉、これはあなたがうちのユニットを強奪した時の写真です。そして、これが燃料・弾薬を．．．」

ラルに先生と呼ばれる少し身長が低いウィッチは歴戦の存在で、今や教導隊からも引手あまたとなったエディータ・ロスマン曹長だった。丁寧に勇がかつて行つた蛮行の

数々が写真と被害報告書として並べられる。勇としてもここまで鮮明に当時の出来事を写真に残していたことが不思議でならず、もしかしたらわざと盗ませたのではかと疑うほどの出来だった。

「まったく、君のおかげで我々は大きな損害を被った。ああ、なんと嘆かわしく、痛ましい」証拠を並べ立てた上でさらに泣き真似の三文芝居まで入れ込んでくるあたり、このラルという存在はミーナから聞いていた以上の厄介者だと勇は分からされる。ミーナにはこのように忠告されていたのだった。『あいつは傲慢、強情、強盗のネウロ以上の無神経』とまで言い切るミーナは本当に当時の怒りを抑えきれない様子だった。挙句の果てには勇にも心当たりのない被害までも盛り込まれていたことには苦笑いを堪えられなかった。

「私はここまでではしていませんと思おうのですが？」

「だから何だと言うのだ？」

傲慢にもほどがあると勇もたまげますが、退かずに応戦する。



「心当たりのあるものでしたら分かりますが、確実に私のものではないものに関しては感知しませんね」

「確実と言う根拠はなんだ？ 君にはこちらに被害を齎した確固たる証拠がある以上周囲がこれらの証拠を正当なものだと判断するのは道理だと思うが？」

「では私も防衛線を張らせていただきます。ラル少佐、以前501の坂本少佐をミーナ中佐に無断で引き抜こうとして、書類を偽造されましたね？ ミーナ中佐から伝言です。『今度会う時は豪勢にもてなさせていただきます。遠慮せず機関銃の弾をプレゼントします』だそうです」

ラルは面白くなさそうに腕を組んでいる。効果があつたようだ。勇はさらに畳みかける。

「そしてここからはお詫びですが、ロスマン曹長。こちら私が収集した嗜好品です。どうぞ笑納ください」

「あらっ！ こんなに！ それにこのキャビアにワイン！ どこで手に入れたのかしら！」

「くっ！ 仲間を買収しに来るとは・・・」

勇もニヤリと悪い顔をする。ロスマンは嬉しそうに勇の出した嗜好品に飛びつくと、証拠写真の一部を勇に引き渡す。するとラルもせがみ出す。

「もちろん私にもあるのだろうか？」

「それはもちろん。私の一存で運べるだけの武器弾薬・食料を準備しています。その代わり分かっていますね？」

勇は手を出すと写真を要求する。ラルは写真を渡そうとしたところでその写真を引っ込める。

「ふん、その手には乗らんで。君の一存で運べるだけの量なんてたかが知れている」

簡単には餌には食いつかないなど歯噛みする表情を浮かべる勇に、ラルは勝ち誇ったように笑みを再度浮かべる。

「ちつ．．．分かりましたよ。今日運んできたのは食料を隊員一月分と武器・弾薬は50

1を参考に3週間分用意しました」

「足りんな。今日ということは今後も運んで来れる量がまだあるということだろうか？全部出せ！」

ラルは当然の要求だとばかりに傲慢に要求してくる。勇は泣き顔でラルに媚びる。

「ラル少佐・・・さすがに運べても次回は今回の半分が限界です！どうかご勘弁を！」

「ふん、君が私たちに変なことをしなければこんな要求をしなくても良かったのだがな・・・そうだな、大尉？」

「ぐぬぬ・・・はあ、分かりましたよ。今週末までに今日搬入した物資の全量の3倍を手配します。これで本当に限界ですよ」

ラルはニツコリと微笑むと「出せばあるじゃないか」などと悪い笑みを携え証拠の写真を手渡す。しかし、勇もただでは信じない。

「ラル少佐、証拠はいただきましたが複製がないとも限りません。書面で今後私に請求しないと署名してください」

「ちつ・・・君も敏いな。まあ、私には敵わないがな」

「これ以上集られたら堪りませんから。見習わせてもらいますよ・・・」

勇は用意してきた署名にラルに署名させ、ラルの本物の署名と見比べ有効であることを確認する。その用心深さを見てラルは「信用ないな」などとほざいたため、勇は笑顔で対応する。

『502には近づくな』が、鉄則ですから！」

ラルに挨拶するとすぐに次の目的地に向けて準備する。勇は一刻も早くこの基地から離れたかった。装備の点検を行っていると不意に少女に声を掛けられる。

「あっ！」

大きな声に声の下へ視線を向けると、そこには茶色がかった髪色に小動物を思わせるような海軍練習生の制服に身を包んだ少女がいた。勇は首を傾げているとその少女が駆け寄り話しかけてくる。

「やっぱり佐世保で見た人だ！」

佐世保という地名から勇は必死に記憶を辿る。佐世保にいたのは343空に配属される直前のことだ。その頃の会った記憶というか、そもそもウィッチとは面識がなかったため思い出すことは叶わなかった。

「あつ、私つたら名前も名乗らず失礼でした！私、雁淵ひかりって言います！以前佐世保の飛行学校でお見掛けしました！」

「えー俺は話した記憶はないが……まあいい。俺は扶桑海軍赤松勇大尉だ。」

「あーそういえば新藤教官も言っていました！でも……『赤松には近づくな』って……」

勇は吹き出しそうになった。ようやく雁淵の記憶の間違いが分かり、状況が掴めてきたため訂正しておく。

「ああえつとだな……俺も赤松だが、新藤少佐が言っていた赤松は同姓の俺の隊長だ。そうか、隊長がちよっかいを掛け……おっほん！助言した子か！」

「ああそうです！それにしてもストライカーを履くつてことはウィッチだったんですね！私、男の人のウィッチつて初めて見ました！」

明るく好奇心旺盛な少女に誰かに似ているものを感じていると、奥から二人の扶桑の少女がやってくる。

「なんだひかり、こいつと知り合いだったのか」

「管野さんっ！お見掛けしたことはあつたんですけど・・・」

「ああ！うるさいな！さつき聞こえたよ！」

管野と雁淵は仲が良いのか悪いのかわからなかったが、もう一人のウィッチが礼儀正しくお辞儀をする。

「赤松中佐・・・あれ？大尉でしたか？お久しぶりです。新聞では501で活躍されたと聞いたのですが？」

「ああ、まあ訳ありだな。今は大尉だ」

「そうだったんですか。それにしても坂本さんと肩を並べていらつしやつたなんて。そ

れに撃墜数も世界一になられたんですね！凄いです！」

素直に褒められているが、このウィッチの名前は下原定子少尉と言い、サーレマー島で当時の勇の隊長である林を失ったときに勇を助けに来てくれた人物であった。その時の状況はかなりの窮地だったこともあり、その後の勇の行動も支援に来てくれた二人には決して良くは思われない行動を取っていた。

「あの頃からだいぶ垢抜けられましたね」

「恥ずかしい話だな・・・当時はすまなかった」

「まったくはた迷惑な奴だったぜ！『荒鷲の闘魂』さんよお？」

話しに割り込んできたのはブレイクウィッチーズの一人である管野直枝中尉だった。管野も当時勇を支援に来てくれたウィッチであり、勇がウィッチ化した時に管野が残したストライカーで飛ぶことができたのだった。しかし、勇は藤野が戦死した際、ユニットを壊しており、このユニットをわざわざ502まで返しに来たのだった。

「あんどきは失くしたってサーシャに嘘ついたのにお前が持つてくるもんだから正座さ

せられたぜ！」

「管野さん、それは管野さんの自業自得です。それに『荒鷲の闘魂』って……あうっ！」

雁淵が茶々を入れる度に管野がデコピンをかましていた。仲は良いようだ。バツの悪そうに管野はしているため下原が話を続ける。

「突然いらしたときは驚きましたけど、ユニットを貸してもらおう商談としてクルピンスキーさんと管野さんを模擬戦で倒してもぎ取っていくとは思いませんでした！まさかウィッチになられているとは」

当時の様子を思い出したのか、下原はクスクスと笑い、逆に管野はバツの悪そうな顔がさらに不機嫌になる。それを雁淵に指摘されさらに事態が悪化する。終いには急いでいる勇を差し置いて管野が模擬戦を申し込む始末だった。

「もう一回俺と勝負しろ！」

「いや、今は急いでるから……」



「なんだい？面白そうな話をしているじゃないか」

話しに割つて入ってきたのはヴァルトルート・クルピンスキー中尉だった。また迷惑な人物が来てしまったと眉間を摘まむ。その時だった。基地の奥から絶叫が聞こえてくる。全員が耳を抑えて声の方向を見る。その瞬間放送が入る。

「緊急！これよりこの基地を出る者は全て確保せよ！これは命令だ！該当者は『赤松勇大尉』！捕まえたものには褒美を出す！」

急いで逃げ出そうとする勇だったが、この放送にクルピンスキーが即座に勇の腕に手を絡める。

「赤松勇大尉？捕まえたよ！」

「は、離せっ!!？」

「やったあ！これでご褒美のぶどうジュースだあ！」

勇は仕方なく奥の手を出してクルピンスキーを出し抜く手段を講じる。ある物を胸

元から出すとなるべく遠くに放り投げる。

「クルピンスキー中尉！501のサーニヤとりネット・ビショップだ！」  
「なっ!?!カワイ子ちゃ〜ん！」

その言葉と写真の映像に即座に反応したクルピンスキーは拘束をあつさりと解除すると写真を追いかけて行ってしまった。拘束が解かれた勇は即座に発進する。しかし、ここでも邪魔が入る。

「逃がさねーぞ！俺と勝負しろ！」

管野が発進した勇の背中に飛びついてきたのだった。勇は仕方なくそのまま発進すると勇にとつての幸運が訪れるのが見えた。それは暗雲が広がる空にポツンと浮かぶ白磁の肌を輝かせる少女だった。

「おーい管野？お客さんか〜？」

「あつ！ニパ！今はだめだ！こっち来んな！」

管野が驚きで勇を掴む手を緩めた瞬間を逃さず、ニパと呼ばれるニツカ・エドワードイン・カタヤイネン、通称「ついてないカタヤイネン」曹長に向かって急上昇する。上空ではゴロゴロと虫の居所が悪そうな響きをしながらニパを際立たせていた。ニパは突然向かってくる存在に狼狽えて何もできないでいた。勇は全速力で上昇するとニパの手前数メートルで急停止する。すると慣性の法則に則り管野がニパに向かって放り出される。

「ぬわー!!!」

「管野お!!!」

ニパが管野を上手くキャッチした時、勇は必死にニパより高度を落としていた。管野も無事にキャッチされたことに安心している暇はないのかじたばたしていた。

「ニパ離せ！すぐに離せえ!!雷だっ!!!」

「なんだよせつかく助けてあげたのに！・・・って、え？」

二パが気づいたときにはもう遅かった。管野もろとも二人は落雷が直撃し墜落していった。勇は間一髪難を逃れ、502基地に目もくれず次の507基地に向けて速度を上げていた。基地からは大きな声で何かが叫ばれているが、気にせず、むしろ無視してひた走った。その理由は先ほどラルに渡した物資にあつた。

「くそつたれ！あのタヌキめ!!」

「どうされたんです、隊長？」

地団駄を踏むラルの横には戦闘隊長を務めるアレクサンドラ・I・ポクルイーシキン大尉がいた。ラルが壊したであろう物資が入った箱に目を向けると、サーシャは苦笑いをした。そこにはサーシャ宛にこう書かれていた。

『サーシャ大尉へ』

業突張りの隊長をどうかしていただきたく。なおサーシャ大尉には悪いと思つています。お詫びにこちらを。今後役立て頂けると幸いです。赤松勇大尉』

物資の箱に目を向けると、その中には大量の戦闘糧食と試験運用されるはずの武器・弾薬が満載されていた。詰る所、食料は食べられる味の最低限のもので、武器弾薬は実戦で使えるかもわからない品ばかりだった。さらに、こんないらぬ、使えないものがあとこの3倍届くのだ。ここまでの芝居は勇がこの物資をラルからカモフラージュするためのものだった。あまりの用意周到さにサーシャは勇の機転良さに笑うしかなかった。

「わあ、レーションがこんなにたくさん！おいしそう・・・」

若干一人のみ食べ物と言うだけで無条件に反射してしまう、ジョゼット・ルマール少尉だけは嬉しそうに糧食を眺めていた。また、サーシャの手には別の茶封筒の中に何枚かの写真が封入されていた。そこにはベルリンの現状が写されていたのだった。

## 籠の中の翼 第二話

なんとか502での仕事を終えた勇は507に到着しようとしてた。予め訪れる報告は書面にてしていたが、こうして声を交わすのはずいぶん前のことのように思えた。勇は恐る恐る通信を試みる。

「ああ・・・こちら扶桑海軍赤松勇大尉。507部隊、応答願います」

「こちら507司令のハンナ・ウィンド少佐。報告は聞いている。安全に着陸されたし」

勇は一瞬基地を間違えたかと思ったが、507と聞こえた以上間違いはなかったようだ。なぜ違う基地かと思ったのかと言うと、以前訪れた際の隊長はエルマ・レイヴオネン中尉であったためである。隊長が不在なのかと思いつつ、勇は着陸態勢に入る。無事に着陸し、整備員に装備を渡すと先ほどの通信の声の人物であるハンナ・ウィンド少佐が出迎える。

「よく来てくれた、赤松勇大尉。ここではなんだから司令室に行こう」

「お氣遣い痛み入ります」

キヨロキヨロとしながら誰か知っている人物はいないかと辺りを見渡すが特に見知った顔はいなかった。司令室に到着すると司令のハンナ・ウインドは席に促し勇も席に座る。ハンナ・ウインドは大きく息をつく和本題に入る。

「赤松勇大尉、本日ここに来ることは伺っていたが、私にはあなたがここに来る理由が分からない。ここに来た理由について説明願えるだろうか？」

「失礼ながら、この基地にエルマ・レイヴオネン中尉……いえ、穴吹智子大尉はいらっしゃらないでしょうか？彼女たちなら私がここに来た理由が分かると思うのですが……」

ハンナ・ウインドはようやく合点がいったのか、一度「ああ」と言うと言に基地の現状について語る。

「悪いが君が知っている人物はここにはほとんどいない。」

「それは……どうしてでしょうか？」

勇は一瞬冷や汗が過る。最悪の事態の想定はしたくはなかったが、長年の経験からこの手の結論がすぐに出てしまうのは勇の悪い癖と言えた。

「彼女たちは既に上がりの年齢でね。1944年に初期メンバーのほとんどが離任・転属・帰国している。前隊長のエルマはカウハバで地上勤務さ。」

「そ、そうでしたか……では穴吹智子大尉は帰国なされたと？」

「そうだ。彼女はここに4年も務めてくれたからな。隊員も残ってくれることを願っていたのだから」

最悪の事態は起こるはずもなくと言った様子で勇は安心した。そして、ほとんどのメンバーは上がりを迎え帰国したことを聞き、自分がここに来た意味がほとんどなくなっってしまった勇はハンナ・ウインドに理由もそこそこに退散しようと考えていた。しかし、運命がそうはさせてくれなかった。ノックされる音と共に入室してきたのは勇が最も苦手としていた部隊メンバーの一人だった。



「失礼します。隊長、三隅さんが・・・あああああ!!!」  
「なんてこった・・・」

互いの瞬間を見た互いの反応は正に正反対だった。勇は全てを諦めた表情をし始め、逆に入室してきた迫水ハルカ中尉は勇を見て明らかに威嚇をする猫のようになっていた。その姿を見たハンナ・ウインドはハルカに質問する。

「ハルカ、どうしたと言うんだ？」

「ふしゃー!!!隊長!こいつは私の仇なんです!」

「仇?」

いまいち要領を得なハンナ・ウインドは頭を抱えるが、勇には既に言語化するヤル気を失っていた。しかし、ハルカが腕を振り回しながら説明する。

「こいつは私のお姉さまを盗ったんです!泥棒猫、いや泥棒鬼なんですよ!」

「泥棒?」

やはり意味の分からない話に部屋は混沌の様相を呈していた。ハルカは勇に掴みかかり、それを勇が白目になりながらいなすという状況にハンナ・ウインドがもう一度ハルカに聞きただす。

「ハルカ、ちゃんと説明しろ。訳が分からん」

「ううう……はあ、分かりました。この人がここに来た理由はおそらくサーレマー事件の後のことでしょう」

「サーレマー事件……ああ、君は確か荒鷲隊だったな」

ハンナ・ウインドは以前からスオムス独立飛行隊の隊長を務めるなど、スオムス空軍のエースとしてその名が知られる人物であった。そのハンナ・ウインドも知るサーレマー事件とは荒鷲隊を先行隊として始まった欧州本土反撃上陸作戦の一つだった。もちろん当時は失敗するのだが、当初から無理な突撃や準備不足が囁かれており、作戦は大損害を被って失敗。その後作戦参謀であり荒鷲隊の司令に就いていた牟田口陸軍中将が何者かに襲撃されるという事件のことを指している。

「そして、この人はこともあろうに作戦の後この基地に何の前触れもなく現れたかと思

えば手当たり次第に隊員たちをちぎっては投げちぎっては投げ・・・」  
「ハルカ？」

「・・・牟田口中将の居所を聞きに来たんですよ」

「なっ!?!じゃ、じゃあ、君が牟田口中将をやった犯人なのか?!」

ハンナ・ウィンドが慌てて当時の犯人を見つけたかのように勇を指さす。勇は大きくため息をつくと言話を引き継ぐ。

「殺したわけではありません・・・ただ、切りつかったのは本当です」

その言葉にハンナ・ウィンドは恐ろし気に勇を見る。確かに殺人未遂を起こし、今では世界一の撃墜王ともなれば余計な警戒を招くことになる。勇はそのことも含めて説明を続ける。

「牟田口を切る前にここ、「いらんこ中隊」を訪れたのですが・・・」

「いらんこ」という言葉はハンナ・ウィンドにとっては懐かしい響きだったが、当時の一

人であるハルカは「あなたこそいらんこですよだ」などと悪態をついていた。

「その際に、私も気が立っておりまして、ちよつとした話のすれ違いから・・・その、暴挙に・・・」

「異議ありい!!!」

小さくなる勇と対照的に勢いよく立ち上がったハルカは自分の番だとばかりに捲し立てる。

「この人は怒りを鎮めようとしたビュールینگさんを投げて、私の・・・私のお姉さまにキス！キスをしたんですよ！この唇泥棒お!!!」

勇は天を見上げて頭を抱えており、そんな勇を見たハンナ・ウィンドが勇の話の聞こえを聞こうとする。

「して、事実はどうなんだ？」

「はあ・・・いろいろ脚色が入っておりますが・・・まあ、きちんと説明させていただきます」

ます。あれは502からユニットを強奪した後のことです」  
「強奪?!」

最後の文言に疑問符が浮かぶも勇は構わず進めていってしまふ。勇は当時を振り返る。

スオムス独立義勇飛行中隊では先日のサーレマー島での反撃作戦の失敗により現地の部隊員をブリタニアへ送り届けるなどてんでこ舞いの日々であった。ようやく訪れた安寧の日々に穴吹智子は暗い雲を眺めてため息を吐く。

「はあ・・・忙しかった」

「そんなに忙しかったか？」

何百人もの人員を移送する手続きやそれまでの世話など猫の手も借りたいほどの忙しさだったのにも関わらず、智子の目の前の人物はタバコを蒸かし、小説に目を落として寛いでいるエリザベス・F・ビューリング少尉だった。そんな姿に智子はまたもやため息が出る。

「猫の手も借りたいときにあんたどこにいたのよ」

「私はネズミだからな。猫がいたら逃げるのは当然だろう?」

「ああそう・・・ネズミならそんな大層な身分でくつろぐなんてことしないで小汚く仕事してれば?」

売言葉に買い言葉だが、この偏屈さではきつと右に出る者も煙に巻いてしまうだろう。すかさずビューリングは智子をおちよくり続ける。

「ネズミを馬鹿にするなんてほんとに愚かだ。ネズミほどこの基地を苦しめた敵もいないだろうに」

「ええ、この基地で厄介なのは間違いなくあんただわ」  
「お褒めに与り光栄だ」

もうこれ以上付き合っていると頭が悪くなると思い、智子は話を切り上げる。ビューリングは一度も本から目を離さずにいる。しかし、そこで智子はビューリングが読んでいる本の題名を見て驚くことになる。

「ビューリング、あんたいつから扶桑の本なんか読むようになったのよ」

「ん？ああ、これはたまたま補給品を漁ったときに出てきた品だ。だれも自分のとは言わなかったから私が有効活用している」

「ああそう・・・ん？補給品で扶桑の本・・・あんたそれ私の補給品じゃない!!」

ようやく気づいたのか、と言わんばかりに本番のいたずらがきれいに決まったビューリングは本から口角の上がった顔を半分だけ覗かせる。そんな不遜な顔に智子は顔を真っ赤にして憤慨する。

「私のでしょ！返しなさい！」

「補給品のリストを確認しないのが悪い。これを機に、智子も自分の持ち物には全て名前を書いておくんだな」

「受け取る前なんだか書けるわけじゃない！それに補給品のリストは隊長の机にあるんだからそれこそ犯罪行為よ！」

怒りと突っ込みが収まらず智子は既に頭痛の気配がしていた。そんな姿を楽しそう

に見ているビューリングは智子にアドバイスする余裕すら見せ始める。

「この本……猫目漱石?によると『弱者が強者を倒す最強の行為は「愛嬌」だ』だそう  
だ。同じ扶桑人ならやってみるといい」

怒ろうにも何をしても押揃われる未来しか見えない不毛な言い争いに、智子は深い深  
呼吸をして頭を冷やす。こういう時は他のことを考えると頭を切り替えることができ  
るのだった。

「はあ、なんか疲れた……ユウ、あなたは生きているの?」

「死んだぞ……そんなやつ」

「ひやつ!」

突然自分の独り言に反応され、さらに地から這うような男の声に智子は腰が抜けるほ  
ど驚いた。振り向くとそこには泥だらけで所々血痕が染みついたボロい軍服の男が  
立っていた。その男が勇であると少しの間気づかないほどだった。智子は勇であると



気づくと飛びつかん勢いで迫る。

「ユウ?! あなた無事だったの?! ってケガしてるじゃない!」

「・・・そんなことより他の仲間は?」

勇はうつろな目で問いかけていた。智子は先日まで待機していたサーレマー島の隊員たちのことだと理解し、勇に事実を伝える。

「彼らなら無事にブリタニアへ向かったわ! あなたもすぐに報告してブリタニアに・・・」  
「ブリタニアへは行かない」

「え・・・」

その時智子には勇の目に光がないことに気がづいた。ほとんどサーレマー島から出撃した人物は戦死しており、航空兵力はそのことごとくが壊滅していた。勇の生存報告は現地の整備部隊の隊員たちからのものであり、彼らの口癖は「隊長は絶対に死なない。必ず生きて帰ってくる」というものだった。その言葉通り勇は生きて帰ってきたのだが、その目には生還の喜びの感情が失われていた。智子はそのことをとてつもなく悲し

く感じていた。

「ゆ、ユウ！おかえりなさいっ！」

智子は勇にどうしてもこちらを振り返ってほしくてなけなしの言葉をかける。すると勇はゆっくり振り返る。しかし、振り返った顔は目だけが憤怒に燃えた無表情だった。

「おか・・・えり、だと？」

「そ、そうよ！あなたは帰ってきた！あなたの仲間も喜ぶわよ！私も嬉しい！」

智子が再開を果たせた喜びを前面に押し出すも、勇の心には響くどころかその言葉が弾かれているような拒絶感があった。

「だれも来なかつたくせに・・・」

「ユウ？」

その瞬間智子は勇の姿が見えなくなっていた。目の前の事象に驚く暇もなく衝撃が目の前で火花を散らす。そこには先ほどまで椅子に座っていたビューリングがグルクナイフを構えて大きく息を吸っていた。

「ビューリング……どうしたの？」

「はあ、はあ……智子、怪我はないか？」

「え、ええ。あんたは何してんのよ？それにユウは？」

勇の姿が見えないことと事態が把握できずに困惑しているとビューリングが何かを察知して動き始める。その度に固い刃がぶつかり合う音と火花だけが散る。

「ぜえ……こいつ、本当に人間か……」

ビューリングが息を切らして見据える先には陰に隠れた勇と、その中で恍惚と不気味に輝く刀を抜いた勇が立っていた。

「ユウ!?何してるの？」

「智子中尉、止めるべきはそちらの方だ」

「馬鹿言え。智子、私がいなければ死んでいてもおかしくないぞ」

ビューリングが智子を守るように行動しているのによく気づいた智子は訳が分からなくなる。勇は一体どうしてここまで殺気を放っているか理解できなかった。

「こいつ、昔の私の目をしていた・・・なにもかも壊してしまいたい、そんな目だ。気を付けろ、智子。もうあいつは前のあいつじゃないぞ！」

その言葉に智子は胸を締め付けられる。ここまで悲惨な目に合ってきたことは想像がつくが、それが他人まで巻き込むほどの怒りに、憎悪に代わってしまうほどの出来事とは何なのか、智子は必死に昔の勇に話しかける。

「ユウ、どうしたって言うの！困ったことがあるなら私に話してみて！助けになるから！」

智子の言葉は勇の地雷を踏みぬいてしまった。勇の目から放たれる殺気を察知した

ビューリングが動き出すが、ビューリングの視界は一挙に暗転する。

「うがつ!!」

「ビューリング?!」

ビューリングを床に組み伏せた勇は、ビューリングの持つグルカナイフをむしり取る。取り上げたグルカナイフをビューリングの背中に向けて振り上げ始める。智子は必死に声を張り上げる。

「やめてっ!」

その絶叫に基地の奥から隊員が駆け付ける。隊長のエルマやハルカはその光景に事態の把握が追いつかないようだった。

「……これはどういうことですか? 赤松中尉?」

「……」

勇は周りの目を感じ、その動きを止める。しかし、依然としてビュールリングの背中にナイフを突き立てようとしている姿にだれも近づける雰囲気ではなかった。

「赤松勇大尉！私の仲間には乱暴は許しません！今すぐ武器を置きなさい！」

涙が滲みながらも必死に仲間を庇おうとする隊長の姿を見てもなお、勇は武器を降ろそうとはしなかった。

「俺の邪魔をするな・・・ただ、それだけだ」

「それは復讐のことですか？」

エルマの言葉に全員がエルマに注目する。勇も自分の本意を知っている人物の存在に内心驚いていた。

「あなたの目的はここにはいないはずです！」

「じゃあどこにいる。教えろ！牟田口はどこにいる!!」

「今はおそらくブリタニア行きの連合軍艦隊のどこかにいるはずですよ。まだ出港してい

「ませんから港に停泊しているでしょう」

エルマの情報網の広さとそれを惜しげもなく自分の部隊のために使える胆力に見違える思いだったが、現状は変わらなかつた。

「私のことはいい！こいつを早く拘束しろ！」

「・・・エルマ隊長、申し訳ないが先に刃を抜いたのはそちらだ。こちらが先に武器を下ろすことは出来ない」

ビューリングは自分の身を挺して現状を打破しようと必死に叫ぶが誰も動けずにいる。ただ一人を除いて。智子は勇にゆっくりと近づく。

「智子来るな！」

「お姉さま?!駄目です！」

智子は目の前の人物がとても悲しそうに見えていた。怒りに身を焦がし、どうしようもなく振り上げたこぶしの踵どころが分からないでいるのだ。そんな可哀そうな少年

に智子は手を伸ばさずにはいられなかった。勇の鋭い眼光をもろともせず智子は損じられない行動に出る。それは自然と出てしまった行為だった。

「お、おい……智子」

「智子さん……」

なんと智子は勇の唇を奪っていたのだった。これには勇も予想ができなかったのか目を見開いて唇の感触だけが支配する。少しの湿り気と塩気が智子が泣いていることを気付かせる。ゆつくりと口を離す智子に目線をも奪われると智子は優しく呟く。

「大変だったのね……こんなになるまで、ごめんなさい」

優しく、勇がこれまでに失ってきた仲間たちに口にしてきた言葉を前に勇はナイフを落とす。恐ろしく手が震えていることに勇自身気づかなかったが、頭まで登った熱さがゆつくりと冷まされるような気がした。そして、智子はもう一度口を勇の唇へと沿わせる。勇の震えが伝わったのか、今度は先ほどのものよりも長く押し付ける。再度離れる温もりに勇の視界は智子の潤んだ大きな瞳に吸い込まれる。



「ユウは、ユウのしたいことをすればいいわ。だって生きていてくれたんだもの」

その言葉に勇は瞬間移動を使用し、ユニットに脚を入れる。発進準備のエンジン音だけが格納庫に響く中、智子の願うように組まれた手がどうしても当時の自分の姉の仕草に似ていたことを思い出す。そして、静かに発進する。その発進間際、勇は小さく呟く。

「もうウィッチはいらないんだよ・・・」

静かな囁きはエンジン音にかき消されるように、勇もまた姿を消していた。そこには勇と共に写っていた藤野や林のもう二度と戻らない日常が収められた写真だけが残っていた。そして、ようやく解放されたビュリリングは仰向けになりその降ってきた写真を手にとると一言呟き、一人の絶叫が木霊したと言う。

「本当に・・・強者に勝つには『愛嬌』だったとはな・・・」

「ムキいゝ！ど、泥棒おゝ!!!」

勇が話し終わるとハンナ・ウインドは合点がいったとばかりに腕を組んで話を聞いていた。そして、デジャブがまさに繰り返されようとしていた。

「・・・と、こんな感じでそちらの部隊にはご迷惑をかけたのです。お恥ずかしながら今回はその謝罪をしに参った次第だったのです」

「しかし、当時のメンバーはもうこの・・・」

「ええ・・・この『いらんこ』だけですよ」

「ムキい〜!!!お姉さま泥棒！唇泥棒!!!」

ハルカを遠ざけ、ハンナ・ウインドには謝罪を一応受け取ってもらい基地を発つことにする。ハンナ・ウインドはやれやれといった表情で勇を見送りに出る。

「まあ、私たち今の隊員には被害があるわけじゃないんだ。君が責任を負うのはここじゃない。そうだろ？」

「はい、きちんとけじめは自分でつけてきます」

「おそらくだが、君の落としていった写真とやらも穴吹大尉が持っているんだろう。扶桑に帰ってきちんとけじめをつけてくることだな」

ハンナ・ウインドはもう一度いやらしい笑顔を向けると、ウインクしながら勇に制裁を加える。

「乙女の唇を盗んだ罪は重いぞ！」

「なっ!?盗んだわけではっ！」

もう何を言っても無駄だと思った勇は顔を赤らめながら発進に意識を向ける。その時ふと浮かんだ顔があった。その顔とは罪の表情であり、罪悪感からフラッシュバックした。勇は次に向かう場所を定めた。

「はあ・・・俺はなんてものを盗んでしまったんだ」

勇の行先はベルギガ王国にある、サントロン基地だった。本来先に506部隊を訪れるつもりだったが、ハンナ・ウインドに言われたことを思うと優先順位がサントロンに回ってしまった。勇は自分の今までにやってしまった蛮行の数々にため息しか出なかった。

「はあ、最近心臓に悪いことしかしてないな……これならネウロイと戦争してた方がまだ気が楽だ……なんてな」

そんなことを独り言ちていると目的のサントロン基地が見えてきた。勇は大きく息を吸い込んで通信を入れる。

「こちら扶桑海軍、赤松勇。サントロン基地、応答願います」

「こちらサントロン、よく来てくれたわね」

馴染みのある声を聴いてほつとするも、その目的を考えると行き足は重く感じられた。基地に着くと馴染みにある顔ぶれが揃っていた。

「お勤めご苦労様、勇大尉？」

「出迎えありがとうございます、ミーナ中佐」

「おかえり！ユウ！」

「久しいな」

ミーナを始め、ハルトマン、バルクホルンが出迎えてくれる。そして、ミーナの後ろには黒い軍服を着た白髪の少女が勇を覗いていた。

「ああ、こちらはハイデマリー少佐よ。この基地に私たちが来るまではハイデマリーさんがこの基地を指揮していたの」

「ハイデマリーです．．．赤松大尉。ようこそいらっしゃいました．．．」

おずおずと怯えながら挨拶してくるあたりはサーニヤに似るものを感じ微笑ましくなった。そんな時、格納庫の隣の建物から爆発音が聞こえてくる。勇は即座に反応して警戒態勢をとる。

「敵襲か?!」

「はあ．．．ごめんユウ。たぶんウルスラだ」

「ウルスラ．．．まさか．．．」

勇はちよつとした悪寒を感じていると、その話題の人物が黒焦げになりながらやって

くる。

「けほっ・・・失敗です」

「ウルスラ!!危ないじゃんか!」

「お姉さま、実験に失敗は付き物です。それに・・・おや?」

ウルスラが実験の失敗を棚に上げる中、勇に気づいたハルトマンの妹であるウルスラは目を見開いて勇を視界に捉える。勇はウルスラが元智子がいた部隊のメンバーであることを覚えている。ウルスラも覚えていたのか、勇に近づき小さな声で挨拶代わりのジャブを放ってくる。

「お久しぶりです。唇泥棒さん?」

「おほんおほん!!!」

勇は周りに聞こえないように咳で誤魔化すも、周囲の反応は怪訝な様子でウルスラとの関係に眉をひそめている。勇は足早にウルスラの下を去ると引きこもってしまう。

「ユウどうしたんだろ？ウルスラ何か知ってる？」

「さあ？私は知るべきことしか知りませんよ」

ウルスラはそう言う興味なさげに再び実験に戻ってしまった。勇は部屋で荷ほどきするとミーナに挨拶に行くことにする。

「はあ、ウルスラ中尉がいるとはな．．．やりづらいな」

「何がやりづらいんだ？」

独り言を聞かれてしまい勇は苦笑いを浮かべながら振り返るとそこにはバルクホルンが立っていた。

「や、やあトウルデー．．．その、なんだ．．．ウルスラ中尉とは顔見知りだね」

「そうなのか！じゃあこれからジェットストライカーの試験を行うんだが、ユウも見て行かないか！」

「あ、う、うん」

バルクホルンに捕まり、ウルスラのジェットストライカーの試験に付き合わされることになる。ミーナとの話し合いは先延ばしとなるが、勇は頭を切り替えてジェットストライカーの試験に付き合うことにする。ジェットストライカーと言えば、バルクホルンが以前にユニットの魔法力過剰吸収という性能上の欠陥により大変な目に遭わされていたためであった。

「え〜トウルーデまた乗るの?!絶対危ないって!」

「それを見るのも試験だからな」

ハルトマンは以前の事件を相当恐れているのか、はたまたウルスラの開発した武器を信用していないのか一貫してジェットストライカーを否定した。しかし、バルクホルンとミーナのジェットストライカーへの可能性への言説からやむなく乗る運びとなった。

「そんなに担いで大丈夫なの?」

「確かに、30mmカノン砲に50mm対戦車装甲機銃とはまたとんでもない武装だ」

『しかし、前回の魔法力の過剰吸収は感じられない』



勇とハルトマンはジェットの圧倒的な搭載量に驚愕していた。勇はこれまでずっと零戦を使用しており、ユニットの供給は低レベルのものしか扱ってこなかった。そのせいもあってジェットの凄さを今になって認知したのだった。バルクホルンの試験も淡々と終了し、バルクホルンが下りてくる。

「圧倒的な火力は素晴らしいが、安定性がすこぶる悪いな。これでは並みの命中は見込めないだろう」

「ほら〜やっぱりだめじゃんか!」

バルクホルンの評価に気を良くしたハルトマンはここぞとばかりにウルスラを批判する。しかし、ここで勇が名乗りを上げる。

「俺も乗ってもいいか?」

「え?!ユウ乗るの?!」

その場の全員が驚愕する中、ウルスラは真剣に考え込んだ後、了承する。

「分かりました。赤松大尉の飛行、ぜひ参考にさせていただきます」

こうして勇の初のジェット飛行が始まった。最初の発進に感じる重力の凄さや旋回性の悪さに普段の相違性を見出すも、勇は的確にストライカーの性能を見極めていく。

「これより速度試験に入る」

『了解です』

勇は一度息を吸い込むと急降下と水平飛行にて最高速度を確かめる。相当のGと血流が押し込まれる感覚に勇は興奮を覚えていた。

「こいつはすごい……戦争が変わるぞ！」

「これは……」

「はへ〜」

ウルスラにより試験の終了が言い渡され、勇は興奮冷めやらぬ様子だったが降りてストライカーの感想を述べる。

「加速、旋回性能は従来のレシプロとは比べ物にならない……が、それを補って余りある性能だ。戦闘の在り方を変えるのも時間の問題かもしれないな」

勇のデータを取り、その後の感想や所見をつぶさにまとめるウルスラは、その後ミーナと協議に入ってしまった。勇は呆気に取られながらもミーナが暇になるのを待つことにした。一方、ミーナは勇とジェットストライカーとの相性が抜群であることへの探求心が爆発した様子のウルスラの対応に手を焼いていた。事細かくこれまでの勇の戦闘スタイルなどを尋ねられ、ミーナは寝食の時間もないほどだった。ようやく解放されたのは時計の針が日を跨ぐ頃だった。

「遅くまで申し訳ありませんでした。この研究はすぐにでも本国に持ち帰りたいところですが……」

「え、ええウルスラさんもご苦労様」

まだぶつぶつと研究に想いを馳せるウルスラを見て苦笑を浮かべるミーナだったが、

ここでウルスラが爆弾発言を残していく。

「まだまだ赤松大尉について知りたいですね。ミーナ中佐のご協力もとい、色仕掛けなにかで赤松大尉を調査に駆り出せないものですかね」

「ちよ、何を言い出すの!?!」

「ああ、すみません。本音が漏れてしまいました。糖分が足りないと研究以外のこと欠落するのは良くないですね。今日はこれで失礼します」

「ええ・・・しつかり休んでちょうだい」

ミーナは突然の勇の凋落を指示されかけ顔を真っ赤にしてしまう。思うところがな  
いわけではないことが災いしてしまったのは不覚だった。なんと出て行っと思った  
ウルスラが再びドアから顔を覗かせて置き土産とばかりに爆弾を設置していったのだ。

「そうでした・・・赤松大尉ならキスにも慣れていきますからそう慌てることではないです  
よ」

「なっ?!」

最後の余計な一言にミーナの疲労はピークに達する。ウルスラが今度こそ退出すると、これまでの疲労も重なり、どっと疲れが押し寄せる。

「もう……ユウに私が？何を考えているのかしら……でも、慣れているってどういう……こと……かしら」

椅子に座り、机に突っ伏すように考え事をしているうちにミーナは眠ってしまった。しかし、そこに勇がやってくる。時間がいいこともあり、勇もやってきてしまった。

「ミーナ中佐？しまったな、時間を遅くしたのが裏目に出たか。それにしても起きないな……」

勇も話す覚悟をしてやってきたが、ミーナが疲れて寝入ってしまった様子を見て今日は止めておこうと考えると、一気に虚脱感が襲ってきてしまった。仕方なくミーナを起こそうとするも、気持ちよさそうに寝入っているところを見て部屋に運ぶことにする。

「まったく、隊長がこんなところでこんな姿晒したら示しがつかんだろ……」

ゆっくり優しく抱きかかえると勇は静かに司令室を後にした。ミーナは揺られる感覚に気持ちよさそうに勇の服を掴んでくる。勇はミーナもまだ20歳に満たない少女であることを思い出す。ついこの間まで険悪な態度を取っていた相手だとは思えないほどミーナの寝顔は安らかだった。

「お疲れ様だ」

ミーナは久しぶりに揺られるような感覚に温かな感覚が押し寄せ意識が薄らぐ。そこにドアを開けるような音が聞こえた時、ミーナは目を開いてしまう。霞む視界に飛び込んだのは先ほどまで話していた勇だった。一気に目が覚め声が出てしまう。

「あつ・・・」

「ん？起きたか？」

優しい気な勇の声にドキリとしつつ現状の把握に努めようと必死に頭を回転させる。周りを確認するとなんとここはミーナの部屋で、明かりはついていなかった。さらにそ

の部屋に二人きりでお姫様抱っこされている現状にミーナはもう頭が容量を吹き飛ばされていた。

「あ、あ、あのユウ？わ、わ、私・・・」

「すまん、今降ろすから・・・あの、手、放してもらっていいか？」

勇に言われて自分の手を見ると、しつかりと勇の服を握りしめており、まるで離れたくない女の子、のような構図になっていた。顔を真っ赤にして勇から顔を逸らす。勇はそんなミーナが心配なのか顔を覗き込んでくる。

「どうした？顔が赤いぞ？」

「い、いや！これはその・・・少し疲れて・・・」

苦し紛れでなにもいい言い訳が出てこなかったが、そんな自分を客観的に俯瞰した時このような感情にはどういった名前がつくのかなどと考えてしまったいた。勇は少し様子がおかしいミーナに手を差し伸べる。

「本当に大丈夫か？」

「ひゃっ!？」

勇がミーナの手を握りその震えを確認していた。それに驚いたミーナは変な声が出してしまう。そんなことはお構いなしに勇は冷静にミーナの手冷たさを分析する。

「大分疲れているみたいだな。手がこんな冷えて・・・俺の手あつたかいだろ？俺は寒いところの出身でな」

そんな世間話すらミーナには混乱を加速させたのだった。しかし、勇の手が温かいことは本場で、いつの間にか緊張で冷えてしまった手を包んでいてくれた。少し落ちて着いたミーナは咳払いをして勇に向き直る。

「もう大丈夫。ユウ、迷惑かけたわね。あなたももう休んで？」

「ああ・・・」

精一杯の強がりですう言うのと勇はその手を離し、置いた。そう、置いたのだ。ミーナ



は頭部に感じる先ほどの温もりに硬直する。勇は優しそうな目で手を動かし、ミーナを労わる。

「その言葉、ミーナにそのまま返すぞ。おやすみ」

手をどけ、ミーナの部屋を後にした勇の方向に視線が固定されたままのミーナは数秒の時を経てベッドに崩れ落ちる。撫でられた頭はまだフワフワしており、勇の機関銃や刀でできた固くてごつい手の温かな感触が恋しいと思いつつ始めたミーナは既に陥落していた。布団に顔を埋めて先ほどの光景を思い出さないように儂い努力をするミーナは昔の感触と比べてしまう。ミーナが意識した部位は唇だった。

「慣れてるって・・・ずるい」

## 籠の中の翼 第三話

翌日、ハイデマリーは補給物資についての打ち合わせに出かけ、またハルトマンとウルスラの間で珍兵器について熱く議論が交わされており、昨晚の波の立ちようが嘘のようには風いでいた。

「なんだよこれ！私のユニットに何してくれてんだよ！」

「これはメツサーシャルフツバイ……私とお姉さまの二人ならきつとうまく扱えるはずですよ」

自分のユニットを勝手に改造されたことに立腹しているハルトマンとあくまで実験を優先するウルスラと、勇からすれば姉妹喧嘩もいとこだが、自分のユニットはこっそりと隠していた。バルクホルンらに宥められ、嫌々ながら二人で連結型のユニットでの飛行試験に入る。

「さすがは双子だな。あそこまで飛行をリンクできるとは」

「でもなんであんなに腹の虫の居所が悪いんだ？」

そんなことを話しているとハルトマンの無理な機動を取ったことにより墜落してしまふ。勇は急いで二人の救出に向かい、無事に連れて帰ることに成功するが、ハルトマンの怒りは止まらなかった。

「だから言ったじゃんか！」

「あれは姉さまが勝手に機動を乱したからです」

「そうだぞ。息を合わせて飛行しなければああなることは分かり切っていたじゃないか」

バルクホルンにまで言われたことでハルトマンはついにウルスラに当たってしまった。

「ウルスラの作った兵器はどれもこれもダメダメじゃん！」

「ハルトマン！」

勇の声にハルトマンは自分の言った言葉に驚く。ウルスラは思うことがあるのか、勇

たちに詫びるとどこかに消えてしまった。その後、ハルトマンは不貞腐れ、ザリガニ釣りに興じることにすると基地の警報が鳴る。

「敵は?!」

「お前のユニットは壊れて整備中じゃないか」

「あつ?! そうだった!」

「ユウ、悪いのだけれど出てくれる?」

「もちろんだ。間借りさせてもらってる身分だからな」

ハルトマンの代わりに勇が出撃することになり、ハルトマンはさらに不貞腐れる。

一方、三人はネウロイの報告がなされた座標付近に到達したが一向にその姿を見つけないことができなかった。しかし、ミーナはネウロイの存在を三次元把握の固有魔法にて確認する。

「まさか・・・あの積乱雲の中にね」

「つまり敵は単なる偵察型にあらずってことか・・・厄介だな」

「接近するにしてもあの積乱雲では我々が巻き込まれかねないぞ!」

積乱雲の中にいる敵に有効的な手段を見いだせずにいると勇が助言する。

「昨日使用した30mmカノン砲なら遠距離でも弾道変化が少なく、有効打が与えられるのではないか？」

「それね！」

「じゃあ私が戻ってジェットストライカーを装備してくる！」

「それまでここは俺たちが持たせておくよ」

勇とミーナがバルクホルンを送り出すのと同時に積乱雲の中にいたネウロイが追撃に小型ネウロイを射出する。

「トウルーデ！すまない！そつちに何機か小型が向かった！注意されたし！」  
『了解した！なんとか振り切ってみる！』

基地まで引き連れてしまえば二次被害が出かねない。それまでに小型ネウロイだけでも始末してしまいたい勇だったが、如何せん積乱雲の中のネウロイが厄介だった。積

乱雲の中から偶に顔を出しては大威力の攻撃をしてくるのだった。

「くそっ！ミーナ！何機だ?！」

「15機よ！」

「なら10機は任せろ！」

勇が積極的に多くの敵を惹きつける。しかし、敵もなかなかの強敵で小型ながら装甲が堅く攻撃力も馬鹿にできなかった。しかし、勇は世界一の撃墜王と呼ばれる所以をいかななく発揮する。

「まったく厄介な・・・仕方ない。弾種変更、高初速爆裂徹甲弾・・・装填！よしっ！」

20mmの機関砲に高初速爆裂徹甲弾に勇の練り練られた魔法弾を装填するとその効果は抜群だった。さらに勇の空戦技術も相まって早くも5機を撃墜していた。それを見ていたミーナは勇の戦闘に感銘を受けていた。

「さすがは世界一の撃墜王ね。私も負けていられないわ！」

ミーナも果敢に攻めに転じる。勇も瞬間移動が使えなくなったが、その圧倒的な空戦センスは周りの人間を魅了する。積乱雲の中のネウロイが攻撃を仕掛けてきても、その攻撃をシールド斜めに張ることで射線をずらし、付近にいた小型ネウロイに当てていく。さらに、斜めに張ったシールドの摩擦を生かし、不規則挙動を生じさせ、攻撃をここごとく回避、その後すぐに攻撃に転じていた。

「しつこいなっ……これでも喰らえー！」

20mm機関砲をばらまくと、それを避けようとした小型ネウロイ同士で衝突、積乱雲の強風に煽られてよろけるネウロイを一網打尽にしていった。これで残る小型ネウロイは2機となり、そのほとんどを撃墜した勇は瞬時に自分の付近の雲の中から出てくるネウロイの気配を察知して回避する。

「お見通しだー！」

余裕をもって避けたつもりで攻撃を仕掛けようとした時、悪寒が走る。勇は視界の端

に移るミーナに直撃する先ほどの射線が見えた。

「ミーナ避けろおお!!」

ミーナは小型ネウロイに対しての対処で精一杯であり、今も正に小型ネウロイの攻撃に晒されている瞬間で、中型のネウロイの攻撃には気づくことができなかつた。その時、勇の声が聞こえ僅かに回避機動を取ることにより攻撃の直撃は避けることができた。しかし、完璧に回避することは叶わなかつた。

「ぎゃあああ!!!」

片方のユニットに被弾してしまったミーナは黒煙を吹き、錐揉みしながら墜落していく。さらにその上からは逆落としに襲ってくる小型ネウロイが3機ほど追撃してきていた。もはやここまでかと目を瞑ると、聞き慣れた声がミーナの耳をつんざく。

「手を伸ばせえ!!!」



目を開けると勇がミーナを追う小型ネウロイを吹き飛ばすところだった。光の粒の中からミーナに向かって手を伸ばしてくる姿はこんな状況の中で不謹慎だとは思うが、カッコいいと思ってしまう。しかし、ミーナはなかなか体勢が整えられず、勇に向かって手を伸ばすことができずにいた。もう間もなく墜落してしまうという限界さが勇を押しした。

「届けえ!!!」

地面に激突する寸前でミーナはふわりと浮き上がる感覚に目を開ける。すると勇がミーナの手をしっかりと握っている姿が映し出された。

「ユウ・・・」

「馬鹿野郎、諦めるなんてミーナらしくないぞ！」

「ごめんなさい・・・ってユウ?!」

逆光の中で勇の顔を見ることは難しかったが、ミーナの顔に滴った雫が妙に温かいこととその雫の正体に気づく。勇がミーナを自分の背中におぶるように体勢を整えると

ミーナは勇の様子を確認する。

「ちよつとユウ！ケガしてるじゃない!？」

「ああ、ミーナを追つてるときにユニットの破片に当たつたみたいだな」

勇の目の上には4cmほどの傷があり、そこから流れる血が滴っていた。さらに問題なのが、勇の顔が真つ黒になっていたことだった。

「失敗だったな・・・最短距離で追いかけたからオイルやらがへばりついちゃった・・・それに血がオイルと混じつて目が開けられない」

「そんな・・・」

ミーナは自分のために危険を冒してまで助けてくれた勇に申し訳ないと思つてしまう。しかし、今は戦闘中であり、残るは小型ネウロイが4機と中型ネウロイだった。この絶望的な状況にミーナは考えを巡らせる。すると勇が発案してミーナに知らせてくる。

「お前の三次元把握で俺に直接敵の位置を知らせてくれ。攻撃はすぐに教えてくれ。ミーナの指示通りに飛ぶ」

「無茶よ！」

「無茶は承知だ！これしか方法はないんだ！」

「・・・わかつたわ。あなたを信じるわ」

勇の方法にやむなく承認を出す。勇にしっかりとしがみつき振り落とされないうようにする。ミーナは自分の固有魔法を勇の頭に自分の頭をくっつけ直接知らせる。そしてネウロイからの攻撃は瞬時にミーナを通じて勇が回避行動に入っていた。

「次、右から来るわ！」

「じゃあ、一度降下してはぐれた奴を叩く！」

勇の判断速度は速く、かつ的確だった。目が見えていないものにも関わらず、ミーナから送り込まれてくる座標と攻撃を回避した際の自分の位置から敵の後方に着くことに成功する。

「そう、あと上に3.5m・・・射角右に5度調整。いいわ！敵照準一杯！」  
「おう！」

勇が射撃を開始すると、弾丸は吸い込まれるように小型ネウロイに着弾し光の粒となり消え果てる。さらに中型のネウロイの攻撃を先ほどのようにシールドで弾き、不規則挙動を取った際などは本当は目が見えていないのかと疑うほどだった。そして、遂に最後の小型ネウロイになったところで不運が訪れる。

ガチャン！

「しまった！詰まった!!」

ここまでの連戦に銃身が過熱になり、弾が詰まってしまった。ミーナは万事休すかと頭を過つたとき、勇がミーナに警告する。

「ミーナ！しっかり捕まれ！振り落とされるなよ！」

「え、なにを?!」

その瞬間急激な前方への完成がミーナを襲い、勇にしがみつく。すると後方のネウロイはすっかり姿を消していた。何が起きたかわからなかったミーナはあたりを見渡し、勇がホツとした声音で話しかける。

「最強の仲間のご登場だ！」

その言葉通り、ミーナの視線の先にはハルトマンとウルスラがジェットストライカーを履き、30mmカノン砲をぶっ放していた。ミーナもようやく事態が掴め、ハルトマンとウルスラに指示を出す。

「話はあとで聞かせてもらおうわ。中型ネウロイは積乱雲の中心にいます。私が誘導するのでそこに射撃して！」

「了解っ！」

ミーナの管制射撃とハルトマンの射撃センス、それを支えるウルスラの飛行補助によって成せる技だった。そして、ミーナは攻撃命令を下す。

「今よー！」

30mmカノン砲の轟音と共に雲ごと中型ネウロイを一刀両断してしまっていた。これにて戦闘は終了し、ハルトマンとウルスラは燃料の関係から先に帰還させた。戦闘終了後の静かな空間に勇とミーナの二人はしばしその余韻に浸っていた。ゆつたりと基地に向かう勇にミーナはハンカチで顔を拭く。

「すまんな」

「ごちそうさあとう。助かったわ」

ミーナはオイル塗れの勇の顔を拭き、傷口を覆うようにハンカチを勇の頭に巻き付けて応急処置を施す。終わってしまうと急に手持ち無沙汰になり、ただ背負われている自分が申し訳なくなる。勇のゆっくりとした飛行では基地に到着するまでに20分はかかるだろう。その間ずっとこの状況が続くのはよろしくなかった。ミーナは別のことに気を向けてみる。

（誰かに背負われるのなんて初めてだわ。男の人の体って案外大きいのね）

そんなことを考えていると昨晚のことがふと思い出されてしまう。ミーナは勇がこちらを振り返れないことをいいことに顔を赤らめて、火照った顔を風で冷やす。逆に勇は戦闘中で気づかなかつたが、ミーナが自分にしがみついている今の現状に危険信号を出していた。

(妙にミーナがそわそわしてるが気づかないのか?)

勇はもぞもぞとするミーナにこれ以上精神が汚染されないように注意しようとする。

「あの、ミーナ?」

「ユウ、なに?」

「その・・・ム・・・が・・・」

「え? 何? 聞こえないわ?」

勇の耳が赤くなったのに気付いたが、勇の声が小さくよく聞き取れずに再度聞き返してしまったのは失敗だったとミーナは後悔することになる。

「そのだな……胸をあまり押し付けなくてくれるか……」  
「……………え？」

一瞬のフリーズの後、ミーナは真つ赤になりながら言われたことを理解する。まさに今の自分は勇に胸を押し付けるような格好で、今しがたの緊張で勇の背中にさらに押し付ける形となってしまうていた。ミーナはもう我慢ができなかった。

「ごめんなさいっ!!!降ろして!!降ろしてえ!!!」

「おいつ!暴れるな!うわっ!」

ミーナが暴れたことにより勇はバランスを崩してしまい、ミーナを落としそうになってしまう。ミーナも落ちそうになることに気づき、逆に勇にしがみつく形を強固にしています。それが更なる不運の始まりだった。

「危なっ!つてうぐぐ!!」

「おち、落ちるっ!!」



急な上下運動にミーナは勇の胸に強くしがみつく。その腕力で勇の肋骨は悲鳴を上げていた。

「ううーミーナ！ 苦しい!!」

人が危機に瀕した時の火事場の馬鹿力はすさまじく、勇の肋骨がぎゅうぎゅうと締め付けられる。それと同時に勇が潰されまいと身体を強張らせたことも不運を助長させる。なんと魔法力までもが発せられてしまい、速度を増す。さらに危機的な状況にミーナの力はさらに増す。メキメキと勇の肋骨が嫌な音を立て、勇の顔はもはや青くなっていた。そしてついに、勇の肋骨が限界を迎える。

「やば．．．うぐが．．．あつ．．．」

バキリと嫌な音は勇の力を全て奪っていった。徐々に高度を落としていき、ミーナは必死に体勢を整えさせるも、墜落は時間の問題だった。そしてついに墜落してしまった。幸いだったことに全て勇がクッション代わりとなり、また基地も目の前だったこと

もあり、監視部隊がすぐに救助に駆けつけてくれた。落ちたミーナは虫の息の勇の肩を叩き声を上げて詫びた。

「ごめんなさーい!!!」

この日、勇はウィッチによる初めての被撃墜を記録した。思ったよりも重傷であり、肋骨の骨折と墜落による打撲、内臓破裂により久々の扶桑へ帰国することとなったのだった。

「ふう．．．久しぶりに帰ってきたわけだが．．．どうしたもんか」

勇の前には黒い車が2台ほど停車し、いかにも勇が入らないといけない雰囲気を出していた。勇はやるせない思いで近づくと案の定ドアが開く。中から海軍の白い軍服の男がドアから出てくる。その徽章から察するに大佐でことが伺える。階級社会の

軍人には従う他の無い選択肢に諦めて車に乗ることにする。車に入ると先ほどの大佐は助手席に乗ってしまい、大佐が相手ではなかったことに驚きつつ車内に目を向けると勇はその場で硬直することになる。目の前の人物は勇が乗るとニツコリ笑顔を浮かべると挨拶をしてきた。

「やあ、赤松大尉。ようやく君に会うことができ嬉しいよ。僕は・・・」  
「し、失礼いたしました！山本長官!!？」

勇の隣に座る人物は扶桑海軍連合艦隊司令長官である山本一二三大将であった。勇はまさに雲の上の人物を前に冷や汗を隠せなかった。負傷で扶桑に帰国したものの、まさか扶桑における海軍内の最高峰の人物が最初に出会う人物とは思わなかった。

「そんなに畏まらずともよいよ。今日は君と話したくてね。こんなに形相な車で申し訳ないけどね。はっはっはっはっは」

「はい、いいえ・・・それで話しとは？」

勇は目の前の山本が自分に何の用なのか気が気ではなかった。もちろん勇自体扶桑海軍に対しては特殊な扱いを連合軍からその立場を保証されていたとはいえ、それは不興を買いかねない危険な行動をしていたのも事実だった。そのため山本から直接裁可が下されることも考えられた。しかし、山本は終始笑顔を絶やさずに勇と対峙する。

「君の活躍は聞いているよ。現在の撃墜数はなんでも900機を越えたそうじゃないか」

「い、いえ……私個人の戦果を誇るわけでは……」

「はっはっはっ！大丈夫！決して私は君を責めているわけではないのだよ！まあ、褒める為だけでもないのだがね」

その一言に勇の背筋は凍り付く。やはり山本という男は一見優しそうな面持ちだが、その背後に隠した気味でいる圧倒的な存在感は隠せないのだ。勇は思い空気の車内で窒息する思いだった。やがて車が停車すると、そこは海軍省だった。勇も今まで訪れたことのない海軍首脳部への招待に、その足取りは重くなつていくばかりだった。

「さて、ここなら邪魔も入るまい……さっそくで申し訳ないが本題に入らせてもらいたい、ところだが近況を聞こう。体調はどうかね？」

「はいっ！もうほとんど回復いたしました！」

「それはよかった。私も助かるというものだよ」

山本の煮え切れない態度に勇は嫌な予感ばかりが募っていく。山本の笑顔の裏に潜ませている大きな存在感は可視化されるようだった。まさに死刑宣告が成されるのではないかという不安が勇を支配していた。

「話と云うのはだね、私も困っていてね。はつきり言つて君の存在は大き過ぎる。私の権限でも抑えきれないほどにね」  
「わ、私はどうなるのでしょうか」

勇の口内はカラカラになり、つつかえそうになりながらも疑問を訴える。すると山本は大きく息を吸い込むと勇を見据える。

「順を追って話そう。まず、君の部隊である343空第一中隊の全滅は大きな波紋を呼んだ。その際、司令の源田くんが亡くなったことにこちらは混乱してね。その混乱で君は戦死したと報告されていたのだよ」

勇は耳を疑った。自分が戦死していたと報告されていたとは今まで聞いたことすらなかった。そんな驚愕する勇を置いて山本は話を進める。

「そんな中、君が陸軍の参謀を暗殺しかけ、拳句に連合軍に拘束されてしまった。この事実には我が海軍はその能力に疑義が掛けられてしまった・・・私の持てる権限で連合軍に君の身柄の自由行動権を連合軍に付与することで、君の能力を高く評価する連合軍によつて運用され、混乱はなんとか収束しつつあったのだが・・・扶桑ではそうもいかなかった」

勇はこれまで自由に行動できていた理由とその背景を知り、恐縮の念が堪えない。目の前の人物が自分を庇い、この扶桑海軍と言う自分の所属する場所まで危険に晒してしまっていたことに恐怖した。

「陸軍は我々海軍に責任追及として、君の陸軍協力派遣を和解案として提示してきた。私は反対したんだがね、政治はそうもいかなかった。君の行動の結果、内閣が壊れかけてね。海軍大臣に辞任要求が出されたが、陸軍の君の部隊の強制徴用の事実を掴んだ我々の反論の結果、陸軍大臣へも責任が波及した。両大臣が辞職を願い出たところを陛下の大元帥命令の一言によって辞任の話は流れ、危機は免れたのだよ」

自分の行動が一国の政治の命運までもを揺るがしていた事実にあまり実感がわかないほど規模の大きい話だったが、勇にこれが本題ではなく前置きだと言うことに漠然とした恐怖が差し迫っていた。

「そこに、だ……君がああ501で成し遂げたネウロイの巣の攻撃が成功したという報

道にて『連合軍特殊遊撃師団 連合軍中佐』として報道されたことで再び火薬庫に引火してしまつたのだよ」

山本の眼光は鋭く、そしてなによりもひたすらに疲れていた。勇は生唾を押し流し、じつと山本の視線に耐え忍ぶ。山本は勇の揺るがなさを目の当たりにすると、先ほどの威圧感を引つ込め笑顔を浮かべて話の雰囲気をはらりと変えてしまう。

「君にはまつたくほとほと手を焼かされたものだよ！」

「なんと謝罪すれば・・・」

「その必要はないよ。これも仕事だからね。まあ、簡単に言つてしまえば君の存在に魅力を感じた世界が、君を世界の共同管理での運用を望んでいるということだ」

勇は聞こえのいい言葉に言いようのない不安が押し寄せていた。その不安が表情に出ていたのか、山本は言葉を変えて勇に諷す。



「気づいたようだね。包み隠さずに伝えるところ。君の存在が世界は心底恐ろしいのだよ。このネウロイとの戦争はいづれ終わる。それは君が証明してくれたことでもあるが、君は同時にもう一つの事実を世界に知らしめてしまった。それは・・・戦争が終わった後のことだ」

勇は一言も発さずに次の言葉を待つ。自分が世界に証明してしまったこととはなんなのか。希望、はたまた絶望のどちらにしても勇の今後の行動次第で世界が変わってしまうことが決定事項のように進められていく不快感だけが過っていた。

「断言しよう。戦後、君をめぐって新たな戦争が始まるだろう。それは扶桑対世界かもしれないし、君が世界のどこかの国に拉致されて戦わされればその国の戦力は爆発的に増大する・・・つまりは世界大戦だ」

勇は吐き気がした。今の自分は世界を救う為、ネウロイを倒し、だれもが平和を享受

するために身命を賭して戦ってきたのだ。事実、これまでにたくさんの、それこそ数えきれないほどの仲間を失い、勇自身心に傷を負わされてきた。そんな自分を巡って今度人は同士が争うわなければならぬ理由が理解できなかった。

「現に、世界では自国に君を取り込まんと工作活動が横行している。おそらく色仕掛けや賄賂などによる凋落。もちろん君はそんなことには屈しないだろうが、そうなるや過激な手段に訴えてくる者は必ず出てくるだろう。知っているかね？カールスラントやベルギガ、ガリア、ヴェネツィアでは君のこれまでの功績から「卿」の称号が授与される運びとなっているそうだ。もちろんオラーシャやスオムスでも君に勲章が送られようとしている。今や、君は世界の注目の的……いや、世界の中心なのだよ」

山本はここまで言い切ると煙草に火を付け一服置く。勇は拳を握りしめ、聞いていることしかできなかった。煙が勇の周りに纏わりつくもその煙すら勇を空気に取り込まんとしているようで気持ちが悪かった。空気まで鉛の様で勇は頭が沸騰しかけていた。

「では……世界は私のご機嫌取りのために仲良しを演じていると？」

「……否定はしない。だがね赤松大尉、これだけは信じていてほしい。私が生きている限り君が不都合が生じることはない。これは明言しておこう。君には我が扶桑海軍連合艦隊がついている！」

山本の力強い助力に勇は心を打たれる。山本という男の力強さと言えば扶桑だけではなく、世界に轟く連合艦隊司令長官、『軍神』である。そんな軍神と扶桑海軍の威光たる連合艦隊が勇の支援を申し出てくれたことに勇は感激する。

「ありがとうございます……軍神ともあだ名される長官にここまで言っていただけとは！この御恩は決して忘れません」

「ははは！まだ僕は死んでいないよ！じゃあ、忘れないうちに言っておこうかな！赤松大尉、君は将校になりなさい」

山本の言っている意図が見えてきた勇は言葉に詰まりつつも自分の考えを伝える。

「戦後すぐに昇進の手はずを整えて頂けるのですね？」

「話が早くて助かるよ。戦後があるなら、君の戦後は我々の先槍ではなく後ろ盾として使わせてもらおう。全ては世界平和のため」

「平和のために！」

山本は勇に手を差し出す。勇は慌ててその手をしっかりと握り返す。ここに勇と連合艦隊司令長官との密約が交わされたのであった。勇は退室が許可され、別命あるまで扶桑での休養が許された。勇が海軍省を出るのを確認した山本の部屋では、山本と先ほどの大佐が煙草を蒸かしていた。

「あの男、やはり危険では？我々で監視しておかなくてよろしいのですか？」

「止めておきたまえ。今彼にへそを曲げられたらそれこそ世界より先に我々が破滅してしまうよ」

「しかし、陸軍の奴らからの介入だけでも阻止しなくては！」

「ふむ、仕方ないか。それは任せたまよ・・・それにしても、彼は話を聞いてもなお飛ばう

とするか。ウィッチとやらは僕らの範疇を越えるね」

山本が指示すると大佐はすぐに退室して行動を開始する手はずを整えるようだった。そんな忙しい姿を見て山本は将棋盤を取り出すと駒を整列させる。敵陣を全て並べると、自陣地には一つの駒だけを置くのだった。その駒は大きく、かつ孤独だった。

「彼はこの『王』のように踊れるかな．．．いや、彼なら」

山本はその王の駒を掴まむと敵陣を一風ぎにする。盤面はめちやくちやになり、その中には一つだけ屹立として輝く王が立って君臨していた。その光景を見た山本は自嘲気味につぶやきを笑って吹き飛ばすのだった。

「つはは！立ちよつた！きて、僕も一働きしますか！はあ、赤松大尉が今すぐに将校になつてくれればこんな仕事しなくても良かったんだがねえ」

山本の言葉は煙草の煙のように空気に溶け込んで行ってしまった。

勇はと言うと、とりあえず帰国した際に行こうと決めていた場所に向かっていた。それは墓所だった。桜が散り、葉桜になった墓所は既に夏の気配が差し込んでいた。勇は先に戦没者合同慰霊塔に出向いた。ここには扶桑以外の遠方で亡くなり、骨も収められない死者の魂が収められていた。

「林隊長、藤野・・・みんな、扶桑に帰りました。みんなも帰ってくれ」

勇は軍帽を脱ぎ、手を合わせると一心に祈った。あの501と共に戦ったヴェネツィアでの戦いの最中、大和で見た夢で藤野が言ってくれた言葉を思い出していた。勇は自分が故国に変えることでみんなを連れて帰れると考えていた。そして、ようやく扶桑に、全員の故郷に帰ることが、帰すことができただと感じていた。勇はお供え物をし、酒やたばこを捧げると次の場所に向かう。そこは自分の家のお墓だった。

「やあ、ひさしぶりだね。姉さん・・・」

『赤松家之墓』とかかれた墓石には勇の家族、そして姉が祀られていた。姉も欧州のカールスラント撤退戦で失っていたが、唯一の肉親である勇が先祖代々の墓に姉を入れることにしたのであった。懐かしい姉の墓参についていよいよ墓の掃除が行き過ぎてしまう。布巾で墓石を拭いていると姉の墓標を倒してしまった。そこには懐かしい姉の名前が刻んであった。

### 『赤松咲』

仲間や友人に伝えてある名前は『恵美』と書いて『えみ』と呼ばせているが、本当の字は当て字で『咲』と書いて『えみ』と呼ぶのである。これは古代清王朝の漢字には花が芽吹き咲くことを笑うと表現したことが起源とされているのだそうだ。ただ、当て字のため『えみ』と言うと大抵の人が『恵美』と書いてしまう為、海軍でもそのようになったってしまったのだった。

「そーいや姉さん、自分の字を間違えられたのに笑ってたっけな・・・」

思い出し笑いをし、姉の思い出を振り返るとすぐそこにいるような気がしてしまう。

さらに、咲は勇に笑った後にこう言うのだった。

『ユウが知ってくれてくれたら私はいいの！ユウ、ちゃんと覚えていなさいよ？』

そんな言葉を言ったものだなあと感傷に浸っていると背後から姉の気配がして振り返る。それと同時に背後の人物から呼ばれるのだった。

「ユウ！」

一瞬、勇は本当に姉の亡霊が現れたのかと思いい目をこすると、目に涙を浮かべた穴吹智子が立っていたのだった。

「智子大尉……」

扶桑に帰国していたはずの智子に再びの相まみえることになったのは偶然か、はたまた必然か、勇は少し勘ぐってしまう自分が情けなかった。智子も墓参に来たのか、桶を持っており、その偶然性を認識してホッとしたり。智子は勇に走り寄ると飛びついてき



た。

「うわっ!?!」

「ユウ、ユウ、ユウ!! やつと会えた!」

勇が思う以上に智子の勇への感情が良かったことに困惑する以外は、感動の再開と言えた。勇はあたりを見渡すと、先ほどの姉の亡霊はもう感じることは出来なくなっていた。ただ、葉桜が風になびき夏の匂いを運んでくるのみだった。

## 籠の中の翼 第四話

久しぶりの智子との再会に勇は驚きつつ、まずは言わなければならぬことを伝えようとする。

「智子大尉！俺、あなたに謝らなければならぬことがあるんです！」

智子は何について言おうとしているのか既に分かっているようだった。勇はこれまでに自分に降りかかった出来事を自分が自分たらしめる要素の一つだと考えていた。しかし、その要素が自分を構成するものだったとしても人に当たっていい正当性にはなり得ない。そのことをよく学んだ勇は過去との区切りをつけるため智子に向き直る。当時の頃の智子とはまたもう少し成長した姿が勇の目を見据えて言葉を待っている。

「あの時、智子大尉や他の仲間の方たちの言葉を聞こうとしなくて、すみませんでした」  
「・・・よくできました」

激高されても仕方ないことをしたはずの勇は今しがた優しく頭を撫でられてる現状に戸惑っていた。しかし、頭を撫でられることの懐かしさはどことなく悪い気はしなかった。勇は智子をもう一度見据えるが何を話していいか分からなかった。あたふたしていると智子が手を引く。

「ユウ、あなた扶桑に帰ってきたばかりでしょう？せつかくだからご飯食べましょ！」

こうして勇は智子の赴くままに連れ回された。喫茶店での初めてのアイスクリームや流行りの曲など、おおよそ勇がこれまで経験してこなかった今に触れたのだった。智子は一頻り紹介し終えたのか、満足げに休憩のお茶を飲んでいた。

「あの智子大尉、俺はその・・・」

「その大尉付けるの止めてくれない？私たち今は普通の時間を過ごしている一般人なのよっ。」

「じゃあ、その・・・穴吹さん？」

「わざとやってんの？」

智子の目力に押され観念して名前を呼んでみる。なんで自分にこんなことをさせようとしているのかわからなかったが、智子には逆らえないと思った。

「智子……さん」

「……まあいいわ。合格にしてあげる」

「はあ……で、なんで俺にこんなことをしてくれるので？」

この質問には智子は顔を逸らして空を見上げるようにしてはぐらかす。勇もつられて空を見上げるととてもいい天気だった。そう、とてもいい天気だったのである。そう思うと急に胸が苦しいような騒がしい気持ちに駆られた。

「あの、俺、普段こんなふうに空を眺めたことが無くてですね。あと、今日みたいにおいしい食べ物だったり、気持ちのいい曲を聞いたり、そういう「普通」をやつてこなかったんです。だから、今日はとても楽しくて……だから……」

最後の一言はどうしても智子には言えなかった。しかし、智子はその最後の言葉を分かっていたようだったため息をつく。と勇の手の上に自分の手を重ねる。

「分かつてるわよ．．．ちよつと食後の運動してみない？」

そう言うときまた勇の手を引いてどこかに連れ立ってしまった。少し歩くとそこは試験飛行場だった。何をしようとしているのかと勇は必死に考えていると、中から見覚えのある人物が出てきた。

「やあ智子．．．と、君は確か海軍の」

「はっ!?!お久しぶりです! 黒江少佐!?!」

目の前にいる人物は勇が赤松貞明らと出会った最初の日に、ウィツチを連れてくると言う無理難題に付き合ってもらった人物であり、勇としては当時の醜態を知られる人物

として顔を合わせたくはない人だった。

「なに？綾香知り合いなの？」

「ああ、彼に昔アプローチされてな」

「なんですつて!?!」

黒江の含みのある言い方に勇は頭を抱える。なにやら怒り心頭の智子を横に勇は当時のことを詫げる。

「あの時は突然お呼び立てしてしまい申し訳ありませんでした」

「なに、気にするな。それにしてもなんだって君がここに？」

「私が連れてきたの。ねえ綾香、ユウにテストパイロットしてもらえば？」

勇の知らない間に話が進められているようで、勇はまったく要領を得なかったが、どうやら新しいユニットの性能試験をするようだった。

「実はこのユニットは陸海軍協同開発の機体でな。本当は坂本がテストパイロットをす

るはずだったんだが、急遽欧州に向かつてしまつてな。だからぜひ君からも意見を聞きたい」

「俺なんかで良ければ……」

陸海軍協同開発の機体なんてものは初めて聞いたが、勇で試験飛行が務まるのならやらない手はなかった。それに勇は今とても空を飛びたい気分だったのである。

「赤松勇大尉、出る！」

勇は黒江に言われた通りの各種試験飛行を行い、速度試験や旋回性能、エンジン出力など様々な項目を確認していく。しかし、お世辞にも零戦を乗り慣れた勇からすれば鈍重な動きに頑丈な機体設計は違和感しかなかった。試験を終え、地上に戻ると黒江と意見交換し合った。

「ご苦労、どうだった？」

「うーん、やはり魔導インジケータの材質が……エンジンの供給形態が……フラップの操作軸の強度が……」

専門用語だらけの世界だったが、黒江も納得したようにメモに残しながら議論を進めていく。カタログスペックを見るに、最高速度は780キロ、格闘性能や一撃離脱にも対応できる万能ユニットとなっていた。しかし、まだまだ改善の余地があり、完成は先のように思われた。一頻り黒江と話す暇そうにしていた智子が終わったのを見越して話しかけに来た。

「どお？ 気持ちよかったんじゃない？」

「ああ、試験飛行とは言えやっぱり空は気持ちよかったよ」

素直な感想を言った所で勇は気づいてしまう。もしかしたら智子は自分の感じていた焦燥感に気づいていたのではないかと。しかし、その上で自分に優しく接し、いろいろなところに連れまわしたのにはどういった意図があるのだろうか。智子の顔を見ていた。

「どうしたのよ、そんなに見つめて・・・」

「あ、お構いなく」



「・・・構うわよ！」

バシツと背中を叩かれて勇は咽ながらも智子に本心を尋ねてみることにした。

「じゃあ聞きますが、どうして俺をここに？」

「・・・聞いちゃうんだ」

「はい。昔、智子さんには酷いことをしたのは自分なのに、どうして好意を寄せてくれるのか、分からないんです」

「そこからの・・・」

智子は意気消沈した様子で、勇は自分の質問がおかしかったかと困惑するありさまだった。智子は自分のマフラーで口元を隠してなにやらぶつぶつと呟いているところで、黒江からお呼びがかかった。

「すまないな、話の途中で」

「いえ、ちょうどよかったです」

「そうなのか。まあいい、聞きたかったのは智子とはどういう仲なんだということだ」

黒江はなんと話のフォローに勇を呼んだらしく、黒江の友好的な態度に好感を抱いた。

「どういう仲なのかと言われましても・・・昔、強く当たってしまつて、俺としては頭が上がない人なんです・・・」

「そうだったのか？ てつきり智子とはだいぶ進んでいるのかと思つたぞ」  
「へ？」

黒江の素つ頓狂な話しに勇は首を傾げる。なんでも黒江によると、智子は黒江と話す機会がある度に勇のことを話していたらしい。そんなことも露ほども知らなかった勇はどうしてそうなつたのか知りたくなつた。

「要するにだ、智子は君にホの字ということだ」

「・・・いや、どうですか」

「智子は素直じゃないからな。そこそこは私も知らないんだ。でも、見てれば分かる

よ。きっと智子は君を守ってあげたいんだ」

守ってあげる、という言葉に勇は智子の方に振り返る。顔を真っ赤にして待ちぼうけている少女は確かに自分に恋をしているかもしれない。でも守ってあげると言うのは一体どういうことなのか勇にはますます持つて分からなくなっていた。

「まあ、しっかりと見てあげることだ。君みたいな綺麗な顔して硬派な感じ、私の好みではあるが君といると心配で仕方なさそうだ。男ならせめて話くらい聞いてあげることだな」

黒江の好みに敵つたのは世の男性からしたら垂涎物なのだろうが、これまで異性として人は見たことがあっても恋人としての対象の目は持ち合わせたことがなかった。それは勇が常に死と隣り合わせの戦場に身を置く軍人だからであり、そんな暇がなかったからである。勇はここでピンとくるものがあった。

「そうか『暇』か！」

「な、なんだ?!」

「黒江少佐、ありがとうございます!」

「あ、ああ?」

黒江の下を去ると、勇は待ちくたびれた様子の智子に近寄る。そして、今度は勇が智子の手を取り目を見て話す。

「智子、普通を見せてくれてありがとう。暇を感じさせてくれてありがとう! 守ろうとしてくれてありがとう! でも、俺はウィッチなんだ。ウィッチは空にいないとダメなんだ。だから、智子の今の気持には応えられない」

一気に言い切ってしまうと、智子は驚いたように目を見開いたかと思うと、その大きな瞳から大粒の涙が溢れてきた。

「なんで・・・気づいちゃうのよ! ユウは十分働いたじゃない! これ以上戦ったら本当に

戻ってこれなくなっちゃうかもって思ったら、私・・ユウには笑っていてほしい。なのに、あんたは今日私がどこに連れて行っても楽しそうにするのに、心はどこか遠くにあるみたいで：・私のこの想いは本物なのに、独り占めしたらダメなの？ 私はユウ、あなたが好きなの！」

やはり智子は勇の置かれてる状況に気づいているようだった。また、勇自身既に壊れていることにも気づいてしまっていた。壊れるとは、普通の生活を普通と思えないことである。今日勇が過ごした日常は勇の中の非日常であり、違和感でしかない。淡水魚が海水では生きられないのと同じように生きてる環境が違い過ぎるのだ。智子の行おうとしていたことは勇がウィッチを普通の少女に戻したいと思っていたことの裏返しだったのだ。確かな違い、智子の誤算は普通のウィッチと違い、勇は既に手遅れだと言ふことだけだった。

「ありがとう。初めて俺を好きと言ってくれて。俺を人間として見ようとしてくれて。でも独り占めは許してはくれなそうなんだ」

そう智子を慰めるように優しく説明すると、智子は勇の胸に飛び込んで涙ぐむ。勇は

智子を抱きしめるように手を出そうとして止めた。その空中を迷う手は行き場を求めように智子の後ろ髪を撫でる。智子もそれを受け入れるように勇の胸を借りて温かい嗚咽を勇の胸に投げかけていた。

「智子、俺は戦場に戻るよ。世界が待つてるんだ。俺なんかの力を待つてるんだよ」

「分かつてる・・・分かつてるから・・・じゃあ、これだけは忘れないで。私はここであなたを待つてるんだってことを。あなたを好きでいるんだってことを」

「ああ・・・明日を、生きる意味をくれてありがとう」

勇はこの日のことを決して忘れないでいようと決意した。同時に人としての行為の温かさに触れ、嬉しくもなった。まだまだこの世は捨てたもんじゃないと思える理由を見出したこの帰国は勇の宝物になったのは間違のいない事実だった。

この日を境に勇の体調は回復したとみなされ、欧州行が決定した。派遣地は第506統合戦闘航空団セダン基地となった。これは勇の身分を欲する世界各国の思惑から貴族ウィッチのみで構成された統合戦闘航空団への派遣であり、勇と扶桑海軍はこれを固辞するための所謂便宜上の建前を果たすためのものであった。また、同時期に宮藤の欧州留学も並行して行われることとなったが、勇は海上からではなく空路での別行動と

なった。出立当日は横須賀からではなく厚木飛行場からの世間の目から離れたところからだった。

「赤松大尉、いざとなつたらよろしく頼むよ」

「はっ！山本長官との同席、光栄に思います。空路はお任せください。そして、長官の隣にいる方は？」

山本一二三海軍大将とその副官が搭乗する輸送機に勇が同乗する形となり、緊張が強いられる旅路になることは明らかだった。また、飛行場には見送りの士官や軍関係者が多く見受けられ、おおよそ陸軍の無茶な横やりがあつたことを伺わせた。

「ああ、彼は陸軍から要請されていた赤松大尉の陸海軍協同管理の一環で派遣されてきた、陸軍情報部の小野里少尉だ。彼は明野学校出身でね、野戦、特にゲリラ活動の専門家だ。君とは協力関係を築くため君の周囲に常にいることになる。困つたらいつでも小野里少尉を呼びたまえ」

山本が紹介し終わると、小野里は無言で勇に敬礼してくる。山本が肩をすくめて辟易している姿に副官が申し訳なさそうにしている中、外の景色に見覚えのあるような風貌が勇の目には映っていた。

「あれは……」

「では、出発します！」

エンジン音にかき消され、一瞬視界に映り込んだ陸軍の将校はもう見えなくなってしまう。その将校の軍帽に隠された嫌な笑みをも忘れて。

空路では山本直々に今後の勇の進路についてこんこんと説明される注意事項の日々が続き、勇も辟易している頃、ようやく第一目標であるブリタニアに到着した。ここでは山本と勇は一旦ブリタニアで降り、新しいユニットとして普段勇が使用していた零式艦上戦闘脚二一型から零式艦上戦闘脚五二型への転換が成され、その受領が行われていた。欧州に来てから使用していたものはや旧友とも言える二一型との別れには感傷が



あつたが、新たなユニットに興奮もしていた。しかし、山本は不満げに勇に謝罪をする。

「君ともあろう者が最新式の紫電を使わせてあげられなくて申し訳ない」

「いえ！新しいユニットを頂けただけで私は十分です！」

「そうは言つてもな……他のウィッチは軒並み紫電改やその改良型に転換済みなのに比べれば、君の処遇はまだまだと言ふものだよ。まだ君を恐れている軍人は多いということだ」

勇の処遇が一向に改善されない理由として、勇の絶対的な功績と健在な実力が挙げられた。これらは扶桑の陸海軍共に勇のこれまでに打ち立てた功績や実力に尾ひれがついたものが風評されていることもあり、勇に対して絶対的な恐怖がその戦力環境の低下を招いていた。これは海軍長官である山本をしても覆せないほどの恐怖であり、事実、扶桑に滞在していた際も今になれば小野里少尉だと分かるのだが、常に監視の目を感じていた勇なら十分に理解できることだった。

「では、私は一時ブリタニアで連合軍との会議があるから一旦君とは別行動になるが、宮藤芳佳軍医少尉もヘルウエティア医学校に留学をする予定のため現地でもまた会うでしょう。それまで君は506部隊で広報活動に努めよ」

「了解しました」

「くれぐれも問題は起こすなよ？小野里少尉も勝手に付いていくから心配はいらんよ」

小野里は無言で頷き、山本と別れ、勇は一人ガリアのセダンを目指した。勇はふと506部隊について考えてみた。隊長はロザリー・ド・エムリコート・グリユンネ少佐であり、彼女はベルギガ出身でありながらブリタニア空軍で身を立て、遠縁ながらブリタニア王室の王位継承権を持つ貴族である。ヒスパニア戦役からの古強者でありながら、その貴族の義務を果たす淑女としての印象が強い。勇とこの基地の関係は以外にも古くからの縁がある。実は勇を取り込もうと各国が画策する前からカールスラント皇帝のフリードリヒ三世からカールスラント撤退戦の功労者としてカールスラント名誉少尉として当時表彰者の候補に挙がったことがあったのだ。その縁にかこつけてカールスラント名誉貴族の地位から始まり、ブリタニア、ガリアで貴族位が打診されていた。そのためグリユンネ少佐から直々に506へ招かれていた。勇は貴族と言う高貴な生

まれでは決してないため、今回の勇の各国の部隊訪問とはまた違った訪問ではあるが気が進まない招待であった。

「こちら扶桑海軍、赤松勇大尉。セダン基地応答願います」

『こちら506セダン基地。赤松大尉、お待ちしております』

丁寧な物腰と落ち着いた口調から分かる品の良さが勇の気分をさらに下げさせる。それもそのはずで、勇とグリユンネは旧知の中である。既にグリユンネの表情が目に見えるかぶようであった。

「お出迎え感謝します。お久しぶりです、ロザリー少佐」

「遠路ご苦勞様です、勇大尉」

勇とグリユンネとは下の名前で呼び合う仲で、ある程度には気を許しているのだが、勇はグリユンネの顔色を窺う。するとやはりと言うか取り繕つてはいるが、よく知る者からすればすこぶる悪いのは明白だった。基地の中に案内され、席に着くとグリユンネ自ら紅茶を淹れる所で相変わらず隊長という職に就きながらも押揃われやすい性格に変わりはないと苦笑いすらした。グリユンネもそんな様子を汲み取ったのか、勇の前に紅茶を置くと元気の欠けた笑みを向けてくる。互いに紅茶を一啜りすると、カップが置かれる音が部屋に木霊する。

「さて、まずは勇大尉の体調の回復を祝わせてくださるかしら。もう体調は万全かしら？」

「はい、残念ながら戦場に戻れる程度には」

「あら、残念だなんて。いつから厭戦気分を口にするようになったのかしら」

「これも日頃の教育の賜物でして、そう思われるのでしたらさぞかし上官が良くなかったのでしょうかね」

一見犬猿の仲のような会話だが、これも勇とグリウンネならではの会話術だった。実は勇はグリウンネの顔色から506における立場上の問題が生じていると察していたのだ。つまり先ほど交わした会話の内容も表面上取り繕ったもので、内容がまったく異なるものになっていた。訳すと以下のような会話になっている。

『勇大尉の今の現状は？』

『戦争の参加は認められたという程度です』

『それはどの程度の規模の含意なの？』

『最上位の存在からのお達しとだけ』

回りくどい会話を強いられるほどに506という部隊も政治色の濃厚な部隊であり、その運営は各国の戦後を見据えた勢力図争いの種となり果てているほどだ。その意味でもここで勇があからさまに506への加入を拒絶してしまうと、聞き耳を立てている上の偉い人たちの面子を盛大に潰してしまうことになるのである。そうなると勇への今後の政治的圧力に加え、506のグリウンネの立場すら危うくしてしまいかねない。

め慎重な会話が必要となっていた。

「最近では900機の撃墜を果たして各国の覚えもよろしいようね（過度な戦果は困ります）」

「過分な評価を頂いておりまして、銃後の皆様の献身に頭が下がる思いです（ごめんなさい）」

「謙遜なさらずとも勇大尉の評価は私のところまで轟いていますよ（私に対して各国から圧力がありません）」

「今後は分相応を弁えて世界の平和に献身する次第です（身を引いて目立たないよう努力します）」

高度な話し合いに疲れが見えてきたころ、扉が開き506の戦闘隊長であるハイリナーケ・プリンツエシン・ツー・ザイン・ウイトゲンシュタイン少佐が入室してきたことにより終わりを迎える。

「隊長、お疲れ様じゃ。もう盗聴はされておらん」

「はあ・・・ありがとう、ハイリーンケさん」

「助かった・・・」

ウイトゲンシユタインの通信魔法の応用により、盗聴の回線を割り出し、勇とグリユンネの会話に興味を失った相手側の盗聴回線の切断により膨大な努力の会話は終わりを迎えることができた。勇は肩の力を抜いて天井を向いているとグリユンネは胃薬に手をかけているところだった。

「それにしてもあなたを欲する勢力が最近は憚らないようになってきて、今回もこんな面倒なことになってしまったわ」

「そこまで深刻なのですか?」

「ええ、私がおしあなを506に加入させればブリタニアから506及び私の今後が確約されるほどには」

「それは周り回ってブリタニアの国益になるんですね」

もちろんブリタニアのやろうとしていることは各国も見抜いており、ガリアやカールスラントあたりが盗聴を仕込んでいることは明白だった。勇は自分の各国に与える印象がそこまで壮大なものとは自覚できず、困惑するばかりだった。

「それにしてもどうしてそこまで自分を欲するかが理解できませんね。どうせあと一、二年もすれば私は上がりです。戦後なんか想像できない現状、そこまで躍起になる必要があるのでしょうか？」

「おぬしといい扶桑人は相変わらず抜けておるようじゃな」

ワイトゲンシュタインがツンツンとした態度で勇に話しかけてくる。ワイトゲンシュタインとは初対面だがお姫様らしい佇まいと特徴的な語尾がそれを強調していた。

「こちらにも扶桑のウィッチで黒田という口やかましい中尉がおるが、おぬしと同じで



世情には疎いようだから忠告しておく。今、ネウロイに対して決定的な一撃を、それこそ終戦に繋がる一撃を加えることができる戦力を保持した、またはその功績を成し遂げた国が戦後のイニシアティブを握るのじゃ。おぬしを扶桑だけの所有物にするわけがあるまいて」

「まったく、ヴィルケ中佐の苦勞が伺えるわ・・・」

二人が揃って頭を抱えている現状を目の当たりにして、勇は思ったよりも自分を巡る世界の動きが活発であることを再認識しなければならぬと思わせた。それにしてもミーナとグリユンネとの関係が気になった勇は率直に尋ねてみる。

「ロザリー少佐、ミーナと面識がお有りでしたか？」

「いえ、面識はないのだけれど噂はかねがね。あなたを先の決戦の後擁護した第一人者ですもの。それにあなたもヴィルケ中佐とは気軽にファーストネームで呼び合うようだし」

自分が今しがたミーナを呼び捨ててしまったことを思いだし、口元を隠す。それにしても自分を擁護してくれたのがミーナだったとは知らなかった。自分がミーナにしでかしたことを考えると、とても擁護してもらえない義理はないのだが、やはりミーナは心の読めないやり手の様だったと勇は反省した。

「いえ、失礼しました。上官である者を呼び捨てとは、反省します」

「仲がいいことはいいことだわ。あなたには一人でも多くの理解者が必要なもの」

「まあそうじゃな。確認じゃが、本当におぬしは506に入る気はないんじゃない？」

ウイトゲンシユタインは最後の確認とばかりに勇に詰め寄るが、勇はきっぱりと答えを繰り返す。

「はい、私はしがらみに囚われず世界平和に、ネウロイを倒すことに専念したいと思えます。だから、506には入れません」

「そうか・・・506に入ればまた違った未来も待っていると思うのじゃがな」

ワイトゲンシユタインなりに心配してくれていることが分かったが、勇はそれを受け止めつつ持論を展開する。それは予てより勇がここ506部隊を訪れる目的でもあった。

「私はこの506部隊の体制が嫌いです」

この言葉にワイトゲンシユタインは顔色を暗くさせる。面と向かって自分が所属する部隊を嫌いと言われたら嫌な顔をしないウィッチはいないだろう。しかし、グリユンネは真剣な面持ちで勇の話の先を促す。

「大儀名分は国の今後の未来を明るくする意味では有効でしょう。ですがそれが活用されているとは思えません」

「続けてちようだい」

「はい、貴族という称号は国に所属する権威に取って代わられるお飾りにすぎません。」

あなたがたが活躍すればするほどだれかが憎いと思うのです。それは個人かもしれませんが、国規模のものかもしれません。人の意思とは難解で、それでいて無限大です。私はその事実をこの戦争においてこの目で見てきました」

グリユンネは顎に手をかけて単語一つ一つを咀嚼するように頷いている。対してワイトゲンシュタインは貴族の務めという単語の一括りでしか勇の話を捉えられていないのか、勇の話を静観していた。

「あなたともあろう人が、人やウィツチの力に左右されて来たというの？あなた自身の力によってのみ得た事実ではなく？」

「はい、人とは、人たらしめるものはなにか？ワイトゲンシュタイン少佐は分かりますか？」

「それはもちろん『誇り』じゃ！貴族と言う誇りがわらわをわらわたらしめておる！それは誰にも取って代わることでできないわらわたちだけの務めだからじゃ！」

ワイトゲンシュタインの意気揚々とした回答にグリユンネは驚いたようにかつ懷疑

的な目で事実を捉えようとしていた。勇はそんな二人の対極的な姿を見て話を戻す。

「私は違うと思う」

「なぜじゃ?!」

「『誇り』で戦いには勝てないからです」

「なんじゃと?」

ウイトゲンシュタインは己の信念を侵害されそうなこの現状に怒りを隠しきれない。ウイトゲンシュタイン自身も既に辿り着いているかもしれない答えに勇はゆつくりと事実のみを突き付ける。

「人が人たらしめるものはただ一つだからですよ……それは、『意思』です! 『誇り』とは誰が保証したものですか? あなたの国ですか? あなたの家ですか? それともあなた自身ですか?」

「ぐぬぬ……」

「ハイリーンケさん、一旦落ち着きましょう」

ここまで沈黙を保ってきたグリユンネがワイトゲンシュタインを制する。ワイトゲンシュタインは上がった息を整えるように席に深く着席する。グリユンネは溜息を吐きながら、胃痛を抑えながら、許容量が越えそうになった頭を抱えながら回答を持つ人物の前に鎮座する。もはや20歳前の少年がこの事実にとどり着いたこと自体が驚愕の事実だった。早熟とはよく言った人物の前に、グリユンネは名誉隊長職というものにも噛みついてきそうな強烈な批判をぶってくる勇が狂気そのものに見えた。

「つまりあなたは、506を解散しろと言うの?」

「・・・はい。意思の無き所に変革は訪れません。それに、空に上がれば泥と血と汗に塗れたただのウィッチです。そこになんの違いがあると言うのでしょうか。そんな誇り、私が入るが全機叩き墜としてみせましょう」

「痛烈な意見表明ね。とても今の私たち・・・いえ、私たちが祭り上げた人たちには受け入れること等到底不可能よ」

飛躍した話にウイトゲンシユタインは狼狽し、項垂れるグリウンネに対して勇は嬉々として確信をもって答える。

「イデオロギーなんぞ捨ててしまいなさい。イデオロギーに人が作られてはいけない。人がイデオロギーを作るのだから。506はただの506になればいい。それをできるのはロザリー少佐、あなたではないですか」

「私にはもうそんな力も魔法力も残ってはいません。これからカールスラントを奪還するにしても私一人の力では……」

「ベルリンを見てきましたが、確かに一人では無理でしょう。ですが、これは総力戦です。全軍を上げて事に臨めばこんな茶番にもおさらばです」

悲嘆にくれるグリウンネだったが、勇が放った常識外の一言に一瞬の沈黙が作られた後、飛び起きるように勇の話に食いつく。

「ちよつと待つて!!勇大尉!?あなたもしかしてベルリンに行つたの?!」

「ええ、サントロン基地に寄る前にアフリカの三將軍と賭けをしまして。確かにあそこの戦力は桁違いです」

「桁違いはおぬしの思考じゃろうに・・・」

「本当に、ヴィルケ中佐の気苦労が知れるわ・・・分かりました。斯様な経験者からの証言です。私の方でも上と戦う姿勢は見せましょう」

一連の話は今後グリーンネが公式文書として上と掛け合うことが明言され、勇も自分の役割を果たしたため次の目的地に向かうことにした。見送りにはグリーンネとウイトゲンシュタイン、そしてウイトゲンシュタインについてきた黒田邦佳中尉がやつてきた。

「この後はどこに行くつもりなの?」

「この後は武器等の補給にバストーニュ基地によるつもりです」



「ここ最近は何ウロイの活動がないし、あなたなら心配ないとは思うけど一応は用心してね」

勇は会釈をして発進すると眼下でワイトゲンシュタインが駆け寄ってくるのが見えた。

「おぬしの話、完全に受け入れられるわけではないが！間違いでもないと思うー！」

そう大声で伝えてくるのを勇は笑顔で返す。なにやら態度を軟化させたワイトゲンシュタインというのがよほど珍しかったのか、黒田がワイトゲンシュタインを揶揄っていた。

「あれ、ハイリーンケさんが素直になるなんてどうしちゃったんですか、本当にツンデ

レなんだから〜」

「わらわを変なカテゴリーに分類するな!!!」

案外普通な少女の戯れに勇は少し506の評価を改める。貴族のみの部隊と言えど根は少女なのだと言ふ勝手な自分のカテゴリーに自分自身を論しながらバスターニユ基地に向かう。そういえば宮藤がヘルウェティア医学校にそろそろ着くころだと考えながら旅路を急ぐのだった。しかし、宮藤の折り紙付きの災難との巡り合わせをこの時点で失念していた勇は愚かだとしか言いようがないのだった。

## 籠の中の翼 第五話

506基地を離れ、バスターニユ基地に向かっている最中勇はその異変に気付き始めていた。

「なんだこの通信ノイズは。あくこちら扶桑海軍赤松勇大尉。バスターニユ基地応答願います」

『・・・・・・・・・・』

通信機の故障かとも考えられたが、なんの前触れもなく故障することに不安を覚えていると、勇の前方からはキラキラと光る銀色のものが降ってきた。それを一掴みし、その正体に気づいた勇は溜息しながら撃鉄を起こして障害に備えるのだった。もちろんその障害はすぐにやってきた。勇は分かっていたかのようにビームを避けると中型程度のネウロイに対峙する。

「はあ、宮藤が無事にヘルウエティアに辿り着ければいいのだがな……」

肩を竦めながら勇は練り上げた魔法力を弾丸に込めていく。変形しながら勇を脅威として認識し始めた愚かなネウロイをあしらう。一気に撃墜してしまうと残弾を確認する。

「参ったな、これは戦争だ。バストーニユまでもてばいいが……」

自らフラグを立てていくが心もとない残弾全てに強力な術を組み込むと数機同時に出現したネウロイにやるせない表情で立ち向かっていく。

一方その頃、勇の到着を待つバストーニユ基地では基地司令官のスミス准将が混乱状態に陥っていた。

「どうしてどことも連絡がつかないんだ！赤松大尉からの定時連絡は?!」

「まだです！それに前線拠点からの報告では多数のネウロイの出現を確認！現在応戦中とのことー！」

「まずいぞ！ここには最近配属されたばかりの新兵だらけだと言うのに・・・ええい！非番のものも全員かき集める！でないと戦線の穴が防げなくなるぞ！それとどこでもいからウィッチーズの応援を寄せせー！」

怒号が響く中あちこちを駆け回る兵士たちでござった返した基地内は目の前の戦争に立ち往生していた。

「前線部隊の第13，15，16，21小隊との通信途絶！右翼防衛陣地現在敵大型の塔型ネウロイと交戦中とのこと!!」

「左翼は健在だな?!片翼包囲は出来るか・・・ああ、左翼は新兵の訓練大隊だった！ええい！左翼から人員を回せー！」

「准将閣下！前線部隊との直接回線繋がりました！」

「寄せせつ！こちら司令部！前線の状況は?!」

『こちら機関銃中隊中隊長のノボトニー大尉です！現在、増強大隊規模の敵と交戦中!! 中央の戦車部隊が遅滞戦闘に努めています、敵航空勢力圏では太刀打ちできません! どうか増援を……うがgggggっ!!』

前線部隊の壊滅の知らせに司令部の混乱度は加速度的に増加していく。スミス准将は爪を噛みしめながら頭をフル回転させる。その時、天使の奇跡とでもいふべき通信が入る。

『こちら扶桑海軍赤松大尉、バストーニユ基地応答されたし』

「なっ?! 赤松大尉か?! 助かったぞ! 貴官の到着を心待ちにしていた!」

『こちらからもそちらの状況は伺えます。しかし、武器弾薬が無くなりました。補給をお願いします』

勇と言う圧倒的な戦力を迎えることができたバストーニユ基地の士気は劇的に向上

していた。勇が格納庫に到着した際などは基地司令のスミス自らが迎えに出るほどだった。勇はスミスから現在の詳細を聞くと地図をひったくるように見る。勇は息を整えながら通信障害の正体を語り、無線・有線の通信ができないことを知らせる。

「通信障害の正体はチャフです。塔型のネウロイがそこら中にばらまいています」

「ではその塔型のネウロイを無力化しないことには通信障害は回復しないということか」

「はい、ですがそれ以外にも懸念材料はあります。ここに来るまでに中型の戦闘ネウロイを8機撃墜しましたが、戦闘力は高く、行動半径が限られているように感じました。おそらく巢か大型の母艦型ネウロイがいる可能性があります。急ぎ近隣のウィッチの援軍を呼ぶ必要があると愚考いたします」

その一言でスミスは唖って黙ってしまう。通信障害が引き起こす援軍の要請は困難を極めていた。勇なら航空型のネウロイだけならまだ対処可能だが、それは守るべきものがない場合と陸上戦力を考慮しない場合だからできる芸当であった。そこで勇は通

信を試みるための方策を提案する。

「ではこの基地には偵察機かなにかはありますか？」

「それなら記者が乗ってきたソードフィッシュがあるぞ。もつともその記者は大尉が来てから撮影しようとして躍りになっているようですから、快く貸してくれるでしょう」

「そうですか。そうとなれば急ぎませう。私がソードフィッシュが発進するまでの間、敵の注意を逸らします」

バストーニュ基地から近く、先ほどまで勇も滞在していた506基地に応援を要請することが決定し、勇は急ぎユニットの整備が終わった格納庫に走り込み、武器類を見つけた。バストーニュ基地はあくまで後方基地であり、そこまで武器類に恵まれてはいなかった。しかし、リベリオンの基地というだけあって弾薬の在庫は豊富にあつたため20mm対空連装機関銃をばらして単装機銃として扱うことにした。戦況は依然として逼迫しており、前線部隊からの通信途絶は深刻な問題となっていた。勇は急ぎ発進すると敵が勇を航空戦力として認識したのか、大半の敵の誘因に成功する。



「小型ネウロイが多いな。中央は・・・戦線に穴が開いているな。これでは浸透されて包囲されたら殲滅されかねない。地上戦はあまり心得がないがやるしかあるまい！」

勇は付近の小型ネウロイを片付けると発進したソードフィッシュを見送り、瓦解した中央部隊の支援に当たることにした。前線では兵士が阿鼻叫喚のありさまで今まさに内側から崩壊しかかっていた。

「曹長殿っ！もう駄目です！敵が300mに迫っています！」

「落ち着け新兵っ！今に援軍が来る！それまで耐えれば・・・って、あれは?!」

「曹長殿！ウィッチです！」

「馬鹿野郎！ただのウィッチじゃねーぞ！世界最強のウィッチ、アカマツ大尉だぜ!!」

「よく持ちこたえてくれたな、曹長」

勇を一目見た兵士たちは歓喜の声を上げ、まさに騎兵隊の参上といった様子で出迎えた。勇は冷静に現状を知るために目の前の曹長に指揮官を問いただした。

「曹長、この指揮官はだれだ？」

「はっ！現在、歩兵、機関銃中隊、戦車兵が混在しています、先ほどまでいらした戦車中隊のサミュエルソン大尉は戦死されました」

「じゃあ、次席は誰になる？」

「次席は機関銃中隊のガルモント中尉ですが、最初期の戦闘で戦死されたとの報告を受けています」

「じゃあ、次席の次席は？」

士官級の人物が軒並み払底したとなる現状に項垂れている暇はなく、勇はいたって冷静にこの場の最高級責任者を呼び出した。すると現れたのが緊張にやられかけた新品少尉が現れた。

「わ、私が主計課のウエルネス少尉であります！」

「貴官が現状の最高級士官だ。この部隊をまとめて率いてもらうことになる……はずだが、ええ……曹長、ウエルネス少尉を指揮できるようにサポートしろ」

「はっ！了解であります！いつも通りに、ですな？」

曹長は古参の兵士であろうと思っているが、このような状況において真つ当な受け答えができた時点で立派な兵士なのである。勇は曹長をウエルネス少尉のおつきとして取り立てる。しかし、ここでウエルネス少尉が喚きだす。

「私は主計課なんだっ！戦闘訓練だって3週間しか受けてないんだぞ！」

「少尉、今ここは戦場だ。軍隊とはなにか？階級だ。今、貴官の階級が輝いている限り、貴官はこの部隊を率いる義務がある。さあ、銃を取りたまえ。引き金を引き給え。敵はそこら中にいる。仕事の時間だ」

「ですが大尉……」

「ここ、ここに至りてまだ現を抜かず士官がいたことにそこはかたない怒りが湧いた勇は、少尉の胸倉を掴むとグツと引き寄せる。

「君が今ギャーギャー騒ごうが一向に構わないがな、貴官はリベリオン兵だろ？リベリオン兵は皆志願してここに来たはずだ。なれば君がどのような職責にあらうと戦いがあれば銃を取って戦わねばならない。やり方が分からないなら私が手本を見せてやろう。さあついてこい」

勇がユニットを脱ぎ捨て、刀を抜きだすと地上型ネウロイが群雄割拠する場所に突撃してしまった。それを見た曹長がまるで猫のうなじを摘まむようにウエルネス少尉を運び出す。機関銃の銃座に兵士を着かせ、その指揮官にウエルネス少尉を据えろと勇を支援し始める。

「赤松大尉を支援しろ！撃て撃てえ！」

勇は攻撃を全て掻い潜ると、突出した三体の地上ネウロイの脚部を切り落とす。足場を失った三体は上体を崩し、地面に転げ落ちる。そこを空かさず攻撃を繰り返す連携はようやく部隊としてのまとまりを見せ始めたと言えた。

「どりゃああああ!!手榴弾!!」

手榴弾をネウロイに投げつけると爆炎が轟き、周囲のネウロイの注意が勇に注がれる。一斉に動き出したネウロイの群れに勇は少し厄介な表情を浮かべる。しかし、それも杞憂に終わる。背後から砲撃音がしたと思うと、勇の前のネウロイに次々に着弾し始める。

『赤松大尉!!君のおかげでこちらもなんとか反撃体勢が整えられたぞ!砲兵隊の参上だ!大尉も巻き込まれないように注意されたし!』

リベリオンの豊富な物量たるや凄まじいもので発射間隔が大変短く、かつ勇がまとめた兵士たちの立ち直りが上手くいき、着弾観測まで行わる始末だった。

「こちらウエルネス少尉！全弾ネウロイに着弾！効力射を要請されたし!!!」

案外ウエルネス少尉を見くびっていたようだと、勇は少尉の評価を微修正する。そして、勇も己の仕事をこなし始める。少尉の座標修正の通信を拾い、その砲撃の合間を縫ってネウロイを土煙の中から攻撃していく。そして、そんな獅子奮迅の姿を撮影する者がいた。

「これは！あの英雄の赤松勇大尉の白兵戦シーンだ！こんなスクープ写真、ピューリッツァー賞ものだぞ！これは撮らねば！」

もはや普通の兵士よりも度胸があるのかもかもしれない記者の勇を映した写真は、後の戦史にて世間を騒がせることになるが、それはまた別の話である。その頃、ソードフィッシュが506基地に到着することに成功し、バスターニユ基地の危機を知った506部隊は直ぐに出撃に取り掛かった。

「本当に赤松大尉は危険の中にいるようなお人じゃ」

「虎穴に入らばお給金を得ずつてやつですよ、ハイリーンケさん！」  
「間違っておるわ！」

506が総出で出撃を開始し、ようやく戦況が動き出した中、勇の戦闘も佳境に差し掛かっていった。

『赤松大尉、砲兵隊の配置が敵にバレた！急ぎ、砲兵陣地を防衛してくれ！』

「了解！ウエルネス少尉！敵の出鼻は挫いた！敵の突出部を片翼包囲しろ！」  
「ああもう！私の武器はタイプライターであつて銃剣ではないんですよ！」  
「ペンは剣よりも強しと言うだろ。銃がない者はシャベルを、シャベルもない者は棒を持って！ここは我らが陣地だ！我々が戦うのだ！」

ウエルネス少尉の愚痴が下士官や兵士にまで伝播したのか、兵士は皆苦笑いで戦場に向かう。戦意は未だに衰えないことを感じた勇はユニットを探すと目の前の光景が、惨状に変わる。勇のユニットを守るように数人が倒れていた。倒れていたというのはオブラートに包んだ表現であり、本当は原型も留めない肉塊が散らばっていたのだ。勇は己の驕りを嘯みしめ空に駆ける。空には既に小型ネウロイが数機侵入しており、勇は砲兵陣地を守るように撃墜していく。

「おお！また撃墜したぞ！さすがは赤松大尉だ！」

「司令！突然中央部隊の先方部隊との通信が途絶しました！」

「何が起きた！」



粗方制空権を確保した頃、先ほどまで勇がいた地点で大きな粉塵が上がる。勇は急いでその地点に戻ると、地上付近の極低高度に浮遊するようにネウロイが群れを成していた。

「ウエルネス少尉！少尉はいるか!？」

大きな声で呼びかけてもなんの返事もない。勇の心が急に冷たくなりガタガタと動機がし出した。勇は目じりをキツと釣り上げると、急降下で辺り一面を射撃する。的確にかつ猛烈に射撃していると聞き慣れた声が勇の通信機に声を吹き込む。

『赤松大尉!!射撃を止めてください!我々に当たります!』

「なにつ!?どこにいるんだ?!」

「下です！タコつぼですつ！」

よく見ると、人がすつぽりと入る深さの穴が多数あり、その中に身を寄せ合つて隠れている多数の兵士が確認できた。機関銃陣地跡と見られるタコつぼに生存者が見られたことに安堵した勇は、現在の劣勢の原因を探し出す。先ほどの地表を舐めるように這つていたネウロイは後退しつつあり、その集団はある穴に入り込んでいた。

「俺が敵の巣穴に入つて、元を絶つ」

『大尉！いくら何でも危険です！』

「こちらはこちらで何とかする！貴官は友軍をかき集め、反撃の準備をしろ！」

勇は少しはまともな士官がいたものだと思感しながら、立て直しを図る。勇だけならば損害度外視で突撃もできるが、基地を防衛しながらとなると友軍への損害は極力避けたい方針を取らざるを得なかった。それは勇自身が身を削ることだった。

「やるしかないか……さていかにも怪しい穴に自分から潜ることになるとは。たしかアインの言い伝えでは自分の冬眠用の洞穴に入った者を殺さないと言う熊の伝説があったが本当かどうか確かめてみるか」

勇は昔の扶桑のアイヌ文化の知識を照らし合わせ、己の不運を少しでも勝算のあるものに寄せようとしていた。そして、意を決してユニットをまたもや脱ぎ捨てネウロイが出入りする穴に入って行ってしまった。同時刻に506部隊も辛くもこの地に進出しており、バスターニユ基地と連絡を取り始めていた。

「こちら506統合戦闘航空団、ロザリー少佐。バスターニユ基地、大丈夫ですか?!」  
『おお!!こちらバスターニユ基地司令のスミス准将だ!よく来てくれた!赤松大尉のおかげでこちらは何とか持ちこたえているが、先ほどから赤松大尉と連絡が取れないのだ!』

「はあ、やっぱりあの人渦中にあるのよ……」

そんな悲嘆にくれる中、黒田中尉が勇を発見する。そして、その常識外れの行動を見て目を擦っているジエスチャーをウイトゲンシユタインに見られる。

「黒田、さきほどからどうした？野生の赤松大尉でも見たのか？」

「野生と言うか・・・その、あれが、いやそんなはずは・・・」

「ええい、はつきり申せ！」

ウイトゲンシユタインが黒田が見ていた方を見ると、今まさに勇がネウロイの本拠地に入ろうとしているところだった。

「あの穴はなじや・・・」

「まさか敵の中枢じゃないですよね？」

「さすがの勇大尉と言えどそこまで馬鹿な行動は・・・」

グリユンネがそう言いかけた直後、先ほど勇が入って行った穴が振動を始め、遂には超大型母艦型のネウロイが地中から姿を現した。轟音を悲鳴のように響かせながら超

大型ネウロイは右に左に揺れて内部からの攻撃に苦しんでいた。

「あれが世界の英雄ですか・・・これは信じざるを得ないですね」

「本物の大馬鹿じゃ・・・」

「はあ、お腹痛い・・・そうも言つてられないわね。みんな、勇大尉に続くわよ！攻撃開始！」

グリウンネの一声と勇の蛮勇とも取れる行動に感化されたのか、総員が一致団結してネウロイに向かう。一斉攻撃は母艦型のネウロイにとつても不意の一撃だったのか、射出穴から多数のネウロイを射出し始めた。しかし、ある一つの射出穴からはネウロイが出ずに黒煙が吹いていた。

「まさかあの穴の中にいるわけではあるまいな・・・」

「ハイリーンケさん、諦めて。火の無いところに煙は立たないのよ」

もはや無表情で戦闘を続けている黒田他の隊員は勇の性質を早くも理解したよう

だった。グリユンネたちも諦めて攻撃を続けていると、射出穴から勇が落ちてきた。

「うわっ！」

「あやつ飛び降りおったぞ・・・」

「早く助けてあげて！」

黒田とウイトゲンシユタインが二人で落ちた勇を空中で受けとめると文句の一つでも言わんとばかりに詰め寄る。

「赤松さん！こんな無茶して！あとでお給金請求しますからね！」

「本当じゃ！特別手当でももらわなければ、おぬしと心中なんぞまっぴらじゃ！」

「何言ってるんだ！俺はお前らが撃ち場所も考えずバカスカ打つから振り落とされたんだ！」

もはや勇の言っている正当性も霞む中、敵の航空勢力が刻一刻と増強されている時勢

を見極め、大人しく勇を地上のユニットのある場所まで運ぶ。

「おぬしは少しは加減というものを知れ！獅子身中の虫とはよく言ったものじゃ！」

「扶桑では昔から危険の中が一番安全と言われてるんだ！」

「うげつ、薩摩隼人でもそんなこと言わないと思いますよ……」

勇は少しの口問答の時間も惜しいとばかりに20m機銃を拾う。すると、先ほどの曹長たちが走り寄ってくる。

「おいお前ら！早く赤松大尉に弾薬を届けるんだ！」

「曹長、助かる。ところでウエルネス少尉は見えないが？」

「……いえ、少し前に立派な戦死を遂げられました」

「そうか……」

勇はもはや古くからの戦友を失った気持ちになった。激戦においては珍しくもない

が、ウィッチの部隊にいとあまり感じない損耗と言う現実は鉛のように勇の背中の中のしかかった。これまでも仲間や戦友を幾人も失ったが、自分が引つ張りだした人物がいなくなるのは勇の眉間に皺を増やさせた。勇は一刻も早くの事態の收拾をするべく、最適な行動に出る。

「おつ、赤松大尉の空戦か。お手並み拝見と・・・つてなんじゃあれは?!」

ハイリーンケが見た光景はもはや一方的なワンサイドゲームだった。シールドと攻撃をうまく使い分け、的確に敵のコアにまるで敵自ら吸い込まれるように撃たれに行く様は圧巻だった。一機あたり平均10発未満で撃墜していく光景に506部隊は目を疑うようだった。

「本当に援護の必要なんてあったのかしら・・・」

「あるぞー!」



勇がグリユンネの独り言に反応すると、一刃の下に母艦型のネウロイの中央部を切り裂いた。すると母艦型のネウロイは大きな悲鳴を晒しながらコアを露わにした。周りがあり得ない光景に呆然としてみると、いきなりワイトゲンシユタインと黒田の襟首を掴み引つ張って行ってしまった。

「うげっ！なにするんですか?!」

「お前らに協力してもらいたい！俺がコアまでサポートするからお前らでコアを潰せ！」

「サポートって・・・あの数のネウロイの中をか?!」

眼前にはコアを叩かせまいと必死に小型ネウロイが陣形を成していた。その数に恐怖する二人を前に勇は有言実行とばかりに攻撃を仕掛ける。

「俺の後ろにいる。スリップするぞ！」

「スリッパするのかわ？」

「スリッパストリームですね！」

前方を行く者が後方にいる者の風圧を引き受けることで、後ろにいる者を無駄に消耗させない戦法であるが、勇はどんどん前への歩みを止めない。

「さすがにあの数を突破は無理じゃ！一旦体勢を整えて・・・」

「うるさいぞ少佐！今から数を減らす！少佐の武器を貸せっ！」

「わらわの武器がっ！！」

自分より階級の上の者を叱りつけた上に、武器まで強奪されるといふ非常識にウイトゲンシユタインは呆気にと取られていると、さらに押し黙る状況が勇の手によって作り出される。なんと、まだ1000mも離れている小型ネウロイを一撃で連続3機も撃墜して見せた。

「もう無茶苦茶じゃ！！」

「固まってくれるなんてなんて親切な敵なんだ！撃ってくれと言っていているようなものだ！」

「この距離で当てるなんて、B部隊のジーナ中佐でも至難の業ですよ・・・」

勇の狙撃はその後も続き、あつという間に道と言えるような間隙が出来上がってしまった。その間をすり抜けると二人の背中を勢いよく押す。

「うぐっ！」

「うわっ！」

「二人とも頼んだぞ！」

母艦型ネウロイに叩きつけるように到着する二人の見た光景は凄まじいものだった。突き飛ばした地点で勇は急停止したかと思うと、その場で辺り一面に榴弾をばら撒き、爆風による膜を作り上げた。その光景を見てワイトゲンシュタインと黒田はクスリと笑い、互いを見つめると仕事にかかる。

「ははは！これは私たちもお仕事しなきゃですね！」

「まったくじゃ、わらわが思い描く貴族の務めとやらは……ええい、ままよ！」

二人による攻撃により、母艦型の超大型ネウロイは破壊された。母艦が破壊されたことにより、辺り一面の敵も消え去り、通信障害も回復した。506と勇が敵を撃破したのと同時刻、501統合戦闘航空団も同じように母艦型のネウロイを撃破したとの報告に、一同は歓喜した。全員が疲労困憊となり、一度休息を取る中、兵士たちが勇に駆け寄る。

「赤松大尉！」

「曹長か、よく生き残ったな」

「ええ、大尉のおかげです。先ほどの戦闘はお見事でした。ウィッチとの協同作戦はまさに祝福でした」

祝福の言葉に勇は疲れたような気持になるが、勇はきちんと軍人の務めを果たそうとする。

「祝福はこの戦いで死んでいった者たちにしてくれ。ウエルネス少尉には、『大尉』の家族には今後幸せだけが送られることを強く望む」

「はい、多くを失いましたが赤松大尉とともにあれたことをきつと冥府の土産にできると思います」

「ヴァルハラで会おう」

急造の十字架の前で勇は黙とうをする。兵士の弔いにはなんとも華がないが、勇と共に戦えたことが誇りとなるのなら、勇はその誇りに適う人間であらねばならないと、自分自身に呪いをかける。目を開けると506部隊が一堂に会していた。

「勇大尉、今回の戦いご苦労様です。欧州各地で戦闘が行われたとのことですよ」

「では、ロザリー少佐たちはこのあとも戦いに向かわれるのですかね？」

グリユンネは優しく微笑む。それは506の基地で交わしたようなものではなく、清い笑顔だった。

「まったく、あなたと言う人は無茶苦茶です。あなたのような人は例えあなたが貴族と言われようと私の部隊には招待しません」

それは勇を政治的しがらみから解放するというグリユンネなりの心遣いだった。だからこそ勇も清い笑顔で返すことにする。

「淑女に嫌われては仕方ありませんな」

「ええ嫌いです。だから、今後はきちんとあなたと向き合う人のことはよく見てあげてください」

「それはどういいうことですか？」

勇はあまり会得いかない様子が面白かったのか、グリユンネは淑女らしく柔らかい笑みを浮かべる。そして、スツと気持ちを切り替えると話を軍務に切り替える。

「赤松勇大尉、私、506統合戦闘航空団隊長ロザリー・グリユンネ少佐が司令部の命令を伝えます」

「はいー」

「赤松勇大尉は、先ほど結成された501統合戦闘航空団のミーナ中佐の命により、臨時501隊員として招集されました。よって、501に至急合流し現地で新たな任務を受領されたし」

「拝命します！」

「・・・元気でね」

「ロザリー少佐も」

ロザリーと握手を交わすと、506統合戦闘航空団は新たな任務へと飛び立ってい

く。その背中も、幾人の希望を乗せて輝いていた。もはや彼女たちの横顔には貴族などと言った小奇麗さは微塵も感じられなかった。勇はその翼を見送ると、501へ向かって飛び立つ。バスター・ニュー基地にはいくつもの十字架が勇に手を振っているように揺らめいているのだった。

勇は501がいると連絡があつたベルギガ王国に到着すると、驚きの光景が勇を襲つていた。それはストライカーユニットを履いた、もう飛ぶことは出来ないはずの宮藤芳佳の姿があつたからだつた。

「宮藤っ！お前、魔法力が無くなつたんじゃ……」

「はいっ！またみんなを守れます！」

明るい笑顔で齎される事実にも勇は笑いが抑えられなかった。それは昔自分が成し遂げた魔法力の復活であり、自分とは異なる状況で発現したことによる意趣返しに嗤つたのではなく、宮藤の純粋な意思に世界が報いた事実を嗤つたのだつた。自分と宮藤の間



にどんな違いがあるのかはわからなかったが、軍人でもなかった普通の少女である宮藤が今自分と同じ立ち位置にいることが、勇には嬉しかったのかもしれないし、悔しかったのかもしれない。しかし、確かなこととして宮藤は再び翼を手に入れ、空にいられるという、宮藤と空がよく似合うのに対照的な自分がそこまで暗く見えなかったということだった。

「ハハハハハ！ そうかそうか．．．宮藤、お前ならきつと、そう、きつと．．．」

「えくなんですか勇さん？」

「いや、お前はやつぱり空が似合うって思ったのさ」

「もちろんだ！ 宮藤は一番空が似合う！」

お姉さん気取りで自慢げなバルクホルンが興奮気味に腕を組んで鼻息を荒くしている。いつものようにハルトマンに押搦われているが、戦闘の直後なのか皆等しく疲労の色が見えていた。

「まあなんにせよ、これで501再結成だ！ユウも帰ってきてくれて嬉しいぞ！」

「ああ、ただいま」

「じゃあ、今後の編成などについては一度サントロン基地に戻ってからにしましょう。宮藤さんはウィッチに戻ったとはいえ、ヘルウエティアに向かわないといけないしね」

「あつそうでした！」

「じゃあユウ、あなたは運転よ」

「へい・・・」

分かっていましたとばかりに勇をこき使うミーナに促され運転席に座る。他の隊員はトラックに乗るなりスヤスヤと寝息が聞こえてきてしまった。勇はそんな理不尽に口をへの字に曲げながら運転する。夕暮れの道に心を和ませていると、助手席に座るミーナが話しかけてきた。

「みんな疲れていたのね。トゥルーデも寝てしまったわ」

「今回はどこも激戦だったんだな。バストーニユでも506が頑張っていたしな」

「グリユンネ少佐の部隊ね。あつちに派遣されていたのね」

「扶桑から欧州に戻ってきてすぐこれだ。まったくネウロイには参ったよ」

勇は本当にいろんな意味で気苦労が絶えなかったため大きくため息をついてみせた。  
ミーナはそんなおじさん臭い勇を見てクスリと笑う。

「うふふ、あなたは宮藤さんと同じくらいネウロイに好かれているからね」

「好かれた覚えはないぞ！嫌いだからぶっ飛ばしてるんだ」

「じゃあグリユンネ少佐なんかにはユウの戦闘は毒だったんじゃない？」

ミーナと同じくらい気苦労の絶えないグリユンネをミーナに重ねてしまい、勇はフツと噴き出す。それを見たミーナは不機嫌そうに笑った理由を聞いたです。

「グリユンネ少佐とはだいぶ仲良くやったみたいね」

「ミーナと違って優しいからな」

「なんですって？」

明らかに地雷を踏みぬいた勇のハンドルを握る手は強張る。しかし、鉄拳制裁は飛んでこなく、恐る恐るミーナを見ると先ほどまでの威勢はどこに消えたのかと言うほどに意気消沈した姿があった。

「すまん、冗談だったんだが傷つけてしまったなら謝る」

「・・・違うわよ」

「じゃあ、なんだって言うんだ」

ミーナのコロコロ移ろう感情に勇の推察は迷子に陥る。前方に気を付けながら運転

をしつつミーナの様子を窺っていると、不意に腕の裾を掴まれる感触が走る。ミーナの方をちらりと見ると、潤んだ瞳が勇を捉えていた。

「泣くほどだったか?! す、すまない!」

勇は突然の涙にパニックに陥る。運転に集中力を割かなければいけない状態での二正面作戦は正直勘弁願いたいものがあつたが、さすがに潤んだ瞳をほつたらかすほど勇も落ちぶれてはいなかった。あたふたしている勇を他所に、ミーナは反対方向を向いて涙ぐんだ顔を見せないようにして、涙を拭くともう一度勇に向き直る。

「ごめんなさい、なんでもないの」

「なんでもないことはないだろ」

「違うの・・・ごめんなさいと言うのは本当なの」

要領を得ない言葉に勇は一旦身を正して、聞く姿勢に徹する。今はミーナが話す場面だと認識してしつかり話を聞くことにする。

「私のせいで怪我をしてしまったし・・・」

「ああ、あのことが。それなら気にするな。もう完全に治ったぞ」

「・・・そう、なんだけど」

以前、ミーナと協働して敵を撃退した時、『不運な事故』により勇は重傷を負って扶桑に帰国している。そのことを中心に謝罪しているのではなさそうなニュアンスから、いつもと違った雰囲気を感じ取る。ミーナは俯いたまま言葉に詰まっているようだった。

「・・・駄目ね私、いろいろ理屈をつけないと話せもしないだなんて」

ミーナの弱い部分を見て、勇は咄嗟に伸ばす。それはサントロンでも行われた位置に伸ばされていた。

「えっ!?!」

「ミーナはダメなんかじゃない。いつも俺を見てくれたし、俺の帰る場所を作ってくれた。そんな大事な仲間を駄目というやつは俺が駄目にしてやる」

わしやわしやと撫でられる頭はされるがままに撫でられる。以前にも感じた熱がミーナの中で蘇る。その熱はそれまでミーナの喉で堰止めていた言葉を解かしてしま

「あなたと一緒にいてくれないの？」  
「え・・・」

撫でる手を瞬時に凍らせ、それと同時に熱に浮かされた少女の熱い視線が勇を捉えて離さない。勇は生唾を飲み込めずに四苦八苦していると、ミーナの押し込まれていた言葉が濁流の如く流れ出てくる。

「私はきつとあなたが私たちの下を離れて行ってしまうと予想してる・・・それこそ世界に求められてあちこちへと」

勇は扶桑の時にも同じ光景を見たような気がして、この後出てくる言葉に身構えてしまふ。だが、ミーナは止まらない。

「あなたが私にくれた希望のように、私はあなたと生まれ変わった世界を見てみたい。それはあなたの隣で見ていたい・・・」



勇の心は常に最大限の警笛を鳴らしていたが、今現在、仲間の言葉を遮るような術を持つていかなかったし、遮ることも憚られるような状況に遭遇したこともなかった。それは失礼にもほどがある行為であり、勇には聞かずにはいられない義務だったからこそ、勇はミーナの言葉を黙って待った。

「あなたは501に来た時から何かにとり憑かれたように必死にだった。でも、宮藤さんやトウルルーデがいて明るく変わったわ。生きていてくれた。その中で苦しむ私に手を差し伸べてくれたのは、世界を変えられる希望を見せてくれたのは……あなた、ユウだったわ」

自分がミーナにしてきた仕打ちは、自分の野望のためにウィツチを活用し、陥れようとした悪意に満ちたものであり、ミーナの言う存在と自分が結びつかなかった。だが、ミーナにとって勇の強さやその中にある意思には、ミーナがまだ掴むことのできない未来があることも確かだった。

「私にはそれだけで十分だった……なのに、どうしてこんな気持ちになっちゃったのかしら……」

再び流れ出る雫は今度こそ、頬を伝って流れ落ちる。行き場のない気持ちの結晶が溢れて止まらない。西日が差し込む車窓がその雫を強調するかの様だった。

「私、あなたのことが好きだった。いいえ、今もきつと好き。これからも……ただ、ここに居てほしい。いつもみたく我儘だつていい！あなたとなら変わる！変えられるの！」

ミーナは常に仲間のことを考えて行動することのできる優秀な指揮官である。そんな彼女が何を求め、何を欲し、何を見よとしているのか、勇には分かっていた。だが、果たしてミーナの望む勇はそこまで崇高なのだろうか。崇高と言う言葉ですら憚られる

なにかには、決して踏み込んではいけない一線があった。勇は口には出さないが、この時代ではまだ成熟していない、将来定義づけられるであろう『愛』という言葉だけは、勇の今後の人生には介在できない不可分の領域であった。特に、歴戦の仲間であるミーナとだけは、勇は許すことは出来なかつた。それは大いなる勘違いと言えればどれほど楽だろうか分からないが、適切な言葉で言い表せない稚拙な自分を呪つた。

「ミーナ……それだけはダメなんだ。ミーナのは好きだ。でもそれは恋人や異性としてではないんだ。分かるな？」

返事は分かり切つていたのか、潤んだ瞳に大きな落胆の色は窺えなかつた。勇は夕日に染まるミーナの燃えるような瞳をなだめるように、ミーナを引き寄せる。

「すまないミーナ、俺は決してお前を忘れない。それだけを覚えていてほしいんだ」  
「ずるいわ……それじゃあ、あなたの勝ち逃げじゃない」

「ごめんな」

「……あなたの謝罪は安っぽいのよ」

「悪い……」

「もう、また……」

再び浮かぶ大粒の涙は今度は零れ落ちることはなかった。それはいつか勇に助けられた際に巻いてあげたハンカチだった。あげたつもりが未だに持っていたことにまともや腹が立つが、それがどうしても嬉しく、勇の使う仄かな石鹸の香りがミーナの心の荒波を漂う。

「疲れただろ、基地まで寝てろよ」

「ええ……じゃあ今だけ、今だけ肩を貸して……」

いつの間にか大きくなった肩幅の彼は、顔を隠すように軍帽を深くかぶってしまつて

いた。熱が過ぎ去り、ぼおとした頭はその肩に吸い込まれるようにもたれ掛かっていた。

「ああ、おやすみ。なあ、覚えていてくれよ。俺たちはこの空で繋がっているんだってことを」

「そんなこと、分かっているわよ……ううくっ……」

夕日が沈むように、二人の運転席は静まり返った。勇は今しがた寝息が聞こえる肩の温もりをこう振り返ってみた。グリコンネに言われた「あなたと向き合う人のことをよく見てあげてください」という言葉の意味をきちんと理解できなかった自分、愚かな自分に呟いた。

「くそつたれ」

501の隊員を基地に降ろした後、勇は正式に臨時501隊員の任を解かれ、山本の下に召喚されることになった。

## 籠の中の翼 第六話

501を去った勇は数日後、ガリア共和国の軍港があるブレスト軍港の飛行場に行った。ここにはブリタニアで別れた山本が待っていた。本来、ヘルウエティアにて集合予定だったがネウロイの反抗作戦が突発的に起きてしまったため、急遽ガリアのブレストに集合となった。しかし、この集合地点は他の意味でもよい集合地点となっていた。

「山本長官、赤松勇大尉ただいま戻りました」

「うむ、よく戻った・・・と言いたいところだが、説明してもらおうか。私はくれぐれも問題は起こすなと言ったはずだが？」

山本は勇のネウロイの一大反抗作戦に大々的に関与してしまったことを、バスターニユ基地の記者が撮影した写真から情報を知り得ていた。

「この写真を見た時は思わず頭を抱えたよ。これをリベリオンなんぞに送られる前で本当によかった。検閲のために一度ブリタニアに送られてきた写真を現地の指揮官がオツたまげながら見ているところを目撃していなければ、君の名声と恐怖をまたもや世に広めてしまうところだったよ」

山本は心底疲れたように情報の拡散を阻止できたことを喜んでいようであった。対して勇は、自分のせいではないことを責められて文句の一つでも言いたい気分だった。

「問題を起こしたのはネウロイでありまして・・・」

「なにか言ったかね？」

「いいえ、なんでもありません！」

「まあいい。君はこれから私の指揮下で働いてもらう。好き勝手はできんよ?」



山本は勇を飼い殺すつもりで勇を手元に置くことを明言した。扶桑の頃の言い分と少し違うことから、おそらくブリタニアの会議ではよほど勇の処遇で揉めたことが勇にも伝わった。つまり、勇には時間も世間の我慢もないということだ。

「君は最強の戦力だが、矛ではなく盾として使わせてもらおう。ここぞという時に適材適所で君の力を発揮すれば、きっと世間からは恐怖の対象としては見られまい。つまりは殿軍、囷、カモというわけだ。どうだい？君好みだろうか？」

山本の嫌らしい笑みを見て勇は背筋をゾクゾクさせる。最初に遭った時も感じた、山本のこういつた狂気じみた潜在的な威圧感と言うのは、山本の圧倒的な支配力にあると分かってきた。さらに、山本の有能な指揮官ぶりは如何なく発揮される。

「もちろん君だけに負わせると、それはそれで厄介なことになりそうなのも今回嫌と言

うほどわかった。そこで……これまではガリアの防空を担っていた元343空の第二中隊も付ける！君の古巣だ。さぞかし君の輝きを眩ませてくれることだろうよ」

「それって！もしかしてっ?！」

「おう！久しぶりだな！勇!!」

振り返るとそこには懐かしい顔ぶれが揃っていた。かつて勇が戦闘機のパイロットだった頃、戦闘機やパイロットとしてのいろはを叩きこんだ悪友、赤松貞明大尉とその仲間たちが立っていた。彼らはヒスパニアに向かい、勇がサーレマー島に派遣されてから一度も会うことが叶わなかった旧友がそこにはいた。

「松さん……みんな！」

「よう、勇！大きくなりやがったな！」

「勇くん！大尉昇進おめでとう！」

「勇大尉！お噂はかねがね！」

「久しぶりじゃのう……生きておったか！」

赤松貞明と羽藤一志、太田敏夫、高塚寅一の四人が勇と久々の邂逅を果たした。勇にとつてもはや一番の同郷の旧友と言つていい四人は元気に地に足をつけて屹立している現実に、勇は山本がいることも忘れて駆け寄つていた。

「勇、よく生き残つた。林や第一中隊は本当に残念だつた」

「はい、先日扶桑に帰国してみんなを祖国に戻してきました」

「そうか、やつらも靖国に行けたつてもんだ……」

司令である源田も、大隊長である林も、戦友である藤野たちも周りが全ていなくなつた勇だったが、この瞬間ばかりは心強く、そして温かくなつた。赤松は相変わらずのがたいで、一層大きくなつたような気さえした。

「まったく、俺たちやヒスパニアに着いて早々に501がガリアを開放しちまってよ、すぐにガリアに転戦したんだが司令が逝っちまってからは本当にこき使われたぜ！だが、第二中隊は一名の損失もなく！ガリアではちよつとした有名人部隊になったぞ！」

赤松たちの部隊はガリアの防空を担い、その屈指の練度から欧州の部隊からも一目置かれる存在となっており、特に勇の目の前にいる四人は各小隊長であり、全員が叙勲されるほどの古強者である。そんな嬉しい旧友の知らせに勇は熱くなる。山本はやれやれと言った様子で時間の到達を告げ、部隊の運用責任者として統括する。

「諸君、感動の再会もいいが今の君たちの任務は、この赤松勇大尉の目隠し役だ。今や、君たちが知る赤松勇大尉はウィツチだ。それも世界屈指の畏れられる存在となった。君たちほどの名声を持つ者たちならばと思つての抜擢だ。しっかり働いてくれたまえ」「まったく、あの『軍神』山本一二三長官直々の指令だと思つていたら、粹なことしやる！」

今回、赤松貞明ら四人がベレストに集合している理由としては、山本の匿名による召集であり、旧知の仲で組ませる連用効果を狙つての運用を山本が考えたからであつた。さらに、山本は現地部隊激励と称して欧州を視察するという名目で動いているため、本来このような個人の裁量で部隊を集めること等あつてはなならないことなのだ。そして、山本のこのような独断専行的な判断がこれまでいくつもの劣勢を救つてきたこともあり、もはや元帥府に列せられることも確実なほどの存在である。そんな存在でもどうにもならない存在が今しがた現れる。

「はあ、やはり君は現れるか．．．小野里少尉」

「はっ、ただいま赤松勇大尉と合流いたしました」

「まったく嘘くさい。これまでもずっと赤松大尉を尾行していたくせに」

勇は小野里の気配は常に感じていたが、初めて声を聴いた。バスターニユにいるときも506にいるときも遠くから監視するように、あるいは他の兵士に混じるように巧妙

に勇に付いてきていた。本当にこの小野里という人物は何者なのだろうと思うが、小野里は無機物顔でその場を微動だにしなかった。存在感があるようで妙に霞んでしまうような謎の存在に不気味さを感じていたが、なにも危害を加えてこないところを見るに安全だと思ふことにした。

「さて、それでは新たな任地に向かうとしよう。今度はベルギガ王国のアントウエルペンだ」

「人類の一大犯行作戦が遂に行われるのですね！」

勇も人類による一大反抗作戦が行われることに興奮を隠せなかった。ベルギガ王国のアントウエルペンには自然の要衝がいくつも存在し、入り組んだ入江は守に易く、攻めるに難い要塞だった。そんな物資集積拠点を中心に、反抗作戦の後詰めを担うことが目的だった。

「では我らも向かうとしようか。輸送機に私と乗りたい者はいるかね？」

山本の人の好い笑顔にほだされ、赤松貞明らは次々に手を挙げて輸送機に乗り込んでいった。しかし、その場で動かずにいる小野里に妙なものを感じ、勇は問いかける。

「小野里少尉は乗らないのか？」

「……自分は遠慮します」

尾行はするくせに勇とは行動を共にすることはないのかと、面倒な奴だと思っていると、小野里の移動手段に疑問が湧いて来る。どうやって航空ウィッチである勇に追従することができるのか気になってきた。

「少尉はどうやって来るんだ？」

「……海路で。空はごめんです」

高所恐怖症なのだろうかと変な所で臆病なのだと、ますますこの小野里という少女が分からなくなつた。しかし、そんな疑問が湧く中、太田らに早く輸送機に乗るように促される。

「今行きます！じゃあ、小野里少尉も気を付けるように」

「……」

小野里は最後までぶつきらぼうで仏頂面なのは変わらず、興味を失つた勇は輸送機に乗り込む。機内は盛り上がり、赤松貞明が大風呂敷を広げて、自分の功績を山本に語っていた。懐かしい空気に小野里の冷たい目線を忘れて機は空を飛び始めた。残された小野里は耳元に手を近づけて、空気に溶け込むような色合いの魔導針を発現させる。



「こちら小野里……予定通り、山本長官及び赤松勇大尉が搭乗した輸送機が離陸しました……はい、全ては閣下のシナリオ通りに」

小野里の声は風に流されてどこに届くことなく、不穏な動きは行動を開始する。

一方機内では、およそブエスト軍港からアントウエルペン港まで直線距離500キロの少しの距離で、安全圏内を飛行する。巡航速度がおよそ450km/hの一式陸攻は乗員が7〜8名とされているため、勇を含めて既に6人は若干狭い機内に着席していた。また、操縦手と通信員が常駐してはいるが、副操縦手にじゃんけんで負けた太田が文句をぶつくさ言いながら赤松貞明の話と山本の話に勇を交えた話を聞きながら操縦していた。

「君たちの機体は雷電に換装されたのか。雷電はどうだい？」

「率直に言わせてもらいますが、いい機体ですよ！だけでももう少し弾があればもつとい

いのですがねー!」

「はははっ! 確かに雷電はずんぐりとしている局地戦闘機だからね。その分武装は強力  
で20mmが四門付いているから、携行弾薬が少なくなるのは問題だね」

「山本長官は話が分かるなあ!!」

終始明るく話が続き、次第に興味が勇の戦闘の話に移っていく。

「勇はなんでも900機越えの撃墜数なんだそうじゃねーか! ずるいぞ!」

「ずるいと言われましても・・・ただ遊撃任務だったというのと、常に最前線にいたから  
偶々戦闘機会が多かったと言うだけですよ」

「赤松君はそう言うけどねえ、君の方から危険に飛び込んでいるじゃないか」

「お前のユニット、零戦だろ? よくもまあこんな貧弱な防備で被弾しないもんだなあ」

最近ようやくゼロ戦の初期型から改良型に換装したが、既に零戦は「駿馬ようやく老

いる」と言われるほどには時代遅れな機体になりつつあった。また、欧州の戦いでは一撃離脱が主な戦法として確立しており、火力・防御・上昇力共に劣る零戦を使用する者は少なりつつあることも事実であった。勇はそのことも踏まえて今後の展望を語って見せる。

「そうですね。もう自分の体の一部のように扱えますが、確かに時代遅れになりつつあるのは感じますね。ですが、今後はジェット機の時代が来ると思うんですよ。だから、私もいつかはジェットストライカーで戦ってみたいですね」

「ジェット機か……確かにすごいと思うが、ありやあ当分研究が必要な代物だけ？運用全般を考えると武装一つとっても論争の種だろうぜ」

赤松貞明の未来展望も確かなもので、格闘戦思想が強く残る扶桑で早くから部隊運用を唱えだした赤松貞明の先見性は的を射たものだった。山本はそれを楽しそうに聞いていた。そして、貞明も勇に負けずに自分の功績を紹介する。

「ともかくだな！これからは個人の戦功を語れる機会も少なくなるとなりやあ、今が稼ぎ時つてもんだ！俺なんかネウロイ100機が襲来した時だな・・・」

「また松さんのあれが始まったよ・・・」

「松さん、そんなに敵は来とらんぞ！あれは20機やそこらじゃ」

「うっさい！まあいい！そこで俺はだな、幸運なことにも一人でいたから分が悪いと思われがちな状況でだ！端っこを飛んでる雑魚を一撃の下で撃墜した！」

「いいぞいいぞ！」

得意の抑揚をつけた拳を振るって話す様は昔を思い出すようで、勇は懐かしさに頬が緩んでいた。こんなに気が緩んだのはいつぶりだろうかと思うほど、この空気が楽しかった。

「雑魚を倒した俺は直ぐには逃げなかった！敵は多勢、俺は単機だ！そこでどうしたか？」

「出ましたっ！敵中突入！」

「その通りっ！俺は敵の中にわざと潜り込み、敵が同士討ちを避けるため攻撃できないという混乱を誘ってもう一機を撃墜した後、華麗に基地に帰還したっていうわけよ！」

「おおお!!!」

貞明の弁舌が振るわれる中、操縦している目のいい太田が総員に告げる。

「海上に流水と思われる物体が接近中。かなりでかい！通信手、照会を頼む」

「おいおい、観光案内を頼んだ覚えはねーぞ？」

貞明と共に、勇は外を確認する。貞明ら人間の視力では確認できない距離をウィッチである勇なら確認できるのだが、その能力が勇の目にもたらした光景は、勇を後ずらせるだけの衝撃を与えるものとして十分すぎるものだった。

「どうした、勇？」

「・・・あれはまずい・・・」

「勇くんどうしたのかね？ただの流水なのではないのか？」

だれも違和感に気づかないことに苛立ちを隠せない。勇は直ぐに輸送機に格納されているユニットに駆け寄る。その姿に貞明らも行動を開始する。近くの銃座に着くと外周を警戒する。

「本当に敵なんだな?!」

「はいっ！氷山型のネウロイです！」

「水を嫌うネウロイからすれば信じられない戦法だがね」

冷静に敵の特徴を分析する山本だったが、ここでは勘と経験が物を言うのである。勇

はユニット装着すると爆弾倉を開かせる。

「勇！奴はかなりでかい！小火器じゃ通じないぞ！」

「はい分かってます！でもやってみないことには！」

「分かった！俺らもなるべく近くの飛行場に降りる！」

「コールサインは甲一番だ！存分にやってきたまえ！」

山本、貞明と簡単な方針を話し合った後、勇は遂に冰山型のネウロイに向かうことにする。爆弾倉からすごい風圧が来るが、もろともせず落下するようにして目標を目指す。まるで航空降下猟兵のような運用だが、今はそのようなことはどうでもよいほどに状況が緊迫していた。勇が近づいてみると、確かに巨大な冰山が不自然に海洋を漂っている。

「貫通力強化で撃ってみるか」

自分の魔法力を貫通力を増すようにイメージして練りこむ。勇の卓越した魔法力操作は最近では神業に近いものがあり、思いのままにコントロールできるほどになっていた。魔法力を糧に貫徹力に特化した弾丸は氷山型のネウロイに着弾するが、氷上で弾が回転してしまいそれほど効果は見られなかった。

「じゃあ、今度は衝撃力を増して・・・っ!」

勇が思考を巡らせていると遂にネウロイが氷の中から反撃を仕掛けてきた。勇は対象がネウロイだと確信できたことで、そのことを知らせに通信機を起動させる。

「こちら赤松勇大尉、対象はネウロイに間違いありませんでした!現在交戦中!周辺の基地に連絡を・・・?甲一番?どうした応答せよ!」



勇の通信に反応しない輸送機に勇はバスターニユでの出来事を思い出す。通信障害を繰り出すネウロイは昨今増えてきており、人類相手に効果的な方法だと分かっているネウロイに憎悪が湧いて来る。

「厄介な……これでも喰らえ！」

練り上げた衝撃波を増幅するように爆発力を増した術弾は、轟音と衝撃を撒き散らし、氷山型ネウロイに効果的なダメージを与える。氷山の一部が崩れ、中から赤みが出た光が漏れてくるようになった。

「よしっ……これならいけるぞ！」

勇が手段を確立したことに喜ぶ中、ネウロイにダメージが入ったことにより限定的に通信が回復する。

『赤松大尉！急いで輸送機の防衛に戻ってください！上空から多数のネウロイが!!!』  
「なにっ?！」

勇は海上付近に降りてきてしまっており、距離を取ったために高度差がある輸送機の方を見上げると、無数の黒点が輸送機に迫っていた。それは裕に100機を越えているような大群だった。悪寒が押し寄せ、氷山型ネウロイのことなど頭の中から消し去り全力で輸送機に戻る。既に無数のネウロイが輸送機に急降下を仕掛けてきており、輸送機の対空機銃が弾幕を張っていた。しかし、それもはや無意味なほどのネウロイが輸送機に殺到していた。

「どこからあんな量のネウロイが?!くそっ!間に合わない!」

先ほどまで輸送機の中で零戦の能力について語っていたところだが、さっそく上昇力で弱点を見せられるとは思っていなかった。勇も全力でスピードに魔法力を注ぎ込んでいたが、零戦からは悲鳴に近い限界音が聞こえてくる。そして遂に回避行動を取ろうとしている輸送機に群がるようにネウロイは攻撃を開始した。その瞬間に輸送機の通信機から絶叫が聞こえてくる。

『うがあああああ!!脚が!!脚が!!!』

『寅さん!駄目だ!死んじまった!』

全方向から攻撃が雨あられと降り注ぎ、既に輸送機は翼端から火を噴いていた。ようやく追いついた勇は輸送機の周辺でシールドを展開し、なるべく多くの攻撃を防いでみたが、多勢に無勢でどうしようもなく数の暴力に翻られていった。100機ものネウロ

イは統率もなく一撃離脱を繰り返すだけで、勇は突撃してくるネウロイをとにかく撃ちまくった。

「うおおおおお!! 墜ちろ!! 墜ちろ!! 墜ちろ!! 墜ちろ!! 墜ちろ!!」

次々に撃墜していく中、輸送機の防衛で表面積が大きな側面を守っていたことに不運が訪れる。前方からネウロイが回ってきており、コックピットを狙おうとしていた。まづいと思った時、勇がコックピットを見ると、血を流した太田が必死に操縦桿を握る姿が映った。その瞬間、鈍重な一式陸攻は右に一回転を繰り返して寸でのところで全弾回避に成功する。さすがは歴戦かつその名が轟く太田だと思わせる機体操作だったが、それが限界なのは明白だった。

「太田さん! 不時着してください!」

『勇! 俺らのことはいいいからぶちかませ!』

通信機を介してだと太田には通じなかったが、貞明が通信出た。その一言で勇は決意する。魔法力を弾丸に全力投入する。イメージとして、小さな球状の魔法力をいくつも蓄積させ、その球の中心に向かってさらに小さな球状の魔法力をぶつける感覚を思念した。そのビリヤードのような小さな魔法力の球は次々に連鎖して魔法力の球にぶつかって恐るべきエネルギーを生み出していく。そのエネルギーすべてが機関銃の弾丸を通じて、砲身を勢いよく駆け巡る。発射の反動を抑えることもできずに、勇はグルグルとその場を回転するほどの風圧が発生したことでその威力がとんでもないことになり、気がつく。

「やったぞー！」

一撃でほとんどのネウロイが消し飛び、未だに火炎球がキノコ雲を形成している。あたりの酸素を燃焼し尽くさんばかりの熱量はネウロイの表面を溶かすほどだった。こ

の攻撃に残ったネウロイは蜘蛛の子を散らすように三々五々に退散していく。勇は砲身がめくれ上がった機関銃を捨てると輸送機に向かう。先ほどの攻撃の影響を少なからず受けたようで、片翼の装甲が剥げ、エンジンの留め具であるカルビウスネジも外れかかっていた。勇が急いで機内を覗くと、その中は血だまりで染まっていた。無駄な思考を捨てて、機体が不時着できるように最善を尽くすべく、コックピットを見る。すると、太田が先ほどの爆撃の衝撃で気を失っているようだった。

「太田さん！起きてください！寝ちゃだめです!!はっ!?!」

よく見ると太田の座席の後ろから手が伸ばされていることに気づいた。それは紛れもない貞明のものだった。貞明は生きているという希望に感謝し、勇は声を掛け続け、翼を持ち上げる。

「松さん！手を伸ばして！早く！機体を立て直せええええ!!」

「分かってらあ！くそ．．．太田、起きろ!!」

貞明の手がなかなか届かず、みるみる高度が落ち、地面がまじかに迫りもう間に合わないと思ったその時、急に勇の持ち上げている翼が動き出す。コックピットではなんと失神していた太田が起きたのだった。

「すみません、寝てました．．．」

「不時着しろ、森の上だ」

太田が必死に震える手を制して操縦桿を握り、その上から貞明がそれを支える。勇も機体を下から持ち上げるようにするが、高度がもうなく森の木にぶつかりそうになる。勇が限界を感じ、機から離れると瀕死の輸送機はゆっくりと木の上を滑っていく。勇は瀕死の機体、重症の身体でここまで機体を操れる技量に感動すら覚えた。やがて、木々をバキバキとなぎ倒しながら不時着していく。両翼がもげ、あちこちに火災が起こって

いるが翼内の燃料が全て漏れ出たのか爆発は起きなかった。急いで輸送機の下へ駆け寄ると、力の限りを尽くして歪んだドアをこじ開ける。しかし、中の光景はもう見るまでもなかった。

「長官……松さん、太田さん？」

機内では既に息絶えた高塚と羽藤の姿が確認できた。高塚は頭に、羽藤は胸に大きな風穴があいており即死であったことが伺えた。通信手は脚がもげ、大量の出血により死亡が確認できた。そして、長官である山本はというと。

「そんな……長官が」

山本は静かにその鬪志を宿したままの目で亡くなっていた。まるで武人のように刀



を握ったままの姿は潔よさすら感じることができた。生存確認が優先と頭を切り替え、コックピットに向かうと機長は上半身が無くなっていたことから戦闘中に亡くなったことが察せられた。そして、驚くべきことに貞明と太田には息があった。

「松さん!!太田さん!!」

急いで機体から二人を担ぎ出すと、ゆっくりと地面に寝かせる。二人とも無傷とはいかず、不時着の衝撃で全身打撲や骨折が見られた。特に太田の症状は酷く、腹部にネウロイの攻撃を受けており瀕死の重傷であることが発覚した。通信が未だに回復しないことに苛立ちながら、勇は直ぐに病院へ連れて行くことを思い立つ。

「すぐにも病院に運ばないと!でも二人は一緒には運べない!どっちを運んだら…」

二人とも勇にとつてかけがえのない戦友であり、命を選ぶことは出来ないでいた。しかし、二人の荒い呼吸が勇に決断を迫らせていた。勇は覚悟を決め、比較的症狀の軽い貞明を運ぶことにした。

「松さん！今から病院へ運びますからね！」

「ううう……」

担ぐ際にも身体が痛むのか呻き声を漏らす。時間が惜しいと勇は急いで近くの建物を探す。ブレストからはおおよそドーバー海峡を抜けてダンケルク辺りを掠めるように飛行していたため、おそらくここはベルギガ王国であろうことは察せられた。飛行しながら建物を探していると、先ほどの勇の放った爆発を聞きつけたのか、あちこちで軍関係者が見られた。勇はそこに着陸することにした。

「すみません！急患です！彼を病院へ！」

「あなたはっ!?!赤松大尉ではありませんか?!」

「いいから彼を早く！」

「はっ、はいっ！」

貞明を兵士に任せると、すぐにとんぼ返りで今度は太田を運ぶために全速力で向かう。勇は一刻も早く向かうために、消耗したはずの魔法力を圧縮してエネルギーに変える。ユニットはすでに悲鳴から絶叫に近い音を出しており、勇よりも早く力尽きそうだったが、それも構わず勇は現場に向かった。未だ煙が漂い、煙臭さが充満する現場を見つけるのは容易で、すぐに駆け付けることができた。

「ぜえっ！太田さん！大丈夫ですか?!」

太田を担ぎかけた勇に不穏な気配が迫る。勇は刀を抜刀してサツと身を引くと、そこにいたのは小野里だった。こんなにも早くに現場に着いたことに違和感を覚えたが、友軍ならと刀を仕舞い、救援を呼ぶように伝えようとする。

「小野里少尉か！こんな有様だ！すぐに救援部隊を・・・」  
「いつから私があなたの仲間だと錯覚していた」

小野里の冷たい声は、その冷徹なまでの事実を勇に付きつける。その眼差しはまるで水の様で、目の前に抜き身の刀が鎮座しているようだった。

「なにを馬鹿なことを言っている！貴様も同じ扶桑人ならこの状況がわかるだろ！」

「自分は命令通りに動くまでだ」

「なら命令だ！手を貸せ！そして救援を・・・」

「お前の命令なんか聞くかあ!!!」

普段大人しかっただけに突然の大声に勇は動きを止める。小野里は少しも姿勢を変

えることなく、勇を睨むように殺気を放っている。勇はこの少女がこの状況で何を言っているのかさっぱりわからなかった。ただ、勇に対する強烈な拒絶感を持っているようだった。少しの間が辺りを静かにさせたころ、小野里は急に表情をいつもの無表情なものにしたかと思うと、耳元に手を当てると小さく頷いた。

「はい．．．」

「なんだ?!誰と話している!」

「．．．もうその人は無駄ですよ．．．では」

小野里は踵を返すと森の暗闇に溶け込んで行ってしまった。そして、言われた通り太田の様子を急いで確認すると既に息はなかった。あまりの理不尽、不?戴天、不幸に拳を振り上げる。その拳はブルブルと震え、爪が手のひらに食い込み過ぎて血が垂れるほど強く握られていた。ただ、その下ろしどころも分からず地面に叩きつける。ドンっという轟音と共に血に濡れた拳が姿を現し、地面は大きく窪んでいた。

「ちく……しよう……」

小さく、だが強い感情の言葉は空気を切り裂くようだった。勇は涙を流そうとは思わなかった。涙は理性の停止を意味し、今の自分の感情を表すのに涙は不適だと考えたからだ。まさに理性が感情を完璧に支配下に置いた瞬間だった。ほどなくして、救援部隊が勇のところに着いて、辺りは騒然となる。事態はベルギガ王国だけに留まらず、当事国の扶桑、延いてはカールスラントまでもが事件の調査に取り組んだ。事件の記録として、後にこの事件には名前が付けられる。『扶桑海軍甲事件』と。被害は山本一二三海軍大將及び乗員五名が殉死、一名重症と報道され、この扶桑海軍甲事件は世界に衝撃を与えた。その中で二人の人物が場所は異なるが同じ時に祝福を唱える。

「ああ……やっとワシの出番じゃ。赤松勇い……お前はワシのものじゃ。ワシがお前をワシのために使ってくれようぞ？クカカ!! さぞ楽しかろう?!」

「フフフ．．．本当にあなたは素晴らしい．．．世界を廻す準備はいいですか、赤松勇大尉！私と世界を再編しましょう!!!」

この二人の狂った笑いは世界を飲み込み、勇を引きずり込まんばかりの力が備わっていた。ただただ強い意志の力によって、勇はねじ曲がった世界の歯車に飲み込まれる激動の時代が幕を開けるのだった。

## 籠の中の翼 第七話

勇は先日起きた「扶桑海軍甲事件」の当事者として、情報漏洩を防ぐ目的もあり連合軍に拘束されていた。曰く、扶桑海軍甲事件は山本一二三海軍大将の独断により起きた偶発的な情報漏洩により、ネウロイに察知され起きた史上最悪の軍事的ミスだと言われた。また、その際に起きた戦闘の詳細も知らされず、この事件は民間機関には絶対知られてはいけない禁忌となってしまう。その証拠として、山本の副官である海軍大佐は事件当日、山本の死を知り自室で自害している。これで今回の事件を知る者はごく少数となり、中でもとりわけ重要人物になったのが、生存者でもあり、目の前で山本を失った赤松勇という人物に集中することはもはや自明だった。

「赤松勇大尉、貴官を本事件の重要参考人として連合軍法務局は以下の通達を下達する」

軍法会議にかけられた勇は淡々と通達事項を聞くことに徹する。内容は以下のよう



に記載されていた。

その一 扶桑海軍長官が搭乗した輸送機が敵に察知されたことへの責任

その二 氷山型ネウロイと交戦しながらその事実を秘匿したことへの責任

その三 攻撃時に過度な防衛戦闘を行ったことへの責任

その四 不時着時の不適切な対応への責任

その五 長官の生死が判別しないうちに持ち場を離れたことへの責任

「・・・ええ、以上の五点が赤松大尉に掛けられているものだ。法務局は以上の内容から大尉を中尉へ降格処分とし、別命あるまで禁固刑とする判断を下した」

既に決まっている既定路線を話されるほど苦痛なものはないと、勇は黙して甘受する。どれもこれも当てつけなものであり、勇の供述を聞いていればどれも外的な責任追及と言わざるを得ない。それに『過度な防衛戦闘』などネウロイとの戦闘では聞いたこともないものだった。それもこれもどこかの誰かが手を回したに違いないと勇は思

うのだった。しかし、ここで憲兵側から手が上がる。

「裁判長、一点よろしいでしょうか」

「発言を許可する。ブラッツ・ハイドリヒ大佐」

その金髪で高潔なカールスラント軍人はゆっくりと紳士のように立つとまるで演説者のように語り出した。

「四点目の不時着時の対応については、私たちの調べでは赤松勇大尉には過失はなく、輸送機の操縦も見事なものであったと報告を受けています。よって四点目の起訴については一考の余地があると考えます」

「うむ、資料を提出したまえ」

どうでもよい点を追求してきた無能かと思つたが、ブラッツ・ハイドリヒと名乗る人物は勇を席から視線を外すことなく不気味な笑顔を向けてきた。勇はその笑顔の種類の名称などは知らなかつたが、その本質はよくわかつていた。勇が一番嫌いな、人を利用しようとしてくる笑顔だつた。

「裁判長、もう一点あるのですが……」

「発言を許可する」

「はい……では、憲兵側から一つお話し致します。連合軍最高総司令部から赤松勇大尉の身柄の引き渡しを要求いたします！」

もはや通達ですらなく、一方的な要求に法廷は大きな動揺を見せた。しかし、発言者はその状況すらまるで指揮者になり切り、楽しそうに指揮をするかのように頬を紅潮させて俯瞰していた。

「ハイドリヒ大佐！貴官はこの法廷を侮辱する気か?!」

「はい、いいえ裁判長！これは既に法務局で扱う事柄ではないのです！裁判長こそ連合軍最高総司令部の意向に背くおつもりですか？」

「今、そのようなことについて言っているのではない！貴官は・・・」

「はあ、話も碌に理解できないとは・・・」

ハイドリヒはさも残念そうに溜息を吐くと、右手を背後の扉に向けて合図する。すると、一斉に飛びだしてきた兵士によつて裁判所は包囲される。何が起きているか理解できる者などこの場ではハイドリヒ以外ないであろう。その張本人は裁判長に向けてゆつくりと歩み寄ると、腰を抜かした裁判長に一枚の紙きれを突き付ける。

「これは相談ではない・・・命令だ！貴官は最高総司令部の意向に従う、いえ服従しますか？」

「いや、その・・・」

「貴官の職務の怠慢は度し難いですね・・・」

もう一度上げた右腕で裁判長を取り囲む兵士たちは一斉に銃を構える。もはや油汗でぐちやぐちやな裁判長に反撃の意思は残っていないかった。

「もう一度聞きましょう。ヤーか、ナインかね？」

悪魔のような金髪の男は萎れかかった裁判長から判をもぎ取ると、嬉しそうに勇に近づく。両手を広げて勇をまるで抱きかかえでもしそうな役者がかった仕草に反吐が出る。兵士が勇に手錠をかけ、周囲を取り巻くと満を持してハイドリヒが満面の笑みで眩く。

「さあ、楽しい楽しい戦争だぞ！赤松勇大尉、君から階級を奪うつもりはないよ。ただ……『私と』世界を作り直そうじゃないか！」

法廷を後にした勇とハイドリヒは、黒塗りの車へと乗りこみ、裁判所を後にする。車に乗ったハイドリヒはご機嫌な様子で鼻歌を歌っている。車の向かう先はベルギ王国のワーターロー飛行場だった。不思議と基地の雰囲気としては多国籍でありながら、あまりにも静かな基地だった。アントウエルペン港からも近く、聞いた話では501の基地が近くにあるはずだが、そんな賑やかさは欠片もなかった。扶桑海軍の一式陸攻がズラリと並び、静まり返った基地の中に案内されると、質素な外見からは想像もできないほど一部屋だけが異質に豪華絢爛な華美な部屋が設けられていた。おそらくここが司令室なのだろうが、ハイドリヒが連れてくるほどの部屋の中にいる人物が、勇にはどうして気味が悪くて仕方がなかった。

「ハイドリヒ大佐です。閣下、赤松勇大尉をお連れしました」  
「クカカ！入れ！」

勇はその特徴的にちやりと粘り気のある笑い声に聞き覚えがあった。それは勇がもう二度と会うことはないと思ひ、一度は手にかけて人物のものと全く一致した。一氣に心臓が驚掴みされたような、肺の空氣が押し出され、窒息しそうになるも、ハイドリヒが扉を開く。その不氣味に輝く部屋の奥に鎮座する男こそ、今回の全ての元凶であり、勇の未来を握る男だと直感的に理解してしまった。

「久しぶりであるな・・・赤松勇いゝ？覚えているであろうな？もちろん、忘れたとは言わせんぞ？」

「!!!!!! 貴様あああああ!!!!!! つ!?ぐはっ!」

怒りの感情が爆発し、縛られているとはいえ本氣を出せば縄なんて引きちぎり、すぐにも今回の全ての元凶であり、サーレマー島で勇が所属した部隊を全滅に追いやった人物に今度こそ引導を渡そうとした最中、腹部に強烈な痛みが走る。

「怒りに支配されるとは躰がなつておらんな、ハイドリヒ」

「はい、大変申し訳ございません。閣下に危害を加えようとする怒りの感情は今後一切排除するように私が教育致しましょう」

ハイドリヒの拳には鉄の拳が付いており、そんな物で殴られればいくら勇と言えど堪らない。二人は終始楽し気に勇の様子を観察しているようだった。

「赤松勇、貴様を手に入れるためにワシはどれだけ苦労したか知っているか？」

膝をつき、呼吸を求めて喘ぐ勇の髪を無造作に掴み、無理やり顔を除く災厄の顔はとても満足げに勇の瞳を侵食してきた。

「貴様にこの目を切りつけられてからというもの、ワシの評価は地に落ちた……だが、



それが逆にワシに復活のチャンスとなったことには感謝しておるよ。こうして再び貴様を使う日が来たのだから！ かつかつか！ 貴様の功績を、恐怖を増長するように周囲に吹聴するのに、貴様に付けられた傷は大変役立つぞ？」

大器晩成を成し遂げた怪物はどうしてこうも勇の人生を破滅に導くのかと、勇は神の存在を否定する。牟田口はその目を爛々とさせ、これまでの悪行をまるで輝かしい功績のように勇にわざと披露する。

「海軍のバカどもはあの山本の存在に縋っておったからな、この世から退場してもらったわ！ まさかあのウィッチと航空戦力をいち早く増強することを主張した軍神が！ 空で！ 辺鄙な空で、誰にも看取られずに無残に散った!! 情報がこの世の戦いを制すとも知らずに！ 山本の所在を漏らしただけでネウロイのやつらめ、目ざとくワシの手駒になりきおったわ！ ネウロイも使いようじやのうて！ かかかか!!」

林や源田の時同様、この牟田口が司令官の所在を無防備な通信に垂れ流した張本人であった。山本を貶したのみならず、情報漏洩の罪を犯してまで勇に固執する理由が勇には理解できなかつた。

「まあ、山本にも感謝することは少しはあるな。ワシの作戦を完成させるための生贄を用意してくれたと言う点では、やつ唯一の勲章をくれてやらなくてわ！あの輸送機にいた343空の第二中隊の残存兵を部品として大切に使ってくれようぞ!!」

勇は目を向いて牟田口の踊るような話に反応した。牟田口はそれが嬉しいのか、ぺらぺらと今後の展望について語る。

「やつらをせいぜいお涙頂戴の救国の英雄としてワシが使つてやろうと言うのだ！そして！貴様が最後を！そう、ネウロイとの戦争の最期の切り札として飾ってもらおう！秘密兵器のおう……」

「閣下、そろそろその実験兵器が到着する頃ではありませんか？」

牟田口の口を割らせないためにハイドリヒが強引に話を中断する。ハイドリヒの話を水を差されたかと思われたが、牟田口は勇というおもちゃを手に入れてよほど気分がいいのか、満足げにハイドリヒの言葉に従う。

「そうじゃった、そうじゃった！ハイドリヒは気が利くのおくさて、赤松勇、貴様はこれから勉強の時間じゃ。ハイドリヒの教育をしっかりと受けるのじゃぞ？」

「ああ聡明なる閣下！愚かな私めに一つ助けを貸していただきたいのです！」

「なんじゃね？」

ハイドリヒの気持ちの悪い崇拜ぶりに悪寒を感じながら、その話の行方に耳をそばだてる。いかにもこれから受ける『教育』とやらは碌なものではないことだけは分かっていた。

「閣下の子飼いの彼女を貸していただきたいのです！同郷の者がいれば教育も捗ることでしょう！」

「おお！それは名案じゃ！よい！許可するぞ！」

「ありがたき幸せ！」

深々とハイドリヒがお辞儀すると、満足げに秘密兵器とやらを見に牟田口は消える。そして、残されたハイドリヒは勇を無理やり立たせると、兵士に勇を歩かせ暗い倉庫のような場所に連行する。勇はすでに暗い倉庫に漂う異質な寒さと重さ、そしてなにより匂いに驚愕する。それは失望の匂いだった。

「何をやる気だつ！」

「何って教育ですよ。あなたが世界を再編するために必要な正しい知識と強い精神を持つためにとても必要なことですよ」

病院の診察台のような所に寝かさされ、手足を嚴重に固定されていく。さらにはいろんなところに何かの測定器を貼り付けられ、まさに実験体のようなだった。勇はその『実験体』という単語が出てきてしまったことで、理解が追いついてしまう。じたばたと暴れようにも、固定具でかなり動きが制限されているため声しか出ない。

「止めろっ！俺に触れるなっ！！！」

「さあ！あなたの全てを私に見せてください！まずはあなたの魔法力から！」

測定器に電源が入り、計器の針が左右に振れている。ハイドリヒら研究者や兵士は必死にそのデータを取っている。いまだに痛みを伴うものはないと、少し安心したところで、ハイドリヒが次の項目に移ることを告知する。

「さてお次は魔法圧です。むしろ私はここが見たかった！正直に測定されてくださいね？」

気味の悪い言い方に気圧されながら、先ほどと変わらず寝ていればいいのかと樂觀視していると、急に体内の魔法力が強制的に吸われる感覚が遅い、無意識に止めてしまう。例えるなら吐きそうになるのを抑えるような感覚である。しかし、それを残念そうにハイドリヒが止めに入る。

「いけませんねえ、言ったでしょう？正直に測定されてくださいと……仕方がない、少尉、お願いします」

頭が固定されているためよく見えないが、暗がりから出てきたのは間違えなく小野里だった。その事実に見開きながら驚愕していると、ハイドリヒがまたもや嬉しそうに勇の耳元で囁く。

「同郷のウィッチです。仲良くしてあげてください。彼女に少しチクツとされるだけですから……」

小野里がウィッチであるという事実に驚きながら、彼女がなぜ彼らに従っているのが頭の中をグルグルと駆け巡っていると、急に腕に激痛が走る。目線を動かすと、彼女の手から青白く光る細い針のようなものが勇を指していた。それは彼女の魔法だった。

「うああああああああああああ!!!」

あまりの激痛に悶え、思わず魔法力で刺された箇所を防御しようと魔法力を流し込んでしまう。これは勇にも無意識化で行っていることで、ハイドリヒらが計器の前で歓喜の声をあげている。

「小野里少尉、もつと痛くしてください！もしかしたらまだ上がるかもしれませんが！」  
「・・・了解」

小野里が針のような魔法を腕の中でグリンと回す。それだけでも先ほどとは比べ物にならないほどの激痛が勇を襲う。ハイドリヒが絶頂しそうなほどの結果に薄れゆく勇の意識は混乱と痛みだけが駆け回っていた。

「やっせませんよ」

微かに残る意識の中でそう聞こえた次の瞬間、勇の意識は覚醒する。血圧が上がリ、脈拍も爆上がりする中、勇は小野里の顔に狂った笑みを見る。



「強壯剤です。アドレナリンとも言います」

　　またも強制的に、地獄に舞い戻りガンガンと痛みだした頭で必死に速く終わってくれと願う。さらに続く検査項目の度に勇の身体を襲う激痛に、絶叫の声だけが木霊する。しかし、運命はそれさえも許してくれない。

「うるさいんだよ・・・」

　　勇は次の瞬間声が出なくなる。小野里が喉の声帯に針を入れたのだ。ぐちゅぐちゅと喉の中を圧迫しながら握りつぶされる感覚に声も出ず、勇は絶望と痛みだけが支配する。もう自分は死ぬのだと、死ぬまでこの実験に付き合わされて生涯を閉じるのだと、そう考えるようになっていた。しかし、牟田口の野望に加担させられるという事実と、僅かな生きたいと願う生存本能が、勇を生かした。やがて朦朧とする意識の中、痛みが

消えていることに気が付く。目の前にはハイドリヒが笑っているのだ。

「お疲れさまでした。まさか私ともあろうものが感動のあまり、周りの研究員が過労で倒れるまで時間の経過に気づかないとは！ 今後は注意せねば！ グーテンモルゲン、赤松勇大尉？ ご機嫌いかがですか？」

最悪の気分だと言いたいが、喉を潰されたため声が出ず、悪態もつけない。と、思っていた。

「最悪の気分だ……?!」

自分の声が出たことに驚き、辺りを見渡す。小野里の姿はなく、自分の体には傷跡すら見えなかった。先ほどまでの記憶は全て幻なのではないかと、悪夢だったのではない

かと疑い始めた。

「幻でも悪夢でもありませんよ?」

思考を読んだのか、ハイドリヒが勇に教える。しかし、体力と精神力が回復しておらず、疲労のあまり意識がぼやけている。あれからどれだけ時間がたったのかも定かではない。

「きちんと3日間の検査を終えて安心しました。君の素晴らしいデータは今後の作戦で多いに役立つでしょう! さて、今度は私の授業を聞く時間ですよ?」

痛みの次は呪いの授業かと辟易したいところだが、そんな精神的余裕はなく、その呪詛のようなハイドリヒの思想授業が始まった。

「ああ、まったく君と言う存在は素晴らしい！君の存在を持つて世界は再構築されるのです！今、世界は害虫に蝕まれている。それをあなたが間引くのです。あなたにはその力がある。その力で私たち人類を共に救いましょう！明日への道は残されたものだけが歩むことのできる、骸でできた強固な架け橋となるのです。その光景を見る為ならば惜しまない・・・私の全てを用いて、この世界のありとあらゆる障害を排除し、強者だけが到達できる楽園に辿り着こうではありませんか！あなたはその特等席です！」

嬉しいでしょう？と恩着せがまし興奮したハイドリヒの野望が頭から抜けて行かない。精神的に参っているときにハイドリヒのような思想は脳内にこびり付いてしまう。洗脳という表現が正しいが、もはやこれは一方的にハイドリヒの祝詞を聞かされているだけの苦行だった。

「あなたは私の手によって完璧な存在になるのです。私が全ての手はずを整えます。あ

なたはただその箱舟に乗ればいい。ただ、あなたの汚点は出生だけですわね」

その一言に、勇の意識は現実に戻される。勇の出生を知る者はもはや扶桑の軍関係者以外にいない。それがどうしてカールスラントの軍人に知られているのか、殊更に不気味で仕方なかった。

「あなたの生まれは扶桑の東北という田舎の山奥……捨て子で幼少期は教会のような場所ですわね。寺と言うのでしたか。それがいつの間にか赤松家の子女である赤松恵美に偶然拾われて養子になった……当時の性格は極めて野蛮で、おっと！人を殺めたことを義姉である彼女の家に匿ってもらったとか!? 殺害方法は……ほほう、魔法力による撲殺！素晴らしい！本当にあなたという人は最高だ!!!」

「黙れ黙れ!!」

触れられたくない勇自身の過去にずけずけと踏み込んで喜び転げる悪魔は、これでも

かと勇の前でガッツポーズを取る。まさに天啓を得たとばかりにある話をし始める。

「あなたのように人を殺した者は特別です！勇大尉、人の本質とは何かわかりますか？」  
「・・・意思だ」

「半分正解ですが、それでは不正解です。人の本質は意思と『力』ですよ!!意思なきところに力はない。力なき者には意思はない。つまり両者揃って一つなのですよ」  
「それと俺が特別なことに何の繋がりがある！」

ハイドリヒはやれやれといった様子とこれから教えることが楽しみで仕方ないという半々の感情を絶妙にうまく介在させた表情だった。

「あなたには強固な意志がある！だから今までの教育に耐えられた！そして、あなたにはこの世の誰も届くことのできない遥かなる高みに君臨する力がある！その証左として、人を殺す行為と言うのはあなたが生き残るために振るった拳だ！そして、生きたい

と言う強固な意志があなたをそうさせた！だからこそあなたは完璧だと言ったのです  
！」

「屑の証明だ」

「なんだと？」

勇の一言は今まで喜びの絶頂にいたハイドリヒを奈落へ突き落す。首を鷲掴みにすると、勇にその碧眼の瞳を擦り付けんばかりに近寄せると憤怒のみが伝わってくる。

「貴様が、貴様だけは否定してはならない……ふう、いいでしょう。まだ教育が足りていないようですね。小野里少尉を呼びましょう」

「下衆がつ！」

「良いことを教えましょう。彼女、小野里少尉は医療系の魔法が使えるウィッチです。どんなに傷ついても治してくれますよ。それではせいぜい頑張ってくださいね」

ハイドリヒと入れ替わるように小野田が勇の前にやってくる。もはや痛み of 象徴となり果てた彼女の姿は条件反射的に痛みがこみ上げてくるようだった。

「お前は知っているか？ 人体の中で最も痛く感じる場所を。それは坐骨神経と言われている」

「なぜ少尉はこんなことを?!」

「なぜ・・・だから私はお前を苦しめたいんだ!」

「うっぐががあああああああ!!!」

怒りの感情をむき出しにした刹那、狂ってしまったような激痛とも吐き気とも取れるものが勇の身体を尽き抜ける。永遠とも思える苦痛から瞬間的に解放され、目を開けるとそこには真つ黒な瞳が勇を覗いていた。

「私の母がこの坐骨神経痛を患っていてな、横になっても襲われる激痛で喘ぐ母を



父は見捨てて私から全てを奪っていった。その母も死に、一人ぼっちになった私にもただ一つの希望があったのさ。兄と言う存在がな」

勇には小野里の過去など知る由もないのだが、明らかに勇に対する怒りが突き付けられていた。

「私の旧姓は・・・藤野だ！」

「っ?!まさかっ!藤野の妹か?!」

あの343空第一中隊で最後まで勇に連れ添い、最後の戦友とも言える藤野に妹がいることは青天の霹靂だった。そして、その妹が目の前で自分をいたぶっている現状に目の前が真っ暗になる思いだった。

「ようやく思い出したか！お前が兄さんを殺したんだ！お前は兄さんと私の二人分の苦しみを受けるまで殺し続けてやる！その責任がお前にはあるはずだ！」

「ちよつと待て！藤野と俺は戦友だ！最後まで俺と共にいた唯一無二の仲間だ！」

「見え透いた嘘をつ!!その口二度と利けないようにしてやろうか！」

「嘘じゃないっ！藤野はこんなこと望んじやいない！」

「知った口を利くな！本当に殺してやるからな！」

小野里はだれかに洗脳されているとしか言いようがなく、勇の弁解の余地もなく痛みを与え続ける。痛みの中で微かな罪悪感が生まれてくる。それは確かに藤野を助けられなかったという後悔だが、勇はそれをも乗り越えて今を生きてきた。だから、勇はこの地獄に引き込まれた小野里という少女を救うことを薄れゆく意識の中で決心する。

「はあ、はあ……ようやく気を失ったな。頑丈な奴だ」

小野里は自分でも驚くほど勇の耐久力の無尽蔵さを目の当たりにして、無理やり気絶させた。事実、先ほどから勇は意識的に魔法力を用い、シールドを身体中に細分化させて突刺に対する防御を行っていたほどで、自分の治癒魔法針が刺さらないほどだった。ここまで自分の魔法力を制御した者など小野里には心当たりがなかった、そして、何より小野里が気になったことがあった。それは勇が気を失う最後まで小野里の兄である藤野のことに言及した点だった。自分の兄をむざむざ殺した仇が目の前にいることに、一日千秋の思いで待ちわびたのだが、どうも狂わされてしまう。憎たらしい顔をもう一度拝めば気が晴れ得るかと思いい、顔を近寄せる。

「苦悶の表情が私と兄に対する免罪符だからな。どんな表情かな・・・はっ!」

小野里が顔を覗き込もうとした瞬間だった。顔を寄せるために勇の手に触れた瞬間、勇が無意識化で反射的に小野里の手を握ったのだった。握られた手からは勇の魔法力の一部が小野里に流れ込んでくる。細分化させ過ぎた勇の意識が小野里に勇の過去を映像として逆流したのだった。

「これは?! あいつの記憶?! なんだ?!」

脳裏に浮かぶ過去の勇の暗い意識が流れ込んできたことに困惑した小野里は、遂に見てしまう。兄である藤野が勇と過ごす苦悩の日々を。小野里は自分が知らない兄の映像が自分の聞かされた勇の像と解離しすぎていて、その矛盾に脳が追い付かなかった。

「もう・・・たくさんだ!!!」

手を振り払うと勇の手は小野里の手を離し、直ぐに部屋の片隅で嘔吐してしまう。それはあまりにも残酷な過去とそれでも懸命に生きてきた勇の姿であり、藤野との思い出を心から大切にしている勇の正直な心だった。

「こいつこの期に及んで私を助けたいと願っているのか?! 狂っている! だってこいつは兄さんの仇なのに!!」

先ほどの映像と自分の持っていた像とが激しくぶつかり合い、頭が痛くなる。もう勇の近くにはいたくないと部屋を出ることにする。するとハイドリヒが部屋に入ってくるどころだった。

「おや、小野田少尉。教育は終了ですか?」

「・・・はい。少し疲れましたので私は自室で休みます」

「そうですか。あとは任せてしつかり休んでくださいね」

ハイドリヒは優しく微笑むと、小野里にすぐに興味を失い、勇のいる部屋へと入って行った。小野里はせめぎ合う映像に苦悩しながら自室へと向かうのだった。

一方、ハイドリヒは今しがたの勇の『教育』に対する抵抗性の獲得に心から感動していた。まだ気を失っている勇をよそに飛び跳ねて喜んでいた。

「ああ素晴らしい！素晴らしい！！魔法力を細分化させるその技量！魔法圧を自在に操ることにより潜在魔法量の限界から解放されつつあるこの現象をなんと名付けよう！進化・・・いや、進化は世代を超えて生まれる性質のことだ。ではこれは・・・そうか、これが昇華！あなたはまたもや神への階段を上るのですね！苦難の中で得るその御業はさぞかし輝いてくれるのでしょうかね！！」

勇の身体には様々な変化が訪れているのは事実だった。ハイドリヒが言った、そもそも勇の潜在魔法量はあまり多くない。二回目のウィッチへ生まれ変わった際、魔法力が大きく傷ついた状態でウィッチとなったためである。それを今までは上手く配分することで勇は魔法力を適切に扱ってきたが、扶桑海軍甲事件からは圧縮した魔法力を開放することで爆発的な進化を遂げていた。しかし、このワーターロー基地に来て『教育』を受けていくうちにその能力は開花し、もはや細胞レベルで再分化された魔法力は細胞

を宿主とした容量へと変わり、魔法力の蓄積と圧縮を同時に行えるようになっていた。これはつまり、容量限界が突破されたため無尽蔵に生産される魔法力を全て圧縮し続けながら蓄積できるということだ。その事実を発見したハイドリヒはいよいよ次の段階に移ることを決意する。

「ああ、早く見たい．．．世界が再編される暁を、世界を再構築する業火を、明日を紡ぐ絶対の意思とその力の根源を!!人類は、この時より次の時代を見るのです!!!」

ハイドリヒは新時代の幕開けを夢見て、朝陽に手を伸ばす。日の光が勇の顔を照らすとき、勇の瞳に映ったのは紛れもない太陽を飲み込もうとする悪魔の姿だった。その朝日の中からは無数の戦闘機が稲妻のごとく飛来し、降り立ってきた。新たな夜明けが勇にとっては晴れとなるのか剣が降るのかは歴史のみが知り得るのだった。

## 籠の中の翼 第八話

その日、勇はようやく教育課程を修了し、久々の外の空気にひとしおの感動に浸っていた。反対に基地には多数の戦闘機がやってきており、基地内はにわかに慌ただしい様子に包まれていた。さらにアントウエルペン軍港から運ばれてくる物資や要員なども到着してきており、勇の教育も終わりを告げる喧騒に勇は安堵していた。

「赤松勇！こつちにこんか!!」

牟田口の響く声に頭を抱えながら、勇は思い腰を上げて向かうことにする。向かう先には戦闘航空服に身を包んだ兵士が並んでおり、その装いから扶桑人であることが伺えた。しかし勇はその場には通されず、なぜか室内から彼らを見学することをハイドリヒから命令される。建物の二階から眺める光景は牟田口が高台に立ち、兵士への訓示を告げる所だったのだが、それ以上に驚くべきものだった。



「諸君つ！譽ある諸君！この歴史あるワートルー基地へよくぞ集まってくれた！鍛えられた最精鋭の諸君の手を借りるべく参集した牟田口陸軍中將である！諸君ら343空の精悍な顔つきはまさに救国の英雄、いや軍神そのものである！ワシは諸君らと共に戦えることが軍人生活始まって以来の大変な名誉であると感じている！」

牟田口の心無い言葉の羅列も無視して、勇は窓に張り付く。目の前の彼らは、勇が所属していた343空の仲間たちだったからだ。それも貞明らが所属していた第二中隊、そして杉田率いる第三中隊の総勢17人が勢ぞろいしていた。地獄を煮詰めたようなこの基地に彼らが来てしまったら、必ず生きては帰れない。あの日、勇がこの基地に連れてこられた日に、牟田口が言ったことが現実となる日がこんなにも早くに訪れることになってしまった不運に、これでもかとハイドリヒを睨んだ。

「貴様らという悪魔はッ！俺だけじゃ飽き足らず俺の最後の仲間たちまでも囲炉裏の火

にくべようつてのか!？」

「ふふふ、囲炉裏とはなにか知りませんが、薪のように簡単にくべたりはしませんよ。人類のために『大切』にくべるのです！」

彼らから離れた場所で勇にこれを見せつけるために呼んだのなら、さぞかし性格がねじ曲がっているであろう。だが、もはや黒い人物にお前は黒だと言ったところで事実はいくらも変わらない。ならばと、ハイドリヒは勇にけしかけてきたのだ。ようやく牟田口とハイドリヒの明確な勇に対する悪意の方向性が分かってきた。

「あなたは哀れな彼らとは戦場でしか会うことは出来ません。情報漏洩は重罪です。あなたが彼らと接触することは私が監視していますからできないでしょうが、戦場で、あなたが彼らを敵から守るのです。きちんと彼らを守らないと、死んでしまいますよ？」

なんとも嫌な役目を与えるものだと、最近では本物の悪魔に見えてきたが、勇にはそれ

どころではなかった。絶対に彼らを殺さないよう全力で守ろうと誓った。しかし、そんな見え透いた意思を読み取ったのかハイドリヒは心底嬉しそうに呟く。

「本当に可哀そうで哀れだ．．．片道切符の棺桶に乗るとも知らずに、それを必死に守ろうとするあなたはとても輝いていますよ」

そんな囁きを発しながら、外ではいかに彼らが英雄であるかを捲し立てる牟田口の喧騒が彼らを取り巻いていた。

「君たちの司令官は無念にも旅立ってしまった。君たちを遺して。そんな哀れな我らには何ができるだろうか？憎い奴らに何ができるだろうか．．．もはや弔い合戦など生ぬるい。反撃じゃ！死をも恐れぬ攻撃じゃ！特別な死には陸も海もない！不肖、この山本大将とは大の仲であった陸軍のワシが諸君らと共にあることはまさに天啓であろう！安心したまえ！諸君らが逝った後には必ずワシも逝く！もはや我々は運命共同体で

あるっ!!」

にわかに活気づいてしまう哀れな彼らはまだ知らない。こここそが墓場であり、二度と戻ることでできない人間と神への狭間の場所であることを。

小野里は勇の過去を見た日からどうにもおかしかった。あれだけ仇をいたぶり、地獄の痛みを思い知らせたはずなのに、一向に晴れるどころか気持ちが悪沌とし、夢にも勇と兄の藤野が必死に手を取り合う姿が出てくる始末だった。そんなモヤつく頭を振り切り、朝特有の低血圧をブドウ糖の注射を身近らに施すことで幾分か楽にする。軍服に袖を通し、身なりを整えて上司の下に赴く。

「どうして『あれ』がいまだに揃わないんじや! 本来なら既に全機揃っているはずなのじゃぞー!」

自分の上司の機嫌はよろしくないらしい。片目に眼帯をつけ、気取った性格の小男は

着飾られ、名誉のみを欲する汚い人間だとしても自分を見出してくれた恩人なのだ。だから、最後まで尽くさなくてはいけない。そう思い、扉を叩く。

「小野里少尉、入ります」

「早く入らんかつ！」

怒りの矛先が自分に向くことは御免被るためなるべく素早く、かつ気配をできる限り薄くして入室する。中にはハイドリヒが笑顔で幼児をあやす様に振る舞っていた。

「閣下、実物自体はあつたのですがどうにも氷山型のネウロイにアントウエルペン軍港が破壊された際に一部が破壊され、その補充に手間取っております。もう少々お待ちください」

「待てん！もうすでに駒は来ているのだぞ！早く突っ込ませねば一番槍という榮譽が取られてしまうではないか！」

ハイドリヒはそんな幼稚な司令官にも丁寧な姿勢を貫き、対応を続け悪魔の会話が続く。小野里自身としては、自分の上司よりもこのいつも笑顔を絶やさないハイドリヒの方が不気味で怖かった。

「それがですね、困ったことに補充の物がウィッチ部隊・・・501の隊員の目についてしまつたらしく、赤松勇大尉の所在と共に返答が求められています」

「ふんっ！ウィッチの分際で！それになぜ赤松勇がここにいるとばれたのじゃ？」

「それがなんでも『赤松勇大尉という人物は常に渦中にいるからだ』と・・・あの兵器を見られたことが一番の失点ですが、まだ用途についてはバレていないはずですよ。さすがは西の狼と言ったところでしょうか」

西の狼と言うのはミーナのことであり、東の狼は502のグンデユラ・ラルのことを指している。ハイドリヒは素直にミーナの能力を称賛したが、牟田口は怒り心頭だつ

た。

「何が狼だっ！ただの小娘如きにワシの作戦がぶち壊されてはたまらん！なんとか始末できんのか?!」

「仮にも有名ウィッチ部隊の隊長ですからね。どうです小野里少尉、あなたなら殺れま  
すか？」

「おお貴様もいたのじゃったな。気が付かんかったわ」

先ほど自分で入室を許可しておいて忘れるとは司令官の脳には何が詰まっているのかと問いたかったが、小野里は少し思案する。ハイドリヒに話を振られるとは思わなかったため憶測でしか言えないが、結論を述べることにする。

「難しいでしょうが、赤松勇大尉の所在の情報と交換と言う名目で接近できれば殺れなくはないかと」

「殺れるのか?!

「まあ、小野里少尉は斯様な経験者ですから。なにせ山本大将の副官を暗殺できたほどですから」

嫌なことを思い出させるものだ和小野里は顔には出さないが、面倒な過去を思い出す。勇とブレストで別れてから、山本の暗殺と同時進行で、山本の副官である海軍大佐を自殺に見せかけて暗殺したのは小野里自身だった。

「なら赤松勇の所在の情報などくれてやるわ! どうせやつらには手は出せないのだからなっ! かかっかかか!」

「小野里少尉、あなたはもう退室していいですよ」

牟田口の高笑いが収まらないうちにハイドリヒに退室を促され、素直に従う。だが、退室の間際に小野里は聞いてしまう。ご機嫌取りで牟田口に話すハイドリヒの話を。



何かはよくわからなかったが、あのハイドリヒと牟田口が大喜びで話す内容なら碌でもない話なのだろうが、単語の一つに恐ろしいものが含まれていることにウィッチとしての五感が研ぎ澄まされる。

「閣下、先ほど齎された情報ですが、ついに『叡智の炎』が完成間近だそうです」

「なにっ?!それは本当か?!」

「はい、私が先日提出した赤松勇大尉のデータも合わせれば完成は時間の問題でしょう」  
「くかかか!これでネウロイも赤松勇もろとも歴史の燃え屑にしてくれるわ!」

『叡智の炎』とは一体何なのか、勇との繋がりにはどんなものがあるのか。小野里は自分の足元がぐらつく感覚を必死に見ないふりを続けることにし、その場を後にした。朝から疲労感が漂う中、向かった先は格納庫だった。騒がしい心を慰めるのに武器の整備を行うのは小野里の日課だった。しかし、格納庫には先客がいたようだった。

「ん？なんだお前、ウィッチか？・・・これやるよ」

目の前で自分の戦闘機と思われるものを整備していたのは、先日ワートルロー基地に転属してきた343空第三中隊中隊長の杉田だった。杉田は小野里のことを陸軍の軍服と階級章からウィッチと判断したのか、ぶっきらぼうながら甘味である金平糖を差し出した。

「これから邪魔するぜ。お前みたいなちっこいウィッチがいるなんて世も末だな」

小さいと評された小野里は無表情を装うも内心カチンとくるものがあつた。確かに自分は同年代と比べると体格も良くなく、痩せ気味な方だ。だからと言って初対面に言うことではないと思つたが、もらった金平糖は懐かしい代物だった。そんな小野里を見て杉田は小喃をし始める。

「俺にもウィツチの仲間がいてよ、かなり有名なんだぜ？俺は元々アフリカにいたんだが、欧州で活躍した噂がアフリカの辺境に轟くほどにはすげえ奴なんだ」

勇のことであるのは直ぐに察しがついたが、小野里は条件反射的に勇のことを聞くと嫌悪感が出てくる。しかし、どうしてか目の前の人物は勇のことを懐かしそうに、そして嬉しそうに話すのだった。

「あまりにも強いんでアフリカで一番有名なウィツチに怖がられ、アフリカの三將軍を丸め込んでしまうほどの面白いやつなんだ。あいつを最後に見たのはアフリカの空でな、直接は会ってはいないんだが、あいつの飛んでる姿を見たらよ、『俺はここに居るぜ！生きてるぜ！』って言うてる気がしてな。お前も達者でなつて、年上の俺たちに向かつて見せつけるような、本当に優しい奴なんだ・・・長官が死んでしまつてから、あいつは生きてるのか、それだけが俺たちの悩みなんだ」

自分の思い描く悪人の勇とまたもや解離する人物像に、先日の勇の過去がフラッシュバックする。どうしてあんなやつのことを、そう言いたくなくなってしまった。だが、言葉を飲み込み、心に留めておく。杉田は手を休めることなく、オイルを顔に描きながら整備を続ける。小野里はこの人の運命を知りながら何も言えなかった。

「つい長話しちゃった。おい、お前名前は？」

考え事をしていると突然聞かれた自分の名前は、秘密の塊であり正直に話すか迷っている。内についてうっかり話してしまう自分に驚いた。

「小野里正子です・・・あつ」

「正子か、正しい子なんていい名前じゃねーか。まあ、これから頑張ろうや」

頭を撫でられ、ふと兄である藤野を強く思い出す。小さい頃よく撫でてくれた兄のように小さな手ではなかったが、大きくそれでいて優しい手だった。兄は世話好きで、泣き虫だった自分をよく慰めてくれたのを思い出し、今まで締め付けていた心の中のかなかが飛び出しそうになり、急いでその場を後にした。

翌日、343空の隊員一同が招集され、司令である牟田口が遂に作戦の話をし始める。小野里は部屋の片隅でハイドリヒと様子を眺め、勇は当てつけのように仕掛けられた盗聴器による音声で状況を把握していた。そして、静かに牟田口の話し始めるのを待つ静かな空間は、牟田口の言葉によって動揺に変わる。

「我々はここに、ここに至りて必ずや勝利を掴まなければならん。そこで諸君には必勝の作戦に参加してもらいたいのだ。それは通常作戦にあらず、特別攻撃隊の創設を決定した。その内容は・・・戦闘機で敵陣に突入し、体当たりを持って敵の中枢を撃滅することじゃ！もはや通常の作戦では通常の結果しか得られない！この世を救う神風の如く、諸君らにはその身に神を宿した軍神となりて敵を屠ってもらいたいっ！」

一同は通常の戦闘機による航空撃滅戦の心づもりで参加していたため、特攻という自分の命を部品にした作戦に動揺を隠せなかった。しかし、その同様すら牟田口は許さなかった。大きな声でその場を支配したのだ。

「よつてこの作戦は志願者に限定する！我こそは救国の軍神となりて世界に貢献せんという者は前へ出よ！」

この言葉に押し黙った一同を見て、牟田口はさらに畳みかける。

「諸君、今や世界は危急の状態じゃ。その中で赤穂浪士のように来世で仇討ちをなさうと思う者はその場に留まれ！もしくは白虎隊の如く大儀を守らんがために身を挺すという者は一步前へ出よ！」

扶桑人にとって最高の煽り文句を繰り出す牟田口は演説の天才だった。その言葉に心が動かされないものなど、精銳の343空にはいる者はいなかった。一人、また一人と前へ一步を踏み出す。ほとんどの者が前に出た中、一人のパイロットが声を上げる。

「自分はネウロイのために死んでやる気はありません。機関砲だろうが爆弾だろうが当てて帰ってくる自信があります」

その声の主は杉田だった。その一言を耳にした牟田口はゆっくりと杉田の前に立つ。

「君は、杉田庄一大尉だね。君の功績はよく知っておる。戦闘の神様ともあだ名される貴官だ、恐れに屈したわけではないだろうが……感動したっ！」

顔を俯かせ、ブルブルと震えたと思つたら杉田の肩に熱く両手をかけたと思つたら、まさかの大号泣の牟田口がいた。それには杉田も驚いたのか、牟田口のペースに飲み込まれていく。

「杉田大尉、貴官の生まれは確か長野だったね」

「は、はい！そうです！よくご存じで」

「貴官のように優秀でこれほどまでに救世心のある人間がどこから生まれてくるのかとワシは常々思つておつた・・・それが今、ワシの前にいるとは！ワシはまさに生まれながらの軍神と話しておる！」

肩から両手を握り、すっかり杉田は牟田口の手法にやられていた。周りも司令ともあろう雲の上の人物が自分たちの隊長に涙を流すことはこの上ない名誉だった。周りに押され始めた杉田は、号泣する牟田口の口車に乗ってしまった。

「分かりました・・・やりましたよ」



「おお！よくぞ言ってくれた！杉田大尉がいればもはや作戦は成功も同然！約束された勝利じゃ！今宵は酒も食事も豪華なものを用意しよう！宴じゃ！」

浮かれた隊員たちは司令の牟田口を伴って宴会に向かつてしまった。とんでもない詐欺を見た気持ちの小野里は立ち尽くしていた。まさか、本当に全員を十死零生の作戦に駆り立ててしまう弁舌を目の当たりにして冷静でいられる方がおかしかった。そして、思い浮かぶのは金平糖をくれた杉田の顔だった。恐怖に脚が竦む思いをしていると隣にいたハイドリヒが嘔き出した。

「さすがは閣下だ。あの演説と発想だけは私も勝てませんね」

くつくつと笑うハイドリヒを小野里はどう見ればいいのか捉えあぐねていた。上官であり、上司である人物たちがこうも納得し、正当な出来事であるかのように進めていく現状に、さきほどの驚くべき話がまるで当たり前のごとくのように思えてしまう。一度

自分の考えを整理しようとする、基地の奥から轟く悲痛な憤怒の雄たけびが聞こえてくる。

「おや、彼をほったらかしにしてしまった。さぞかし怒り狂っていることでしょう。小野里少尉、護衛を頼んでも?」

「は、はい」

小野里は勇の様子が気になった。かつて彼らと同じ部隊にいた勇は彼らの行く末を聞いたはずである。それをどのように受け止め、どのような行動に出るのかが心底気になって仕方がなかった。部屋に到着すると、既に鎮静剤を打たれながらも必死に抵抗しようとする勇の狂った姿があった。

「貴様ら・・・人間じゃない!」

「ははは、あなたも冗談が上手い!象も数時間は動けなくなる量の鎮静剤を打たれて尚

そこまでの力が！」

「殺してやる……絶対に殺してやる！」

勇の憎悪は凄まじかった。小野里でも信じられないような抑圧を受けてなおも人のために思いやれる心を持つ、赤松勇と言う人物が小野里の幻想を揺るがす。だがハイドリヒはそれをどこ吹く風のように受け流す。

「残念ですがそれは出来ません」

「なぜだ！」

「あなたは選択しなければならぬからです」

「何をっ?!」

「命です。あなたが私を殺すのなら、私の子飼いの部下が無条件であなたの関係者を殺害に向かいます」

「なんだとっ?!」

小野里はハツとした。その内の一人に自分が加担していることに。そして、それは自分が提案し、承認してしまっている事実。小野里の目標は501のミーナということになるが、ハイドリヒの命令一つでだれにでも目標を変えられるのだ。

「だれがいいでしょうねえ……502のラル少佐か、504の竹井少佐か、506のグリユンネ少佐か……はたまたあなたが姉と仰ぐ501のバルクホルン少佐か！」

「貴様あああああ！」

「同じカールスラントの軍人として手に掛けるのは残念ですが、あなたの行い次第です。そして、私にはその力があると思ってくださいね？もういいでしょう、少尉。眠らせてあげてください」

小野里は命令通りに勇に睡眠薬を注射する。勇は最後までハイドリヒを睨み続けたが、やがて眠りに落ちて行つた。勇を兵士が運び出すと、ハイドリヒが小野里の肩に手をかける。

「その時が来たら頼みますよ、小野里少尉？」

「は……い」

心の底を握られるような威圧にすくみ上りそうになる。決してこの男からは逃げられないのだと悟った瞬間だった。

翌日、夜遅くまで開かれた宴はいつの間にか静かになっており、朝が来ていた。事の重大さに気づいたのか、隊員たちは皆酒の悪い夢だったのだと、そういった面持ちだった。しかし、本日の出撃割には確かに隊員の名前が書かれてあった。そこには三人の名前が記載されてあった。

『横田峰一、井上勉、杉田庄一』

この日、命を代価に飛ぶ勇士の名前に最後に残された中隊の隊長である杉田の名前があったことに、小野里は驚いた。隊員たちは皆杉田に目をやる。しかし、杉田は一つも動揺した様子を見せず、タバコを蒸かしていた。小野里はその場を静かに立ち去り、司令室に向かう。司令室には酒が抜けない牟田口の姿があった。

「失礼します。本日の搭乗割ですが、どのように決めたかお聞きしてもよろしいでしょうか」

「んにや、なんじや。そんなことが聞きたいのか？」

「ぜひ、後学のためにお聞きしたく思います」

「ほうほう、感心じや。まあ、二人については適当じやな」

鼻をほじりながら言う姿に幻滅しながら、杉田が選ばれた理由を待つ。すると、鼻をかみながらつまらなそうに言い放つのだった。

「あやつは早めに殺さないと特攻の本質に反対しかねんからな。有無を言わさない内に死んでくれれば、他の者もついていくじやろうて」

「そう……ですか」

小野里はここに来たことを後悔した。一度しか話したことはないが、久しぶりに舐めた金平糖の甘い味は忘れられなかった。無関心を装って部屋を後にする。足音を悟られないように離れると、次第に駆け足になり勇が収容される部屋に向かう。勇は手と足に枷をはめられ、行動の自由を奪われていた。だが、静かに闘志を燃やし、苦悩の跡が見られるそんな姿に、どうしても小野里は悪意に満ちた言葉がついて出てしまう。

「おい、今日は三人死ぬぞ」

「そうらしいな」

「……杉田とかいう男も逝くぞ」

「……」

今度は勇は答えなかった。檻の中で俯きながら何かを秘めた男はもうなにも答えなかった。そして、その数時間後、遂に出撃の時間がやってきた。三人の男たちはたくさんの隊員たちに見守られながら、牟田口の酌を飲み、訓示を聞いていた。

「三人の若武者よ、軍神よ。ワシは君たちに願ひ奉る。願わくば人類の敵に我々の正義の鉄槌を、人類の本懐を叩きこまん事を……最後にはワシも行く。扶桑男児たるもの悠久の大義に逝くべしと」

厳かな挙式に大勢の送り出す声が翼に乗る。杉田の姿を一目見ようと、飛行場の隅から杉田の飛行機を見つける。既に滑走路を進んでおり、これが本当に最期の姿になる男の表情と言うのが見てみたくなかった。そして、その瞬間は訪れる。

「はっー」



杉田と一瞬目が合った気がした。いや、合ったのだろう。杉田の表情は微塵も恐怖の色はなく、笑っていた。そう、笑っていたのだ。そして、小野里を見た瞬間、その笑顔に敬礼を付けて飛び立った。ほんの一瞬の出来事だったが、小野里には理解できなかった。どうして今から必ず死に、二度と帰ってこれないと知りながらも笑っていられるのかを。小野里はその答えがどうしても知りたかった。小野里は自然と電信室に足が向いた。

一方、勇は隊員たちからは目の届かない場所からの出撃だった。ハイドリヒに連れられて、出撃メンバーの護衛を務めるのだ。勇は昨日から一睡もしておらず、その限は暗紫色を示していたが、それも気にならないほど煮えたぎっていた。

「さて、彼らにも一応護衛が必要ですからね。あなたが彼らを最後の最期まで護衛しければ安らかにヴァルハラへと旅立てるといふものです。ああ、逃げてもいいですがその際は分かっていますね？」

「うるさい、護衛に遅れる」

ハイドリヒはニヤリと笑みを浮かべつつ、発進許可を出す。勇の使用していたユニツトは没収されており、現在使用しているのは陸軍の隼だった。隼に乗る理由も、勇がこの基地に在ることを悟られないための偽装であり、また墜落ちの性能の隼を与えることで少しでも実力を削ぐことを目的としているためだった。

「赤松勇、出るっ！」

勢いよく発進した勇は卓越した魔法力操作により、普通の隼の巡航速度を超えて進んでいた。ワートルロー基地から目標の敵中枢があるベルリンまではおよそ450kmあり、一時間もあれば着いてしまう距離だった。前人未到のこの地では敵がごまんと待ち構えている。勇はアフリカから欧州に向かう際、一度ベルリンを訪れているがその時にですら近づくのがやっとの地獄だった。そんな場所に三機の戦闘機が向かうのは自殺行為である。

「だからせめて・・・必ず目的地まで無傷で辿り着かせるんだ」

勇に逃げると言う選択肢はなかった。誰かを選べば誰かに皺寄せがいく。全て自分の存在のせいでだれかが巻き込まれるのだ。自分の姿がもう死神に見えて仕方なかった。そんな中、合流地点で三機の戦闘機が姿を現す。紛れもない杉田の戦闘機だった。懐かしの機体はピカピカで、唸るようにエンジンが咆哮を上げていた。

「杉田隊長お!!!」

その声は聞こえないことは分かっているも叫ばずにはいられなかった。勇には通信機の類は持つことを禁止され、誰とも会話をすることが許されなかった。だが、勇の姿を見たであろう杉田は風防を開けると何かを叫んでいた。

「付いてこい！俺の愛する列機よ！」

最後まで杉田であると、最期の再会がこんなにも輝いた顔で迎えられる人間などこの世のどこにもいないだろう。勇は銃を握りしめ命を賭けて戦いに備える。

その頃、電信室に待機していた小野里は、通信員の操作する機材に耳を聳っていた。牟田口もその戦果の瞬間をいち早く聞こうと電信室に押しかけていた。すると、突然電子音が室内に響き渡った。

「符合を確認！二番機横田飛曹長ですっ！」

「いいぞ！突っ込め！」

興奮のあまりバンバンと机を叩く迷惑極まりない司令官を他所に、全ての通信員が耳

に全神経を集中させる。モールス信号のツーという音が鳴り響く中、それが突如ブツリと途絶える。そして、その音の長さで通信員が判断を下す。

「横田飛曹長、突撃に成功！」

「いよっし!!!」

「三番機、井上准尉突入を開始っ！」

通信員の震える声もはや電子音に聞こえる狂った室内で、次の隊員も目標に命中判定を下す。そして、遂に一番機の突入が開始された。しかし、そのモールスの符合は他のものと異なっていた。「我、突入す」の意味のト連送の後、平文で送られてきたのは長い信号ではなく短いものだった。

「なんと?!杉田はなんと送ってきた?!」

「はっ、それが・・・」

「なんじゃ?!」

『『サクラ サクラ』と……』

小野里はハツとした。桜は扶桑の美しい花である。それに自分を例えたのではないか、咲き誇り、儂く散る桜の映像が流れ、杉田の桜を楽しむ姿も同時に流れてくる。小野里は杉田の最期を追った。しかし、それ以降通信が入ることはなかった。

勇はふらふらとする足取りでハイドリヒのところに戻ってきていた。ハイドリヒはまるで天使を出迎えるように寄ってきて、早々に戦果を尋ねてきた。

「で、戦果は?」

「……二番機、三番機ともベルリンに存在する敵の大型建造物型ネウロイに突入。成功した」

「それで!」

「一番機、杉田大尉機は……目標を定め突入。その直後……」

「どうしました?」

勇は恐ろしいと思う恐怖がこうも叩き突き付けられるのは久しぶりだった。これまでの教育と称した拷問も恐ろしいが、今日見た敵と比べればおままごとにししか見えなかった。目を覆い、乱れた呼吸と滴る汗が鬱陶しく、生唾ばかりが喉を通る。

「新たな敵が杉田大尉を撃墜しました・・・その敵は、技を・・・『瞬間移動』を使用したのです!」

勇はネウロイと言う存在がどういうものなのか、今まで考えたことがなかった。しかし、考えざるを得ない状況が発生したのだ。あのネウロイはどう見ても意思を持った人間だと。

## 籠の中の翼 第九話

最初の特攻の日から数日、その日も特攻が行われていた。既に三組が特攻に出撃し、合計7人が戦死していた。この日の出撃は二人であり、いずれも精銳の老練なパイロットだった。そんな彼らもベルリンの手前までが徐々に警戒されて来ており、この日も勇の護衛が万全を期して進撃できていた。道中では久々の勇との再会に喜んで手を振ってくれた気のいい人たちだった。しかし、ベルリン市街に入った途端突如として現れるネウロイに勇は全力を挙げることになる。

「あの釣鐘型のネウロイがここの首魁だっ！お願いだから届いてくれ！」

瞬間移動するネウロイは、勇を意に返さず集中的に戦闘機を狙っていた。戦闘機はその腹に爆弾を抱えており、鈍足だった。ハイハイ歩きの幼子を叩き墜とすように無慈悲な攻撃が繰り返される。勇もなんとか攻撃を防ぐも一機が犠牲になる。



「くそっ！零戦じゃ太刀打ちできないぞ！」

瞬間移動は自分が今まで使用していた固有魔法なだけにその対処の困難性も十分に理解していた。しかし、勇は以前使用していたという経験を頼りになんとか食らいつつ。戦闘機の花道を作り、遂に首魁の目前まで辿り着いたとき、無数の攻撃が戦闘機を襲う。勇は既に瞬間移動ウィッチだけで手一杯であり、護衛は不可能だった。戦闘機はギリギリ撃墜され今日も戦果らしいものは挙げられなかったことに歯噛みするも、今度は勇に危険が迫る。瞬間移動型ネウロイは最後の目標である勇に絞りを絞って攻撃してくる。

「ぜえ、ぜえ……これでも喰らえ！」

駄目押しに放った大威力の爆発魔法を三連射すると、爆炎に紛れて退散する。その最中、勇に悪寒が最大級の警報音を放つ。咄嗟に避けると、瞬間移動型ネウロイが勇に切りかかってきていた。頬を掠めるほどギリギリで回避、もう一度今度は至近距離で爆発を起こすとまたも消えてしまう。無我夢中で撤退していると、遂に諦めたのか追ってこなくなつた。

「はあ、はあ……やつと巻いたか。でもあいつ、なんか変だぞ。なんだ、なにか思い出しそうな何かなのに！」

勇の頬に刻まれた切り傷が疼くように勇に何かを知らせてくる。記憶を辿ろうとすると強制的にモヤがかかるような意図的な記憶の欠損に苛立ちばかりが募っていく。考えているうちに基地に着いてしまい、牟田口の罵詈雑言に晒される。

「どうして貴様がいながら戦果が出せんのだ!?!何が世界最強のウィッチだ!どいつもこ

いつも無能ばかりだ！体当たりすればいいだけの簡単な任務もこなせんとは、軍神が聞いてあきれれるわ！」

沸々と湧く怒りを必死に抑えていると、ハイドリヒが牟田口に少し離れたところから話しかける。

「閣下、お話したいことがあります」

「うるさいっ!!!」

ビュンと空を切る指揮棒のような厚い棒を予め来ると分かっていたため、ハイドリヒは遠くから話しかけていた。そして、ハイドリヒはニコニコとした顔でおもちやを披露する。

「遂にあの秘密兵器が全員分揃いました。これで特攻の戦果は確実にでしょう」  
「なにっ!? あれが来たのか! 待ちかねたぞ! すぐ見に行こうぞ!」

先ほどまでの怒りが嘘のように牟田口は小走りで格納庫へと向かう。ハイドリヒが勇を連れ立って案内すると、格納庫には勇の想像を絶する兵器が並んでいた。それは白い塗装に、桜のマークが施された、翼付きの爆弾だった。

「ああああ遂に! 遂に実物をこの目で拝めるとは!!!」

類ずりするように兵器にメロメロの牟田口が称賛するその兵器の名は『桜花』。人間ロケット特攻兵器である。

「最高速度はマッハ1.5。機首前方には1トンの炸薬が盛り込まれた徹甲弾仕様と

なっています」

「おお素晴らしいぞ！これで一切合切を．．．一切合切を振り切り！無に帰すのだな！」

「はい！閣下のお望みの仕様となっています」

「素晴らしいぞハイドリヒくん！」

興奮を隠しきれないおやしほど寒気のするものはない、そう思いながらも勇はこの兵器の恐ろしさに気づき、身震いしていた。

「こ、これはどうやって飛ばすんだ．．．」

「あん？ハイドリヒくん説明したまえ」

「はい喜んで。これは飛ばすのではなく、人間が中に乗って操縦するのですよ。詳しくは一式陸攻に吊るし、目標が確認でき次第投下．．．あとは搭乗員の腕次第ですが、誘導ジェット爆弾という前代未聞の特攻兵器により我らは勝利を掴むでしょう」

立ち眩みがしてきた勇は、命までを部品にしてしまった『桜花』の悲しい未来を想像する。マツハを体験したこともない者たちが受ける苦痛は想像に難くない。項垂れる勇に優しくハイドリヒが励ましの言葉を送る。

「どうしたと言うのです、赤松勇大尉？これまでと何も変わらないではないですか？方法はどうであれ目的は一緒です」

「そういうことじゃねえんだよ……こんな生きたままの人間を入れた棺桶で！どうしてお前らはここまで人間を捨てきれんだ！」

ハイドリヒは桜花に夢中の牟田口を放っておき、勇の質問に答える。

「ハハハ！本当にあなたは冗談が上手い！では、私を理解してもらおうための第一歩をお教えしましょう。赤松勇大尉はここ、ワートルロー基地がどんな歴史のあるところか知っていますか？」

ハイドリヒはまるで歴史の授業をするように話し始める。お伽噺の中に入ったように語るハイドリヒは当時の人物が憑依したようでもあった。

「あれはナポレオン皇帝が黒海へ大規模遠征を行った時のことです。彼は当時のヨーロッパのほとんどをその手に入れました。戦史に残る圧倒的な才覚が電撃的に彼に味方したのです。しかし、その黒海への遠征ではネウロイに侵攻を阻まれ、遂にはあのナポレオンも失脚させられるまでになった：彼の電撃的な進軍速度を持ってしても、ネウロイには敵わなかった。それは彼らが時代と人間と言う概念に捕らわれたパラダイムに囚われていたからだと思ふのです」

確かにナポレオンはその頭脳とカリスマ性でヨーロッパのほとんどを手中にした天才である。当時としては先進的な戦術に、彼の魅力に後押しされた士気により、当時では考えられない速度での進軍を成し遂げた。だがハイドリヒはそんなナポレオンすら

否定して見せる。

「産業革命により動力を得た我々は生き方を二次元から三次元の面から体にそのあり方を変遷させました。つまり時代は航空機です。そしてナポレオンが成し遂げられなかった距離と言う壁を速度で超越し得る現世では、速度が火力なのだ、と気づいたのです」

どこかの国家元首は「早い脚より厚い皮膚」という名言を残していたが、この悪魔は速度が命だと宣う。そして、ハイドリヒは自分の正しさを裏付けようとする。

「しかし、速さは命中精度に欠けるのです。ノイエカールスラントではあるウィッチがジェットや誘導爆弾について研究していましたが、あれでは駄目です。あれでは時代、ネウロイと人類の今大戦には間に合わない。さてどうしたものかと思案していた時です。閣下が画期的なアイディアを提示したのです」



牟田口が提案したのはこの桜花の原案となるものだった。それに魅了されたのがこの悪魔、ハイドリヒだったというわけである。まさに最悪の組み合わせ、虎に翼、鬼に金棒を極限まで最悪に煮詰めて出来上がったのがこの二人だったという巡り合わせに失望する。

「まったく、閣下は無能でありながら最底辺の住人であられる。私のような者には到底思いつかないような発想する金の卵を産む鶏ですよ」

司令官であり、上司のはずの牟田口を鶏、無能、最底辺と罵るハイドリヒに勇は驚いた。常に敬語のハイドリヒは牟田口の良い理解者であり、仲間だと信じて疑わなかった。驚いたように瞬きをしていると、ハイドリヒは面白そうに遂に悪魔の顔を見せてきた。

「私がいつあの馬鹿の手下だと誤解していましたか？心外ですね．．．奴は身代わりとして生かしておいているただの人形に過ぎませんよ？私の新世界にあのような屑はいりません」

はつきりと断言するハイドリヒの心には一体何を思い浮かべているのだろうか。ハイドリヒの理想郷に住む人間の世界が一向に想像できなかつた。どこまでも夢の先を探ろうとするハイドリヒは今日も笑っていた。

そして、ついに桜花での特攻作戦が開始されようとしていた。隊員たちは今まで見たこともないその機体の無言の圧力にただただ押し黙って死を受け入れる時間だけを探し求めていた。各々、今日の出撃メンバーにならないことを願いながらその日を過ごし、家族に手紙を書いたり、念入りに自分の戦闘機を整備する者、タバコや酒に手を出す者など様々だった。そんな特攻隊員の姿を端から見ている小野里は、自分があの立場じゃない幸運を噛みしめている自分に疑問が募っていた。

「なぜ彼らは逝くのだろう。なぜ私は生きて行けるのだろう。私と彼らとの違いはなんだろう。人とウィッチカの違い？男と女の違い？誰も彼もあの赤松勇という一人の男と関わったという点で運命がこうも変わってしまうのだろうか。じゃあ、赤松勇はみんなに恨まれていいはずなのに、どうして彼らはみんな笑って逝けるのだろう」

死の淵にただ歩かされている哀れな隊員たちと自分の相違点について必死に探そうとしている自分に驚くことはもうなかった。そんな中、一人の特攻隊員が宿舎を離れて森へと入った。小野里はこっそりとその後を付けてみる。すると、木々の間で立ち止まると懐から何かを取り出した。それは写真だった。

「たか子……帰ってやれなくてごめんな。もう一年半もお前と赤ん坊の顔を見ちやいな。ああ、お前らの顔ももうあまり思い出せないんだ……たか子！会いたい！生きてお前の肌の温もりを、お前の飯を食いたい！お前の横顔を見ながら眠りたい！たか子おとおお!!ああああ!!!」

木々に埋もれて誰にも聞こえないだろうところで、こうして木霊する悲痛な叫びは、先ほどまで笑って過ごしていた者とは思えなかった。小野里はその叫びを聞きながら、死に行く英霊の魂は生きたいと願って憚ることはないのだと、これが彼らの本音である。と知ってしまった小野里は漏れ出る何かを必死に抑える。人知れず誰かのためか、もしかしたら本当にただ死んでいるだけかもしれないが、彼らは死ぬのだ。死ぬために今日を生きている、生かされているのだ。

「こんなの、おかしいよ．．．」

翌日、出撃割にはあの森で泣いていた兵士の名前があつた。その名前を見た瞬間、小野里は勇のところへと向かつていた。既に出撃準備を整えて、時を待っていた勇に騒ぐ心を見透かれることのないように話す。

「おい、今日の特攻からは桜花なんだろう」

「ああ」

「お前なら守れるのか」

「いつだって初撃は相手も混乱する。今日はもしかしたらうまくいくかもしれん」

勇の言葉に少しの希望を抱く。しかし、小野里は本当の気持ちを言いたくて仕方なかった。本当は森で泣いていた彼を救ってほしいとこんなにも願っているのに、勇の前で本音を曝け出すのが怖くて仕方がなかった。すると、勇が目の奥に宿した炎をメラメラと燃やしながら小野里に言った。

「お前、なんのためにここに来たんだ」

「え．．．」

「本当のことを言えよ」

自分ともあろう者が一番知られたくない相手に本心を見透かされた気がして、喉がキュツと締め付けられる。まだ無表情を貫いているはずの自分のどこからこの男は察したのか本当にわからなかった。

「なんのことだ」

「だって・・・お前、泣いてるじゃないか」

小野里は言われたことの意味を理解するのに数秒を要した。泣くことは昔に止めたと考えたから、今自分の頬を流れていく液体が涙だと気づくことができなかつた。急いで袖で拭つても、涙は後から後から止めどなく流れてくる。見られたくない相手に見られた。その羞恥心と敗北感がさらに涙を加速させる。

「お前も苦しんでいたんだな」

「うるさい！これは、これは違うっ！」

優しい言葉に遂には膝の力までが抜けてきてしまい、少し気を抜いたら崩れてしまい  
そんな自分が情けなかった。だが、どうしてもあの兵士の昨日の顔が頭から抜けなかつ  
た。

「任せてくれとは言えない。俺も生きて帰るのがやつこの世界だ。でも、彼らのことは  
俺が全部背負う。彼らの今日は俺が明日へと繋ぎたいんだ」

「傲慢だ……お前も最後には逝くんぞ。だれがお前のことを覚えてやるものか」

悪態がついて出てしまうが、自分の意図をこうも読み取ってくれる頼もしいこの男  
に、小野里は縋ってしまう。止めどない涙だけが温かな自分の気持ちを代弁しているこ  
とは皮肉としか言えなかった。

勇は桜花の出撃隊員四人であることを確認する。残りの隊員が今日の分を合わせて  
10人であることを考えると大盤振る舞いである。そこまでして人を殺したいのかと

怒りを煮やす。だが、今日の特攻からは勇も少し気が変わっていた。それは小野里に頼まれたわけではないが、その涙が語っていたのだ。救ってくれと。

「赤松勇大尉、出るっ！」

道中の敵を掃討し、ベルリンまでの活路を開く。日に日に増していく敵戦力の険しさを、勇は己の全てを持って防いでいく。それはまるで山本が言っていた盾の仕事であり、だがそれでいて食い違う盾の用途に人の業が見え隠れしているようで誇れはしなかった。ただ、自分の盾で誰かの道が切り開けるのならと、そう考えていた。

「桜花投下5分前っ！」

勇は一式陸攻のコックピットに対して五本指を見せる。分かったとばかりに操縦士



たちは機体をバンクさせる。この桜花の輸送機のパイロットたちはハイドリヒの子飼いの隊員たちであり、扶桑の機体である一式陸攻の操縦訓練を慣熟させていた。そして、時は訪れる。

「投下っ!!」

輸送機のパイロットがそう言うのと、桜花は陸攻から切り離され、自由落下の後に一気に燃料を転化させて進んで行く。その速さは勇に追いつけるものではなく、ベルリンの郊外から投下させるため目標への正確な誘導は無理だった。桜花は物凄いスピードでベルリンの市街に突っ込んで行く。三機の桜花はベルリンの街と共に逝くのだった。

牟田口は勇が帰ってきたことで、鼻息を荒げて報告を待つ。今度からは通信機の類が輸送機にしかないため、正確な戦果は勇の口からしか知ることが出来ないのだ。そんな勇が疲労困憊の状態で帰還する。牟田口は詰め寄り戦果を聞き出す。

「して成果は?!」

「・・・二機がベルリンの大型地上ネウロイの破壊に成功、二機は目標をややずれての至近弾となりました」

牟田口は久々の戦果に湧いていた。それを聞いていたハイドリヒが質問する。

「どうして外したのでしょうか？仮にも精鋭の彼らですよ？」

「・・・あんな音速を突破した状態じゃ、気を失ってもおかしくはないんだよ」

「なるほど」

ハイドリヒは納得がいったとばかりに何かを思案し始める。もはやこの空間には涙を流す者はいない異質な空間だった。そして、この結果に気をよくした牟田口はここぞとばかりに戦力を投入する。その翌日には残り6人の内の5人を向かわせることを決

定した。勇は何度も敵の警戒が上がっているため中止を申し入れたが取り付く島もなかった。

「これじゃベルリンに着く前に全滅だぞ！くそがつ！」

勇は悪態を零しながら出撃する。そもそも投下された時点で勇には手が出せず、重量が1トンを超える桜花を積んだ一式陸攻にはかなりの無理があった。飛行はかなり鈍足になり、道中のネウロイ地帯の突破ですら困難になっていた。今日も勇は道中の敵の襲撃に構えていた。すると、勇の目の端で何かが煌めいた。

「早いッ!?!」

勇は今日の出撃が予定よりも早く終わったため、憎悪を隠そうともしない牟田口の前

に立たされていた。打ち震えながら口を開こうとする哀れな司令官は、今日の戦果に愕然とする。

「全機撃墜・・・輸送の一式陸攻までも全機未帰還じゃと・・・一体ワシは夢でも見ているのか！」

「いえ、道中の敵が特に強化された結果かと」

「っ！貴様のせいじゃ!!！」

机の脇に備えてあった鞭で勇を強く殴りつける。勇はよろけながらも持ち直すと、その額からは赤い血が流れてきていた。

「貴様がいながらなぜこんな結果なのじゃ！戦果は?!ワシの戦果をどこへやったああああああ!!！」

鞭を乱れ打ちしてくる牟田口の口撃を勇は耐える。目の前のことに囚われている哀れな小男が惨めで仕方がなかった。しかし、こんな男が彼らを死地に追いやった張本人なのだ。自業自得という感情と怒りの感情が交差して無茶苦茶だった。

「道中のネウロイは超高速で接近し、一撃離脱に徹底した戦術でした。それに不規則な挙動をあのスピードで取ってきます。私でなければ撃墜は至難の業です」

「して、何機墜としたのじゃ・・・」

「・・・三機です」

「もうそれを戦果とするしかあるまいて」

勇は今すぐにでも目の前の男を殺してやりたかった。自分が必死で守ろうとした私たちの行動を一つも見ようともせず、挙句の果てに勇の戦果を彼らの物としようとしていることは、彼らに対する侮辱に他ならない。そこにハイドリヒが口を挟む。

「閣下、問題は速度でしょう。一式陸攻では無理がありました。ならば……」  
「そ、そうか!!あれならば!」

ハイドリヒと牟田口が揃って喜んでいるものとは、又よからぬものがワートルローに舞い込んでくるのは時間の問題だった。翌日、ワートルロー基地には三機の怪物が舞い降りる。その巨体は銀色に輝き、鯨ほどもあろうかと言うほどの圧倒的な存在感は何もかもを屈服させるだけの恐怖の塊を運んできた。

「あれは……」

「ふふつ、あれが我々の決戦兵器の一つ、リベリオン製設計図を私たちが極秘裏に盗み開発したB-29フライングフォートレス。私はあれを「Moby Dick」……『白鯨』と呼んでいます」

ハイドリヒが白鯨と呼んだ超大型最新鋭爆撃機は、あの桜花を軽々と搭載し、高高度を悠々と飛行する。まさに大空を泳ぐ白鯨そのものだった。そしてもう一つ、その白鯨から現れた人物に勇は目を奪われた。その人物は、山本を失い、勇が助け出し、その後生死の境を彷徨ったはずの赤松貞明、その人だった。

「なぜ赤松貞明大尉がいる?!彼はまだ療養中のはずだろ?!」

「落ち着いてください。彼は自らこの作戦に志願してきたのですよ?」  
「なっ?!」

勇はもう一度貞明を見る。もう怪我など微塵も感じさせない堂々たる姿に迷いは見られなかった。こんなにも根こそぎ勇の仲間を棺桶に積み込む白鯨とは一体何だと言うのだろうか。勇は悔しくて溜まらなかつた。

「まあ、私としても扶桑海軍甲事件の関係者はすべからく消すつもりでしたが、手間が省

けました」

悪魔が人間ではないことは薄々感じていたが、ここまで人間に似た悪魔もいないだろう。勇は残り二人となった仲間を死なせるために守る葛藤に苛まれていた。自分の師であり、仲間であり、戦友でもある彼をどうにかする手はないか思索してみるのが、やはりどうすることもできない自分が歯痒くて溜まらない。

「必ず！必ず二人をベルリンのあのネウロイの下へ届ける！どんな障害があろうと、俺が例え壁になろうと絶対のだ!!」

勇はハイドリヒに恥を捨ててユニットの転換を願い出る。ハイドリヒは難なく新しいユニットを用意しており、『白鯨』に追従できるだけのユニットであるリベリオン製P-51戦闘脚を勇に渡した。これで高高度でも追従できかつ、防御やスピードの問題もある程度は克服できたが、一番の問題はベルリン市街にいる瞬間移動型ネウロイの存在



だった。確かに、ロケット特攻兵器である桜花になってからは瞬間移動型ネウロイの妨害は確認できていないが、それは検証回数が少ない確認の無いものだった。

「まだだ、まだ足りない。どうすれば・・・」

勇は考え抜いた結果、501で行った高度3万3333メートルの敵のことを思い出していた。彼女らは追加加速装置を着けていた。このロケット特攻を行う基地ならば、予備の追加加速装置など探せばいくらでもあることは確かだった。しかし、障害があるのも確かだった。それは、勇が行動の自由を制限されており、格納庫に近づけないことだった。勇はある人物のことを頭に思い浮かべるのだった。

最後の特攻当日、勇は檻の中である人物が来るのを待った。必ず来るという確証はなかったが自信はあった。そして、勇はその賭けに勝つ。

「今日で最後だ。無力なお前の最後の日だぞ」

その人物はやはり少し悲しそうだった。無表情の奥に秘められた感情の渦が戸愚呂を巻いて出てきていたことは勇には分かっていた。勇はそんな彼女に頼む。

「お願いがある」

小野里は勇の話を黙って聞いていた。そして無言で立ち去った。結果は推して知るべし、勇が出撃するときには自分のユニットにはきちんと追加加速装置が取り付けられていた。

「ありがとう・・・」

勇は久しぶりの感謝の言葉に胸を軽く、決意を固くする。勢いよく発進するとスロツトルを上げて高度を上げた。ベルリンまでの道中には何波にもなる波状攻撃が仕掛けられることは明白で、勇はこのあたりのネウロイを狩り尽くす勢いだった。もちろん高度に『白鯨』に近づこうとする小型ネウロイなどは途中で限界高度にぶち当たり、へろへろになったところを仕留めることができた。そして、第一の難関が勇たちを襲う。

「来たなっ！前までの俺だと思ふなよ！」

ジェット機のような形状をした超高速ネウロイが複数同時に出現した。勇にはもはや勝てる未来しか見えていなかった。

「遂に……辿り着いたぞ！白鯨、投下準備だ！」

結局6機ものジェット戦闘機型ネウロイを撃墜した勇は、息を切らしながら眼下に見えるベルリンの街に歓喜する。そして、運命の最後の特攻が始まる。

「今だっ！投下しろっ！」

勇が手を下すと同時に勇は先んじて急降下を開始する。後から桜花が投下された気配を感じ、勇も追加加速装置を点火させる。凄まじい速度に耐えながら、桜花に追従する。二機の桜花は轟々と音を立てて突っ込んでくる。速さで勝る桜花がギリギリと勇に追いついて来る。その瞬間、勇の隣を並走する男の顔が見えた。それは紛れもない赤松貞明だった。

「松さん……隊長、あなたを死なせたりはしない！」

聞こえるわけがないが、勇が貞明機に近づくと貞明は勇の顔を見るなり憤怒の表情になつて拳を突き上げる。勇は怒る貞明の意図が分からなかったが、その口の動きで察してしまふ。

『ばかやろう！ぶつとばすぞ！』

赤松貞明という男は最後まで自分を子ども扱いしてくるのだった。勇にはそれが悔しく、それでいて嬉しく、悲しかった。こんな時にふと、思い出す光景があつた。それは、勇が欧州に派遣される際に約束した会話だった。

『勇、お前の生き方は常に考え、ああでもねえこうでもねえって迷いながら、間違えながら進まなきゃなんねえ。強くなけりやままならねえ世の中だ。だから、勇は勇の思う正しい方に進め。それが間違つたら俺がぶん殴つて元のところまでぶつ飛ばしてやる。』

それがお前にできる最後の説教だ。どんなにひねくれても必ず守るべきものだけは守り通せ。呪縛のように染みついて離れないだろうが、それが力を持った者の定めだ』

本当に最期まで自分の最高の師匠なのだと思感した瞬間だった。あの懐かしい会話はもう二度とできない。それでも勇と貞明は最後まで口汚く罵り合うことを忘れない。

「すみません、忘れてましたよ・・・あんたって人は」

『おう！しばしの別れだ！クソ優秀な弟子野郎！』

「はい！しばしの別れです！クソ傲慢な尊敬する・・・最高の隊長！」

貞明と本当にそんな会話をした気がした。貞明はニコツと笑うともう前しか見なかった。少しずつ離れていく距離に手を伸ばしかける勇はまだまだ弱かった。さらにもう一機には瞬間移動型ネウロイが接近しており、その迎撃にも労力を割く。

「今だあああ!!! 行けええええ!!」

瞬間移動型ネウロイを勇がしつかり抑えつけている間に、二機の桜花は釣鐘型ネウロイを狙います。瞬間移動型ネウロイもそれに気づいたのか、ようやく勇から離れようとすることもはや遅かった。そして、釣鐘型ネウロイの下へ二機が辿り着くと、大爆発を起こして土煙が辺りを覆う。

「やったか?!・・・な、なんだとっ?!」

勇が見たものは目を疑うものだった。桜花はきちんと突入し、爆発したがそれは釣鐘型ネウロイの少し手前だった。なんと釣鐘型ネウロイの手前には何枚もの壁が作り出されていたのだった。そして、最後の一枚まで迫った桜花の攻撃も虚しく、釣鐘型ネウロイは無傷で鎮座していた。

「聞いてないぞ……こんのペテン師めっ!!!」

勇が突撃しようとしたとき、災厄はまたも勇に立ちはだかる。瞬間移動型ネウロイが勇の目の前に出現し、攻撃を仕掛けてきたのだった。

「しまっ……」

勇は咄嗟に空いている左手を差し出してシールドを張る。大爆発の後、激痛が勇の左手に走る。魔法力を細分化させた硬質シールドを突き破り、勇の左手に突き刺さるネウロイの手のような部位からは、赤い血が滴っていた。勇は咄嗟に左手を捻り、相手の腕ごと引きちぎる。



「ごんのっ！」

ボキリと折れた敵の腕を振り払い、勇は今度は自分が攻撃を繰り出す。その爆炎を縫って勇は命からがらベルリンからの脱出に成功する。しかし、道中で痛む左手には痛覚だけが危険を訴えているのではなかった。

「なんだ、また記憶が侵食されてるような・・・つく！」

左手を見るとまだ、瞬間移動型ネウロイの破片が残っていた。止血をしていると、急にふと意識が飛びかける。その瞬間に見た光景は走馬灯のように勇の頭の中を駆け巡る。その光景には勇の最愛の人物が映し出されていた。

「姉さん……？」

## 籠の中の翼 第十話

牟田口は特攻作戦の失敗に全身から恐怖の冷や汗が滴つて、打ち震えていた。それは周りの木々までもが自分を嘲笑っているかのようだった。

「ワシは無能じゃない！あああああ!!!うるさい！うるさい！黙れ黙れ！」

拳銃を乱射し、木々に弾丸が無くなるまで撃ち尽くす。その音を聞いてもなお誰も駆けつけないことに、さらに怒りが際立つ。

「おい誰か！誰かおらんのか?!」

無人の室内に響き渡る自分の声が虚しく響き渡る。自信に満ち溢れたはずの作戦でこれまでに得た戦果は、ベルリンまでの敵を掃討し、ベルリン市街にいるネウロイの規模を捉えただけ。さらには無理やり徴収した戦力、航空戦隊二個中隊が全滅、桜花も全機損失、挙句に一式陸攻も大多数が消失していた。これは責任問題となり得、罷免されることは確実だった。

「なぜワシの天才的な作戦がこうも失敗するのじゃ！あやつ・・・赤松勇か！あの疫病神めっ！どこまでワシの邪魔をすれば気が済むんじゃ!!」

「うるさい虫がいたものですね」

静かに発された先にはハイドリヒが立っていた。牟田口は優秀な部下であるハイドリヒに縋る。

「ハイドリヒくん！どうか、どうかワシを助けてくれ！」

ハイドリヒはいつものように余裕のある佇まいで、牟田口の耳にも届くようにしつかりと言いつつ放った。

「触れるな、虫けら」

「なっ？なんだって!？」

ハイドリヒは牟田口を振り払うと、牟田口が触れた部分を払うようにハンカチで拭う。牟田口はハイドリヒの取る態度が理解できなかった。

「くう！裏切者っ！皆の者、であえであええ!!」

「お呼びでしょうか」

「おお！小野里！その反逆者を拘束したまえ!!」

ようやく訪れた小野里という部下に牟田口はハイドリヒを捕まえるように指示する。しかし、小野里は牟田口の命令にピクリとも動かなかつた。

「なぜじゃ?!なぜ動かん！ワシの言うことが聞けんのか！命令じゃ！ワシの命令じゃぞっ！」

「・・・」

「ふふふ、彼女はあなたの命令など聞きませんよ」

「どういうことじゃ?!」

ハイドリヒが小野里を手招きすると、牟田口の時とは違い素直に応じる。ハイドリヒの手元に寄ると、ハイドリヒは小野里の肩に手を置き、仲間であることを示唆する。

「まあ、ことういうことです」

「・・・なんじゃと。どうしてじゃ！ワシが貴様を拾ってやったんじゃ！ワシが拾わなければ仇に仇討ちすることも叶わなかった！ワシのっ！ワシのおかげなのに！」

「うるさい屑虫ですね。あなたは世界に対して重大な犯罪行為を犯した。世界の秩序を乱しました。よって私があなたを逮捕・摘発しようと言うのです」

ハイドリヒの言葉の意味が分からず、部下だった男の背後に現れる兵士たちが小野里と同じようにハイドリヒの隣に並び始める。そこでようやく味方がいないことを察する牟田口は、既に抜け殻だった。

「ハイドリヒ・・・お前も同罪じゃぞ・・・」

「軽々しく呼び捨てにするとは、まだ自分の立場が理解できていないようですね。あなたのような虫けらはいつものように突飛な発想をして私を楽しませていけばよかったです。それがどうです、全ての作戦が失敗して羽虫のように狼狽えるばかり。さあ、

「あなたの小さな頭脳で考えて見せなさい！」

馬鹿にされ、罵られようともはや抵抗する気力は湧かなかつた。そして、一つの発想が頭を過る。

「そうか．．．ワシの最後の切り札があつたではないか．．．赤松勇、奴しかおらん！ 奴にあの新型爆弾を括り付けて特攻させればワシはまだ．．．」

牟田口のその先の言葉は発することは出来なかつた。一発の銃声が牟田口の胸を貫く。

「全員聞きましたね。閣下はご乱心です。撃ち殺せ」



ハイドリヒの号令一過で全員が牟田口を射撃する。細切れになるかつての司令官は無残な血と肉の塊となり果てて朽ちた。その汚物を華美な部屋にそのままにし、ハイドリヒの部下は引き上げる。残ったのはハイドリヒと小野里の二人だった。

「小野里少尉、あなたは賢明です。きちんと強者がだれであるか嗅ぎ分けられる素晴らしい兵士です。そんな素晴らしいあなたに一つお願いがあります」

ハイドリヒは書類を取り出すと小野里に手渡す。その書類の右端にはとある人物の写真が添付されていた。

「度重なるこの部隊の失態の一端が彼女に見つかってしまいました。彼女からは即時赤松勇大尉の身柄の引き渡しの要求が来ています。それをあなたに阻止してほしい。言っている意味は分かりますね？」

ハイドリヒは優しく穏やかに諭す。小野里はハイドリヒの命令を聞く以外に道はない。肩に置かれた手が何より恐怖を植え付けていた。

「彼女、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐はもはや我々の障害でしかありません。我々はどんな障害も排除してきました。例えそれがだれであろうと、どこであろうと、です」

暗に、小野里にも裏切ったらどうなるかという脅しを掛けられていることは明白だった。小野里は立ち尽くしてハイドリヒから明確な命令を待つ。

「小野里少尉に命令します。彼女を、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐を暗殺してください」

「・・・了解、しました」

ハイドリヒは小野里の了承を取り付けると、肩を二度軽く叩き退室していった。残された血の匂いだけが漂った部屋に小野里は黙している。かつて自分を拾った愚将は死んだ。小野里はその時のことを思い出していた。兄の藤野の戦死報告が届き、泣いている自分の下をこの男が訪ねて来たのはある雨の日のことだった。

『正子ちゃんじゃな、なぜ泣いているのじゃ?』

『兄さんが死んでしまったの』

『悲しいかね?』

『とても悲しい』

『君はウィツチだ。泣いてはいけんよ。ワシが君のお兄さんの仇を討たせてあげよう。だから泣いてはいけんよ』

『仇?』

『そうじゃ。君のお兄さんが見ていた景色を君なら見ることができる。君は正しいこと

ができる子なのじゃから』

小野里はその記憶にそつと蓋を閉じる。かつての司令官である牟田口の傍に寄り、開いたままの瞼を手で閉ざしてやる。それが最後の奉公だと思つて。

「司令官殿、どうしようもない司令官でしたが、最後までいあなたの言葉を信じてみようと思います」

小野里はその足で勇に会いに行く。先日の戦いで負傷し、疲労困憊の彼は眠つていた。それでも小野里は話しかける。

「私、お医者さんになりました。母さんの病気を治すんです。兄さんもそれを聞いてとても喜んでくれました。だから兄さんは恩給の良い海軍に入隊したんです。

昔から喧嘩は弱くて、優しすぎる性格なのに……私がウィッチだと分かったとき、もしかしたら兄さんもウィッチになったのかなって思いました。でも男の人はウィッチになれないんだって。ウィッチなら帰ってきてくれるかもしれない、だってウィッチは強いんですから」

眠ったままの彼の横顔は金平糖の味を思い起こさせた。そんな横顔に小野里は声を掛け続ける。

「あなたが扶桑に来た時、共同慰霊墓地で拜んでいるのを実は見ていたんです。今ならわかります。あなたは兄さんを返しに来てくれたんですね。どこで亡くなったかもわからない私のたった一人の大切な兄を……あなたは強い人です。だれよりも強いウィッチです。でも今のあなたは籠の中の翼……私がその鍵を開けます。傷ついたあなたの心も私の治癒魔法で治してあげます。だから、あなたは羽ばたいてください。外に出て、この素晴らしい世界を救ってください」

小野里の言葉は檻の中の勇に届いたのか、それはわからなかったが、小野里はもう迷わなかった。一朵の涙が床を濡らす頃には、小野里の姿は見えなくなっていた。そこに、勇を連れに来たハイドリヒと兵士たちが通りかかる。

「長官、小野里少尉はたった今501に向かったとのことですよ」

「それは重畳です。彼女なら必ずやり遂げてくれることでしょう。アイヒマン中佐、彼女の経歴をきちんと改竄しておきましたか？」

「はい、ぬかりなく。彼女は我々の情報官として少佐の位を付与し、その証人も準備しました」

「よろしい。暗殺任務が終了次第その証人も始末するように。他の者は赤松勇大尉を連れ出しなさい」

兵士たちが慌ただしく動き出す中、ハイドリヒは勇の檻の前の床が濡れていることに気が付く。そして、それを見て薄く笑みを浮かべるのだった。

「まったく利口な駄犬ですね。これは面白くなってきました」

501基地ではネーデルランドにペリーヌ、リーネ、宮藤を女王の要請で派遣し、しながら静かな基地内の様相を呈していた。中でも501の隊長であるミーナと戦闘隊長を務めることになったバルクホルン少佐が話し合いをしている最中だった。

「ようやくユウの所在が掴めたわね。長い道のりだったわ」

「ユウがああの事件に関与しているの明白だった。それなのにどうしてここまでユウの情報が掴めなかったのか・・・巨大な勢力の暗躍があったとしか言いようがないだろうな」  
「そうね、でもようやくその担当官が接見するところを見ると、何かしらの動きがあったようね」

「ユウのことだ、今度はネウロイじゃなく後方でふんぞり返っている將軍たちでもひっくり返したのかもしれないぞ?」

そんな話をしてしていると、その担当官が到着したことを知らせに来る。ミーナとバルクホルンは部屋で待機していると、思ったよりも若くて小さな少女が入室してきた。

「お初にお目にかかります。情報担当官のヘンドラ・ユリーネと申します。連合軍情報局で少佐を拝命しております」

「初めまして、私が501統合戦闘航空団隊長のミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐よ。こちらはゲルトルート・バルクホルン少佐」

「よろしく頼む」

挨拶を済ませ、ミーナは齎された資料を一瞥してユリーネと名乗る人物を吟味する。若くしてウィッチとして発現するも、戦闘には不向きと判断されたようで、情報官として各地で活躍しているようだ。しかし、名前と見た目が一致しない違和感と、入室したのにも関わらず、脱がない軍帽という態度から質問してみることにした。



「申し訳ないのだけど、ユリーネ少佐はこの情報局にいらしたのですか？」

ミーナの質問にユリーネは苦笑いをしたかと思うと、いつもよくしている話のように身の上を話し始めた。

「ああ、やはり思われますよね？私の母がアジア系でして、父が貿易商を営んでいたこともあり欧州に移り住んだ移民なんです。見た目がこんなですし、よく間違えられるんです」

参ったとばかりに肩を竦めて見せる欧州人特有の仕草に、ミーナは納得する。帽子を脱いでみせると黒髪・黒目でありながら白い素肌に華奢な体格はさながら扶桑美人を彷彿とさせた。安心したミーナは勇の所在の情報について話を進める。

「赤松勇大尉のことについてはですが、現在ワートルロー基地の大規模な作戦に関与しているとの情報を掴んでいます。なんでも付近の現地部隊から大型の爆撃機を複数目撃している情報も合わせて入手しています」

「そうですか。なかなか良い耳をお持ちの様ですね。私の仕事もこれでは形無しです」

情報の正当性をここまで安易に認める情報官に、ミーナは呆気にとられてしまう。だがバルクホルンがはぐらかされてはいられないとばかりに追撃の手を止めない。

「私たちは過去に赤松勇大尉と作戦を共にした仲です。今回のオペレーション『サウスウインド』に彼の力が必要です。彼の身柄をこちらに引き渡していただきたい」

「お言葉ですが、一介の情報官には判断しかねる内容です。それに501は既に強力な戦力を保有しています。まだご不満ですか？」

バルクホルンの暴走をミーナが嗜めると、ミーナも議論を交わす。

「こちらは宮藤少尉が現在不調により、常時戦力にならない状況に加え、坂本少佐が抜けた分戦力は以前ほどありません。その上でこれまでも陳情を再三申し入れていたはずですが？」

「新しくウィッチを迎えられたそうですね。服部少尉でしたか？ 実に面白い陳情ですね？」

「彼女はまだ新人です。それにベルリンを奪還するのに最適な人材を最適な環境に置かない方がどうかしています」

議論は平行線をたどり、白熱していた。高度な政治事情を含んだ話にはバルクホルンが苛立ちを隠せない。

「ですから、彼は世情の上でも危険な立場に置かれやすく、私たちウィッチの環境であれば彼の存在感もさほど恐怖の対象とはならず、済むはずですよ！」

「ほう、あなたが彼の存在を上回れると？」

不遜な態度に加え、一向に勇の情報について話そうとしないユリーネという人物に我慢がでず、机を叩いて権幕を張ってしまう。

「もういい！ユリーネ少佐、あなたは勇大尉を出す気があるのか！ないのか！」

「・・・バルクホルン少佐、今日ここには話し合いに来たと思つたのですが？」

「バルクホルン少佐！座りなさい！」

ユリーネ、ミーナ双方の視線が刺さる中、バルクホルンは悲痛な心境を語る。

「ミーナ、私はユウが心配なんだ。あいつはいつも戦いの中に、危険の中にいる。そんなユウが何週間も連絡も取れないなんて私にはもう耐えられないんだ・・・もう、ユウがいなくなってしまうのは嫌なんだ」

「トウルーデ・・・」

拳を固く握り、齒を食いしばる姿にユリーネは俯瞰したように手を組んで質問を投げかける。

「バルクホルン少佐にとって、彼、赤松勇大尉とはどんな存在ですか?」

「仲間だ。大切な、それこそ弟のような存在・・・ユウは私の弟だ!」

「そうですか・・・大変美しいですね」

馬鹿にしたような言い回しではなく、本心から美しいと言っている様子のユリーネにミーナは驚く。こんなにも真剣にバルクホルンの話を聞くとはい思ひもしなかった。バ

ルクホルンが言い切る勇との間柄について、ユリーネは興味深さそうに頷く中、ミーナは自分にもその質問の答えが出るのか不安に駆られた。いつも信念を貫き、自分の意見を述べることで、どんな質問や会議でも乗り切ってきたが、この質問ばかりは自分の本心が揺らいでいた。それをユリーネは情報官らしく見抜いたのかも知れない。ミーナにも同じ質問を繰り返した。

「ミーナ中佐はどうですか？あなたにとって彼とはどんな存在なのですか？」

「彼は、赤松勇大尉は・・・仲間です。この上なく頼れる戦友です」

「なるほど、戦略上の友人・・・ね」

ミーナは答えを自問自答する。自分の答えが心で反芻した時、なにかが痛んだ。勇の記憶を辿ると、大変な記憶や楽しい記憶、愛した記憶、そしてほろ苦い記憶が渾然一体となった。ユリーネがミーナを分析するように見つめてきている。心の底までを見透かされるようなその目は、ミーナの重い口を動かした。

「戦略上の友人・・・そうかもしれません」

「ミーナ!?」

「でも、彼は、赤松勇は私にとって、想い、焦がれる存在です!」

「ん? ミーナ?!」

驚くバルクホルンとは対照に、ユリーネは口角を上げて見定め終わったと言った表情だった。失敗したかに思われた会話にバルクホルンは頭を抱えていると、手を叩く音が聞こえてきた。顔を上げるとユリーネが拍手をして微笑んでいた。

「合格です。やはりあなたたちに託しましょう」

突然の拍手と合格と言う言葉の意味に呆気に取られる二人だったが、顔を見合わせる  
と、その後から嬉しさが押し寄せる。握手を交わし、無言の幸福を噛みしめっていると、ユ

リーネが爆弾発言を下す。

「申し訳ありません、あなたたちを試していました。もし、ただの戦力として彼を見るのなら、決して渡すつもりはありませんでした」

「そ、そうか…ハハッハハハ…」

「申し遅れましたが、私が情報官というのも、少佐であるというのも全て嘘です」

「なにー!??!」

眼鏡を外し、服も脱いだユリーネは中に黒い制服を着こんでおり、別の部隊が本当の所属であることを見せつける。偽りの身分に自分たちを見定めるかのような彼女は、スクツと立ち上がると敬礼を繰り返す。その乱れの無い完璧な敬礼と身分に本当の彼女の存在を知る。

「私は元扶桑陸軍情報部少尉の小野里正子と言います。今は連合軍特殊作戦本部の少佐



として活動し、本日は赤松勇大尉の所在の情報と交換に、ミーナ中佐、あなたを暗殺する命令を受けてきました」

その言葉に二人はギョツとする。バルクホルンはすかさずミーナと小野里の間に割って入ると戦闘態勢を取って警戒した。しかし、小野里に戦闘の意思はなく、降伏のポーズを見せてきた。

「私は命令を受けてここに来ましたが、その命令を私は実行しません。なぜなら助けてほしいからです」

「あなたを？」

「いいえ、彼を・・・赤松勇大尉をです」

驚いた二人はまたもや顔を見合わせる。しかし、救助要請に二人は耳を貸す。

「あなたはユウの現状を知っているの？」

「はい、彼と同じ基地に居ました。彼は今危険な状態です。このままでは必ず死んでしまいます」

「そんな・・・」

「だから私がここに来たんです。ミーナ中佐、私を逮捕してください！」

ミーナは小野里の必死な目を信じ、詳しい作戦を聞くことにした。

数日後、ハイドリヒと勇は車に乗って移動していた。勇は501基地に出向いてハイドリヒの仕事に付き合わされるとのことだった。ハイドリヒは終始ご機嫌で資料を読んで、部下と話をしていた。

「小野里少尉からの報告は本当ですか？」

「はい、先日彼女から目標達成との報告が入っています」

「では彼女はどのようにして私の下へ姿を現さないのでですか？」

「はい、それがどうも敵の追撃が激しく、しばらく身動きが取れないとのことでした」

「なるほど、ご苦労様です」

勇は小野里がまた危険な任務に就かされていることが悔しくて溜まらなかつた。そんな視線に気づいたのか、ハイドリヒは資料を部下に預けると勇に向き直つた。

「怪我の具合はどうですか？」

「治りが遅いのが問題はない」

「それはいけませんね、あとで彼女に診てもらわなくては」

ニコニコと笑顔を絶やさないハイドリヒにうんざりしながらも、なんでも知っているような顔のハイドリヒは気味が悪かつた。確かに瞬間移動型ネウロイの戦闘時に負つた傷は治りが遅く、黒く変色していたが特に痛いと言うわけでも、壊死しているというわけでもない不思議なものだつた。そんななんでも知つていそうなハイドリヒに一つ自分の疑問を投げかけてみることにした。

「ハイドリヒ、お前ただの大佐じゃないだろ。連合軍の裏で暗躍する集団だな」

「よくわかりましたね。そうです、私は連合軍特殊作戦本部局局长であり、世界秩序保安局局长です」

「やはりな……てことは大佐も嘘だな。牟田口より上の存在ともなれば、大将しかない」  
「ご名答。よくできた赤松勇大尉は何を聞きたいのですか？」

勇は世界を渡り歩いた遊撃部隊の所属だった過去があり、その際に見聞きした集団と  
言うのがあった。世界の裏で暗躍するその集団は別命「アインザッツ・グルツペン」、通  
称「移動虐殺部隊」である。世界のどこであろうと、障害となる存在をこの世から消し、  
ターゲットになったら決して逃げることはできないとされるほど恐れられている、知  
る人ぞ知る集団である。そんな集団の親玉がハイドリヒだというわけである。そんな  
ターゲットのことならなんでも知っているハイドリヒに先回りされた質問を投げかける。

「ネウロイの正体なんだが、あいつらは……」  
「人間でしようね」

即答で応えるハイドリヒにはあたかも簡単な問題であるかのように言い放った。驚く勇を他所に、ハイドリヒは勇にもわかるように説明し始める。

「ネウロイがどこから来て、何が目的なのか……だれも本質を見ようとしなから分からないのです」

「本質？」

「ええ、ネウロイの語源が何かわかりますか？ 『ニューロン』ですよ。つまり神経細胞。古代ギリシア人はネウロイを『覚える者』と言う意味で名付けたのだそうですが、一体何を覚えているのか？ それは記憶です」

「記憶……」

勇には心当たりがあった。瞬間移動型ネウロイと交戦した時に感じたのは何かを思い出そうとする力だ。それを言葉で表現されて納得してしまう。ハイドリヒは共通の認識を確立しながら話を進める。

「ネウロイが水や寒さを嫌う理由がそれに該当します。人類は本来、水を嫌い、寒さから逃れた生活を送ってきました。その本能が彼らに息づいているのです」

「そうか……」

「彼らが我々を襲う理由、それは我々が彼らを忘却しようとしているからです」

「ネウロイを忘れる？」

「はい、ネウロイが世界を滅ぼす存在なのだとしたらなぜ環境を破壊しないのでしょうか。なぜ鳥や動物は見逃すのでしょうか」

一つずつ嵌っていくピースに勇は震えが止まらない。自分の予想が現実味を帯びることが恐怖以外の何物でもなかったからだ。

「彼らは忘れられた人間の記憶、意思で動いている。人類が文明を興し、人と人の繋がりが薄れる度に彼らは現れた。昨今では産業革命を成功させた人類はさながら大量の労働者の代わりに機械が仕事を取って代わり、仕事にあふれ、途方に暮れた者は世間から忘れ去られて行きました」

「それが今回のネウロイ・・・」

「島国やまだ独立して新しい大陸であるリベリオンにネウロイの巣ができないのがその証拠です。ブリタニアは余った労働者をリベリオンへ、扶桑はその独特な文化により人の繋がりを維持した。しかし、産業革命の産物である科学を、発明したわけでない者に文明を与えた結果が大量の浮浪者を出してしまう結果となったのです」

歴史を紐解くハイドリヒの歴史好きな理由が垣間見えたが、勇は全てを想像し、納得していた。コミュニティの多い扶桑では、本土に巣ができたことはない。扶桑海事変は大陸、古代清王朝が滅亡してきた荒廃した大地だった。時間を経て、忘れ去られた人間の意思が人であった頃の記憶を辿るからこそ、人間を狙うのだ。つまり、忘れてほしくないのだ。

「戦争を繰り返し、栄枯盛衰を遂げる度に忘れられる存在は現れる。歴史を見ればその時期にネウロイの出現時期がピタリと重なります。しかし現在は状況が異なるのです。与えられた文明の本当の意味を理解せず、ただ教科書に沿って扱う人間の愚かさが今回の事態を招いたのです。金に群がり、何を作るかも碌に分かっていない愚かな人間の人と多かつたことか・・・もはや人間こそがネウロイにとつて怪物に見えるのでしょうね」

必死に戦う人類は、ただこの戦争を忘れない、早く終わってほしいと願っている。この世界に住む人間、特に勇もそうだが戦争なんか大嫌いである。無駄な活動だとも思っている。しかし、勇にとつて戦場が全てであり、戦うこと以外の道を知らない。扶桑に帰国した時も、智子の誘い出してくれた普通の日常ですら勇には馴染めず、拒絶してしまつた。だからこそ、勇は結論に達してしまふ。



「じゃあ、あのネウロイは姉さんで間違いない……だって姉さんを覚えているのは俺だけなのだから」

自分しか分からない声量で話したため、その声は車のブレーキの音でかき消えてしまう。どうやら501に到着したようだった。勇に頑丈な手錠をし、連れ立つと基地にズカズカと入っていく。あまり人の気配はなく、本当にあの501の基地かと疑うほど静かだった。それでもハイドリヒは響く靴音が楽しいのか、司令室の扉を豪快に開け放つ。中には久しぶりに見る懐かしいバルクホルンの姿があった。

「なんだ貴様らは。ここは501の基地だぞ。部外者は立ち入りを禁止されている」

相変わらずのお堅い口調は健在なようだったが、今回ばかりは相手が悪いと目線を送る。

「おや、これは失礼しました。ここの指揮官がご不在と言うことで伺ったのですが？」  
「貴様に関係のない話だ。早く出て行ってもらおう」

何かを企んでいるハイドリヒは、バルクホルンの威圧に動じることなく大股でバルクホルンへと近づく。一触即発の事態に勇は冷や冷やししながら動向を見守る。

「話の分からない人ですね。指揮官が不在なのでしょう？でしたら待たせて頂きましょうー！」

「・・・私が臨時の指揮官だ」

「なんと！でしたら話は早い！連合軍最高司令部のお達しです！指揮官の権限をこの赤松勇『中佐』に移譲してください！これからは彼がここを仕切ります！」

「なにつ!?!」

勇も驚きだったが、バルクホルンはそれでも相好を崩すことはなかった。普段なら激高してもおかしくないはずなのに、どうしたのだろう、成長したのか、などと考えているとバルクホルンが勇を見て笑った気がした。それと同時に勇の背後から一人の人物が歩み寄る。

「それはどういうことですか？ハイドリヒ大将？」

それはまたも懐かしのミーナだった。最後に会った頃のほろ苦い思い出の少女は目の前で屹立としている。どうして彼女らウィッチはこうも敢闘精神逞しく、そして頼もしいのか。勇は嬉しくなった。しかし、ハイドリヒも未だに相好を崩すどころか、その状況を楽しんですらいいた。

「おやミーナ中佐ではありませんか！ご不在と伺ったのですが？」

「誤報を掴まされたようですわね。それに先ほどの話は一体どういことでしょうか？」

「？」

「またもや一触即発の緊張感の中、先に動いたのはハイドリヒの部下だった。ミーナの背後から銃を構えてしまった。勇も足で阻止するつもりが、ミーナは最初から分かっていたのか、銃を構えるよりも早く兵士を倒してしまった。」

「やれやれ・・・」

「私は話し合いができるものと思ったのですが、違うようですね？」

「ハハハ！さすがは西の狼ですね！大丈夫です、話し合いと行きましよう！」

「全てにおいて置いてけぼりを食らう勇を他所に、ミーナは組み伏せた兵士の拘束を解いてテーブルに着く。勇だけがこの状況を全く理解が追いついていなかった。」

「先ほどの話でしたが、赤松勇大尉の階級は大尉です。中佐ではありません。よって先

ほどの申し出はお断りさせていただきます！」

「いいえ、彼は私の、連合軍の拘束下にあります。よって以前の特務遊撃師団時の階級を適用できません」

「詭弁です！既にその師団は解体され、勇大尉自身連合軍によつて降格されています！それに師団と言うほどの戦力には兵員が足りません！」

「いいえ！私が連合軍の権限をもつて中佐に復位させましたので問題ありません。それに師団があります。私の師団が彼の隷下に置かれるのでその点も問題は皆無です！」

ミーナの指摘も尤もであったが、それを覆すハイドリヒの用意周到さには驚かされる。どうにかしてでも自分を手元に置いておきたい気持ちが表れている。しかし、ミーナも負けてはいなかった。切り札を出すように一枚の書類をハイドリヒに差し出す。

「これは？」

「501に対する妨害行為の陳述書です。先日、この基地に私を暗殺しに一人の部下を送りましたね？」

「はて、なんのことでしょう?」

「惚けても無駄です。本人からあなたが命令を出した本人であるという自白を受けています。これは明確な犯罪行為です。あなたを通報します!」

恐ろしい計画の実態に勇は寒気を催す。ミーナを暗殺する計画と、その実行者がおそらくこの場にいない小野里であることは明白だったからだ。ミーナが助かったと言う事実と、小野里がどうなったのかと言う不安が混ざり合い、殊の推移を見守る他選択肢が残されていないなかった。しかし、ハイドリヒを追い詰めた事実だけは変わらなかった。勇は遂にハイドリヒの呪縛から逃れられる希望を見た気がした。が、それも幻想に過ぎなかった。

「暗殺?逮捕?私には関わりのないことばかりで話になりませんね」  
「しらばつくれるな!証拠は出ているんだぞ!」

「ハハハ!証拠ですと?それはもしかしてこれのことですか?」

ハイドリヒの言葉の後に、部屋に連れてこられたのはポロポロになった小野里の姿だった。

「ううっ……」

「なっ！小野里少尉！」

「おや、知り合いですか？彼女は私の下を無断で離れた逃亡兵でして、もしかしてあなた方の所でご迷惑でもおかけしましたか？」

満面の嫌な笑みを浮かべ、勝ち誇ったハイドリヒの顔は黒く輝いていた。対照にミーナとバルクホルンは事の重大さと予想外の事態に腰が浮いていた。

「なぜ彼女の居場所が……」

「なぜって、私の仕事は秩序の保安！この世界の秩序の守護者なんですよ！裏切者の所

在程度分からなくてどうするのです！さて、私も仕事をしなければなりませんね？」

ハイドリヒは立ち上がると、兵士に拘束された小野里を引き取り、無理やり跪かせた。勇にはこの後の光景が見えてしまったが、ハイドリヒもそれに気づいたのか部下に命じて勇の口を塞いでしまう。確定した未来に勇は抵抗するが、もはや遅かった。

「彼女は我々の部下ですから。部下の躰は上司の責任、今処置します」

「な、なにを……」

「秩序の回復ですよ」

その瞬間、ハイドリヒは腰の拳銃を抜くと小野里を撃ち抜いた。弾丸は右胸から左胸を抜け、その穴から赤い鮮血が飛び散る。勇には小野里が倒れるまでの瞬間がスローモーションに見えた。ゆっくりと倒れる小野里は少し笑っていた。何かから解放されたかのような安らかな顔だった。勇は藤野の忘れ形見である妹の小野里の死を目の当



たりにし、怒りの熱さが限界を突破した。その熱さは自分の意識も自制できず、勇の意識は白く歪んで落ちて行つた。

## 籠の中の翼 第十一話

小野里が倒れ、勇も気絶してしまった混沌とした現場でハイドリヒは笑っていた。

「なんてことをっ！」

「私が私の部下になにをしようと勝手です。そして私は仕事をしたまで。あなたは私の仕事を妨害する気ですか？」

ミーナとバルクホルンはこのハイドリヒという男の狂気に対峙して何も言えないでいる。小野里の死と勇と言う自分たちの目標の両方をこうも潰されると言う予想外の事態に、敵の大きさを見誤ったことを理解する。ハイドリヒは勝ち誇ったように微笑むと、ある提案をしてくる。

「さて、ここであなたたちに私から提案があるのですが、あなた方の独立した指揮権は尊

重しつつ、我々もここにお邪魔させてはいただけませんか？」

ミーナとバルクホルンはそんな提案を予想だにしておらず、狼狽えたことで返事が遅れてしまう。そこに付け込んでハイドリヒは許可を取り付けてしまう。

「沈黙は承認の証ですね。ありがとうございます。私どもも困っていたのですよ。最強のウィッチを持っていながらウィッチが一人だけなんて華がないじゃないですか」

ハイドリヒは決定事項であるかのように宣う。こうしてハイドリヒは501基地への滞在を己の権限を持って承認してしまい、既に用意していた書類にサインを求めめる。

「ではミーナ中佐、サインを」

「待ってください！私は勇大尉の身柄の引き渡しを要求したはずですよ！あなたたち

は……」

「だから『赤松勇中佐の身柄』は引き渡しましたよ？我々は赤松勇中佐の隷下部隊なのですから何も問題はありません。だってあなたがそう要求したのですから」

話をいいように丸め込まれてしまい、ミーナはやむなくハイドリヒとの協議に入らざるを得なくなつてしまった。

「分かりました……ですが話し合わなければならぬことがあります」

「それはもちろん！我々は一応同士とは言え、間借りさせてもらう身ですからね。では私はミーナ中佐と協議に移ります。アイヒマン中佐、後は頼みましたよ」

「はっ！了解しました！」

「そうそう、小野里少尉の遺体はどこかへ。あと、小野里少尉の情報を信じたあの隊員は無能です。そこでミーナ中佐にやられた間抜け共々始末しなさい」

当然の如く進められる狂気の沙汰を目の当たりにしてミーナは抗議を展開するも、ハ

イドリヒはどれも取り合おうとはしなかった。そして、一応は身柄を引き渡された勇はバルクホルンに抱えられ、部屋に運び込まれたのだった。数分して目を覚ました勇はいつもの天井じゃないことに飛び起きた。

「小野里っ！……ここは？」

「我々の部屋だ、安心しろ」

「トウルーデ……そうか、小野里少はもう……」

勇は小野里がもう手遅れであることを悟る。藤野の妹を救えなかった事実と、兄妹揃って目の前でいなくなってしまうた罪悪感がやってくる。勇は額に手をかけて俯いでしまう。熱くなりすぎた頭が頭痛を引き起こし、それでなくとも吐き気が勇の精神を病んでいた。

「すまないトウルーデ、一人にさせてくれ……」

「ああ、ゆっくり休んでくれ……」

静かに閉められた扉は勇の孤独感を決定的にしたようだった。自分と関わった全ての343空の仲間が今、死んでしまったのだ。人数にして、その数35と源田、山本、その副官と小野里の合計39人。いずれも扶桑の至宝とも呼べる人間たちだ。これからの未来で活躍するであろう未来ある人間。指揮官として、時には部下を失うこともあるだろう。上の位の者ならば、それこそ数千単位の部下が戦死してしまうこともある。しかし、個人の因果で失った人数なら勇はこの戦争の歴史上一等賞だろう。そして、501もその犠牲の一部に加わってしまうことがなにより恐ろしかった。

「俺はトウルルーデたちまで巻き込んでしまうのか・・・」

501の仲間たちも勇にとつてかけがえのない仲間たちである。それこそ、最初期の自殺ばかりを考えていた頃に生きる希望を与えてくれたトウルルーデ、仲間でいることの大切さを教えてくれた501の隊員たち、そして自分の居場所を守ってくれ、勇を好きだと言ってくれたミーナ。どれを取っても温かい仲間たちだ。自分とこれから関わる

だけで加速度的に危険に巻き込まれてしまうならばと、勇は考える。

「あいつらとは関わらなければ・・・」

その頃、ハイドリヒはミーナとの協議を終えて自室として接收した部屋にようやく腰を落ち着けていた。そこには部下のこちらにも仕事を終えたアイヒマンが控えていた。

「ふう、ミーナ中佐は頑固な方だ。それで？首尾はどうですか」

「はい、隊員の処刑は完了しました。小野里少尉の遺体は適当な場所に埋葬してきました」

「よくやってくれました。それにしてもこの基地に無理やり居座ることができてよかったです」

ハイドリヒに腹心であるアイヒマンは、そんな上司の意図が見えずにいた。

「長官、なぜわざわざ赤松勇中佐を501のような目につく場所に置くのですか？」

「よい質問ですね。おそらく彼女らもそれが一番知りたいことでしようが、一番の目的である勇中佐の身柄の確保が成功してしまった以上、無理に知ろうとしない見えません」

「なるほど、利害の一致と言うわけですか」

「そうです。我々の利は彼をここに置くことなのですよ」

ハイドリヒは足を組んで優雅に珈琲に口を付ける。計画が順調に行った今の気分は格別だった。

「牟田口中将のおかげで無駄に勇中佐の仲間を失った今、彼には失うものがない。それは今後の彼の継戦意欲の絶望的な低下を招きます。ですが、ここ、彼の古巣に私の手が



及ぶことが分かれれば彼は今まで通りの働きをしてくれます。だから、少々危険を冒してもここに居る方が、私の最終作戦がしやすいと言うわけです」

ハイドリヒはクルクルと珈琲を回しながら微笑む。回る珈琲が自分の意思に振り回される哀れな彼らに見えて仕方がなかった。それをおいしそうに飲むと、アイヒマンも納得したように微笑んでいる。

「なるほど、あの作戦で我らの理想郷が見られると言うわけですね」

「そうです。やっとここまで来たんです。少しくらい危険な賭けをしないとつまらないでしょう。目の前のことしか考えることのできない無能を選別して得られる、本当の意味で生まれ変わるハイマート・・・こんなに楽しいゲームです。どうかせいぜい足掻いて私を楽しませてほしいものです。旧世界の人間はすべからずこのカップのように」

ハイドリヒの珈琲カップには沈んだ挽いた豆の屑がひしめき合っていた。それをハイドリヒは暖炉の炎に投げ入れてしまう。一瞬で蒸発する光景に恍惚とした表情で未

来予想と重ねていた。

一方、ハイドリヒとの協議を終えたミーナは疲労感を携えて勇の部屋に向かっていた。

「はあ、あの人と話していると取り込まれそうだったわ・・・ユウ入るわ」

ミーナが勇の部屋のドアを開けると、勇はミーナの声が聞こえていなかったのかぶつぶつと小言を呟っていた。ミーナは再び悲惨な目に遭ったであろう勇に同情の念を寄せる。ベッドに腰かけ、勇の肩に手をかけると勇は驚いたのかビクツと大げさに見えるほど反応していた。

「ごめんなさい、驚かせてしまったかしら？」

「ああ・・・ミーナか、すまない、もう大丈夫だ。もう話は終わったのか？」

勇はまだ目を合わせないままだった。ミーナはあのハイドリヒという狂気の人物と過ごした勇の精神状態に配慮しながらも、話し合ったことを伝える。

「残念ながら、あなたの処遇に関してはあちらに一存があることは変わらないわ。でも、あなたの安全は私たちが保証することは出来るように交渉したわ」

「それにはどのくらいの指揮系統に介入権があるんだ」

「・・・それは501での？それともあなた自身の？」

「俺のだ・・・」

ミーナは頭痛を抑えるように話し始める。ミーナにとっても頭の痛い問題なのだろうが、勇にとっては死活問題だった。

「・・・ほとんど」

「そうか・・・」

ミーナは勇のそのどこかホツとした表情に違和感を覚えながら、勇を安心させるようにハイドリヒとの勝利条件を宣伝する。

「通った要求はあなたの衣食住の保証とこちらの作戦への参加要請の融通、そして50  
1への介入禁止ね」

「だいぶ粘ったようだな」

「もちろん！あなたのためならこっちだって手段は選んでいられないわ」

「そりゃ青筋も立つつてもんだな」

勇に言われてミーナは自分の表情が強張っていることに気づき、顔をほぐしてみる。そんなミーナを勇は見ずに立ち上がる。そして、ミーナに聞こえるかどうかの音量で囁く。

「ありがとな」

勇はミーナを部屋に残して部屋から出る。ミーナはそんな勇の後ろ姿を眺める。その背中はないにも語ろうとはしないが、哀愁に似た雰囲気に違和感募るばかりだった。

翌日、ネーデルランドに派遣した宮藤たちが帰還し、勇が帰ってきたこととハイドリヒたちの存在に素直に喜べない様子で、基地はにわかになきな臭い様相を呈していた。そして、遂に501はベルリンへの進撃ルートの策定のため、哨戒任務を実施することとなった。隊員は航続距離の問題から扶桑機が妥当だと判断され、宮藤と服部の二人がキール方面から、そして熟練度の問題から精鋭のバルクホルンとハルトマンの二人がカールスラント中央経由での作戦が行われようとしていた。

「ベルリンまでの道中は敵の存在が未だ不明よ。十分に注意して」

「了解した」

「はーい」

「わかりました！」

「了解ですつ！宮藤さんよろしくお願いします！」

勇は四人が出撃する光景を基地の中から眺めていた。勇の目には新人の服部が藤野と重なって見えていた。真面目で実戦に不慣れな隊員はその被撃墜率も高いのだ。また、カールスラント組の精銳は自分が概ね敵を掃討しているためそこまで心配はしていなかった。それを見たハイドリヒが後ろに手を組んでやってきた。

「彼女らが心配ですか？」

「人並みにはな」

「あなたも行ってもいいんですよ？」

面白がるように誘惑するハイドリヒの背後の狙いが分からないため、勇は出撃を断固

拒否することにしていた。ただできえ、501の隊員とはハイドリヒを合わせたくなかったのだ。

「遠慮しておく。彼女らに手を出したら・・・」

「はいはい分かっていますよ。そんな野暮はしません。じゃあいつそのことあなたは自分飛行禁止にしておきましょう」

「ふん、好きにしてくれ」

ハイドリヒの思い付きに付き合っではいられないが、出撃することになればそれこそ501の彼女たちにとって災厄の光景を焼き付けることになってしまうため、勇はその判断を素直に聞くことにした。しかし、この判断が後に勇を苦しめることになるのはハイドリヒ以外に知らなかったのだった。

しばらくして宮藤達が帰還して基地は急に騒々しくなった。勇も何事かと思い、格納庫に行ってみると出撃メンパーが足りていないことに気づく。その瞬間の背筋の凍り付く感覚は慣れることのない、死を連想させた。

「何があつたの?!」

「ハルトマンさんが撃墜されました!」

「なっ!?!なんだと!・・・まさかあれに?!」

「ユウ!何か知っているの!?!教えなさい!」

ミーナが勇に詰め寄り情報を引き出そうとする。勇は道中にどんなネウロイがいるかを知っているが気づかなかつた。それは勇が苦戦しつつも倒してきた高速機動力を有するジェット戦闘機型ネウロイの存在だった。

「ジェット戦闘機型ネウロイにやられたのだろう・・・」

「どうしてユウがそれを・・・」



相方のハルトマンが撃墜され、消沈したバルクホルンがふらふらしながら勇に近づく。その差し迫った気配は勇に向けられており、他の隊員の視線は釘付けだった。

「どうしてユウがそいつの情報を知っている？」

「それは……」

勇はハイドリヒからベルリンでの作戦全般を軍事機密とするように指示を受けており、教えるわけにはいかなかった。教えてしまったら最後、ハイドリヒは秘密を知ったものを許しては置かないだろう。勇は501を守るために話さないと決めていた。しかし、バルクホルンはその秘密を知り得る勇と言う存在が許せなかった。

「どうしてユウが知っているんだ!!言ってみろ!ユウ、お前は知っていて私たちに危険を知らせなかったのか!」

「……俺は、俺は何も知らないんだ」

「ユウ・ハルトマンはまだ死んでなんかいない！だが今もあいつは私たちのことを待っているんだ！お前は仲間を、お前の仲間を見捨てるのか!!？」

仲間という言葉が勇の脳内を刺激するかのようだった。これまで仲間と呼べる人たちはことごとく死に、それは自分と関わったと言う些細な理由で皆勇の前から忽然と姿を消してしまったのだ。そんな勇の経験に対して勇は仲間を捨てると言う言葉は度し難いものがあつた。

「そんなわけないだろ！」

「じゃあ、お前が最初に私たちに言っておけば今回のようなことは起きなかったじゃないか！」

「そ、それは・・・駄目だ」

仲間を守ると言う勇の信念と、目の前の出来事が交差した勇にはもはや力のな言葉を

発するしかなかった。その姿にバルクホルンは我慢がならなかった。掴んだ服から手を離すと、バルクホルンの目を見ようとしないう勇を突き放す。

「お前を仲間だと思っていたのに」

バルクホルンはそのまま基地の奥に消えてしまい、残された勇はただ地面を見て俯き続けることしかできなかった。そんな姿を高めから観察するハイドリヒは一人楽しそうにその寸劇を鑑賞していた。

「見ましたかアイヒマン！彼は！彼は自分の才能がだれよりも突出していることを自覚していない！精鋭の501の中でも最精鋭のウィツチでも倒せないような敵をいとも容易く倒してきたからこそ、その力が当たり前だと信じて疑わない！これが、彼が神に近い存在の証明と言わずなんと言うのでしょうか?！」

「もはや一騎当千とは彼のためにあるような言葉ですね」

アイヒマンの言葉にハイドリヒは人差し指を左右に振って否定する。

「いいえ、彼を人間と比べる方がおこがましいのです。彼は私が神にするのだから。私  
が作る神はそんなやわじやありません」

勇は部屋に戻って先ほどのバルクホルン言われた言葉について考えていた。自分は  
どうすればいいのか、どうすべきだったのか。しかし、こうして考える間にもハルトマ  
ンは救助をまっているかもしれない。その時間的余裕の無さが勇の思考の邪魔をした。

「俺はどうすればいいってんだ！」

勇の手は血が滲みるほど強く握りしめられており、その赤い血が勇に気づかるきつかけを与える。勇はハツとしてハイドリヒの下へ走り出す。

「ハイドリヒっ！」

「ようやく来ましたか」

「俺は飛行禁止処分が出てたな！」

「はい。飛行してはなりません」

勇は現地を得たとばかりに捲し立てる。それをハイドリヒは分かっていたとばかりに手を組み、その言葉を待ち望んでいた。

「しばらく外出する！」

「期限は今日より3日です。それを1秒でも過ぎたら脱走と見做します」

「分かってる！」

ハイドリヒの言葉を聞くか聞かない内に走り出していた。取り残されたハイドリヒは珈琲に手をつけてゆつくりと香りを楽しみ、こう呟いた。

「前代未聞ですな。ベルリン付近まで徒歩で強行するなんて・・・本当にここにきて良かったですよ」

勇は人知れず夜の森の中をひたすらに走っていた。ハイドリヒの部下から車を分捕るとそのまま道なき道を爆速で走り抜けた。こんな運転は501のシャーリーを彷彿とさせた。ただ勇はその記憶から仲間の姿を引っ張り出し、がむしゃらに自分の行いを悔いていた。

「俺はただ繰り返したくないだけだ！俺はもうこれ以上俺と関わった者を巻き込みたく

ないだけなのに！」

勇の乗る車の車窓には朝陽が差し込んできていた。およそ6時間もぶつ通しで運転していた。ハルトマンの撃墜地点から50km離れたところで車を止めると、返り分の燃料を入れておく。そして、荷台から武器を取り出し、弾を込める。ジャキリと音を立て、装填された弾と勇の闘志は静かに朝日に萌えた。

「待ってろよ」

勇が搜索を開始した頃、基地ではハイドリヒが届けられた書類に目を通していた。その書類に書かれている内容を一瞥すると、その書類を乱雑に頬り出す。

「我々の計画を邪魔してくれるとはとんだ駄犬でしたね」

放り投げられた書類には赤字で大きく『開発の即時中止』の文字が書かれていた。ハイドリヒは冷徹な笑みを浮かべて己の驕りを悔いていた。しかし、すぐにその殺気にも似た雰囲気鎮めると部下のアイヒマンを呼び出す。すぐに駆け付ける優秀な部下に感心しつつ、命令を下す。

「アイヒマン中佐、あの計画が小野里少尉の密告で漏れました」

「まさかっ!」

「ええ、これは私の唯一の汚点です。汚辱は注がなければなりません。すぐに現地の開発者と研究員を拘束し、この基地に『例の物』と一緒に連行して来てください」

「直ちに」

打てば響く部下ならば命令を必ず遂行することは容易に想像できる。それでも計画の一部が外部に漏れたことはハイドリヒの中で看過できないことだった。それだけに



ハイドリヒは怒りに燃えていた。

「だから欠陥品は許せないのです．．．私の世界にはそんな愚かな人間は絶対に残りません。屑は死んでも私の足を引っ張るのですから救えません。まあ、これも私が神になるための必要な試練だと言うことにおきましよう」

ハイドリヒは密かな自分の世界を夢見て、今日もその知恵を巡らせるのだった。

一方、勇は日中のハルトマン搜索に全力をあげていたが、依然として成果は出ていなかった。隠密行動と搜索の両立は意外にも体力を消耗するもので、既に汗だくとなっていた。

「もうそろそろ撃墜地点のはずなんだが．．．ん？航空機か？」

航空機特有のエンジン音が聞こえ、耳を澄ますとハルトマン救助隊の宮藤・服部・シャリーリーの三人だった。さらなる被害が出ないことを祈りつつ、殊の推移を見守るつもりが、戦闘は一瞬でケリがついてしまう。

「やはり、あいつらでも難しいのか・・・」

かつてベルリン特攻の道中で戦闘した経験があるが、その時は護衛役として出撃していたため、護衛の戦闘機や輸送機を守りながらの戦闘だったため苦戦を強いられたが、勇自身単独で戦闘した場合、確実に撃墜できる自信があった。しかし、精鋭の中の精鋭と言われる501の彼女たちですら、手も足も出ない現状を目の当たりにして、勇は自分の非常識さを知ることになる。幸い、だれも大事はなかったようだが、ハルトマンの救助活動は限定的になることに変わりはなかった。

「落ち着け、仕事だ。これは遭難者の搜索であつて俺個人の感情は捨てろ・・・ふつ、人

助けか……」

勇が再び走り出したところ、バルクホルンはサウナにいた。自分の指示の遅れと敵の戦力を見誤ったことを永遠と振り返りつつ、勇のあのときの表情を思い出していた。それは先ほど破壊したサウナの部屋の壁の破片が散らかるように散乱した思考だった。

「ユウはどうして強いんだ……」

そんな台詞を呟いたとき、ミーナがサウナに入ってきた。

「ユウがいなくなっただわ。ユニットが格納庫に残っているから、ハイドリヒ大将のなにかの命令なのかもしれないけど、もしかしたら……」

「……いや、きつとそうなのだろうよ」

バルクホルンは考えるのを一旦止め、己のできることに集中し始めた。バルクホルンは勇だけに背負わせることはもうできないと感じた。例え勇が出たとしても、仲間なのだとするのならバルクホルンは立ち上がらないわけにはいかなかった。勇が常に渦中にいるように、バルクホルンも試練に立ち向かうのだった。その結果、翌日までに限界まで身体を搾り、ユニットを限界値まで性能を引き出す魔改造を施すことに成功した。

「待ってる！ハルトマンっ!!」

その頃、勇は未だにハルトマンの手がかりを見いだせずに焦っていた。期日の3日も迫り、ネウロイとの表立った戦闘もできない現状、慎重にならざるを得なかった。

「くそっ！ハルトマンどこにいるんだ!？」

その時、緑が生い茂る森の中で何かが輝いた。近づくとウィッチなどに配給される高カロリー食であるチョコレートのパッケージだった。生存者の可能性を見つけ出した勇は安堵する。ハルトマンの手がかりを掴み、苦勞が報われた気がした瞬間だった。さらに、その場所から歩くと人工的に開けた場所を発見する。その中には木の下に埋もれた人間らしき影も確認できたことで、勇の心拍数は急上昇する。

「まさかっ!」

走って確認すると、よくできた偽装であることが判明し、胸をなでおろす。おそらくネウロイによる対空脅威をカモフラージュするための物だろうが、これでハルトマンの生存は明らかとなった。この付近にハルトマンは生きているはずなのである。

「急げば間に合う！早く探し出さないと．．．あれは」

勇の目線の先には川に向かうハルトマンの姿を確認できた。あれだけ探し回り、見つからなかったハルトマンが手がかりを見つけた途端に見つかったことになにも思わな  
いでもないが、発見できた喜びを優先することにした。

「ハルトマン！」

「えっ?!ユウ!!」

ハルトマンは偽装のために薄着で活動しており、少々薄汚れてはいるが元気な姿を見  
せていた。そのことに安堵し、ハルトマンとの再会に歓喜する。

「探したぞ、よく生きていたな」

「来てくれてありがとう！みんなは？」

「お前のことをみんなとても心配してたさ。早く帰るぞ」

「うん！」

その瞬間、勇とハルトマンの通信機に声が入る。捜索隊の宮藤と服部、そしてなんとバルクホルンがやってきていた。ハルトマンの通信機は送信ができないらしく、耳を澄まして聞いていた。

「トウルルーデ来てくれた！てか、ユウの通信機貸してよ！」

「そ、それは……」

勇が口籠っている最中、例のジェット戦闘機型ネウロイが姿を現す。バルクホルンがこれまた薄着で応戦し、これまでにない切れのある戦闘軌道に勇もハルトマンも空戦に釘付けだった。

「トウルデーの方が早い！」

「ああ・・・勝てるぞ」

二人の言う通り、バルクホルンはジェット戦闘機型ネウロイの速度と高速機動を完全に見切っていた。そのことにハルトマンは素直に喜んでいたが、勇は違った視点でバルクホルンを見ていた。

「勝てる・・・が、まだ届かない」

バルクホルンの努力は素直に称賛に値するものだが、勇はそれと同時に寂しさを覚えていた。それは、勇の歩んだ過程を、走り抜けた過程をようやく見つけたという段階に自分との能力の差を感じてしまったからだ。やがて戦闘にはケリが着き、一機の



ジェット戦闘機型ネウロイを倒すことに成功する。

「やったあ!! さつすがトゥルーデ!!!」

「そうだな。さすがだよ、トゥルーデ。まったく予想通りだよ」

「あんま嬉しそうじゃないね?」

「ん? そうかな、気にしないでくれ。お前は帰る場所があるだろ。もう大丈夫。一緒に帰るな」

勇の言葉の陰に違和感を覚えたハルトマンに対して、空では衝撃が起きていた。

『あれ、ハルトマン中尉では?』

『そんな・・・ハルトマンさんが・・・』

『エーリカ?・・・』

二人して顔を見合わせて、空の視線の先を見やる。その先にはハルトマンの偽装したハルトマンの死体があつた。ハルトマンは青ざめた顔をして嘆く。

「ああああ!!!しまったあ!!!」

「やれやれ・・・」

「ユウ!ごめん!私行くよ!」

「ああ、決して振り返るなよ」

ハルトマンが走る。そして、勇は帰路に着いた。そんな中、ハルトマンが死んだと思ひ込んだバルクホルンの心からの声が通信機を伝つて勇とハルトマンの耳に届いていた。

『エーリカ・・・エーリカ!お前失くしてベルリンを取り戻しても意味がないんだ・・・』

エーリカ、お前は私の・・・ハイマートなんだ」

その後、ハルトマン救出部隊は無事に帰還し、元の喧騒を取り戻した501の片隅で、勇は一人左手を眺めていた。

「姉さん・・・そんなに俺を忘れられないのかい・・・」

勇の左手は瞬間移動型ネウロイとの戦闘でつけられた傷から広がるように、黒色の変色域が拡大しつつあった。ベルリンに近づくにつれて、勇の記憶の中の姉の姿は明確な輪郭を帯びて迫ってきていた。暗く閉ざされてきた勇と勇の姉の咲しか知らない、過去の思い出はもう二度と思い出すことはないと思っていたパンドラの憂鬱である。勇はハイドリヒからネウロイの正体を知り、ベルリン最大の敵である瞬間移動型ネウロイの正体に勘づいた今、そのパンドラの箱の扉を、錆びついて重い扉を開くことを決意する。開いた記憶は、今でも鮮明に思い出せ、懐かしい匂いまでもが漂ってくるようだった。

「こらっつ!! また近所の子らを殴ったのか! 優雨作(ゆうさく)!!」

「へんっ! こいつらが俺のことを馬鹿にするからはっつけてやったんだ!」

「だからって10人も殴りつけることはなからう!」

1934年、現在の勇が9歳は当時、優雨作という名前を名乗っていた。今の勇の保護者は神社の神主であった。勇は捨て子で、それを引き取ったのが神主であり、老齡ながら男手一人で勇を育てる心優しい人物、「神枝道齋」であった。しかし、そんな環境で育った優雨作は親無き子として周囲から揶揄われることが多く、その度に暴れまわった。

「俺は親がないんじゃないやい! じいちゃんのことを蔑ろにされて黙ってらんねんだ!」

優雨作は神主の道齋を爺として仰ぎ、一人でも自分のことを悪く言われると飛びかかる様は猛犬と言われるほどだった。その証拠に、優雨作はまだ9才でありながら人一倍身体能力が高く、年上の男子をも軽々と伸してしまうほどの剛力の持ち主だった。しかし、その力の使い方は今しがた振るられるような暴力沙汰ばかりであり、そのことに道齋も困り果てていた。

「ワシのことを思ってくれるのなら、少しでもワシのお前を心配する気持ちを汲んでくれんか？」

優雨作は困った顔を隠すようにそのふくれっ面を膨らませてそつぽを向いた。それを見て道齋は困り果ててしまう。そして、話題を変えるように優雨作に話を持ち出す。

「はあ、優雨作や、先日こっちに越してきた人がおつてな、その家に挨拶に行こうと思う

んじゃ。お前も来なさい」

「ちえー、面倒くさい」

「こらこら……そういえば、噂によるとなんでも妻と喧嘩別れした男とその娘がいるそうじゃ。お前もしつかり挨拶するんじゃぞ」

優雨作はつまらなそうにあくびをしながら、その家のことを考えていた。近所のちよつかいをかけてくる男子しか見てこなかったため、その娘という存在に少なからず興味があつた。

「少しでも俺のことを見下したらげんこつ喰らわしてやる」

「こらっ！下らん事考えとらんでシヤキツとせい！失礼のないようにな」

道齋は優雨作が悪さをしないように手を繋いで歩き出すが、優雨作はそんな道齋の下から見上げる景色が好きだった。歩いているのは田舎道で、周りは畑と田んぼが混ざつ

た農道と朽ち果てかけた家々が点在する。川のせせらぎと動物たちの鳴き声はここの人口を遥かに凌駕するほどの小さな規模の村である。そんなちんけだが、優雨作にとつての故郷に新しい住人が来るのは珍しいことだった。だからこそ、優雨作はどんな人物が来るのか目星を付けて、敵対する者なのかどうか判断するつもりだった。

「ほれ、あれじゃ。ワシが子どもの頃にはまだ人が住んでいた古い家だな・・・」

道齋は優雨作に説明するが、優雨作はこの立地がどういったものなのかよく理解していた。いわゆる村はずれの場所で、人目に付かない隔絶した場所というわけである。こんな所に住む人間なんて言うのは、おおよそ対外関係がおざなりな人間に決まっていると決めつけて、興味を失くしかけた優雨作と道齋は遂に玄関の戸を叩く。

「ごめんください。ここらで神主をやつとります、榊枝道齋と申しますが・・・」

中からの反応はなく、留守かなと思つていると中から瓶のぶつかる音がしてきたことで人の存在が明らかになる。乱暴に開けられたガラス戸からは、まだ昼間の早いうちだと言ふのに顔を真っ赤にし、無精ひげをこしらえた小汚い男が出てきた。

「うっさいな……ひくつ！誰だてめえらは？」

「これはお休みのところ失礼しました。ワシらはここらで神主を務めております、榊枝と申します。ここらにはなにかと不便でしょうから、これからのお付き合いも兼ねて挨拶に参つた次第ですじゃ」

「ん……俺はお付き合いする気も、仲良くする気も俺の勝手だ。好きにやるからほつといてくれ」

ぴしやりと扉を閉めると、それっきりまた瓶の転がる音が聞こえ、話はできないと知る。優雨作は道齋を見ると、道齋は元から細い目を細めて困つた顔をしていた。優雨作はそんな道齋の困つた顔を見て腹が立つてきた。何か一言文句を言つてやろうとして



いると、優雨作が来た道から声がする。

「あの、家になにか御用ですか？」

優雨作が振り返ると、そこには大きな荷物を背負った少女が不思議そうにこちらを見ている。身長は優雨作よりも頭一つ大きく、黒髪は艶やかで長く、それでいて背後の桜並木の光景が良く似合うどこか品のある少女だった。

「こここの家の方ですか？ワシらはここらで神主をしているんじやが、今日は挨拶に来たんじやよ」

「ああそうだったんですか！お構いもできず申し訳ありません！」

「いやいや、これはご丁寧に。でも、挨拶も済ませたし、ワシらは帰るとしますじや。これ、優雨作も挨拶せんか」

「ここらで見かけることがなかった年上の綺麗な少女に優雨作は言葉の掛け方を探せずにいた。道齋の前に押し出され、とりあえず挨拶代わりに拳を突き出すと、道齋に後ろからひっぱたかれる。

「どんな挨拶じゃ！お辞儀せんか！」

「うふふ、面白い子ね！私、赤松咲っていうの！これからよろしくね」

これが優雨作と咲との初めての出会いだった。勇の少年時代の名である優雨作は、この時の咲の笑顔をよく覚えていた。

## 籠の中の翼 第十二話

優雨作はその日も喧嘩に明け暮れていた。今日は隣村の少年たちが優雨作の噂を聞きつけて徒党を組んで喧嘩を仕掛けにきていたが、それも返り討ちにしてしまった。

「鬼じゃ〜!!」

「だれが鬼じゃ! まったく他愛のない……ん? あれはあんときの姉ちゃんだ」

優雨作は先日見かけた赤松咲の姿を見かけると、彼女はなにやら野菜をたくさん抱えていた。そんな彼女はこの村に来てから周りの評判も良く、すっかりこの村に馴染んでいた。そんな咲に優雨作は話を掛けることはなかったが、あまりにも優雨作が凝視してしまっていたのか、咲が優雨作に気づいて駆け寄ってきた。

「あの時の少年！」

「あん時の姉ちゃん……名前覚えてないだろ」

「君もね！」

ケラケラと笑う少女の笑顔は屈託がなく、これまで喧嘩ばかりしていた優雨作にとつて経験したことのない感情を向けられたことに口数は減っていた。

「私の名前は、咲。花が咲くって書いて『えみ』と言うのよ？」

「ああ、だから花が似合うのか」

「……あは、あはははあはは!!!」

優雨作は思ったことを言っただけなのだが、こうも咲に笑われてしまい恥ずかしいような腹立たしいような気持ちになった。不貞腐れて頬を膨らませていると、ニヤニヤと咲がほっぺを摘まんでくる。

「君面白いね。はあく笑った笑った！こんなに笑ったの久しぶりだよ！」  
「へんっ！さつきだつて笑つてたじゃないか！」

その一言に咲は、驚いたような顔になつた後、すぐにまた笑顔に戻るとほつぺをつついてくる。優雨作が払いのけるとまたケラケラと笑い出す始末だつた。

「なにがおかしいんだ！」

「だつて私のことよく見てるんだもん！」  
「なっ!？」

揚げ足を取られたとばかりに優雨作が顔を真っ赤にしている様子を見て、また咲が笑う。それがどうしても腹立たしく、優雨作は背を向けて帰ることにする。すると、慌て

た様子で咲が近寄り優雨作の手に何かを渡す。

「なんだいこれ？」

「金平糖よ。今日のお礼！」

「お礼つて、俺は何もしてないぞ！」

「いいの！笑わせてもらったお礼だから！」

そう言うや否や咲は野菜かごを背負うと走り出してしまった。取り残された優雨作は、仕方なく今しがたもらった金平糖の包みを開ける。赤や緑や黄色の色とりどりのトゲトゲしたものが入っており、特に酸いも甘いも匂いはしなかったが口に入れてみると、口の中で砂糖が溶け出し、シャリシャリとした触感が心地よい甘さだった。

「変なやつ」

優雨作は金平糖の包みをしまうと大事そうに持つて帰った。家に帰り、その金平糖を見た道齋はその出どころを聞くと、たまげたように顎をさすりながら垂れた臉をさらに垂らして嬉しそうに微笑んだ。

「優雨作がだれかに礼を言われる日が来るとは。まっこと嬉しい日じゃ」

翌日、優雨作は道齋と書写の勉強をしていた。暴れん坊の優雨作だが、これでも近所の子どもたちを集めた寺子屋では一番の成績を誇り、それをよく思わない者たちから揶揄われて以来、二度と寺子屋に行くことはなかった。特に道齋は、この村の相談役的な存在の人物であり、よく村人同士の喧嘩の仲裁や、果ては葬式の真似事までしていた。本来葬式は仏教であり、神道の神社が行うことではないが、この村に寺はなく、仕方なく道齋が引き受けていたため、よく字や計算をする機会があった。

「へえ、君意外と漢字書けるんだね」

集中しているところに突然見知らぬ声を掛けられて、びつくりして筆をあらぬ方向に走らせてしまう。その結果、書こうとしていた漢字は見るも無残な姿になってしまう。やってきたのは咲だった。

「なにしやがんだ！」

「ごめんごめん！君があまりにも集中してるもんだからつい・・・ごめんね？」

「おお、咲ちゃんか。よく来たね。どれお茶を出そう」

「あ、いえお構いなく！ちよつとゆうさくくんを見に來ただけなので！」

「なんだと?！」

揶揄われた優雨作は立ち上がって威嚇してみるも、まったく意に返さない咲に地団駄を踏む。しかし、前は忘れていたはずの名前を呼んでくれたことを不思議に思っている



と、顔を近づけて優雨作にねだる。

「ねえ、君の名前書いてみてよ！」

「なんだって俺の名前を書かなきゃいけないんだ」

「だってどんな漢字か知らないんだもん」

だもん、という新しい言葉にたじろぎつつ、仕方なく勇は筆を持ち直す。すらすらと書いている姿も見つめられると何となく恥ずかしい気がしてきてサラツと書き上げてしまう。

「ほら」

「へえ、これで優雨作（ゆうさく）って読むのかくどんな意味なの？」

次から次へと質問してくる咲に動揺していると、お茶を持ってきた道齋がその答えを出す。

「この子は捨て子でね。春前じゃったかの、みぞれの混じるある寒い雨の日に、家の前に傘が差してあつたんじやよ」

「なんかごめんなさい・・・聞いてよかつたんですか？」

「いいんじゃないよ。まあ、その傘の下にこの子がおつたんじやが、きちんと寒くないように綿の毛布で包んであつてな、おまけに風車が回つてたんじや。この親は高価な綿の布を持たせて、おそらくなけなしの金で買ったであろう真当たりしい風車が添えてあつたら、この子はきつと優しい雨が作つてくれた子じやと思つて名付けたんじやよ」

自分の生い立ちの話をこうも他人に話されるとむず痒くて、優雨作は飛び出してしまふ。

「聞いちやいらんない！俺、外出てくる！」

「え、ちよつと！」

既に声は届かず、部屋には道齋と咲だけになってしまっていた。もらつたお茶に口を付けると、ほどよくぬるく、道齋の優しさが目に見えた。そして、道齋が優雨作の走つて行つた方を眺めながら咲に頼む。

「咲ちゃん、あの子は本当はとても優しい子じや。ワシのような老いぼれの手伝いは忘れずしてくれるし、勉強も嫌がらずにする良い子なんじや。でも、あの生まれというだけで周りから揶揄われてばかりで不憫な人生じやろうて。ワシは耄碌じいじやが、あの子にとつてたつた一人の保護者なんじやろうことがよく分かる。しかし、ワシはもう長くはないんじや」

「ええ？」

衝撃の発言に耳を疑う咲の目の前には、どうしようもなく現実を受け入れた、悲しい目をした老人がいた。その説得力のある単語に、咲は黙って耳を傾けていた。

「ワシではあの子になにもしてあげられない。あの子はこれからもつと広い場所で生きべきなのじゃろう。ワシがあの子に苗字を与えていない理由はそれなんじゃ。ワシの苗字を与えてしまうと、優雨作はワシの後を追ってしまう。だから、咲さんの家の事情も十分に理解はしておるが、どうかあの子と仲良くしてやってほしい。どうか、残り少ない老人の最後の頼みじゃと思つて……どうか」

「そんな……こちらこそいつも楽しませてもらつています！」

床にこすりつけるように頼み込む道齋の姿に慌てて、顔をあげてもらおうようにする。すると、道齋は朗らかに笑うと、優雨作の話をし始める。

「ほほほ、金平糖をくれなさつたんですつてな。優雨作のやつ、毎日残りを数えながら大

事に食べておりますわ。あんな暴れん坊があなただけには暴力を振るわないのは、あの子を邪険に扱わないこともあるでしょうが、きつと楽しいんでしょうな」

「楽しい?」

「ええ、親にも神様にも見放されたようなあの子を、最後に掬い上げてくれたのだと思うんですじゃ。ワシの一族は榊枝の苗字の通り、神の枝の末端……ワシはもう枯れ木じやが、あの子はこれからイキイキと芽吹いていく。咲いた花を見て、周りが元気になるように、あの子もあなたとならあの広い空のようにどこまでも高く、駆けていくことができるのでしょや」

道齋の見る先には満開の桜が咲いていた。その話を聞いてからというもの、咲はよく優雨作のもとを訪れては遊び相手になった。優雨作は嫌がりながらも退屈そうなお話は言わなかった。また、それを微笑ましく見守る道齋の温かな空気は、優雨作の暴力事件を激減させていた。しかしそんなある日、優雨作がお使いから帰る最中、いつも優雨作にちよつかいをかけてくる男子たちが優雨作を見かけて揶揄してくる。

「やーい、女とまま事してやんの！」  
「女つたれ〜」

この日、優雨作はいつも以上に暴力を振るつてしまい、怪我を負わせてしまった。そのことでちよつとした騒ぎになり、怪我をさせてしまった道齋が謝罪に出かけていた。優雨作は道齋の行為に甘えて神社の切り株の上で小川の水面を眺めていた。

「何してんの？」

「・・・月が笑いよる」

「え？」

話しかけてきた咲の見たものは、川面に映る月だった。それが川の流れに揺らめき、確かに笑っているようだった。

「ねえ、こうしたらどんな風に見える？」

「ん？」

咲が小川に石を投げこむと、川面に映る月は大きく揺れてトプンと波打った。静かな空間に染み入るような水の音は優雨作の心を動かした。

「泣いてるみたいだ」

「そうね、今の誰かさんみたいだね」

「泣いてなんかないわい！」

「私にはそう見えるわ。ねえ、どうして喧嘩したの？」

咲が優しく聞いてみるも、優雨作は口を閉ざしてしまふ。だが、必死に何かを隠しているような表情は咲に勘づかせるだけの材料を与えてしまふ。

「ふーん・・・私のために怒ってくれたんだ？」

「なっ！どうしてそれを?！」

「あ、凶星か！」

「はっ！騙したな！」

咲は優雨作という少年がとても優しい少年であることは分かっていた。自分より年下のこの少年は年上のこんな自分を守ってくれようとしていたという事実にあることを閃く。

「ようやくいつもの優雨作くんに戻ったところで、君には私の秘密を教えてください」

「秘密？」

「ええ、よく見えています・・・」



そう言うと、咲は両手を胸の前で拝むように合わせると、咲の周りが青白く輝き始めた。次第に頭からは耳が、臀部からはしつぽが生え始める。そんな未知の現象に優雨作は驚き半分、興味半分に支配される。

「・・・私ね、ウイッチなんだ」

「ウイッチ？」

「うん、君は私がウイッチだと怖い？」

咲が不安そうに尋ねるも、優雨作は一瞬たりとも目を離さずに興奮した様子で答える。

「怖くない」

「そう、ありがとう。私ね、ここに来る前は都会に近い場所にいたの」

優雨作の答えは咲の秘密を話す勇気を与えていた。咲自身、この秘密はだれにも話すつもりはなかったが、不思議と素直に話せている自分に驚いてもいた。

「その地域ではウィッチが珍しくてね、煙たがる人もいれば、物珍しさで近寄る人もいたの。そんな生活に私の母は嫌気が差したのね。ある日、父と喧嘩して実家に帰ってしまったの。それから父は荒れたわ。酒ばかり飲むようになって、仕事も辞めてしまった。そして、新しくやり直すためにここに、ウィッチの存在なんてないこの寂れた場所に来たの」

遠い目をした咲に優雨作は、そんな出来事を想像してみる。自分は家族というものに恵まれなかったが、家族と言うのはそんなにも脆いものなのかと考えていた。それでも咲は唯一の家族である父親を健気に支えているのだと言う。

「あんなに酒漬けの男、嫌じゃないの？」

「ううん、父はいま悩んでいるの。私は母が離れた時、私といってくれた父が好き。でも父は好きだった娘が忘れられないの。それは今の私じゃなくて、母と私が笑い合って暮らしていた時の私……」

幻影の家族の追憶を追う咲は、その神秘的な姿を隠すように振る舞う。しかし、優雨作はそんなことはどうでもよかった。ただ、これまでの楽しい気な咲が優雨作にとつて全てであり、これまでの咲がどんな存在だろうと自分のこの気持ちは微動だにしなかった。

「姉ちゃん、俺は今の姉ちゃんがいいよ。ここでは俺が一番強いんだ。俺が姉ちゃんも守ってやるよ」

いつの間にか自分を姉ちゃんと呼んでくれている優雨作の真つすぐな目は、咲を捉えて離さない。本気で言ってくれているのだろうが、咲はおかしくてたまらなかつた。だから、咲は今回の件を含めて勝負を挑む。

「あのね、ウィッチって言うのは強いの！君に守ってもらうほどやわじゃないのだよ！」  
「なんだどう?!じゃあ、俺と勝負しろ！」

「いいわ！じゃあ、せっかくここにいい切り株もあることだし、腕相撲といきましょう！」

腕をまくり、意気揚々と鼻息を荒くする優雨作は、負ける気がしなかつた。例えウィッチだとしても所詮は女、力で自分が負けることはないと踏んだ。

「負けたら私の言うことはなんでも聞きなさい?いいわね?」

「当たり前だ!そつちこそ俺が勝つたらなんでももういうこと聞けよ!」

「はいはい・・・じゃあ、行くわよ！」

二人の手が固く組まれ、後は合図があるだけだった。その合図は都合よく訪れる。二人の組まれた手の上に桜の花びらが舞い落ちた瞬間、二人の力と力がぶつかり合った。

「ふ、ふぐぐぐ!!!」

「んんんんん!!!」

二人の力は拮抗し合い、勝敗はなかなかつかなかつた。そんな状況に咲は目を白黒させる。しかし、勝つと宣言してしまった以上、負けるわけにはいかない。魔法力を集中させて一気に勝負にかかる。それでもしつこく粘る優雨作は、顔を真っ赤にさせて応戦していた。持久力で勝敗の差があると見越した咲は、一度力を抜いて力を溜める。

「おっ！」

力が向けたことに一瞬隙が生まれた優雨作を他所に、咲は勝負を決めに行く。解放した力を一心に注ぐと、一気に優雨作が劣勢に傾く。それでも最後の悪あがきをする優雨作に感心しつつ、汗だくとなった二人の決着は遂に決する。

「これで・・・終わりっ！」

ドンという音と共に倒れこむ二人。勝敗は手を上にした咲であった。息を切らしながら立ち上がる咲は、まだぜえぜえと荒く呼吸を繰り返す少年に告げる。

「私の勝ちっ！」

勝ち誇った表情とは裏腹に清々しい瞬間に夜風が心地よかった。倒れこんだままの優雨作は放心状態だった。まさか女に負けるとは思っていなかったのだろ。手を貸し、起き上がらせるときに咲は確信する。

「ねえ君、もしかして魔法が使えるんじゃない？」

素っ頓狂な話しに優雨作は困惑する。自分に言ったのだろうか、辺りをキョロキョロしてしまふ。自分に言われたのだと気づくのに時間がかかるほどだった。

「俺が？姉ちゃんと同じウィッチだって？」

「うん。あ、でもまだちゃんとしたウィッチではないみたいだね」

「どうして？」

「だって耳とかしっぽが生えてないでしょ？何かと契約しないと魔法力はきちんとその

力を出せないの」

優雨作は自分の臀部と頭をさすってみる。確かになにも生えていないが、そもそも自分には何かが生えてくることを想像できなかった。しかし、そんな不思議がっている優雨作を見て、咲は大いに喜んでいた。

「ここに来た時はウィッチとは縁のない場所だと思ったのに、こんなところでウィッチの友達ができるなんて！」

「友達……友達かあ」

優雨作はその友達という初めての言葉と存在に、新しい世界への入り口を見つけた気分だった。

そこから記憶は少し飛んで、二人は欧州の戦場にいた。あたりは敵だらけで、退路も



援軍もない絶望的な状況だった。仲間の大半を失い、残った仲間も傷つき、戦う力も残されていないかった。そんな中、姉弟となった二人は退路を見出そうと奔走する。

「ユウ、その子はもちそう?」

「医薬品がもうないんだ。持ってあと三日だと思う」

「そう・・・こつちの子は、間に合わなかったか・・・」

手を合わせて、簡易的な埋葬をしてやる。武器弾薬、医薬品が底を尽き、ユニットも大半が損傷している現状で、何とか退路を見つけようと必死だった。もはや話すことができるのはこの二人しかいなく、痛がる隊員の口を無理やり塞いで敵にバレないようにするのが精一杯だった。夜はどこかしらで戦闘の音が聞こえてくる。そんな暗がりでは体力を温存するために横になる。

「ねえユウ、起きてる?」

「うん」

「今何見てる？」

「月」

「私も。あの月、どんなふうに見える？」

「睨んでくる」

「やな顔ね。でも今日の月は冷たく顔を覗き込んでくるわね」

短い単語のみの会話だったが、二人には十分な会話量だった。疲れ果て、気が休まらない戦場で気持ちを共有できる仲間がいる、それだけで事足りるからだ。少しの無言の間があり、寝てしまったのかと思ったところで、暁が話しかけてくる。

「ねえ、ユウに言っておきたかったことがあるの」

「なんだよ改まって」

「あのね、私の・・・やっぱり明日言う」

「うん、明日にしよう」

それを言うと二人して、交互に仮眠を取った。翌朝、寢床から這いだして外を見ると敵は見えなくなっていた。この機会に脱出しようと計画を練る。

「おそらく陸軍はオラーシヤ、スオムス方面に足を使って逃がすんだと思う。私たちにそれは無理。だから、ここから西のガリアに向かおうと思う。敵は追撃に移っているはずだから、味方には悪いけど困らなってもらおう」

「分かった。でもユニットが足りないね」

「これからなにか見つけてこようと思う」

「危なくない？」

「なにを今更。あんたはその子の面倒をよろしくね。私はあくまで隊長だから」

咲はこの部隊を率いる隊長だ。その点で心配してはいないが、昨晚言いかけた言葉がどうしても気になった。

「姉さん、昨日言ってたことだけど」

「ああ・・・ユウは忘れないでほしかったの」

「何を？」

「私の名前。間違えて登録しちゃったけど、『恵美』じゃなくて『咲』なんだってこと！」  
「そんなことか・・・聞いて損したよ」

咲は頬を膨らませて「大事なことじゃない」と言うが、忘れるはずがなかった。これまでいろいろな経験を二人で乗り越えてきたのだ。だからこそ、二人して生き抜けたのだ。だから、自分も他愛のないことを言おうとした。

「じゃあ、姉さんにも後で聞いてもらうよ。俺が言いたいこと」

「ええ、お仕事片付けたらね！」

どこで覚えたか知らないウインクをすると、咲は煙の中に消えて行ってしまった。それが勇の見た最後の咲の姿だった。重い記憶の欠片を一旦閉じると、大きなため息が零れる。勇は、記憶の中の姉の姿が今でも鮮明に思い出せる。その姉が呼んでいるのだ。『忘れないで』と。左手の黒い傷はそれが広がるごとに勇を呼びつけているように思えてならなかった。勇にはあの最強の敵が、瞬間移動型ネウロイの正体が姉の咲であるという証拠にはこれで十分だった。

「俺しか姉さんを覚えていないんだ。俺が、最期を決めないと・・・」

勇の決意は暗闇に溶けて消えた。数日後、オペレーション『サウスウインド』が実行されることが決定し、キール軍港奪還に向けた作戦に取り掛かることになるのだが、その際障害が発生する。なんと、キール方面に濃霧が発生しており、この意図的な濃霧がネウロイによるものだと断定したサーニャが作戦までに障害を排除することを明言する。

「ミーナ中佐やらせてください！」

「・・・分かったわ。でも編成はどうするの？」

「これから訓練します」

編成はサーニャとエイラを基軸とし、宮藤と服部の四人だった。普段大人しいサーニャだけに勇も今回の作戦は驚いていた。そこにサーニャが提案してくる。

「あの、勇中佐も参加してくれませんか？」

「俺か？」

「勇中佐もいてくれると心強いのですが・・・」

「俺は・・・」

「許可しません」

会話に入ってきたのはハイドリヒだった。ハイドリヒがサーニヤに接近したことでミーナも会話に入ってくる。

「作戦への参加要請には応じると約束したはずですよ」

「こちらにも都合がありますね。ミーナ中佐も私たちの作戦には介入しないはずでは？」

お互いに無言の圧力が続き、緊張が生まれるが、勇が決を取る。

「すまない、今回は遠慮させてくれ」

「そうですか・・・無理を言っすみませんでした、勇中佐」

サーニヤが折れたことで、この話はうやむやとなる。ミーナは何か言いたげだったが、諦めて引き下がる。改めて勇はハイドリヒの作戦とやらを聞く。

「で、今度は何をしようってんだ」

「それはここではなんですので、格納庫でしましょう」

ハイドリヒの言われた通りに行くと、格納庫の中には勇のトラウマが聳えていた。

「最後の生き残りです。あなた専用に変更してあります」

「・・・俺もこの『桜花』で突っ込むのが今回の作戦だと?」

勇の目の前にあったのは紛れもない桜花、人間ロケット特攻兵器だった。この痛まし



い記憶の産物である兵器を前に、自分の死期がこんなにも急であることへの疑問が湧いた。盛り上がり方を異様に執着するハイドリヒらしからぬ急ごしらえに、勇は食って掛かる。

「まさか今日やるんじやあるまいな？」

「当たり前です。あなたの証言を参考に、音速を越えた衝撃で搭乗員が気絶することへの対策として、本日より練習を行います」

「練習、だと？」

勇が言葉の意味を確認するためにハイドリヒを向き直ると、突然首に手が伸びてくる。

「なんだっ!？」

「私からのプレゼントです。受け取ってください。というか、常時着用しなさい」

「それはプレゼントなのか。まあ、プレゼントだったらお前からののは絶対にいらないな」

「釣れませんね」

嬉しくもないプレゼントを手にとると、金属のようなもので取り付けられた寶石のように輝く何かが青白く煌めいていた。本当に宝石をプレゼントしたわけではあるまいなど、不気味なネットワークスを遠ざける。すると、ハイドリヒは嬉しそうに忠告する。

「それは『叡智の炎』です。あなたの魔法力を糧として今、芽吹きました。常にあなたの適切な魔法圧で調整しなければ死んでしまいますのでお気をつけて」

突然曰く付きの呪いのアイテムを渡されて、子をあやす様に今後無条件に魔法力を分け与える面倒ごとを押し付けられ辟易する。どんなアイテムか分からなかったがハイ

ドリヒからの調査物であろうと勘ぐりを付けてしまいこむ。今は目の前の桜花の方が勇にとつて重要だった。

「では、練習といきましょう」

勇はまたも輸送機の中にいた。もう二度と輸送機に乗るのは御免だと思っていただけに、諦めの表情で乗っていた。ブザーが鳴り、桜花に乗り込む。今までのような座席があるわけではなく、うつ伏せ式に入り、足の方にユニットがセットしてあり、ここにいつものように魔法力を流し込むというわけである。しかし、顔を上げなければ前が見えず、海老反りのような体勢はいささかきつかった。

「赤松勇、出る！」

投下された桜花は物凄い風圧の中、自由落下を始める。ふわりと内臓を持ち上げられる感覚に襲われ、その後適切な高度でエンジンに点火、魔法力を流し込む。すると、爆発的な推進力が後押しとなり、一気に首が後ろに持つていかれそうなほどのGに目がくらむ。

「ぐぐぐ．．．!!! 上がれ!!!」

精一杯身体を上を持ち上げるが、背骨が悲鳴を上げ、目は押し込まれそうなほどの重さに勇と言えど音を上げそうになる。それでもなんとか持ちこたえ、機体を持ち上げる。そして、標的が迫るがそのスピードでぐんぐんと目標が大きく見えてくる。もはや動体視力検査のような速さでその標的に着弾する。

『目標に着弾！成功です！』

ハイドリヒの歓喜に満ち足りた声が通信機を介して聞こえてくるが、勇にはこの代物の恐ろしさが嫌と言うほど理解できた。これに普通の人間が入っているのは命がいくつあっても足りない。そんな代物に10人も命を散らしたと言う過去にただただ恐怖していた。

「素晴らしい！観測員、最高速度は？」

「マツハ2. 1です！信じられません！」

「よし、マツハ2. 3になるまで訓練を続けなさい」

「長官！普通の桜花の最高速度を既に大幅に超えています！これ以上求めるのは……」

ハイドリヒに口答える研究員はその口をパクパクさせて、その言葉の続きを止める。目の前にハイドリヒが拳銃を構えて立っていたからだ。

「我々は普通の成果を上げてもなにも嬉しくないのですよ。目指すのは前人未到の神速です。一切合切を振り切り、その全てを灰燼に帰すまで止まることのない神の一手を望んでいるのです。全ては新しい時代と再編された世界のために・・・」

勇の桜花での訓練は続き、音速をも軽々と超える兵器にミーナは驚いた。見たこともないフォルムと、ただ一直線に飛ぶだけの代物に、どこか言いしれない狂気を感じさせていた。

「ハイドリヒ長官、あれは一体何なのでしょうか」

「あなたには関係のないことです」

「いいえ、私たちの基地であのような兵器を扱われては困ります！即時使用を中止してください！」

「あなたも分からない人ですね。あれは我々の作戦に必要なものであり、作戦への介入は御法度！違いますか？」

ハイドリヒの嫌な顔を引き出せるのはもはやミーナだけとなっていたが、ミーナにもどうしても引けない一線があつた。桜花から出てくる人間を見た時、そのどうしようもない兵器の存在意義に疑問を感じてしまった。それが勇だっただけにその疑問は怒りに変わる。

「あのような直線飛行するだけの代物、作戦とは呼べません！」

「ただ真つすぐ飛べばよいのです！一切合切を振り切り、だれも手を出すことのできない遥か高みに登りつつある神の遺物になぜ共感できないのです!？」

「神の遺物ですって？御冗談を・・・そんなもの私が叩き墜として御覧にいきます」

「ほほう、面白い・・・」

ハイドリヒとミーナの舌戦は、このキール奪還作戦であるオペレーション『サウスウインド』の成功によつて運命的にミーナと結びつく。濃霧の中、ネウロイの存在をじて疑わず、最後まで諦めなかつたサーニヤたち四人の若き少女たちのおかげで、勇の最

終決戦の時期もその歩みを進めているのだった。



## 籠の中の翼 第十三話

この日も勇は桜花に乗り込み、訓練を行おうとしていた。その時、基地にアラートが鳴り響く。

「ネウロイの反応が出現しました！」

「なんですって?! すぐに出撃・・・」

「駄目です! ネウロイの反応消失しました!」

「どういうこと?!」

一瞬で反応が消失したネウロイの正体は、ロケット型ネウロイだった。奇しくも勇が桜花の訓練を行っている最中のできごとに、ミーナの疑念は増していくばかりだった。そして、そのロケットネウロイの対策として現れたのが、ウルスラ・ハルトマン中尉だった。

「ノイエ・カールスラントで開発されたジェット戦闘ユニット、『M e l 6 3 コメート』、これであるロケット型ネウロイを迎撃できます！」

この兵器は従来のジェットストライカーとは違い、局地戦用としての用途が設定されており、急速な加速が得られる代物だった。このコメートの仕様に名乗りを上げたのがミーナだった。

「ミーナ！指揮官のお前が乗らなくてもいいじゃないか！指揮官がわざわざ危険な任務に行く必要はない！」

「コメートを私以上に扱えるウィッチはいないわ。それに、これならユウにも対抗できる」

「ミーナ・・・」

ミーナの堅い意志を前に、バルクホルンも退くしかなかった。そして、ハイドリヒや勇も見守る中、訓練飛行が始まる。

「お手並み拝見と行きましょう」

ミーナが発進すると、コメートは物凄い勢いで加速していく。全身の血液が脚に押し込まれるような重圧に耐えながら、目標を撃破する。周りからの賞賛も憚らず、ミーナは着陸する。が、しかしユニットから脚を抜くと魔法力が欠乏し、ふらついてしまう。

「おいミーナ、大丈夫か？」

「ええ、ちよつとつまずいただけよ」

強がってみせるものの、ミーナの脚は震えが止まらなかつた。他の隊員、延いてはハイドリヒや勇の前だからこそその矜持を保てることのできた。ハイドリヒは拍手しながら、その笑顔を隠そうともしない。

「お見事でした。さすがの固有魔法ですね」

「ええ、舐めてもらつては困ります。では・・・」

「ええ、舐めてなんていないですとも。諸刃の剣でも」

その後、ミーナはその足でお風呂に入りに行く。何とか隠し通せたが、シャワーを浴びて人目を憚らないと震えたため息は隠せそうもなかつた。お湯を頭から浴び、氣を紛らわしていると誰かが入ってくる。おおよそバルクホルンだろうと思ひ、そのままいると隣の場所の戸が開いた。湯気が立ち込める室内で、仕切りがあるとは言え、そのシルエットの大ききさでバルクホルンではないことを知る。

「ゆ、ユウ?!」

「ああ、すまない。入渠時間が今しか取れなくてな。いつもこの時間に入っているんだ。だれもないからな」

ごく自然に入ってきて、今しがたもミーナがいるのにも関わらずシャワーを浴び続ける勇に、ミーナは動揺が隠せなかった。しかし、それも気にせず汗を流す勇の姿を見て、自分の肌を無意識に隠してしまう。いくら勇がシャワーを浴びているため目を閉じているとは言え、意識されないというのも癪だった。しかし、勇はそんなミーナの態度を知らずともせずに話しかける。

「ミーナ、お前魔法力が限界だな」

「え・・・」

突然の質問と、凶星を突かれたことに言葉を失う。勇はさっさと体を洗い終わるとも

う用はないとばかりに去ろうとする。

「ミーナ、俺にはもう関わるな。お前までいなくなったら寂しい」

その言葉を最後に勇は風呂場から出てしまう。一人残された浴室には、シャワーの流れる音と一人の少女だけが際立っていた。シャワーから戻った勇はすぐにハイドリヒの下を訪れていた。

「勇中佐はミーナ中佐の実力をどうみますか」

「俺は判断するに値しないと思うが」

「主観で構いません」

「・・・到底俺の速度に追いつけるとは思えない。が・・・彼女はその名が轟く第501統合戦闘航空団の隊長、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐だ。ハイドリヒ、お前が暗殺しようとした位のウィッチだぞ？ミーナ中佐は死に物狂いで食らいついて来る」

勇の見たてを嬉しそうに聞き入るハイドリヒは、手を叩いて喝采した。

「そうでなくては面白くありません！我々は、我々の前に立ちはだかる障害は全て払ってきました。この状況に置いて、あなたはネウロイが我々が払う最大の障害だと思ってるでしょうが、私たちの障害は常に人間であり、人間こそがこの世界にとって最大の敵だと言っても過言ではありません！」

ハイドリヒは立ち上がり、その打ち震える情熱を拳に込めて振るう。まるでオーケストラの指揮者のように振るうその様子はさながら地獄の黙示録の編集者の様だった。

「お前、本当はネウロイと戦争する気はないんじゃないか？」

「ようやく理解者が現れました、大変嬉しく思います。私の使命はこの世界の秩序の保

護！私はこの増えすぎた障害を払い、適切な形で運用する理想郷を建設するために全生命を費やしているのです！」

『ハイドリヒ』の理想郷だろ、それを人類の枠に当てはめるな」

ハイドリヒはそんな勇の小言を高笑いで吹き飛ばす。どこがおかしいのか勇には分かかってしまっていた。

「そんなにお前が『守護したい』ものは崇高なのか？」

「勇中佐、あなたもやはりこちら側の人間なのですね！分かっていただけると思っていましたよ！もちろん崇高ですとも。私は人類の守護者であり、番人なのです。人は皆、自分が見ている視点で物を主張します。例えば、窓が違う方向にそれぞれついている家があるのでしょうか。一人は山の景色を、もう一人は海の景色を、またもう一人は荒野を、では最後の一人は何を見たと言主張すると思いませんか？」



ハイドリヒは自分の守りたいものの幻想について語る。勇にもその景色は見えていないが、酷く殺風景なものに見えていた。

「それぞれを見ている人間たちを見た、と言うのですよ。物事は一方向では語れません。しかし、近代に入り、人間は産業革命の産物に目を奪われ、機械を介した偶像を実像だと思ひ込んで憚りません。私が創る世界は全てであり、真実です。私が全てを見せてやるのです」

勇は酷く殺風景な部屋でハイドリヒと膝を突き合わせて座っている。ハイドリヒが浮かべる世界の景色の色が見えてきたが、その見えた景色が真っ白で何もなかったのだ。

「それはお前が神になったみたいだな」

「妥当でしょう。盲目な人間を導くのですから、守護者とは創生者、つまりは神です。神

が仕事を放棄した現状、だれかがその役目を担わなければなりません。私が神に取って代わるのです」

「俺はその先駆けと？」

「言ったではありませんか。生きながらにして神に至るあなたは誰よりも先駆者になる。そして、それを導いた私が後を率いるのです」

世界は廻り、朝と夜が入れ替わる中、ハイドリヒだけはそれを紙芝居で見せようとしている。真っ白な世界が絵具で彩られていく。それは色と色とが混じり合うのではなく、きちんと線引きされたすつきりとした世界だった。

「ネウロイはこうした世界の守護者なのでしよう。忘れられた者が、風化させないために存在するのが世界の神経細胞であるネウロイ・・・なんと合理的なのでしよう。私もこの案は採用したと思います。私の世界では選ばれた人間が暮らし、慈しみと同じ目標に向かって歩む、人類共同体を創るのです」

「いいかハイドリヒ。一つ教えておいてやる。人間はそんな押し付けられた価値観の中

で生きるのが大嫌いな生き物だ。生物は自ら生きる道を見つけ出す」

ハイドリヒは面白そうに勇の意見を聞き入れた上で、反論する。

「では、その価値観とはなんですか？これまでの価値観は人間が作り、飼いや慣らされた価値観です。だから人類は大きな変革を嫌うのです。それが未来で自分たちを良くしてくれるとも考えずに。ならば、私とその価値観も書き換えましょう。新しい世界では私が価値観です」

「独裁者はいつか必ず降ろされるぞ」

ハイドリヒはその言葉を待っていたとばかりに机に手を着く。

「そうですね！その点でミーナ中佐はいい！あのような優秀な人間こそ生き残るに値する人間です！私が思い浮かぶ世界の中で、私の価値観に染まった世界でも必ずはみ出し者が出てきます。そんな時、その時の価値観を自分の信念として守ろうとする者は懸命に戦います。私はこの二重構造を意図的に生み出したのです！そして、辿り着くのは・・・本当の楽園。だれもが統一された価値観の下で合理的に生きていく社会。ああ、なんと素晴らしい！」

恍惚とした表情の中、勇はハイドリヒの存在が分からなくなっていた。この線引きされた整った世界には概念がない。その中で概念であり続ける人間など存在するのであろうか。そう考えると、ハイドリヒという存在がますます薄くなる。同じ未来を見た者同士として、勇はハイドリヒに質問する。

「じゃあお前は、その世界が完成したらどうなるんだ？」

「考えてもいませんでした・・・そうですね、おそらく私は淘汰されるでしょう。統一され、変革が必要なくなった世界で変革者が不要なように、完成した世界ではその価値観

が普通であり当然となり果てるのです」

驚いたことにハイドリヒは未来の自分の姿を想像していなかった。しかし、それでも平然と自分の身の破滅を予見できるこの男は危険と言わざるを得なかった。そして、ハイドリヒは自分の未来を紡ぎ出すために勇を遣わす。

「さあ、新たな世界を作る第一歩です！この作戦には意味があります！未来に必要な人間、これを守るノアの箱舟となるのです。これは命令です。勇中佐・・ミーナ中佐を、死守しなさい」

翌日、ロケット型ネウロイの迎撃のため編成を組、ベルリン近郊のアウトバーンまで浸透作戦を実行することが立案された。

「今回の作戦で、私とユニット技師とすてウルスラさん、あと二人を募集します」

「私が行こう」

「私も行きます！」

バルクホルンと宮藤が名乗りを上げるが、宮藤は魔法力の問題から却下されてしま  
う。そして、あと一人のところにはハルトマンが手を挙げた。

「運転手がいるよね！」

「今回は俺も行こう」

「ユウ！あなたも来てくれるの？」

勇の参加に一同は困惑しながらも、参加を喜んでくれた。ミーナも仕方なく護衛役として勇の参加を承認し、出撃が決定した。ハイドリヒは珍しく出張に出かける為、ミーナも安心して残った隊員の中で最も階級の高いシャーリーに後を任せる。そして宮藤

にあることを頼んでおく。

「宮藤さん、あなたにも頼まれてほしいことがあるの」

「はいっ！なんでもやります！」

「ありがとう。じゃあ、これを・・・」

勇は宮藤に渡す何かを横目で見ながら、ミーナの護衛に思考を巡らせる。今回は勇の行動範囲が大幅に制限解除され、定時連絡の類もなかった。要するに自由にミーナを護衛できるのである。運転役にハルトマンと勇が選ばれ、二台での行動が開始された。しばらくすると深い森に入り、ネウロイの監視が薄そうな場所で一夜を明かすこととなった。

「はい、姉さま。コーヒーです」

「ありがとう！・・・うげえなにこれ」

「タンポポの根を煎じた代用コーヒーです」

「贅沢を言うな」

「うふふ、ベルリンを奪還したらみんなでカフェに出かけましょう！」

「ケーキもある?!」

和やかな話しを前に、勇は持ち物を確認し、木の陰で銃を抱えて敵の襲撃に備えていた。持ち物は最低限とし、衣服の替えしか持つてきていなかった。そこにミーナがコーヒーを持ってやってくる。

「ユウ、あなたも少しは休んで」

「俺は平気だ。だが、ありがたくもらうよ」

「はあ、こうしてるとなんだか不思議と気が落ち着くわね」

春といえどまだ夜は冷え込み、暖かいコーヒーが揺らめく湯気を立てているのを目で



眺めてしまう。だが、そんなミーナを見て、勇は命令としてここにきているという事実を隠していることに口を噤んでしまう。

「あなたも一緒にお茶しましょう」

「今飲んでるじゃないか、一緒に」

「うふふ、そうじゃなくて、ベルリンを奪還したらよ。大丈夫、あなたもハイドリヒ長官から奪還してみせるから」

ミーナの目は本気だった。振り返ってみるとミーナはいつだって本気だったのである。一度たりとも無理なことは言わない。それがミーナという隊長の持つ風格だった。それでも勇はその未来だけは掴みえない、ミーナの汚点になってしまふことが悔しかった。

「夢を戦闘前に語るのは縁起が悪いぞ」

「うふふ、トウルレーデと同じことを言うのね。やっぱりあなたは変わらないわ」

嬉しそうに笑うその姿に、勇の胸はキュツと締め付けられる。自分の手は真つ赤に染まっている。それが真つ黒だ。変わらないとしたら自分のミーナたちを守りたいと言う信念だけだろう。そんな皮肉を考えると、ウルスラがやってくる。

「赤松中佐、以前見かけた時よりだいぶ痩せたようですね。是非補給をしてコンディションを整えてくださいね」

「ああ、悪いな」

勇は以前のウルスラへの隠れたいという感情は消え失せていた。そして、手渡された食事にモシヤついていると首元のハイドリヒから貫つたネックレスになにやら熱い視線を向けてくることに気づく。

「赤松中佐、このネットワークス・・・」

「ああ、これはハイドリヒから着けているように言われてな。これがどうかしたか」  
「い、いえ・・・以前どこかで耳にした兵器に似ているような気がしまして」

煮え切らない態度のウルスラは置いておいて、すっかり冷めてしまった食事を平らげること集中する。

「あれはもしかして・・・」

翌朝、再び出発し、予定時刻にアウトバーンの下に到着する。ジェットストライカーに燃料を注入する間、バルクホルンとハルトマンの二人は上空警戒を行い、勇は周囲の安全を確保するために索敵を行う。燃料の注入にあと10分ほどのところで勇は異変に気付く。

「来るぞ」

地上の監視ネウロイが接近し、ミーナたちのことを捉えようとしていた。それをすかさず倒してしまふ。すると、倒した瞬間にバルクホルンらが苦戦したジェット戦闘機型ネウロイが現れる。まさか監視ネウロイ自体が位置情報を放っていた可能性を失念しており、倒してしまった時点でこちらの居場所がバレたと知る。

「敵襲!!!」

「なんですって!」

「出るぞハルトマンっ!」

「うん!」

勇の警告ですぐに発進する二人がジェット戦闘機型ネウロイを相手にし、勇はすぐにミーナの周囲を護衛する。周りに敵がないことを確認すると、勇も旧式ではあるが零戦に乗る。ミーナの身边を護衛するつもりだがシールドに関しては、その緻密な魔法力操作と魔法圧調整能力によりおそらく宮藤よりも限定的ではあるが固いシールドを張れる自信すらあつた。

「……は俺が守る。早く準備を整えろ」

ミーナとウルスラが準備を整える間、ジェット戦闘機型ネウロイを二人がかりで抑え込んではいないが、どうにも目標はミーナとそのユニットらしいことが伺える。二人の隙を突いて攻撃を仕掛けてくるが、しっかりと勇が防御する。

「ありがとう、ユウ！」

「いいから早く行け！」

ロケット型ネウロイの発射が予定よりも早く、現在進行形で危機的状況であることは変わらない。あのロケット型ネウロイがキール軍港を襲うだけで、甚大な被害とハイドリヒはさぞかし怒り狂うだろう。狂っていてもあのハイドリヒという男は早く作戦を成功させたいと願っているのだ。そして、ミーナが発進したところで勇もミーナに続く。さすがの加速力については行けず、ミーナの上空警戒程度しか務まらないが、それでも行く。

「うまくいきすぎてる・・・」

勇はミーナがロケット型ネウロイの迎撃に迎え、そのロケットも撃ち落せることだろう。しかし、姉である咲に呼ばれてこの因果を導いているのだとしたら、これで終わるはずもなかった。間もなくミーナから悲痛な報告が入る。

『こちらミーナ・・ロケット型ネウロイを多数視認!』

『どういふことだミーナ!?!』

『行つたらもう燃料が残つてないよ! そしたら巢に真つ逆さまだよ!』

『おい、聞いているのか! ミーナ?!』

同じく通信を聞いていたバルクホルンとハルトマンの二人がミーナの報告からミーナが行こうとしていることに気が付く。それはミーナの護衛をしている勇にも感じられていた。それは一番自分が分かっている感情だからこそ、いち早く行動することができた。

『トウルーデ、エーリカ・・あとはお願い』

その一言を遺してミーナは通信機も投げ捨てる。そして、もう一度ジェットストライ

カーでロケット型ネウロイの迎撃に向かってしまう。勇もあと寸でのところまで来ていたが、ミーナはその豪速のジェットストライカーで引き離されてしまう。

「くそっ！ミーナのやつ！こうなったらやるしかあるまい・・・」

勇は目を閉じ、ハイドリヒからの命令の内、自分の魔法力についてやこれまでの戦闘のことを話すのを禁じられていた。しかし、最優先命令の死守命令が出されているミーナの保護のため、勇は自分の魔法力の一部を開放する。全神経を集中させ、魔法力と魔法圧の配分を最適化させる。そして、その最大化された魔法力はユニットへ送られ速度へと変換される。

「ジェットには比べるまでもないが、誰も守れないよりはマシだ！」



勇の目指す先はミーナで、そのミーナは全力で発射台に今まさに発射しようとしているロケット型ネウロイを根こそぎ破壊していた。しかし、燃料が残り少ないのかフラフラと蛇行しながら、ミーナの圧倒的熟練した機体操作のおかげで全機撃破に成功していた。

「お願い！あと少し！あと少しだけ力を貸して！」

ミーナは目の前の目標を狙い続ける。引き金を引く指の感覚が薄くなり、徐々に脚から魔法力が抜けていく感覚に襲われながらも、全ては守るべきもののために引き金を引き続けた。そして、遂に見える全てのロケット型ネウロイの撃破に成功した。目の前には、悲痛な叫び声をあげるようなネウロイの巣が、その動力を落としているようにも見えた。

「やった……」

しかし、ネウロイの巢同様にミーナも自身の魔法力とユニットの燃料が同時に底を突いていた。全ての体力と魔法力を消費し、もうミーナには銃を握るだけの握力も残されてはいなかった。ゆっくりと落ちて行く浮遊感が心地よく、風が耳を割く音はどこまでも暗く、それでいてミーナは安心と不安に襲われていた。

(トウルルデ、エーリカ……ごめんなさい……ユウ、あなたとの約束も、守れないわ……もう一度でいいから……あなたの背中で同じ景色が見てみたかった……)

ミーナはサントロン基地での戦闘からの帰還したときをふと思い出していた。ミーナと勇の二人で戦い抜いた戦闘は、いつになく劣勢で、それでもなんとか二人で難局を乗り切り、背中に乗せられたまま基地に向かい、恥ずかしい思いをして怪我をさせてしまった記憶。そして、宮藤の魔法力が復活した後に見た、軍帽に隠された勇の顔がゆっくりと思いい起こされていた。しかし、その記憶もふわりとした重力と共に光が差し込ん

だことで終わりを迎える。

「まったく、強情なやつだ……」

その声はミーナの耳が目を開くだけの希望を与える声だった。目を開くとそこには勇の顔があつた。常に前を向き、飛び続ける彼の姿は、まさにミーナが想い焦がれるそのままの彼だった。

「どうして……」

「任務だからな」

まったく無表情で可愛さの欠片も失くなつてしまつた彼の言葉が嬉しくて嬉しくて仕方がなかつた。お姫様抱つこの形で運ばれ、本来恥ずべく姿だったが、憧れの存在が

自分を一番に救いに来てくれた事実がミーナにとってなによりも幸せだった。嬉しさと反省で涙が溢れる。だからミーナはお返しをする。自分の手の拳に優しく口づけをする。

「バカ」

その拳は優しく勇の頬に吸い込まれる。気にもしない勇は今しがた追いついたバルクホルンとハルトマンの二人にミーナを引き渡す。

「ミーナ!!」

「すまない、無理してユニットがガタガタだ。先に戻る」

「ユウ・・・さっきのあの速度、零戦の物じゃないぞ」

「・・・やれることをしたまだけだよ」

ハルトマンとバルクホルンにミーナを渡すと、勇はがたつく零戦を制御しながら先にアウトバーンの所まで戻る。待っていたのはウルスラだった。

「赤松中佐、ミーナ中佐をありがとうございます」

「任務だからな」

「それにしても今回のロケット型ネウロイの出現といい、あなたの乗るあの機体といい、もしかして……」

「それ以上は話すな……分かった、後で話してやる」

ウルスラは神妙な顔で聞いていたが、なにか知り得ていることは勇にも分かった。いずれにしても今後、自分が行う義務と作戦には関連があることを考慮すれば、賢いウルスラは後々役立つだろうと考えた。そうしていると三人が戻ってくるところだった。

「皆さん！つあー！」

駆け寄ったウルスラが躓いたのは、ジェットストライカーの燃料補給用の管だった。その管が外れると、燃料が噴出し、そこら中に撒き散らす。勇も咄嗟にシールドを展開し、それを防ぐも、今しがた来た三人は間に合わなかった。燃料を浴び、衣服が溶けてしまっていた。

「なっ、なんだこれは！」

「か、隠す物は?!」

「ウルスラあ!!!」

素っ裸になってしまった四人は替えの衣服などは持つてきておらず、勇という異性の存在に酷く動揺していた。勇は黙って自分の荷物から替えの衣服と今来ている上着を

脱ぐと、その場に放り出す。勇の体格のサイズなら四人には十分な大きさであり、事足りた。そして、勇は黙ってトラックの運転席に乗り込み、目を閉ざすのだった。

帰りの道中、勇の服を着た三人はギャーギャーと騒いでいたが、勇は全てを無視するとやがて声はしなくなり、次第に眠ってしまった。トラックの一台が攻撃により破壊されてしまったため、一台での帰路は荷台に三人を乗せ、運転席には勇とウルスラが座っていた。

「……」

「……」

互いあまりしやべらない性格のため、道中はしばらく無言だった。しかし、勇はウルスラの動じない視線に圧力を感じていた。

「ウルスラ中尉、ずっと見ているというのも趣味が悪くないか」

「いえ、あなたが話してくれるのを待っていました」

「そうか、何を話せばいい？」

「あなたとネウロイとの関係です」

ウルスラは待ち望んだ解答を、ずっと待っていた。勇も話すと約束した手前、惚けるつもりもなかった。だから、勇が思うベルリンのあの瞬間移動型ネウロイの正体についてウルスラに話すことにした。

「あれは俺の姉に腕相撲で負けた後のことだ」

運転しながら、自分の記憶の蓋をそつと開ける。だれにも汚されず開かせたことのない蓋は今も錆びつくことなく開いてしまう。しかし、そこには勇の一番隠したかった過去が眠っていた。



「じいちゃん、塩梅はどうだ？」

「ああ、悪いよ……」

床に臥せっているのは優雨作の保護者である榊道齋だった。優雨作が起こした傷害事件の謝罪の後、風邪を引いたと、臥せっていた。優雨作は必死に看病してはいるが、一向に回復の兆しが見えることはなく、症状は悪化の一途をたどっていた。

「ごめんください、道齋さんのお見舞いに来ました」

こここのところ咲も看病によく顔を出すようになり、二人で看病をしていた。道齋は次第にやせ細り、元々細い身体は骨と皮だけになっていた。医者などにはいるはずもなく、薬剤師という体の漢方医が持つてくる薬だけが頼りという状態だった。

「道齋さん、何か口にしないと・・・」

「なんもいらんなあ」

「じいちゃん俺が玉子酒作つてやろうか？」

「ん・・・葛湯、なら・・・」

葛の木の根を粉末状にしたものを湯に溶かした、経口流動食という希望を口にした瞬間に優雨作は走つて部屋を出ていた。それほどに優雨作は道齋の体調を心配しているのが伝わり、咲は微笑ましく、また物悲しく見守っていた。

「本当に優雨作くんに伝えなくていいんですか？」

「ああ、今ですらこんなに尽くしてくれんじや。ワシがもう駄目だと知ったらあの子まで駄目になってしまいかねんよ・・・」

口から涎が垂れてしまうのも拭くこともできなくなってしまうた道齋の代わりに、咲が口元を拭いてやる。道齋の気持ちもよく理解できるが、咲には道齋の死後の優雨作の方がどうにかなってしまおうのではないかと心配していた。

「もし、ワシが死んだ後に困ったことがあったらあるところに世話をしてもらえるように頼んであるんじゃないよ」

咲の心を読んだのか、その答えを先に提示する道齋だったが、その世話をする人物と言うのに心当たりがなかった。

「どちらの人ですか？」

「海軍の知人じゃ。昔、あれは1904年か、扶桑沖で怪異との戦いがあったときのこと

じゃ。ワシは先代の付き添いで海軍の偉いさんの所で、祝詞を寿ぐ役目を仰せつかったんじゃ。ワシではなく、ワシの父親が名が通った人物でな、ワシはさっぱりじゃったが、ワシはこの目でしつかりと見たんじゃ」

当時のことを今しがた見たことのように、道齋はしわがれた目を輝かせて話した。

「あれはワシよりも少し若いくらいの年ごろの女の子じゃった。その女の子は不思議な力を持った巫女で、襲い掛かる怪異という災厄から扶桑を守らんがために立ち上がったお人じゃと言う。ワシはなんとも凄いいお人じゃと年上ながら恥ずかしい思いをしたもんじゃ……」

「その方のお名前は？」

「たしか……秋本芳子さんと言ったか。先代はその方に神の力を寄せるといふことで、それは強い力で祈った。ワシはそういつた力には恵まれんでな、先代の後ろで必死にただ祈つとつた。その祈りが通じたかは分からんが、その後、そのお方は扶桑沖戦役と名がつく戦いの功労者として名を上げる活躍をしたんじゃ」

咲には今道齋が話している存在が咲と同様のウィッチであることを知っている。しかし、それを隠すために故郷を離れ、こうして田舎に身を潜めているため、自分もウィッチであると言うことを伝えたくても伝えることができずにいた。

「先代が亡くなって、ワシはなんの力もない神主となった。しかし、先代はワシに言ったのじゃ。『お前には私にもない力が宿っている。それは人に見えることはない力だが、お前が望むならきつとそれに応えてくれるだろう』とな・・だが、それも今日まで現れることはなかった」

道齋の先代は何のためにこんな嘘をついたのか、咲は道齋という心優しい人物に宿る、当時の野心と無駄だと分かった時の落胆を想像した。しかし、道齋は咲の手に自分の？せ衰えた少し暖かい手を乗せる。

「ワシは思うんじや。ワシには何の力もない。ワシの血筋はこれで潰えると……だが、そこに優雨作が現れた。血の繋がりもない子じやが、あの子は何かが宿った子じやとワシは直感的に思えてならんじや。もし、ワシの先代の力の噂を聞いて、あの子をワシに預けたのだとしたら、きつと咲ちゃん、君もここで会うために神様が導いてくれた思し召しなのじやと」

神に仕える身として、道齋はこれまで一心に祈りを続けてきた。自分に帰ってくる保証もない中、ただ無心に祈ったのだろう。そんな中、優雨作が現れた。これは天啓というものなのかもしれないが、道齋の思う、優雨作がウィツチの力を持った少年であることは的を得ている。そして、自分も巡り合った。道齋の強い思いが二人を引き合わせたと思うと、道齋の力とは実に滑稽なことに適ったと言えるだろう。

「咲ちゃん、あの子を、優雨作を頼むよ。ワシは『最後のお勤め』を果たさなければならん」

道齋は分かっていたのかもしれない。優雨作も咲自身もウイツチであることを。だから、初めて優雨作の下を訪れた時に『咲ちゃんの事情も分かっている』と言ったのだろう。この道齋という人の本当の力とは引き合わせる仲介者という稀な力なのかもしれない、そう考えれば考えるほど道齋の思う、優雨作への想いが本物なのだと分かってしまった。そして、それ以降道齋が起きることはなかった。

## 籠の中の翼 第十四話

そこまで話すと、ウルスラは勇の話を黙って聞いていた。なぜその場にいなかった勇がこの話を知っているかから話すことにしようと、勇は話を続ける。

「なぜその話を知っているか、それは葛湯を作りに行ったわけだが、葛湯自体にはあまり甘みがないから、甘みをつけようと金平糖を入れることを思い付いた俺が、取りに戻ったから聞いてしまった話なんだ。聞きたくはなかったが・・・」

そして、勇は自分がウィッチに至る経緯から話し始めた。

「あれはじいちゃんが息を引き取って葬式を執り行う日のことだった」



道齋の葬式には村中の人間が集まった。村の相談役として長年村の仲を取り持った道齋を弔おうと大勢が集まり、村長が優雨作に代わり喪主を務めることになった。優雨作は咲と共に遺族席に追いやられ弔辞を座して聞いていた。そこには様々な人物が参列しており、中には海軍の将校の制服を着た人物までが列席していた。その人物が勇の下を訪れた。

「君が道齋殿の言っていた子だね。この度はご愁傷様。私は海軍の楠昌繁という。何か困ったことがあれば私の所に来なさい」

そういう海軍の将校、楠昌？は優雨作に自分の詳細を書いた紙を渡す。優雨作はその紙を見ずに咲に渡してしまう。

「この紙？」

「どうせ俺は姉ちゃんの部下だ。姉ちゃんが持つててくれよ」  
「そう……」

優雨作は咲に腕相撲で負けてから頑なに咲の言うことを聞いていた。もはや優雨作には咲しかいないのである。道齋に頼まれた咲としても優雨作の面倒を見ていたいという思いもあり、仕方なくその紙を受け取る。式は恙なく進み、最後に遺族の最後の別れとして御香を捧げる段になった。優雨作が道齋の棺の前に立つと周りの人間はひそひそと話し始める。

「あれが道齋さんの……」

「暴れん坊で引き取り手がないって」

「さぞかし大変な思いをしたんじゃないやろうて」

あることないことを囁き合う村人たちに咲はいわれのない怒りの感情が沸き立つ。

しかし、優雨作はそんな声がまるで耳に入らないかのように立ち尽くしている。咲が思わず駆け寄りたくなる衝動に駆られると、優雨作が衝撃の行動に出る。

「なっ!?!」

本来少量の御香を摘まんで落とす行為だが、優雨作はそれを豪快に掴むと道齋の遺影に向かつて投げかける。その場にいた全員の度肝を抜く行為に、優雨作と咲だけが聞こえる声で呟いた。

「じいちゃん、じゃあな」

優雨作の行いに押し黙る者、激高して優雨作をつとつ捕まえようとする者が混在する中、優雨作は駆け出してしまふ。咲は優雨作を追いかける。まだ部屋からはどよめく声

がひっきりなしに聞こえてくる。飛び出した優雨作がいた場所は神社の本尊だった。薄暗く、底冷えするその部屋に勇が立ち尽くしていた。とりあえず咲は優雨作の後ろに立つ。

「あんたは織田の殿様のつもりなの？」

「まだいるよ……」

「どういふこと？」

咲が横に並ぶと、優雨作の足元にはいくつかの染みができていた。それは初めて見た優雨作の涙だった。

「みんなみんなじいちゃんを分かつたらん！じいちゃんは！じいちゃんは死んでなんかいねえ！だって……俺のじいちゃんは今も笑って、俺の中さいるんだ！」

東北訛りの言葉は生まれた地域こそ違えど、咲の心に届いていた。優雨作のボロボロと流す涙は、本尊の床を濡らすことを憚らずに大きな染みを浮かせた。何度も雑巾がけをした床、道齋と過ごした日々が涙と一緒に流れて行ってしまうような気がして、涙を止めようにも溢れては零れて行ってしまう。咲は優雨作の涙を拭くことはせず、しっかりと抱きしめる。その時だった。突如として優雨作の身体から光が溢れてきた。

「ちよ、ちよつと優雨作！」

「え．．．」

本尊の奥が開き、御開帳の様相がまさに神々しさを演出していた。その後光の如き光は優雨作だけを照らし、暖かさを優雨作に齎した。優雨作は起こっている現象に戸惑い、咲は確信した。

「依り代だ……道齋さんが優雨作に入った！」

「じいちゃんが？」

咲は驚愕していた。本来ウイツチは神の遣いである動物を遣い魔として、ウイツチと融合することにより魔法力を発現させる。その証拠として咲は丹頂鶴と契約し、魔法力を発現すると動物の耳としつぽが出てくる。しかし、優雨作にはその耳などが見当たらないにも関わらず、きちんとウイツチとしての素質が一体化していた。まさに、道齋が遣いとして宿つたのだと確信できた。

「道齋さんが優雨作に息づいたんだよ……ずっと君を見てくれる。君は一人じゃないよ」「じいちゃん……うわあああん!!」

その後、優雨作と咲は自分がウイツチであるということは二人の秘密とした。優雨作は案の定村人からは疎まれ、だれも関わろうとしなかった。しかし、優雨作は神社の清

掃を引き続き行い、一人で神社を守っていた。そして、毎日咲が優雨作の下を訪れ、ご飯などを共にし、ウィッチとして魔法力の扱い方を伝授するという日々が続いていた。

「ふう、優雨作はウィッチの素質に恵まれてるわね」

「本当？」

「ええ、魔法力の伝達が私の次に上手よ」

「ちえー姉ちゃんの次かよ」

「調子に乗らない！」

咲は当初優雨作が一人で神社に残ることを心配した。しかし、優雨作は日を追うごとに遅しくなり、魔法力の扱いに関しては咲が驚くほど上達速度が早かった。元々遣い魔と契約していなくとも、溢れ出る力を喧嘩という行為ではあるが、行使してきたため身体に魔法力が馴染むのも早かったのだらう。だが、まだ保護者である道齋を亡くしたばかりで精神的に不安定であるのには変わらなかつた。

「君は私が必ず守るからね」

「・・・もう腕相撲も負けないよ」

強がる優雨作が愛おしく、道齋から託された咲としても、このまま楽しくこの地で過ごせる未来を楽しみにしていた。しかし、その穏やかな未来さえ大声でかき消されてしまふ。

「咲ー！こんなところで何を・・・お前まさか?!」

その声の主に咲は凍り付いた。優雨作にも聞き覚えがあり、振り返ると桜の木の後ろから一人の男が出てきた。その男は咲の父親だった。



「お父さん！」

「お前・・・魔法力を使って・・・」

「違うの！私、ここで本当のことが言える友達が・・・」

咲が言いかけたところでその言葉は遮られる。息の荒い咲の父親と倒れる咲の光景が優雨作には理解ができなかった。頬を赤く腫らした咲は父親に強引に手を引かれていく。優雨作がやつとのことと咲の父親に訴える。

「姉ちゃんは何んも悪いことしてないぞ！」

「すっこんでろ小僧！」

「優雨作っ！」

突き飛ばされ、肘を擦りむく痛みが上ってくる中、咲が必死に叫んでいる声が響く。

「私は大丈夫だから！また来るから！」

「ほらっ早く来い！」

引つ張られていく咲の姿と、必死に強がる咲の姿が同時に流れてくる現状に優雨作の脳内は沸騰寸前だった。優雨作の考える家族という壁が絶対の厚さを誇って立ち上がり、優雨作の思考を遮っていた。咲はかつて父親が好きだと言っていた。しかし、目の前には咲の障害としての父親がいるように思えてならなかった。家族を知らない優雨作はその光景を目に焼き付けることしかなかった。

優雨作はその日、眠ることができなかった。眠るという行為自体頭に出てこなかった。立ち尽くし、軒先から現れるかもしれない咲の面影を待っていた。しかし、日が暮れても咲の姿を見ることは出来なかった。

「俺が行かなくちゃ……」

優雨作は神社に供えてある酒を持ち出し、咲の家に向かう。自分のことを待っているかもしれない、たった一人の自分の理解者の下へ駆ける。日が落ちかけ、すでに薄暗さがあたりを包むころ、咲の家に着いた。明かりが灯り、中にいるであろう咲とその父親を呼ぶ。

「姉ちゃん！優雨作だよ！開けてくれよ！」

「やかましいっ!!」

出てきたのは、やはり酒臭い咲の父親だった。しかし、優雨作は臆せず咲の父親に向き合う。

「姉ちゃんはじいちゃんから俺のことを任されてんだ！姉ちゃんに会わせてくれよ！」

「なんだこのガキ！任されただあ？お前みたいなクソガキを養うほど楽な暮らしはして

ねえんだ！」

「お願いだ！お酒も持ってきたんだ！これやるから姉ちゃんを許してやってくれよ！」

優雨作が酒を差し出し、咲のことを許すように懇願すると、咲の父親はワナワナと肩を震わせ拳を上げる。握られた大人の拳は優雨作の小さな顔の半分を殴りこむ。吹き飛ばされる優雨作の上に馬乗りになると、落とした酒瓶でさらに殴りかかってくる。

「てめえみたいなおこぼれもらうほど落ちこぼれちゃいねえんだ！姉ちゃんを許せだ?!俺の、俺の娘をなんで許さなきゃなんねーんだ！」

瓶の底は固く、ヒビから漏れ出る酒が傷口に染みてくる。優雨作は人生で初めて人の本質的な人に対して向けられる怒りの感情に恐怖していた。その騒ぎが聞こえたのか、中から咲が出てくるのにそう時間はかからなかった。

「ちよつとお父さん何してるの?!」

「うるせえ!」

「止めて!止めてよ!」

咲が父親と優雨作の間に入り、優雨作を包むように守る。必死に自分を守ろうとしてくれている咲の顔は、優雨作が見たことのない表情だった。人のこんな顔は見たことがなかった。そうしている間に、攻撃をしずらくなつた咲の父親は荒い息を吐きながら残つた酒の蓋を開けると二人の上からかけ流す。

「はあ、はあ・・・頭でも冷やせ!」

甘んじて優雨作にかからないようにしてくれている咲の姿と漂ってくる酒の香りに優雨作は涙が溢れてきた。喧嘩でも流したことのない悔し涙は、殴られた傷もそうだ

が、なにより庇ってくれた咲に申し訳が無くて溢れて止まらなかった。

「姉ちゃん、ごめん・・・家族ってわかんねーよお！姉ちゃんを守りたかったよお！」  
「ごめんね・・・ごめんね」

あおぶちと切り傷だらけの顔を優しく撫でてくれる咲は、ただ謝罪を繰り返すだけだった。そして、咲は決意を優雨作に話すことにする。

「分かった・・・私、決めた」

「・・・何を？」

「あの海軍の人の所に行こう」

突然の決意表明に優雨作は困惑する。自分が咲の将来を左右してしまうことが怖く

なつてしまったのだ。咲とならこの村でも生きていける、そう考えていただけの幼い自分の頭を撫でる彼女は、奥から怒鳴る父親の声を振り切つて計画を簡潔に告げる。

「今夜の時計がてつぺんを回る頃、隣村に繋がる道の入り口にいて。必ず迎えに行くから！」

「姉ちゃん……俺……」

「大丈夫、私が守るから！」

そう言つてもう一度優雨作の頭を撫でると、今度こそ家の中に戻つて行つてしまつた。優雨作は暗い夜道を這う這うの体で神社まで戻ると、咲の言われた通りに旅の準備をする。自分の将来が今日確実に大きく変わつてしまう事実が脚が竦む。だが、咲の方がかもつと大きな決断に迫られていることを支えに、行李袋に支度を詰め込む。自分を拾い、育ててくれた神社は、月明かりに照らされて不気味に輝いていた。

「行つてきます」

知つてゐる単語はこれくらいだった。別れ、出立、門出、卒業、脱出……いろいろ言葉があるだろうが、優雨作の心にはもう歸つてこれないのではないかという不安があつた。だから、僅かな希望を残して挨拶したのだつた。そして、咲に言われた通りに隣村に通じる一本道に差し掛かる。こんな夜更けにはだれも通らず、僅かな月明かりだけが勇の足元を浮かび上がらせていた。

「姉ちゃん……」

時計などは持つていながつたが、おそらく世間で言う丑三つ時の時間になつても咲は現れなかつた。優雨作の心の中では咲が嘘をついたのかという少しの疑念が浮かんだが、それはないと頭を振る。咲は確かにここで待つように言つたのだ。しかし、待てど暮らせど咲は来なかつた。



「もしかしたら父親に酷いことされてるのかも・・・」

そう考えると、確かに咲はどうやってここまで来るのか考えていなかった。自分のことばかり考え、自分を守ってくれる存在のことを考えていなかったのは恥ずかしいことだった。もしかしたら、今度こそ咲が助けを求めているのかもしれない。そう思うと居ても立っても居られなかった。優雨作は木々も眠る中、闇夜を駆けた。

「待つてろよ姉ちゃん」

走る足を一步前に踏み出すごとに心配の気持ちが強くなり、景色が変わるごとに暗さが増していくようだった。それでも自分を信じてくれる咲の下に一刻も早く向かう為、息の続く限り走り続ける。そして遂に咲の家が見える。明かりはついておらず、眠って

しまったのかとも考えたが、暎の救出を第一に考えるとドアを蹴破って中に入ることにした。

「姉ちゃん!!」

ドアは意外にも空いており、蹴破ることなく勢いよく開く。人氣が無く、鬱蒼とした室内の奥で優雨作は何かを感じ取った。部屋の扉の奥からすすり泣く声が出た。その声にする扉をゆつくりと開いていく。声が少し小さくなった気がしたが、その声の方向に足を向ける。そこには襖やテーブルが散らかっており、激しく暴れたことが伺えた。その時、月明かりが破れた障子から差し込んだことで、部屋の状況が見えてきた。

「ねえ……ちゃん？」

部屋の隅でうずくまるように膝を抱えていたのは、変わり果てた咲だった。髪の毛は乱雑に切られたか引きちぎるような跡があり、背中や顔には殴打の跡が痛ましく刻まれていた。そして、なにより優雨作の目に入ったのは、咲の頭から生えたウィッチの印である耳が千切れていたことだった。

「どうした姉ちゃん!? 痛いのか?!

「うう・・・ごめんさい・・・」

「父親はどこだ! とつちめてやる!」

「・・・憎い・・・どうして・・・殺してやりたい・・・」

顔を手で隠し、優雨作の存在を見ようとしなかった。この瞬間、優雨作の心の何か音が立てて壊れるのが分かった。自分を守ろうとしてくれた人が、こんな目に遭わせる人間の心と、家族という絆のおかしさに狂わされ、苦しめられる所以はどこにもないはずである。自分の子どもだからと言って何をしてもいい、縛っていいことにはならない。そんな不条理を優雨作は許すことができなかつた。なにより、この時代親を子が殺

すと言うのは『尊属殺人』と言って、死刑に等しい行為だった。少なからずこのまま事態を放置しておけば、いつかは必ず咲はあの父親の命を奪ってしまうだろう。ならばと、優雨作は決意と共に走り出した。

「どこだ………いた」

夜が過ぎる頃、咲は優雨作に背負われていたことに気が付く。滅茶苦茶だが服が着させられており、汗の滴る優雨作は隣町への入り口を歩いていた。

「優雨作……」

「姉ちゃん……俺……」

「いいの、私の代わりに、ごめんね」

優雨作の背中から降り、二人は歩き始める。手を繋いで、互いを見失わないように歩き続ける。

「優雨作、君にはとても大きなものを背負わせてしまったね」

「ううん」

「お返しに私の苗字をあげる。君を私の弟にしてあげる」

「うん」

「海軍に入ることになるんだったらその方が都合がいいでしょ？そうだな・・・名前も変えておこうか？」

「姉ちゃんに任せる」

「うーん・・・優雨作だからな、じゃあ君の名前は勇（いさみ）！」

「どういう意味？」

「漢字の通りだよ。音読みでユウと呼んであげよう」

「語呂があんま変わんないね」

「変わらないところもあつていいじゃない」

日が昇る頃には海軍基地に着いていた。優雨作は海軍に入隊するに際し、正式に戸籍を登録する必要があったが、咲が自分の弟だと言い張り通ってしまった。葬式で出会った楠昌？はなんと海軍少将だった。その楠の一言で全てが許可されたからだだった。

「ウィッチの戦力ならば是が非でもほしい」

この言葉により優雨作は『赤松勇』として海軍にウィッチとして登録された。そして、赤松咲もそのついでと言わんばかりにトントン拍子で登録が決まってしまった。その際、あまりにも迅速に処理されてしまったため名前が『えみ』の音だけで漢字に変換されてしまい、『赤松恵美』として登録されてしまった。これには後に登録された漢字を見た咲も大笑いだった。

「ユウ、あなただけは私の名前、覚えていてね」

勇には今も鮮明にその時の様子を思い出せた。そして、真実に迫ろうとするウルスラに向き直る。

「だから、この世に俺の姉である赤松咲を知る人物は俺しかいない、と言うわけだ」

「赤松咲さんの母親や村人が覚えていないことはないのですか？」

「母親の方は扶桑海事変の時に病死したらしくてな、村人は尊属殺人は死刑だと分かっているからな。実際に姉は命を落としているわけだし」

そこまで説明すると、一度二人とも無言になる。おそらくウルスラは勇とネウロイの関係を探索しているのだろうことは分かっていた。あまりにも勇の行動にネウロイがそれに適した行動を取ってきているからだ。勇も日に日に姉の咲がベルリンにいる瞬間移動型ネウロイであると確信している。

「なるほど、私はてつきりあなたがネウロイと内通しているのだと思っていました」  
「・・・あははははあははは!!!俺がネウロイ?ハハハハハ!!!」  
「合理的な考えだと思おうのですが」

ウルスラの予想に勇は思わず笑ってしまった。こんなに笑ったのも久しぶりな気がした。自分がネウロイだったらどれほど楽なのかと考えたからだ。自分の包帯を巻いた左手を太陽にかざしてみる。

「どうしました?」

「いや、俺はまだ人間なんだって思えたのさ」

ウルスラは首を傾げていたが、勇には納得できてしまった。車を走らせる夜道は、無数の星の輝きが勇の未来の道筋を示しているようだった。



ようやく基地に帰還した勇は、すぐに四人の替えの服を持つてくるように指示を出す  
とハイドリヒに帰還の報告を行う。

「ハイドリヒ、今戻ったぞ」

「・・・」

ハイドリヒは外を眺めていた。まるでなにか思案しているかのようで、勇にまったく  
気が付いていなかった。勇がもう一度咳ばらいをしようとようやく気が付いたのか、あ  
あ、と返事をして勇の任務の報告を聞いた。

「ご苦労様です。これでキールは安全です。決戦は近いですよ」

「そうだな」

「勇中佐」

「なんだ」

「……いえ、やはり何でもありません」

勇は報告を終え、部屋を後にする。残ったのは腹心のアイヒマンだった。

「長官が出張に出ている間、501を監視していた報告を致します。ここ数日、宮藤曹長と服部少尉がなにやら外に包みを持って出かけた以外、ほとんど変わったことはありませんでした。彼女らを今後も監視しますか？」

「……いえ、彼女らは放っておいてもいいでしょう。それより、考えていたことがあるのですよ」

ハイドリヒはアイヒマンに自分の考えを打ち明ける。驚くアイヒマンを他所に、ハイドリヒは至って冷静に未来への展望を思索し続けていた。

「よろしいのですか?!」

「ええ、これより全面的に勇中佐の行動制限を解除します。もうここそ隠れるのは終わりです。私たちの戦争を世界に見せつけてやりましょう」

この日より突如として勇の行動制限が大幅に解除され、ついにベルリンの奪還作戦、オペレーション『サウスウインド』が発動されることとなった。基地はにわかに慌ただしくなり、B-17爆撃機が多数501基地に集結し始めた。そんな中、501では作戦に向けたブリーフィングが行われていた。

「これよりベルリン奪還作戦、オペレーション『サウスウインド』が発動される。我々501もこれに参加、B-17爆撃機に搭乗し、上空降下によつてベルリンの巣『ウォルフ』を一気に叩く!」

「突入隊と陽動隊の二部隊に分けます。さらに、赤松中佐には上空監視任務を依頼しま

す」

少佐となったバルクホルンが作戦の概要を説明し、ミーナが全体の詳細と作戦の中身を詰める。あくまで勇は上空監視を目的としているのには、ミーナがハイドリヒの突然の勇の行動制限を解除したことへの警戒があつたからだつた。さらに言ってしまうと、勇のユニットである零戦が、ロケット型ネウロイに使用した際に負荷がかかりすぎ、オーバーホールしたものの、調子が良くなかつたためでもある。

「了解した」

「ではこれより、我々もB-17に搭乗。これより出撃する！」

B-17に乗り込み、宮藤が先輩らしく服部に助言する中、ミーナの隣に格納された勇は疼く左手を見ていた。

「まだ怪我が痛むの？」

「いや、痛いわけではないんだ」

「宮藤さんに手当してもらえばいいのに」

「いや、これは忘れないための印だから」

ミーナも作戦に集中するために、あまり深くは聞いてこない。勇もこの作戦に賭けていた。これだけの戦力を整えられた連合軍の意気込みも確かなものだが、それ以上にこの戦いで敵を殲滅してしまいたかった。例え瞬間移動型ネウロイが出てこようと、全力の力を集中すれば勝機はあると踏んでいた。そして、ついにベルリンの巢に攻撃が仕掛けられていく。

『501部隊、降下あ!!!』

爆弾倉から投下されていく彼女たちを尻目に、勇は高度を保ちつつ全体を俯瞰する。かつての仲間たちが眠るこの地で決戦が行われていく様を、勇は目に焼き付けるように見ていた。勇の主な任務が全体の支援であるため、勇は積極戦闘は行わないことにしていた。これも501にハイドリヒの手が及ばないようにするための勇なりの考えだった。

「おかしい……敵が、あれほどいた敵はどこに行った」

勇は全体を俯瞰し、過去の戦闘の経験があるからこそ、現在の異常性が警笛を鳴らしていた。いくら巢の上空のモヤを爆弾で吹き飛ばしたとはいえ、敵があつた釣鐘型ネウロイだけのはずがなかった。勇の不安は今まさに敵の首魁に向かう彼女たちに向けられていた。

「いけない！行くな！そっちは危険だ！」

勇の声が発せられた時、満を持して敵の罠が発動する。驕りがあつたと言えばなかつたと断言できる。ただ、勇はあまりにも彼女たち501を過保護に意識してしまったことが敗因だと悟った。上空からさきほど吹き飛ばしたはずのモヤが巨大な壁を形成し、降ってくる。それはベルリン市街を取り囲むように並び、まさに袋のネズミの様相を呈していた。そして、攻撃が開始された頃、勇の予想は的中する。

「やつだ！」

瞬間移動型ネウロイが遂に姿を現す。こんな混乱した状態では勝ち目はないと悟った勇は即座に行動に移る。

「ミーナ！すぐに撤退しろ！」

「駄目よ！爆撃機集団の撤退の援護を任されているわ！」

爆撃機は次々と撃墜される光景を見てもなお、勇は彼女たちに迫る危険に気づかない状態に歯噛みする。そんな中、ミーナに司令部から通信が入る。

「宮藤さん、あなたは先に基地に戻りなさい」

「嫌です！皆さんと一緒に戦います！」

「司令部の命令よ！服部さん、宮藤さんを頼んだわよ」

「了解しました！」

宮藤の反対を押しつけ、服部が宮藤を連れて戦線を離れるが、勇の中では嫌な予感がしていた。瞬間移動型ネウロイが狙う先が自分であるならば、今勇が思い描いているシナリオも読まれている気がしたからだ。勇が考えていることは宮藤の存在だった。



「俺も行こう」

「ユウがいてくれるなら安心ね、頼んだわよ」

ミーナの許可をもらい、宮藤と服部の護衛を引き受けた方がいいが、不安は募るばかりだった。敵の猛攻に会う爆撃機は、全戦力の3割が既に脱落しており予断を許さない状況だった。そして、ついに災厄が降りかかる。勇の悪寒がその危機を直前で回避することに成功させる。

「二人とも先に行け！」

「勇さん!?!」

「早く!?!?!」

目の前に突如出現する瞬間移動型ネウロイの攻撃を勇が最大限の堅さで発現させたシールドで防ぐ。その威力を目の当たりにして宮藤と服部は驚愕する。

「どいから?!」

服部が辺りを見渡すと、勇が猛烈な勢いで突っ込み服部の目の前に割り込んでシールドを展開させる。その後、頑強なシールドが歪むほどの攻撃が服部と勇を襲う。敵の存在が見えない中、勇がそれに必死に対応している姿を見て、服部はなにか幻を見ているような気になった。

「ぼおつとするな! 宮藤を守れ!」

「は、はいっ!」

勇の怒号にハツとした服部は、銃をしつかりと持ち直し、宮藤の護衛に専念する。その間も勇は見えない敵と戦ったいた。なぜ勇はあんな強敵と戦うことができるのかわけがわからなかったが、ただ自分の任務をこなすために前を見る。

「赤松中佐、敵は！敵はどこですか?!」

「やつと戦おうとするな！奴の狙いは宮藤と俺だ！」

なぜ勇がそんなことを知っているのか、やつとは一体何なのか、服部の疑問は増すばかりだった。宮藤を見ると、いかにも戦闘に参加したがっていた。服部は何とか宮藤を説得し、帰投するように促す。

「私を信じてください！宮藤さんは早く帰投を！」

「・・・分かった。静香ちゃんも気を付けてね！」

ようやくのことで宮藤が折れ、爆撃機に向かったことを確認すると瞬間移動型ネウロイはいつの間にか宮藤の追撃を止めていた。そして、自分に近づいて来る大型ネウロイに目標を絞る。

「ミーナ中佐、宮藤さんは一人で基地に帰投してもらっています！現在、赤松中佐が正体不明の敵と交戦中！私は大型ネウロイの対処に向かいます！」  
『正体不明の敵ですって!?!分かったわ、あなたも気を付けて!』

服部が大型ネウロイの対処に向かう中、勇は息を切らしながら瞬間移動型ネウロイと対峙していた。宮藤から対象が勇に移っていたが、相変わらずの瞬間移動と恐ろしいほどの威力の攻撃にもはやまともな対抗手段がなかった。

「くそっ！この零戦じゃ追い付かない．．．ここでは大規模な攻撃も使えない。どうした

ものか」

「赤松中佐、こちらも援護に向かいます！」

「ミーナ?! 駄目だこつちには来るな！」

勇の警戒が逸れてしまった瞬間だった。瞬間移動型ネウロイが突如として勇の前から忽然と姿を消した。その瞬間の恐怖と言ったら経験したことのないものだった。絶対的な暴力を前になすすべもなくやられていく未来を想像した勇は無意識に魔法力を練っていた。

「警告する・・・総員、衝撃に備えよ」

「ユウ、何をする気?!」

ミーナの声は既に届いておらず、501の全員が勇の姿に釘付けになった。後光の如く輝く魔法力に、目を奪われると、間もなく強烈な閃光が少し遅れて届く轟音と共に

襲ってきた。

「な、なんだこれは?!」

「すごい爆発だ!」

「何が起きたの!?!」

全員の咄嗟のシールドの展開により、負傷者こそいなかったが辺り一面のネウロイの大半が吹き飛んでしまった。そして、その光景の中で怒声が響き渡る。

「俺はここだぞおおお!!!姉さあああん!!!」

勇の声に反応した一機のネウロイが、突如として勇に襲い掛かる。その光景が501に衝撃を与えるのに時間はかからなかった。

「どういふことなの……!」

「あれつて……ユウの瞬間移動じゃん」

「姉さん、だど?」

一同の混乱は勇の切迫した声により現実には引き戻される。

「なにしてるんだ!早く逃げろ!」

ミーナを含め、突入組の5人の目の前には瞬間移動型ネウロイが立ちはだかつていた。先ほどの勇の猛烈な攻撃をもろともせず、瞬間移動を用いて目の前に屹立するその姿はまさに昔の勇そのものだった。

「攻撃開始っ!？」

「バカ野郎!!」

勇は迎撃を始める501の仲間たちの危機に居ても立っても居られず、全速力で救出に向かう。もはやこれは撤退戦ではなく、一方的な虐殺になってしまいう前になんとしても止めなければならぬと感じていた。それでも501は団結して瞬間移動型ネウロイに立ち向かってしまう。

「フォーメーションアロウ! 一気にカタを付けます!」

「了解っうわっ!」

「中に入り込まれた!」

勇は瞬間移動型ネウロイの行動に身に覚えがあつた。敵中に入り込み、誤射のできな



い状況を作り出すことをしたのは、赤松貞明その人だった。貞明の行動をも学習してしまつたネウロイに、勇は命を賭ける。上空から逆落としになると、混乱している501の編隊に向かつて突き進む。狙いをつけても無駄であることは分かっているが、それでも勇は誤射を恐れず射撃を開始する。

「総員散会しろ！あとは全力で振り返らずに基地に戻れ！」

勇の言葉でようやく全員の意識が我に帰る。ミーナが全員をまとめ、シャーリーが突破口を作る。殿を勇が務める形で退却の時間を稼ぐことに集中する。なおも追いつがろうとするネウロイに、未来予測を重ねて射撃する。周りから見れば何も無い空間に撃ち込んでいるようにしか見えなかったが、それでも勇が射撃した場所にネウロイが現れるため、対処を勇に任せて一目散に退却する。

「どれもこれも俺の真似ばかり。それでは俺には勝てないぞー！」

強がってみたものの、「俺も勝てないがな」という一言をしまい込む。ハルトマンが最後の退却をしているところを見届けると、最後の一撃とばかりに魔法力を練り上げる。なおも瞬間移動で所在を掴ませないネウロイには目もくれず、勇は目を閉じてその時を待つ。その瞬間に左手を這い上がる何かを感じると目を開ける。

「今だっ！」

目を開けるとそこには人型の形をしたネウロイが勇の顔の前に佇んでいた。まるで顔を覗き込んでいるかのような距離に勇は微笑む。

「この距離でかせるものならかわしてみろっ！」

勇は銃を捨てると、軍服の前を開いてみせる。そこには勇の身体に括り付けられた手榴弾がいくつも魔法力を滾らせていた。銃弾ではなく、爆風での加害範囲なら、瞬間移動といえどただでは済まない。勇は自分の身体を囿にして魔法力を溜め、この時を待っていた。しかし、ネウロイも驚きの行動を取り始める。

「・・・ユウ、・・・」

「亡霊め・・・あばよ」

爆風はあたりを吹き飛ばし、爆炎とともに火炎を形成し、あたりを静かにさせた。そして、ベルリンの壁の内部には既に姿を残す者はいなかった。

## 籠の中の翼 第十五話

作戦終了後、基地に勇のユニットが煙を吐きながら到着する。煤けた服装にボロボロになった格好はさながら落ち武者のようでもあった。それを出迎えるのはミーナとバルクホルンだった。

「今帰った」

「・・・お帰りなさい。聞きたいことがたくさんあるわ。あとハイドリヒ長官は緊急の召集で連合司令部に出頭しています。だからこの後、私の部屋に来てちょうだい」

「了解した」

勇はもはや返事をする気力も残っていないかった。寸でのところで自爆に見せかけた攻撃で退避することができたものの、危うく自分まで巻き込んでお陀仏になるところであった。さらに言うと、何度も強烈な攻撃を繰り返したため魔法力もきつかった。そん

な中、バルクホルンが暗い顔で勇を睨みつけていた。壊れかけたユニットで滞空しているため、早めに格納庫に行きたかったが、それを阻害するように立ちはだかっていた。

「トウルーデ、そこをどいてくれないか？」

「……こ、この、大バカ者おおお!!!」

突然殴りかけられ、受け身も取れないまま殴り飛ばされた。バルクホルンの拳は重く、手加減など知らない勢いだつたことに勇は驚く。普通の人間なら死んでいてもおかしくない威力から、勇もバルクホルンを睨む。既に履いていたユニットは最後の一撃で大破し、煙を上げていた。

「お前が、お前がいながら！どうして一緒に戦わなかった！」

「ぐふっー！」

今度は腹に重い一発が入り、思わず胃の中の物を出しそうになってしまふ。それでも攻撃の手を緩めようとしないうるバルクホルンの本気を伺い、勇もようやく事の重大さに気づく。

「お前が全部話していれば、ベルリンを取り戻せたかもしれんと言うのに！」  
「ぐはっ！なんだと?！」

勇のこれまで耐えに耐えてきた何かが発発しそうになり、バルクホルンに対抗すべく手が上がる。バルクホルンはそれでも勇との殴り合いを止めようとしなかった。

「っ！お前もつと強かった！だが、今はどうだっ！」

「俺一人じゃどうにもできないって気づいたんだよ！」

「っぐ！じゃあどうして私たちを頼ろうとしない!？」

「なっ・・・」

その一言に、勇は心の中で必死に守り抜こうとしていた存在への自分の決意が揺らぐ。自分と関わった全ての人物が死んでいったあの悪夢のような日々が、無意識に勇の仲間と言う存在を無視させていたことに気づいてしまった。それでもお互いの怒りは収まらなかった。

「黙れよ・・・」

「お前は一人か？生きるために必死に戦うんじゃないのか!？」

「黙れえええ!!!」

二人の殴り合いが激しさを増す中、ようやくその騒ぎに気付いた隊員たちの手によって引き離される。

「二人ともやめてください！バルクホルンさんも、勇さんもどうしたんですか?!」

「宮藤離せっ！ユウが目を覚ますまで私を止めてくれるな！」

「ユウも止めろよ！」

「うるさい！あのわからず屋の頑固者には我慢ならん！」

「そこまでよ！」

宮藤とハルトマンに引き留められるバルクホルンと、シャーリーとエイラと服部にようやく抑えられている勇という対立構造を前に、ペリーヌが呼んできたミーナが一喝する。サーニャやリーネ、ルツキーニに至っては隅で縮こまっていたほどの殴り合いにようやく終止符が打たれる。

「皆さんはバルクホルン少佐を部屋まで連れて行ってちょうだい。宮藤さん、怪我の手当てよろしくね」

「は、はいミーナ中佐・・・」



「勇中佐には聞きたいことがあります。この件と合わせて話を聞かせてもらおうからついでにきて」

バルクホルンを自室待機とし、勇を司令室に通す。部屋の周囲から兵士をどかせると、二人きりの空間を作り出す。勇はバツの悪そうに殴られた箇所をさする。すると、ミーナの大きな溜息から会話が始まる。

「はあ、あなたの大声は響くんです。ネウロイに聞かれたらどうするの?」

「・・・」

「あなたの気持ちも少しは分かって来たわ」

ミーナの真つすぐな瞳は勇の濁った瞳の中を覗き込む。勇はそれが嫌で視線を外す。

「分かったところでどうしようもない」

「あなたの不貞腐れているところを見ると、昔を思い出すわ」

「止めろ・・・」

ミーナは勇が怒ることを楽しむかのように話を止めようとしなない。フツフツと湧き上がる怒りを抑えながら、勇とミーナの我慢比べが始まる。

「覚えている？あなたが343空の仲間を失って私たちの下に戻ってきた時のこと」

「止めろって・・・」

「あの時も、本質的には私たちを守ろうとしての行動を取って暴走した・・・懐かしいわね」

今も昔も確かにウィッチを守ろうとして行動していたのには変わりない。しかし、そ

の結果が今の自分の現状と、今まさに彼女たちすらを巻き込んだ危険なチキンレースと化している。それを止められない自分自身を慰められているようで、勇はもう聞いていられなかった。

「そんなに俺を慰めたいのか？」

「私にその気はないわ」

「だったらどうして俺に拘る！俺のせいでもみんな死んだ！みんなだ！お前たちを巻き込またくないのに、どうしてお前たちは寄つてたかつて過去の俺と今の俺を同一だと言えるってんだ！」

これは勇の本心だった。世界最高峰の実力者が揃う501という部隊にいる以上、勇のこれ以上の戦果は501を隠れ蓑にできないほどの比較対象となってしまう。あの501ですら勇の足元にも及ばないと分かれば、勇への圧倒的な恐怖は今以上に酷くなってしまう。それなのに、501の彼女らはなんの疑いもなく、勇に踏み込んで関わってきてしまう。ハイドリヒという化け物がいる以上、501の戦力を勇と比較させ

たがっていることは嫌がおうにも勇には分かってしまった。

「あなたは多くの物を背負い過ぎてているわ。私たちならそれを分散できる。あなたは私たちに頼るべきなのよ！」

「はつきり言わないと分からないのか?! だったら言つてやる! お前たちじゃ俺には届かない! だから俺にもう関わるな!」

「それはできないわ」

「ミーナ・・・そろそろ限界だ。いくら間借りさせてもらっているとはいえ、この基地を壊したくない」

震える拳を抑えるのに必死な勇を差し置き、ミーナは余裕のある表情でそれを跳ねのける。

「ネウロイより厄介な真似しないでもらえるかしら？」

「だったら金輪際俺に関わるな！」

「それは無理よ、勇中佐」

勇は頭に血が上り、既に血管がはち切れそうなほど煮え切っていた。しかし、それでもなお腕を組み、勇をしっかりと見据えるミーナは、勇が発する殺気に気づいていないかのようにだった。

「ミーナ、それは俺に喧嘩を売ってるのか？」

「喧嘩にもならないわ」

「そうだろうな、今の俺は手加減できないぞ？」

「あら、手加減してくれるつもりだったの？案外優しさが残ってたのね」

ミーナは殺気に気づいていないのではなかった。あえて気づかないのだ。それが勇には我慢ならなかった。ミーナに殺意を仄めかし、早めにこの場から去りたかった。

「ミーナ、そろそろ本気で止めないか？ つい殺してしまいそうだ・・・」

「ふふつ、ようやく美緒が私に拳銃を向けられても恐れなかった気持ちが出来たわ。ありがとう、勇中佐？」

「次、軽口を叩いたら二度と空を拝めなくなるぞ？」

「そんな上つ面の殺意で私が屈するとても？」

「今すぐお前を黙らせられるならそれで十分だ。今すぐ憲兵を呼んだ方がいいぞ？ 万が一にも助かるかもしれん」

「憲兵はあらかじめ下げてあるの。ここには完全にあなたと私だけよ？」

話し合いの余地はないことが察せられ、勇は最後通告を突きつける。

「覚悟はできてんだな？」

「そつちこそ」

あくまで勇の言うことを聞かないミーナの返答を受け、勇はミーナの目の前に立つ。綺麗な赤い髪と真つすぐに見据えてくる瞳を上から見下ろすと、勇の拳は一直線にミーナの顔面に向かって発射される。部屋が揺れ、風圧が収まる頃、そこに立っていたのは変わらず二人だった。

「私の勝ちのようね？」

「お前本当に死んでたぞ」

勇の拳はミーナの顔のすぐそばを通過し、壁に大きな穴を開けていた。ミーナはようやく冷や汗を垂らすと、苦笑いしながら話し出す。

「内心冷や冷やしてたわ。鉄面皮を装えたことだけは褒めるべきね」

「なんでこんなことをした」

「あなたを試したの」

「試す？」

「試すにしても賭け金の大き過ぎた。自分の命をベットしてまで勇に聞きたかったこととはなんなのか、血の上った頭を深呼吸で冷ましていく。そうすると、ミーナの要求が見えてきた。」

「今日のあるれについてか・・・」

「そうよ。あなたが仲間を失ったことも、ハイドリヒ長官に酷い扱いを受けていたことも想像がついていたわ。でも、ベルリンのあるれはなんなのか・・・あなたの中にしかその答えはない。でも、その答えを聞くにはあなたと私両方の覚悟がなければ聞けなかった。だから、あなたを試したの」



てつきりこれまでの出来事について聞かれるのではないかと考えていた勇は、ミーナと言う情報収集能力に長けた人物の底知れなさに完敗だった。

「さすがは西の狼の面目躍如と言ったところか」

「あのネウロイは何なの?! 教えて!」

「答えは簡単さ……」

勇は諦めた。ミーナに全てを話すことも、これからのことも。ここまで言ってしまうと確実にハイドリヒは放つてはおかない。そしてなにより、話しても何も変わらないという事実諦めることにした。

「すべてがあつたのさ……」

「全て？」

「みんながもういないと信じて疑わないものさ」

「なんだって言うの？ネウロイの秘密兵器の類なの?！」

ミーナは必死に勇に追いつがって聞き出そうと躍起になっていた。しかし、それすらも勇にはどうでもよかつた。

「秘密兵器か、悪くないな。が、兵器じゃ扱えないな。それこそ連合軍を全部投入したつて玉砕が関の山だろうぜ」

「それほど強いのか？」

「物量では抗えない、力の根源そのものだろう。言っておくが、全てが備わっている。誰も勝てやしないのさ」

瞬間移動型ネウロイの正体を知る勇としては、あのネウロイを倒す方法が分からなかった。絶対的な強さと瞬間移動を駆使し、どこまで執拗に襲ってくるあのネウロイは、もはや勇ですら倒すことのできない怪物になっていた。もしあの瞬間移動の能力が最大限発揮され、司令部や軍隊を襲ったら対抗手段がない。

「詳しく聞かせて！それこそがこの決戦の！人類の戦いの鍵なのよ！」

「残念だが司令部はあいつを認めていない。認めてなければ事実ではない。そう、全部俺の妄想なんだよ、ミーナ」

未だに瞬間移動型ネウロイを目視で確認したのは勇と501の隊員だけである。さらに、それほどの桁外れの能力を持つネウロイなど、あの壁ネウロイの前で注目する余裕のある人間はいなかった。また、ハイドリヒが徹底した情報統制を行っているため、未だに瞬間移動型ネウロイを認知することすらできていなかった。

「妄想でも構わない！教えなさい！これは命令よ！」

「命令か・・・軍人たるもの命令は厳守、か。軍人になどなるべきではなかったな・・・」

「報告、つまりこの会話もだれかに確認されていなければ違反ではないわ！」

「随分と横暴な意見じゃないか、ミーナ。まさかそのために憲兵を下げさせたのか？」

「このためなら命だつて賭けるわよ・・・」

ミーナのなりふり構わなさに降参し、勇の知り得る瞬間移動型ネウロイについての情報についてミーナに全て話すことにした。聞いてる途中から顔色が悪くなるミーナを差し置き、話を完結させてしまう。

「まるで夢物語でも見ているようだわ・・・」

「言っただろう、これはつまり虚構なんだ。ただ一つ言えるのは、瞬間移動型ネウロイは俺の本当の姉、『咲』だ。人類が欲してやまない物量と、誰も抗うことのできない力を両立させた化け物だ。だから勝つだなんて、この虚構を虚構じゃないと信じられる狂ったやつしか言えないのさ。つまりは勝てるなんて言えるのは全員詐欺師ってことだ」

机に項垂れ、握りこぶしが震えるミーナの姿を見て、案の定の結果とばかりに勇は肩を落とす。するとミーナが勇の背中 of 裾を引っ張る。顔を上げると、ミーナの顔があった。

「あなたは諦めてしまったの？」

「俺か・・・俺は選べないさ」

その一言に勇の胸にミーナの頭がすっぽりと埋まる。胸の中に納まったミーナに何もできず、目の前の壁をただ見つめる。ミーナは力なく話す。

「あなたがそうでも、みんながいます。501がいます・・・あとはあなたが私たちの手を取って、信じてくれさえすれば・・・」

「俺より弱いくせに、頼れるかよ」

「……あなたより私たちの力の方が強いなら、あなたも心を決めるのね？」

胸のあたりで力強く拳を握っているのが分かる。今、ミーナは勇に追いつこうとしているのだ。その気持ちがあっても、勇の心は動かなくなっていた。

「無理だろうぜ」

「やって見せるわ。でもその時は覚悟なさい。必ずあなたを振り向かせてみせるんだから」

「そう願うよ……でも、人じゃ勝てないんだぜ？」

勇から離れると、ミーナは勇を自室待機とした。バルクホルンの一件もあり、外出の制限をかけられることになったのだが、その方が勇にとって都合だった。自分の胸から下がる、ハイドリヒの提供物を眺めながら瞬間移動型ネウロイのことについて思索す

ることができた。

「姉さん……」

そう呟いた瞬間だった。勇の部屋の扉が音を立てて開く。その逆光の中から現れたのは、勇をして驚く人物だった。一方その頃、こちらも自室待機を命じられたバルクホルンは、ベッドに腰を掛けて考え事をしていた。

「どうしてユウは私たちを頼ろうとしないんだ……ユウだからこそ、仲間の大切さが分かっているはずなのに」

バルクホルンは我慢がならなかった。かつては肩を並べて戦い、世界の最前線で英雄的存在と謳われるまでに上り詰めた最強の存在が、ただ虚しく殻に閉じこもっている事

実に齒痒さがあった。それなのに、仲間を蔑ろにし、隠し事を正当化するような口ぶりを聞けば、拳の一つでも喰らわせてやらなければ気が済まなかった。そして、あの敵から祖国を開放するにはどうすればいいのか、あの勇にも分からないという事実を認めたくなかった。勇に分からなければ、誰にも分からないという点で、勇にはいつだって絶対でいてほしかった。勝てると言ってほしかった。だからこそ、どうしてと、そう呟いた瞬間、こちらも同様に扉が開け放たれた。突然のことに視線を扉に向けると、そこに立っていたのは見知らぬ扶桑人だった。

「バルクホルン少佐はいるかしら」

「わ、私がそうだが・・・貴官はだれだ？」

その人物は後ろ手に一人を引きずって部屋に入ると、その黒く長い艶やかな髪をかき上げるとその答えを出す。



「私は扶桑皇国陸軍、穴吹智子大尉よ」

「は、はあ」

答えが聞けたのはよかったが、それでも自分の知らない人物が名乗ったところで現状を一向に理解できなかつた。しかし、それも構わずズカズカとバルクホルンの目の前に引きずつてきた人物を差し出すと、状況は一変した。その正体とは先ほどまで殴り合っていた勇だった。

「な、なぜユウが・・・」

「ユウについてはあとで説明するわ。それよりバルクホルン少佐、お怪我は大丈夫ですか?」

「あ、ああ適切に処置したから大丈夫だ・・・」

一向に要領の得ない会話に押され気味になる。それでもこの智子という人物が止ま

らなかつた。

「レデイの顔に傷がついたら大変よ。それを分かっているの?!」  
「あいたつ!」

こつんと叱りつけるように勇を叩く態度から、勇とどういった関係なのかという疑問まで湧いて来る。そのことより、目の前で繰り広げられる説教の姿勢に、バルクホルンの方がいたたまれなくなる。

「ま、まあ、その穴吹大尉は勇中佐とはどういったご関係で?」

「ああそうね、申し遅れたけど、赤松勇さんとは結婚を前提にお付き合いしています」

「へっ?!」

「なにっ?!」

その場にいる全員が驚愕する発言をしてもなお気にも留めず、胸を張って堂々として  
いる穴吹に眩暈がする思いだった。

「まあ、そんなことはさておき、今回は他でもなく面と向かって仲直りさせたくて来た  
の」

「なっ！仲直り?!」

「あなたも思うところがあると思うから、お互いに今のうちにすつきりさせておきたい  
のよ」

突如現れた見知らぬ女性に仲直りの仲裁をしてもらうほど恥ずかしいことはない、  
バルクホルンはそっぽを向く。

「わ、私は謝ることなんて・・・」

「ええ、士官たるもの行動よりまずは理論でというのが軍人ですもの。その点、心当たりがなければ謝る必要はないわ」

「ぐっ！」

痛いところを突かれ、軍人という言葉に弱いバルクホルンは何も言えなくなってしまう。

「ユウも男として何か言うことはないの？」

「ひっ！」

「わ、私が先に手を出した……済まなかった……」

諦めて謝罪するバルクホルンを見て、にこりと微笑むと、今度はその恐ろしい視線が勇に向かう。

「あなたは何にもないの？」

「あ、あの、俺も悪かった・・・」

「悪かった？ごめんなさい、でしょう?!」

またもやぼかりと説教が入る智子は誰にも逆らえなかった。

「ご、ごめんなさい」

「よろしい。じゃあもう戻っていいわ」

「え？」

「ほら、さっさと戻る！自室待機中ですよ！」

背中をビシッと叩くと、物凄い勢いで勇は逃げかえるように戻って行ってしまった。

残されたバルクホルンはただその光景を見ていることしかできなかった。しかし、智子は振り返る一息つくくと、今度は打って変わって落ち着いた口調で話し始める。

「話を戻すけど、作戦が失敗したのは聞いたわ。手ひどくやられたようね」

「耳が早いな。それ以前にあの壁ネウロイその取り巻きが多すぎる。さらにやつもとなると、事前情報がなかったことが悔やまれるな」

「知ってさえいれば成功したと?」

確かに作戦の事前情報として知っていればなにかしらの対処も可能だろうが、今回のことはあまりにも想定外が多すぎたため勇のせいだけではないことはバルクホルン自身よくわかっていた。

「だがユウは知っていたはずだ!」

「機密情報だったからでしょ?」

「それでもだ！ 仲間のためならユウはもつと早くに情報を共有していてもいいはずだ！」

今でも湧き上がる怒りが収まらず、こうして吹き出てきてしまう。バルクホルンの様子をみた智子は大きいため息をつく。と勇の現状について大まかに説明し始める。

「仲間だから伝えられなかったのでしょうね」

「どうしてだ！」

「ユウの仲間である343空が全滅した時に、自分の存在の大きさを知ってしまったからでしょうね」

智子の言うように、扶桑では343空の精鋭の搭乗員の部隊が全滅した噂は軍内部で大きな波紋を呼んでいた。それと同時に海軍長官である山本の戦死事件である、扶桑海軍甲事件はより勇の存在を強調させていた。

「ユウには責任がある。長官を守り切れなかったという責任と、自分自身の存在の強大さを隠しきれなかったという責任がね」

「そんな・・・そんなバカなことがあるか！ユウは今や世界屈指の最高戦力なんだぞ?!それを制限?!上層部は本当に世界を救う気はあるのか?!」

悔しくもハイドリヒによる勇の存在の隠ぺいは一定以上の効果を上げていた。それは勇と言う強大な存在を拘束できる環境があると言う、一種の安心材料だった。しかし、それでも世界は安心できなかつた。

「理論は簡単よ。ユウは今や強すぎるの。世界にとってその強さは無限の希望であるのと同時に、戦後の世界には持て余してしまう劇薬なの。ユウの行動一つで戦争が起こるくらいにはね」

「だから飼いで殺すのか・・・世界を救える唯一の存在を！」



バルクホルンは世界の思惑に拳を震わせていた。それと同時に勇の気持ちにも気づき始めていた。

「バカな・・・愚かだ。人間同士の戦争？ネウロイを倒した後で？」

「ユウはもしかしたら個人で国を相手取ることまでできるかもしれない。だから、ユウを拘束する必要があるのだけれど、偶然にもその口実ができた」

「扶桑海軍甲事件か・・・」

扶桑海軍甲事件が引き起こした衝撃はあまりにも大きかった。勇と言う強大な存在がこうして隠匿されている事実には、世界が何の行動も起こさないのは些かおかしいとは思っていたが、こういつた背景があつたことに吐き気すらもよおしていた。

「じゃあ、ユウは今後どうあるべきなんだ・・・」

「まあ、よくて不名誉除隊。最悪戦死してもらいたいのが本音でしょうね」

「な、なんだ?! 世界を救える人物に対して、用済みになればお払い箱だと? 死ねだど?! どう考えてもおかしいじゃないか!」

「そうよ、だから私が結婚するの」

「頭が痛くなってきた・・・」

話しの大きな飛躍に頭痛が痛いという状況だが、それなりに智子の意思が固いことに、バルクホルンは智子と言う人物を尊敬し始めていた。

「私と結婚すれば、少なくともユウに円満な形で私と言う足枷ができる。私もユウのこととは好く想っているし」

「だがユウの気持ちはどうなんだ?」

一番の問題は、自称勇の姉を謳うバルクホルンとしての関心事である、勇の本意が思っているのかどうかだった。それに、ミーナの恋敵ともなってしまうことも悩ましい種だった。

「・・・残念ながらユウは選べないわ」

「と、言うത്？」

「私と結婚しても迷惑がかかると思うはず・・・それに、ユウはまだ心が帰ってこれてないもの・・・」

悲しい表情の裏に必死に押しとどめている感情をバルクホルンは勇に重ねてしまう。自分の言動は、勇をどんな気持ちにさせてしまったのか。自分の気持ちの押し売りこそが、勇の鎖を重くしてしまっていることに気づいてしまった。

「だから、あまり彼を責めないであげて。それに、壁の中の敵・・・瞬間移動型ネウロイ。

ユウも一人では勝てないし、協力もできない。その制限下で彼は生きることが諦めようとしている。でも、その選択肢だけは選ばせたくない！いいえ、選ばせちゃいけないの！」

智子は自分の知り得る情報を、危険な情報を収集してこうしてやってきた。その行動力は紛れもなく真実で、それでいて自分には何もできない証明だった。だからこそバルクホルンは自分の手を見つめる。

「それは、それだけは人としてあまりにも惨い選択だ・・・」

「ユウは、必要がそうさせるように求められている。世界の解放と己の滅亡を・・・」  
「人とは一体何なのだろうか」

天井を見上げることしかできない自分と、未来を見据えた勇との天と地の開きに絶望している暇はなかった。智子が新たな情報を話したからだった。

「そして最近になって新たな作戦が密かに打ち出されたわ」

「ユウが絡んでいるのか？」

「ええ・・・新型爆弾をネウロイの首魁にぶつけるために、ユウを誘導装置として爆弾を起爆させる作戦よ」

バルクホルンは一気に目が覚めた気分だった。寝耳に水とはよくいったもので、勇のあまりの不遇に智子の話に飛びつく。

「なっ！それではユウは?!」

「爆弾とネウロイとともに爆ぜてなくなるわ。威力が従来の爆弾の比較にならないから、ユウのようにネウロイを惹きつけられるのが絶対条件というわけよ」

「狂っている！英雄を生贄に、我々がのうのうと生を謳歌できるとも?!それは今まで死んでいった者たち、延いてはユウへの侮辱だ！これほど胸糞悪い話は聞いたことがな

い！人の命を部品に使うだと！」

バルクホルンは目の前が真っ暗になった。勇を殴ってしまった自分は何を知っていたのか。偉そうに自分の正義を振りかざし、あまつさえ強要した。しかし、勇には世界の表舞台から消えるしか生きる道がなくなってしまうている。それを知らずとは言え、推し量れなかった自分が情けなかった。あの勇があそこまで塞ぎ込んでしまうのも無理のないことだった。勇は自分の命を天秤に、世界か他人かを選ばなくてはならないのだ。そしてその他人とは誰か。そう、501や戦友、仲間である私たちだ。気づけばこゝも困難な選択肢はないだろう。とりあえず救わなければならぬ、が死ぬ。これを求められている人間はこの世界でただ一人、勇だけなのだ。

「私はなんということをしてしまったんだ・・・」

勇は今まさに迷っている。誰一人として同じ境遇に立てない孤独をただ粛々と甘受

している。緩やかな自殺もいいとこだ。だが、自殺なんでもつてのほかである。それは死んでいった仲間を裏切る行為だからだ。自分が死ぬことを強要されている最中に、律義に他人を思いやる精神とはいかに。

「仕方なかったわ。あなただからこそ殴れたのよ。そのおかげで救われるのがユウなんだから」

「救う？ 私がか？」

いまいち分からないことを言う智子を見上げる。その顔はまるで憧れの男性に想いを寄せる少女の顔だった。バルクホルンは勇のことを想うこの人物の言っていることが理解はできないかもしれないが、信頼に足るものだとは本質的に理解しようとした。

「それでは私もきちんと謝らないとな」

「そうね、二人ともお互いのことが理解出来たら仲直りしてちょうだい」  
「そうだな……」

バルクホルンはベッドから腰を上げて立ち上がる。差し出された手を取り、智子と視線を合わせる。

「501には素敵な仲間がいるわ。きつとユウを救えるはずよ。全て織り込んで今回のこともユウを救うことになるわ」

「ああ、あとは時間だな。時間がない」

「一撃離脱といきましょう」

握手を交わすとお互いに進むべき道を見定める。バルクホルンだけでなくミーナも気づいただろう。知ってしまったからには仲間としてだけではなく、人として勇を救わなければいけない。世界を救う勇を、人として残すために第501統合戦闘航空団は選



ばれたのだ。ならば救おうと、歴戦のウィッチたちは魔法という名の翼を大きくはためかせる。

## 籠の中の翼 第十五、五話

部屋に這う這うの体で戻った勇は考えていた。目まぐるしく連れ回され、拳句の果てに説教をくらい戻された。自分を初めて好きだと言ってくれた人物にされる仕打ちとは思えなかつただけに面食らってしまった。しばらくすると、部屋の扉を叩く音がする。そこには先ほどとは打って変わってにこやかな智子がいた。

「ユウ、久しぶりね。何にも増して会いたかつたわ」

「ああ・・・」

先ほどとは対照的な態度に困惑しつつ、その甘えた声音で、後ろ手に組まれた姿を赤らめた頬で近づいて来る。こちらを上目遣いで見やるその姿は、勇をして心に訴えかけるものがあつた。

「随分無茶したわね」

「えっと、どの時だい？」

思い当たる節がありすぎて、苦笑いを繰り出すしかなかった。それでもそれすら楽しんでいような智子の純粹な好意が勇には眩しかった。

「全部よ。少しはあなたを想う私の気持ちも考えてほしいものね」

「・・・悪いとは、思ってるよ」

「まあ、ユウのことだから無茶をするのは分かっていたけど、命までは賭けてほしくなかったわね」

「俺も予想は出来なかったよ」

素直な気持ちを曝け出し、束の間の本音が勇の心を和らげる。

「本当に？自爆まがいの殿とか端から見れば自殺行為もいいところよ？」

「あれは俺でなくともそうするさ」

「そんな状況に人は飛び込まないわよ」

頬をぐりぐりとされるがそれすらも心地よかった。そして、こんな一時を過ごす背景を思い出し、勇が智子に質問する。

「そういえばさっきの話、あれはどういうことだい？」

「あれは事の成り行きよ。でも、あなたにとっても、私にとってもいい話だと思ってるわ」

「そんな無茶な」

勇は智子の取る性急な行動に危機感を覚えていた。どこから勇の情報を探ってきたかは分からないが、今は自分に関わるべきではないのだ。それを分かった上で勇と接触する理由が、いまいち納得できなかつた。

「いいこと？ あなたは一人かもしれないけど、あなたが思っている以上に、この世界はあなたを見捨ててはいないわ。それに、あなたは約束したじゃない」

「え……」

約束という単語に気を取られている間に、勇もあるものを盗られる。暗かつた景色が、昔見た光景に置き換わる。その光景は香りと共に勇の感覚を支配する。勇の唇を智子が奪っていたのだ。

「んっ……」

温もりなどを感じたのは、ベルリンのロケット型ネウロイを迎撃するときにもらったコーヒーの温かさだったと不意に思い出されるほどには久しぶりの感覚だった。しかし、決定的に違うとすれば、それは脳まで痺れるような快感だった。白い肌に紅をさしたように染まる頬は、勇の顔の前からゆっくりと離れていく。

「智子・・・」

「もつと早くにこうしたかった・・・ねえ、もう一回」

智子がとろけた瞳で訴えかけてくる。その言葉の誘惑にはなにか催眠の類があるのではないかと疑うほどだった。勇は無意識に差し出された手が、その白い肌を沿わせる。触れると壊れてしまうかのような柔らかな滑らかな肌に、吸い込まれるように身体が反応してしまう。

「んむ……はっ……」

重ねられる唇の柔らかさと熱さに、勇の何かが込み上げる。智子もそれが分かつているのか、自然と勇の頭を胸に抱え込む。心臓の音が耳元を撫で、仄かな香りが鼻腔をくすぐる。さらに、智子の口撃が重なる。

「男の胸は張るもの、女の胸は貸すものって言うじゃない。今日、今だけ、あなただけに貸してあげる」

心地よい心音に、優しい声音が重なり勇は智子の瞳を自分の瞳と重ねる。何も言わなくとももう互いの心は通じ合っていた。互いの体温を分け合い、重なる身体は強く、そして甘く勇の心を溶かしていった。

「ユウ、忘れないで、いてね．．．あなたが私の中にいるって、ことを．．．」

その言葉と共に勇の意識は薄れていく。心身共に疲労しきっていたためいつの間にか眠ってしまった。久しぶりの安寧に、勇の意識は深く落ちて行つた。そして、その温かさを受けとめた智子は、服を着直すと、寝入ってしまった勇のごわついた髪を撫でる。

「寝顔、可愛い子どもみたい．．．必ず、帰ってきてね」

智子は痩せこけた勇の頬に優しく口づけをすると、立ち上がり部屋を後にした。残された勇の部屋には、温もりと勇の覚悟だけが漂っていた。そして、机には金平糖が添えられていたのだった。



## 籠の中の翼 第十六話

翌日、基地は明らかに殺気立った様相を呈していた。それはベルリン奪還作戦であるサウスウインド作戦が失敗に終わり、新たな作戦へ向けた準備が急ピッチで進行していたからだ。その一環として、ハイドリヒの帰還による大幅な作戦変更が行われていた。たくさんの戦車や歩兵が集結し、異様な目の輝きをする兵士はまるで祭りに参加するような輝きだった。

「ハイドリヒ長官殿！歩兵連隊、機械化歩兵大隊、降下猟兵大隊、戦車大隊、ハイドリヒ武装親衛隊、全一個師団一万名、長官のご命令により集結しました！」  
「アイヒマン中佐、報告。苦労様です。よくぞ集まってくれました」

ハイドリヒの子飼いの一個師団の兵員がいるとは聞いていたが、本当にハイドリヒの一言でここまで迅速に各地から集結したことに驚くばかりだった。よく見るとアフリ

力の砂漠用戦闘服だったり、寒冷地仕様の戦闘武器、各国で入手できる品を装備していることから、本当にあちこちに散らばる部隊を集結することが何え、ハイドリヒの移動虐殺部隊、通称「アインザッツ・グルツペン」の全貌が明らかとなっていた。

「我々は連合軍西方司令部の要請により、ベルリンの奪還作戦に参加する運びとなりました。この戦いは聖戦です。我々の目的とは何か、今一度確認したいと思えます」

ハイドリヒの声が鳴りやむと、それを見計らったように兵隊たちは皆口を揃えて答える。

「世界の秩序の守護！」

「その通りです！では問います。その手段とは？」

息の合った隊員の目の輝きの不気味さはここにあったのかと、勇は苦笑する。明らかに異常な戦意はハイドリヒと志を同じくする狂った奴らだからだった。

「忠誠！意思！断固たる力の行使！」

「まったくもってその通り！我々のすることは変わりません！我々の行動は世界が認めたい！ならば、我々はどこにでも赴き、誰であろうと平等にその拳を振り下ろすまで！それが地獄であろうと、神であろうとです！抵抗する者は引きずりおろし、腸を裂き、首を狩りなさい！目を見開かせてこの世界の真実を見せるのです！」

ハイドリヒの激励に鼓舞させられる兵士たちの目は爛々と輝き、雄たけびを上げる。ハイドリヒは今までの丁寧な口調に怒りを乗せて語る。それは世界に向けられた言葉の様だった。

「この腐った世界を救えるのは我々だけです！新世界の番人となり、神の代行者として

君臨する日は間もなくです！諸君と私は一個師団に過ぎませんが、そのような些末はものの問題にはなりません。我々は神の代行者、諸君一人一人が神兵となりてこの地を統べるのです！」

兵士一人一人がハイドリヒの言葉に真剣に耳を傾け、次の言葉を今か今かと待つている。その光景に勇は恐怖を覚えていた。その中で、ハイドリヒが各指揮官に尋ねる。

「各指揮官、準備はよろしいですか？」

「歩兵連隊、アインツ・シユベルマン中佐、総員準備は出来ております！」

「機械化歩兵大隊、ケーニツヒ・フォルコ少佐、軍靴の音を轟かせに参陣致しました！」

「降下猟兵大隊、コーエン・ケツセルリンク少佐、どこへでもついて行きます！」

「戦車大隊、ギャリン・オットマイヤー中佐、突撃指示をどうか！」

「ハイドリヒ武装親衛隊、アドルノ・アイヒマン中佐、ハイドリヒ長官に忠誠を」

「「忠誠を!!!」」

全員の顔色が喜色満面となった頃、満を持してハイドリヒが指示を出す。

「諸君の忠誠に敬意を表します・・・破壊と殺戮と再編の勝利、我々の最終作戦・・・『閃光作戦』を発動します！」

ハイドリヒの指示のもと速やかに準備が進められる。こうして今まで世界の闇に隠れていた部隊が歴史と言う名の歯車に噛みついてきたのだった。意気軒高な将兵は軍靴の音を高鳴らせ、闘志に火を付ける。戦車には最新型のパンター戦車や、ティーガー戦車が用意され、弾薬や兵装に関わる物は万端だった。これだけで一つの軍隊並みの戦力があるだろうと勇は震えるのだった。そして、その頂点の戦力に立つのが自分であることは皮肉としか言いようがなかった。

「あなたも加わってくればもつと賑やかになったでしょうに。よろしかったんですか

？」

「茶番に俺を巻き込むな」

にこりと話しかけてくるハイドリヒの手をどかすと振り返る。そこには明らかに憤怒の炎を宿したハイドリヒがいた。先ほどまでの声高らかな雰囲気はどこへ行ったのか、殺気立ったハイドリヒは勇にプレゼント寄こす。

「連合軍には呆れました。もう小さく収まる時間は終わりました。あなたにも大役を果たしてもらいます。あれをあなたに授けましょう」

勇が目線を向けると、そこには何も塗装のしてない試作機が置かれていた。重厚で、それでいて逞しささえ感じるそのユニットはいつの日にか扶桑で見た物だった。陸海軍共同で開発されたが、未作で終わると思われたユニットは勇を待っていたかのように佇んでいた。

「気に入っていただけましたか？ 牟田口中将の責任とやらで分捕ったものです。少し我々技術者が手を加えましたので、性能は保証します。あなたのためだけの特注品ですよ？ ぜひ名前を付けてあげてください」

「層め・・・名前か、そうだな」

勇は少し考えてみた。自分がこの世で与えられる最後のものかもしれないと思うと、不思議と趣があつた。

「・・・ヤタガラス、『八咫鳥』だ」

「ほう、どういったものか教えていただけますか？」

「八咫鳥は、かつて扶桑の神の行先を案内したとされる伝説の神獣だ。三本足の鳥で、それぞれのは天・大地・人を表す。それが意味するところは、神も自然も人も太陽から生まれた兄弟だということだ」

「なるほど、面白い考えです．．．あなたにお似合いですね」

ハイドリヒは少し機嫌を良くしたのか、今後の作戦を話し出す。

「勇中佐、あなたには西方方面軍から以下の下達がありました。パットン將軍から、今度のベルリン奪還作戦にあなたの作戦参加要請です。言われずともそうするつもりですが、最後の1機の白鯨に桜花と共に搭乗し、あなたは私のタイミングで突入してもらいます」

ハイドリヒにしては曖昧な作戦指示に、勇は思わず疑問を投げかける。

「それだけじゃベルリンの敵は倒せないぞ」



「そうですね、あなたに渡したペンダントは持っていますか？」

そう言われると、勇は胸元からペンダントを取り出す。それはハイドリヒから受け取った時よりも青白く輝いており、叡智の炎が成長していることが察せられた。

「それがあなたの切り札です。桜花で敵の障害を突破後、先ほどの『八咫鳥』で戦闘をしてもらいます。もちろん、そのために桜花を少々改造し、八咫鳥が載せられるだけのスペースを確保しています」

「切り札？どんな効果があるんだ？」

「・・・以前もお話したかと思いますが、それはあなたの魔法力で制御されています。だから、いざと言う時にきつと敵を屠ってくれることでしょう」

半信半疑ではるが、ハイドリヒのお墨付きと言うのは妙な納得があるのが難点だった。しかし、日常的にこのペンダントを身に着けていたが、確かに魔法力が吸われてい

る感覚があり、叡智の炎は勇の魔法力を餌に成長していた。その能力があれば確かに威力がある何かができるのだろうと推察してみたりした。しかし、ここ最近のハイドリヒは、あまり勇に固執しなくなり、言葉数も少なかった。だから、最後の会話とばかりに言葉を交わす。

「お前、最近変わったな」

「・・・そう思われるなら私もまだ成長しているということでしょうね。あなたのおかげです」

「俺のせいにするな」

「ハハハ、あなたのおかげで私は私の目標を達成することができますのです。私は、カールスラントが陥落した時、その光景をこの目に焼き付けました」

ハイドリヒは遠くを見るように話し出す。それはいつの日か勇も見た光景だっただけに、その光景を共有するに至った。

「守るべき国民が、守るべき国が、蹂躪され、焼かれ、追い出された。私は、私の力の無力さをあの時に思い知らされたのです。国の長が早く逃げ出し、人々は自分の行いを顧みようとせず、ただ生きようと思いました。そんな光景は私に使命を齎したのです。なんとしてもこの世界を作り直さなはいけない。誰も気づかないふりをして目の前の事象から逃れようとする怠慢から目を逸らすべきではなかったのです。だから、私はこの世界をもう一度あるべき姿に再構築します。私は私を私のために明日へ導きます」

戦火に晒された円卓を囲むように対面する勇とハイドリヒは、二人だけの世界で物事を見ていた。勇は少しづつハイドリヒの言っている景色が見えていた。

「だからお前はお前なんだな」

「当初の予定とは違いますが、私のやるべきことは変わりません。でも、あなたも本質は変わっていませんよね？」

勇は立ち上がると、ハイドリヒの言葉に返す。

「ああ、俺は俺の明日になるだけだ」

「ふふふ……明日が楽しみです」

二人もまた決別すると、勇は格納庫に向かう。そこには桜花が今か今かと勇を待ち構えていた。そして、その隣には『八咫鳥』が静かに佇んでいた。手で触れると、八咫鳥は金属ではあり得ないような柔らかさで温かさが詰まっていた。勇はその感覚を心にしまうと、後ろを振り返る。そこには勇の予想した通り、ミーナが立っていた。

「新しいユニットの試験飛行をしてみない？」

「・・・ああ、ちようど空が恋しくなっていたとこだ」

勇がミーナの背後に目を向けると、かつての仲間である501が全員が揃っていた。勇はその後ろから差す眩い光に目をすぼめながら宣言する。

「俺に勝てると思うなよ」

ここに、501対勇の最後の闘争が行われようとしていた。勇が履く『八咫鳥』は力強い咆哮を上げ、勇の身体を持ち上げる。満ち足りる力と、それを阻止しようとする501の対立構造は今や決定的だった。それでも勇を信じ、勇のために動こうとする彼女たちの翼は大きく羽ばたいた。

「それでは、始めるわ・・・勝つのは私たちよ」

「勝ったのは俺だ」

模擬戦の開始の合図を打ち上げると、勇は即座に戦闘行動に入る。いくら勇と云えど、一人対一人を、世界最精鋭のウィッチを相手取るにはなかなか骨の折れることだった。だからこそ、勇は少しも手を抜くつもりはなかったし、お互い様だった。開始の合図と同時にグングンと高度を上げると、まず最初に見えたのはバルクホルンとハルトマンだった。

「シュトゥルム！」

「おりゃあああ！」

最初からトップエースを持つてくるあたり流石だと言えるが、ハルトマンの切り札であるシュトゥルムも惜しげもなく使うことから、彼女たちも本気であることを伺わせ

た。

「対策済みだ！」

シウトウルの疾風を逆に利用して、風に乗る。しかし、彼女たちの作戦はここが肝心だった。バルクホルンとハルトマンにより頭を押さえた形を維持するために、側面からシャーリーとルッキニー、とどめと言わんばかりにリーネを布陣する徹底ぶりだった。それでも、その攻撃網を掻い潜って攻撃を仕掛けていく。

「なんてやつだ！」

「トウルーデ来るよ！」

慌てるハルトマンを他所に、バルクホルンは冷静に状況を判断して退避する。普段の

バルクホルンの性格からすれば考えられないことだが、バルクホルンは徹底して勇の頭を押さえようとした。八咫鳥はシャリーリーのP-51に負けず劣らずの速度で、グングンと距離を縮める中、勇のセンサーが何らかの反応を示す。悪寒がして急制動をかける、そのまま飛行していれば確実に直撃していたコースに攻撃が加えられる。

「フリーガーハマー！サーニヤのやつ!？」

サーニヤのフリーガーハマーは広範囲を攻撃することに特化し、その攻撃範囲は勇と云えど脅威だった。また、これは勝負でもあるためシールドを張ればそれで終わりである。だから、勇も行動は慎重にならざるをえなかった。しかし、そこに更なる追い打ちが掛けられる。

「ユウウウ!!」

「エイラか!？」



サーニヤを守るようにエイラの未来予知を駆使した攻撃が雨あられと降り注ぐ。しかし、勇はその未来予知をも先読みして機先を制す。

「やりにくいんだな！」

「お互い様だ！」

振り返ると、他の隊員も集結しつつあり、分が悪いと判断した勇は一度雲の中に隠れる。エイラの攻撃はまだ続いているが、勇の嫌な予感はまだ継続して悪い知らせを発し続けていた。勇が適当に不規則挙動を取ってみると、そこかしこから射撃が来ていることが分かった。攻撃の方向から推察して、敵の位置を探し当てる。

「いーいーだな！ミーンナ！」

雲の上に出てみると、確かにそこにはミーナがいた。ミーナは一人でその場に佇むと、ゆつくりと銃を構える。勇もそうはさせずとすぐさま銃をミーナに向ける。雲が目の前を掠る間を待つて、二人は同時に射撃を開始する。

「取った!・・・なにつ!」

勇は雲が横切る瞬間に体勢を上下逆さまにしており、すぐさま逃げられる体勢を取っていた。そのため、ミーナの攻撃は回避できたが、ミーナにも攻撃は当たっていない。それは、大きなシールドによって阻まれていたからだ。シールドを張ってはいけないと言つても、それは本人に直撃しそうだと判断した時に、やむなく本人が防御として展開するものだ。しかし、そのシールドはおかしなところからミーナを守っていた。

「宮藤の野郎！」

勇の推測は当たっていた。ミーナの直下、雲の中に宮藤が待機しており、ミーナを護衛していた。隊長である自分を囮にするその大胆さに感心しつつ、その場で勇は動けなくなっていた。なぜなら、ミーナとの戦闘に気を盗られたあまり、勇の周りを501が完全に包囲していたからだだった。

「諦めなさい！あなたの負けです！」

降伏勧告をしてくるミーナだったが、勇は欠片も諦める気はなかった。勇は不敵な笑みを浮かべると、中指を立てて煽る。

「バーカ、言ったはずだ。『勝った』のは俺だつてな」

包囲網は緻密で、完全に穴の無い布陣が逆に仇となる。勇はエンジンを突如停止させると、今度は逆に圧縮して鍛えた魔法力を流し込む。この急激かつ濃密なエネルギーを受けて、八咫鳥は百獣の王のように吠える。挿り鉢を舐めるように飛行すると、互いに誤射を恐れる環境を作り出し、混乱を引き起こす。その上で、若輩の服部、近接攻撃の苦手なサーニャかりーネを探し出す。

「まずはリーネ、お前からだ！」

リーネが呆気にとられている間に距離を詰めると、なんとその隙間を縫って服部が割り込んできた。

「せいやああああ！」

リーネを庇う気なのか、新人と油断していただけに勇の手元が狂う。その隙を逃さずペリーヌが攻撃を放つ。

「トネール!!!」

雷撃がかつてないほどの規模で勇に襲い掛かる。勇はその輝きを目に焼き付けると彼女らの成長を祝福し、そして払った。

「うわああああ!!!」

「な、なんだこれ！」

「まさか・・・あれを斬るだなんて?!」

ミーナが見た勇の姿は、刀を片手に雷を斬る光景だった。坂本がその光景を見たのなら、名刀雷切とでも称したのだろうが、まさに雷を切り裂いた勇の姿は輝きを放って君臨していた。だれもが勇を倒すことは不可能だと感じた瞬間、突如としてミーナと勇に同時に通信が入る。

『大型ネウロイがこの基地に向かって進行して来ています。至急迎撃をお願いします』

ミーナは全員を見渡すと、全員も事の次第を承知したのか頷き返す。ミーナは勇を見ると模擬戦を一旦与ることとする。

「勇中佐、一旦模擬戦は中止します」

「もう少しだったのにな」

「敵を倒したら今度こそ相手をします」

勇は相変わらず負けず嫌いなミーナの言葉を流すと、振り返らず基地に戻ることにする。戻るとハイドリヒの姿はなく、本当に勇との仕事を終えたのだと伺えた。勇は501の仕事ぶりを見ることにした。すると中から坂本とパットンが出てくる。久しぶりの再会に驚く二人を他所に、勇は敬礼を繰り返すだけだった。

「ユウ！久しぶりだな！だいぶ痩せたか？」

「よう赤松中佐！中佐のおかげで俺はベルリンに来れたぜ！」

坂本はいつの間にかズボンを着用しており、本当にウィッチではなくなったのだと察せられた。そして、パットンの言う勇のおかげとは、アフリカに赴いた際に、砂漠の三

將軍が最後に賭けた、勇の撃墜数予想だった。

「俺は赤松中佐が撃墜数1000機を超えるに賭けていたぜ！」

勇の撃墜数は既に1000機を越えていた。魔法力の操作に長けた勇の攻撃は一撃で多くのネウロイを倒してしまう為、一気に撃墜数が稼げていた。

「それは良かったです。しかし、今の私に撃墜数を求められてもなんの意味もありません」

冷たく言い放つ勇に驚いたのか、パットンは押し黙る。しかし、戦況が芳しくないのかすぐさま基地内が大騒ぎになる。



「現在敵、大型ネウロイが我が基地に向けて進行中！間もなく目視で確認できます！」  
「なんだとっ!?!」

外を見てみると、確かに大型ネウロイが501と戦闘状態にあった。そして、その経過はあまり芳しくなかった。あまりの巨体に501といえど敵を殲滅できずにいた。また、小型の自爆型ネウロイと通信妨害の影響により、基地は大慌て逃走の準備に駆られていた。その中で、一人空を見上げて佇む勇に坂本が声をかける。

「ユウ！お前ならあいつを止められるか!?!」  
「・・・それはあいつらの仕事さ」

勇のあまりの無気力さに坂本は胸倉を掴む。

「ユウ！今はそんなこと言っている場合じゃない！お前の力が必要なんだ！」  
「坂本、俺はもう彼女らの仲間ではいられないんだ。手を貸したら、それこそ本当に俺はあいつらを上回ってしまう。それでもいいのか？」

坂本は勇の立場をそれなりには理解していたが、それは理解が足りていないことと同じ意だった。かつての仲間である勇の力を借りることがどういった意味を持つのか、坂本の思考は逡巡した後、ついに答えを出す。足りない理解を、確固たる意志で埋め合わせたのだ。

「……今、やられるわけにはいかないんだ。私もこの作戦を成功させるために動いている一部の歯車に過ぎない。だがユウ、お前の力は歯車を動かす力そのものだ。だから……頼む！」

坂本は頭を下げて頼み込む。勇は坂本の即決できる判断力に敬意を表し、応える。滑走路に向かって歩き出し、銃を構える。魔法力を注ぎ込み、一撃で決めるために意識を整える。目を閉じ、今戦い、苦戦を強いられている501の仲間の顔を想像する。必死に抗う姿は、勇ましく、そして儚かった。

「南無八幡大菩薩、我が国の神明、尾張の権現、春日大社、天照大御神……願わくばあの敵を撃ち滅ぼさせたまえ。これを射損じるものならば、刀折り自害して、人に面を向かうべからず。今一度世界におぼしめさば、この弾外させたまうな」

扶桑の古くから伝わる古典を諳んじ、自分への祝詞を唱えたと目を開き敵を捉える。後光が差す銃から発射される弾丸は、501が必死に抑えている大型ネウロイを貫く。ほとんどの攻撃を受け付けなかった強固な装甲が、いとも簡単に引き裂かれ、内部から爆発させるほどの威力に、全ての人間が勇を見ていた。勇は銃を下ろすと501に向かつて独り言ちる。

「さようなら」

その日、無事に大型ネウロイの迎撃に成功した連合軍は、ベルリン奪還作戦である『フレイヤー作戦』を実行に移す。キール軍港から輸送し、組み立てた陸上巡洋戦車『ラーテ』を主戦力としたパットン超戦車軍団は、501を護衛として出撃を決定した。そして、勇はキール軍港でミーナに別れを告げる。

「宮藤のやつ、魔法力を使い果たしたらしいな」

「ええ、服部さんも負傷したけど一応全員作戦に参加するわ。宮藤さんはここで待機するとのことだけど」

「宮藤らしいな」

「……ユウ、確認なのだけどあなたも私たちと来ない？」

ミーナは輸送機の前で勇に最後の勧告をする。風が髪をなびかせ、対する勇は微動だにしない立ち振る舞いにミーナは前言を撤回する。

「昨日、ハイドリヒの長官と直接話したわ」

「そのようだな」

「知ってはいたけど、こう面と向かって言われると正直脚が竦んだわ。戦争とはここまですで人間を変えてしまうものなのだとね」

勇はハイドリヒがミーナに言ったことを全て理解していた。ミーナに本当のことを打ち明けたのだろうが、ハイドリヒはもう包み隠さず言ってしまうほど、ミーナにはどうしようもない決定事項であることがミーナにも分かったよだった。

「軍人になどなるべきではなかった、か？」

「守るべきものがある限り、守る力のある者が戦う……そうじゃなかった？」

「それは昔の俺の言葉だ。今の俺じゃない」

「あなたにぴったりの言葉だと思うけど？ あなた以上に似合う人なんてこの世にいるはずがないわ」

ミーナの言葉は昔の勇と今の勇の姿が重なったものだった。しかし、勇はその言葉は否定しなければならぬ。なぜならば、自分には与えられた使命があり、それを果たす力を授けられたからだだった。

「オンリーワンでナンバーワンか。最高だな」

「孤独で独り善がりよ。少なくとも私にはそう」

「なに、厭うことはない。自分にしかできないことならば、率先してやるべきだろう？」

勇の変わり様に驚いてしまう。選択肢を狭められたはずの人間の取る選択にしては、あまりにも清々しい回答だっただけにミーナはおどけてみせる。

「そうだけど・・・あなた変わったわね。自室待機で心を入れ替えたのかしら？」

「そう、だな・・・本質は変わらないがな」

妙な落ち着きに、ミーナの心の不安は増すばかりだった。

「それであなたは どうするの？」

「結局昔と変わらない・・・世界が俺を必要とし、世界が俺を消そうとするならばどちらも叶えよう」

「あなた、本当に死ぬつもりなの？」

ミーナの目にはこれから死ぬ定めの人間には思えないほど闘志を宿した人間に、ここまで期待してしまう心に嫉妬していた。

「必死に死ぬのと、必死に生きること・・・それは俺が決めることではない」

「願わずにはいられないわ・・・あなたの選択に幸あれ、と」

「神などに祈るな。幸福かどうかは俺が決める。神になど介在させない絶対の意思が俺を作り出したのだから」

「あなた、神にでもなるつもりなの？」

ミーナの嫉妬はやがて恐怖に変わる。愛憎入り混じる自分の心境が、鼓動を強く打ち付けるようだった。その感情を読み取ったのか、勇は静かに闘志を顔に曝け出す。

「神などではない・・・赤松勇という生き物、勇と言う存在、名詞になるのさ。後世にまで轟く怪物の誕生だ」



こうして狂気とも言える決意をした勇の目には、遠くを見据えた未来を現実のものとして掴み取る確固たる正気が鎮座していた。神と人間の狭間に躍り出るべく動き出した怪物の名は赤松勇。今ここに、世界の全てに挑む一羽の翼が舞い降りた。

## 籠の中の翼 第十七話 前編

パットン率いる超戦車軍団と501や各地の航空戦闘団が出撃した中、勇だけはまだ出撃していなかった。滑走路には一機の白鯨が桜花を搭載し、勇の出撃を今か今かと待ちわびていた。そして、作戦を何よりも楽しみにしていたはずのハイドリヒは一向に姿を見せていなかった。そんな中、ハイドリヒの腹心であるアイヒマンが勇に近寄る。

「勇中佐、これより出撃だ。ハイドリヒ長官から閃光作戦の第一段階、『暁の夜明け』作戦の発動を受領した」

「ハイドリヒが見えないが？」

「ハイドリヒ長官は作戦指揮に忙しい。私は長官から前線指揮の全権を任命されている。従ってもらおう」

勇はアイヒマンの言葉に従い、白鯨に乗り込むことにする。この『閃光作戦』はいく

つかの段階から構成されているらしく、勇によるベルマン突撃が作戦の第一陣となっていた。他の隊員の姿は見えず、少数での行動に疑問が浮かぶが、勇は自分の使命にのみに頭を集中させる。白鯨に乗り込むと、作戦への意気込みが見え隠れしてしまい、武者震いが出ていた。

「貴官ともあろうものが、武者震いか？」

「心配するな。震えていても敵は倒せる」

勇は高空を運ばれている感覚に得も言われぬ感覚を感じていた。それは焦燥感か、はたまた快感か自分でも分からなかった。ただ一つだけ確かなことは、これから全ての決着がつくと言うことだけだった。そして、遂に機長から目標上空への接近が知らされる。

「目標まであと5分！」

「勇中佐、貴官の検討を祈る」

アイヒマンはそう言うと、部下を引き連れてドアを開く。激しい風が入り込む中、次々と降り立つ彼らの行為が何の行動なのか分からなかったが、こうして勇の出撃を見届ける者はほとんどいなくなってしまった。

「ふっ、見送りもなしか・・・これも定めか」

「目標まで残り3分！準備を！」

勇は腰を上げ、桜花の前に立つ。改造され、八咫鳥が収納された桜花はかつての仲間を運んだ棺桶と蔑んでいたが、こうして自分が入る分には落ち着く場所になっていた。一人が入ることが出来るスペースに勇が入り込むと、安心感さえやってくる始末だった。

「よし、行くか」

爆弾倉が開き、射出の準備が整った。あとは命令のみだった。そこに一つの通信が入る。

「勇中佐、気分はいかがですか？」

その声はハイドリヒのものだった。落ち着き払った声が懐かしく、あれほど憎んだ声  
がどこか遠く感じられた。

「ああ、晴れているよ」

「それは良かった。一つご報告です。現在、ベルリンでは激戦が繰り広げられており、パットン将軍率いる戦車軍団がベルリン市街にて包囲されているそうです」

「やはり一筋縄ではいかなかったか」

予想してはいたが、ここまでネウロイの戦略が巧妙だと笑えてきてしまっていた。そして、勇はその後の消息と501の行動について質問する。

「パットン将軍らはベルリン市街にあるフラッグタワーに籠っているそうです。501は地下鉄道を通って、侵入するようです」

「やつらも必死と言うわけか。じゃあ、俺にとつてうつつけの状況と言うわけだな？」

「ええ、ここまで準備した甲斐があつたというものです」

ハイドリヒの作戦予想には毎回驚かされるものがあるが、ハイドリヒがお膳立てした舞台は勇にとって晴れ舞台だった。勇は不敵に笑みを浮かべる。おそらくハイドリヒも同じ顔をしてるだろうことを想像するとなおさら笑えてきた。

「では勇中佐、時間です。あなたとの時間はとても楽しかったですよ」

「ふざけるな・・・と言いたいところだが。意外な気持ちだ。お前の見ている景色が俺にも見えた」

「ハハハ！初めてですよ・・・あなたともし違う世界で出会っていたのなら、きっと良き友人になれたのでしょうね」

ハイドリヒらしからぬ物言いに勇は驚きつつ、笑い飛ばす。

「ハハハ！俺たちにはこの世界しかないだろうが！」

その瞬間、勇は射出時間のランプが灯り、射出ボタンを押す。ハイドリヒが笑っている気がしたが、それも薄明るい光と強風、そして内臓を浮かせるような重力にかき消される。自由落下で桜花の鼻先が大地を向いたとき、勇は燃料を点火し、魔法力を込める。

「行くぞ!!!」

轟音と共に一気に慣性の法則で身体が進行方向とは逆方向に押し込まれる感覚に襲われる。グングンと高度を落としながら音速を越える。景色が灰色に見え、ゴマ粒ほどだった目標が段々と大きく見え始める。しかし、その光景も超音速に入ったあたりで勇の身体に影響を及ぼし始める。



「ぐくくっ!!」

眼球が押し込まれ、視界が狭まり、手足と首が悲鳴を上げていた。常人であれば意識がとうに飛んでいてもおかしくないが、勇はそれを身体力を強化し、気合で乗り切っていた。しかし、影響は少なからず勇を蝕んでおり、事実左手は徐々に黒ずんできていた。また、同時に音速を突破したことによる造波抵抗や空力加熱の障害をシールドを桜花に施すことで乗り切っていた。つまり、これは勇にしかできない芸当だった。

「ぐぬぬ!見え・・・た!!!」

ハイドリヒの報告通り、ベルリン市街は巨大なドームに囲われていた。勇は思案したあと、最適な方法を導き出す。最高速に達し、障壁に突入する寸前、勇はこれまでのこ

とを走馬灯のように思い出していた。荒れていた幼少期と父親であった道齋、姉だった咲、家族になろうとしたバルクホルンや宮藤、ハルトマンら501。戦友の杉田、藤野と小野里ら。隊長の林、赤松貞明。敵でありよき理解者にもなれたハイドリヒ。こんな自分を好きだと言ってくれたミーナと智子。その他にもたくさんの人物と出会い、迷惑をかけ、仲直りをしてきた。一人一人の顔や交わした言葉が胸の中に反芻する。自分と関わった人間の環が広がる度、酸いも甘いも見分けて出会ってきた軌跡は化石となつて残つていく。それを織り込んで自分の行先を見定める。壁は目前に迫っていた。

「咲姉さん……今行くぞ……っ！分離っ！」

桜花の先端のみを分離して、勇は脚部を桜花の収納スペースから八咫鳥に移す。軽量化され、さらに速度の増した桜花は最終的にマツハ2・3を記録していた。勇は切り離されたと同時に減速用のパラシュートを展開、恐ろしいまでの慣性の法則が襲ってくる

がなんとか耐える。目を向けると、そこには大きな穴が穿たれ、ベルマンの市街への入り口を大きく広げていた。

「そんじゃあ、蜂の巣を叩きに行きますか」

勇が穴の中へ突入した時、その光景を目撃していた人物がいた。それは坂本とウルスラ、服部の乗るB-17だった。

「あ、あれは?!」すごく、すごく速かったです!」

「今のはなんだ!? だれか乗っていたのか!」

「赤松中佐、ですね」

「なんだ?! ユウのやつ、このために遅れて来たのか!？」

「彼は彼の意思で動いているようですね」

坂本と服部が桜花の恐ろしさを目の当たりにする中、ウルスラは冷静に分析する。既存の武器類ではあの壁を破れないこと、また勇があの中で何を行おうとしているのかを的確に判断していた。

「彼を止めなければなりませんね」

ウルスラの手にはある資料が勇の実態を示していた。その書類の一番上にはこのように書かれていた。『ウィッチによる魔法力制御下の原子爆弾の効果について』

一方、ドームの中に入った勇は敵との戦闘に追われていた。しかし、蜂の巣を叩いたような騒ぎのそのことごとくを爆砕していた。

「お前らなんぞお呼びじゃない！ 咲！ 出てこい！！」

小型のネウロイを片端から爆砕していると、小型ネウロイが突如として攻勢を停止する。道を開けるように脇へ引いていく様は、まさに魔王の登場であった。

「よう……会いに来てやったぜ」

勇の視線の先では、瞬間移動型ネウロイであり人型を模したネウロイ、咲がいた。勇と咲は互いに微動だにしない。互いの再会を喜ぶ場合ではないが、そういった雰囲気を感じさせるだけの間が存在していた。しかし、突如として二人は動き出す。目にも止まらぬ速さで攻撃が繰り出されていく。その攻防はまさに一進一退だった。

「さすがは瞬間移動だ！でも、相手が悪かったな！」

かつて勇は瞬間移動の固有魔法を駆使した戦術を用いており、その功績で数多のネウロイを倒してきた。その戦術と効果は勇が嫌と言うほど熟知していた。おかげで勇は瞬間移動先を予測で設定し、その空間ごと爆破する。咲も勇が瞬間移動を駆使していた頃とは違い、無尽蔵なほどの回数を瞬間移動し、攻撃と回避を繰り返していた。

「くそっ！やっぱりそう簡単にはいかないか！」

勇の攻撃をもろともせず突っ込んできては小さなダメージを蓄積させていく。まるで遊ばれているかのような攻撃に苦笑いを堪えられなかった。勇は一度距離を取るために強力な攻撃を繰り返そうとする。

「我こそは強大な敵を撃ち倒す者、敵は百戦錬磨の強者にして不敗の将。どうか彼女を靖国へ導かん」

強大なエネルギーを秘めた弾丸はおおよそ勇と咲の等距離で爆発する。勇は即座にシールドを展開し、その爆風を利用して距離を稼ごうとしていた。しかし、その瞬間を突いて咲が攻め込んでくる。

「ぬおっ！あの爆発をだど?!」

目の前に接近されてはあの攻撃は使えない。だが勇は急いで魔法力を練り、もう一度繰り出そうとする中、咲はそれをも上回る速度で攻撃を放とうとしていた。

「まさかつ！あの攻撃もコピーしたのか?!」

勇は全力で攻撃から防御に意識を急転換する。しかし間に合わずある物を差し出す。

「……」

「……けほつ、お前も驚くんだな」

威力はまだ勇には届かないが、人に向けるにはあまりにもな威力に勇は禁断の行為を行っていた。勇の左手に巻かれていた包帯が焦げ、風に揺られてその全貌を露わにする。勇の左手は、指先から肘の手前までが黒く変色しており、幾何学模様が浮かび上



がっていた。それはまるで目の前のネウロイと同じ模様だった。

「なに、いつもあんたにばかり驚かされてきたんだ。今度は俺が驚かせたって文句はな  
いだろう？」

冷や汗が一筋流れる中、いたずらが成功した子供のような笑みを浮かべる勇とは対照  
に、咲はまるで静かに憤怒しているかのようなようだった。勇が笑みを浮かべるのを挑発と  
取ったのか、咲は猛攻を始める。

「くそっ！何だっつてんだ！うっ！」

止めどない攻撃が繰り返され、シールドを多重に展開させたり、複数展開することで

なんとか凄いではいるがこちらが攻撃しない限り防戦一方だった。そこで勇はとっておきの作戦を試すことにする。手榴弾のピンを抜くと魔法力を込めて威力を増す。それを気付かれないように背後に投げると、目の前に咲を見据えシールドを後方に展開する。咲は何をしているのか分からず、勇の出方を伺っていた。その時、手榴弾が炸裂し、その爆風が勇を押し出す。

「ぬおっ！どおだっ！」

猛烈な勢いで突っ込む勇に度肝を抜かれた咲は、勇の切込みを防ぐべく攻撃を放つ。

「ぐあっ！・・・へっ！これでお相子だな」

「・・・」

咲の胸部に勇の刀傷がつけられ、勇の左肩には咲のビームが貫いていた。瞬間移動を駆使用する者にとって、接近されることと触れられることは絶対あつてはならないことである。それこそプライドが大きく傷つけられることと同義である。勇はまた一つ勝ち誇った顔をする。しかし、勇の攻勢もそこまでだった。

「なっ!? てめえーさしの勝負だろうが!」

咲の周囲には無数のネウロイが溢れていた。それまで傍観を貫き、勇には一切接近してこなかった小型ネウロイが集結していた。そして、咲の攻撃と組み合わせる勇に襲い掛かってきたのだった。その異変に気付いた者が、その場にいた。

「あれ・・・まさか勇さん?! どうして!」

フラッグタワーに隠れていた宮藤だった。超戦車ラーテが破壊され、カールスラントが建造した鉄筋コンクリートの要塞に立て籠もっていた宮藤は、勇が戦闘していることに自分たちを救助しに来たのだと勘違いしてしまった。

「勇さん!!!ここちですよ!!!」

「なっ?!宮藤!?どうしてここに!っつて、まず・・・」

ここに居るはずのない宮藤の存在と、こんな状況で悠長に姿を晒すことに気を取られ、咲の攻撃を直接受けてしまう。勇の劣化版とは言え、最大級の攻撃に勇は一気に吹っ飛ばされる。フラッグタワーまで飛ばされ、鉄筋コンクリートの壁に激突する。

「うあがつ！」

「勇さん！」

勇は一瞬気を失うがすぐに目を覚ます。目の前に浮かぶ先の姿を口の中の血を吐き捨てて見る。無表情な顔の部分にかつての姉の表情が見えた気がしたが、既に先は亡くなっている。そんな既視感に幻想を振り払い、負けを感じる。

「やれよ・・・姉さん」

「・・・」

咲が手を勇に向け、エネルギーを溜めている。勇は目の前の断罪の瞬間を笑って待つ。勇の頭の中にはこれまでに関わった全ての人間と、自分のことを待っていてくれる人の気持ちの折り重なっていた。なにより自分の終着点を見切ることができて、満足感さえ感じていた。目の前の人物になら自分は殺されてもきつと後悔しないと救われよ

うとしていた。

「やっと解放される・・・肩の荷が下りたよ。サクラ、サクラ・・・ふはは、そういうことだったのか」

勇は覚悟を決める。かつて特攻で杉田が遺した通信の意味を理解して笑いが込み上げる。介錯人のように一瞬で消し飛ばそうとする咲に、勇は顔を上げて呟く。

「桜が似合ってるよ、咲。サクラサクミライだ！」

勇の言葉に咲は首を傾げる。その瞬間、建物の中から射撃が咲を襲う。

「赤松中佐を守れ！」

「勇さん！こつちです!!」

立て籠もっていた兵士が先に向かって射撃をし、その間に宮藤が勇を中に取り込んだ。

「何してるんですか勇さん！」

「助かったぜ。それより戻らないと！」

「ダメです！怪我してるじゃないですか！」

興奮気味の勇は気づかなかつたが、勇はかなりの傷を負っていた。出血が頭や肩など

至る所から見られ、宮藤の治療に捕まってしまふ。

「宮藤っ！それどころじゃないんだ！」

「いいから包帯巻かないと敗血症で死んでしまいます！ほらっ、左肩を見せてくだ・・・さい。勇さん、この腕」

宮藤は勇の左肩を診るために左手を握ってしまふ。その服の隙間から覗いた黒い幾何学模様を目にしてしまふ。初めて人に見られてしまったが、勇にはもうどうすることもできなかつた。宮藤から包帯を分捕ると左手をもう一度巻きなおす。困惑した宮藤の肩に手をかけ諭す。

「宮藤、こういうことなんだ。今まで素っ気ない態度を取ってすまなかつた。だが、もう少しで終わる」



勇はしっかりと言い聞かせるように言ったが、宮藤は首を振って聞くことを拒否する。

「嫌です！勇さんがいなくなる世界なんてだれも望んでいません！だから終わるなんて言わないでください！」

勇はなにも死ぬとは言ってはいなかったが、宮藤には分かってしまったようだった。しかし、魔法力を枯らした宮藤には何もできない。勇は少しの希望を宮藤に託して生きてここを脱出できるように魔法力を流し込む。

「お前は鈍感なくせに敏い。宮藤、お前は守りたいんだろ？お前は俺とは違う。だから、守ってくれ。この世界を、未来を」

勇の魔法力を感じたのか、宮藤は心の温もりを受け取る。僅かな魔法力だが、確かに勇の魔法力だった。勇は宮藤の身体能力を底上げすべく表面を覆うように魔法力を授けた。しかし、宮藤の口からは驚くべき言葉が漏れる。

「優雨作さん？」

「な、なぜその名を?!」

「え?なんでだろう?私・・・おじいさんから、あれ?あのおじいさんは一体?」

要領の得ない宮藤の幻想に勇は驚愕する。優雨作という名前を知っているのはかつての姉の咲と少し前に話したウルスラ程度だ。そして、自分に名前を付けた父親のような存在の道斎だった。たしか、道斎がかつて扶桑沖戦役で出会ったウィッチの名前がふと勇の脳内を過った。

「秋本、芳子……さん？」

「どうしておばあちゃんの名前を?!」

「そうか……そうだったのか……あつはつはつは！じいちゃん、見ててくれたのか！」

勇は嬉しさのあまり懐かしい人物に感謝する。温かく、そして慈愛に満ちた道齋はいまだに勇を見守ってくれていたのだと、力が湧いてきた。そして、不思議な表情の宮藤の手を握る。

「ありがとう。また会わせてくれて。俺はもう行かなくては」

「……勇さん」

心配そうな宮藤を見て、勇は笑顔を作つて見せる。それは感謝と強がりを経一杯込めた清々しい笑顔だった。

「任せとけ！俺が片付けてきてやる！」

そう言うのと今度こそ勇はフラッグタワーを飛び出す。そして、フラッグタワーを攻撃する敵を惹きつける為に最大威力の攻撃を天井に向かって放つ。

「俺はここだ！！俺を撃ちたいやつは並びやがれ！片端から返り討ちにしてやるぞ！」

そう言うのと敵が一齐に押し寄せてきた。その頃、地下のミーナたちは突如押し寄せる攻撃の衝撃波に怯えていた。

「さつきから上では物凄い攻撃だな」

「まだパットン將軍將軍らが抵抗を続けているのでしよう。私たちも先を急ぎましょう！」

勘違いによりミーナは前進を急ぐ。さらに上空では坂本らが内部に侵入するための方策を練っていた。

「ユウや宮藤が中にいる！助けに行くぞ！」

「はいっ！坂本少佐！」

「では、ネウロイ用気化爆弾があります。それを起爆させて中に入れるかやってみましょう」

三人は方針が決定するとすぐに準備に取り掛かる。ネウロイ用気化爆弾は二発しかなく、慎重な判断が求められた。一発目を投下すると、爆弾はドームの手前で爆発して

しまい効果が薄かった。

「くそっ！爆発のタイミングが早すぎる！」

「設定を変えられないのですか?!」

「ここでは無理です。基地に戻らないと！」

三人は頭を抱える。何より普段冷静なウルスラが一番焦っていることに坂本は疑問をぶつける。

「ウルスラ中尉、どうしたんだ？」

「・・・今、中には赤松勇中佐がいます。このままでは彼は、この土地ごと消滅してしまします」

「なんだとっ!?!」

驚きが隠せない一同はウルスラに詳細を尋ねる。

「どういうことだ！」

「勇中佐の持たされているペンダントを以前見せてもらったことがあるのです。それは気になって調べたらこんなものが」

ウルスラが手渡した資料に釘付けになる坂本と、それを不安げに見つめる服部は緊張を強いられた。坂本は頭を抱えてかつての自分の勇への頼みを後悔する。

「なんとということだ・・・私が、私がユウの背中を押してしまったというのか・・・」  
「坂本少佐？」

服部は自責の念に苛まれる坂本を見てより不安が増す。ウルスラがそんな服部にも分かるように事態を説明する。

「私が調べた情報によると、勇中佐が持たされているペンダントはただの飾りではありません。あれは……原子爆弾です！」

「原子爆弾？」

「はい、通常の爆弾とは異なり、ウランやプルトニウムといった放射性物質を核とした新型爆弾です。その威力は核分裂により得られる莫大なエネルギーによりTNT換算で15kt……勇中佐はおろか、このベルリンは文字通り地図から消えます！」

あまりにも桁外れな威力に二人とも予想がつかないが、都市ごと消し飛ばすと言う強烈なインパクトに想像を絶する規模だということは想像がついた。



「ネウロイより厄介じゃないか！」

「それを勇中が持つているのですか?! いつ爆発するんですか?!」

「それは分かりませんが、ハイドリヒ長官がノイエカールスラントで行っていた研究では魔法力による核反応の制御を検討していたようです」

坂本は腕を組んで結論を出す。

「つまり、ユウの魔法力の制御が利かない限界量を越えた時、ということか」

「はい。臨界状態と言いますが、おそらく勇中佐の魔法圧が何らかの形で崩れた時でしょう」

「それって、勇中佐が死んだ時でもですか?」

服部の質問に機内は暗い雰囲気に含まれる。全員が勇の今後を考えると、行きつく先

が想像できてしまった。服部は二人の暗い表情を見て、駆けだす。

「服部?!」

「少佐! 私が出ます!」

「無茶だ! お前にはもう魔法力もユニットもないじゃないか!」

「手ならまだあります!」

服部の覚悟の背後には新たな翼が煌めいていた。

一方その頃、勇は咲と多数のネウロイとの泥沼の戦闘に身を投じていた。

「こんのおおお!!!」

無数のネウロイのせいで咲に近づくこともできず、また咲は最悪のタイミングで勇に

切りかかってくるため、勇は満身創痕の状態だった。それでも勇は咲だけを狙いすまし突撃を繰り返す。

「これならどうだあああ!!!」

手持ちの弾倉を高く放り投げると、それを撃ち抜く。あたり一面に熱した栗が弾けるように散弾が飛び散る。勇の魔法力を限界まで込めた弾丸は一斉に小型ネウロイを蹴散らした。周りの雑多なネウロイを消し飛ばした瞬間、瞬時に最大威力の魔法力を込めた弾丸を放つ。膨張した弾丸は、咲の目の前で炸裂し、あたかもレーザーが搭載された近接信管付の弾丸の様だった。

「もらったああああー！」

最後の弾丸を撃ち尽くし、あまりの威力に銃身が破裂したため刀での攻撃に出た勇の目の前には、爆炎で身動きの取れない咲がいた。勇の渾身の一刀が肩から入り込んだように思われた。しかし、現実には刀の切っ先が向いていたのは勇だった。

「ぐふっ……固すぎだろ」

鳩尾付近に突き刺さった刀は、勇の刀だった。なんと咲を切り裂いたはずの刀は、防御に全振りしたと思われる咲の装甲によって折れてしまった。そして、その折れた切っ先を勇に突き刺していた。ゆっくりと突き刺されていく感覚に、妙な既視感を覚えながら切り口が灼熱の熱さを痛みが覆っていた。

「その様子じゃ、自爆でも致命傷にはならないか……さすがは姉さんだ」

項垂れて溢れる血を眺めてしまう。さすがにここまで深手は、いくら勇と言えど大丈夫と言えない致命傷だった。それでも勇は一矢報いるために密かに魔法力を練る。それも織り込み済みなのかめり込ませるように切っ先をねじ込んでくる咲には、怒りの感情が伺えた。

「なあ姉さん、この世界ってのは本当に理不尽だよな。でもな、理不尽にも訳があるんだぜ？もし、自分が不遇な環境に置かれてもなお、声を出さなかつたら、それはなにも変わらないんだ。声を出せる勇気がある奴が自分に降りかかる理不尽を跳ねのけることができるんだ」

勇の言葉に耳を傾けているのか、切っ先の入り込みの力が止まる。勇は入り込む切っ

先を手で握ると、手から溢れる血も気にせず咲を覗き込む。

「俺は正直になることが怖かっただけの臆病者なんだ。でも、それでもなんとか声を上げることができた。それを助けてくれる仲間がいたからだ！だから姉さん！姉さんも正直になればよ！最期の日、俺に言いたかった本当の言葉を言ってみろよ！あの夜言いかけた『私の・・・』の続きを覚えてくれよ！」

勇は咲に向かって自分の気持ちをぶつける。カールスラント撤退戦で、最期の日に交わした言葉はなんとも味気なく、聞かずに二度と会うことは叶わなかったその言葉を聞きたかった。それを聞かずにはいられなかった。すると、咲が少し震える。

「・・・アシタヲ、アゲル」

「・・・な、んだと？」

電子音のような声が紡いだのは、勇が思いがけない言葉だった。あの凍てつく月が二人を覗き込んでいた時、咲はこんなことを考えていたのだとしたら勇は怒らずにはいられなかった。勇は力を振り絞り、痛む腹を気にせず咲を殴りつける。

「ふざけるなあああ!!お前は咲なんかじゃない!俺の!俺の姉さんはなあ!諦めないんだよおお!!」

予想外の力に咲の力が弱まる。その瞬間を待っていたとばかりに自分に突き刺さる刀を抜くと、それを逆に咲の胸に突き刺す。痛がっているのか、勇が咲に刺しかかったまま瞬間移動を繰り返す。いつの日にか自分も扱っていた瞬間移動の感覚に目が回る。その時だった。ドームの天井が突如爆発し、一人のウィッチが飛び込んできた。

「宮藤さん!!! 勇中佐あ!!!」

飛び込んできたのは、宮藤の震電を装着した服部だった。ドームの中に差し込む光に瞬間移動が止まる。外敵を確認したネウロイが一斉に襲い掛かるが、必死に反撃する服部の存在に勇は悪寒を覚えていた。刀を差したままの二人が組み合つてなんとか服部の下へは行かせまいと粘る勇だったが、咲が放つた一撃が服部の腹部を引き裂く。その光景を目撃していた宮藤と勇が叫ぶのは同時だった。

「服部い!!!」「静香ちゃん!!!」

血が花火のように飛び散り、致命傷を負った服部はどしやりとフラッグタワーに墜落



する。駆け寄る宮藤はその流れ出る血を見て言葉を失っていた。

「静香ちゃん……」

止めどなく流れ出る血液の量が、服部の命の通貨であることを宮藤はよく知っていた。必死に治癒魔法を発動させようにも、枯渇してしまった魔法力はその効果を發揮しなかった。その間にも敵は宮藤を目指しており、勇はやむなく咲から離れる。宮藤の護衛をするため、フラッグタワーを背に敵と対峙する。弾も尽き、刀も折れ、傷を負った勇は端から見ても虫の息だった。それでもその滾る闘志のみが敵の接近を防いでいた。

「手出し無用に願おう。ここから俺は修羅となって立ち上がるぞ……まずはお前か、お前か！」

勇の気迫に気圧されたのか、小型ネウロイは宮藤たちに近づこうとしなかった。服部はこの時、勇の胸元で青白く輝く光を見てこう呟いた。

「破滅の、翼だ・・・」

## 籠の中の翼 第十八話 後編

服部をなんとか助けようとする宮藤だったが、出血は止まらず、虚しく時間ばかりが過ぎて行ってしまう。後輩であり、自分のために駆けつけてくれた服部の無残な姿に涙が溢れてきてしまう。外では勇が必死に足止めをしてくれており、時間的余裕もない。そんな中、服部は弱弱しく宮藤に言葉を残す。

「宮藤さん……私、守りたかったんです」

「静夏ちゃん喋っちゃダメ！」

「いいえ、宮藤さん……勇中佐と私はほとんど話す機会がありませんでした。でも、あの人はハルトマン中尉の救出の時も、私が出撃した時も、大型ネウロイを倒した時も全部、私たちを見送ってくれていたんです。無関心を貫きながらも、私の名前を覚えていてくれたんです」

確かに勇と服部は直接話したことはほとんどない。しかし、基地ですれ違う時は必ず会釈をする、出撃の時・帰還時は必ずどこかで見守ってくれていたことを隊員は知っている。バルクホルンと喧嘩をした時も、勇の陰の努力を知っていたからこそ分り合えた。その上、喧嘩したはずのバルクホルン自身が勇のことについて謝罪を行っていた。それだけ勇とは切っても切れない縁ができてしまっていた。

「勇中佐は今、とても大変なことを任されています．．．私は、宮藤さんと勇中佐を守りたかった！でも、私じゃ役不足でしたね．．．」

「静夏ちゃん!!」

弱弱しく笑う笑みを最後に服部の手が宮藤の手を滑り落ちる。多量失血による意識の混濁が始まっていた。宮藤は自分の魔法力の枯渇を心底悔やんでいた。必死に魔法力を発動させようにも枯れた魔法力は発現しなかった。

「お願い！発動してよ！」

いくら力んでも欠片も発動しない魔法力に宮藤自身も為す術がない。宮藤は天を仰いで嘆く。空中では勇が戦っている。服部の言うように青白く輝く光に包まれながら奮戦していた。その光景を見て、宮藤は自分の心に問いかける。

「私は守りたい．．．でも、今私にその力がない。私には分かりません。どうして魔法力という希望がありながら、その力を本当に望んでいる人に．．．人？相手？」

宮藤は自分の中で考えた相手について考える。思い浮かぶ人の顔や思い出がポツポツと浮かび上がってくる。その瞬間、自分の中の僅かな魔法力がざわついた。宮藤はそのことも気にせずさらに熟考する。

「相手……大切な人、仲間？……仲間！」

仲間の単語に呼応するように自分の魔法力が何者かの干渉を受ける。壊れている己の魔法圧の調整弁がすすくと修繕されていく。心に刻まれた記憶が蘇るように、相手の顔を思い浮かべれば思い浮かべるほどにその回復は飛躍的速度で進んで行く。そして、宮藤はふと浮かんだ言葉を叫ぶ。

「優雨作さん！咲さんをどうか頼みます！」

その言葉を叫んだ瞬間、勇は目を見開く。もう呼ばれることはないと思っていた名前

を、一番大事な存在と並べて呼んでもらえたという事象は、勇を鳥肌立たせた。単なる音にしか過ぎない名前が、意味を持つて自分と自分たらしめる存在である姉の咲を同格の存在へと押し上げる。勇は宮藤に向かって笑いかける。

「おう！任せとけ！」

その言葉が聞こえたかどうかは分からなかったが、宮藤は確かに受け取っていた。そして、自分の中に流れる微かな異質な魔法力の正体に気が付く。枯渇した自分の魔法力ではなく、先ほど自分を守るために宿してくれた勇の魔法力が自分と同化していた。誰かを想う気持ちと自分の一番望む気持ちが一致するとき、魔法力は力を与える。かつて勇が『無邪気』と評したように、魔法力とはネウロイの存在同様に未開の分野である。それだけに、相手を信じることの大切さが宮藤の心の中を溢れさせた。

「よかった・・・よかった。あつ！」

自分の想いが溢れてきて、それが涙として流れ落ちた時、宮藤の中の魔法力が湯水のごとく流れ出す。たちどころに服部の傷を治癒してしまうほどの猛烈な勢いは、その場にいる全員に伝わるほど強力な力を発揮する。それは地下にいるミーナたちや、もちろん勇にも伝わっていた。

「宮藤？なんだこの魔法力は?!・・・まさか、この微量の魔法力は、俺のか?!」

時を同じくして地下で戦闘を続ける501もこの魔法力を感じ取っていた。



「ネウロイが魔法力に反応してる．．．まさかこの魔法力って!」  
「ああ、宮藤とユウのだ!」

宮藤は服部が乗ってきた震電に乗ると、傷を癒した服部をパットン將軍に託す。その強い眼差しに気圧されたパットンは、何も言えずに見送る。宮藤はかつてないほどの魔法力伝達効率の良さに勢いに乗る。片端から宮藤に集まる小型ネウロイをシールドでもって叩き潰す。それを見る勇は苦笑いを堪えられない。

「宮藤のやつ、魔法力の本質も分かっていやがらないくせに、覚醒しやがった!」

かつて勇がそうだったように、魔法力とは本来、使い魔と契約して本人に宿る魔法力を引き出すものである。しかし、稀に魔法力が混ざり合うことで強力な魔法力を身に着ける者が現れる。勇の場合は道斎と藤野という人生の中で欠かすことのできない存在と密接に魔法力の根源をリンクさせている。一方の宮藤は、類稀なる己のみの莫大な魔

法力を無邪気な意志という強固でかつ原始的な方法で発現させていた。そこに、勇と言う歴史上類を見ないほど鍛え上げられた魔法力を加えられたらどうなるだろうか。その結果は勇としても推して知るばかりだった。

「まあいい。これでようやく二人きりだな・・・姉さん」  
「・・・」

勇はついに咲と対面する。満身創痍の状態とは言え、気力は咲にしか向いていなかった。そして、向けられた相手である咲も勇にしか向いていなかった。お互いに最後の戦いとなることを覚悟してその時を待っていた。そして、その時は訪れる。ドームが一斉に崩壊し始めた時、二人は全力で突撃する。激しい衝突に閃光が生まれ、衝撃波が走る。

「……がはっ、やっぱ敵わないな。姉さん」  
「……」

咲の攻撃は勇のネウロイ化し始めた左腕を貫通し、胸に突き刺さっていた。二度目の風穴に吐血する。しかし、咲の視線も自分の胸に向けられていた。

「敵わないけど、追い付けたよ。これで終わりだ」

「……」

勇の右手は咲の胸、先ほど刀の切っ先を突き立てた穴に押し付けられていた。その指の隙間からは青白い光が漏れていた。それは勇が限界以上に魔法力を注ぎ込み、臨界状態に押し上げられた原子爆弾そのものだった。勇は全ての魔法力を自分たちを取り囲むようなシールドに注ぎ込む。酷使したユニットが息を止め、そのなくなった浮力が重

力に変わり、勇の傷口にのしかかる。激痛に耐え、口元から垂れる血にも気にせず心中を決める。

「俺たちが決めたことだ。他人は巻き込まない。二人きりだ、いいだろう？」  
「・・・ユウ」

愚痴りかけた勇に、咲は話しかける。驚いて顔を上げると、不思議なことにネウロイの姿ではなく、いつの日かの咲がいた。時が止まり、身動きが取れない中、咲だけが勇の顔に触れる。

「覚えていてくれて、ありがとう」  
「バカ野郎、忘れるわけがないだろう・・・姉さん」

自然と二人で過ごした温かな日々が見えてくる。桜並木が風で揺れ、温かな陽だまりが二人を包んでいく。そして、やはり勇は思うのだった。

「やっぱり姉さんには桜の花が似合うよ。笑顔が咲き誇ってる」

「ありがとう……ありがとう。私が一番言つてほしかったことを、一番言つてほしかった人に言つてもらえた。変な意地を張つてごめんなさい！私があの日にしたかった本当の言葉を教えるわ」

自分に負けず劣らず強情で頑固な咲の本音が聞ける。勇も気恥ずかしかつたが、心を穏やかにして聞き耳を立てる。耳元に咲が口を寄せると頬に柔らかい触感を感じる。驚いて咲の顔を見直すと、涙を溜めた優しい顔で口を動かす。その言葉に、なぜか勇は金平糖の味がした。

「あの日、月を見て言おうとしたことはね、私の気持ちはね、『月がきれい』って言いたかったの」

勇はその言葉を聞いて俯く。どうしようもなくその言葉が悔しかった。溢れる涙を堪えようとせせず、流しっぱなしにする。涙は理性が止めてしまう劇薬だが、この涙は異なっている。温かく、どこまでも透き通った涙だった。

「そんなの、分かるかよ・・・回りくどいんだよ！俺だけじゃ分からなかったぞ！けど、今ならわかる！分かるよ・・・でも、そんな言葉残して、俺を一人ぼっちにするなんて酷いじゃないか・・・こんな時まで姉さんぶるなよ！」

これまでの勇と関わった全ての人間と交わした言葉が、咲の言葉を理解させた。一人を貫こうとし、他人との関係を絶とうとした勇には決して分からなかったであろう言葉を言わずに消えた咲が憎くて仕方がなかった。勇が一人で生きていくことのないように、姉として気遣う心が気に食わなかった。その時、咲が勇を優しく包み込む。その温かさに目を見開くと、そこには一番見たかった姉の顔があった。

「あなたはもう一人じゃないわ。あなたには大切な仲間がいる。愛する人、愛してくれている人がいるわ。これからはあなたに新しい世界が拓くのよ」

「姉さんがいない世界なんて・・・」

「なにを甘えたこと言ってるの。私もあなたの中にいるって、あなたが私に教えてくれたんじゃない」

優しく温かな手が頬を撫でるとき、その空間が歪む。崩壊の時が近づいているのか、勇は焦燥感に駆られる。

「姉さん！俺！」

「大丈夫、あなたには私もみんなもいる」

「でも！」

「大丈夫、さあ、お行きなさい。君の明日はまだ続くんだから」

「姉さん!!」

勇の最後の言葉で限界を迎えた空間は、急速に現実へと誘う。温もりだけが勇の頬を掠める中、目の前のネウロイとなった咲が勇を押し返す。エンジンを切っている勇は、咲と離れた瞬間、重力に従って落ちて行く。目線の先の咲は胸に輝く叡智の炎を残したまま勇を見送っていた。



「姉さん!!!」

原子爆弾がタイムリミットを越え、眩い光を放つと同時に、咲は瞬間移動を使用する。虚数空間に誘われた咲と原子爆弾は共に消失する。残された勇はシールドを下げ、ユニツトに魔法力を流す。あたりを見渡せどどこにも咲の姿はなかった。孤独感が勇の頬の温もりを消し去っていく。

「かっこつげやがって・・・」

一人残された勇は、自分に流れる赤い血を眺める。確かに存在した姉の咲との最後の時間を噛みしめ、自分も姉に倣う。

「じゃあな」

勇の言葉がベルリンの空に溶ける中、遠くから声がする。

「勇さーん！」

「ユウ!!!」

宮藤や地下からやってきた501の仲間の姿に、勇は涙を拭く。駆け寄るミーナが勇

の傷を心配する。

「勇中佐！その傷は大丈夫なの?!」

「ああ、なんとか」

「もう、宮藤はなぜかここに居るし、服部が怪我するし、ユウもいるしでわけわからん」

シャーリーが茶々を入れるが、それは全員の考えていることだった。しかし、ミーナは勇に尋ねる。

「中佐、終わったのね」

「ああ、ミーナ。終わった・・・終わったんだよ」

その安心しきった表情にミーナもホツとする。そして、勇にはアイヒマンから秘匿回線で連絡が入る。

『勇中佐、ドームが崩壊したのを確認した。だが、貴官の作戦はどうした？なぜ閃光が見えない！』

勇はこんな時に水を差す無粋な連中に喝を入れる。

「俺の作戦は成功だ。あとはお前らが勝手にしろ！」

『なっ！なんだとっ?!ふざけるなっ！作戦通りにや・・・』

勇は話も途中でインカムを投げ捨てる。どうやらアイヒマンらはさぞかしお怒りらしい。しかし、勇にはやるべきことがあった。ミーナを見て自分の意思を伝える。ミー

ナもその意思を汲んで仕方ないとばかりに嬉しい溜息をつく。

『501統合戦闘航空団、頼んだぞ！』

「了解っ！」

連合軍司令部からの命令に勢いよく反応すると501は翼をはためかせる。ベルリの地下にあったという巨大都市、ゲルマニアが空中に浮遊する。その巨大都市を次々と攻撃していく。勇はシャーリーから拳銃を受け取ると、一発一発を確実に攻撃していく。その中でミーナから指令が下る。

「今のあなたに市街戦は無理よ！あなたは防備が手薄な下からの攻撃をお願いしますわ  
！」

「了解！」

ミーナの指示通り、下からのゲルマニアはただの大きな平皿のようで攻撃もまともに飛んでこなかった。ならばと、勇は残りある魔法力を振り絞って中央部に向かって攻撃を仕掛ける。

「かくれんぼは終わりだ！出てこい！」

勇の放った一撃は中央部を壊滅させ、中から上空に向かって釣鐘型ネウロイが姿を露わにする。

「ミーナ！親玉が出たぞ！追え！追うんだ！」

「分かったわ！」

勇は高度差と自分の怪我を考え、ミーナたちに託す。カールスラント組の三人は首魁に追いつがるも、上昇力で適わず突き放されてしまう。しかし、勇の魔法力をも味方に付けた宮藤がシールドで追り返す。速度の落ちたネウロイは三人の猛攻に耐えられず、コアを曝け出す。

「「今だああああー！」」

全員の声の後を押し、遂にネウロイのコアが破壊される。その瞬間の散りざまはまさに光の花火のようにきれいだ。首魁のネウロイが破壊されたことにより、覆われていた空が顔を覗かせ、薄暗かったベルリンの街が姿を現す。その美しさに全員が言葉を失う。

「「こちら501、ベルリンのネウロイの完全消滅を確認・・・ベルリンを、奪還しました

「！」

ミーナの報告に実感が湧いてくる。隊員たちは皆喜び、抱き合つて勝利を寿ぐ。勇もそんな仲間の姿を羨ましく眺めていた。すると、ミーナが勇に近づいて来る。

「ありがとう、ユウ、あなたなら必ず大丈夫だと信じていたわ！」

「ああ、さすがにお前たちには感謝しないと。ありがとう」

握手を交わし、互いの健闘を褒め合う。そこにバルクホルンがやって来る。

「ユウ・・・私はお前に謝らないといけない」

「もう忘れたよ」



「ああ、それでもだ。すまなかった、そして、ありがとう」

バルクホルンとも握手を交わすと、三人は顔を見合わせて今後の相談をする。それは勇の今後の方針だった。

「ユウ、私たちと一緒に来ない？今ならあの部隊から抜け出せるわ！」

「いや、俺にはまだ仕事が残っている」

「仕事？」

「ああ、大事な仕事だ」

勇はミーナの納得を得ると、501の基地に向かう。そこにいるであろう人物に会う為だった。基地に着くと、勇はある部屋へと歩みを進める。扉を開け、中に入ると、勇のお目当ての人物がそこにいた。その人物は窓に目をやり、こちらに気づこうとしなかった。

「ハイドリヒ、帰ったぞ」

「・・・勇中佐ではありませんか。どうしてここに？」

ハイドリヒは幾分驚いた顔を見せていた。それもそのはずである。勇はあのペンダント、もとい原子爆弾とともに消えてなくなるはずだったからである。初めて見るハイドリヒの驚いた顔にも構わず、勇はハイドリヒの机に近づく。

「作戦、完了だ」

「・・・そう、ですか・・・そこにいるのはミーナ中佐ですか？」

部屋の外で待機していたミーナもハイドリヒの言葉で姿を見せる。

「ハイドリヒ長官、あなたには国家転覆罪の他21件の容疑が掛けられています。大人しく投降してください」

「国家転覆罪?・・・ぷっ!フハハハハハ!」

「何がおかしいんですか?!」

気でも触れたのかと思ったミーナだったが、勇がそれを否定する。

「ミーナ、それはお門違いだ」

「どういうこと?」

「全くその通りですよ! 国家転覆罪? そんな軽々しい罪を、私が犯すはずがないじゃないですか!」

ハイドリヒは一頻り笑った後、自分の計画を笑顔で話し始める。

「勇中佐くらいしか本質を理解していないようなので教えて差し上げましょう！いいですか？私が犯したのは国家などではない！世界そのものなのですよ！」

両手を広げて解説するハイドリヒは、とても輝いていた。ミーナは驚愕し、勇はミーナに説明する。

「ハイドリヒは俺を閃光作戦の第一陣として、ベルリンを吹き飛ばした後、崩壊した連合軍を背後から急襲するつもりだったのさ」

「なんですって!？」

「そうですとも！私は無傷でこの世界を丸ごと奪うつもりだったのです！人も町も国も文化も全て消去した新世界を創造し、新秩序である世界共同体を打ち立てるつもりでした！」

ハイドリヒの壮大な計画にミーナは寒気がしていた。もしかしたら自分たちも巻き込まれていたかもしれないその作戦と、人間の命をどうとも思っていないその狂気に、目の前が暗くなる思いだった。

「あなたは狂っているわ・・・」

「はて？ 狂っているのはあなたではないですか？」

「聞き捨てなりませんね」

「あなたはもう少し利口だと思っていました、少し過大評価をしていたようです。そうですね、あなたが私を狂人と言っても構いませんが、では悪いとは何ですか？ 誰が決めた悪なのですか？」

ハイドリヒの問いにミーナは口ごもる。哲学的な話しに、ミーナは解答を出し渋った。それを解答だと言わんばかりにハイドリヒは自身の理論を展開していく。

「この世界を本当によくご覧になったことはありますか？この世界はもう駄目です。戦時であると言うのに、争いはなくならない。私腹を肥やす者、罪を犯す者が後を絶ちません。私たちはそれら人間を世界の害悪だと断定し、排除を行ってきました。その時の彼ら人間のなんと浅ましいことでしょう。命乞いをし、無駄な抵抗を試みる。自分の行いを振り返る時間はいくらかでもあったと言うのにですよ。これを滑稽と言わずして何というのでしょうか」

移動虐殺部隊を率いて来たハイドリヒは、ただ単に虐殺を行っていたわけではない。自分たちを世界の守護者と称して断罪してきたのだ。例えばどんな手段を用いようと、自分たちが害悪だと判断した人間を問答無用で処刑する様だけが、世間に広がってしまったのだった。

「それでも彼らには裁かれる権利があります。もし他の人間もその意見に賛成する保証があるのなら、法で裁くこともできたはずです。それをしないあなたたちこそ、正義を名乗る無法者と言われても仕方がないではありませんか」

ミーナが反論を提示するも、ハイドリヒは首を振って否定する。

「それでは何の意味もありません。いいですか？この世界は盲目なのです。それは自然的な盲目ではなく、自発的盲目を気取ったいかさまに等しい蛮行なのです。我々が行った断罪に汚らわしいものなど一つとしてありません。汚らわしい者を断罪するから我々まで穢れて見えるだけなのです。それに目を向けようともせず、我々を異端者と決めつけて、見ないふりをするあなたたちの方がよっぽど狂っている、そうは思いませんか？」

ハイドリヒの本意を理解しつつあるミーナは黙ってハイドリヒの言葉を聞く。勇の

思うハイドリヒの恐ろしいところはこういうところなのだ。誰も本質を見ようとしな  
いとはよくいったもので、ハイドリヒはただ真実を、真理を追求しただけなのだ。だれ  
が真理を極めた人間を悪と決めつけられるだろうか。

「世界は団結を謳い、外敵であるネウロイという共通の敵を相手に結束を表では結んで  
います。しかし、その裏では戦後の国際社会での立ち回りしか考えない愚図の集団であ  
る現状を見れば、私の行いはむしろ救世主として称賛されていい！なぜなら私は世界の  
守護者であり、だれも差別することのない、忘れ去られることのない理想郷を与えるの  
神になるのですから！」

ハイドリヒの黄金郷は果てしなく雄大で魅力的だ。ハイドリヒほどの才覚がある者  
ならば、本当に誰もが苦しい思いをせずに天寿を全うできる世界を創造できるかもしれ  
ない。しかし、勇は絶対と言っていいほど矛盾があると確信していた。



「素晴らしい計画だ。だが、その計画も妄想で終わらせてほしい」

「ほう、私を殺すのですか？」

ハイドリヒは笑って勇に問いかける。しかし、勇はその問いの答えを否定する。

「いいや、俺がお前を殺しても意味がない。いやむしろ殺すこと自体が今のお前の目標なんじゃないか？」

「・・・ハハッ！アツハツハツハ！勇中佐！やはりあなたは素晴らしい！本当に最高ですよ！」

またも狂った笑いにミーナは困惑する。勇とハイドリヒの二人の見える世界を共有できず、一人置いて行かれるそんな焦燥感にミーナは己が拳銃を向ける。しかし、それを制止したのは勇だった。

「止めろっ！」

「どうして!?!彼は危険だわ!どうあつても彼はこの世界に影響を与えるわ!あなたにできないうら私が!」

勇はそんなミーナを諫める。ミーナもいつになく落ち着いた勇のその切実な顔に銃を下ろさざるを得ない。

「すまないミーナ、でもハイドリヒを殺していいのは俺たちじゃないんだ」

「じゃあ誰ならいいって言うの?!あなたはいいの?!」

「・・・だとしても、お前に人は殺してほしくはない。分かるな?」

ミーナは人を撃つたことはもちろんない。勇が言う殺すと言うのは、本当の意味での殺意を持って殺すことなのだ。だれも義理に駆られて人を撃つなんていう行為はしてはいけないと暗に告げていた。ミーナの拳銃を優しく取り上げると、ハイドリヒは満足したのか荷物を持ち始める。

「ふふつ、そういうことです。では、私は新たな世界を作るための新しい計画を練らなければなりません。これで失礼させていただきますよ」

ハイドリヒが部屋を退室しようとする。ミーナは悔しがる表情を隠そうともせずハイドリヒを睨むが、ハイドリヒはそんな視線を面白がるように笑い返す。しかし、ミーナは自分を落ち着かせるように息を吐くと勇に目を向ける。

「ユウ、ごめんなさい」

「ミーナ、なにを・・・」

ミーナが指を鳴らすとドアが開く。その扉からは金平糖の香りがした気がした。

「なっ!? あなたは?!」

「久しぶりですね、ハイドリヒ長官!」

「小野里少尉!? まさかっ!」

その姿は紛れもなく、ハイドリヒに撃たれて死んだ小野里の姿だった。しかし、その小野里は手に20mm単装機銃を持ち、ハイドリヒを狙っていた。

「ハハッ! 最高です! まさか死人がつ!」

「お前には死人がお似合いだ!」

ドンツという轟音が部屋を切り裂く。20 m 機関砲など、人に向けるものではなくハイドリヒはその衝撃で吹き飛ばされる。壁に激突し、変な音を上げて背もたれるハイドリヒに小野里が近づく。

「どうだ？ お前が忘れた人間に殺される気分は」

「グボツ・・・ハハツ、カハツ・・・まさに、最高の気分ですよ・・・」

「まだ笑えるか！」

「待てっ！」

勇の一声が憤る小野里を制止する。寸前で止められる機銃をゆっくりと下ろす小野里の傍を通り、小野里の頭を撫でてやる。

「すまない、君にこんなことを任せてしまつて。でも、もう迷わない。だから・・・」

その言葉で小野里は引き下がる。血のあぶくを吐きながらも決して笑みを絶やさないハイドリヒに視線を向ける。

「ああ、これで私の目標は達成されます」

「そうだな。せめてもの餞だ。お前の目標に全力で抗ってやろう」

「それは楽しみです・・・」

ミーナは勇の後ろ姿を見ていた。どこか物憂げで、解放されたはずの人間の醸し出せる背中ではなかったことに危機感を覚える。

「ハイドリヒ長官の目標？それは一体？」

「・・・こいつの目標はな、永遠に生きることなんだよ」

「それは・・・無理なことだわ」

「いいや、こいつは今まさにそうなるうとしている」

勇の発言が意味を持ち過ぎていてよく分からなかった。しかし、今まで最前線でハイドリヒと関わってきた勇だからこそ理解できた言葉なのだろうと、そこから推察してみることにした。すると、恐ろしい閃きが下りてくるではないか。

「まさか・・・そういうことなの?! 私たちの中で生きると言うことなの?!」

「そうだ。絶対的な悪の、諸悪の根源として、こいつは死して人々の恐怖の中に存在し続けるだろう」

ハイドリヒは最高の笑みで正解を導き出した二人を褒める。

「二人とも素晴らしい人材ですね．．．私が悪いと認識されればされるほど、私は世界に残り続ける。未来永劫語り継がれる神になれるのです」

「．．．神は神でも邪神だがな」

「そうですね．．．でも、あなたも神と人間の間に躍り出ってしまった聖遺物．．．怪物ではありませんか」

ハイドリヒの言葉に勇は溜息をつく。ミーナは勇を見る。すると、観念したのか左手の包帯を外し、袖をまくる。その陰から現れたのは紛れもないネウロイの肌だった。

「えっ．．．ユウ？なに、これ．．．」

「．．．まあ、そういうことだ。つまり俺もこいつと同類ってことだ」

ミーナは勇の黒く変色した肌と勇を見比べる。どうしても結びつかず顔と腕を視線



が行き来してしまう。それでも勇は気にしないようにハイドリヒに向き合う。

「俺は怪物としてお前の野望の残り香に抗おう」

「心優しい怪物に感謝を……精一杯抗ってください。私の目標はそう安くはありません」  
「最後に聞かせろ。お前が目標を変えたのはいつだ？」

勇の質問についてこれるのはもはやハイドリヒ以外に居なかった。ミーナも小野里もそのことは知りつつ、事の次第を見守っていた。

「……あなたの言葉を聞いた時です……あなたが、私に言ったでしょう……その後どうするのだ、と……」

勇は自分の質問を振り返る。初めてハイドリヒの計画を知ったのとき、確かに勇は質

問した。ハイドリヒは、世界を再構築した後、変革者として神になると言った。しかし、勇はその姿のハイドリヒに現実を与えてしまったのだった。その問いの答えに、ハイドリヒは自分自身で答えを出した。

「そうです．．．私は捨てられる運命、なのです．．．新世界が完成した後、変革者は必要ない．．．．．花畑に花が一輪増えても景色は変わらないように．．．何らかの主義が完成したならば．．．それは主義ではなくなってしまう．．．それでは私は神にはなれない．．．私は．．．不変の神になりたかった．．．」

「だから、変革の頂点で反対者からの抵抗で退場すれば、後の世でも神格化され、議論は永遠に残り続ける。お前の野望は悪であり続け、全人類に『悪とは何か』を突き付けたかったということか。お前らしいな．．．本当に」

勇はそう言うと、拳銃をハイドリヒに向ける。それを嬉しそうに光を失いつつあるハイドリヒは感じ取る。

「やはりあなたに殺されるのが一番心地が良い……」

「他の人間にこの役目は務まらんさ……地獄で会おう」

「はい………終末の後で……」

乾いた音がハイドリヒに沈み込む。硝煙の匂いが鼻につく中、ハイドリヒは息絶えた。勇は目を閉じ、敵であり、同じ光景を共有した同志に黙とうを捧げる。すると、小野里が勇の手を引く。

「急いでください！すぐにハイドリヒの部下が来ます！」

「ああ」

「ハイドリヒの部下は各地に原子爆弾を秘匿しています！その護衛をしている部隊を早く殲滅しなければ！」

小野里は独自に情報を集め、ハイドリヒの目標を知り得ていた。生存の再会を喜ぶ暇もなく、武器を準備する二人にミーナは立ち尽くすことしかできなかった。

「あ、あの・・・本当に行ってしまうの」

「そうだ。お前らと一緒にいると、俺まで倒されてしまいそうだから。だって、お前らの任務はこのカールスラントからネウロイを駆逐することなんだから」

「全て・・・あなたの計画通りだったというわけね」

ミーナは勇に一杯食わされた、そう表現するしかこのやりようのない怒りを鎮めるにはどうしようもなかった。

「お前までついてこようなんてするなよ。お前にはお前にしかできない仕事がある。それに、俺にはまた会える。お前らのように喧しくて賑やかな奴らがいたら、死んでい

たつて目を覚ましちまうからな」

気軽に軽口を叩く勇が嫌いだった。その軽口は決して軽口では済まないと知っているから。それでもミーナは黙つて勇を送り出すしかなかった。それが、ミーナにできる唯一の愛情だったからだ。

「それじゃあ、行つてくる！」

その言葉を残し、小野里と勇は基地の外へと姿を消す。風通りの良くなった部屋には、ミーナの姿もなくなっていた。代わりに、ハイドリヒの遺体の傍には紙切れが一枚と、ミーナの手記に一言が添えられていた。ハイドリヒの遺体の近くにある紙切れには、ハイドリヒの部下用に扶桑語でこのような言葉が書き残された。

『籠の中の翼は、今放たれた』

そして、ミーナの手記には次の言葉でこの日を締めくくられていた。

『君の明日は・・・』

## 不滅の翼 第一話

501は基地を転進させ、基地の兵を全員ベルリン周辺に移動していた。しかし、元501基地にはハイドリヒの部隊が集結していた。その中の一人にアドルノ・アイヒマン中佐の姿があった。

「長官は？」

「残念ながら、死亡が確認されたとのことですよ。これからいかがいたしましたでしょうか？」

アイヒマンは部下に無線機を持ってこさせると、全部隊に向かって連絡を行う。

「こちらアイヒマン中佐、全部隊に告ぐ。長官が赤松勇中佐に暗殺された。これから俺

が部隊の全指揮権を引き継ぐ。これは命令だ。我々の目的は何も変わらない。我々の目標は新世界を作ること。これは長官がいたころと何も変わらない。変わらないのだよ、諸君……であれば！我々の為すべきことはただ一つ！裏切者の赤松勇中佐という新世界の障害を排除することだ！全部隊、奴を追え！奴を殺せ！その先に新世界はある！」

アイヒマンは無線を置くと一斉に部下たちが動き出す。目を閉じ、アイヒマンもハイドリヒのしてきたことを思い出し、頭を回転させる。そして、ゆっくりと目を開くとハイドリヒが収められた車に向かい小さく呟くのだった。

「……忠誠を」



一方、501の基地を脱出した勇と小野里はベルギガの南方に位置し、カールスラント南部へと向かう途中だった。これはアイヒマンたちの追撃から逃れるとためというのと、501と彼らのとの距離を離すための措置だった。そしてなぜカールスラント南部に向かうかと言うと、こちらはまだネウロイの支配地域であり、簡単には追って来れない地理的理由からだった。

「すまない小野里少尉、妙に疲れた。強壯剤を貰えるか？」

「いえ、こちらこそ急がせてすみません。それより、その傷でここまでの逃避行を遂行できたことの方が信じられないです」

勇はベルリン奪還作戦の終了後すぐに脱出したため、未だに咲との戦闘で受けた傷が深々と残っていた。それを素早く治癒魔法で治療していく小野里を見て、勇は自分の疑問を素直に問いかける。

「小野里少尉、どうして俺を助ける気になったんだ？」

「・・・あなたに賭けてみたくなったからです」

徐々に治療により傷口が塞がれ、見る見るうちに癒されていく手際の良さに感心しながら小野里の賭けの話に耳を傾ける。

「あなたの記憶を覗き、特攻隊の人たちと触れ合う中で、私は気づいたんです。あれだけ憎かったあなたを他の特攻隊員は嬉々として私に話すのです。そして、あなたも彼らを決して見捨てようとしなかった。だから、きつとあなたは私のたった一人のかけがえのない兄さんにも涙を流してくれたのだと」

牟田口に騙されてしまいときつと小野里は勇を憎んだのだろう。大切な家族である藤野を失った悲しみの遠因の一人が目の前にいたのなら、きつと勇もいわれのない憎しみの感情を向けてしまうかもしれない。しかし、小野里はたくさんの人に出会う中で勇の本質に触れる機会を得たのだった。そして、勇はもう一つの疑問を投げかける。

「そうか．．．もう一つ。どうやって生き返ったんだ？」

「ああ、あれも大きな賭けだったんですがね、ミーナ中佐にお願いしてわざと捕まったんです。私の固有魔法は『部分治癒』でして、普通の治癒魔法も心得ていますが部分的な治療を得意としているんです。だから、ハイドリヒに撃たれた時もあらかじめ対策をしていました。まあ、頭を撃たれていたらそれまででしたけど」

呆れる危険な賭けに頭を抱えるも、ミーナの策略ぶりには敵わないと改めて感じた勇だった。それにしても小野里の治癒魔法に呆れながら、智子が勇の下に訪れ、事情を

知っていた理由も納得がいった。死んだと思わせた小野里が密かに復活し、扶桑などに極秘で連絡を取ったのだから、それが伺えた。

「大分危険な橋を渡ったな」

「いえ、死人ですから案外簡単に情報を得ることができました。それに、特攻隊の杉田大尉がくれた金平糖が瀕死状態の私にとって良いエネルギー補給になりましたし、ミーナ中佐が手配してくれた宮藤曹長の治癒魔法があつてこそです。まあ、宮藤曹長はなにもない土に向かって治癒魔法をかけさせられたのですから、さぞ不思議だったでしょうね」

その光景を想像するだけで笑えてきてしまった。そして、人の縁とは不思議なもので杉田のくれた金平糖のおかげで小野里が助かったのだと思うと運命すら感じられた。そして、小野里は話を続ける。

「扶桑と連絡を取った際、以前あなたが接触していた陸軍の穴吹大尉に連絡を取ることができました。こちらはとても好感触で、連絡を取ってすぐに駆け付けてくれました。もしかして、恋仲でしたか？」

あからさまに人をおちよくるような目線を向ける小野里に、勇は顔を赤らめながら顔を背ける。さすがは情報将校であり、かつ少女なのだど頭が痛くなった。勇は話題を変えなるべく咳ばらいする。

「ごほん……今後の方針だが、現在我々はベルギガの南東、アルデンヌの森にいる。この森は深く、木々の間隔が狭いからやつらの大きな戦車は通れないだろう」

小野里も地図を広げながら勇の計画に耳を傾ける。アルデンヌの森は湿地や起伏が

あり、深い森に包まれている。そしてなにより、と勇が付け加える。

「そこをぬけるとガリアとカールスラントの国境線付近に存在するマジノ線が俺たちの壁となってくれるはずだ」

「マジノ線ですか・・・」

マジノ線とは、ガリア共和国が建設した総工費、維持費含めて300億フランが投じられ、ロマーニャ方面まで伸びる史上最強の要塞線である。108の主要塞を15kmの間隔で配置、施設内には連絡通路がありそれらを電車が結び、厚さ350cmの強固な作りをした大要塞である。つまり、万が一追い付かれても、マジノ線に入ることができればやり過ぎる算段だった。

「ハイドリヒの部隊には機械化歩兵や降下猟兵部隊があつたはずですよ。先回りされていると言うことは？」

「まだカールスラント南部はネウロイの支配地域だから無闇に動くことは出来ないはずだ。それに小野里の情報では原子爆弾をどこかに秘匿している以上、そちらに防衛部隊を配置しなければいけない」

小野里の心配も尤もだったが、それ以上にハイドリヒの準備は予想以上に周到で、原子爆弾を少数ではあるが生産を成功させており、連合軍を壊滅させるためにどこかに配備しているとのことだった。その情報の一端を辛うじて入手したのだが小野里だった。

「そうですね。私が入手できた情報では、ベルリン奪還作戦のあとで主力を勇中佐の原子爆弾で殲滅した後、カールスラントのフランクフルトで閃光作戦の第二段階、『黒い雨』作戦が実行される予定でした」

「なるほど、そこらは確か506が作戦担当区域だったはずだ。本当に連合軍の総力を

一挙に壊滅させる腹だったんだな……」

勇自身をも作戦の一部として消滅させるはずだった作戦に戦慄し、今自分が生きている理由を心で噛みしめる。多くの人間が関わり、一方は死に、または助けてくれた。勇の双肩にはそのどちらもが重くのしかかっている。そして、そんな自分も体の一部がネウロイ化に侵食され、人類とのいらぬ軋轢を生んでいるこの現状を何とかしなければならぬと思っていた。しかし、その思案を巡らせる時間すらも勇にはなかった。

「静かにつ！……まさか!? もう来たのか?!」

勇が僅かな振動とエンジン音に気づいたのと同時だった。発砲煙が目に入る。その



瞬間、未だその事実には気づかない小野里に覆いかぶさる。轟音と衝撃、パラパラと降りかかる土煙から木々の合間を縫って大勢の戦車が勇たちに向かつてきて見えるのが見えた。まだ耳の奥で鐘が鳴っているが小野里を無理やり起き上がらせると、その場から一目散に駆けだす。

「勇中佐!?なぜこんなに早くにつ?!」

「くそっ!やつらの忠誠心を見誤った!やつら足の早い四号戦車できやがった!!」

以前に見た戦車大隊は、その強力な攻撃力と防御力から恐れられた六号戦車、通称『ティーガー重戦車』と機動力に優れ、傾斜装甲を取り入れた走攻守と優秀なパンター戦車だった。しかし、勇と言うハイドリヒ殺しの最大の障害を倒すために、アルデンヌの森を突っ切るための軽量な戦車を投入して来ていたのだった。

「やつらの鈍重な戦車なら、もし森を通ろうとしても途中で撃破できると思っていたんだがな……まさか俺のためにここまで外間を捨てるとは」

「悠長なこと言つてないで逃げますよ!!」

勇が言うように四号戦車は軽量で、重量も25トンしかない為一日あれば走破出来てしまう。勇が想像していた六号戦車などではその圧倒的な装甲から来る重量から足回りが利かず、この森で足踏みすると考えていただけに、この電撃的な進軍に冷や汗をかいていた。そして、ここに勇と小野里のアルデンヌの森撤退戦が開始されたのだった。

「こんな森じゃ大型の武器の取り回しは無理です！それにこんな機関銃では戦車の装甲は貫けません！」

「だから今は逃げに徹するんだ！」

勇の見立てではこの森に配備された戦車部隊はおよそ2個中隊であり、本命の一級戦力の存在が見えないことに不安を感じていた。勇は敵の作戦の意図を確認するため、小野里に敵の詳細を聞き出す。

「たしか敵の戦車大隊の指揮官はギャリン・オットマイヤーとか言ったな！どんな人物だ?!」

「オットマイヤー中佐は戦闘狂です！戦車突撃することに快感を覚える変態ですが優秀な戦術家です！一度命令を受けると例え一兵になろうと突撃を敢行する胆力を持ちます！」

嫌なことにハイドリヒの命令が有効な以上、オットマイヤーは必ず使命を全うするために最適な行動をすることが予想された。だが、勇はその性格から作戦を導き出す。

「よし！手は決まった！小野里ついてこい！」

「どうするんですか?!」

砲撃が苛烈を極める中、勇と小野里は当初の予定であるガリア国境付近のマジノ線に目標を定めていた。ここは506部隊のセダン基地があり、勇と以前親交を持つグリユンネらがいた基地があった。

「まさかセダンの部隊に協力を求めるんですか?! 彼女らは今でこそ各国との協調路線を取っていますが、その背後にはまだ勇中佐を取り込もうとする連中が蔓延っています! 危険では?!」

「小野里、人と人の縁と言うのは案外意外な所で繋がっているものだ! 彼女らには少し手伝ってもらうだけだ!」

勇の頭の中にはある人物が浮かび上がっていた。その人物とはマジノ線の指揮官であるモーリス・ガムラン陸軍上級大将である。彼は506部隊と深い関りを持ち、進歩的で比較的リベラルな考え方を持っているウィッチ擁護派の一人だった。マジノ線に就任する前はガリアのリヨンにガリア西方司令部の指揮官として着任しており、勇はこの人物の庇護下に入ろうと考えていた。

「人との繋がりにあるのは分かりますが、それでも危険すぎます! 今ここでハイドリヒ

の軍隊とガリア国境守備隊が戦闘状態に入ればこそ新たな戦争の始まりです！」

小野里の不安も実を射ていた。例えネウロイという共通の敵が存在し、共闘して戦っていたとしてもそれはまやかしの戦争であることをハイドリヒが良く知っていた。勇の行動はその潜在的な縮図に油を注ぐ行為と言えた。

「混乱こそ我々の味方だ！その混乱と言う時間さえあれば俺たちは逃げおおせる！俺たちがいなければオットマイヤーは即座に退くんだろう?!」

「ああもう本当に誰も彼も狂ってます！」

小野里が勇の推察する観察眼と世界の縮図の曖昧さに嫌気が差す。こうして忙しく

会話をしている中でも砲弾が行きかい、勇たちはシールドで防いでいた。まさに状況は危機的と言え、熟考する余地はなかった。

「しかし！こうも脚の早い戦車だと追い付かれて包囲される！少しは交戦するぞ！」

「分かりました！扶桑陸軍の歩兵操典を見せて差し上げますよ！」

「伝統の扶桑陸軍の白兵戦か？見物だな！」

小野里が勇の軽口に乗っているあたりを見るとまだ状況は悲観的ではない、危機的ではあるが。勇は振り返り銃を構える。その間に小野里は荷物から銃剣を取り出しそれを取り付ける。勇はその様を見てまさかと思う。

「まさか戦車に刃物で立ち向かうつもりじゃあるまいな？」

「そのまさかですよ。貝を開くのにはこれが一番です！」

「まったく扶桑陸軍のドクトリンの改善を願わんばかりだな……いけつ！援護する！」

白襷を付けた小野里が木の陰から走り出す。それを援護する勇は、敵戦車に向かつて目隠しをするように戦車の手前を盛大に爆撃する。土煙が辺りを包んだ時、戦車の目の前には小野里が突っ込んできていた。戦車兵はその異様な光景に一瞬怯んでしまう。その一瞬という時間が命取りだった。

「はあっ！」



魔法力が込められた銃剣は四号戦車に突き立てられ穴を穿たれる。その隙間から中の戦車兵が怯えた顔を覗かせ、小野里は不気味な笑顔でそれに応える。

「御機嫌よう！戦車兵の包焼きはいかがですか？」

そう言うと小野里は弾丸を発射する。見る見るうちに戦車が燃え上がり、戦車が内側から火を噴く。後退する小野里を援護する勇は、次の戦車へ狙いを定め狙撃を開始する。小窓や車長の覗き窓に弾丸が打ち込まれ、敵は容易に外を把握できなくなっていた。また、森と言う地形が二人に有利に働き、素早く動く勇たちに狙いが定められずにいた。

「小野里！徹甲弾の予備はあるか?!」

「対空機銃用の弾丸で良ければ！」

「それでもいい！そろそろ敵も数で押してくるはずだ！後退するぞ！」

勇はじりじりと後退しつつ、敵の様子を窺う。すると、勇が予想した通り敵が三方向に別れ左右を取り囲む鶴翼の陣形を形成し始めた。これでは攻撃力を分散され効果的な迎撃ができないと判断した勇は後退を告げる。しかし、勇たちを襲うのは戦車ではなく砲弾と言う科学力だった。

「敵一斉に発砲っ！これは?!」

「くそっ！白燐弾だ！」

白燐弾とは、砲弾内部に主成分をリンとした燃焼剤が込められたもので、徹甲弾とは違いその用途は高温で消すことのできない火の粉で敵を間接的に殺す殺戮兵器である。これはネウロイに対して一部有効な兵器として利用されていたが、人道的観点から排除される予定のいわば禁止兵器であつた。

「小野里気を付けろ！四方で飛び散つた燐が付着したら大やけどだ！木を盾にして身を守れ！」

「敵さん確かに戦闘のプロですね。敵が人間と言うだけでここまで効果的な戦術を持ち出してくるなんて……」

オットマイヤーとその兵士たちのよく訓練された戦術に勇たちは臍を噛む。そして、戦況を確認するために辺りを確認すると遂にアルデンヌの森の出口を見つけるに至る。

「仕方ない、森を抜けよう！」

「平野部では戦車の格好の的です！」

「それが目的だっ！ついてこい！」

勇が強引に小野里を連れ、平野部が広がっていた。遠くにマジノ線の先端が見え、勇はそこに向かって走り出す。それに呼応して戦車部隊もアルデンヌの森から姿を現す。勇たちを追い回す様に迫りくる戦車部隊は恐怖の対象そのものだった。

「勇中佐！このままでは鴨撃ちです！」

「耐えるんだ！ここで騒げばきつと協力が取り付けられる！だからそれまで耐えるんだ！」

砲撃が苛烈になる中、勇と小野里は走り続ける。勇の渾身の攻撃は大爆発を起こし、戦車と砲撃の土煙はもうもうと立ち込め、それはマジノ線でも確認できるほどだった。

「ガムラン大将！報告します！現在マジノ線北端で正体不明の部隊が戦闘状態の様様！大きな爆発も確認できます！」

「なんだと!?ネウロイが攻めて来たとしてもいいのか!?よしっ！マジノ線の力を見せてやるわい！」

マジノ線司令官のモーリス・ガムラン上級大将は報告を聞き、即座にマジノ線全部隊に臨戦態勢の警報を発令した。一方、勇は小野里とともに走り続けていた。

「勇中佐！先ほどから威嚇射撃ばかりで敵を倒してはいないように見えるのですが?!」

「これも俺のエゴだ！なるべく人は殺したくない！俺たちはあくまで人間であり、人間が人間を殺し合うような事態は極力避けたいと考える！」

「随分と樂觀的な考えで気持ち悪いです！今まさに殺されかけている現状、そんなお花畑な考えは捨ててください！」

小野里の指摘に勇も心が揺れかけるが、勇の心は決まっている。最小限の犠牲で、人の命を全て刈り取ることのできる實力があるうと、勇はその實力を行使しようとはしなかった。そんな考えに憤る小野里は、勇にある事実を伝える。

「勇中佐！進路北西から新たな集団を視認！もしかしてあれは・・・」

小野里の視界の先には黒い固まりが群れを成して勇たちに接近していた。その集団は音楽を奏でながら死の雰囲気を感じそうとしていた。その先鋒にはある人物が大きな戦車の上に仁王立ちになりマイク片手に声を張り上げていた。

「世界に破滅を齎す悪鬼羅刹め！我ら戦車大隊、オットマイヤー戦車団に轢き殺される！全隊。パンツァーカイルを取れ！ワーグナー大尉、音楽を大音量で鳴らせ！」  
「はっ！」

オットマイヤーの主力部隊がなんと勇の進行方向から現れたことに目を奪われる。

なんとオットマイヤーは別動隊として軽量な戦車部隊をアルデンヌに配置させ、主力級の戦車部隊はカールスラント西方方面から全速力で南下させていたのだった。そして、部下のワグナー大尉に指示して鳴らした音楽は、カールスラント軍戦車部隊で歌われる『パンツァーリート』だった。軽快でかつ重厚な男たちの歌声は、勇と小野里の進行方向を邪魔するように包み込む。

「小野里！俺は奴らの攻撃を防ぐ！お前は追手を無力化してくれ！」

「まだそんな悠長な・・・ああもう！分かりました！背中は預けます！」

小野里のやけくそな態度に勇は苦笑しつつ、オットマイヤーの攻撃に備える。すると、オットマイヤーの乗る戦車から88mm砲が射出される。アハトアハトは、戦車の中では最大級の攻撃力と貫徹力を持ち、連合軍の中では最強威力の攻撃と言ってよかつた。その攻撃力を勇は全力のシールドで防ぐ。手にかかる圧力と貫徹力は想像以上で



あり、勇は思わず声が漏れる。それを見てオットマイヤーは口角を上げる。

「フハハハハ！あれを防ぐか化け物め！それならば全戦車で一斉攻撃だ！次弾装填急げえ!!」

勇は大きく乱れた呼吸を整えながら小野里に事態の危険性を訴える。

「小野里、こいつはちとまずいな」

「まずいじゃありません！どうしますか?!今からでも506に泣きつきますか?!」

「間に合わない上に今応援を頼むと彼女らに余計な争いに巻き込みかねん。その案は廃案だ」

「じゃあどうすれば!」

勇は小野里の困窮する声に思考を巡らせる。そして、砲撃が勇たちに狙いをつけ始めた頃、遂に決断を下す。一人オットマイヤーに向き直ると銃を構え魔法力を込める。それを見つめる三人は一斉に疑問を口にする。その三人は小野里、敵対者のオットマイヤー、そして目の前でなぜか繰り広げられる戦闘を見せつけられ困惑するガムラン大將だった。

「勇中佐、どうする気です?!」

「とち狂ったか! 雑多な小火器ではこのティーガー戦車の装甲は貫けんぞ!」

「一体どうなっておるのだ! どうして戦車部隊と少年が戦闘しておる?! だれか説明せい!!」

三人の主張は一樣に違つたが、その視線の先には勇がいたことに変わりはない。そして、勇はその咆哮を轟かせる。それは一発の銃声だった。

「みんなすまない……」

勇の放つた銃弾は、オットマイヤーの戦車部隊を通りぬけ、遙か彼方の土地に着弾し爆炎を上げていた。それを見てオットマイヤーは氣をよくして笑い声を高鳴らせる。

「ガハハハッ！臆したか赤松勇中佐めっ！どこを狙っている！威力こそ凄まじいが、今

度は我々の番だ！ワーグナー大尉、攻撃を始める……」

オットマイヤーの声は、次の瞬間の爆撃音によつてかき消される。その爆音はどの砲爆撃よりも大きく、激しかった。地面が揺れ、着弾した穴の大きさがその効果を物語っていた。それを見た全ての人物が口を開けて驚愕した。特に、マジノ線の中にあるガムラン大将の一言は後の戦史に残る一言だった。

「マジノ要塞、これより敵と交戦す」

全員の目線の先には一門の砲を付けた大型のネウロイが狙いを定めていた。それを見たオットマイヤーはある兵器を思い出していた。

「まさか・・・カール自走臼砲か！」

カール自走臼砲とは、その口径600mmの大口径自走臼砲であり、対マジノ要塞ともいえる威力を発揮する兵器だった。かつてカールスラントが大型ネウロイに対して開発した経緯があり、その強大な巨体と重量の取り回しに開発は断念された兵器でもあった。それが今しがた目の前に出現した事実には誰もが唖然としたのは言うまでもなかった。ネウロイを呼び出した張本人である勇ですら苦笑いを堪えられないほどだった。

「まさかあんな大物が出てくるなんて・・・さすがは俺だな」

「もう勇中佐のことが嫌いになりそうです・・・」

小野里の陰口もそこに、カール自走臼砲型ネウロイとその取り巻きの陸上戦力はマジノ線に向かって進軍を開始していた。それに呼応してマジノ要塞全線で砲門が開かれ、オットマイヤー戦車大隊は混乱に陥った。

「オットマイヤー大隊長!! 敵が我々の後方に展開しています! どうかご指示を!!」

「・・・はっ! 我々の目標は赤松勇中佐であってネウロイではないぞ!」

「しかし! このままでは赤松勇中佐を仕留める前に我々が全滅です! どうかご再考を!!」

部下のワグナー大尉がオットマイヤーを諫めようと必死になるが、オットマイヤー

は小野里の情報通り戦闘狂だった。

「よし、決めたぞ！我々の部隊を一時結集！結集の後部隊を二分する！」

「はっ！目標はネウロイでしょうか?！」

「いや、一部隊を副長のヴィットマン少佐に一任し、我々は全力を持って赤松勇中佐を倒す！」

オットマイヤーは部隊をネウロイ迎撃に当て、自分らは勇を追うことを決定した。その顔はまさに音楽に乗った指揮者のようであり、一層パンツァーリートを響かせていた。そして、改めて狙いを勇に定めると部隊に号令をかける。

「パンツァーフォー!!!」

勇と小野里は迫りくるネウロイの軍団に隠れてこの場を後にしようとしていた。自分の行いの結果、新たな戦線を形成してしまったことに心を痛めるも、ここは人類の存亡をかけた自分の任務を優先することにしたのだ。しかし、勇たちに執拗に固執するオットマイヤーの88mm砲が勇のシールドに着弾する。黒い肌が顔になった勇を目撃するマジノ線のガムラン大將は、その光景にまたも衝撃を受けて遂に壊れてしま

「み、見よ……あやつが、あやつが敵をおびき寄せたのだ……全部隊、照準の一部を奴に、いや、あのネウロイに!!」



ガムランが見た光景は、勇に着弾した戦車砲を素手で受け止める勇の姿だった。その左手を突き出し、黒々と幾何学模様を晒す勇は、混乱したガムランにはネウロイにしか見えなかった。その光景は、後に戦史の一部としてこう名付けられる、『マジノ要塞攻城戦』と。ここに勇を囲う三方向の敵勢力の攻防が始まるうとしていた。

「勇中佐！まずいです！なにやらそこから敵意が向けられていますー！」

「・・・さすがにやり過ぎたか。小野里、悪いが頼まれてくれるか？」

「もう諦めました。あなたの言う通りにしないとどの道お陀仏です。早く行ってくださいー！」

「悪いな・・・」

勇は小野里の頭を撫でてやると、意を決して銃を構える。その銃口はネウロイだけを向いていた。そして、再度魔法力を込めネウロイを爆撃する。

「小野里、お前は防御だけに専念しろ。俺はここで固定砲台となつて敵を跳ね返す」  
「まったく嫌な作戦です。あなたでなければ真つ先に逃げ出していますよ」

小野里は普段は情報将校であり、その実は遊撃戦を主に得意としているため、こういった本物の戦闘は初めてだった。しかし、規格外な勇という存在が小野里の思考を麻痺させていた。銃弾や砲弾が飛び交う中、勇は他の一切の攻撃を無視してネウロイだけを迎撃していた。そのことに憤る人物がいることも知らずに。

「あの野郎！俺たちを無視してネウロイを攻撃か！舐められたものだな！全車奴に向かつて攻撃開始っ！カール自走臼砲型ネウロイの砲撃に注意せよ！」

そして、マジノ線でも同様に混乱が見られていた。司令官のガムランにも報告が届けられるが、刻一刻と動く電撃戦に思考はまとまらなかった。

「報告しますっ！現在自走砲型ネウロイの攻撃により第8砲塔群が壊滅！」

「こちらー！要塞支部、敵と思われる人型の物体に動きアリ！ネウロイに向かって攻撃をしています！攻撃を続行してもよろしいですか?!」

「…分らん、分らん分らん!!一体全体どうなっているのだ！我々は一体何と戦っているのだ！あの戦車部隊は?!あの人型ネウロイは！あの巨大砲塔のようなネウロイはなんなのだ!?!とにかく正体不明の戦車部隊が人型のネウロイに攻撃をしている以上、我々も加勢する！攻撃を開始せよ！」

ガムランの命令により、マジノ線の一部である第11要塞はその38cm戦艦主砲を流用した砲を勇に向ける。その砲を見た小野里は緊張と共に勇に伝える。

「マジノ要塞砲門の一部がこちらに指向中！あれは戦艦砲です！やばいです!!」  
「分かった、そちらも対処する」

勇は限界まで銃をマジノ要塞に向けないように注意した。小野里がびくびくする中、近くにオットマイヤーの戦車砲も着弾し、カール自走臼砲型ネウロイの大口径砲弾も付近に着弾する烈風雷下の中、勇は神経を集中させる。そして、遂にマジノ要塞の38cm砲弾が勇と小野里に向けて発射された。

「ふんっ！」

勇は発射された瞬間、小野里を地面に伏せさせ、自分も姿勢を低くしてシールドを少し傾けて展開する。すると、戦艦の主砲弾は浅い角度で勇のシールドを滑る。そして、その主砲弾はそのままカール自走臼砲型ネウロイの下へと飛び、着弾する。

「まさか、戦艦の砲弾を跳ね返すだなんて……」

「小野里！……はまずい！移動するぞ！」

勇が目を丸くする小野里の手を引っ張った瞬間、意識が暗転する。カール自走臼砲型ネウロイの砲弾が付近に着弾したのだった。耳鳴りが自分の感覚を乱す中、勇は小野里

の姿を探す。

「小野里！小野里大丈夫か?!」

小野里の姿を探すと、小野里は爆風で吹き飛ばされ土の中に身体の半分が埋もれている状態で気を失っていた。戦車や砲爆撃が近づく中、勇は小野里の頬を叩いて起こそうと試みる。しかし、小野里の意識は一向に戻らず、その心音も聞こえてこなかった。

「くそっ！起きろ！寝ちゃだめだ！」

心肺停止の深刻な状態の中、勇は脳裏に浮かんだ死と言う文字がちらつく。その言葉を振り切るため、勇は賭けに出る。自分の魔法力を練り上げ、その循環速度を限界まで引き上げる。勇の魔法力は急速な流れにより電流が発生する。その電流が一定値以上溜まった所で、小野里の胸に流し込む。すると、小野里の体はビクンと跳ね上がる。その瞬間、小野里は勢いよくせき込み、蘇生に成功する。勇は胸を撫で下ろし、小野里に少しの休養を伝える。

「小野里、お前は少しここで休んでいろ。ここからは俺が何とかしてみる」

「ゲホッ！何とかって・・・？」

「なんとかだ」

そう言うとき、勇は一人爆音の中立ち上がる。未だ砲火が絶えない戦場で、勇は立ち尽くす。機銃や砲弾が勇を掠める中、勇はネウロイの大群に向かって走り出す。誰も彼もを

一身に惹きつけて走り出す姿は、敵味方すら魅了させるような光景だった。ただ、猛烈な爆音だけが木霊する戦場でただ一人の雄たけびが一際目立っていた。



## 不滅の翼 第二話

勇はこれ以上小野里に被害が及ばないよう、またこの三すくみの状態から脱するためカール自走臼砲型ネウロイに向かつて走り出していった。接近することにより、自走臼砲という特性上、俯角が足りず攻撃が当たりにくいと考えるの行動だった。しかし、背後からは戦車砲と要塞砲が絶え間なく勇の付近を耕し、ネウロイもまた勇を攻撃していた。それでも勇はネウロイだけを指して走り続けた。それを見たオットマイヤー戦車団の副長であり、ネウロイとの戦鬪を引き受けていたヴィットマン少佐が興奮気味に声を上げる。

「あれが噂の長官殺しか！ネウロイと我々相手にあの大立ち回り！面白い・・・面白いぞ！」

ヴィットマンの興奮度にいつもの戦車兵たちは無表情ながらも、その意見に同意する。ヴィットマンはオットマイヤー戦車団の副長にして、戦車兵の中でも非常に優れた指揮官でもあった。そんな彼が手放しに褒め称える勇の存在は、同僚の彼らからしても異様でありかつ賞賛に値した。既に3匹のネウロイを撃破していたヴィットマンだったが、勇は既に5匹のネウロイを撃破していた。そんな勇にヴィットマン一同はなにか戦友のような感情を抱いていた。

「よし決めたぞ！我々は独断専行をとる！」

「また副長の無茶が始まった……」

ヴィットマンの衝撃発言は今に始まったことではなく、同僚の兵士たちにとってヴィットマンが今何を考えているかはなんとなく察せられていた。

「これより我々は赤松勇中佐を援護する！」

「オットマイヤー大隊長に叱られますよ」

「大隊長なら分かってくれるさ！行くぞ！」

「はいはい分かりましたよ」

ヴィットマンが勇に手を貸すことを決めた時、勇は新たな敵を屠ったところだった。殻になった弾倉を手慣れた手付きで取り換えると、走ったまま魔法力を込めた弾丸をネウロイに叩きこむ。そろそろネウロイに白兵戦を挑める距離になったが、後方からの攻撃は勇を狙い続けていた。

「はあ、はあ・・・敵の中に潜り込めば同士討ちができると思ったんだが・・・思ったよりキツイ!!」

かなりの距離を走つたが、両方向からの攻撃に勇の体力と精神力はかなり消耗させられていた。何発かは至近弾となり、破片などが至る所に裂傷を作っていた。病み上がり  
の勇からすればここらで休息を取るなりして、今後の行動に備えるつもりだっただけに  
息も上がってしまっていた。目の前のネウロイですら厄介なのに、後方からも無視でき  
ない攻撃に晒されている事実は勇に大きく伸し掛かっていた。

「くそっ！なんとか戦線に穴ができないものか・・・ん？あれは？」

勇が見た目線の先には突如としてネウロイの進行が遅れている部分があつた。その  
ネウロイは勇に目線が行つておらず、誰かが意図的に勇を支援しているような攻撃だつ  
た。勇がその部隊に目をやると、戦車の一部隊に中央で指揮官らしき人物がライトを

持つて勇に発光信号を送つてきていた。

『ワレニツツケ テキヲタオセ』

この言葉を受け取った勇は玉粒ほどの滴る汗を拭うと密かに笑った。誰も彼も勇の支援者などいないと思つた戦場に、まだ志を見失わない人間がいたことが嬉しかった。勇はもう一度地面を強く蹴ると、その戦線に向けて攻撃を繰り出す。その攻撃はネウロイの不意を突いた攻撃となり戦線の一部があつという間に崩壊する。それを見たヴィットマンは嬉しそうに部下に報告するのだった。

「見たか今の攻撃！一撃でネウロイ3体を貫いたぞ！」

「分かりましたからあまり身体を外に出さないでください！」

「分かっているが目が離せんのだ！彼には魅力がある！さあこれからどうしてくれるのだ  
！」

ヴィットマンの興奮が冷めやらぬ中、勇とヴィットマンの共闘を目撃したマジノ要塞の指揮官であるガムラン大將はさらに頭を抱えていた。

「今度は戦車部隊と共闘だ?!敵ではなかったのか?!ネウロイはここを攻略しに来たの  
ではなかったのか?!」

「司令！例の戦車部隊との通信が繋がりました！」

「おう！して、どこの部隊なのだ?!」

「それが、連合軍の特殊作戦師団の一団とのことで協力を要請して来ています！」

混乱を極める中、齎された情報の有難みに感謝するガムランは、急いで今後の指示に頭脳を活用する。優秀な頭脳は的確な判断を下すために、部下からひったくるようにして珈琲を流し込む。その苦みと芳醇な香りが思考を明瞭にさせる。

「……我々の敵はネウロイだ。今危機にある最大の敵は、あの自走臼砲型ネウロイだと判断する。よって、我の全力をやつに向けるべきだ」

「では、あの人型ネウロイは？」

「敵の敵は味方……やもしれん。今は歴史の判断を待つとしよう……私が、この戦いの英雄となるか、愚者となるかのな」

腹の決まったガムランの指示は速やかに実行された。全ての砲門はネウロイに向け

られ、勇への攻撃はなくなった。これにより勇の行動は一層洗練され、カール自走臼砲型ネウロイへの突破口を見つけるに至る。

「なるほど……やつの防御力は仲間のネウロイがカバーしているというわけか。なら！」

勇はカール自走臼砲型ネウロイの弱点を見つけほくそ笑む。勇の見た光景は、カール自走臼砲型ネウロイの脚部だった。大きな砲を支えるために肥大化した頭部を支えるのには些か不釣り合いの下部は、細く、脆弱だった。その不足を補うべく、周囲には強力な攻撃力を持つネウロイを待らせていた。勇はヴィットマンが搭乗する戦車に目線を送ると、了承の手信号が送られてくる。それを見て勇は走り出す。



「この攻撃はどうだ！」

勇の攻撃はカール自走臼砲型ネウロイの取り巻きを一斉に惹きつける。勇に攻撃が集中する頃、こちらにもまた一斉に攻勢に転じる部隊があった。もちろんヴィットマンである。

「この機会を生かせ！パンツァーフォー!!!」

ヴィットマンの号令で一斉に列をなして突撃する戦車は壮烈だった。よく訓練の行き届いた戦車兵は確実にカール自走臼砲型ネウロイに攻撃が集中していた。しかし、それでも分厚い装甲に覆われた頭部はびくともしなかつた。その上、ヴィットマンたちの

襲撃に気づいた取り巻きのネウロイが、今度はヴィットマンらに向けて砲を指向させ始めていた。

「やらせるか！」

勇がヴィットマンらを守るため援護射撃を行う。有機的に連携の取れた勇とヴィットマンらの攻撃はカール自走臼砲型ネウロイ本人にも看過できない事態だった。悲鳴のような奇声を上げたかと思うと、なんと取り巻きのネウロイに自分の脚部を攻撃させ始めたのだった。

「なにをしているんだ・・・まさか!？」

勇の予想はあまりにもネウロイらしいものだった。なんと、自分の脚部を破壊させたことにより前傾姿勢となったカール自走臼砲型ネウロイは、その俯角を最大限まで下げ、周りの仲間ごと吹き飛ばす算段だった。それに気づいた勇は急いでヴィットマンの乗る戦車に走った。

「な、なんだなんだっ!？」

「すまないが少し貸してくれ！」

口早に了承も足らずにヴィットマンの隣に乗り込む。中の戦車兵も目を丸くする中、当然のように指示を出す。

「砲を右に15度、仰角をあと3度上げてくれ！」

「は、はい！」

「何をしようと言うんだ？我々の砲撃力じゃあの巨体は貫けんぞ！」

「だから俺が撃つんだ！」

勇は砲塔が回るのを確認し、ネウロイからの攻撃をシールドで防ぐ。目の前で防がれる攻撃にヴィットマンも汗を流しつつ、勇の行動を信じて待つ。勇は自分の魔法力をティーガー戦車に流し込む。その88m砲では普通の威力でも、勇の究極まで洗練された魔法力をもってすればその威力は未知数だった。しかし、勇自身今日一日に使用した魔法力が限界値であり、これが最後の一撃であることが分かった上での行動だった。

「照準よしっ！」

「かませっ！赤松中佐！」

ヴィットマンの声で勇は引き金を引く。その瞬間、今までに体感したことのない砲撃の反動にヴィットマンを含め全員が耳や目を覆う。おおよそ人知を超えた威力に開いた口が塞がらないヴィットマンを他所に、勇はネウロイとの戦闘の終了を宣言する。

「状況終了・・・」

外では未だにキノコ雲がカール自走白砲型ネウロイの残骸を燃やしていた。それに

伴い取り巻きのネウロイも光の屑となり消滅していく。そして、勇もまた全身の力が抜けて椅子にもたれ掛かる。外の光景からようやくやく現実に目を向けることができた。ヴィットマンがそんな勇の肩に手をかける。

「貴官と戦闘を共にできたことを誇りに思う」

「でも、君らと俺は敵同士だ。これからどうする？まだ俺と戦うかい？」

疲労感でいっぱいの勇の言葉にヴィットマンは笑って言葉を返す。

「いや、次の機会まで取っておこうと思う。君は我が戦車が必ず討ち取らせてもらいたい」

「ふっ、首を洗って待つていろということか。君のような清々しい軍人が多ければいいのだがな」

勇はヴィットマンと握手すると戦車の外に出る。極度の疲れから来る震えに耐えながら地面に足を下ろす。そして、残してきた小野里の下へと歩を進めるのだった。そして、ちょうどその頃別部隊として行動していたオットマイヤーがヴィットマンの下へ到着した。オットマイヤーは行く手を阻むネウロイにより、勇への攻撃がおろそかになっていたため到着が遅くなってしまい、ヴィットマンらの行動に酷く憤慨していた。

「ヴィットマン少佐！あれは一体どういうことだ?!説明しろ！」

「はっ！大隊長の指令通り、ネウロイを迎撃しておりました！」

オットマイヤーは部下のふてぶてしい態度にたまげながら、優秀な副長の説明を詳しく聞くことにした。

「詳しく頼む」

「はいっ！我々はネウロイと交戦中、目標の赤松勇中佐を発見しました。しかし、彼は無意識に我々に接近し、我々は戦術的観点から彼の助力をしているように見えただけです。よって、我々が彼に協力したのではなく、彼が我々に協力した、と言うのが事実であります！」

ヴィットマンは汗一つかかずに、当然のように言い放つたためオットマイヤーは笑いをこらえて話を聞いていた。



「なるほど面白い……だが、最後の戦闘は見過ごせないな。赤松中佐が貴官の戦車に乗った所はどう説明する？」

「それは私が抗議したい点であります」

「抗議？ 私にかね？」

「はい！我々への指示はあくまでネウロイの迎撃であり、赤松中佐の攻撃は指示の範疇ではありません。なのに彼は我々の戦車を『乗っ取り』、我々の指揮系統に重大なる混乱と障害を齎しました！よってこれらの責は私ではなく、大隊長にあると思考します！」

自分への命令は忠実に果たしと、むしろ抗議してくる姿勢にオットマイヤーは遂に笑いを堪えきれなくなった。ヴィットマンに目線をやると、ヴィットマンも自分の考えが分かったのかほくそ笑んでいた。

「貴官の痛烈な意見表明は確かに受け取った。これらは私の責任であると判断する。まったく忠誠心の強い部下は厄介なものだな！」

「はい、それが我らの誇りでもありますから」

「貴官がそれほど言うのだ。彼との戦いはさぞかし愉快なのだろうな？」

「はい、それは私が保証致します」

「お墨付きというわけか……フハハハハハ！面白い！奴とはまた会える。引き上げるぞ！」

オットマイヤーの言葉により、彼の戦車大隊は一時撤退を開始する。そして、時を同じくしてマジノ要塞の中では戦闘の終了に心を撫で下ろすガムランの姿があった。

「やっと終わったのか……あの人型のネウロイと思しき青年は？」

「現在、砲撃跡にて人命救助に当たっているとのことですよ」

「奴は一体何者だと言うのだ……」

「まだ我が要塞の損害は軽微です。今なら奴を攻撃できます。やりますか?!」

部下の鼻息の荒さを感じつつ、ガムランは恐れていた。先ほどの戦闘を見た者なら理解できたのだろうが、勇と言う存在の強さは尋常ではなかった。三方向からの攻撃にも関わらず、目標に固執し、このマジノ要塞の攻撃を無視するほどの存在が見た目青年である人類に居てはならないと思っただからだ。しかしながら、このマジノ線は然程戦闘経験を積まずに隅で埃を被っていた金食い虫と呼ばれ蔑まれていた。そんな要塞の力を内外に見せつけることのできる最良のタイミングでもあった。ガムランの内心は大きく揺れていた。その時、ガムランの脳裏には勇の展開したシールドが過っていた。

「攻撃は一時中断だ！付近のウィッチ隊に連絡を取れ！506のセダンには緊急要請！不測の事態に備え支援を要請するのだ！」

「了解しました!!」

動き出す部下を尻目にガムランは自分自身の判断の優柔不断さに苛まれていた。確かに勇の左腕はネウロイの模様があり、人類には持て余す力が備わっていた。それにもかかわらずウィッチの力という一筋の希望が拭えなかった。だから同じウィッチの力に頼ったわけだが、ガムラン自身このマジノ線をもってしても勇を倒せる未来を描くことは出来なかった。

「私も老兵になったということか……去り行く老兵はただ消え行くのみだな」

電撃戦と言う新たな戦法に順応できず、勇と言う存在に勝てないという事実を受け入れてしまったガムランは、自分自身の軍歴に自ら幕を引くことを決意したと後年語る。それを表す様に、この報告を聞いたとある三つの部隊から返信があった。一つは支援に駆けつける506部隊である。

『彼は我々の戦友であり、貴族位を持つ人間である。彼の名は赤松勇。攻撃の必要なし』

もう一つの部隊は、かつて勇が所属していた501部隊からのものだった。必死に勇の情報の情報を収集しており、この報告に食い気味で連絡を寄こしてきた。内容はおよそ506と同じでありながら、情に訴える内容の返信はガムランの心に響いたと言う。そして、最後の返信は連合軍特殊作戦局と名乗る部隊からだった。返信の内容はこれらの部隊とは正反対のものであった。

『今すぐ敵を捕縛せよ。その敵は人類を破滅に導く存在である。生死を問わず断固たる攻撃を加えよ。今後さらなる情報を求む』

敵という単語にガムランの胸はざわめくが、先ほどまでの戦闘の光景が目には焼き付いていた。最終的に判断を下すのは自分自身であるが、どちらの意見も信用に足る発信元であるだけに、矛盾のある指示内容にさらに混迷を極めるガムランだった。そこでガムランは驚くべき考えに行きつく。

「・・・奴に会いに行こう」

「司令官！非常に危険です！司令官自ら行かずとも！」

「いや、私の目で真実を見なければならん！何が本当で何が起こっているのか！」

ガムランの言葉に部下もやむなく同意する。護衛の兵士を連れて行くことで了承し、ガムランは要塞を出る。外では覚束ない足元で、ゆつくりと小野里を運ぶ勇の姿があった。勇もガムランたちに気づいたのか、一度立ち止まる。勇の疲労感のあるが険しい表情を見ながら、視線を勇の左腕に移す。そこには紛れもなくネウロイの模様が浮かんでいた。ガムランは乾く喉を生睡でなんとか潤し言葉を発する。

「私はこのガリア共和国マジノ線の司令官のガムラン上級大将である。貴官は・・・どつちだ!?!」

ガムラン自身も拳銃を勇に向けて解答を待つ。震えそうな身体を何とか抑えつける。背後の部下もこの緊張感が伝わったのか殺気立っていることがわかるほどだった。そして、その殺気を向けられている本人は、その殺気にも動じず、眠る少女を起こさないように静かな声で返すのだった。

「味方……だと信じています」

短い返答だった。ただ、その含意は広くガムランの意図に沿うものではなかった。しかし、ガムランは勇の目を真つすぐ見つめる。その瞳は酷く疲れていたが、どこか温かみのある瞳だった。見た目成人もしていなそうな少年が醸し出せる雰囲気ではなかったが、ガムランは全ての質問の意図に対して結論を出す。



「二度とここへは来るな．．．次来た時は敵だと見做す」

「．．．了解いたしました」

そう言うとき勇は小野里を抱えて歩き始める。ある程度距離が離れたことでようやくその場に緊張の糸が緩まる。後ろの兵士のため息が聞こえるが、ガムランの心の鼓動は未だに強く鳴り続けていた。普段は汗一つかかずに指示することのできる猛将と謳われたガムランだったが、人生初めて本能的に恐怖を覚えたのだった。

「あれは敵ではないが．．．将来的な敵となり得るかもしれん。私の行いはまたも間違えたのかもしれない」

そう呟く声はマジノ要塞の重厚さがかき消してくれたことに感謝した。一方、勇はようやく得た平穏な時間に小野里の介抱していた。確認できただけでも小野里の体には骨折が2か所、裂傷が7か所と重症だった。しかし、自分で治癒魔法をかけているのか大丈夫だと弱々しい声で呟くばかりだった。

「私は大丈夫ですから・・・勇中佐は次の目標まで休んでいてください」

「バカ野郎、お前にはこれからも頑張ってもらわないといけないんだ。しっかり看病されるんだな」

「・・・分かりました。でも、また無茶をさせてしまいましたね。すみません」

小野里の目線の先には勇の左腕があり、その黒い変色域は前に見た時よりも侵食しており、今は肩まで完全に侵食されていた。どのような弊害があるのか分からないが、小

野里の直感では勇の心や体に大きな変化が現れるのではないかと言う漠然とした不安が募るばかりだった。

「気になるよな、こんな腕。そんなに心配はいらないぞ。特に悪さはしていないからな」  
「そうですか。それならいいのですが、やはりその腕を見た人は今回のように誤解します。どうにかして治さないと……いけません……よね」

小野里はそう言うのと重い瞼に押されて眠ってしまった。勇はそんな小野里を見て自分も休むことにする。小野里の言う通り、変色域が拡大していることは勇にとつても喫緊の課題でもあった。それは周りの人間に余計な誤解を与えてしまうことを防ぐこともあるが、なにより最近になって自分の魔法力の体系が変化しているような感覚があったからだ。明らかに威力のおかしい攻撃が放てたり、思考が混濁することが稀にあった。完全にネウロイ化による副反応だと思われ、これ以上の浸食は精神の汚染にも繋が

るため何とかしたかった。勇は自分の左腕を眺めながら小さく呟いた。

「俺は一体何なのだろうな……」

一方、オットマイヤーからの報告で勇を取り逃がしたことを聞いたアイヒマンは憤りを隠せなかった。机を強く叩くと置いてあつた珈琲カップが倒れてしまったほどだった。

「あの戦闘バカ！マジノ要塞の協力もあつたと言うのに何をしているんだ！……ふう、落ち着け……オーデンドルフはいるか」

「はい、アイヒマン局長代理どうかされましたか？」

「オットマイヤーのバカは役に立たん。フランクフルトの原爆の護衛部隊を増強しろ」  
「現在、アインツ・シユベルマン中佐の歩兵連隊の内2個大隊を張り付けていますが足りませんか？」

オーデンドルフの進言にアイヒマンは頭を抱える。部下のオーデンドルフは親衛隊内の経済管理責任者であり、その情報収集能力や経済管理には秀でているが、こういった軍事部門には疎かった。だからこそそこまで怒りをぶつけることなく、極めて冷静に指摘する。

「いいかオーデンドルフ。マジノ要塞とオットマイヤーの戦車1個師団でも止められなかったんだぞ？今、フランクフルトの原爆を止められたら作戦の進行上極めて重大な障害になる」

「ですが現在連合軍は一大反抗作戦を終え、その戦力は分散しつつあります。特にカー

ルスラント南部は未だネウロイの支配領域……あそこに配置するにはリスクが大き過ぎます」

オーデンドルフの指摘にアイヒマンは自分の作戦の意図が掴まれていないことへの逆説的な肯定に愉快になる。その笑いに頭を傾げる部下にアイヒマンは不気味な笑顔を張り付けて回答するのだった。

「だからいいのだ……降下猟兵部隊のコーエン・ケッセルリンク少佐に連絡。作戦名『長いナイフの夜』を実行せよ、と」

その頃、ようやく休息を終えた小野里は回復を果たし、いつものように歩き回れるほ

どになっていた。しかし、十分な休息を取るため手持ちの食糧や医薬品を消費し尽くしてしまい、今後の進行に不安が見られるようになっていた。ここで勇は予てからの目標であったフランクフルトに向かうことを計画する。

「小野里、フランクフルトには例の原爆があるんだな？」

「はい、情報によるとハイドリヒ長官は15世紀の街並みが残る退廃的な街並みを整理するために、フランクフルトを消滅させる計画を持っていました。ネウロイにより半分ほどが既に倒壊していますが、きれいさっぱり更地にしないと気が済まないようですね」

ハイドリヒの歴史観は過去への憎しみと、過去の忘却という人類の罪が原因であそこまで変質していた。そのため歴史と言うそれまで育んでいた文化や建造物といった普遍的なものに対しては対極的なまでの憎しみをも抱いていたのだろう。しかし、ハイド

リヒの目標はあくまで連合軍への攻撃であり、フランクフルトには現在においてもそこまでの連合軍は配置されていない。そこを小野里に質問する。

「やつらの目標はあくまで連合軍への攻撃なはずだ。理念がずれていないか？」

「二応これでも陸軍情報部出身ですからね。おそらく私の予想ではハイドリヒ長官の理想に沿った形での作戦に彼らは縛られています。それゆえに彼らはハイドリヒ長官の目標を理念にフランクフルトに攻撃を仕掛けるつもりです」

ハイドリヒの部隊は忠誠心をなによりも美德とした変態集団である。どこの軍隊や部隊よりもある意味結束した集団は己の理念に縛られやすい。だから小野里の予想は勇でも納得しやすかった。



「では、フランクフルト周辺の連合軍部隊の情報とその原爆を護衛している部隊の情報が欲しいところだな」

「古い情報では、連合軍はフランクフルトにカールスラント陸軍の第7軍1個師団が展開する予定です。対してアイヒマン中佐率いる部隊はおそらくですがアインツ・シユベルマン中佐率いる歩兵連隊が出張ってくるでしょうね」

勇はここでふと湧いた疑問があつた。それは用意周到なハイドリヒの部下が、明らかに額面戦力で劣る部隊を送り込むことに違和感を覚えたからだつた。彼らの戦術は、分散させ、包囲殲滅がやり口である。よつて額面戦力ににおいてもそれに類する戦力で攻めてくると考えていた。しかし、戦闘経験の豊富な部隊の運用を考案したとも考えられ、敵の能力を図るのが先決だと思ふに至つた。

「ではそのアインツ・シユベルマン中佐とやらについて教えてくれ。以前出くわした

ヴィットマンのようなやつらだとありがたいのだが」

「残念ながら・・・アインツ・シユベルマン中佐はハイドリヒ長官に仕える前は陸軍に所属していました。ですがバルバロッサ作戦で散り散りになった部隊を見事にまとめ上げたいわゆるたたき上げの指揮官です。その際、当時の指揮官と衝突してハイドリヒの部下となりました。だから歩兵の運用に関しては、ピンチの際に真価を発揮するタイプです」

「厄介だな」

勇もバルバロッサ作戦に参加しており、その過酷さは誰よりも理解していた。しかし、自分と同じような境遇にあった軍人とも取れる人物に勇は興味が湧いていた。敵となる人物に不思議ではあるが、新たな情報を掴む以外に方法はないと考え、小野里の計画の一端を聞く。

「私もここからは情報の精度に自信がありません。情報はより新しく正確なものに限り

ますから」

「そうだな、じゃあこれからどうする？」

「それはですね・・・」

小野里の邪な笑顔に嫌な予感がしつつ、聞き耳を立てる。耳打ちされた計画に落胆しながら、対照的に不気味な笑顔を張り付ける小野里が眩しかったことを勇はよく覚えていたという。その小野里の作戦とは・・・

「お前どこの部隊の兵士だ!?!」

「はっ！カールスラント第5装甲軍団の通信兵であります！」

勇の目の前にはカールスラント第7軍の兵士が並んで訝しんでいた。それもそのはずである。勇の左腕は肘から下がなく、小さな傷ついた少女をもう片方の腕で抱いていたからだった。

「その女の子はなんだ？」

「途中で拾ったのであります！ 負傷しているのです是非こちらで手当てをと思いい立ち寄りせてもらいました」

「そうか、お前も大変だったんだな・・・よし、通れ！」

勇はなんとカールスラント兵に扮装していた。これはもちろん小野里の提案であり、一早くフランクフルトに入るためカールスラント軍に扮装して内部に侵入してしまう、いわばスパイのようなものであった。カールスラント軍が駐屯する基地に入ることが

できると、寝たふりをしていた小野里が小さな声で成功を伝える。

「案外すんなり入れましたね。なんなら心拍数を抑える演技もするつもりだったのです  
が」

「本当に医術の無駄遣いだな．．．しかし、本当にカールスラント人に化けられるとは」

今の勇の出で立ちはどこからどう見てもカールスラント人そのものだった。髪の毛も小野里の手により金髪になっており、勇の体格はもとより扶桑人にしては大きい部類だったためカールスラント軍の軍服さえ来てしまえばなんの疑いようもないほどの風格が醸し出せていた。

「まあ、勇中佐がウィッチの部隊に居てくれたおかげでカールスラント語も流暢ですし、ちようどよかったです」

「お前なあ……まあいい。これからどうする？」

「既に原爆はどこかに設置されているはずで、それを守るように密かに第7軍内にハイドリヒの部隊が展開していると思われます。その部隊を炙り出しましょう」

こうして勇と小野里によるスパイ大作戦が始められようとしてた。しかし、後に行われるフランクフルトの町での戦場の気配に気づくことは出来ていないのだった。

## 不滅の翼 第三話

勇はフランクフルトに駐屯する基地を見て回ることにする。自分の普段とは違う出で立ちに緊張が止まらない中ではあるが、周りの兵隊が気にしない様子から少し安心する。しかし、少しいろんなところを見回っていると、突然呼び止められてしまう。

「おいそこの傷痍兵」

「・・・はい、なんででしょう?」

意を決して振り返ると、そこに立っていたのは高級士官の服装で、その襟章に表される階級は紛れもないこのフランクフルト駐屯地の最高指揮官の物だった。階級は少将で、おそらく自分の存在を訝しんでいるものと思われ、勇は一気に背中が凍える。

「・・・その成りでよくも立ち上がってくれた。私は貴官の志の高さに敬意を払おう」  
「きよ、恐縮であります！」

右手で握手を交わすと、しっかりと目を見てその感謝の意を伝えてくるこの司令官は直感的によき指揮官だと思われた。

「その服装だとフランクフルトの北部の第5装甲群の者だな。やはりあちらは激戦区なのか？」

「い、いえ！私はただの通信兵であります！この身体なので・・・」

「そうか、私はこの駐屯地の司令のフランク・バイパー少将だ。君の貢献に感謝を伝えた



い。君の上官の名前を教えてくださいか？」

突然の上官の名前を答えると言う無理難題に冷や汗をかく。勇はそんなことを聞かれるとは思わずなにも情報を頭に入れてこなかったことを悔やんだ。しかし、バイパー少将はすでにメモの用意までしており、ここで口籠っては返って怪しまれると考えた勇は思い切って知っている名前を出す。

「じよ、上官殿の名前は・・・シユベルマン中佐殿であります・・・」

「シユベルマン・・・アインツ、アインツ・シユベルマンのことか?！」

「は、はい」

驚いたとばかりにペンを落とすバイパー少将は、少し取り乱すとペンを拾い、勇の肩に手を置きそれとなく感謝を伝えてくる。明らかに動揺しているように見えた。

「そうか、やつは元気にしているか？」

「はい。それなりに」

「そうかそうか・・・では君からぜひとも伝えてくれたまへ」

「そう言うとは颯爽と立ち去ってしまい胸を撫で下ろす勇であった。なんにせよ目の前の危機から解放されたことに喜んだ。汗を拭うと改めて周囲を伺う。特に怪しい物はなく、また怪しい人物も確認できなかつた。さすがに同じ人種の中から怪しい人物を見つけ出すのは苦労があることだ。しかし、駐屯地の戦力分布はおおよそ把握できた。小野里も独自に情報を集めているらしく、勇は大人しく戻ることにした。」

「ふう、やっぱり敢えて逃げている方に近づくのは緊張するな。小野里め、こんな強かなことを平然とやっていたなんて」

少し小野里のことを尊敬するも、自分は不向きであるこの任務にため息を漏らす。そうしているうちに変装をして少年兵になった小野里が帰ってくる。明らかに15、6歳の男の子と見間違うほどの出来で、これなら容易に基地をで歩けると感心してしまうほどの変装だった。

「大まかですが情報を持ってきました。勇中佐も何かわかりましたか？」  
「そうだな、小野里の変装の腕についてはよくわかった」  
「戦闘以外は役に立ちませんね」

意外にも酷いことを言われて少し傷つく勇を捨て置き、小野里はメモしてきた情報に勇を見せる。そこにはこの基地の概略と戦力、そして怪しいと思われる箇所にバツ印がつけられていた。勇にはそんな所は見当たらなかったためその理由を聞くことにする。

「このバツ印はなんだ？」

「私に見立ててでは、このバツ印の3つのどこかに原爆があると考えています」

「それはどうして？」

「まず一つ、原爆は勇中佐が持っていたのとは違い、魔法力で制御されていないため大きくかさばります。そのため収納にはある程度の場所が必要になります。二つ目にその機密性から人目に付かないところに置くはずで、そして最後に、明らかにこの3か所には人員が多く配置されていました」

良くまとめられた話に感心しながら、バツ印の場所について勇もその景色を思い出す。一つは倉庫で、武器弾薬などを保管した場所である。二つ目は廃工場跡で、確かに人目にはつかない。そして、もう一つは指揮所の真後ろだった。指揮所は敵の突発的な攻撃から守れるように、ネウロイが来ると思われる南側に時計塔を背にしていた。この時計塔には確かに見張りが多かつた記憶があつた。

「小野里としてはどこだと思う？」

「そうですね、私なら武器弾薬が置かれている倉庫でしょうか。あそこで爆発させてしまえばそれだけで戦力を無力化できますから」

小野里の言っていることも尤もだった。しかし、勇はどうしても心に引つ掛かる事案

があった。

「一ついいか？」

「どうぞで」

「その、俺にはあまりまだ理解できていないのだが、原爆の威力は既存の物と一線を画すんだらう？それならどこにおいてもいいんじゃないか？」

勇の指摘に小野里は尤もだと頷く。しかし、と一言加えて説明を始める。

「原爆は少数、おそらく本当に2，3個しか生産できていないはず。それをこのような1個師団を壊滅させるために使用するとは思えません。よって原爆自体はどこかに

隠しておいて、普通の爆弾を仕掛けている可能性が大きいと考えます」

小野里の話聞いて納得する所ばかりで唸ってしまふ。確かにより簡単に制圧できればそれに越したことはないはずである。その裏付けとして、ハイドリヒの部隊も一個師団しかなく、それを正面から当てるなどという愚策には出ないことが伺える。そして、新たに勇にも分かったこととして、この基地には原爆と爆弾の二つが戦略物として隠されているということが判明した。

「なるほど。じゃあ、倉庫の確認が最優先事項か」

「はい、ですが勇中佐がここに居ることが分かればそれこそ原爆を使用しかねません。なるべく正体は悟られないようにしてください」

小野里の言葉をしかと心に刻み、改めて勇は周辺状況を確認するために外に出る。あたりは暗くなり、所々で焚火の明かりが見える。絶好の機会だとばかりに行動を開始する。開始したかったのだが・・・

「おう兄ちゃん！そんなしけた面してどうした！こつち来いよ！」

さつそく酔っ払いに絡まれてしまった。非番なのか五、六人の兵士が焚火を囲んでおり、その中に勇も引き込まれてしまった。やいのやいの言っている間にどこの出身かといった初歩的な質問から下世話な話まで次々と取り留めのない話に付き合わされたのだった。



「兄ちゃん若いのに戦争で腕なんか亡くしたらこの先大変だろう？」

「いや、慣れれば何とかあります」

「そうはいつでもさつきから不便そうだぞ？もしかして・・・」

その疑いの一言に冷や汗が流れてしまいそうになる。心臓が悲鳴を上げそうになるのを必死に抑えて次の言葉を待つ。

「もしかして右利きか？」

「・・・あつそうです」

案外酔っ払いはちよろいのかと一安心する。周りもガハハと笑っているため、勇は内心ほっとしながら話を合わせることにする。そんな時、その熟年兵は耳よりの情報だと前置きして初年兵に見える勇に話し始める。周りの仲間は「また始まった」とクスクスと笑い出す。勇は情報ならなんでもと考えていたため耳を貸す。

「知ってるか？ここいらではな、最近妙な噂があるんだ」

「とうとう？」

「それがな、幽霊が出るのさ」

「はあ……」

あまりにも荒唐無稽で説明が大幅に省略された話に気の抜けた返事しか出ない。酔っぱらっているのか、本人ですら頭を傾げて伝わらない話を大きくしようとする。

「嘘みたいに見えるだろうがな！これは俺も見たことなんだぜ?!あれはここにきて数日経った頃だ。この第7軍は各地の激戦を戦い抜いた奴らばかりでな。中には撤退戦なんかで部隊が十分の一になった部隊もある。そんなわけで顔を見たことのない兵士ばかりだ。そんなもんだからよく一緒にになった奴と話すんだ」

確かに初めて会った兵士とは行動を共にするうちに顔や名前を覚えるだろう。風呂や寝床、作業などで覚えるものだ。そのような記憶に覚え違いがあるのも仕方がないと思いつつ、その熟年兵の話の聞く。

「俺は川で水浴びしてた時に、一緒になった顔に傷のある兵士と一緒にになったんだ。この部隊にあんなに大きな傷を顔に拵えた兵士なんてそうはいねえ。聞けば隣の配置の奴だと言うじゃねーか。だから次の日に酒を持って飲もうという約束をしたんだ。そ

して約束通り次の日に隣の配置の陣地にお邪魔してみたわけだ」

所々突っ込むところはあがあるが、頑張つて分かりやすく話そうとする努力に免じて黙つて話を聞くことにした。そして、クライマックスというところで熟年兵は立ち上がった。両手を広げて大げさに話を披露する。

「するとどうだ！隣の陣地には昨日の顔に傷のなる兵士はいなかった！それだけじゃねえ！隣の陣地の奴に聞いてみてもだれもそんな奴は知らねえと言う！こいつあ俺は幽霊に会ったと確信したわけだ！この第7軍は各地で散った兵士の怨霊が取り憑いた幽霊軍団だつてわけよ！」

荒唐無稽な話から戦場伝説まで数多ある中で、これほど愉快的話しはないと思った。勇自身多くの仲間を失ったが、今回の話のようなことは一度としてなかった。勇の経験は誰も経験のしたことのないであろうことだが、事実勇はその幽霊的な事象によつてこのようなことをしている。だから、勇はこの話をこころで切り上げる。

「面白い話を聞きました。その兵士とお酒が酌み交わせることを陰ながら応援させていただきます」

「信じてねえな？」

「そこらへんにしとけて。お前飲み過ぎだぞ」

周りの兵士に諫められその熟年兵もしぶしぶと輪の中に戻ろうとする。しかし、その熟年兵は一つだけ勇に言い残す。

「お前さんのような分かりやすい人間は俺ら全員がこの目で見たから大丈夫だろうがよ、お前さんも俺たちのことを覚えててくれよな」

「こんなに楽しそうな人たちなら忘れませんよ。その勲章、ビフレスト作戦のものでしょう?」

「おつ?よく知ってるな。これを貰ったやつはこの部隊では俺らだけだからな」

そう自慢げに言うとうまく輪に戻って行く。勇はようやく解放されたため再び散策を開始する。夜と言えど敵前の基地であるため歩哨や見張りが多い。そんな中でどうにかして倉庫に近づきたいと考える勇だった。すると倉庫で見張りをしている歩哨が勇に気づく。勇は一瞬まずいと身構えたが、その歩哨の言葉に安心するのだった。

「そこのお前！ちよつと変わつてくれ！小便したくなつちまつた！見張りならお前でもできるだろ！」

「あ、お安い御用です」

「助かる！アツ忘れる所だった！まだ来ないとは思うけど見張りの交代要員同士の合言葉があつてな！もし来たらこう言つてくれ！『ヘンゼル』と！」

勇は突然任された仕事に内心ガツツポーズを取っていた。そして、その合言葉の続きにも耳を傾ける。

「で、その返しは？もしかして『グレーテル』？」

「童話だからつてそんな単純じゃねえやい！まつそれが作戦だがな！おつと漏れちまいそうだ！合言葉は『お菓子の家』だ！じゃあな！」

見張り役を任せられ一応それなりに扉の前に立つておく。例え今合言葉を知り、中に入る機会があつたとしてもすぐに動くのはリスクが高い。こういうことは小野里と相談した方がいいと判断した勇はその仕事を見張りが帰つて来るまで続けることにした。やがてその見張りが帰つてきたため、勇はこゝらで偵察を止めて帰ることにする。当てがわれた寢床には既に小野里が戻つてきていた。

「なにか情報は得られましたか？」

「耳寄りなのが」

「教えてください」

「倉庫の合言葉が分かつた。ヘンゼルと問われてお菓子の家と返すそうだ」



小野里が呆れた顔をして大きな溜息をつく。それはそれは勇は悲しくなった。

「そんな簡単に教えてくれる情報なんてだれにでも分かっってしまう情報でしょう？あな  
たは要らない物ばかり拾ってくる犬ですか」

「……くーん」

確かに言われてみれば、こんなに簡単に教えてくれる合言葉ならだれでも知っている  
可能性が高いことを全く失念していた自分が怖かった。対して優秀な小野里はきちん  
と耳寄りな情報を披露するのだろう。

「私が調べたところによりますと、なにやら配給される料理の数が合わないそうです」

勇は小野里の齋す情報を聞いて笑ってしまう。

「なんですか」

「だって俺の情報と大して変わらない重要度だから」

「はあ・・・これだから戦闘バカは。いいですか？食料の数が合わないと言うのは誰かが無断で入り込んでいるということですよ」

「・・・ああ？」

勇の気の抜けた返事に小野里は頭を抱える。言われてみると料理は師団に所属する人数分かそれより少し多いくらいを作るのだが、それでも足りないとなると確かに変である。ここら辺の常識はウィッチ部隊にいた勇にとって疎かにならざるを得ない事情

があつた。ウィッチには高カロリー食が配給されており、特に501などの優秀部隊には大量の食事が配給されているのだ。それゆえバカ食いするウィッチがいるのだが、育ち盛りのウィッチにとってそれくらいは日常茶飯事だった。しかし、ここは一般の部隊でありそこまで配給に問題があるとは思えない以上、何かしらの人員の移動があると考えた方が妥当だと思ひ至る。

「もしかしたらアイヒマンの部隊が侵入している可能性があります。今後、より注意をお願いします」

勇と小野里は互いに注意することを確認し、その日は床に就いた。翌日も変わらず情報収集に勤しむべく、小野里は朝早くから変装に余念がなかった。今度は昨日来た少女が回復して、普通の町の女の子がはしゃいでいる自然体の人間を演じていた。相変わらずの変装ぶりに勇は今度こそと意気込んで偵察に向く。

「今日は頑張つて倉庫の中に入りたいところだな・・・おや」

勇が目にしたのは昨日の夜に見かけた酔っぱらいの男たちの場所だった。さすがに新しい日になったため任務に向かったのだろうが、昨日の話に興味を持った勇はその燃えカスを眺めてみる。するとその灰の中に鈍く光るものがあつた。熱いため靴で灰から取り出し冷やしてから右手で掴み取ると、昨日話題に出た勲章だつた。この勲章は勇も参加した大撤退作戦であり、そこで姉の咲を失っている。そんな勲章を大切にしている人物が勲章を落としては大変だと思い、その熟年兵を探すことにした。近くにいた兵士に彼らの所在について聞いてみることにする。

「すみませんが、昨夜非番だった隊の人間でこの勲章を着けている兵士を見ませんでしたか？」

「・・・知らないね」

「そうですか。すみません」

勇は頭を傾げてその勲章を眺める。確かにこの勲章を着けているのはあの兵士以外には存在せず、実物が目の前にある以上昨夜の出来事も否定はできない。それなのにこの兵士もその情報を持っていなかった。勇が頭の中で浮かぶ不思議な事象の答えのようなものが出かけた時だった。遠くの場合で爆発音が聞こえる。これは勇や小野里のようなウイツチでないと聞き分けることのできないほどか細い音で、周りの人間は誰一人として気づく者はいなかった。

「まさか!？」

勇が辺りを見渡すと小野里が勢いよく駆け込んでくる。その顔は真つ青な顔であり、事態の急変を知らせていた。

「ネウロイが・・・複数の方面から大挙として押し寄せてきます!!」  
「なんだと・・・」

二人が青ざめる中、ようやくフランクフルトの町中に警報音が鳴り響く。その音で周りの兵士も俄かに慌ただしさが増す。極めつけは司令官からの酷く沈んだ放送だった。

『諸君、親愛なる諸君へ告ぐ。この町は半包囲される……憎きネウロイは既にこちらに向けて進行中である。その規模およそ8個師団程度。樂觀的に見積もつての規模だ』

敵との戦力の規模の差はおよそ8倍と絶望的なものだった。絶望のあまり言葉が出ない兵士を差し置き、悲痛な声音の司令官バイパー少将は続ける。

『我々も退避すると、言いたいが……残念ながら許可されなかった。諸君、親愛なる諸君。ここフランクフルトを敵に奪取された場合、我々の北にいる西方方面軍主力であるリベリオン第6機甲師団及び第5歩兵師団の横つ腹ががら空きとなる。我々は彼らに支援を求めたが、到着まで4日かかるとのことだ……』

バイパー少将の言葉で遂に膝をつくものや絶望のあまり泣き出す者が出始める。それでもバイパーは指示を出す。

『私は任務を果たすべく、このフランクフルトを死守しようと考え。我々は崖っぷちだが、我々が逃げ出せばそのツケは人類全体に波及するだろう。・・・諸君の協力が全てだ。どうか、この地で死んでくれ。君たちが戦う一日、一時間、一秒には意味がある。必ずや後の世で君たちの雄姿は語り継がれることになるだろう！だから、バイパー戦闘団よ、立ち上がれ！奮起せよ！銃を握りしめるのだ！』

バイパーの演説は先ほどまで絶望に暮れていた者たちを立ち上がらせた。勇は有能な指揮官の存在を嬉しく思った。勇は自分の左腕を見る。自分の助力したい、そう思う気持ちは強くなった。しかし、この腕はこの基地に侵入する前に小野里が切断し、勇の魔法力により再生を抑え込んでいる代物だった。だから、戦うとしたらこの腕に回して



いる魔法力がなくなり、ネウロイ化した腕が露わになってしまう。そうなればマジノ線の二の舞である。小野里を見てもやはり首を振っている。

「小野里、やはりだめか？」

「ダメです！今度それを見せたら内部からこの部隊が崩壊します！」

「・・・分かった。俺もこの状態でできるだけ何とかしよう。小野里はどこか人目のつかない場所で支援してくれ」

小野里と約束を交わし、小野里は急いで時計塔のてっぺんに向かう。そこから狙撃を敢行する手はずだったが、一方の勇は魔法力をほとんど使わないという制約が着くこととなってしまう。勇が考え事をしているとバイパー少将が勇の前を通りかかる。

「おお君か！申し訳ないが原隊には帰らないでもらいたい。君でもできることはあるか

らなー！」

「分かっていきます。微力ながらお手伝いさせていただきます」

「助かる」

そう言うと同前線を視察に駆けだしていく。いつの日かのロンメル將軍を思い出し、將軍が前線に出る部隊はそれだけ士気が上がることを知っている勇は心の中が熱くなつた。自分も歩兵銃を手に入れると適当な陣地に着くことにする。周りは極度の緊張からか息が若干上がっているが、少しも負ける気配が見えなかった。そのことに少し気をよくした勇は敵が見えるまで銃を構える。やがて地響きが地面を伝ってやってくる。勇だけでなく全員が理解したことだが、誰かがぼつりと言葉にするだけで恐怖がやってくるのだった。

「来るぞ・・・」

勇には既にネウロイの気配が感じ取れ、すぐにも攻撃できたが一般人を装っている以上誰かより早く攻撃するわけにもいかずやきもきしていると、前線の分隊長が号令をかける。

「射撃用意っ！」

勇はその言葉で少量の魔法力を弾丸に込める。全員が一点に視線を集め、緊張が頂点に達した時遂に合図が下される。

「射撃開始っ!!!」

一斉に発射される攻撃は、曳光弾などが混じり花火のように爆ぜる。機関銃や軽野戦砲も火を噴き、勇の攻撃もネウロイに穴を穿つ。勇の攻撃はその野砲に混じったおかげでその威力の違いをかき消されはしたが、自分が思った以上の威力に内心驚いていた。

(前より威力が上がっている!?!)

「どうした傷痍兵! ビビッてないで次だ次っ!」

隣の兵士に臆したと誤解されたことで落ち着きを取り戻すべく深呼吸をする。先ほどよりも魔法力を抑えるべく緻密に操る。狙いを済まし射撃すると、今度はきちんと他と分らないような規模になった。

「いい狙いだ！片手でその精度なら元は狙撃兵か?! いいぞもつとやれ！」

勇が的確にネウロイを撃破していく様子を見ている分隊長に褒められながら、勇は次々にネウロイを撃破していく。周りは少しも不思議がることなく、むしろどんどん撃破してくれることに感謝してさえた。戦闘が激化していく中、小野里の攻撃もきちんと確認でき、的確に陣地に近づいて来るネウロイを倒していた。戦闘時間が3時間を超えたあたりで、一時ネウロイは撤退を開始する。

「やつら退いて行くぞお!!」

「おっしやあああ!!!」

歓喜の声に湧く中、勇・小野里・バイパーの三人はこれからが大変だと感じていた。急いで負傷者が街中に運ばれ、武器弾薬が前線に運ばれるというピストン輸送が素早く行われていく。これもバイパー少将が行に弾薬類を運ばせ、前線に置いたらそのまま負傷者を乗せることで運搬の時間を効率化させると言う辣腕を振るったおかげでもあった。そして、更なる作戦が下令される。

「次はネウロイも総攻撃を加えてくるだろう！そこで今度は温存しておいた迫撃砲と少数ながら到着していた砲兵による砲撃を行う！」

「おお!!」

バイパーは優秀な指揮官ぶりを発揮しており、波状攻撃を仕掛けてくるであろう敵に對して、新たな戦術を温存させると言う一歩間違えれば破滅に繋がる荒業を残してい

た。勇もその作戦には完全に同意で、先ほどの戦場で敵がやってくる場所と、その付近が見渡しやすくなっており、砲撃にはもってこいの状況が醸成されていた。そして、勇たちにも手榴弾などが多数配布され、今度は点ではなく面での攻撃になることが示唆された。また、付近には新たに設置された地雷原も存在しており、きつと小野里ならそれをうまく活用するだろうことが伺えた。そして、遂にネウロイによる第二次攻撃が始まった。

「砲撃開始っ！」

砲兵や迫撃砲が一斉に火を噴き、土地ごと耕していく。砲弾が命中することに至る所から歓声が上がる。その光景を見た指揮官らが、今度は我々だと言わんばかりに声を張り上げる。

「装填中は我々の出番だ！各自手榴弾用意っ！各々の判断で投げつけろっ!!」

砲兵の装填中は斯くも激しい手榴弾の合戦が繰り広げられた。勇も今度は先ほどよりも多めに魔法力を込めて投げつける。一際大きい爆発でネウロイにも大きな被害が出る。さらに、きちんと地雷原に突っ込むネウロイや砲撃で傷つきながらも再生するネウロイを小野里が的確に狙撃していった。みるみるうちにネウロイが減っていくが、後から後から減った分増えるネウロイに手を焼いていた。

「これじゃあいくら撃つてもきりがねえ！何とかならないか!!」

「俺がやる！」



勇が声を上げるのを周りは驚いて止めようとする。なんと勇はトーチカさえ破壊可能な爆薬が詰まった袋を抱えて飛び出そうとしていたからだ。周りが急いで止めようとするが勇は止まらなかった。

「仕方ないっ！奴を援護しろっ！」

勇を援護するために猛烈な射撃が加えられる。勇はネウロイが屯している場所近く砲撃跡に走りこむと、爆薬に着火する。今度は陣地側のもう一つの穴に匍匐前進で入ったその瞬間、大爆発が起き付近のネウロイが一挙に消し飛ぶ。あまりの威力にさすがに誰もが一瞬疑問を浮かべるが、勇の帰還に諸手を上げて拍手したことによりその疑問は消え去る。勇が魔改造した爆薬は戦線に大きな穴を開け、そこから崩れたネウロイを撃退し、この日は勝利で終わることができたのだ。

「お前すげえな！どこの部隊出身なんだ?!」

「英雄だ！フランクフルトの守護神だ!!!」

その後、たくさんの兵士に囲まれた勇は冷や汗が止まらなかつた。今まで碌に名乗つていなかつたため、どこの部隊なのか、自分は誰なのかと言つた質問をこうも大勢の前で問われると嘘がバレかねなかつた。視線を小野里に向けるとため息をついて紅茶を啜つて勇を切っていた。泣きそうになっていると奥から司令官のバイパーが出てきて握手を求められる始末だつた。

「よくやってくれた！君の活躍はどの部隊からも聞いている！君を第二級柏葉付き騎士

鉄十字章に推薦しよう！」

「あは、あははははは……」

勇は更なる危機に直面している中、小野里は独自に情報を集めるのだった。

「おかしい……あれだけの戦闘で戦死者が少なすぎる。どうしてなの？」

小野里の目には戦闘前と変わらないどころかむしろ増えているようにも見える兵隊の数に目を巻いていた。勇に衆目が向く中、小野里は一人で行動を開始する。時計塔は今回の戦いで侵入することができ、中を確認し安全なことは分かっていたため倉庫を調べることにした。得意の変装で倉庫に近づくと、こんな日にも歩哨が立っていた。小野

里は先日聞いていた合言葉を歩哨に言ってみる。

「ヘンゼル」

「お菓子の家」

「よし、こんな夜になんの用だ？」

「弾薬の確認です！明日に備えて備蓄を確認するようにバイパー司令に申し付けられましたー」

「そうか、ご苦労なこった」

難なく通され、勇の手に入れる重要度の低い情報も時には役に立つものだ。と心の中で謝罪する。倉庫の中に入ると中には弾薬や食料が備蓄されており、特に不思議はなかった。そう、無かったはずである。しかし、小野里は気づいてしまった。この非常事態に食糧が横領されていたのだ。豊富に備蓄されている倉庫にわざわざ侵入するようなことをしでかす食いしん坊がいるという可能性は限りなく低かった。小野里の脳内が必

死に回答を見つけ出そうとする中、倉庫の扉が開く。驚いて振り返ると兵士が立っていた。

「ん？その少年兵、ここで何をしてる？」

「はっ・・・。備蓄の確認作業中であります！」

「そうか、こんな夜更けにご苦労なことだ。なにか不備はあったか？」

「いえ、一部食料がネズミかなにかにやられてるだけでした！」

「ネズミか・・・。早急に対処しなければな」

小野里は自分のしていることを正確に報告する。真実を混ぜることにより嘘偽りのない発言ができる為、この方法をよく使用していた。しかし、先ほどの歩哨と同じことを口にするこの兵士に小野里は不安を覚えるのだった。歩哨に会えば自分のことは教えてもらえるはずだし、こんな時間に普通の兵士が倉庫に入ること自体がおかしなこと

であった。食料を盗んでいる張本人の可能性も考慮して一つカマをかけることにする。

「失礼ですがここに入るときの合言葉をもう一度教えていただけませんか？なにぶん今回が初めてでして・・・確かヘンゼルに対して、何でしたっけ？」

小野里は注意深く相手の顔を見る。少しでも不審な動きをすれば倒すことも視野に入れていた。しかし、その男の顔は暗くて見えなかったため呼吸音や声紋から判断することにした。

「仕方ない奴だな。合言葉は・・・『グレーテル』、だ」

小野里はその迷いのない声と合言葉が違うことからまずいことを勘づく。明らかに嘘をつくことに慣れた人物で、その声から既に漏れ出る気が小野里の背筋を凍らせた。小野里はここは撤退することに決める。

「ああなるほど！そういうえば簡単な合言葉だったのですね！失礼いたしました・・・」

「君」

「はっはい？」

呼び止められる瞬間の恐怖と言ったら例えようのない。心臓が爆発しそうな緊張感と喉がヒリヒリと乾く感覚を久しぶりに味わったほどだった。声を掛けられた方をようやく向くとそこには相手の顔があった。その顔を見て小野里は失敗したことに気づ

く。相手の兵士は一人ではないと気づいたからだった。

「どうやら俺を知っているようだな・・・ネズミは君のようだ。大人しく捕まれば殺しはしない」

そう言うのと暗い倉庫の扉は閉められるのだった。



## 不滅の翼 第四話

翌日、寢床に戻らなかつた小野里を心配しつつ、情報を収集しているのだと割り切り敵の襲撃に備えていた。最近睡眠時間が短くなり、少しの睡眠で事足りる変化を慣れだと思ひ込んだ早朝、遂にネウロイの来襲を知らせる警報が鳴り響く。西方方面軍の主力が到着するまであと3日ここで耐えなければならぬため、勇はすぐさま武器を持つて陣地に急行する。

「おつ！片腕の英雄の隣か！こりや今日はいい日だぜ！」

翌日にはこのようなあだ名まで広がる始末だったが、今はネウロイの迎撃に専念したかった。昨日同様の迎撃網であればそうそのことなれば大丈夫だろうが、万が一のこととも考えて方策を独自に練っていた。

「来たぞおお!!」

「ぶっ殺してやる!」

意気軒高な士気に勇も握る銃に力が入る。勇の方策とは万が一のことを考えただけに突飛な発想をしていた。また、バイパーの指令で夜のうちに塹壕のようなものを構築しており、重心防御の陣地を構築するに至っていた。勇は周囲の攻撃を待つて魔法力を少量混ぜた攻撃を放つ。

「おっしやあああ!!!」

「今日も砲兵様様だぜ!」

昨日とは違い、攻撃手法が割れているため最初から砲兵や迫撃砲が派手に火を噴いていた。その合間を縫ってやってくる敵を機関銃や野砲で撃破し、さらにその後詰めを勇たち歩兵が担っていた。かなりの効果を上げているが、勇にはまだ懸念があった。それはネウロイの攻撃が全体的に広がる全周攻撃から拠点攻撃に移ることであった。

「やけに敵さん今日は少ないな」

「全部やつつけちまったんじゃねーか？」

勇の予想は的中し、敵の流れが勇の配置された部隊の所には薄く展開していた。その代わり部隊長を通じて救援要請が入っていた。

「敵は町の西側に重点的に攻撃を仕掛けているらしい！我々は一部部隊を抽出してこれ

の援護に当たる！絶対防衛ラインであるマイン川に架かる橋を死守せよ！」

町の西側にはマイン川という川が流れており、その川に架かる3本の橋は、今後自分たちが撤退するにしても支援に来る部隊にせよ渡るのに必須な移動手段であるため、これを攻撃されてはひとたまりもなかった。これに陣地の兵士は困惑する。

「ここを離れていいのか？」

「敵の目的は橋だったんだ！」

「防御だけじゃダメなんだ！こっちから攻めよう！」

様々な意見が出る中、勇が部隊長に意見具申する。

「分隊長！意見具申よろしいでしょうか?!」

「英雄くんか！どうした？」

「はいっ！援護に向かう件は賛成なのですが、一つご提案があります！」

部隊長はその意見を聞くとうんうんと唸ってしまつた。と言うのも、勇の意見は有効的でありながら危険が伴うものだったため自分だけの判断の範疇ではないと考えた。そのため勇を伴って司令のバイパーの下に連行されることとなつた。指揮所のバイパーは忙しそうに現状の把握に努めていた。

「司令！意見具申よろしいでしょうか?!」

「なんだね、今忙しいのだが・・・ああ、君か。今日も何かしてくれると言うのかね？」

「はい！唐突な作戦で申し訳ないのですが、昨夜構築した塹壕を爆破してもよろしいで

「しょうか？」

勇の言葉にパイパーは明らかに動揺した。もちろん苦勞して構築した塹壕を捨てる戦法に驚いたのもそうだが、爆破した後の対策の方が困難に思えた。

「塹壕を爆破してしまったらその後の敵の対処が困難になる。許可は出来んな」  
「はい、ですので爆破範囲をここまでにすれば・・・」

勇が地図に線を引くとその場の全員が押し黙ってしまう。勇の秘策とはそれほどまでに突飛で常人には許容できない発想だった。

「それではこのフランクフルトの街自体が破壊されかねん！ネウロイよりよっぽど厄介だ！許可できません！」

「ですがこのままではジリ貧です。ただでさえ少ない戦力です。一案として有力なものだと自負しております」

バイパーは頭を抱えてしまう。この片腕の青年兵士に見える勇の発案する作戦が有効なものに見えるのはそうだが、それをしてしまえば街を破壊した愚将として後世に語り継がれかねない事態に陥ってしまうことが恐ろしかった。そしてなにより何事もなくこの提案をできてしまう勇と言う存在が恐怖そのものだった。

「……確か君はアインツ・シユベルマンの部下と言ったな」

「あ、は、はい。そうです」

「・・・その考えも彼に教わったのか」

パイパーの態度はどう見てもなにか抱えた闇のようなものを引きづっていた。勇はこんなところで嘘をつくべきではないと考えていた。しかし、その方が都合よく話が進むことも考えられただけにどうするか迷っていた。勇はもう一度パイパーを見る。明らかに勇ではなく、勇の背後にいる何者かに怯えているかのようにであった。だから、勇はまっすぐ前を見て答える。

「だれかの意味ではありません。私がこうありたいと思うから意思が後からついて来るのです。方法とか効率とかは関係ありません。肝心なのはやるかやらないかです」



勇の真つすぐな言葉をパイパーは目を逸らさず聞いていた。そして、徐に溜息をつき煙草に火を付ける。彼なりの落ち着くための処世術なのだろう。ゆつくりと紫煙を吐き出すと、下を向いて弱音を吐きだす。

「私は君のひたむきさが怖い．．．だが、自分に嘘はつきたくない。俺はそのひたむきさが羨ましいのだ。努力しても所詮はこの程度．．．人は簡単には変わらない」

「あなたの人生の主役はいつだってあなただ。なんてことはない、失うことと比べれば。何かをせずに恐れるより、何もしないことを恐れてください。あなたには幾百、幾千の命が乗っています。あなたの力でこの命たちを生かしてやってください。あなたにはその力がある」

勇は小さく見えるパイパーの背中に向けて声を掛ける。パイパーは俯いた顔を、強

張った顔に苦筋を浮かべる。達観した勇の言葉はなぜか自分の心細さの背中を律した気がした。

「……本当に、お前は何者なんだ」

「……ただの傷痍兵ですよ」

勇はそのまま指揮所の天幕を潜り外に出る。未だに砲火の音が激しく争いは続いている。勇はその足で次の戦闘区域に向かう。その背中にはたくさんの爆薬が積まれていた。勇が息を切らしながら到着した場所は、橋と街を繋ぐ一拠点のすぐ近く、塹壕の終着点だった。勇は担いできた爆薬をすぐに設置していく。爆薬を設置していると通りかかった兵士が尋ねてくる。

「そんな爆薬どうする気だ?!」

「一度敵を引き入れてここを爆破する!」

「そんなことしたら敵と心中だ! 止める!」

その兵士は勇の目的が分かったことで顔を真っ青にして止めにかかる。しかし、勇は淡々と爆薬を設置する手を止めず、ある合図を待っていた。その合図とは期せずしてやってくる。

「全戦線にてネウロイが一斉に攻撃を仕掛けてきたぞ!! 全員持ち場に戻れ!!」  
「来たか!」

勇の狙いはまさにここにあった。橋を守るために防衛陣地を集中させたことによる全周防御の綻びをネウロイは狙っていると踏んだのだ。圧倒的な戦力差を生かすには陽動作戦が最も効率的で、ネウロイはこの手の作戦をよく使っていたため、勇はその対策として今回の作戦を思い付いていたのであった。

「よしっ！全員一旦街の中まで後退するんだ！」

「そんなことしたら橋がやつらに取られちまうぞ！」

「それでいいんだ！やつらをこちらに引き込む！」

勇の号令により、隊員はやむなく撤退を開始する。一齐に撤退したことでネウロイは攻めきれず、戦線がもたつく。その間に撤退を完了させた第7軍は勇の合図を必死に耐えて待っていた。そして、ついにネウロイが橋を渡ってきた。

「おいおい本当に中にいれるのか?! もう敵は目の前だぞ!」

「待て! 待つんだ!」

「もう十分待ったんじゃねーか!?!」

「・・・今だっ!」

勇が爆薬に点火すると一斉にネウロイが渡る3本の内、2本の橋の根元が折れ、川に没する。橋の上にあったネウロイもそれに巻き込まれて川に没し、一挙に弱点である水に浸って行動不能となっていた。さらに、塹壕の終着点を爆破したことで川の水が塹壕内に流入し、あつという間に塹壕が濁流と化していく。その濁流に飲み込まれるように全戦線で塹壕を突破しかけていたネウロイが押し流され、その巨体を互いにぶつけ合うことで消滅し合っていた。あまりの出来事に一同は固唾を飲んで守っていたが、ようやく実感が湧いて来たのか所々から歓声が起こる。

「・・・おい、本当にやつら流されちまったぞ」

「すげえ・・・あんなにいたのに」

「俺たち、助かるのか？」

絶対絶命の危機に瀕していたはずの第7軍はその消滅の憂き目を免れたことに互いの肩を抱いてむせび泣く。そんな奇跡のような光景を、司令部から出てきて眺めていたバイパーは軍帽を取って胸に押し当てる。自分の判断の末に得た信じがたい成果を心底自嘲交じりに吐露するのだった。

「また部下に助けられたのか・・・成長しないな」

「まったくですよ」

歓声の隙間に乾いた音が響いたことに気づく者はいなかった。勇はまたもやたくさんの兵士に囲まれて揉みくちやにされていた。久しぶりの泥臭い勝利に勇も周りの熱に浮かされていたのだが、そこに小野里の存在を思い出す。

(そういえば小野里の姿を見かけない・・・何してるんだ?・・・ん?あの光は?)

勇の目線の先には時計塔のてっぺんが規則的に点滅を繰り返しており、誰かに何かを伝えているのが分かった。勇はそれがモールスだと気づいて心胆を寒からしめる。そのモールスは何者かの侵入を知らせるためのものだったからだった。

『トツニユウセヨ トツニユウセヨ』

勇は周りが騒ぐ中急いで小野里の姿を探す。どこにも姿が確認できず、慌てて駆け出す。自分の不注意さを恥じながら小野里の安否だけが心を騒がせる。走って町中を探そうとする中、勇はふと上空になにか輝くものを目の端で捉える。一度立ち止まって確認すると、それは輸送機の影だった。そこからいくつつかの傘が開いたかと思うと、明らかにこちらに流れている。というより意思を持ってこちらを狙っているようだった。急いでバイパーに危急を知らせるべく走り出そうとしたとき、倉庫の目の前が出る。そこには目を疑う光景が広がっていた。

「バイパー少将!？」



勇が目にしたのは全身の力を失って物のように引きずられる司令官、バイパー少将の姿だった。勇は自分が言葉を発してしまったことにハッとした瞬間、左胸に焼きごてを当てられたかのような激痛が走る。撃たれたと分かった瞬間には勇は倒れていた。倒れた瞬間に見えた人物の姿は紛れもなくハイドリヒの部隊である、アインザッツ・グルツペンに所属している歩兵連隊連隊長、アインツ・シュベルマン中佐その人だった。

「またネズミか・・・人員が揃い次第この街を確保しろ」

「了解です。この者はいかがいたしますか？」

「・・・既に死んでいる。そのゴミと一緒に人質の前に晒しておけ」

煙草をくわえたアインツ・シュベルマンは部下に指示を出すと空を見上げる。ようやく混乱の気配が感じられてきた間抜けな部隊を肴に、心地よい復讐の空気を肺一杯に堪能する。

「ああ……うまい。染みわたる」

「シュベルマン中佐、降下猟兵部隊の集結まであと少しのことです」

「そうか、ケッセルリンク少佐に伝える。こちらもあと少しで街の掌握を完了するとな」

シュベルマンは部下を走らせると、フランクフルトの街を見渡す。所々破壊されているが、以前に自分が見たフランクフルトの街が聳っていた。感慨深さや故郷の土を踏んでなお満たされない物足りなさに対して愚痴をぶつける。

「赤松勇とやら、どうした早く出てこい。俺はここだぞ」

その頃、小野里は倉庫の暗がり手足を拘束されて寝転がされていた。見張りの兵士の出入りが頻繁になり、事態の変化が感じ取れた。今だ自分の変装は見破られてはおらず、少年兵として拘束されているため、可能な限り情報収集に勤しんでいた。曰く、アインザッツ・グルツペンの一部隊である歩兵連隊はこのフランクフルトに少数の人員をスパイとして送り込まれており、毎夜フランクフルトに配属されたカールスラント第7軍の兵士と入れ替わっていたとのことらしい。どうりで戦闘が行われても人数が変わらないわけだと、小野里は今後の方針を決めかねていた。

「へつ、案外ここも簡単に掌握できそうだな。司令もこのざまだぜー！」  
「おい、その少年兵に見せつけてやろうぜ」

見張りの兵士が運んできたのは第7軍の司令官であるバイパー少将本人だった。遂に首脳級の人物まで毒牙に架かってしまい、第7軍の崩壊も近いことが察せられた。また小野里は勇の安否についても心配を寄せていた。情報戦に疎い勇のことだ、未だに戦鬪に集中して内側からの崩壊に気づいていないかもしれないと考えていた。しかし、そう考えていただけにバイパーと共に死体として運ばれてきた人物に目を見張る。

「おっ！死体に反応したぞ！」

「死体を目にするのは初めてか坊主？」

小野里の反応を見て喜ぶ兵士の嘲りなど気にもせず、その姿に目を奪われた。なんと

その死体は今しがた心配していた勇その人だった。よく見ると死んではおらず、死んだふりをしているようだった。左胸に弾丸の跡があるが、おそらくネウロイ化した皮膚により弾丸が貫通せず、修復してしまったことが伺えた。ただこんなにも好都合で、バカげた状況に啞然としてしまったことがさらに見張りの兵士のツボを刺激させた。

「怖くて声も出ないってか?!こりやあいいい!」

「お前らみたいな敗北主義者にはお似合いだ!」

「ああ笑った笑った!おい、外の様子見に行こうぜ!今頃お仲間をあほ面晒してる頃だぜ!」

そう言うとき見張りは倉庫の外に出て行ってしまふ。小野里は出て行ったことを確認すると死んだふりをした勇に声を掛ける。

「勇中佐！何してるんですか！」

「小野里か、生きていて何よりだ」

「暢気なこと言つてないで早くここから逃げましょう！」

相変わらずのマイペースに今自分の身体が自由だったら確実にひっぱたいていたと、ムキになる。しかし、それでも暢気に胡坐をかいて落ち着き始める勇はこれまでの状況を話し始める。

「やつら空挺降下でこの街を占領する気だ。この街を占領して何の得があるんだろうな」

「あなたって人は！こんな相手が私たちのことを勘違いしてくれている奇跡のような時

間に！早くこの拘束を解いてください！」

勇は小野里の拘束を解くべくようやく立ち上がるが、またもや何かを考えだしたのか手を止める。もどかしさに拘束を解いたら必ず一発喰らわせることを固く誓った小野里は苛立ちを隠さず説教する。

「この状況を理解しているのですか?! 今逃げればこれから機会はいくらでもやってきます！ だから早くここから……」  
「待ってくれ」

小野里の言葉を遮る勇はこれまでになく真剣な顔つきで熟考し始める。もどかしい

小野里を差し置いて何かに思いを馳せる勇に内心冷や汗が止まらなかつたが、こうなつた勇は止められないことはこれまでの行動でよくわかつていた。そして遂に勇が顔を上げる。

「小野里、やつらの目的つて第7軍への攻撃じゃないんじゃないか」

「・・・どういうことです？」

小野里は勇の考えている考えが見えてこないことに動揺していた。情報将校として活動してきたこの方、時勢を読み間違えたことは少なく、正しい物事の見方をしてきた自負もある。それなのに勇が考える自分の予想と違うという言葉には抗えない力があつた。



「やつらの動きがどうも腑に落ちない。どうして今頃になって姿を現した？第7軍に紛れてまでネウロイと戦うことまでしながら．．．説明がつかないだろ」

「そんなこと悪人のすることです！我々には計り知れませんが」

「いいや、悪人だからと言って意味のないことだとは俺は思わない。俺たちは何か大切なことを見落としてはいいのだろうか」

考え込む勇を前に、小野里は殺されたバイパーを見る。彼も道半ばで倒れた同士である。そんな司令官を見て何も思うことがないわけでもない。小野里はもう一度自分が見落とした何かに思考を巡らしてみる。

「．．．第7軍に扮し、突発的なネウロイとの戦闘、及び戦闘後に第7軍とフランクフルトの包囲・占領。確かに彼らの目的と意図が分かりません。そもそも彼らの目標は我々

であり、この街や第7軍の彼らを包囲することになんら魅力は……」  
「それだ！」

突然の勇の大声に急いで勇を肩で小突く。外の誰かに聞かれてはたまらないと勇を落ち着かせようとしたが、勇はそれどころではなかった。

「小野里それだ！」

「声が大きいです！奴らに聞かれたらどうするつもりですか?！」

「そんなことより小野里！やつらの狙いが分かったぞ！」

勇は興奮気味に小野里の肩を揺すって閃きを煌々とした顔で語り出す。

「やつら、連合軍を壊滅させると言う大目標を利用して俺たちをおびき出すつもりなんだ！」

勇の目を輝かせた考えに小野里は一部納得を示しながらも首を縦には振らなかった。

「それは確かに一理あります。しかし、やつらの目標は原爆によって敵を殲滅し、世界を再編することです。ここに彼らがいるのは原爆を使用することは出来ません。第一、西方方面軍の主力がここに到着してもその戦力差は歴然です。逆に包囲殲滅されるのが落ちではありませんか！」

「確かに、だが自滅も視野に入れたのならどうだろうか。言っていたらどう？ シュベル

マン中佐の戦力は歩兵連隊だろ？ここに投入された規模はおそらく歩兵3個大隊と降下猟兵1個中隊程度だ。全力とは言い難い」

小野里は外の状況を見ていない為、勇の見て来た状況判断を信じるしかなかったが、確かにその規模しか投入していないとなると確かに何か他の手段を持っている気もしてきた。

「では私たちはこれからどうすれば・・・」

勇の案に乗るとしても今後の計画がまるで分らないのでは話にならないと、先に勇の

案を聞いておくことにする。すると勇は顎に手をかけ少しの間思案する。

「……第7軍を掌握し西方方面軍の主力を誘因する以上、少しの統率の乱れも許されな  
いだろう。それに奴らはまだ俺がここに潜入していることに気づいていない。となる  
と……これはいけるかもしれない」

「一体、何をするつもりですか？」

第7軍に潜入するときとは真逆の表情をする二人が出来上がり、勇は自分の作戦を小  
野里に話す。その作戦とは小野里をして驚くものだった。二人の視線は目の前に横た  
わるバイパーに向けられていた。

「まさか、バイパー司令に偽装して第7軍に反乱させるつもりですか?!」

「その絶好の機会が我々には与えられている」

「無茶です! あなたにはその手の才能がないことはよくわかっているでしょう?!」

勇の思い付いた作戦とは、バイパー司令に変装して掌握された第7軍の残存兵に蜂起を促すことであつた。しかしながら勇にはこれまでの潜入で露見した情報戦の経験の無さが決定的な欠点となつて立ち塞がっていた。だが、勇は小野里の目を真つすぐに見据えると、自分の信念を伝える。

「この第7軍および西方方面軍主力、延いてはフランクフルトを壊させはしない。人間同士の争いなんて言う愚かな殺し合いは、決して起きない! 俺がさせてたまるか!!」

勇は予てより人間同士の戦いの発端人であり、その火種を繋いでしまう存在である。しかし、それを未然に防ぎ、守ってきた勇の心には嘘偽りのない信念が横たわっていた。小野里は勇の決意を不安に思った。真つ向から勝負することになる今回の作戦では必ず死傷者が発生する。そうなれば、勇の信念が揺るぎかねないからだ。それを織り込んだとしても、今回の作戦の成功は今まで以上の戦火を誘発しかねる事態となることが容易に想像できた。だが、勇の目を見る限りでは勇の心は決まってしまった。決まってしまった以上、小野里ができることはもう限られている。小野里は大きいため息をつくと、拘束された手を出す。

「分かりました。どこまでもお供しましょう。では手始めに縄を解いてくれませんか？」

「・・・ああ、よろしく頼む」

解かれた縄を後に勇への整形を行う。魔法力で勇の顔を変形させ、バイパーの顔に寄せていく。ようやく左腕を復活させ上から包帯で隠すと、バイパーの遺体から服を拝借する。姿形もバイパーとなった勇は小野里に指示を出す。

「これより俺は第7軍の将兵に接近し蜂起を促す。小野里は各所にて混乱を起こす手筈を整えてくれ」

「分かりました。その時が来たら盛大にお知らせしましょう」  
「頼んだ」

小野里と別れ、倉庫から脱出を企てる。先ほどの見張りの兵士は興味を亡くしたのか



既にいなくなっており容易に脱出できた。勇がまず向かった先は司令部だった。恐る恐る中を伺うと司令部に在中する兵士がほとんど入れ替わっており、なにやら通信機器で外部と連絡を取っているようだった。あたりを見渡すとどこからか声が聞こえてくる。その声は以前小野里と話していた時計塔だった。

「あそこに誰かいるのか・・・なるほど」

目を凝らしてみると時計塔の中には司令部要員と各陣地の指揮官が集められていた。戦闘終了により報告に来た将校を軒並み拘束したらしいことが伺えた。同時に報告に来た将校の代わりにシュベルマンの部下が指揮官と入れ替わり部隊に戻っているようだった。勇は少し考える。

「つまり現地の兵隊はそのままに指揮官級を拘束することによってまるまる第7軍を乗っ取ったわけか。だから一部部隊を投入しのか。残りの隊員は戦闘要員だろうか。まずは指揮官を解放せねばな」

勇は目標を定めた。物陰から姿を現すと堂々と時計塔の見張りの兵士に声を掛ける。驚いた兵士は慌ててバイパーを装った勇を拘束しようとする。

「俺はこの司令官だ！少しは丁重に扱ったらどうなんだ！」  
「うるさい！虜囚の身で口答えするな！」

すんなり捉えられた勇はまんまと時計塔の中に侵入することができた。小野里が見たらきつと卒倒するような手純だろうが、勇的にはこれが一番のやり方だった。中に入ると薄暗い部屋の中から指揮官たちが驚いた様子で出迎える。

「司令……無事でしたか！」

「ああ、この通り左腕を少し怪我したくらいだ」

「我々はもう何がなにやら……突然空中から兵士が降下してきたかと思えば司令部を襲撃されて……」

皆一様に混乱の最中にあるようで項垂れていた。しかし、そんな彼らを一瞥すると勇は将校連中に喝を入れる。

「愚痴を止めよ！」

一際通る声で放たれた言葉で一気に視線を集めることに成功する。全員の息が勇に集中したことを確認すると勇は満を持して話し始める。

「諸君らはカールスラント兵である。いくつもの艱難辛苦を乗り越え、奪われた故郷を、戦友を、家族を、誇りを取り戻さんがために立ち上がった不屈の兵士である！我々のこれからの行動はこの瞬間を変えるのではない……これからの歴史を変えるのだ！」

「し、司令……今の我々にどうしろと？」

「教えて下さいっ！」

まだ戦意が衰えたわけではないことを確認した勇は口元を綻ばせる。それを見た将校たちは一様にほつとする。

「よいかっ！今仲間が我々の脱出の手筈を整えている。その時を待ち、一斉に部隊の指揮権を奪還するのだ！」

「了解いたしました！して、どのようにこの窮地を脱されるので？」

「私に妙案がある。おそらくこれまでにない激戦になることが予想される。各員は自陣に戻り戦闘態勢を整え、指揮権を奪取せよ」

勇の妙案とやらに首を傾げながらもようやく自分たちを導く存在の出現に希望を見

出す将校は輝いていた。元はカールスラント各地の激戦を戦い抜いた将兵だけあり、上からの指示さえあれば彼らはその真価を發揮することだろう。そんな期待を胸に勇は小野里の合図を待つ。一方小野里はと言うと、見張りの兵士の監視を潜り抜けある地点に到着していた。

「これで・・・よしっ！」

小野里の目の前には仕掛けられた爆薬がひっそりと輝いていた。勇が行動している間、小野里はフランクフルト中を走り回りあちこちに爆薬を仕掛けて回った。それはもうシュベルマンが今後の作戦に支障が出る程度には引つ掻き回せる自負があった。そして、小野里は勇のこれから行う作戦については知るべくもなかったが、あの勇のことだから無茶苦茶なことになることが予想され、それに乗じて勇を支援するべく行動するつもりだった。

「では作戦開始と行きますよう・・・点火っ!!」

轟音が各地で鳴り響く前、司令部を離れフランクフルトの街並みを二人の隊長が歩いていた。その二人は、フランクフルトの街を見て何も語らず、ただ歩いていた。寂れた町が息を潜める中、遠くを見つめるシュベルマンが声を吐き出すように隣を歩くケツセルリンク少佐に話しかける。

「ケツセルリンク少佐、貴官は俺の監視に来たのか？」

「我々の任務はあくまでアイヒマン局長代理の命令である、赤松勇中佐・・・いえ、反逆者を見つけ出し、始末することです。シュベルマン中佐の監視など・・・」

「ふんつ、降下猟兵なんていう精鋭部隊を俺の周りに配置するなぞ、監視以外の何物でもないだろう？ 即決裁判でもする気か？」

ケッセルリンク少佐と言われるこの人物は、ハイドリヒの部隊であるアインザッツ・グルツペンの中の降下猟兵大隊の指揮官である。降下猟兵とは精鋭中の精鋭集団であり、アスリート並みの運動神経と良識の知識を有する何を取っても優秀な兵科である。さらにケッセルリンク率いる降下猟兵はかつて任務で数週間の白兵戦を戦い抜いた実戦経験豊富な勲章持ちばかりを集めた猛者揃いだった。そんなケッセルリンクの正体は、アインザッツ・グルツペンの中核を為す虐殺部隊である。

「そのようなこと、仲間に対して行う道理があるとでも？」

「よく言う、オットマイヤーを殺しておいて」

「彼は命令違反を犯した犯罪者ですから。我々の中から犯罪者が出たことに我々も心を



痛めているのですよ」

ぬけぬけとよく言えるものだ。腹の虫が収まらないシユベルマンだったが、このケツセルリンクはアイヒマンの命令により勇と戦闘しながら取り逃がしたオットマイヤー戦車部隊の大半をフランクフルトの郊外南方で背後から急襲し、付近のネウロイに殺させていた。その攻撃がネウロイがフランクフルトの街を攻撃した本場に原因だった。そんな腹黒い人物に睨まれる中、町の至る所で爆発音が響く。その音に二人は顔を合わせて走り出す。

「ゆめゆめ忘れないことです。あなたはあなたの任務に全うすればいい」  
「ああ、しかと胸に刻んでおくさ」

爆発音により混乱が拡大する中、ようやく司令部に辿り着く二人は司令部だった場所を見つめて立ち尽くす。そこにはただの瓦礫が散乱していたからだつた。

「どうやら彼が動き出したみたいですよ。なんなら我々が手をお貸ししましょうか？」  
「うるさい、お前らでも外部と通信できなければどうしようもあるまい。大人しく我々の指揮下に入れ」

いちいち気に障る奴だと思っていると今度はまた違う方向から爆発音が聞こえる。一般の兵だけでなくシユベルマンの部下さえもその爆発音が聞こえる方向を見て立ち尽くしていた。全員が見るその方向からは地響きが近づいてきており、その震源は確か

にシュベルマンの脳裏に警笛を鳴らす。

「……総員配置に付け。誰であろうと銃を取れ、今だけは作戦を忘れよ……やつめ、やりやがったな！」

シュベルマンの目線の先には三回目を数えるネウロイの大集団による第三波攻勢が始まろうとしていた司令官であるバイパーの姿をした勇は銃を下ろすと息を吐く。思考の迷いなどなく引き金を引いた感覚だけが残る中、自分のしでかしたことの行く末を見守るのだった。

「俺たちは自分たちで殺し合ってる場合じゃないんだよ……さあ、お前たちの大好きな戦争だぞ。やったりやられたりしようぜ」

## 不滅の翼 第五話

第7軍は総員緊急配備を完了し、ネウロイの第三波攻撃の迎撃に躍起になっていた。フランクフルトの各所の爆発音をきっかけに始まった戦闘は、第7軍の兵士もシュベルマンの部下も躍起になって奮闘していた。当初の予定を狂わせられたシュベルマンも今だけは敵味方混然一体となって戦闘指揮に携わっていた。しかし、自分たちの作戦により司令部要員と司令官が不在の状況であり、さらい追い打ちをかけるように現場指揮官も拘束してしまったことによる圧倒的指揮官不足の状況を作り出してしまったことが追い打ちをかけていた。

「くそっ！前線部隊の動きが緩慢過ぎる！これでは半包围されかねんぞ！ケッセルリンクの部隊に応援を要請しろ！今だけは気色の悪い奴の手だろうと借りねばならん！」

怒号の飛び交う中、シユベルマンの部下が負傷を押しして報告に来ていた。

「シユベルマン連隊長！砲兵隊の残弾がもう間もなく底を尽きます！」

「な、なんんだと?!最悪だ：：最悪のタイミング過ぎる！赤松勇のやつめ！ふざけやがって！」

勇の所業に怒り心頭のシユベルマンを差し置いて、勇はと言うと最前線で陣頭指揮を執っていた。

「今だっ！攻撃開始っ!!!」

司令官自ら最前線に立つ姿を見て鼓舞される兵士たちは根気強く戦闘を続けることができていた。しかし、いつもと異なる司令官像に一部の兵士は疑問を抱く。

「司令官、本当に我々には希望があるのでしょうか？」

「希望、かね？君、その胸の勲章はどこで？」

「これはゼーロウ高地の撤退戦で授与されました」

「私もそこにいた。今我々はあの戦いを生き抜いたという歴史を持っている。希望は歴史を作るだろうか？否、歴史とはその場にいた人間の行動が編み出し、客観的な事実のみが希望を見出すのだ。つまり、我々は我々の行動にのみよってこの歴史の渦から逃

れることができるのだ。違うかね？」

勇の些か難解な話しに兵士は一瞬考えを巡らせているようだった。そんな兵士の姿を見て勇は塹壕から身を乗り出す。

「よく見ておけ。そしてよく覚えておくことだ。希望の有無が行動に付随するという客観的事実を」

勇はライフルの引き金を引くと、ネウロイが一体消し飛ぶ。目を見張る兵士たちが呆然とする中、勇は全戦線の兵士に向かって大声で号令をかける。戦場と言う混沌とした中でもよく通る声は、一瞬だけ勇に焦点を当てさせる。



「これより敵ネウロイに向かつて前進を開始する！敵はこちらを攻めあぐねている！古参兵、熟練兵、精兵諸君！我々の行動を、勇気を、精強さを見せつけてやろうではないか！笑え！走れ！撃て！そして私についてこい！私が希望を見せてやる！」

勇が前進用意を合図すると、各陣地の指揮官が指示に合わせて号令をかける。戻ってきた現場指揮官の掛け声に尻を蹴飛ばされながら、全軍での無謀にも見える前進が開始されようとしていた。その中、シユベルマンが指揮所で頭を抱えて絶叫にも似た何かを吐き出していた。

「なんだこれは?! 圧倒的火力の前に前進だと?! 数的劣勢の中での敵中央突破だ?! 一体全体どうなつていやがる?! なぜこんなにも統制が回復した!!」

「報告しますっ! バ、バイパー司令が最前線にて陣頭指揮を執っていると報告が……」

「バイパーだと?! 先ほど俺が撃ち殺したはずだぞ?! 見間違いではないのか?!」

舞い込む異常事態に眩暈がしてきたシユベルマンだったが、周囲から聞こえてくる突撃の怒号がその真実を突き付けて来た。明らかに異常な行動、バイパーのような愚鈍な司令官にはできないであろう勇敢な行動にシユベルマンの心の奥底に眠る血が沸き立つのが自分でも分かった。

「……俺も鈍つたものだな」

「連隊長?」

「総員バイパーに従うように下令しろ。俺もここを出ていく!」

シュベルマンはキョトンとする部下の背中を叩くと行動を急がせる。臨時の指揮所の天幕を出るとあちこちに指示を出す。シュベルマンの歩兵連隊は即座に行動を開始し始め、バイパーに扮した勇の部隊と共に前線に向かう。その光景を見ていた降下猟兵部隊の隊長であるケッセルリンクはこう呟く。

「やはりシュベルマン中佐も一時の感情に支配される旧時代の人間のようなですね。アイヒマン局長代理の意向を無視するとは笑止・・・肅清対象ですね。長いナイフの夜作戦を続行しましょう」

ケッセルリンクがそう部下に指示を出すと、無言で頷く兵士たちは装備を整えて行動

に移る。砲火が激しく木霊する街の中に消えて行つた。一方、工作活動を続ける小野里は勇の行動にも目を光らせ、いつもながら無茶苦茶な行動に呆れていた。

「やはりあの人のやる行動って……考えても仕方ないか。私は早く私のできることをしなくちゃ！」

小野里はこの基地に隠されているであろう秘匿兵器である原子爆弾の発見と、アインザツツ・グルツペンの妨害を目標に行動していた。そんな時、一部部隊が不穏な行動をしているのが目に移った。なぜ不穏だと判断できたかと言うと、他の部隊は勇の指示により最前線に根こそぎ駆り出される中、明らかに市内を移動する部隊が確認できたからだった。

「あれつてもしかして・・・勇中佐に報告しなくちゃ！」

小野里は強奪してきた無線機を手に取り勇に連絡を寄こす。轟音などの雑音が聞こえ、明らかに無茶をしていることが分かる音がノイズ混じりに聞こえて来た。勇が掠れた声で返答してきたため手早く報告を済ませる。

「こちら小野里、現在アインザッツ・グルツペンの不穏な行動を市内で確認しました！何か仕掛ける気です！私に対処しますか?!」

『いや止めるんだ!』

勇の中止要求に一瞬戸惑ってしまふ。しかし、勇はこういう人を殺めると言う行為に對して過剰に嫌悪感を示すことを思い出す。

「やられる前にこちらが動かなければやられてしまいます！」

『それは分かっている！しかし、こちらにもやつらの一派が続々と到着してきているんだ！』

「えっ?!部隊を二分したということでしょうか?！」

『いや、おそらく違う・・・なにか別の意思を感じる』

「別の意思?もしかして指揮官が二人いるとか?」

小野里は考えを巡らせるが敵が内部分裂する必要性を考えつかなかった。アインザツ・グルツペンとはその名の通り移動虐殺部隊であり、その統一された思想の下世界を再編しようとする狂信者集団なのだ。何か食い違っていると現実の齟齬の原因

を考えようとして止める。問題は現在の敵の対処であると意識を改める。

「分かりました、監視を続けます。でも、私はずいとは判断したら私はやりますよ?」

『・・・そうはならんよ。断言しよう。これから面白いことが起きる』

「面白いこと? 一体何です?」

小野里はなんだか嫌な予感がして辺りを見渡せる高台に登る。依然最前線では激戦が繰り広げられており、こんなにも敵と味方が混然一体となった戦場も珍しいだろうと考えていると、一抹の違和感が映り込む。何かは分からないがそれが確かな違和感であることは疑いようのない事実ということだけが分かる不快感がうるさく胸を打つていった。

「本当に一体なんなの……」

小野里の不快感は最前線に到着したシュベルマンにも伝わっていた。それは周りの兵士からも伝わってきていた。絶望的な状況はこれまでの戦闘経験から分かるであろう古参兵や熟練兵ですら、この戦場で死ぬとは思っていないような気炎を上げていた。そしてなにより司令官自ら最前線で本当に戦っていた光景を見れば狐に包まれた気分すらしていた。

「どうしてバイパーがここに……」

「連隊長、今ならやつを背後から撃てます！」

「そうだな、撃とう……いや、撃つな」

「連隊長どうしたんですか?! 俺たちあいつを殺すために今までたくさん殺してきたん



じゃないですか！」

部下の声が遠く聞こえる気がした。それほどにシユベルマンは混乱していた。この状況の光景を過去の記憶と重ねていた。それは故郷のカールスラントをネウロイに奪われ、部隊が追い込まれた絶望的な状況で遅滞戦闘のみを行う愚鈍な指揮官、当時は大佐だったバイパーの姿だった。普段から好まなかった指揮官だったが、あの絶望的な状況においてなお兵士を無駄に消費するだけの指揮官に心底憎悪を抱いていた。その時一現場指揮官だった自分は独断専行を取り、多くの部下を失ったものの何とか窮地を脱出したのだった。

「あいつは屑だ……そのはずなのになぜだ。兵士の命なんぞ欠片も考えていない、自分に与えられた命令をこなすだけの機械のはずだろ？どうしてこんなことができるんだよ……」

目の前に広がる光景にはかつての上司がおり、愚鈍と嘲笑った指揮官が部隊を率いて善戦している。人はなかなか成長できないものだ。何がこのバイパーという男を変えてしまったのか知りたくなってしまう。そして、目の前の仇はまたもや驚きの行動に出る。負傷した兵士を引きずり木陰に隠すと司令官自ら傷の手当てをし始めたではないか。

「大丈夫か！まだやれるな？」

「はい、まだお供させてください！」

「その意気だ！ここで仲間の進軍を援護してくれ！君の働きに感謝する！」

「はいっ！精一杯務めさせていただきますっ！」

自分の記憶の齟齬がだんだんとシユベルマンの胸を苦しめる。シユベルマンはその痛みをかつての嫌な記憶でいっぱいになしようとす。

『なぜこんなところで留まっているのか！その理由をお聞かせ願いたい！』

『上からの命令だ。この作戦の意図は貴官も理解しているだろう？』

『それではこの部隊は全滅です！ここで我々が全滅してはそれこそ作戦が頓挫するのです！』

『これは命令だ！君は私の命令に従えばそれでいいのだ！』

この記憶はシユベルマンの胸の奥底にしまわれた忌まわしい記憶の一端である。当時、シユベルマンはパイパーの部下だった。祖国がネウロイに踏みこじられようとして

いる中、現状を一番理解しているのは現場であり、その現場を指揮している自分であるという自負があった。それなのに上司であるバイパーは祖国を捨てようとしているそのまた上司の言うことをただ実行するだけの案山子も同然だった。だからシュベルマンは自分の意思に従い行動した。その結果、部隊の4割を失うことになったが全滅は免れたのだった。それだけに今のこの現状の不合理性にただ突き動かされていた。

「第7軍の側面を援護するぞ！射撃開始っ！」

勇はじわじわと前進する部隊と共にネウロイを押ししていた。しかし、これは一時的にこちらの氣勢に押された戦線というだけであり、ネウロイならばたちまち体勢を立て直すことは目に見えていた。そこで勇は仲間の勇戦奮闘ぶりを目に移す。崩壊しかかっていた第7軍の兵士たちやシュベルマンの部隊までもが一丸になって敵に立ち向かっ

ているのだ。だからこそ勇は自分の持ちうる限りの幸運を使い果たす。攻撃の粉塵が周りを包む瞬間にバイパーの変装を解き、勇自身に戻る。そして、ネウロイに向かって最大威力の攻撃を仕掛ける。

「俺は……だあああああ!!!」

その声は市内にいる小野里やケツセルリンクの耳にまで轟いていた。しかし、勇はそれだけが目的ではなかった。その本当の目的とは、フランクフルト郊外の林の中にある存在に向けて放ったものだった。単身孤立した勇に群がるようにネウロイの大群が押し寄せる中、勇は不敵な笑顔を張り付ける。

「馬鹿で助かる」

勇に向かったその砲口は火を拭かず消え去る。轟音の正体にネウロイのみならず、前線部隊の全てが驚愕と歓喜の表情で迎える。

「戦車部隊が応援に来たぞおお!!」

「パンツァーフォー!!!」

大勢が歓声を上げてさらに意気軒高になる中、シユベルマン一味は尻餅をついてその光景に腰を抜かしていた。あり得ない存在の出現と、その正体が勇に手を貸すために参

上した事実にも誰もが脳の活動を停止させられていた。ケッセルリンクによつて反乱分子と見做されたオットマイヤー戦車部隊は、空挺部隊によりフランクフルト郊外の森の中に追いやられ、さらにネウロイとの不意遭遇戦により全滅したと考えられていた。しかし、蓋を開けて見ればその一部はこうして生存し、戦車部隊のエースであるヴィットマン少佐がその指揮を執っていた。

「赤松勇中佐あ!!来てやったぞおお!!」

戦車兵のエースことヴィットマンはそう叫ぶと、ティーガー戦車を自在に操りネウロイを平らげる。よく見るとようやく動いている傷だらけの戦車や車長のいない戦車も多く見られた。それほどまでに損耗しながらどうして敵であるはずの勇に突き動かされるのかシユベルマンには分からなかった。

「連隊長！聞きましたか?!赤松勇中佐です！やつがバイパー司令の変装をしていたんです！早く！早くやつを始末しましょう!!」

部下の催促もほどほどに、シユベルマンの意識は勇に向かっていった。どうしてこれほどまでに赤松勇という人物は人を惹きつけてやまないのか。話したこともなければ敵として認識していたし、今しがた出会ったはずの存在にどうしても何かを見せつけられているようで腹立たしかった。

「あいつは昔の俺だ・・・ただ、俺と決定的に違うことがある！それは背負った者の重みだ！今まで俺にも理解できなかったのはこれか！なんだってこんなくそつたれなこと



があるか!!」

シユベルマンはバイパーに扮した勇と自分自身の行動を取った勇の行動原理に注目した。そう注目せざるを得なかった。なぜならバイパーの変装をしたのは勇だが、勇の行動はバイパーの構想していた地帯戦闘の果てしない延長線上でしかなく、かつて自分が独断専行したような戦線に穴を穿って退路を確保する戦術とは雲泥の差があった。つまり、かつてのシユベルマンは守るべきものを守らずに逃げたという事実を全滅と言う恐怖によって正当化しただけの駄々だったと突き付けられたのと同義であった。

「俺の・・・俺の行動はただのガキの言い訳だっというのか! バイパーの指示は正しかったというのか?! 赤松勇の行動は愚鈍と称したバイパーの行動の延長戦上で戦っているに過ぎない・・・あいつは! 俺の大義を盗みやがった!!」

シユベルマンは目の前で繰り広げられる戦闘に目が釘付けだった。かつての自分の行動は戦術的に見れば確かに合理的でありうるだろう。しかし、戦略次元で見た時は必ずしもそうはならない。自分たちが抜けた穴は誰かが担わなければならない。自分の代わりの誰かが戦わなければならない。自分の行いは自分視点の独り善がりに過ぎなかったのではないか、そう思うと急に自我が崩れそうになるほどの喪失感に襲われた。

「俺は・・・俺は、ずっと間違っていたと言うのか？ バイパーは正しかったと言うのか？ じゃあ俺は何のために人の道から外れたのだ!？」

ガラガラと音を立てて崩壊する気がする視界が、自分自身を否定していることを認めようとしているようでシユベルマンは地面に手をつく。周りは必死にネウロイの迎撃をしている。仲間も第7軍もヴィットマンも勇も誰もかも自分が正しいと思う行動を心の底から望んで付き従っている。自分の居場所がもうないと断言されたような光景に絶望を禁じえなかった。そんな時、一筋の光が手を差し伸べる。

「立てっ！お前には足がある！手も勇気もまだ残ってるじゃないか！立ち止まるな!!」

その光は眩く自分を叱ってくれる。シユベルマンはこの瞬間を心底待っていた気がした。地位も大義も膨れた自分を律してくれる上司が欲しかったのである。自分でなんでもできるし、自分の行っていることのみが正しいと信じて来た、いや盲信してきた。

しかし、どこかで本当に正しいことなのかを問うてくれる、律してくれる存在をシュベルマンは待ち望んでいた。そして、その存在は言葉ではなく、行動によって示してくれた。自分が自信をもって正しいと思う『行動』によって示された。シュベルマンはその差し伸べられた手を取っていた。

「連隊長！そいつは敵です！赤松勇なんですよ!？」

「・・・もうやめだ」

「え・・・」

部下の困惑した声を部隊を統率する立場の者としてきちんとした決断を持って伝える。

「これより我々は、我々の任務に戻る！我々に与えられた任務は、守るべきものを守り抜くこと！そのために戦い抜くことだ!!」

過去と決別する旨の宣言は部下を驚愕と共に真実への回帰を果たす。部下の顔はこれまでにないほど輝いていた。部下もきつと待っていたのだろう。自分とはなんと情けなく、守るべき部下さえも巻き込んでいたことを深く反省した。そして、手を差し伸べてくれた勇に声を掛ける。

「赤松勇中佐っ！意見具申よろしいか?!」

「この戦局を乗り越えられるなら何でも！」

「敵の攻勢が緩んだ今が攻め時だっ！機甲部隊と歩兵の混成部隊の浸透戦術を提案する

！」

「ああそう言うことか！」

勇に認めてもらえることにこれまでにない喜びが込み上げてきた。旧知の仲のような信頼感を背にシユベルマンは部下たちに命令を出す。

「タンクデサントだっ！戦車に乗って敵の後方へ浸透する！」

「連隊長！本当にやるんですね?！」

「ああ！俺についてこい！」

「はいっ！」

勇はシユベルマンたちを見送るとヴィットマンにも作戦を知らせる。手信号で力強

く『任せろ』と送られてくるあたりなかなか良い組み合わせだと思う。勇は第7軍の各部隊を集結させると、シユベルマンたちの成果を見守る。中にはシユベルマンたちの部隊の存在を不思議に思うものも出てきていた。

「あんなやつら第7軍にいたか？」

「それにバイパー司令はどこにいったんだ？」

「まあいいじゃねえか！どこのどいつだろうと！」

勇も顔を綻ばせて話を聞いていると、見る見るうちにネウロイが後方から崩れていくのが分かった。周りもざわつき始め、俄かに戦局は優勢だと理解出来てきた。各陣地の指揮官は徐々に突撃の合図を準備し始めた。勇もここで一仕事とばかりに立ち上がると前が出る。

「おいその兄ちゃん！あぶねえ．．．ぞ？」

だれかが呼びかけた声は勇の明らかに魔法力を発現させた光景によつて中断される。勇により濃縮される魔法力は前方で立ち往生するネウロイ目掛けて放たれ、その土地ごと耕される。その決定的な攻撃を前に、勇の正体を各陣地の指揮官は把握したのだから。彼らも同様に顔を綻ばせると声を張り上げる。

「突撃い!!!」



一斉に駆けだす第7軍の兵士たちは各々気炎を出していた。一糸乱れぬ突撃は虚を突かれたネウロイをあとという間に駆逐し、ここに第三波攻防戦の幕は下ろされたのだ。この戦いを生き抜いた兵士たちは皆一様に勝利ではなく、自身の生存を無言で実感した。握りこぶしを作る者、地面に手をつく者、天を見上げる者と三者三様ではあったが、皆その希望を噛みしめていた。それは勇もまた同様だった。

「終わったか……」

「赤松勇中佐」

声を掛けられた方向をみると、そこにはヴィットマンとシュベルマンたち部下が並んでいた。勇は黙って敬礼を向ける。すると彼らも同様に敬礼を返す。誰ひとり無傷の者はいなかったが、誰一人として暗い顔の者もいなかった。

「赤松勇中佐、我ら元アインザッツ・グルツペンの歩兵連隊連隊長を務めていたアインツ・シュベルマン中佐であります」

「同じく、戦車大隊の元副長でしたヴァイツトマン少佐です」

「ご苦労・・・まずはそう言わせてくれ」

三人は握手を交わすと互いの顔を見て頷き合う。それが挨拶だと言うようにしつかりと見定めた。そして、シュベルマンが本題を切り出す。

「勇中佐、我々はあなたに降伏します。見ての通りもうあなたに対する戦意は失せました。もう人を恨んで生きていきたくはありません！そして、あなたの生き方をもっと見たい・・・そう我々で話し合いました」

「そうか・・・バイパー司令もさぞ喜ぶだろうな」

「バイパー司令、がでありますか？」

シユベルマンは驚いた顔をしていた。当時、独断専行をしたのは事実で、さらに彼を見限り無断で離隊をして敵対すらした。そんな自分に対してかつての上司は称賛を送るのだろうか、そう言った苦悶の表情が浮かんでいた。

「そうだ、バイパー司令はいつも君を尊敬していたよ」

「尊敬、でありますか？」

「ああ、君のようでありたい、畏怖さえしていた。彼も君のようであれかしとこの戦いの初戦を飾ったのだ。だから、彼もきつと今の君を見れば喜ぶだろうよ」

「ああ・・・そうでしたか・・・そうでありましたか・・・」

シュベルマンはこさえた涙を軍帽で隠す。自分の手で後ろから貫いた弾丸は、そんな存在を砕いてしまった。今猛烈にかつての上司であるバイパーと話したくて仕方がなかった。しかし、その存在は自分が殺してしまったのだ。悔やんでも悔やみきれない行いに、部下も涙を流して共に分かち合ってくれる。それだけがシュベルマンの救いだつた。

「ありがとうございます、勇中佐……決めました。我々はこれより来る西方方面連合軍主力に事情を話して投降するつもりです。その前にあなたにインザツツ・グルツペンのことについて話しておこうと思います」

勇は味方となったシュベルマンの告白に耳を傾ける。しかし、その耳は別の飛翔音を

捉えると同時に小野里からの警告が鳴り響く。それに気づかないシュベルマンは情報を口にしようとしていた。勇は咄嗟にシュベルマンに駆け寄るも、シュベルマンは気づかなかつた。

「我々の、ハイドリヒ長官の本当の目標は……」

その瞬間、砲撃はシュベルマンと勇の間に着弾する。突然のことに第7軍も衝撃に包まれる。砲撃の土煙が晴れる頃、勇の声が響き渡る。耳の奥で鐘が響き渡る中、勇も必死に声を張り上げる。

「衛生兵!!!」

「連隊長っ!!」

「シユベルマン中佐!!!」

その声に応えたのは冷徹な声だった。

「おやおやどうぞやら正確に誤爆してしまったようですね」

「誰だ!」

勇が顔を向けると、そこに立っていたのは降下猟兵部隊のケッセルリンクだった。大勢の部下を引き連れて第7軍を包囲していた。不気味な笑顔を向けてツカツカと歩み寄るケッセルリンクに、勇は生理的な嫌悪感を抱いていた。

「お前が指示したのか」

「ええ、反逆者には平等に死を。こちらでも仕事ですのでね。悪く思わないでいただきたい」

「仕事？仲間を爆殺することがか？」

「仲間？その仲間とやらはどこでしょうか？残念ながら私には見えませんがね？」

ケツセルリンクはおどけたように辺りを見渡す仕草をした後に勇とう勇に抱えられたシユベルマンを見て笑っていた。

「軟弱な思想に囚われ、敵と手を結ぶ者など仲間ではあり得ません。それに抹殺し損ね

た屑鉄の残党もいることです。当初の作戦とは大分異なりますが、これで私の命令は完遂です」

銃を向けられる勇と第7軍の兵士たちは一様に何が起きたか理解していないようだった。勇もこのケッセルリンクの存在を知らず、完璧に背後を固められてしまった。勇の描いた最悪の想像に王手をかけたこの状況に勇すらも歯噛みしていた。

「敗北主義者の集まりである第7軍と、反逆者集団を一網打尽です。さすがは私のエリート部隊ですね！」

撃鉄を上げて拳銃の銃口を向けてくるケッセルリンクに、勇は動くことができずにい



た。自分はシールドを張れば生き残れるだろうが、周りの者すべてを守ることは出来なかった。ケッセルリンクはそのことも織り込み済みで手配したのだろう。作戦失敗の四文字がここまで絶望感を与えたことに勇は憎悪を燃やすことだけしかできなかつた。今この場で皆殺しにすることは出来る。しかし、それは勇の本意ではない。自分の力の使いどころを誤れば、それこそ災厄になることだってあり得るのである。勇は自分の中で膨れ上がる力が湧き上がってくるのを感じた。それは現象として勇の身体に現れ始める。

「おや？勇中佐の首筋が・・・これはこれは?!アッハッハッハ!!!」

木霊するケッセルリンクの笑い声だけがこの場を支配する。ケッセルリンクは一頻り笑うと勇のことなど気にせず、勇の左腕の包帯を取り払う。するとそこから見える黒い幾何学模様、口角を上げるのだった。

「あなたを人間ではないと思っただけはいいましたが、本当に化け物だったとは!! 傑作ですよ!」これで局長の目標は達せられるというものだ! あはははは!!」

「その人を開放しろ!」

ケッセルリンクの笑い声の合間から抜けてきた声に全員動きが止まる。ケッセルリンクは後ろを振り向くと、なんと第7軍の兵士たちが銃を構えて攻撃態勢を取っていた。

「貴様ら敗北主義者はこの状況すら理解できないと見た! お前らは包囲されているんで

すよ？銃を下ろすのはむしろ貴様らです！」

「お前こそ分かっていないな！」

「なんだと？」

第7軍の兵士たちは少しも動揺の姿勢は見せず、ケッセルリンクたちを狙っていた。その不動の覚悟にケッセルリンクが逆にたじろぐ。

「その人らは俺たちの仲間だ！俺たちの希望だ！」

「てめえらが何者かは知らないが、やらせはしない！」

「屑の分際でっ!!」

ケツセルリンクの青筋が見え、拳銃を構えるも兵士たちはさらに眼光を強める。一色  
触発の事態に勇たちは包まれる中、小野里から通信が入る。

「勇中佐！ご無事ですか?!」

「小野里?!」

「届きましたっ！届きましたよ！」

小野里の気色に満ちた声の背後からは履帯の擦れる音が断続的に聞こえてきていた。それは明らかに勇たちの方向に向かってきており、その規模がこちらより多いことが伺えた。それに気づいたケツセルリンクも青天の霹靂のごとく意表を突かれた表情となっていた。

「ま、まさかつ?! 西方方面軍の主力?! あと一日は猶予があるはずなのに!」

ケッセルリンクの言葉の通り、フランクフルトに到着した一団は西方方面軍主力のカールスラント第5装甲軍団とリベリオン101空挺師団だった。その指揮官はアフリカで勇名を轟かせたロンメル將軍、その人であった。

『第7軍の諸君ンン!! 遅参誠に申し訳ない!! これより第7軍に合流する!!!』

ロンメルはその電撃的な進軍速度で四日かかると言われた道中を三日で駆け抜け、電撃的にフランクフルトに進駐しようと進軍して来ていた。その様子に慌てたケッセル

リンクは市内にいる部下たちに指示を出す。

「おいっ！やつらに今市内に入られるわけにはいきません！やつらを砲撃しなさい！」  
『・・・』

「どうしましたか?! 応答しなさい!!」

『ええ、こちら小野里。砲兵陣地の制圧を完了しましたよ、ケッセルリンク少佐?』

小野里の声にケッセルリンクは通信機を見てしまう。見たところでどうにもならないのだが、自分の完璧な計画がこうも急激にへし折られることが理解できなかった。なにより周りを見渡すと降下猟兵部隊の大半が逆に銃を突き付けられた状態で降伏を余儀なくされた状態だった。形勢逆転の自明を感じ、ケッセルリンクは笑うしかなかった。

「あはは：：はっはっはっは！ エリートは、 エリートは決して失敗しないのですよ：：」  
「ケッセルリンク少佐、諦めろ」

勇がケッセルリンクに向かつて降伏を促す。脆くも崩れ去った作戦を前に、無駄な争いは望まない勇はケッセルリンクを氣遣つてみせた。どんな人物であろうと居場所などそうそうなくならない。ただ生き方のベクトルが違うだけなのだ。それを元に戻せさえすれば降下猟兵部隊などの優秀な人材は必ず役に立つ。それが分かっていると信じていたが、ケッセルリンクは最後まで足掻こうとした。

「近寄るな化け物めっ！：：一つ教えてあげましょう。あなたは世界の敵です。そのために原爆はある。だからこそ原爆は人類にとって救いの炎となるのです！」

「その原爆はどこにある！教えろ！」

「さあどこでしょうね？諦めろと言いましたか？そっくりあなたにお返しますよ！」

そう言うとそれまで勇に向けていた拳銃を自分の顎の下に向けてると引き金を絞ってしまった。答えの得られないまま、フランクフルトの街は静かに戦闘を終了した。勇は片手を顔の前で立てると黙とうを捧げる。そこに息を荒げた小野里がやってくる。

「西方方面軍が到着します！合流しますか?!」

「・・・いや、合流しては彼らの名誉に関わる。この事件はなかったことにする必要がある。そうだな、小野里？」



小野里に強い目線を送る。それを聞いたヴィットマンは急いで戦車に乗りどこかへ消えてしまった。その光景を見ていた第7軍の兵士までも降伏したケッセルリンクやシユベルマンの部下らを迎合して証拠を隠滅することに加担し始めた。この場のだれもがこれ以上の失態を良しとしない姿勢の表れだった。小野里は溜息を吐くと勇の意見を尊重する。

「はあ、勇中佐がそれでいいなら私に異論はありませんよ」

「すまない小野里……」

「いいえ、でもまた逃亡生活ですか」

荷物を颯爽と背負い、ロンメルたちにかち合わないように反対方面に逃げ足を向けると、不思議と周りの兵士たちは敬礼を捧げていた。無言の見送りは勇の姿が見えなくなるまで続いていたのだった。

## 不滅の翼 第六話

フランクフルト攻防戦の情報が連合軍に伝わった頃、501基地では既に定例となつてしまつた緊急会議が発動していた。会議の発起人である501統合戦闘航空団司令のミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐は不足した睡眠時間による頭痛と格闘しながら、会議の開始を宣言する。

「これより赤松勇中佐の動向を確認するための会議を開始します」

議場にはミーナの他に、副司令としてゲルトルート・バルクホルン少佐の他、連合軍から派遣されてきた坂本美緒、扶桑海軍少佐、506戦闘航空団元司令のエドムント・グリュンネ少佐がやってきていた。四人の顔色は良くなく、ミーナ同様に事の重大さによ

つれているようだった。最初に元506のグリユンネが発言の許可を求めていた。

「グリユンネ少佐、お願いします」

「はい、こちらからの現状報告をお伝えします。先日報告させていただいたマジノ要塞攻防戦での戦闘詳細がようやく情報開示されました」

「それで、なんと？」

グリユンネは渋い顔を無理やり苦笑程度まで持ち上げると、暗い雰囲気には拍車をかけることを詫びるように報告する。

「マジノ要塞は『カール自走臼砲型ネウロイ』及び『人型ネウロイ』との『交戦』を明ら

かにしました・・・」

『交戦』・・・ですか。カール自走臼砲型ネウロイとだけではなく?』

「残念ながら」

グリユンネの報告は会議の場を重くするのにはうってつけだった。しかし、毎度のことながらバルクホルンが議場に水を差す。この場で水を差すのは本来ならこの言葉の通りの意味になるのだが、この会議においては例外的だった。

「人型ネウロイがユウという断定はできない以上、落ち込む必要はないと考えるが」

「・・・そうね、その通りだと思うわ」

「そもいかないらしいぞ」

今度は坂本が重い腰を上げて報告を上げる。ミーナは既にこめかみを抑えて頭痛を回避しようとしていた。

「連合軍最高司令部ではこの件を重く受け止め、この人型ネウロイへの攻撃計画を起草するように命令が出た」

「なんだって!？」

「マジノ要塞司令官がネウロイと断定し、実際に被害を被っている。それに・・・」

坂本も口籠る内容に、グリウンネも同様の表情を見せる。おそらくグリウンネの下にも同じ内容の情報が来ているのだろう。それを坂本の口から言わせるあたり、自らの胃腸にかかる負担を回避した名采配と言えよう。

「現地部隊の報告で人型ネウロイの人相書きが上がった。それだけでなく、出どころ不明の写真がその人相書きと一致した」

坂本がテーブルの真ん中に押し出した資料は明らかに人の形をし、見覚えのある出で立ちをした人物が写っていた。その人物を見て弁護したはずのバルクホルンですら腕を組んで押し黙ってしまうほど明らかだった。ミーナは一度溜息を吐いて消えない徒労感を心の中で分別しながら会議を進行させる。

「この写真から赤松勇中佐の生存は確認できたことを喜びましょう・・・さて、続いてで

すが損害の確認です。各地で発生している大規模な戦闘による損害について情報を共有できたら幸いです」

「マジノ要塞からは要塞の一部が敵勢力によつて損害を被つています。詳細は防衛拠点の一部が破壊され、その際に2個中隊分の負傷者が出ています。また、全線にて備蓄弾薬に甚大な損耗を報告しています」

グリユンネによる損害の報告には一考の余地があるとして以前から報告の対処を退けていただけに、慢性的な報告による精神的負担が大きくなっていった。しかし、それだけに抗議の声が沈静化しない事実には頭を悩ませていた。と言うのも、501には勇と作戦行動を共にしていたことが起因して勇の行動の責任問題が生じていたからだった。勇が十全に気を配っていたことでも、僅かな綻びから勇と501が結びついてしまったのである。

「犠牲者については私からお悔やみを出しましょう。しかし、戦略物資の枯渇及び備蓄の損耗については管轄外です。現地司令官のガムラン上級大将がそのようなことを仰るのか甚だ疑問ですね」

「ああ、先ほど提示した写真といい、出どころ不明な情報が蔓延しすぎている。これでは我々の立場やウィッチの存在そのものが潜在的脅威になりかねんぞ！」

坂本の指摘は、凡そ正しかった。勇が関わってきた人物はおおよそウィッチ部隊に広く交友を結んでおり、グリユンネも一度506に勇を入隊させようと画策したことから506の司令官の座を追われている。とまれ、グリユンネにおいては年齢的に隊長職を辞退しようと考えていただけに渡りに船の状況ではあったのだが。しかし、グリユンネにも言い分はあった。

「そうですね、私も上からの要請により勇中佐を506に招待したにすぎません。おそ



らく責任を被せられたのでしようが、あまりにも準備万端といえますか・・・」  
「そんなのやつらに決まってるじゃないか！ハイドリヒの部隊！アインザッツ・グルツペンの仕業だ!!」

バルクホルンが立ち上がり、断言するその言葉の正体は現在進行形で勇と敵対する、アイヒマン局長代理が務めるアインザッツ・グルツペンそのものだった。しかし、この部隊の存在が最も厄介であることは誰しもが分かっていた。

「バルクホルン少佐、それは私たちも良く分かっているわ」

「じゃあ!」

「彼らは・・・透明マントでも来ているのでしようね」

「・・・は?」

バルクホルンが肩透かしを食らったとばかりにミーナを見つめる中、ミーナは坂本に視線を移す。坂本も事情を察しているのか再び立ち上がり入手してきた情報を説明する。

「一言先に断っておこう、目ぼしい情報はないと」

「坂本少佐!？」

「バルクホルン、我々は彼らの力量を完璧に見誤っていた。つまりは我々の敗北だ」  
「そんな・・・」

バルクホルンが肩を落として椅子にもたれ掛かる。天井を仰ぎ見ても灰色の天井は

何も語りかけてはこなかった。天井の染みだけが星のように広がるだけで、バルクホルンは染みの星から北極星を探そうとして止まなかった。

「ユウ・・・今どこで何をしているんだ」

その時だった、坂本の副官である土方が慌てた様子で入室してくる。そのただならぬ様子に坂本とミーナは腰を上げる。土方からもたらされた情報はバルクホルンの眩きに正しく答えるものだった。

「フランクフルトだそうだ」

「?!」

「坂本少佐、詳しくお願い！」

坂本が資料をめくる音と共に視線が突き刺さる。その紙に勇がいると思うばかりの熱量が注がれていると形容すべき情報が記載されているのもまた事実だった。

「先日、カールスラントのフランクフルト市においてネウロイと現地部隊との大規模な都市戦が勃発。第7軍は援軍のロンメル將軍率いる西方方面軍主力部隊の到着まで3日ほど耐えきったそうだ」

「坂本少佐、それで、ユウは？」

「・・・記載はない。だが」

坂本の言葉の意味が分からず憶測が錯綜する中、坂本はただ紙の資料に嘯みついて理解しようとしていた。それをミーナが静かに取り上げて代わりに代弁する。

『現地部隊は一樣にこう証言している。戦闘終了を告げたのは軍人でも将軍でもなければ、人間でもなかった。ただ、我々は“それ”によつて戦闘を開始し、“それ”によつて勝利と形容すべき何かを目にさせられたのだ』と……これは一体」

ミーナは坂本と同様に資料に目を釘付けにされていた。辛うじて意識を別の添付資料に向けた坂本の追加情報に五感を引き戻されるまでは永遠とも取れる時間を紙に費やしたのだろうか。

「追加情報だ。西方方面軍主力はフランクフルトで人為的な戦闘の痕跡が見られたとも報告している」

「人為的？人が戦争をしているのだから、人為的なのは当たり前だろう？」

「バルクホルンよく聞くんだ。戦争ではない。戦闘だ」

坂本の『戦闘』という言葉にバルクホルンは疲弊した脳を回転させる。ほどなくして回転させる必要もないことに結論として至ってしまう。言葉を失っているとミーナが結論を急ぐように言葉を紡ぐ。

「人間同士による戦闘・・・第7軍はカールスラントの古参兵を集めた部隊よ。それが仲間割れをするとは思えない。つまり、誰かが人間を殺し、内乱を誘発した・・・ユウと小野里さんは、そこにいたのね」

ミーナの結論が真実であると誰もが確信した瞬間だった。このネウロイとの大戦において、人間同士の戦闘が行われたことなど前代未聞であった。また、その証拠が拳がらあないという不安要素自体が、勇と小野里の存在の間接的証明だった。明らかに誰かが隠ぺいしており、勇らが関与していることは明白だった。

「ユウ、あなたはまだ人間でいられると言うの？」

「ミーナ、それは前に言っていたユウの身体がネウロイになってしまふことへの予兆か？ それとも……」

「そのどちらもよ、坂本少佐」

坂本が言いかけた言葉の続きを、ミーナは知り得ていた。認めたくはない勇の本質の変化を言葉に出してしまうと、本当にそれを認めたことになってしまいそうで恐ろしかった。しかし、もう戻れないのであるという予測が肯定してしまっていた。しかし、その言葉の続きを知りたがる、いや拒絶する人物こそがバルクホルンであった。

「ミーナ！ユウが、ユウが何だと言うんだ?!ユウは！私たちの仲間だっ！仲間がネウロイになってしてしまうだ?!撤回しろ！」

「トウルルーデ・・・私たちは認めなければならぬ所まで来てしまった。いいえ、彼がそこまで到達してしまったのよ」

「わからん！わからんぞ！私にはわからない！ユウは世界最多のネウロイを倒し、我々と共にベルリンを奪還したじゃないか！ユウがネウロイになるだど？馬鹿なことを言うのも大概にしてくれ！」



ミーナの胸倉を掴んで精一杯の虚勢を張つても、ミーナの目はバルクホルンの聞きた言葉は紡げなかった。経験という名の教師が思考を憚ることはあつてはならないと、ミーナは考えている。それが士官の務めであり、将校の誇りである。それ故に、勇の行動が齎す対外的な影響を正しく認識し得ていた。しかし、それは過去形の代物であり、ミーナ自身も消化可能な影響だと自負していただけに、己の怠慢を悔いていた。人間とは恐怖が伝播する高次的な唯一の動物であると言う欠点を、誰しもが欠落したまま考えていたことを猛省するばかりだった。

「待つて・・・」

「ミーナ？」

「待つて待つて！ 私たちは何か見落としていないかしら！」

「ミーナ中佐？」

ミーナは今一度猛省したことを繰り返して整理してみた。自分は悪いと思ったことに對して平謝りしていないだろうか。反省は誰にでもできる。しかし、予防は治療に勝るといふ古典的裏打ちに促されるとしたらどうか。反省と言う治療を前提に考えていたために、今回の事態に直面しているのだとしたら、勇の行動について行ける者などいないのだ。それなのにアインザツ・グルッペンは勇を追隨しているのだ。それは予防を念頭に行動しているからと言い換えてもいいだろう。その真実によく到達したミーナは机を叩く。

「やられたっ!!」

「どうしたんだミーナ?」

「いたじゃない!」

「何がだ?」

誰も思い至らないことにこんなにも苛立ちを抱いたことはなかった。きつとやつも彼もそう思っていたのだろうと考えると、彼らの我慢は大したものだと表彰されてもおかしくないと賛美するほどだ。だからミーナは、思い至らない『愚かな人間』にも分かるように努めるのだった。

「人間は愚かであると最初から分かっていたやつよ！」

「それってもしかして・・・」

「あの人しかないじゃない！」

ミーナは最大限その人物の名前を発したくはなかった。それほどに記憶の彼方に葬らんとしていた人物を記憶の屋外に置いておいた自分が恥ずかしかった。己に課せら

れた自己矛盾とこころも対面させられる気持ち悪さも付け加えると、まさに亡霊が笑っているようだった。

「私はこれから至急連合軍司令部に向かいます！」

「ミーナ何をするつもりだ!？」

バルクホルンがミーナを諫めようと、飛び出す肩を掴むがミーナはその時間すら惜しく、さらに言えば既にミーナの頭は煮えくり返りそうなほど熱く、それでいて心はどこまでも凍てついていた。

「私は私にしかできないことを、為すべきことをします！あとの指揮はトゥルーデ、あな

たに任せるわ。美緒、連合軍各指揮官との意見調整を！グリユンネ少佐はどうかパイプを使って和解策を模索してください！」

「了解した！」

「分かりました。微力ながら務めましょう！」

「みんな何を……」

一人取り残されるバルクホルンは、どうしようもなく勇の姿を追っていた。自分には分からないことがみんなには見えていて、その先に勇がいる。自分には一体何ができるのかを考える時間だけが無情にも過ぎて行った。

一方、段取りを強引に取り付けたミーナは連合軍最高司令部に赴いていた。普段などは要請されて重い足取りで向かうものだが、今回ばかりは自分から進んで向かうことに自嘲気味に感じてすらいた。

「501統合戦闘航空団司令、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐入ります」  
「入れ」

短い言葉を聞き、呼吸を整えてドアを開ける。先ほどの電話越しでの急な面会予約ではミーナらしくらず声を荒げてしまったが、この部屋に入るときには随分と気分も頭も落ち着いていた。しかし、そんな様子のミーナを見ても動じない人物のシルエットに微かに怒りが込み上げてくるのだった。

「で、ミーナ中佐。こんな夜更けに何かね？」

「はい、オルハン中将閣下。今回伺ったのは他でもありません。閣下がご懸念の人物についてです」

「ほう、ちなみに聞いておくが誰のことかね？私には心当たりが多くてね」

ミーナの言うことが分かつていながらあえて惚けて見せる狸に、少しの侮蔑を心中で唱えながらミーナも駆け引きを続ける。

「閣下が今一番ご執心の方ですわ。お分かりにならないと？」

「君が来たと言うことは『あれ』なのだろうな」

「はい、閣下は彼を『あれ』とお呼びになるのですね。それは侮蔑的な意味でしょうか。それともそれ以外でしょうか？」

「それを答えてなんになる？ 私はミーナ中佐、君の抱える内在的問題点を知り得てなおこの物腰なのだがね」

ミーナは表情を動かさずに聞いてはいたが、このオルハンという人物はやはり一筋縄

ではいけないと踏んだ。オルハンが指摘するミーナの内在的問題という単語だけで、こ  
うも選択肢を消されるとは思ってもみなかった。それはミーナが抱えるウィッチとし  
ての寿命という問題だった。

「閣下のご機嫌を損ねたのであれば謝罪します。しかし、私は一軍人として、統合戦闘  
航空団司令として申し上げなければなりません事を平にご容赦頂きたく」

「私もカールスラント軍の一司令官であり、君と同じ軍人でもある。私は部下の意見を  
聞かんほど狭量な人間でもないと思っっているがね」

どの口が言うものだとある意味褒めるべき能天気な司令官に、ミーナは軍人として、  
一人の人間として意見を述べる。



「赤松勇中佐の身柄を保障して頂きたいです」

「無理だ」

即決で拒絶されることに諦めずにミーナは持論を展開する。むしろこんなに簡単に意見は覆らないだろうと対策は考えていた。それは、今日ミーナが続けている話し合いと言う口撃である。

「理由をお聞かせ願えますでしょうか？」

「第一に、あれは存在自体が厄介だ。第二に、あれが及ぼす影響はそれこそ世界を飲み込みかねん。最後に、我々はあれを味方であると認めない。以上だ。これで満足か？」

「大変満足しました・・・しかし、それでは閣下の主観的な感情視点での意見しか分かりません」

「なに？」

主観的、感情的といった一番嫌がるであろう言葉を盛り込んだ挑発はオルハンを完全にミーナを敵対者として認識させた。この段階をミーナは待っていた。

「閣下は彼を人間以外の何かと勘違いされているかと。将校として間違いは指摘させて頂きました」

「そうか・・・ミーナ中佐、貴官は私の考えが間違っていると申すか？」

「はい、そう確信しています」

「ほう、その根拠は？」

「はい、根拠は彼が人間だからです」

ミーナの放った根拠に、オルハンは一瞬呆氣に取られた。この一瞬という時間をミーナは攻撃の発起点として攻勢に移る。

「彼は私たちの声を聴く耳があります。そして、それに従う心を持ち合わせております。過分にも私には彼がネウロイ以上に閣下を怯えさせるような存在足り得ないと断言できます」

「その証左は？」

「彼の果てしない人類愛です。その証左も彼の行動如何を見て頂ければご理解いただけるものと確信しております！」

ミーナはこれまでの勇の行動と戦果を交えて思い出していた。勇はいつだって誰かのため動き、苦しみながらも誰かと手を携えて乗り越えて来た経験と実績がある。それ

はどんなに裏切られたと感じることであったとしても、結局は人類の、私たちの平和へと帰結しているのだ。この一点のみにミーナは終始していた。

「彼は我々と手段は違えども、目的は共有しております」

「ではマジノ要塞攻防戦での被害とフランクフルト攻防戦の人的損害について、彼の影響が全くないと言うのかね？」

「いいえ、否定は致しません。しかしながら、彼の行動に付随した大きな動きが衝突した結果であるという側面も見ないわけには参りません。その過程において、彼は数多のネウロイを撃破し、退けていると言う実績はどこからも否定的な意見は出ていないと、小官は認識しております」

オルハンは顎をさすりながらミーナの意見を聞いていた。互いの認識が共有しながら

らの会話は容易にその先にある真実も包括して見えていた。

「認識の相違があるようだな。我々はあれの実績ではなく被害を重要視しておる。いくら手柄を立てたとて、それ以上の悪事を働けば決して褒められたものではない。歴史的に見れば後世では後ろ指指される存在になり得るだろうて。私はそんな存在を野放しにした無能にはなりたくないのな」

「オルハン司令!!悪とはなんですか?!真に悪と言うのであれば、彼はどこまでも純粹で、純真で、純正であり、悪とは正反対の存在です!彼の行動原理は我々を守ることなのですよ!!」

ミーナはオルハンと言う人物がここまで狸であるとは思わなかった。先ほどの自分

の言葉に理解を示したかと思えば、認識の相違と一蹴して見せるその態度は曖昧なものに映っていた。だからこそ、ミーナとの話し合いは平行線を辿ろうとしていた。

「ミーナ中佐、貴官は優秀な指揮官であることは聞き及んでいる。しかし、勘違いしてもらつては困る」

「勘違いでしょうか？」

「ああ、大いなる勘違いだ」

オルハンは立ち上がり、窓のカーテンを開く。灯火管制が布かかっているとはいえ、司令官その人の行動はどこか物憂げでいて、どこまでも交わらない水と油だったことにミーナは齒噛みする。

「先ほどから言っているではないか。あれは悪なのだ。我々は設定した如何なる悪も許せない。我々は常に正義であらねばならないのだよ」

「・・・おつしやられている意味がよく理解できないのですが」

ミーナは嘘をついた。意味を理解するのは容易だ。しかし、知らないふりでもしなければ勘違いしかねず、その勘違いはこちらの身を焦がすと警告がひしひしと伝わってきた。明らかに放たれる『悪』という言葉は、設定されたもの、設定という言葉ほど軍隊に似合うものはない。設定を我々と言う主語を付けて放つことにより、もう間に合わないのである。間に合わないことに噛みつくのは馬鹿のすることである。その馬鹿にミーナは成り下がることに躊躇いを覚えるのだった。

「少し話を整理しよう。ミーナ中佐、貴官の所属する部隊の戦力はどのように認識されておる」

「・・・ウイツチ一人で航空戦力の1個小隊分、我々11人では増強大隊分の戦力として認識されています」

「それは謙遜が過ぎるであろう？ 周りからの評価は正しく伝えねばな。貴官らは世界からかき集めた精鋭中の精鋭集団だ。それが11人もおるではないか。つまるところ連隊規模か師団規模になり得る戦力だ」

上司からの手放しの称賛をここまで気持ち悪いと思ったことはなかった。ミーナはウイツチの部隊の実情を述べたまでだが、確かに周囲の認識ではそれ以上の戦力として認識され、あまつさえ501統合戦闘航空団ともなれば、ネウロイの軍団に対峙することのできる唯一の戦力となる。その事実を今ここで改めて説明されることの意味を真に理解できなかつた。



「連隊長レベルの指揮官ともなれば実績も十分だろう。ミーナ中佐、貴官もそろそろ引退して然るべき年齢だろう。どうだね、大佐の階級章が欲しくはないかね？」

「・・・それは事実上の口封じ、左遷でしようか？」

「栄転だよ。誇りたまえ。君がその気なら将官コースへの推薦も吝かではないぞ？」

「・・・お話は嬉しいのですが・・・」

話しのすり替え、怠惰なまでの現実からのサボタージュだが、ミーナは自分の生命が危機にさらされている現状を正しく、そして否応なく理解させられていた。よしんば真に昇進を薦められているのだとしても、二階級特進の意味するところを察すれば分からされるだろう。言いたいことは、これ以上突っ込むな、である。

「残念だな、では貴官に命じる他あるまい。ネウロイに対抗しうる精鋭部隊に、な」

「と、言いますと？」

「今ならば、地上に降りついている今ならば成算がある」

ネウロイと断定した上での成算への言及。ミーナは脳内でああ、と天井を仰ぎ見る。自分の声は届かなかった。人の愚かさは怠慢や傲慢ではない。七つの大罪とはよく言うが、ミーナはそれに明確に異を唱えることができるだろう。人間の罪は、耐えがたい『恐怖』なのだから。

「ミーナ中佐に命じる。貴官ら第501統合戦闘航空団は特定の敵ネウロイを撃滅せよ！」

オルハンが命じた命令は軍人として受け取らねば抗命として重罪である。しかし、自分の中にある正義は猛烈にその受け取りを拒否する。その激しいせめぎ合いの時間すら与えられないほどに事態は切迫しているのである。このような素早すぎる事態の急変を誰が知り得ただろうか。いや、誰も予想だにしなかつただろう。いやいや、一人だけ『いた』のである。どこまでも薄ら笑いを浮かべた災厄の人物が。だからこそミナは最後まで足掻き続ける。

「その命令を受け取る前に、一つお聞きしたいことがあります」

「聞こうとも」

「閣下の正義とは、何でしょうか？」

「もちろん、貴官と同じであるよ」

「私は、ここで定義される、定義されるべき正義とは、人類への普遍的な平和であると、そう信じていたのですが」

オルハンが目だけは笑っていない笑顔を張り付けて、ミーナの意見に修正を加える。

「ちと違うだろうな。我々とは君、ミーナ中佐自身ではなく軍のことである。そして、正義とは普遍的ではなく恒久的な平和への究極的な追求である。我々軍人は、その正義への鋭鋒であり、手足に過ぎん。軍隊とはどこまで行つてもその延長線でしかなく、頭脳たり得ないのだよ」

ミーナはまたもや失敗を犯した。その失敗は取り返しのつかないほどの犠牲を払ってしまったのだ。その犠牲の正体は時間である。時間を誰よりも貴び、愛したのはあの人物である。どこまでも巧妙で絶妙な悪辣非道だと断じることのできる人物は今きつとミーナを見て笑っていることだろう。

「正義への認識の相違があるのは理解しました。軍の存念も理解し、尊重いたします……が、一人の人間として軍人であつても人間を止めるべきではないと、小官はそうあれかしと痛く思うのです」

「個人的な感情で物事を図るのは軍人としてするべきではないだろうな」

「矛盾があるように感じてならないのですが」

「個人の感情ではそうだろう。しかし、全体の統一された感情はもはや感情と呼ぶにはふさわしくなからう。それはもはや意思なのだから」

ミーナは心底思つてしまった。私はここに来るべきではなかった。ここではなかった、と。軍隊とは意思への信奉者であり、意志によつて動かされる拳である。拳に例え真に正義を語り掛け、過ちを正そうと、それはただの道具であり耳ではないのだ。だからこそミーナは選択を間違えたと思ひざるを得ない。ミーナが行くべき場所は、最高司

令部などではなく、政府機関だったのだから。

「・・・腐った手足はいつか切除されます。壊疽が広がる前に手術をするべきでは？」  
「必要であればそうするだろう。だが、今ではない。今ではな・・・なんとも嫌な立場ではあるがね、全ては平和な将来という時間経過が置換してくれるだろう。我々は従僕な機械を演じる切るしかないのだよ」

「・・・オルハン中将閣下、閣下は役者には向いていませんわ。できることならハイマー  
トで農業でも営んでほしいと、平和を享受した後にくらでも語り合えましょう。だから・・・どうかご再考願えないでしょうか」

オルハンはまだ弱い人間を見せることを止めていた。操り人形であられる中将閣下

は、ミーナに命令書を差し出して席に座るのだった。引き出しを開けて取り出したのは拳銃だった。ギョツとしつつ眺めるその黒光りする暴力装置の向きはミーナではなかった。ミーナはその意図を理解して、やむなく敬礼を繰り出すしかなかった。

「命令だ。第501統合戦闘航空団は特定の敵ネウロイを撃滅せよ！」

「……命令とあれば十全に任務を果たし得ましょう。我々第501統合戦闘航空団は、敵ネウロイを撃滅します。吉報をお待ちください」

「健闘を祈る」

ミーナは回れ右をすると静かに扉を閉じる。残されたオルハンは上質な葉巻を取り出して一服する。肺腑に染みわたる煙のなんとうまいことか。紫煙を漂わせた部屋の残り香を楽しみながら連絡要員を呼び出す。通信兵は素早く電話を手渡す。訓練の行

き届いた若人に礼を言うと、オルハンは電話口に声を吐き出す。

「ご用命通りに任務を遂行し終えました」

『ご苦労だった、オルハン中将。貴官の忠誠に敬意を払おう』

「仕事ですので」

『さすがだ。では、もう一仕事頼まれてくれるか？とても大事な仕事だ。難しければ私の部下を寄こそうか？』

「いいえ、それには及びません。大事ではありませんが簡単な仕事ですので」

『話が早くて助かる。では、終末に』

「終末に……」

電話口を置いた頃には先ほどの紫煙も嫌な残り香となり果ててしまっていた。そんな不快な匂いだろうが、オルハンはそれを受け入れて深呼吸をする。そして、開かれた



カーテンからは一瞬だけ閃光が煌めいたと言う。

## 不滅の翼 第七話

フランクフルト攻防戦を終えた勇と小野里は、駆け足でカールスラント南部を突き抜けていた。連日の戦闘に疲労感が蓄積された小野里はスヤスヤと寝息を立てて仮眠をとる中、勇は重くならない瞼の開くままに景色を眺めていた。風にそよぐ木々のざわめきや、滴る水音、寝静まる夜の土の匂いが一際際立つ中、自分の意識の薄れゆく感覚が支配し続けていた。

「勇中佐？」

霞む意識が不意に現実を引き戻されたとき、勇は首だけゆっくりと振り返る。そこには寝ぼけまなこの小野里が目を擦りながら勇を見ていた。勇は朦朧としていた意識の

覚醒によりようやく言葉を思い出す。

「疲れているんだろ、まだ休んでいろ」

「勇中佐こそずっと寝ていないではないですか」

「俺は・・・眠くならないんだ」

勇は視線を小野里から外して再度景色を眺める。景色だけが心の安寧を継続させてくれる気がしていたからだ。だが小野里は早く勇の変化に気づいていた。上着を後ろから引きはがされると、そこに露わになったのは黒い変色域が拡大した半分ネウロイの勇の姿であった。

「もうこんなに・・・勇中佐!?どこか不調はありませんか?！」

「ああ、どこにもないんだ。むしろ落ち着いてさえいる」

「はっ!心拍は?!」

急いで小野里が勇の背中に耳を傍立てる。小野里は聞き耳を立てて必死に心音を聞く。しかし、聞こえるのは微かな鼓動だけ。普通の人間ならまず死に際とさえ称されるほどの微弱なそれに焦燥感に駆られる。

「早く!安静にしないとっ!」

「小野里、落ち着け。俺は平気だ」

「平気なわけないでしょう?!心音が弱いんですよ!死んでしまいます!」

小野里は言うことを利かない勇の頑固さに苛ついていた。だが当の本人はそのまま立ち上がり服を着始めて、まるで変わりがいないかのようなぎらついた眼光を振り返りざまに見せつけてくる始末だった。

「小野里、見ての通りだ。我々に必要なのは休息と、綿密な作戦だ。そうだな？」

「は、はい……ですが」

「少尉、これは命令だ」

初めて命令されたのが休息を取ることだとは思わなかったが、こうも勇が強調し、かつ使命に忠実な勇が勝手に死ぬことはないという安堵感が再び小野里を眠りへと誘っていた。それは月明かりに照らされた勇の胸元に煌めく赤い輝きを隠すようなタイミングだった。勇は夜風からきらめきを覆うように軍服をきつく閉ざした。

一方、某所にあるアインザッツ・グルツペン移動司令部ではアイヒマンが報告書を読んでいた。

「オーデンドルフ、各所への根回しご苦労。これで我々の目的の半分は達成だ」

「それは何よりです。しかし、連合軍司令部のオルハン中将を使い捨ててよかったのでしょうか？」

「ああ、奴もハイドリヒ長官の駒だったからな。むしろ忠誠を誓えて清々していることだろう」

「そういうものでしょうか？」

アイヒマンは何度も思っているが、ハイドリヒに事務能力が秀でているから雇われて

いるだけのオーデンドルフに辟易していた。確かに各所への根回しや部隊運営については舌を巻くほどの手腕である。しかし、絶対的に不足している忠誠心とやらが見えないことへ自分との熱量差が浮き彫りになっており、こうして度々見当違いなことを話すオーデンドルフを嫌ってすらいた。

「オーデンドルフ、それでフランクフルトでの損害は」

「はい、オットマイヤー戦車部隊はおそらく壊滅、シュベルマン中佐率いる歩兵連隊の内2個大隊が降伏または逃亡しました。最後に、ケッセルリンク少佐の降下猟兵部隊はほぼ壊滅したとのことです」

「おい、酷く曖昧な報告が多いな」

「はい、ほとんどの隊員がああ戦いで戦死したか降伏したため連絡が滞っています。むしろケッセルリンク少佐の部隊はロンメル將軍率いる連合軍部隊との軋轢を生みだしている始末です」

出来ない部下たちに頭を悩まされるのは常に指揮官の義務であるが、かつての上司であったハイドリヒはよくも耐えられたものだ、今更ながら彼の偉大さを再認識するに至っていた。しかし、アイヒマンはまだ笑みを忘れてはいなかった。

「まあ、忠臣のケッセルリンク少佐を失ったのは残念だが、それ以外の無能を排除できなかったのは僥倖であるな」

「そうは言いますが、既にアインザッツ・グルツペンの損耗は無視できない事態です。こちらの残存兵力はわずかに歩兵大隊と降下猟兵中隊、そして機械化歩兵大隊と我々ハイドリヒ武装親衛隊のみです」

「忠誠心の脆い部下たちをまとめて排除し、かつての無能どもを掃除する『長いナイフの夜』作戦は実行し終えたではないか。むしろ今が我々の結束が強固となり、最大限実力が発揮できるではないか」



オーデンドルフの忠告はまるで人的資源が半壊したと言っているかのような弱腰であり、自分の作戦意義を正しく理解していないことを残念に思っていた。しかし、それでもアイヒマンは信念を信じて疑わないことに自信を感じていた。

「機械化歩兵大隊のケーニツヒ・フォルコ少佐は完全武装の上、地上で裏切者の動向をつぶさに知らせているのだろうか？それに私の子飼いの大隊もある。かつてないほどの忠誠心の高鳴りに、彼らも眠れないほどだ。あいつを今度こそ俺の手で終わらせてやる」

「精神論が頼みとは・・・小官は転職希望を出したくなりますな」  
「転職はまだ辞めておけ。これから面白いものが見られるのだからな」

アイヒマンは冷徹な笑みを浮かべてワインに口を付ける。なによりアイヒマンにはハイドリヒの計画していた作戦を保持し得ていた。それに、最終兵器の秘密に辿り着く者も今のところ皆無だった。それさえ無傷ならば今だ我々の勝利とさえ言えた。だからこそアイヒマンは勝利の日に酔いしれていられるのだった。

「どちらに転んでも勝てるなんて、なんて素敵なのだろう！世界が俺の手の内にあるかのようではないか！」

「局長代理、傲慢が過ぎますよ」

「なに心配するな。奴らは必死に探しているお目当てはこの陸地のどこにもないのだから！見つけられるわけがない！空を忘れ、地べたを這いずり回るウジ虫には決して届かないのだからな！」

アイヒマンの高笑いは機内に響いていた。そう、機内である。アイヒマンがいる場所は上空1万3千メートルの航空機の中だった。その航空機の名は『白鯨』、ハイドリヒの忘れ形見であるB―29のその中である。

「では最終段階に移るとしよう！『終末作戦』を！目標はカールスラント南方都市、ヴァイザツハ！平和をぶち壊せ！」

ハイドリヒの宣言が高らかに世界を平和のどん底に突き落とすカウントダウンをす

る中、勇と小野里は作戦を練っていた。小野里は先日から物憂げな勇の代わりに情報戦を駆使して、作戦全般の立案を担っていた。

「カールスラント南端の都市、ヴァイザツハを目指しましょう。ここまでアインザツ・グルツペンからの逃避行及び原爆の存在を探索する目的で動いていましたが、我々にはあまり時間的猶予が残されていません。ここまではほとんどが空振りですからここからで確かな功績を上げないと……」

勇は小野里の話を黙って聞いているようだった。小野里は最近の勇の静けさに、勇自身の内心の変化があるような気がしてならなかった。

「勇中佐、もしかしてその・・・あまり気乗りしませんか？」

「いや、そんなことはない。平和は守らなければならぬし、俺もそのようにありたい。だから、小野里の言う通りの作戦でいいと思う」

「そうですか・・・その、最近と言いますか、フランクフルトでの戦いから傷心しているようにも見えましたので・・・」

小野里は恐る恐る勇の表情を見つめる。もしかして自分だけがアインザッツ・グルツペンを恐怖していて、勇と言う人物が諦めてしまったのではないかと思うと、どうしても取り残された気がして怖かった。

「私はいろんな人を失い、取り残されてきました。勇中佐とて同じだと思います。だからこそ似た者同士助け合えるのではと、そう思っているのです」

「不安にさせてしまったか・・・それはすまないことをした」

「違います・・・違いますよ」

小野里の言葉は勇の簡潔な返答で収束してしまうかに見えた。しかし、小野里は勇の変化に気づき始めてしまった。勇と言う人物と短いながらも濃密に時間を共にしたからこそ、勇の変化は大きく、それでいて不気味だった。小野里は勇の変質具合に気づいたうえで無視することを止めようと、真実を呟く。

「私はあなたに謝られるようなことは何もされていません。それどころか、私はあなたに全てを賭けているのです。常々感じていた、私を酷使してくれる状態を私は嬉しいと、そう感じていました！」

小野里の心中の叫びに勇は無言で聞いていた。聞いていないようなそんな目ではあったが、小野里は構わず続けた。続けないと何かが溢れてしまいそうだった。

「私はあなたを地獄に突き落としました！その責任を取りたい！贖罪の機会を、贖う時間をもらいたい！それが私にできる唯一の答えだから！．．．なのに、あなたの視界には私はもういないのではないですか？」

突き付けるような謝罪に罪悪感が芽生えたが、これだけは確認しておかなければこの先勇と行動することはできないと、直感的にも現実的にも関係の終焉に帰結することは明白だった。しかし、勇はその答えさえ小野里に与えてはくれなかった。

「どうして答えてくれないんですか・・・あなたは諦めてしまったのですか？」

「・・・小野里、答えはないんだ」

「え・・・」

「俺にも分からないんだ。どの選択肢を選ぼうとも、俺を起点として問題は波及する。人類と言う枠組みから追われた俺は化け物として人の理を越えた何かになった。しかし、人を越えた先に何があったと思う？」

勇の視線は小野里に向いてこそいるが、小野里を見てはいなかった。まるで自分の身体を透過してしまっているかのような、そんな目をしていた。

「・・・自由、でしようか？」

「それも真実なのだろう。しかし、自由の概念をもう一度考えてほしい。その自由はだれのものだ？自由を物と定義づけるにはあまりにも大それたものだと思わないか？」



「物の見方ということでしたら、それは往々にして考えすぎと言わざるを得ないでしょう。いかに自由を謳歌している人でも、更なる自由を求めるかもしれません。他人から見ればそれを自由とは呼ばないのかもしれませんが。つまるところは考え方次第です」

小野里の解答に勇は無表情のまま首を傾げて見せた。まるで言語が違うかのような素振りに小野里は困惑した。

「根本が違うようだ・・・自由とは探究するものだ。決して掴みえるものではない。だからこそ俺はハイドリヒが天才だと心底思うよ。やつは限りなく平和主義者だった」

小野里は勇の言っていることが理解できなかった。よしんば聞くことは出来ても嘔

吐すら催す嫌悪感の塊が喉を埋め尽くす。敵対し、今まさにそのハイドリヒの影響によつて苦しめられ、世界は破滅に向かおうとしている親玉の存在を評価している勇に嫌悪した。

「奴は新世界とやらの建設のために世界の半分を死滅させる悪魔ですよ！それを平和主義者?!これだけ人が死んでいて？これだけ苦しめられていて？ハハハ・・・酷い悪夢を見ているようです」

「正義とは必ず達成されるものだ。なぜなら悪だと見做した相手にすら自分の行いは正義だと信じられていくからだ。ただ、その正義の成れの果てに生き残った正義だけが焦点を当てられる。ハイドリヒの大義は、我々にとつての正義の中に悪を生み出し、その悪を持つて正義を成そうとしたことだ。つまり、正義の中にこそ悪があると言う矛盾を克服する土壌を醸成すること自体にあつたんだ」

ハイドリヒと視点を共有し得た勇だけに見ることの許される世界の姿を、小野里は正しいとは思わない。人類の平和のために人類を殺すことのどこに正義があるのか、議論することは自体が世界への宣戦布告に等しいと思った。小野里は決して相いれない意見を有する勇を諫めることしかできなかつた。

「勇中佐……あなたは正義を成そうとする正義の人ではないですか。どうしてあなたが進んでその正義の中の悪に栄養を与えて育てようとしているのですか。その先に実る果実は何色になると言うのでしょうか？」

「限りなく平和な色に染まるのだろうか」

小野里はもう我慢ができなかつた。自我を抑制できずに勇に襲い掛かる。呆気なく押し倒し、ナイフを勇の首に突き付ける。勇を元に戻すため、戻せなくとも思いとどまらせるために本気で殺しにかかる。しかし、それでも勇の顔色は変わることがなかつ

た。

「どうして?!」

「俺の言ったことは正しいからだ。お前の今していることこそ平和への純粋な希求であるのだから」

勇の言われたことで小野里はハツとして勇から飛びのく。自分のした行いをこれまでの行為と重ね合わせる。重ね合わせるまでもなく、勇の言葉が正しいと気づかされてしまう。認めたくない事実、これほどに情けなく、非情な回答を自分自身で体験してしまったことが一番恐ろしく、その心理に辿り着いた勇が屹立として孤独に見えて仕方がなかった。

「私は……私たちは、平和へ、自由へとたどり着くことはできないと？それほど残酷な希望ある未来の架け橋は脆く、それもまた幻想であると言うのですか！」

怯えた小野里は前が見えなくなっていた。これまで行ってきた正義への希求を、無残にも蹴散らされ、信頼する仲間が大義を失わされた。それは小野里の存在意義を奪い去っていくかの様だった。そんな小野里を見て、勇はゆっくりと近づく。そして、その無機的で固い手で優しく小野里の頭を撫でるのだった。

「小野里、平和は遠い。だが、俺に任せろ。お前が賭けてくれた俺が、平和への近道を走らせてやる」

「……近道？」

「ああ、約束しよう。人類の大罪は俺が引き受ける、と。平和は来るぞ」

目的を一致させた二人は、一路南下を進める。目的地は小野里の言った通り、カールスラント南方都市、ヴァイザツハだった。

一方、勇という敵を攻撃目標と命令を受けたミーナたち501統合戦闘航空団は、動揺と共に作戦行動へと備えていた。動揺の原因はミーナが作戦指示を明確に表明しなかったことだった。ただ、様々な情報筋から割り出された目標の所在地を割り出していた。

「ミーナ、本当に我々はそこに行くのか？」

疑念に満ちた副司令官のバルクホルンの迷いを断ち切るべく、ミーナは確固たる自信

をもって答える。

「ええ、目標はヴァイザツハよ」

「作戦の内容を知りたい。それにこの作戦意義についてもだ」

「あら、内容は伝えたじゃない」

おどけてみせるミーナのあつけらかんとした態度がバルクホルンを怪訝にさせる。あまりにも不明瞭なミーナからの作戦指示は、『敵勢力からの積極的防衛』だった。これでは何を敵として、何を守るかがまるで分かり得なかった。バルクホルンは副司令官として、断固として説明を求めた。

「今作戦には不可解なことが多すぎる。隊員もみな困惑しているぞ！ミーナ、教えてくれ！私たちには知る権利がある！」

「私たちウィッチはネウロイに対抗できる純粋な戦力基盤よ。ウィッチの個人技量に依存した戦闘には限界と問題があるわ」

「だから、なんだと言うんだ?!」

ミーナは憤るバルクホルンを抑えることもせず、ただ自分の信念を貫くことを断行した。だから、バルクホルンをウィッチとして、人間として残すことに決めた瞬間であったのだ。

「赤松勇中佐をネウロイから守ります。あなたたちは徹底して私に従ってくださいさえすればいい！全ての責任は私が受けます！この誰も手を汚すことはさせないわ！」



ミーナの初めての所信表明にバルクホルンは焦る。その焦燥感にはバルクホルンを恐怖に陥れる。閃きの影に生臭い血の匂いを漂わせたミーナと言う光景が過つたのは初めてのことだった。だが、バルクホルン自身が知り得る限りのミーナは既に方向転換が不可能なほど急降下体勢に入ってしまった。

「盲目だ……そんなにユウを愛していると言うのに、どうしてそこまでできるんだ……」  
「物事は錬金術じゃ扱えないの。等価交換の原則は私だけで十分……いいえ、私がそうしたいのよ」

「ハハハ……愛ゆえに、か。ミーナ、成就しない、失敗前提の作戦とはお前らしくもないな……」

バルクホルンは目の前の力強く佇むミーナという存在が神々しくかつ手の届かない霞を纏って見えていた。対称的に、ミーナは優しく微笑んで成功をほくそ笑む。

「いいえ、トウルーデ。失敗こそ成功の母よ」

「ミーナの未来に幸あれ、と願わずにはいられないな」

「・・・ふふふ、『神になど祈るな、幸せかどうかは私が決めるのだから』よ！」

こうして501はミーナの決意の下、目標に向かう。こうして三者三葉の目標を据えて向かった先は奇しくも同じ場所であった。その場所はカールスラント南方都市ヴァイザッハ。ヘルウエティア連邦との国境間近の場所だった。そこに一番最初に辿り着いたのは身軽な勇と小野里だった。

「はあ、ようやくヴァイザツハですよ。こんなにアルプス山脈が近くに見えますね」  
「ああ、あそこが目標だな」

はい、と元気よく返事をした小野里は無邪気に武器の撃鉄を起こす。戦闘準備は万全である合図だと言わんばかりに最終決戦場へと足を踏み入れる。ヴァイザツハは閑静な都市であるが、ネウロイのアルプス越えの前進拠点として認識された、列記としたネウロイの巢窟である。小野里はいよいよと事前情報を勇と共有していく。

「ここはアルプス越えのネウロイの前進拠点です。ここを越えられるネウロイはそうそういませんからヘルウエティア側もあまり部隊を展開してはいませんが、わざわざここなんです」

「一度は集結した連合軍は既に各地に分散進撃している。これでは一撃での連合軍解体

は難しくなる。ならばここしかないかろうよ」

勇の見据える先の急峻な山々は、青みがかったアルプス山脈であった。この山を越えた先にあるのは一つの国である。しかし、国と言うには特殊なものであった。

「なにも永世中立国、ヘルウエティア連邦を破壊しなくても・・・」  
「その通りだ。やつらをヘルウエティアへ行かせるわけにはいかない。このヘルウエティアと国境を接する都市、ヴァイザツハで彼らの野望は阻止させてもらおう」

小野里はアルプス山脈に覗き込まれながら、情報が書き込まれた手帳を取り出す。小

野里が統合した情報によれば、アイヒマン率いるアインザッツ・グルッペンの残存兵力はこれまでにないほど削られていた。

「現在までに分かっている情報として、アイヒマン率いるアインザッツ・グルッペンの残存兵力は、歩兵と降下猟兵部隊の残存兵がおそらく1個大隊規模。そして、ケーニツヒ・フォルコ少佐率いる機械化歩兵大隊、アイヒマン直卒のハイドリヒ武装親衛隊です」  
「ケーニツヒ・フォルコ少佐はどんなやつだ？」

勇の質問に答えるべく、小野里は手帳をめくりケーニツヒ・フォルコについての詳細が記載された情報を掘り出す。

「ケーニツヒ・フォルコ少佐、機械化歩兵大隊の部隊長にしてアインザッツ・グルツペンの補給線を担っていた兵站部隊です。その際、武器を搭載し兵力化された部隊を率いているためなんでも屋と言ったところででしょうか。はつきり言つてこれまでの者と比較するとあまり特徴のない指揮官です」

小野里の説明で勇は少し考え込む。これまでに戦つてきた戦車大隊や歩兵連隊、降下猟兵部隊はいずれも戦意旺盛でかつ部隊の練度も高かった。それだけに今まで姿を現さなかつたことに違和感を覚えずにはいられなかつた。

「小野里、ケーニツヒ少佐の人柄を知りたい。何か情報はあるか？」  
「はい、しかし私もあまり彼とは接点がなく私自身の印象はありません……が、彼はハイドリヒの側近中の側近です」

小野里の解答で勇は少しの不安を覚える。ハイドリヒという人物に近ければ近いほど、人間として何かを魅せられているのである。勇もその一人であるからこそそのことがよくわかっていた。

「では、ケーニツヒ少佐は忠実な兵士だと?」

「私がハイドリヒに仕えていた頃、よくハイドリヒはケーニツヒ少佐を活用していました。そこから類推しますに使い勝手がよかったと考えられます」

「そういう手合いは厄介だな」

勇はアイヒマンの戦力を正しく分析し得ていた。勇の信じる戦力基盤とは、個人の技量や規模ももちろん重要だが、一番大事なものは戦意や精神力といった中身であると信

じてやまなかつた。

「おそらく相手はかなりの結束を見せてくるだろう」

「対してこちらの戦力は……」

「まあそう落ち込むな。全ては俺の味方だ」

そういう勇の視線の先にはただ広大な自然が広がっていた。対して、その頃ヴァイザツハ南方に到達しようとしていたアイヒマン率いるアインザツツ・グルツペンは、局長代理であるアイヒマンの訓示を聞いていた。

「諸君、戦友諸君、これより我々は世界の目を覚まさせてやりに行くぞ。言うなれば我々





男たちの雄たけびは共鳴し、心を揺さぶった。あらゆる暴力の音楽がアイヒマンを絶頂へと押し上げる。満足げなアイヒマンは、右手を前へと突き出す。不気味に笑みを携えて吠えるのは地獄の始まりの挨拶だった。

「戦友諸君の健闘に期待する・・・忠誠を!!!」

「「忠誠を!!!」」

地獄の窠が開かれる中、第501統合戦闘航空団は一路ヴァイザツハに向けて南進を開始していた。様に不安げな顔をした隊員たちを気にする素振りもなく、隊長であるミーナの表情は真剣そのものであった。それを見た宮藤が心配げに隣を飛行するバル

クホルンに問いかける。

「バルクホルンさん、あの私……今回の作戦がどういうものかよくわからないんですが、ネウロイがいるんですよね？」

「宮藤、実のところ私にも分からないんだ」

「え……」

バルクホルンは力なさげに宮藤の表情を見ずに問いへの答えとする。これまでの作戦とはまるで毛色が異なる作戦に従事させられる仲間たちにはなんと説明すればよいか、今の今まで思いつかずにいた。作戦の決行を決めたミーナも今回の作戦の参加に關しては志願制を取っていた。しかし、隊員たちはミーナを信じて全員がついてきたのである。

「ネウロイがいないとすると、あつ！いつもの威力偵察でしょうか！」

「・・・いや、偵察ではない、と思う」

「じゃあ一体何のために」

「大丈夫だ、これは、今回の作戦は上からの命令だ。そして、それを進めるのは我々ではなくミーナだ」

宮藤の問いも尤もであるが、バルクホルン自身今回の作戦に関してはミーナが全ての責任を請け負うことを明言していた。自分らしくないことこの上ないが、バルクホルンにはもうどうしようもないほどミーナの意思が固まりすぎていた。だから、バルクホルンとしては命令を強調するに留まらざるを得なかった。

「でも私、思うことがあるんです」

「なんだ、宮藤？」

宮藤は胸に手を当て、目を閉じる。それはまるで女神が慈愛を分かつかのような光景だった。

「きつとミーナ隊長は、守りたいものがあるんです」

「宮藤……」

バルクホルンはまさにその通りだと言う肯定が素直にできない状況に拳を握るしかなかった。しかし、状況はここにきて大きく動こうとしていた。突如前方を飛行してい

たハルトマンが警告を発したからだった。

「進路上の前方で爆発煙を確認！戦闘状態みたいだよっ！」

「一体どこの部隊なんですか!？」

一早く見つけたハルトマンと、ペリーヌが声を上げる。覚悟していた戦闘が開始されている緊張感に全員が包まれる。そして、ようやく全てを覚悟しきった隊長であるミーナが命令を発す。

「目標、進路上のネウロイ！きちんと敵を確認した上で攻撃してください！むやみに攻撃することは許しません！」

「ミーナ！味方が戦ってるってこと？」

ハルトマンがミーナに予想される正しい質問をするが、その答えを知る者としてはミーナの回答が一日千秋の思いだった。その質問に対し、どう返すかによってミーナの本当にやりたいことが見えてくると考えたバルクホルンは、ミーナの回答を待つ。そして、その答えは時を刻んで解き放たれる。

「味方は私たちだけよ！それ以外は『味方では』ないわ！」

「それってどういうことですか?！」

「これは私の仕事です！みんなは作戦空域に現れたネウロイを攻撃して！それまでは決して攻撃しないで！」

「な、何が起きるんですか・・・」

誰もが思つた疑念を、宮藤は怯えた表情で呟く。全員が歯を食いしばって理解できる光景を求めたその時、眼前に広がったのは、『戦争』だった。醜く、脆く、残酷な闘争がそこには広がっていた。そこにはネウロイはおらず、大勢の人間が山際に追い詰められた人間たちと激しくぶつかり合っていた。

「な、なんだこれは・・・」

「人だ・・・人じゃないか！」

「どうして・・・」

おぞましい光景は時に語彙力を喪失させる。その中でただ一人、目標を探索する指揮



官がその眼光をぎらつかせる。

「見つけた・・・」

「ミーナ！いたのか?! ユウなのか?! ユウがいたのか?!」

バルクホルンの言葉に全員の視線が集まる。全員の頭の中を支配する疑問を置き去りに、指揮官は命令を下す。

「作戦、開始っ!!!」

## 不滅の翼 第八話

『この日、戦闘は突然始まった』、これは戦後回顧録が出版されたとある元ウイッチの原稿の未完成部分の一行である。これに形容されるように、突然戦闘は開始されたのだ。戦闘開始の合図はインザツツ・グルツペンの攻撃からだった。

## 「攻撃開始」

この言葉により勇のいるアルプス山脈を背にした陣地は激しい攻撃に晒された。野戦砲や迫撃砲、機関銃の弾があちこちから降り注いだ。猛烈な攻撃に辺り一面は土煙が立ち込め、岩は崩れ去る。耕された土を踏みしめるように、その後から暴力が振り下ろされてくる様は、さながら地獄を挺していた。その中で、一人の男は黙って見ていた。

徹底した暴力の鎌が近づいて来るのをまるで逆さのアルプスを映し出す湖の湖面のよ  
うに静かに待っていた。

『もうそろそろいいんじゃないか?!』

『勇中佐！敵の足音が聞こえてきました！早く！』

仲間の声はその危機的状況を知らせるが、それでもなお勇は待ち続けた。敵が地を耕し、大地を殺しながら進み続け、だれかをぶち殺そうと迫ってくるのを山のように待ったのだった。それに遂に仲間は痺れを切らしていた。

『もう我慢できない！攻撃をさせてくれっ！』

まるで石像にでもなったのかと疑われるほどに勇は動かなかった。そして、遂に小野里の声が届く。

『敵後方陣地見えましたっ！敵前線、顔が確認できますっ！繰り返しますっ！敵の顔が見えます！』

その報告を聞いて初めて、勇は顔を上げた。そして、身を乗り出して全員に伝える。その勇の声は全兵士の心を動かした。

「反撃開始っ!!!」

勇の言葉と同時に一齐に開かれる砲門は、付近の敵を薙ぎ払い、後方の敵を吹き飛ばす。突然の反撃と反撃の手数にアインザッツ・グルツペンは一瞬の間を奪われる。曰く、アインザッツ・グルツペンの兵士の一人はこう叫んだと伝えられる。

「どうして兵士が！戦車がいるんだっ!!?」

勇はこの戦場の態勢を振り返る。フランクフルト攻防戦の最中、勇は彼らと作戦を共にした。その彼らはその場を後にしたのち、再び勇の下へと現れたのだった。小野里と訪れたヴァイザツハには、既に完全武装の上で待機していたヴァイツトマンら元アインザツツ・グルツペンの兵士たちが待機していた。

「あなた・・・ヴァイツトマン少佐ですか?！」

「いかにも、我ら赤松勇中佐の指揮下に入りたく馳せ参じました!どうか、我々を使ってください!」

勇と小野里の眼前には、ずらりと並んだ戦車と歩兵が整列して鎮座していた。その首魁を元オットマイヤー戦車部隊の副長であるヴァイツトマン少佐が務めており、その光景に小野里は興奮とも呆れとも取れない何かを吐き出していった。

「勇中佐……あなたは磁石か何かですか？どうしてこうもおバカが引き寄せられるんですか？まあ、私もその一人なんですけど……」

「なに小野里少尉、そう悲観することもあるまい！我らは確かに少数の敗残兵に過ぎん。だが！我々は戦車計22輛、歩兵2個中隊が揃っている！戦力が君たちだけだと過信しているやつらをぎやふんと言わせてやることができるぞ！」

「はあ……だからこういふ馬鹿は嫌なんです」

「なにおう?!」

ヴィットマンと小野里の一方通行の話を聞いて、勇はヴィットマンの手を握る。その光景に惚れ惚れしたのか、ヴィットマンなどは涙を流して感極まっていた。

「本当にこの男たちときたら・・・馬鹿は惹かれ合うんですね。心に刻んでおきます」  
「ヴィットマン少佐、諸君の協力に感謝する」

「いえ！我らこそ戦場を失い、路頭に迷う子羊でありますれば、かつての敵と手を携えるという光榮に打ちひしがれております！感動と言う言葉をこれほど感じたことはありません！我ら一同、全力でお仕えいたしましょう！」

こうしてヴィットマン一団は勇の下に集い、対インザッツ・グルツペンの先駆けとなった。勇はこのことも予期していたのか、小野里が頭を抱える中、ヴィットマンを含め戦力を効率的に運用するため、作戦会議を開いていた。

「ヴィットマン少佐、もう一度君たちの戦力状況を教えてくれ」

「はっ！我々は戦車22輛と、歩兵が2個中隊が揃っている！」

「つまり戦車も歩兵も2個中隊規模か」



「しかし・・・」

「なんだ？」

ヴィットマンは恥ずかしそうに、もとい面目なさそうに戦力事情の裏側を伝える。ヴィットマンから飛び出す本音に小野里が頭を抱え直したのは言うまでもなかった。

「実は、戦車も戦車砲も未だ健在ではあるが・・・その、燃料がほとんど・・・すまん」「はい?! 動かない戦車なんて車じゃなくてただの砲でしょう?!」

「なにを言う!! かき集めれば2，3輦少しは走れるわ! それに砲に車輪がついている限り何と言われようとあれは戦車だっ!」

自慢の戦車を小野里に貶されご立腹のヴィットマンだったが、確かに動かない戦車は

ただの砲に過ぎない。しかし、勇はそんな砲ですら戦力に仕立てる考えがあった。

「戦車は固定砲台として使用する」

「そんなご無体なっ！」

「ヴィットマンが機動戦をしたがっていたのは知っていたが、小野里はこういう時の空気の読まない勇をよく知っている。いい気味だと言わんばかりに舌をヴィットマンに向ける小野里だった。そして、落ち込むヴィットマンを差し置いて話を続ける。」

「この山岳地帯には丘陵な場所や岩肌、窪みが多数存在する。そこに戦車を隠す。敵は君たちの存在を知らない。ならば、こちらが伏撃してやろう」

「歩兵はどうしますか？」

小野里の質問に、歩兵の責任者であるホーフエン大尉が背筋を伸ばす。彼はフランクフルト攻防戦で、シユベルマン中佐の副官を務めていた人物である。彼が勇の下に来た理由も彼らなりに苦悩した果てのものだった。

「ホーフエン大尉、君はどうしたい？」

「私は……シユベルマン中佐殿の、連隊長の仇を取りたく思います」

「ほう、個人的感情であるか？」

「いいえ……我々はカールスラント撤退戦で、あのバイパー司令の部下でした。しかし、激戦の末シユベルマン中佐が現状を打破してくれたおかげで今の我々がいます。そんな連隊長が、フランクフルト攻防戦であなたに心を許した。ならば、我らはそれに従うべきだと、それが使命であると、そう考えます」

勇はホーフエンの目をじっと見つめる。ホーフエンも勇の目を覗き込んでいた。そして、束の間の時間が過ぎた時、勇は目を閉じて口を開く。

「君らは自由だ。もう戦う理由はない」

ここに来ての戦力の放棄は小野里としては目が飛び出るほど愚策に思えた。とち狂ったのかと疑った小野里は勇に食って掛かる。

「勇中佐！いくら元敵でも彼らは協力を申し出てくれているのです！ただでさえ人手が欲しい時ですよ?!みすみす手放すんですか!？」

「小野里、俺はホーフエン大尉の気持ちを聞いているに過ぎない。気持ちで劣る者に、この戦いは生き残れない」

勇の言葉を聞いて、小野里はホーフエンに目を配る。すると、ホーフエンは分かっていたかのように目を伏せて拳を握っていた。勇に言われるまで人手がいればいいと思っていたが、小野里は根本的なことを思い出していた。それは、この戦いは元より意思のぶつかり合いなのである。そんな中に他人に決められたルールに縛られる者には不要なのである。そのことを失念していた小野里は、静かに引き下がる。そして、ホーフエン本人は決断に迫られる。

「ホーフエン大尉、俺に協力してくれるその気持ちは嬉しく思う。しかし、君たちはこれ

からも生きる権利がある。それに、戦わないという選択肢も十分に残された未来ある人間だ。だから、ここで君が戦いたいと心から思わない限り、俺は君たちをこの戦いに参加させるわけにはいかない」

勇の言葉には、これまで培われた経験と自分には望みえなかつた願望が詰め込まれていた。思えば様々な困難や裏切り、戦いに身を投じて来た勇は自分で選択こそすれ、その選択肢が非常に絞られた選択をしてきた人物なのだ。だからこそ、勇は選択肢が豊富にあるホーフエンという人物に問いかけていたのだ。

「二応君にも聞いておこう。ヴァイツトマン少佐、君は……」

「私は戦いに来たっ！敵が何であろうと知ったことではない！俺は戦車を動かさし、あのアハトアハトを敵にぶち込む！そのことだけは誰にも負けたくないのだっ！」

食い気味に答えられた解答に小野里は引いていたが、戦う意思と理由としては百点そのものだった。そして、焦点はホーフエンに戻される。迷いを見せた時点で退場を迫られるこの状況で時間は有限である。その場で判断できなければこの先の重要な局面でも迷うことになる。そんな指揮官の適性をも見定める勇を小野里は感心して見ていた。ホーフエンは、大きく息をゆっくりと吐きだすと勇に向き合う。

「私は、逃げたいと思います」

「そうか・・・」

勇は目を閉じて、ホーフエンの意思を尊重しかけた。しかし、ホーフエンの答えは続いていた。誰よりも慎重な言葉は、その場の全員の衆目を集めるのに時間はかからなかった。

「私は、私と言う臆病で、自分を持つことができない、そんな自分から逃げたい！」

「ここは逃げ場所ではないぞ？」

「ここは戦場になるでしょう・・・しかし、私は今まで戦場から逃げて来た！いつもいつも逃げた！逃げた先でも逃げるあの屈辱はもうたくさんだっ！最期くらいだれかのためにこの逃げを使いたい！いけませんでしょうか?！」

心の決まった言葉はまっすぐに勇に向かう。勇はそんな言葉をしっかりと受け止めて微笑む。

「君とは善き仲間になれそうだ。君を歓迎しよう。もう、逃げなくていいぞ。心強い逃



亡者よ」

「はああ！・・・はいっ！・・・くうっ！ありがとう・・・ごさいます！」

その場で崩れ落ちることを何とか耐えるホーフエンの涙は、温かく、そして笑顔から溢れた涙だった。こうして絆を結んだ勇率いる防衛部隊は、アインザッツ・グルツペンを待ち構える伏撃戦を展開したのだった。時は戻り、現在反撃を受けたアインザッツ・グルツペンは戦車砲や機関銃射撃といった伏兵に手を焼いていた。アインザッツ・グルツペンの指揮を執る、機械化歩兵大隊の隊長であるケーニツヒ少佐は窮状を訴える。

「アイヒマン局長代理っ！こちら地上部隊、現在敵装甲混合兵力と会敵っ！戦車砲が進  
行の邪魔をしています！」

『戦車だど？どういことだ？』

「オットマイヤー戦車部隊の生き残りだと思われます！さらに歩兵部隊により我々の前

線部隊は既に壊滅状態です！至急救援を！」

ケーニツヒは必死に指揮官であるアイヒマンの救援を乞うのだが、アイヒマンは非情な人間であるということを失念していた。アイヒマンはその通信機越しにも伝わる、おぞましい声で命令を伝える。

『ケーニツヒ少佐……忠誠を、見せてくれたまえ』

「っ！揺るぎのない……絶対の、忠誠をっ!!!」

ケーニツヒは力なく通信機の電源を落とす。賽は投げられたと、ケーニツヒも覚悟を決める。部隊は突然の反撃に？まれているが、規模で上回る自分たちならばやれなくは

ない。ほとんど者が死のうがこの戦いはどちらかが滅びるまで続くのだ。であればと、ケーニツヒは指示を伝達させる。

「やつらの首を締めあげてやれ！やつらは脆いぞ！数で押し切るのだ！」

ケーニツヒの指示により意識を取り戻した機械化歩兵大隊は、再度前進を開始する。もとより練度が高い部隊だけあって、指揮の回復により統制は取り戻しつつあった。それを見ていたホーフエンは齒噛みして勇へ連絡を入れる。

「勇中佐！敵の進行止まりませんっ！このままでは前衛陣地が取られますっ！」

『あくまでこれは持久戦だ。敵の出血を強いてこちらの消耗を抑制することに頭を使お

う』

「わ、わかりました・・・狙撃による敵前衛の排除を試みます」

ホーフエンは目の前で繰り広げられる戦鬪に頭が狂いそうだった。これまでアインザッツ・グルツペンとして活動してきた身としては、人を殺すことに長けていたが、それだけでは贖いきれない意思と意思のぶつかり合いに心が潰されそうだった。しかし、負けそうな心を踏み止まらせるべく自身を鼓舞するように声を張り上げる。

「負けるなっ！歩兵の底力を見せつけてやれっ！」

「ホーフエン大尉！敵の装甲戦力を視認っ！装甲車ですっ！」

部下の報告によって双眼鏡を取り出すと、たしかに後方から装甲車が近づいてきていた。しかし、装甲車としては明らかに遠方から現れたと考えていると、装甲車の天井から何か顔を出す。その何かのシルエットをホーフエンはよく知っていた。ゾクリとした寒気が背中に走り、急いで無線に手を伸ばす。

「パンツァーファウスト！急いで逃げろっ!!!」

その声が聞こえる頃には前線にいた固定砲台化した戦車が3輜ほど火を噴きだしていた。歩兵こそ知り得る対戦車兵器の存在を失念していた自分を殴りたくなる。歩兵はそもそも脆いのだ。それを誰よりも理解していたはずの自分が情けなく、思考が停止しかけた。正しく言うならば、踏み止まることができたのだ。これも自分で決断するという力があつたことが大きかった。すぐさま対応策を考える。

「ヴィットマン少佐、白燐弾の使用をお願いします！」

『煙幕だな！了解した！』

かつて勇に使用した非人道兵器である白燐弾を、今度は目隠しとして使用するその機転の速さにホーフエン自身驚いていた。自分で判断することの責任の重さに相對して導き出される最適解を行動に移すことのできる自分に、変な感情だが名前を付けるとすると『喜び』に分類される何かが心を満たし始めていた。

「煙幕を利用して野戦砲を前進させろ！あとは直接射撃で敵装甲車を破壊するんだつ  
！」

ホーフエンの指示により陣地から部下が飛び出していく。その頼もしい姿に安心を覚え、ヴィットマンの正確な白燐弾射撃が辺りを包み始める。この光景を見ている勇と  
言う存在を後ろで感じていられるからこそ、不思議と自信が湧いてくるのは戦場の七不思議  
と言えるだろう。なにせ自分の指示に対し全幅の了承を勇は出していたのだった。  
信頼と言う言葉はホーフエンに大きな力を与えていた。煙が晴れてきた時、突出した野  
戦砲部隊から攻撃の発射音が聞こえてくる。

『ホーフエン大尉っ！やりましたよっ！装甲車の無力化に成功っ！』

「よくやった！急いで戻ってこいっ！」

『いいえ！あと一輛残っています！それを片付けてから！』

「おい！もういい！ただでさえ突出しているのだぞ！」

『やらせてください！行くぞお前たち！』

威勢に乗った部下たちの暴走に、後方に留まる指揮官としてのホーフエンは何もできなかった。制止を振りほどいて先走る部下の安全は後方では守ることは出来ないのだ。その予感は的中する。野戦砲部隊が続きの敵を捕捉する中、絶命の悲鳴が鳴り響く。

「ホーフエン大尉！敵バイク部隊が前線の野戦砲部隊を襲撃！」

「くそっ！機械化歩兵大隊の花形連中めっ！」

機械化歩兵部隊にはバイク部隊が存在し、そのバイクの操縦技術は戦前のレースにも出場できるほどの腕前の持ち主ばかりだった。小回りが利いて戦場をかき乱す存在の出現と打撃部隊の壊滅に現実を思い知らされる。あれだけ小回りが利くと戦車砲でも捕捉は難しい。そして、なけなしの歩兵がたった今半分が天国に召喚されてしまった。



かつての上司が貶した指揮官はこんな非情な現実にも耐えられたことを思うと胸が痛くなった。そんなとき、勇から通信が入る。

『ホーフエン大尉、聞いているか？』

「勇中佐・・・我々は、これまでかもしれません」

『逃げるのはもうやめたのではなかったのか？』

「・・・逃げません」

勇に言われるとドキリとするが、自分が勇の前で誓った言葉は真実だった。否、真実にするのだ、そう決めていたホーフエンは勇に進言する。

「これより歩兵による総突撃をご覧に入れます。どうぞご堪能下さい！」  
『……確かに、見届けさせてもらおう』

勇の心意気に感謝し、自分の最期の弱さを曝け出す。震える手を無理やり抑えつけ、漏れ出る嗚咽を一度だけ吐き出す。

「もう逃げないぞっ！」

最期にやりたいことをしたホーフエンは、残った部下をかき集める。部下たちも覚悟を決めたのか眉間に皺を寄せてホーフエンの指示を待つ。そんな姿にホーフエンは笑って見せる。

「そんな肩肘張るな。落ち着いていけ」

「ホーフエン大尉……？」

「俺たちは歩兵だ。歩兵の特技は何だ？」

「！」

「そう、走ることだ。やつらはバイクなんて細い足で駆け回ってはいるが、さきほど耕された土の上では軽快に走れまい。その点俺たちはどうだ？」

ホーフエンの軽口に仲間の緊張は解れ、吹き出してしまふ。部下たちの命を預かる身としてこれくらいはしてやりたいと、かつての上司を思い出し、ホーフエンはその懐かしき日々を思い出す。仲間はずじりに涙を浮かべて笑いあっていた。

「はははっ！確かにっ！あんな細い足じゃ、ダンスを踊れるとは思えませんっ！」

「その通りだ！我々こそ地に足を付けた巨人だと言うことを、やつらに思い出させてやろう！」

「「おう！」」

ホーフエンは満足して準備に取り掛かる。その間にも着実にバイク部隊は近づいてきており、前線の固定化された戦車が食われていく。その命の時間を費やして、ホーフエンは時を待つ。バイク部隊が耕作地帯に踏み入るのを堪えて待つ。戦車の砲門から手榴弾が流し込まれ、巨像は火を噴く。その損害を乗り越えて、遂にバイク部隊が悪路に足を踏み入れた瞬間、ホーフエンたち歩兵部隊は持ち場を飛び出す。

「今だっ！突撃いいいい！！！」

一斉に飛び出した歩兵に驚いたのか、バイク部隊は馬のいななきのようにバイクを上  
手く操れず、接近を許してしまう。その瞬間を突いて一部の歩兵はバイク部隊の兵士に  
掴みかかる。また他の兵士は手榴弾をバイクの付近に投げ、バイクもろとも爆風で吹き  
飛ばす。そして、ホーフエンは手に縄を持ち、もう一人の部下と共に縄を張る。人の首  
あたりに相当する位置の縄は、混乱したバイク兵には気づかれず、縄をもろに首で引つ  
かかってしまう。

「バイク部隊制圧っ！ホーフエンのやつやりやがった！」

背後で待機しているヴィットマンは、興奮気味にその光景を眺めていた。しかし、な

ぜか配置を一緒にされて不満げな小野里が呟く。

「いえ、煙幕が晴れたのなら次が来ますよ」

「なに?!」

小野里の言葉通り、ホーフエンらがバイク兵を退けた時、敵陣の後方から砲撃音が轟く。聞き覚えのある砲撃音にヴェイットマンは後ずさる。

「まさかつ?!アハトアハト?!仲間もろともかつ!」

ヴィットマンの想像通り、バイク兵が展開している間に、ケーニツヒも対策を講じており、8・8cm対空砲を直接照準にて敵の仲間もろとも水平射撃を浴びせられていた。これに対抗すべく、ヴィットマンの部隊も戦車砲にて反撃を開始する。

「同じアハトアハトだが、装甲がなけりや木端微塵だ！撃てえ!!」

ヴィットマンの指示により火を噴くティーガー戦車の攻撃にいくつかの8・8cm対空砲は沈黙する。しかし、相手も同じ8・8cm口径というのは戦車の装甲を貫いていく。

「前衛戦車陣地完全に沈黙っ！」

「くそっ！想定より早いぞ！あと何輛だ?！」

「9 輛です！」

半分の戦車が撃破され、歩兵部隊も壊滅状態と戦力的にはほぼ半壊した事実にはほぼ半壊した事実にはトマンは歯噛みする。そして、凶報は続く。撃破された戦車兵の生き残りが走って後方まで下がってくる。その兵士はそれまでに見た光景を切迫した雰囲気です。

「歩兵部隊のホーフエン大尉が戦死しました！」

「・・・ホーフエン大尉が、くそっ！勇中佐に連絡！」



ヴィットマンは急いで勇にホーフエンが戦死したことを伝える。しかし、勇の反応は淡白なものであった。たつた一言、『見事だった』。この一言をヴィットマンは心底ホーフエンに聞かせてやりたかった。短い時間しか共にしていないが、ホーフエンという男を芯のある男だと認めていたヴィットマンは、同僚の死に、仲間の死に無言の餞を送るしかできなかった。そして、今度は自分の番であると喝を入れる。

「ホーフエン大尉に続くぞ！我々の本懐を見せつけてやれ！」

ヴィットマンは少数の仲間と小野里に向かって鬨の声を上げる。小野里はうるさそうに睨んでいたが、これから命を預ける仲間として、無理やりつき合わせる。実は残り9輻の固定陣地の他に、勇はある秘策を残していた。その被策を今からお披露するのにヴィットマンは既に心を切り替えてその瞬間を渴望していた。

「小野里少尉、よろしく頼む！」

「言われなくても仕事はします・・・頼みますから安全運転で」

「それはできん相談だなあ？」

凄く嫌な顔をする小野里を見て、逆に嗜虐心が燦られたヴィットマンは張り切りに張り切ってエンジンを蒸かす。獲物を捕らえるべく3輦の虎は唸り声を上げて主人の許可を待つ。その許可を貰いに小野里が無線を飛ばす。

「では勇中佐、行つて参ります！」

『相棒に伝えてくれ。くれぐれも小野里を大切に、と』

「ですつて！」

「勇中佐も人を煽るのが上手い！ご要望通り、大切にこき使わせてもらいますよ！」  
「そんなこと言っていない、つて、あっちよつと!!?」

隠匿された3輦のティーターガー戦車は、小野里を気にもせず一斉に突進を開始する。もはや有頂天のヴィットマンには聞く耳を持ち合わせてはいなかった。いわゆるパンツァーハイである。エンジン音に負けない音量で突撃を高らかに吠えるその姿は正しく虎だった。

「パンツァーフオおおお!!!」

なぜ燃料が枯渇していた戦車がこうして機動戦を展開し得ているかと言うと、戦闘が

始まる前までヴィットマンが戦車の固定砲台化に駄々をこねたからであった。というのも、小野里に動かない戦車はただの砲と言われたのがよほど悔しかったのか、他の戦車から燃料を抜き取って3輦分だけ燃料を満たしていたのだった。動かせる戦車に乗って勇と小野里の前に現れたヴィットマンはそれはもう嬉しそうだった。対称的に空を仰ぎ見て現実逃避を始める小野里の間でちよつとした口論があつたことは時間の無駄と言う他なかつた。

「勇中佐！これなら突撃を許可してくれませんか!？」

「あなたつて人は・・・そうまでして戦車を動かしたいのですか?!」

「戦車は俺の魂だつ！動いてこそその戦車だつ！」

「躊躇というものをこ存じないのですか?!」

「ない！」

「諦めて降りてください！その燃料で爆弾を作りますつ！」

「いやだつ！」

「嫌だつて・・・いい大人が！」

小野里が顔を手で覆うと勇がそんな小野里を労う。勇はヴィットマンの行動を許可し、戦車による機動遊撃戦を提案した。そして、勇はヴィットマンとも仲良くしてもらうべく小野里にある命令を出していた。

「小野里、ヴィットマンの戦車に乗って攻撃から守ってやってくれ」

「へっ?! あ、あの、戦車に守ってもらうのではないのですか?!」

「ウィッチのシールドで戦車への攻撃を極力防いでやってくれ。ヴィットマン少佐、やってくれるな?」

「フロイラインに守ってもらうのは気が引けますが、ウィッチの加護があるなら百人力ですよ!」

目を輝かせたヴィットマンに肩を組まれた小野里はもはや諦めるしかなかった。そうして、小野里は逸るヴィットマンの戦車に揺られて敵の前線をぶち壊しに出かけるのだった。

「ヴィットマン少佐！敵装甲車列を目視で確認しました！」

「了解した小野里少尉！少し捕まっけていてくれ！これから揺れるぞ！」

「安全運転と言いましたよね?!」

「ああ我々の運転はいつだって安全だとも！」

「どこがですかっ!？」

でこぼこの道を一気に駆け下りて、敵の驚く顔を置き去りに装甲車に体当たりを敢行

する。激しい衝突と、装甲車が潰される音が木霊する。小野里は砲撃で撃破するものと考えていただけにその荒々しさに驚愕する。

「ど・こ・が！安全運転ですかっ!? さっそく事故ですよ！衝突です！」

「あんなもの挨拶だ！小野里は挨拶をしないのか？」

「ああもう！次っ！9時方向に対空砲！挨拶の次は?!」

「もちろんハイタッチだ！」

気分が向上したヴィットマンと、それに段々と乗ってきた小野里は快速に敵を勝ち割っていく。敵も戦車による機動戦は想定していなかったのか、急いで前線の兵士が後方に下がっていくのが傍目にも分かった。しかし、小野里もヴィットマンも野生の勘が危険を伝えていた。

「何かおかしい……」

「あまりにも引き際が良すぎますね……ん？正面方向に何か……あれは?!」

小野里は目に入る何か巨大な恐怖に身構える。遠目にも分かる圧倒的な存在感が、小野里に危険を知らせていた。一度退却することを視野に、勇に連絡を入れようと無線に手を伸ばす。しかし、ここで不思議と手が止まるのだった。いつまでも勇に頼りきりでいいのか、自分たちで切り開かねばならない戦いではないのか、そういった自己責任的な考えが過る。今の勇には可能な限り表に出てきてもらってはいけないと、この作戦の大前提を小野里は肅々と見直し、そして決断する。

「ヴィットマン少佐、一つ頼まれてくれますか?」

「ようやくかね?」



「敵後方からなにやら障害物が接近中です。おそらく敵の新兵器です」

小野里の言葉にいつそうヤル気をもせるヴィットマンは、行動可能な3輜に無線で伝える。

「こちらヴィットマン、これより敵さんの新しいおもちゃとレクリエーションだ。はしやぎすぎるなよ！」

そう無線で伝えると、何の合図もなく同時に3輜の虎は障害物へ向かう。さすがの練度だと小野里は感心する。これだけの戦力ならば、例え敵の新兵器が何だろうと乗り切れる気さえした。小野里は外を警戒しながらその目標物を捉える。目標は確かに目新

しいが、最強のティーガー戦車が頭のおかしい戦車狂に率いられ突撃しているという謎の高揚感が目標の脅威度を落としていた。しかし、やはり拭いきれない不安が敵の発砲により恐怖として顕現する。

「なっ！砲撃音が大きい！」

明らかにこちらの88mm砲よりも大きな閃光に驚く暇もなく、左隣を走るティーガー戦車がまるでこと切れるかのように立ち止まる。

「マルティン大尉いいいい！！！」



く葬る口径を持つその戦車の正体に、ヴィットマンは心臓を掴まれたようだった。

「どうしましたかヴィットマン少佐?!」

「やつだ・・・」

「奴とはなんですか?!」

ヴィットマンがこれほどまでに恐れ慄く戦車の正体は、小野里にも現実として認識される。あまりにも大きな巨体と自らの存在を誇示してやまないその堂々たる姿はまさに巨人というに相応しい称号だった。しかし、その称号を嘲笑う名が、その戦車の正体だった。

「やつだ・・・超重戦車『マウス』!!!」

## 不滅の翼 第九話

ヴィットマンは険しい顔で現在の状況を整理していた。自軍の戦力は限りなく自分を含め2輦の稼働戦車と、固定化された数輦の戦車、最後にウィッチの小野里だけである。それなのに敵の戦力は未だ健在で、自分たちをぶち殺そうと躍起になっている。さらに言えば目の前で我が物顔でゆっくりと闊歩する『超重戦車マウス』が障壁となっていた。

「これじゃあ命がいくらあつたつて足りやしない！小野里少尉、妙案はあるか?！」

「私はあくまで歩兵であり、戦車の盾なんですよ！それもとつても薄い盾です！」

「ないよりかはマシだつ！」

「あんな128mm砲を食らつたらたまつたものではありません！」

超重戦車マウスの主砲は128mm砲と凶悪な代物を搭載しており、さらに副砲として75mm砲をサブとして扱う化物戦車の名を欲しままにしていた。しかし、目下の問題は攻撃力ではなかった。マウスに向かい、全攻撃が集中するも何事もなかったのように姿を現す圧倒的な防御力だった。

「くそっ！何発やつにぶち込んだと思ってる！無駄に厚い皮膚をしよって！」  
「その無駄に圧倒されているんですよ！」

小野里の的確な指摘に思考がゼロ地点にループする。凶悪なまでの存在はじりじりとヴィットマンらを押ししていた。その時、マウスから一人の男が顔を出す。なにやらマイクを取り出して叫んでいた。ヴィットマンも一度身を隠し耳を澄ませる。

「叛逆者の諸君っ！諸君らは勇敢に戦った！それは認めよう！しかし！これまでにしないか?!」

声の主はアインザッツ・グルッペン of 機械化歩兵大隊の隊長であるケーニツヒ・フオルコ少佐だった。そして、この言葉の続きも全員が理解していた。いわゆる降伏を促されているのだ、と。ヴィットマンは降伏を迫られたことに立腹し、小野里はいつケーニツヒを狙い撃ちしようかと考えていた。

「我々の目的はもはや諸君にはない！我々の目的はただ一つ！赤松勇の身柄の拘束にある！だから、この場から身を引けば君たちは自由の身だ！建設的な提案だろうか?!」



勝者という自信から紡がれる言葉の羅列に、小野里は嫌悪感を抱いていた。なにより嘘くさい命の保障など、アインザッツ・グルッペンのもので行いを顧みれば反故にされることは明らかだった。自由を与えられるものには決して自由を得ることはできないのと同じように、生殺与奪の権利を譲渡することは緩やかな自殺も同義であると考えていた。しかし、それはヴィットマンも同じ気持ちだった。

「ケーニツヒ少佐っ！随分な物言いじゃないか！我々はまだ負けてはいないぞ！」

「やはりヴィットマン少佐か！君は善き戦車兵だ！きつとまだ我々の下で活躍できるだろう！君の功績は計り知れない！だから今すぐにこちらに戻って・・・」

「ケーニツヒ少佐！答えは単純だ！」

ケーニツヒの言葉を遮ったのが癪に障ったのか、少し表情が強張ったケーニツヒが少しの間を置いてヴィットマンの答えを聞く。

「賢明な回答なんだろうな？」

「もちろんだ！建設的、とお前はそう言ったがな、人間はそんな簡単に割り切れない生き物なんだよ！」

「何が言いたい?！」

「分からないのか?!賢いお前なら分かっていると思っただがな！」

小野里はこの時ほど人を煽る能力が役立つとは思ってもみなかった。ヴィットマンの答えがあまりの単純すぎて、足元を疎かにしがちなエリートは気づかない、いや気づけないのだ。その答えをヴィットマンは敵に叩きつける。

「人間は常に建設的には動けない、最終的には心がそうせよと言うままに動くもんなんだよ！つまり！お前の提案に対する答えはこうだ！『シャイセ（くそつたれ！）』」

その言葉と共にヴィットマンは戦車を動かす。小野里は無性にヴィットマンに握手を求めたい気分になられるほど、胸のすく思いだった。そして、対するケーニツヒはというと、ワナワナと拳を振るわせて荒ぶる感情を抑えつけていた。この怒りと言う感情を殺さなければヴィットマンらと一緒にになってしまう、そう思えたケーニツヒは冷静に、かつ冷徹に命令を下す。

「全軍、進行開始……マウス、やつらを踏みつぶせ。やつらに我々の忠誠の強さを見せつけてやるのだ」

「了解っ！」

「ヴィットマンのやつ、人間は感情に流されるだど？脳みそ花畑のやつらしい！我ら人類が未だ知能を持たない獣かなにかだど？だとするならば調教してやるまでだ！」

ケーニツヒが進軍の命令を下した時、時勢を見極めたかのようなタイミングでアイヒマンから通信が入る。ケーニツヒは、堅実な仕事ぶりをきちんと報告する。

『ケーニツヒ少佐、現状はどうだ？』

「少し手間取りましたが、現在掃討戦に移行したところです」

『それは重畳・・・では、予備の空挺部隊は不要だったな』

「いえ、作戦を確実なものにするためにも奴らの後方に空挺降下を要請いたします」

ケーニツヒの要請に一拍の間を置く。そして、受話器越しに聞こえてくるのはアイヒマンの腕時計の音だった。つまりは時間の制限を示唆していることを察したケーニツヒは冷や汗をかく。それはこの戦鬪をすぐに終わると言ってしまったかつての自分の言葉への違反を示していたと気づいたからだだった。その上で要請をするのか、と問われているのではないか、違反は死に繋がることをよく知るケーニツヒは、機転を回そうと必死になる。

「きよ、局長代理！敵はあの赤松勇中佐です！局長代理の、延いては亡きハイドリヒ局長の想いを達成されるためにもここは万全を期さねばなりません！ここで我々の忠誠を示すことができれば、私はこれまで以上の忠誠をあなたに、あなた様だけに示すことになるでしょう！その暁には・・・アイヒマン局長、いや！アイヒマン総統に世界は膝を屈することになるでしょう！」

これまでにないほどの焦りに嫌がおうにも饒舌にならざるを得なかった。時間の過ぎ去る音だけが寿命を貪る音に聞こえた時、受話器から拍手が聞こえる。その拍手に心を撫で下ろす。アイヒマンはご機嫌でケーニツヒへと褒美を差し向ける。

『ケーニツヒ少佐の忠実な献身に感謝するぞ。それにしても総統……総統か。悪くないな。アツハツハツハ！』

「そ、それはもちろんアイヒマン局長代理のこれまでの忠誠に鑑みれば自ずとそうなるのは自明のこと！小官は事実を申し上げたのみです！」

『貴官も上手いものだ。では、君の総統が命じる。敵の後方に空挺部隊を降下させる。敵を蹂躪し、私をヘルウエティアに無事に行けるよう最善を尽くせ。塵も残すな』

「はっ！マインフューラー！」

零れ落ちる冷や汗が事態の収束を求められていることを物語る。ようやく解放された緊張が受話器を置いた瞬間に、危機感に置き換わる。増長した思いが自分を岐路に立たせる焦燥感を煽る。強風に晒された一本のか弱い花のような立場に躍り出た自分を呪い、その憎悪を敵に向ける。

「殺せ……やつらを全員地獄に叩き墜とせっ！」

ケーニツヒの命令により地上の全兵士が矛先を揃えて進み続ける。対するは数匹程度の盾、圧倒的な暴力差に屈してしまうのかと、だれもが思うであろうこの戦場に、諦める者はいなかった。

「あのマウス何とかならないか、小野里少尉!？」

「私だってあの分厚い装甲を叩き割れるものならとつくにシヤベルで叩き割ってますよ!」

「そう簡単にはいかんか・・・ん?それだつ!」

ヴィットマンの突然の大声に耳を塞ぎながら、小野里はヴィットマンの妙案を聞くことにする。こんな人物であるが、勇と同じで一つのことの特化した人物と言うのは、方  
法こそ無茶苦茶だが打開策を打ち出す能力に長けていることを経験則的に知っていた。

「小野里少尉!シヤベルと言ったな!？」

「言いましたけど何か?」

「シヤベルだよ!シヤベル!」



前言を撤回しなければならぬと、小野里は頭を抱えた。こういう戦闘狂の輩は言語能力が著しく低下するのだ。直感的な閃きを一般人にも分かるように説明する努力と、言うものを置いてきてしまった可哀そうな人物にもう一度問いかける。

「一度落ち着いてください。私にも分かるように説明して……」

「じゃっ！よろしく頼んだぞ！」

「えっ?!」

小野里は訳が分からない内に戦車から蹴り墜とされると言う、摩訶不思議な事態に遭遇して頭の整理が追いつかなかつた。受け身だけをしっかりと取れたことに感謝し、蹴り墜とされた戦車に向かって中指を立てる。

「ふざけんなああああ!!! ちゃんと説明しろおお!!」

神がいるとしたら敵よりも先にあのヴィットマンという名の野蛮人を先に裁いてほしいとすら思った小野里だったが、すぐに行動を起こし始めたヴィットマンの考えを読み解くことに集中する。ヴィットマンは2輦の戦車で忙しなく動いている。坂道であることを利用し、速度を回避に専念している。しかし、攻撃の手は止めておらずマウスの付近に着弾していた。

「ん? ちょっと待って・・・『付近』に着弾? あの戦車バカが? 外す?・・・まさか?!」

小野里は急いで荷物から陸軍の歩兵標準装備であるシャベルを取り出すと、急いで着弾跡に向かって走り出す。88m 砲によって穿たれた大穴に魔法力を込めて死に物狂いの速さで手を動かす。今度はその行動を見たヴィットマンが満足げに視線をマウスへ戻す。

「さすがは我々の友、小野里少尉だ！ よしつ我々も仕事に取り掛かるぞ！ 2号車準備はいいな?!」

『もちろんです、隊長!』

「では攻撃開始っ!」

ヴィットマンは2輜のティーガー戦車で、利かないと分かっているマウスへ向かって

攻撃を開始する。さすがの88mm砲と言えど、マウスの巨体にかすり傷を付けるのが精一杯だったが、それでも着弾時の衝撃などは車内に響くのであった。その衝撃はマウス車内のケーニツヒの怒りを買っていた。

「くそっ！さすがの戦車バカ集団の副長というだけあるな！よくも行進間射撃でここまですてられるものだ！だが、この超重戦車マウスは倒せんぞ!!」

覗き窓から外を観察し、無様にマウスと張り合おうとするヴィットマンらを嘲笑っている。徹甲弾では効果がないと分かったのか、弾種を変更してきたことが分かった。

「今度は榴弾か！ふんっ！やつら苦し紛れなのか、それとも弾切れか・・・どちらにせよ

!!??? 各個撃破してくれる！右側の戦車に照準を合わせろ！まずは指揮官車を叩く！撃てえ  
うわっなんだ、この煙は?!」

ケーニツヒが突然の煙幕に驚いたのも束の間、その中から徹甲弾らしき砲弾が次々と  
撃ち込まれてくる戦術に、弄ばれている気がして憤りは頂点に到達しようとしていた。

「ちよこざいな!!戦いの愉悦を味わえるのは勝者の特権だと言うのに!!もういい!この  
188トンもの総重量に守られた動く城に生半可な攻撃など通用しない!突っ切つて  
赤松勇を仕留めるぞ!」

方針転換を柔軟に行える自分と、戦力差的優位に立つ身だけが持てる余裕によって強

制的に怒りを中和する。そもそも自分はこの最終兵器であるマウスに乗っている限り、勝利は揺るがないのだと思いつ出し優越感に浸る。煙幕と思われた煙は、ヴィットマンらが放った白燐弾であることが分かり、困惑は視界を狭めると自分を嗜める。

「まったく、俺は何にビビッていたんだか……まあ煙幕が晴れ次第やつらを爆散させてやる！戦車好きなんだ、戦車で殺されるのがお似合いだろう！」

「間もなく煙幕晴れますっ！」

「よしっ！敵はわずかに2輦だ！両側からの攻撃に注意せよ！」

ケーニツヒの指示は間違つてはいなかった。煙幕が晴れた間が見えた瞬間、戦車の影が1輦映る。この煙幕に乗じて接近して、というのを狙っているのだろうが、この超重戦車マウスなら一撃は耐える。ならば、どつしりと構えて各個撃破すればよいとの結論に至る。完全な勝利を目指して砲塔を進行方向右側の戦車から片付けることにする。

「ぶっ飛べえええ!!!」

ケーニツヒの指示の下、マウスの127mm砲が発射され、猪突猛進のティーガー戦車のご真ん中を貫く。連合軍の如何なる戦車より堅牢な戦車と謳われるティーガー戦車にいと也容易く穴を穿つ攻撃力に満足していると、ケーニツヒは不可解な点に気づく。それは撃破したティーガー戦車がそのままのスピードで突っ込んでくるからだっ

「死してなお体当たりか！だが無駄だ！このマウスはビクとも・・・うわっ！」

ティーガー戦車が決死の体当たりをして来たため、耐シヨック姿勢を取るつもりがあの戦車が傾くではないか。例えティーガー戦車が質量弾さながらの体当たりをしたところでこんなにも揺れることはないはずと思いついていたケーニツヒは、やられたことに今更に気づく。

「ヴィットマンっ?!?! 貴様あああああ!!!」

「引つ掛かりやがったな! 落とし穴に嵌るアホにお届け物だっ!」

絶対的な強者たるマウスが傾き、弱点である車体上部を晒してしまっている状態で



ヴィットマンの88m砲が突き刺さる。ケーニツヒにとっては不幸にも、ちょうど砲塔はヴィットマンのいる方向と逆方向を向いており、砲塔下のスリットがむき出しになっていることがケーニツヒの最期を決定づけた。巨体から炎が濛々と立ち上がり、沈黙したことが伺える。

「ケーニツヒ・・・お前との戦車戦、楽しかったぞ！」

「ヴィットマン少佐！やりましたかっ!？」

小野里が駆け寄り、マウスの残骸に目を向ける。ヴィットマンの作戦で撃ち倒した怪物を目に、達成感が二人を包んでいた。

「ああ……だが、2号車はやられてしまった。つまり、俺の仲間はたった1輛になってしまったのだ」

「あなたの戦友は皆、勇敢でいて任務を全うしたのです。誇ってください」

「ああ……そうだな、小野里少尉も良くやってくれた。私を含め彼らも感謝している」  
「いえ、あなたの作戦に活路を見出しただけですから」

素直ではない小野里に肩を竦めながらこれまでの自分の作戦を振り返ってしまふ。それは、小野里を戦車から蹴り墜とした後からのことだった。小野里にあるポイントでシヤベルで掘り返して落とし穴を掘ってもらい、その穴に誘導するという落とし穴作戦だったわけである。まずはわざと弾を外し敵を慢心させ、その穴を小野里に掘ってもらい、目隠しとして白燐弾を撃ち込む。その間に二手に別れ、片側からマウスを穴へ落とし、傾いたマウスの薄い部分に撃ち込むという算段だった。

「見事に嵌ったな・・・だが、仲間を失うことになったのは俺の責任だ。責任・・・俺の命令で部下が死ぬと言うことが、こんなにも重いものだったなんて知らなかった」

自分の手のひらを見してみる。手にはタコが固く刻まれているだけだったが、この手で部下が死んだ。その事実がこれまで一介の戦車長である自分に現実として押し掛かかってきていた。このような重要な命令を、これまでいくつも下してきた勇と言う存在が畏怖の対象となっていることに気づいていた。

「勇中佐は、一体どんな気持ちなんだろうな」

「今は力を溜めています。この作戦をやり切る以外、あの人には考えられないですよ」  
「そう・・・だな」

ヴィットマンはふと、巨大な棺桶となり果てた戦車から突き出されるかのように見える人だった手を見る。その手は空を指し示す。その手が指し示す先を見ると驚愕した。

「お、小野里少尉！あれ！あれっ！」

「なんです？・・・まずいつ！まずいますまずい！！」

二人は急いで元の防衛陣地に急行する。二人が急ぐ理由は空にあった。その空には無数の傘が広がっており、その更に上空を一機の爆撃機が悠々と飛行していたのだった。その事実には小野里はアインザッツ・グルツペンという組織を過小評価していたか、失念していたという大失態を演じてしまった自分を呪った。アインザッツ・グルツペンは空挺降下により小野里たちの背後、つまり勇を直接急襲しに来ていたのである。

「ア、アイヒマンっ！貴様っ！……ここまでの仲間全てを匣に使いやがったな！！」

機上の人であるアイヒマンは眼下に広がるアルプス山脈と、その麓に広がっているであろう戦場に向かって嫌な笑顔を振りまいていた。まさに自分の描いていた通りの情景が、一望のもとに収められていると言う現実に興奮すら覚えていた。

「なんて素晴らしい光景だっ！愚かな者たち同士が果て合い、その上を優雅に生を謳歌するこの瞬間ンっ！！まさに世界に祝福された俺を象徴しているようではないかっ！！」

笑いが抑えられないことすらも勝利が自分を迎えてくれているようで、アイヒマンは手元に置かれた秘密兵器を愛でる。

「ああ．．．もうすぐだ。もうすぐ世界を作り直してやる。俺の思い通りの世界に！世界は俺に膝まづく！そして、俺は全人類の総統として．．．神として君臨するのだっ！ハイドリヒ局長ですら到達し得なかった高みに、俺はチェックメイトをかけたぞ!!」

滾る思いが最高潮に達した時、無粋にも部下のオーデンドルフが声を掛ける。水を差された気分にし憤りを感じるも、野望を果たした暁にはオーデンドルフも処刑することになった今脳内で決定したアイヒマンは投げやりに話を聞く。

「局長代理……あ、いえ、マインフューラー。地上で謎の光が発生しているとのことで  
す」

「なんだこんな時に……俺が確認する」

眼下を窓から覗き込むと確かに小さな光が、確かに光っていた。しかし、決して小さいとは言えないなんとも言えない不安がアイヒマンを襲う。その不安を払拭するように自分の置かれた状況を声に出して確認させる。

「オーデンドルフ、我々は高度8千メートルの遥か上空にいるのだな？」

「?はい、そうですか？」

「我々に対抗できる兵器はやつらにあるか？」

「はて、私の持つ情報にそのような兵器はなかったと記憶しますが？」

「そう、であるか」

確かに自分の身は安全な高空にあるのにも関わらず、不安を拭い切れない光に苛立ちが込み上げる。アイヒマンは光の正体を掴むべく、オーデンドルフに情報を収集させる。しかし、オーデンドルフにもその正体を掴むことは出来なかった。では一体あの光は何なのか。その疑問と不安だけがアイヒマンに一つの回答を齎した。

「まさか・・・奴なのか？」



アイヒマンの問いにオーデンドルフは首を振って否定する。データベースとして限りなく有能なオーデンドルフが断言する。

「いくらあの赤松勇中佐とはいえ、この超空の白鯨を地上から攻撃できるとは考えられません。それに彼我の高度差は8千メートル、速度は巡航速度で600km/hを超え、この白鯨の名に相応しい爆撃機にもし一発でも当てられたとしても、この超空の要塞は落ちません!!」

自信をもって断言し切るオーデンドルフの言葉は正しいのだろう。いつだって正しい情報を持つてくるからこそ、アイヒマン自身が好まない人物であっても今まで重用してきたのだ。しかし、もしこの白鯨を迎撃できるほどに成長しているとしたら、そう考えるだけで自分が矮小な存在だと言われている気がしてならなかった。

「高度を取れ！速力最大だつ！やつから一刻も早く離れるのだ！」  
「局長代理……いえ、マインフューラー！それでは目標地点に正確に『原爆』を投下し  
かねます！」

オーデンドルフの言った通り、この白鯨にはアインザッツ・グルツペンの秘匿兵器である原子爆弾が乗っていた。これまで偽の情報流させ、複数生産したことや、各地に設置したと言った偽装工作をしてきたが、完成した原爆はアイヒマン自身が保有するたったの一つであった。しかし、それだけに使いどころが限られてしまい、このヴァイザツハの都市を封鎖され、制空権を取られることがあつてはこれまでの計画が水泡と期してしまう。それだけは避けたかったアイヒマンはアインザッツ・グルツペンの全ての戦力を勇につつける計画を立てたのだつた。

「うるさいっ！大丈夫だ！この爆弾で全てを変える！俺の世界を奴一人の存在で変えられてたまるか！」

オーデンドルフを押しつけて安全策に走る。醜くてもいい、ただこれから投下させろ爆弾の能力を全世界の人間に見せつけさえすれば、自分は認められ、崇められる存在へと上り詰められるのだ。その幻想を現実のものにするためならばどんなことも厭わなかった。しかし、地上の光は一層輝きを増し、アイヒマンの不安を増大させる。そして、その不安は現実を突き上げてくる。その絶叫は機長から叫ばれた。

「ち、地上から高魔法力反応!?この機を目掛けてっ?!嘘だろ?!」

「大丈夫だ届きやしない！マインフューラー！落ち着いて席に．．．ってマインフューラー?!」

オーデンドルフが振り返った先には無人の座席だった。主人たるアイヒマンと原爆の姿は忽然と消したことに気づいたオーデンドルフは、狂ったように笑い肩を落とす。

「ははは．．．化け物か」

この言葉を最後にハイドリヒの忘れ形見である白鯨は、コックピットごと魔法力が込められた弾丸に貫かれ、爆発四散しながら墜ちて行く。勇の放った弾丸はただのライフル射撃によるものだった。たった一発の銃弾が超空の要塞を爆砕した理由として、勇は高難易度の術式を何個も練り上げて付与していた。その一つとして、弾丸自体にシールドを付与し、空気抵抗を無視した速度で進み続けたことが挙げられる。そして、その光

景をパラシュート越しに見ていた一人の男が悪態を吐き捨てる。

「赤松勇いいい!!! あれは何だ?! 俺の! 俺だけの世界を貴様なんかにはいいい!!!」

男の名はアイヒマン。アインザッツ・グルツペン隊長にして、世界秩序保護局の局長代理を謳い、総統になる夢を抱き、儂くも神の座へ駆けあがろうとした男の叫びだった。そして、その絶叫を聞いてか聞かずか、勇は次の手を繰り出そうとする。周りに展開する空挺降下部隊の襲撃にも、小野里たちの声も届かず、銃を構える。しかし、既に勇が動くだけで事態の急変が予測されてしまう事態に待ったをかける人物が現れる。

「赤松勇中佐あああ!!!」

その人物は人ながら鉄の箒にまたがって空を駆け、その魔法力を持ってこれまで異界の怪物たちと渡り合ってきた少女たちだった。その中で、赤い髪をなびかせ銃を構えて勇を捉える姿はさながら意思を持った彗星の様だった。速度は降下速度を背に受けぐんぐんと大きくなり、勇へと迫る。その姿を勇はようやく思い出したように笑って迎えるのだった。

「ミーナ……少し遅かったな」

勇はミーナの声を無視して銃を構え直す。対称的に、その瞬間であつてもミーナは引

き金が引けずにいた。どうしてもかつての仲間の姿がそこにあり、かつて自分が愛した人物の顔があったからだ。それにそんな人物に銃を向けているという自分が信じられなくなっていた。それほどに自分の確固たる自信をも揺るがしてしまう勇と言う人物に腹も立っていた。その腹立たしい人物は遂にやらかしていた。アルプスの山々に木霊する爆発音は、いつものお仲間を引き連れてくる。

「本当に、やってくれたわね．．．総員戦闘用意！」

ミーナの号令で一斉に戦闘に対する準備を完了させる501隊員は、目の前で起こっていることを処理できないでいた。それを振り切るため、そしてミーナは自分自身の任務を完遂させるため訓示を行う。

「みんなよく聞いて。これよりネウロイとの大規模戦闘に移ります。気を抜かないでい  
つもみたくにみんなで帰りましょう！」

その言葉で全員が気を引き締める中、宮藤が怯えながら質問を口にする。その質問は  
全員が思っていることの代弁だったことはミーナの誤算だった。

「ミーナ中佐……あの、ネウロイっていうのはここにいてる全てのネウロイなんですよ  
か？」

「……そうよ」

「ということとは……あそこにいる勇さんも、なんですか?!」



宮藤が指さすその先には、顔の半分を黒い幾何学模様に覆われ、左腕は全てネウロイに似通った人型ネウロイとでも形容すべき、限りなくネウロイに近い赤松勇だった。その指摘に全員の視線がミーナに集まる。ミーナは下唇を噛み、感情を押し殺す。押し殺した先には妥協しかないと分かっている、それを自分の答えだと割り切り回答とす

る。

「そうです！でも、あれと戦うのは私です！みんなは周りのネウロイに集中して！」

「ミーナ！やはり止めるんだ！あれはユウだ！ユウなんだぞ！」

バルクホルンの制止に心が再び揺れる。それでも決意してここに来た以上、ミーナにはすべきことがあった。それはどこまでも変わらず『勇をネウロイから助ける』という

一点に限られていた。

「トウルルーデ……私は今度こそ正直になるわ。私はユウが好き。だから、今ここで！あのネウロイからユウを助けないといけないわ！」

「ミーナ！お前がやる必要は……ああ、ダメなのか……これは私たちにしか、延いてはミーナ、お前にしか、お前しかやろうと思えないのか！」

かつては自分の思考に囚われがちだったバルクホルンだったが、ここまで成長してくれたことにミーナは満足し、そして怒った。こんなに大事な人を悲しませ、成長せざるを得なくさせた、赤松勇と言う人物に腸が煮えくり返る思いだった。そして、ミーナはバルクホルンに後を託す。

「じゃあトウルデー、後は頼んだわ」

「ああ、後がある命令なら喜んでやろう。だがな、ミーナ。絶対にユウを連れ帰ってくれ。あの不出来な弟には一発説教してやらねばな」

「・・・うふふ、そうね！私も一つや二つ言いたいことや語り合わなければならぬことがあるもの！」

ミーナは優しい同僚の言葉に久しぶりの笑顔を思い出す。かつて後を頼んだ際は泣いて怒られてしまったが、今回は違う。決してだれも失うつもりはないのだ。その固い意志だけは勇にも負けるつもりはなかった。そして、ミーナはもう一度戦闘の最中にある勇に向かって飛び込む。目線と照準が重なったその先にいる人物は、いつまでも不敵に無表情に笑っていた。

## 不滅の翼 第十話

小野里とヴィットマンは目を覆うよう光景を目の当たりにしてただ立ち尽くす。今まで守り通し、これからもそうありたいと思っていた存在は、穴倉からようやく顔を出したかと思えば、超空に見えるゴマ粒ほどの爆撃機を訳の分からない機動をするたつた一発の銃弾で破壊せしめた。それはまるで意思を持つかのように運動性を持って超大型爆撃機へ吸い込まれていく。それを見て小野里は心当たりがあった。

「まさか・・・ミサイル？」

「小野里少尉、なんだそれは?!」

「いや、それよりあの示威行為じみたものは一体・・・」

放心状態となった小野里の肩を揺すっていると、次なる光景が二人を襲う。それは降下猟兵部隊、正確には武装親衛隊が勇に襲い掛かる瞬間だった。さらに言えば、上空からもウイツチの一団の内、一人の赤い髪をなびかせたウイツチが突っ込んでくるではないか。小野里はもう頭がパンクしそうになりながらも脚を動かすことに専念する。

「ヴィットマン少佐！早く戦車で逃げてください！」

「どういうことだ!?俺も行くぞ！」

「ダメですっ！」

小野里の拒絶的な態度に戦鬪狂のヴィットマンは食い下がる。それでも小野里の絶对的な命令じみた言葉にたじろいでしまう。

「ここはもうあなたたちがいい場所ではなくなりました」

「それはどういうことだ？」

「・・・いいですか、よく聞いてくださいね。私たちは運命の歯車に過ぎなかった、ということです」

小野里の抽象的な言葉にしばらく頭を悩ませるヴィットマンの姿を見て、小野里はにこりと微笑んで見せる。その微笑みにドキリとしてしまったヴィットマンは固まっていた。

「私たちは、あの赤松勇中佐の理想に届かなかったんです。あの人が見ている先は平和などではなかった・・・」

「一体何を・・・」

「もつと早くに気づくべきでした。あの人は私に言いました。『平和への近道を走らせてやる』、と。私はまんまと信じてしまったんです。あの人は明言しなかったのに……」  
「だから何を言っているんだ？」

一向に答えに辿り着かない人物のなんとお気楽なことか、そう思ってしまう自分は狭量な人間かもしれないと皮肉ってみる。つまりはこれも自由なのである。分からないでいるということも選択肢の一つであり、教えないというのも小野里の自由であることが結びつかない。そんな不自由なヴェイツトマンに最後の言葉を伝える。

「大丈夫ですよ、世界は平和になります。これからはきつとあなたの湧き上がる血さえも血圧という単語に置き換えられるようになるでしょう」

「小野里少尉？まさか、お前には勇中佐の考えが分かるのか？」

「ええ、分かりたくもなかったのですがね……では、行ってください！」

ヴィットマンの胸を押し出すも、大の男の体はゆらりと揺れるだけだった。小野里は俯いてヴィットマンの胸を再び押し出す。それでも男は動かなかつた。

「どうして・・・あなたという人は・・・」

「小野里少尉、俺には夢がある」

「え？」

「俺は今はただの戦車を動かしてぶっ放す単細胞だが、俺にも一端に夢がある」

唐突に夢を語り出すヴィットマンに、小野里はかつての自分を思い出す。籠の中の人物に自分の情けない夢を語ったあの時のことを。そして、その瞬間ヴィットマンは自分



の胸ほどの身長しかない少女の肩を抱く。驚いている小野里を置き去りにして、電撃戦を任せたら右に出る者はいないヴィットマンは言葉の88mm砲を撃ち込んできた。

「小野里少尉、俺の夢は君の名前を知ることだ」

ヴィットマンの言葉に不思議とこんな不釣り合いな戦場に温かな気持ちが出る。小野里は温かな塩水が目じりから溢れてくる。それをヴィットマンの汚れた制服にこすりつけながら、夢を叶えてやる。

「・・・あはは、バカには勝てませんね」

「バカで結構、バカで助かる道もあるのだからな」

「そうですね・・・そうですね！あなたはバカですから、よく聞いてくださいね」

「ああ、教えてくれ」

「私の名前は、小野里正子。正しい子と書いて正子です」

小野里の名前を聞いたヴィットマンはより一層小野里のか細い肩を抱きしめる。自分の夢を叶えてくれた少女を自分の女神だと勘違いするくらいには、ヴィットマンはこの状況に場違いな感情が生まれていた。そして、一頻り抱きしめた少女を開放すると、二人して決意を確認し合う。もう既に決まり切っている行動を実行するために戦車に乗り込む。小野里を砲手に据えて走り出す戦車はたったの一輛。されどその一輛は勇の下を目指して走り出す。

「最後の突撃だっ！パンツァーフォー!!!」

一方その頃、ネウロイとの不意遭遇戦に巻き込まれた501は、その対処に奮闘していた。特に、一時的に指揮権を継承したバルクホルンは、501が持つ作戦の二正面性に苦戦していた。

「ハルトマンっ！敵はどのくらいの規模だ?!」

「航空型がたくさん！地上はもつとたくさんだよっ！」

「くそっ！こんなことがあるか?!」

「トウルーデどうする?!」

相棒と呼べるハルトマンからの疑問の突き上げに、バルクホルンは悩む。史上最大級

の困難を前にバルクホルンはミーナの心配をしなければならなかった。

「ミーナの任務を援護する！」

「それって勇さんを助けるってことですか?！」

宮藤のパツと花が咲いたような顔に齒噛みしながら、その考えを否定しなければならぬ自分に情けなさと、この不条理な戦闘に対する怒りが混在していた。

「違う・・・あくまで我々は敵を倒すんだ！」

「だからバルクホルン！敵は何なんだ!?!ネウロイか？ユウを襲うやつらなのか？それともミーナ隊長の狙うやつなのか？どれなんだ?!」

バルクホルンの次席階級であるシャーリーが痛いところを突いて来る。バルクホルン自身もその答えには辿り着いていないだけに解答を出すことは出来ない。しかし、明確な決断をしなければ部隊は混乱することを加味すれば、今決断しなければならなかった。しかし、弟のような存在であった勇の顔が判断を鈍らせる。しかし、連合軍やその他の人間は勇を既に敵だと認定しているし、排除命令が501に与えられている。そんな苦渋の判断を一人の少女が手助けする。

「あそこにいるのは・・・勇さんです。どうしてそんなに悩む必要があるんですか？」

「宮藤・・・分かった、分かったよ・・・」

「トウルーデ？」

「我々の目標は視界に映る全てのネウロイド！自分の目を信じるんだ！我々がネウロイドだと思うものを撃てばいい！その責任は私が持つ！」

バルクホルンの命令は未だ不透明ではあるが、それでも隊員たちはその命令を十全に理解する。命令順守型のバルクホルンらしい言い訳が利いた命令に、501はいつもの実力を発揮するに至る。そして、一時部隊を離れたミーナはネウロイを極力排除しながら、勇の隙を伺っていた。勇は降下猟兵部隊の攻撃を全てシールドで防ぎ、ネウロイへの攻撃も同時並行的に行っていたため隙が見つからなかった。

「少しでもユウの周りがいなくなれば……」

勇の周囲にいるのは一概に敵と言い切れない。501に与えられた任務はネウロイの排除であり、その一部にはネウロイとなり果ててしまうことが予想された勇をも排除

することが任務とされていた。それだけに作戦遂行上、勇の近くに存在する邪魔な障害は取り除くことも許可されているのである。そんな考えが過つてしまう自分に身震いがしてしまうが、それでも自分の任務を完璧にこなさなければ、501は汚名を着せられ、ウィッチの運営自体が危険に晒されてしまうのである。その上でミーナは決断する。

「必ずユウ、あなたをネウロイから救つて見せるわ！」

そのミーナの飛行する光景を下から眺める男、アイヒマンは取り巻きの部下から治療を受けながら憎悪を込めて天に唾する。

「運命の売女めっ！どうしてこうも赤松勇の思い通りに事が進むのだ！俺の行動こそ世界を導くのだぞ?!平和を叫ぶだけの能天気な奴らとも、命令に縛られるバカな軍人どもよりこの俺の将来性のある行動こそ称賛されて然るべきだろ!?!どいつもこいつも俺の邪魔ばかりしやがって！」

一頻り暴言を吐き尽くし、落ち着くために天を仰ぐ。そんなアイヒマンに部下が状況を報告しに来る。

「我が総統、現在我が武装親衛隊は敵の大群に対して遅滞戦闘を展開しながら赤松勇中佐を攻撃しています。しかし、以前赤松勇中佐を攻めあぐねております」

「そうか、無能には制裁を加えねばな」

「っ!?!そんな・・・」



ただ報告しに来た兵士の頭を撃ち抜くアイヒマンの顔は怒りを通り越して無表情になつていた。周りの兵士たちは次は我が身と必死に自分を奮い立たせる。恐怖に支配された兵士は、アイヒマンに敬礼を繰り返すと、そそくさと攻撃に加わる。ここでただ殺されるよりかは戦つて死のうと直感的に理解したのだろう。それを当然のことだと信じるアイヒマンは手元に大事に抱える木箱を開封する。

「まあ、いくら無能を排除しようとする時間がかかり過ぎるからな。これがあれば・・・俺はまだ負けてない。いや、いつだって俺は勝つて来た。今回だって勝つてみせるさ」

木箱の中から出したものにうつとりとした顔を見せる。周囲の喧騒が嘘のようにそ

の爆弾の魅力にアイヒマンは吸い込まれていた。小さな爆弾はこの世を変える、いわば種子のようなものである。そんな大事な種子を胸に空を見上げる。爆発四散した白鯨の涙とでもいうべき煙がアルプス山脈の向こう側に落ちて行っていた。その光景を見て口角を上げて通信機を取り出す。チャンネルを合わせると、管制官の声が聞こえてくる。

『こちらヘルウエティア連邦、アルプス監視所。どうされましたか?』

「ああ君、少し頼まれてくれるかね?」

『はっ?すみません、外の雑音でしょうか?聞き取りずらいのですが』

「やれやれ、ではよく聞き給え。パーティーの用意を頼むよ」

『はっ?その聞き間違いでなければ、パーティーとおっしゃられましたか?我々は監視所でありますので……』

話しの分からない男だと、アイヒマンは不敵に笑うとこの男の行く末を楽しみ語ることにした。なにしろこれから自分が頼むのは楽しい楽しいパーティーなのだから。

「聞き間違いではない、パーティーだ。こちらアルプスの麓、ヴァイザツハ。ネウロイの大規模侵攻だ。砲弾の差し入れを頼めるか？」

『ネ、ネウロイ?! 何かの間違いでは?! 連合軍からは何も・・・』

「君、この音が聞こえないのかね? 既にもう敵はアルプスを上っているのだよ。いくら永世中立国であるヘルウエティア連邦だろうと、自国の危機くらい自国で守りたいだろう?」

『はっ、すぐに上に確認して参ります!!!』

「なるべくたくさん人を配置することをお勧めするよ。なにせ敵は大群な上にとつても愉快な親玉と来ている! これを君たちが倒せば・・・こういえば分かるな?」

『はっ! 情報提供に感謝します!』

急いで切れた通信に満足げに微笑む。これでアルプス周辺には観客が満員御礼である。全てを巻き込んで有終の美を飾るのは自分である。未来永劫語り継がれ、ありとあらゆる歴史書と教科書には雄大な写真付きの自分が、何ページにも渡つて教えられる存在になるのである。自分の才覚がここまであるとは思えなかつたと、高笑いを堪えずに撒き散らす。そして、次なる誘惑を差し向ける。

「ミーナ中佐、よくぞ来てくれた」

『こちらミーナ、お久しぶりですね、アイヒマン中佐?』

「失敬、昇進してな。今は部下からフューラーと呼ばれている」

『昇進おめでとうございます、とでもお世辞を申せばいいのでしょうか?今は残念ながら戦闘中です』

「ええ分かっていると。ミーナ中佐が十全に任務を果たしてくれることもな」

その言葉を聞いた瞬間のミーナのムツとした感情が、通信機越しに伝わってきて心が高ぶってくる。さらにいじめることもできるが、ここで拗ねられては元も子もないと自重する。

「ミーナ中佐、我々は現在ネウロイと交戦中だ。君にも参加要請を出したはずだ、違うか？」

『・・・その要請でこうして赴いたのです』

「では、やるべきことをやってもらおう」

『やっています！我々は迫りくるネウロイと戦闘を・・・』  
「嘘だ」

アイヒマンの冷徹な声が伝わったのか、通信機越しのミーナの心が凍り付いたのが手

に取るように分かった。アイヒマンは追い打ちをかけて獲物を囲い込む。

『なんですつて……』

「嘘だ、と言ったんだ。先ほどから遊覧飛行でもしているのか？こちらは血と鉄を吐き出して必死に奮戦していると言うのに。まさか君だけは特別だとも？」

『そんなことは……』

「では、早く撃て。もちろん目標はなんだか分かっているな？」

『……はい』

気の強いウィッチを自分の指示一つで屈服させることのできる、自分の権能が恐ろしかった。なんでも思い通りになる魔法の言葉を操る自分こそが至高の存在である証明だと感じていた。

「早く見せてくれ。君の世界に対する忠誠心とやらを」

アイヒマンの言葉はミーナに突き刺さる。アイヒマンの一言で本当に世界の歯車が狂うのだ。それを嫌と言うほど知っているミーナは決意を固める。ミーナは再び戦闘中の勇に視線を送る。依然として勇の付近にも近づけておらず、隙が見当たらなかった。それにしても、一人で孤軍奮闘していると言うのに、全てを圧倒するその實力には恐怖を肌をなでるようだった。

「ユウ・・・お願いだからもう止めて・・・これ以上暴れたら本当に取り返しがつかなく

なる」

『いいや、これでいいんだ』

「なっ?! ユウ? ユウなの?!」

突然通信に割って入ってきたのはかつての勇の懐かしい声だった。しかし、その声はどこか無機質で抑揚のない不気味とも言える声音だった。それでもミーナは勇と話し合える手段を確立したことを喜んだ。

「ユウ! 話を聞いて! あなたを助けたいの!」

『助ける? 誰から?』

「誰からって・・・世界からよ!」

『世界から逃げたところで、俺は世界に居場所がないぞ?』

「それでも死ぬよりかはマシでしょう?!」



勇の言っていることは一理ある。その肯定をしてみえればどれだけ楽だったか、ミーナはこれまでに幾度となく考えの坩堝に悩まされてきた。勇を救う算段をこうして持参してきたのに、勇本人がそれを拒絶してしまえば全てはご破算である。だから、ミーナは強硬手段に出ることにすると警告する。

「私があなただの居場所を作るわ！だから、私と一緒に来て！」

『俺は自由意志でここに居る。俺の意思がこの後の物語を紡ぐんだ。ミーナ、お前にそれを邪魔することは出来ない』

「そう・・・なら、力づくでもあなたを説き伏せるしかないわ」

『最初からそうしてくれ』

勇の反論を挑発と受け取ったミーナは眉間に皺を寄せる。眼下の勇がミーナを見て笑っているようで腹が立った。そんなに自分勝手に死にたいのか、そう考えると自分のこれまで考えて来た計画を鼻で笑われた気がして、力が湧いてくる。ミーナは急降下体勢に入り、照準を勇に合わせる。

「あなたの意思を打ち砕いてみせるわ！かなり痛いわよ！覚悟して！」

照準の中の勇はどんどん大きくなり、その不敵な表情が近づいて来る。位置エネルギーが運動エネルギーに変換されるように、怒りが不安に徐々に変換されていくのは、やはり自分の心がまだ弱いのだろうか。そんなことを思いながら、それも勇の心理戦だと邪魔な思考を振り切って引き金に手を置く。間もなく勇に目を瞑っていても確実に当たるコースに入る。それでも勇は挑戦的な視線を送り続けていた。そしてまさに、射

撃寸前と言うその時だった。

「ミーナ中佐あああ！待っててくださいい!!!」

地上の声が微かに聞こえてくる。その声の主は、小野里だった。小野里はなぜかティーガー戦車に乗り、アインザッツ・グルッペン of 兵士と共に必死に勇に迫っていた。勇への攻撃を一時中断してでも、今はタイミングを計りたかったのかもしれない。ミーナは驚いて通信のチャンネルを合わせる。

「小野里少尉！どうしてここに?！」

『今はそれどころではありません！間もなくヘルウエティア連邦から砲撃が開始されま

す！早く退避をっ！』

「なんですって?!」

小野里はアイヒマンの通信を傍受し、ヘルウエティア連邦側からの砲撃をミーナに警告してきた。アイヒマンが即席の暗号を用いたため、戦車に搭載されている無線機で傍受することができたのだった。山の向こう側から砲弾が雨あられと降り注ぐことを想像すると、空にいる自分も巻き込まれる可能性があり、非常に危険だった。しかし、ミーナにもやるべきことが残っていた。

「忠告ありがとう！でも、むしろ好都合だわ！」

『な、何をするつもりですか!?!』

「私はユウを無力化しますっ！あなたたちは早くここから退避をっ！」

『そんなんっ！私たちが勇中佐を！』

「もう間に合わない！あなたたちだけでも早く！」

ミーナは小野里の忠告も聞かずに勇に再度攻撃を仕掛ける。小野里が何か叫んでいたがそれも無視して高度を取る。勇は未だ攻防に忙しく、ここに砲撃が加えられるならば隙が生まれるはずだった。ミーナがちらりとアルプスの山際を見ると、遂に砲撃音が轟いてきた。地上の勇たちは未だにその音には気づいておらず、ミーナは砲弾の落下に合わせて降下を開始する。

「今度こそ決めるわっ！」

ミーナの決意の速度は、砲弾と共に地上に降り注ぐ。地上の兵士やネウロイは突然の

砲撃に為す術もなく吹き飛ばされて行く。ミーナの目標付近も爆炎に包まれているが、その炎を突つ切つて突き進む。その炎の先に勇はいた。勇は頭上の砲撃をシールドで塞いでおり、完全に不意と死角を突いての絶好の機会だった。ミーナはその機会を逃さず、砲撃の中を勇に向けて攻撃を開始する。

「ごめんなさい・・・!!」

MG42のバリバリという射撃音が勇の付近を耕し、勇は防御も間に合わない。ミーナの狙いは完璧だった。ミーナが放った弾丸は勇の右腕を引き裂き、その衝撃で勇は後ろに吹き飛ばす。ミーナの目標は完璧に達成されたのだとミーナは後悔の念と混じり合うささやかな安堵の気持ちがある。しかし、ミーナの狙いは結果的には行き過ぎる。それは吹き飛ばされた勇の不敵な笑みに象徴されていた。

『残念、少し遅かったな』

勇のそんな声が聞こえてきた瞬間、吹き飛ばされた勇の足元に砲弾が着弾する。ミーナは瞬間的に襲ってくる後悔の念が増大する前にヘルウエティア連邦に通信を繋ぐ。

「こちら第501統合戦闘航空団隊長のミーナ！ただちに砲撃を中止してください！味方を誤爆しています！繰り返しします！ただちに砲撃を中止してください！味方を誤爆しています！」

『なにつ!?了解した！ただちに砲撃を中止する！』

ヘルウエティア連邦に要請が通ると、ミーナはすぐに勇を探す。そこには右腕と両脚を失いながらも左半身を修復している勇の姿があった。勇の死亡という最悪の想定が起こらなかつたことは幸いだったが、不幸は自分の身にも降りかかつていた。なんと砲撃の破片が当たつたのかユニットの蓋板が歪み、飛行が安定していなかつた。その隙を逃さず、ミーナに迫るネウロイが一機、攻撃態勢で迫っていた。

「しまっ……」

ミーナに絶体絶命の危機が迫る中、ミーナに迫るネウロイは攻撃の瞬間に光となり果てる。ミーナはネウロイをやっつけてくれたのは勇だと一瞬考えた。しかし、ミーナの腕を掴み駆けつけたのは指揮権を継承したバルクホルンだった。



「ミーナ大丈夫か?! ユニットがやられているじゃないか!」

「え、ええ・・・私は大丈夫よ、助けてくれてありがとう」

「まったくだ! あんな砲撃の中を突き進むなんて自殺行為だ! 頼むからミーナまで私の前からいなくならないでくれ・・・」

肩を組まれ、仲間が集まってくる頃にはもう逃げ出せない状況を醸成されていた。しかし、まだ自分の任務は達成していないのだ。無力化した勇を拘束し、連れて帰るまでが今回の自分の使命だと考えていた。周囲を見渡すとアインザッツ・グルツペンの数名の兵士たちは何とか生き残り、残存兵力を集中させている最中であり、小野里らは戦車こそ砲撃に晒され、履帯が破壊されていたが今ならまだ逃げられる余裕があった。だから、ミーナは今動こうとする。しかし、宮藤の一言がミーナの行動を鈍らせる。

「ミーナ中佐……さつき、勇さんを攻撃したんですか？」

宮藤の発現に場が凍り付く。先ほどの行動を先に知っていたのはバルクホルンだけであり、砲撃と戦闘の最中に目撃できたのは偶然としか言いようがないのだが、幸か不幸か宮藤はその瞬間を目撃してしまっていた。その回答をしなければミーナは仲間からの支持基盤を失ってしまい、それはあまりにも犠牲が大きかった。

「見て、いたのね……」

「ミーナ中佐、説明してください。さつき、ミーナ中佐は勇さんをネウロイから救うって言いましたよね？」

「……そうね、説明はしなければならぬわね。掻い摘んで説明させてもらうけど……今のユウは、ネウロイになりかけているの」

ミーナの説明に、一同は驚きや困惑と言った様々な反応を見せていた。しかし、ミーナには時間が惜しかった。そのため間髪入れずに説明を畳みかける。

「先のベルリン奪還作戦の後でユウが消えたのは、新たなネウロイを倒しに行くためではないわ。嘘をついていてごめんなさい。本当の理由は……」

「ミーナ、もういい」

本当の理由を説明してしまうと、何も知らない隊員たちは世界の真実に触れてしまう。触れただけでその毒牙に侵される自分たちを前に、バルクホルンが差し止める。

「みんな、聞いてくれ。この世は残酷だ。そして、それと同じくらい愛に満ちている」

バルクホルンの説明は一部の者には伝わらなかつたが、勘のいい者たちには伝わつたようだった。しかし、それで十分だった。この負の連鎖ともいうべき世界の汚れに身を浸すことはウィッチの仕事ではないのだ。それを残念ながら一番理解しているのはミーナとその視点に追いついたバルクホルンの二人だった。

「バルクホルンさんがそう言うんでしたら、私そうなんだと思います。それで勇さんが守れるのなら・・・私、信じてみようと思います」

「ありがとう、宮藤」

なんとか理解を得られたことでミーナは成長したバルクホルンに目線で感謝を伝える。隊員もあの頑固な宮藤の了承の言葉で各々が心を落ち着けようとしていた。これでようやく準備が整ったミーナは、最後の計画に移る予定だった。『だった』と言うのは、その予定を実行できなかつたからである。なんと、ミーナが下準備を整える僅かな時間でさえ、世界は許容できなかつたからである。501の目の前で起きたのは桁外れな大爆発と山崩れだった。

「な、何が起きたんだ?！」

「ユウ・・・あなたなの?」

ミーナの心当たりは正しくはその通りだった。しかし、ミーナの疑問はある存在の二

面性から考えればもはや不正解ともいふべき存在が引き起こしたものだ。それを説明するには、時を少し遡る。その場には二匹の怪物がいた。

「はあ、はあ……久しぶりだな、赤松勇」

「……アイヒマン、お前か」

「フハハハハ！ どうやらお前の最期に見る景色は俺と言うわけだ。世界の害悪を葬るは正義の務め……つまり定めと言うわけだ」

久方ぶりの再会を果たしたのは勇とアイヒマンだった。部下を一人も連れず、アイヒマンは瀕死の状態の勇の下に一番乗りを果たしたのだった。勇は斜面に這いつくばってネウロイ化した左腕だけでゆっくりとよじ登っていた。その様子が虫けらのように、アイヒマンはあられもない勇の姿を見て嘲笑う。

「それにしてもなんといいおぞましい姿だ。人間の姿の原型を留めていないではないか」

「あいにく型にはまらない生き方をしてきたカラナ」

「型にはまらないから人間は墮落するのだ。そんな人間を俺は始末する。お前はその先駆けになってもらうぞ」

アイヒマンは拳銃を抜き出すとすかさず発勇の背中に撃ち込む。本来ならば拳銃を出してから、相手の命を弄ぶように最後の言葉を聞いたり、脅したりするものだが、アイヒマンはそのお約束を無視して勇の殺害を試みる。しかし、勇は死ななかつた。それどころか、アイヒマンに向き直り、仰向けの姿勢で笑っていた。

「お前……本当に化け物になったか?!

」……お互い様ダロ」

「まあいい。いくら不死身だろうがこの後ここに居る観客もろともアルプスを墓場にしておやる。お前の死はこうだ。『世界の敵赤松勇、救国の英雄に討たれアルプスの山々に眠る』、全ては俺の糧になるのだ」

「英雄ジャナクで、英霊の間違いダロ」

勇の減らず口に眉間に皺を寄せるが、勇の不敵な笑みがそれを和ませる。自分が勇の命の行く末を握っていると思うと全てが許せると思っただけだった。しかし、勇の不敵な笑みはアイヒマンの愉悦を上回る。

「なにがそんなにおかしい!」

「イヤ、お前の考えモ一考に値スルと思っテナ」



言葉の抑揚がなくなってきた勇の顔は徐々にネウロイの模様に変化にアイヒマンはすかさず残りの銃弾をばら撒く。それでも勇の身体は修復され、さらに侵食が深まるばかりだった。その様子を見て何かがおかしいと、危機感を抱いたアイヒマンはすぐにその場から立ち去ろうとする。しかし、勇がそんなアイヒマンを引き留める。

「ツレナイナ、ここではユツクリ話もデキナイ」

「止めろっ！離せっ！」

「アルプスを墓ニ、カ・・・ソノ考え実行シヨウ」

「なんだとっ!?!」

その瞬間、アイヒマンを掴んだまま勇の左腕はネウロイのように赤い光を放ち、その太いビームがアルプス山脈を削り取っていく。その光景はまるでアルプスが噴火したかのような威力で、一気に崩れ落ちる巨大な岩に勇もろとも巻き込まれるのだった。そして、その未曾有の山崩れは、残存するアインザッツ・グルツペンの兵士たちやネウロイ、小野里らを全て飲み込むほど巨大なエネルギーの暴発だった。後に501の隊員の著書には、この時の出来事をこう記している。

『あの日、○○○中佐を中心にアルプスの山は巨大な岩の集合体になり果てた。それは眼下の全てを巻き込み、戦いを終わらせたとも言えるが、私にはあれが自然災害や天変地異に準えられる何かに感じてならなかった。それを引き起こせるのはあの時代では、もしくは今でも（私が現在知り得る限りでは）彼しかおらず、限りなく近い何かに例えるとするならば私は『神』ではないかと思う。いや、この例えでも物足りないと感じられるほどのものではないだろうか。実際、私はその場においてその光景を嘘偽りなく、誇張表現でもなく言い表すことができない。この真偽を確かめるのは、この本を手を取つ

た諸君に委ねられるわけだが、恥ずかしながら私の周囲からの評価を知る者からすればこれ以上の証明はないだろう。とかく、彼は我々が知り得る神や魔王といった存在に固有名詞として列せられる存在だった。しかしながら、彼を今でも恐れる者もいるだろうが、彼は私を知る限り最も身近な抛り所である、後輩諸氏に教示しなければならぬだろう。

——元第501統合戦闘航空団 ○○○○○○・○○○

○○○○——（1975年未修正）

## 不滅の翼 第十一話

アルプスの山が崩落し、辺りは騒然となった。特にその光景を上空から見ていた50  
1の隊員は立ち込める煙が収まるまで二次災害の危険性から近づくこともできなかつ  
た。

「ミーナ！この煙じゃ視界は取れない！ユニットが不具合を起こす前にここは退こう  
！」

「ダメよ！早くユウを探し出して連れ帰らないと！」

バルクホルンがミーナを引き留め、撤退を申し出るもミーナは最後の希望を込めて自  
分の魔法力である空間把握を駆使して勇を探索する。しかし、瓦礫の中までは電波は通

じず、その希望も潰える。

「サーニヤさん！あなたも手伝って！」

「はいっ！」

サーニヤと一緒に反応を探るが、それでも微かな反応は地表にほうほうの体で這い上がる数名の人間だけだった。煙が落ち着いてきた時、見知った顔が姿を現す。その少女は小野里だった。

「ゲホツゲホツ・・・た、助かった・・・」

「小野里少尉?!大丈夫?!」

「私は何とか・・・はっ?! ヴィットマン少佐? ヴィットマン少佐は?!」

小野里はズキリと痛む頭を押さえて土砂に巻き込まれる寸前のことを思い出す。戦車に乗り込み、ネウロイに向けて魔法弾を撃ち込みつつ勇に追いつこうと足掻いていた時、土砂に巻き込まれたのだ。しかし、巻き込まれる瞬間まで砲手に着いていた自分だけが放り出されることの不可思議に背筋が寒くなる。急いで自分が出てきたところを掘り返す。

「小野里少尉、何を探している?」

「ヴィットマン少佐です!」

「そいつはインザッツ・グルッペン兵士だろ? お前の敵じゃないか!」

「彼は、彼は違うんです! 私たちに力を貸してくれた、私の、大切な人なんです!」

必死に岩をどかすも、戦車の欠片すら見当たらず徐々に焦燥感は募っていく。自分に夢を語ってくれ、自分を夢だと定義してくれた人物はきつとこの瓦礫の下にいると信じて、自分の手から血が滴ることも厭わず撤去する。その様子を見て501のウィッチも探索に協力する。その最中、宮藤が声を上げる。

「小野里さん！ここに戦車の砲塔が！」

「今行きますっ！」

宮藤に言われた場所には確かに戦車の、テーパー戦車の砲身が見えており、小野里は必死に掘り返す。ようやく砲塔のハッチが見えて来たため、魔法力を込めて歪んだハッチをこじ開ける。その中には、静寂が横たわっていた。

「ヴェットマン少佐・・・ヴェットマン少佐!!」

血気盛んな戦闘狂であり、戦車をこよなく愛する戦車バカは生前の騒がしをどこかに置いてきたかのように静かに目を閉じていた。あまりにも残酷な再開に、小野里は固まってしまった。宮藤がストライカーを脱いで近づいて来る。小野里の隣に腰を下ろすと、ヴェットマンの脈を測る。

「脈が・・・ありません」

「そんな・・・まだこんなに温かいのに！」



互いに医療に覚えのある者だからこそ分かってしまう。宮藤は人間の死を、小野里は親愛の人を目の前で死亡と判定するに至る。しかし、回復魔法の使い手である二人がここに居るといふ奇跡を小野里は手にしていた。何としても救いたいという気持ちがある分の本来の魔法力を開花させる。

「宮藤さん……少し手をお借りしても？」

「何をするんですか？」

「……私が直接心臓を動かします」

「え……」

小野里の決断はあまりにも荒唐無稽で、医療道具が整わないこの劣悪な環境で施術す

ることなど前代未聞のことだった。しかし、それでも宮藤は小野里の決意に力を貸すことにする。

「何をすればいいですか？」

「私が彼の胸を開きます。宮藤さんは回復魔法を常にかけて続けてください」

「分かりました」

二人の回復魔法の熟達者が二人がかりでの大手術を行うことに他の隊員たちも驚いていたが、不思議と何とかなる気がしてならなかった。小野里は自分の手が汚れていることに気づくと、自分の手に魔法力で膜を形成させる。そのまま手をメス代わりに魔法力を緻密に纏わせると、迷いなくヴィットマンの胸を開く。宮藤は目の前で行われる高等医療を間近で見る機会を興奮と共に見守っていた。

「お願い・・・間に合って！」

小野里は切開した胸部から手探りで心臓を探し出す。その行為で多量の出血が伴うが、宮藤の適切なサポートのおかげでなんとか人体に必要な血液量を確保する。

「あつた！あとは心臓を復活させる！」

小野里は固有魔法である部分治癒を用い、心臓の破壊箇所を調べる。その間も小野里は心臓をもみ続け、血液を押し出す。小野里は既に玉粒ほどの汗をかくほど集中してい

だが、宮藤はそんなだれかを必死に助けようとする小野里という人物をどこか似ているなど、場違いにも感じていた。

「修復……完了。宮藤さん、回復魔法で切開部分を治癒してもらえますか？」  
「わ、分かりました！」

新造を修復し終えた小野里はぐったりしており、憔悴していることは明らかだったがそれでも彼女の目はまだ諦めてはいなかった。宮藤が切開した場所を急いで塞ぐと、今度は小野里による人工呼吸が始まる。すでに疲労からか青白くなり始めた小野里の顔を見て、宮藤も力が湧いてくる。宮藤は辺り一面を覆うほどの魔法力を発揮するとヴィットマンの回復を手伝うべく全力を尽くす。しかし、それでもヴィットマンは一向に目を覚まさなかつた。

「どうして……こんなにも小野里さんががんばっているのに！」

宮藤は健気な小野里の姿に涙が溢れて来た。そして、遂に魔法力を使い果たした小野里の手が止まる。宮藤を含め、その場にいた誰もが奇跡は起こらなかったと悲嘆にくれる。絶望と疲労の狭間にいる小野里はふらつく。この戦いに参加した結果が、何も得られるどころか、全てを失うことになることに宮藤が愚痴を零す。

「勇さんは本当にこんなことを望んだの？」

小野里は手放しかけた意識で、宮藤の言葉を脳内で反芻する。勇に全てを賭けて飛び出してきた、これまでの人生を不意にした瞬間、これから自分に生きていく力はないだろうと、このまま眠り続けたいと願った。自分は一人で生きて来たつもりだったが、やはり人間とは誰かがいないと生きていけないという、高い授業料の果ての教訓はあまりにも小野里には酷だった。しかし、その時だった。小野里の擦れ行く意識の中である映像が浮かび上がる。それはいつの日かの記憶だった。

『小野里！起きろっ！寝ちやだめだ！』

マジノ要塞での戦闘において、小野里は四方からの攻撃に晒され心肺停止の状態に陥った。あの時の微かな記憶がなぜあるのか、それは勇の魔法力によるものと推測できた。かつて小野里は勇に拷問を行った際に、勇に触れたことで勇の奥底に眠る記憶の一端を垣間見たことがあった。このことから勇の魔法力を流し込まれると、何らかの

影響が齎されることが分かっているのだが、問題は小野里が蘇生した事象にあった。小野里は当時の瞬間を思い出すと、閃いたとばかりに501のある隊員を呼び出す。

「ペリーヌ・クロステルマン中尉！」

「は、はいっ?! なんですの?」

「あなたの力をお借りしたい！」

「え?」

突然のことに戸惑うペリーヌを差し置いて、小野里はペリーヌの手を引きヴィットマンの目の前に座らせる。その様子に宮藤も目を見開いて驚くが、小野里は懇願するよう一刻も早くヴィットマンを蘇生させることを優先させる。

「クロスステルマン中尉！彼に、固有魔法を！」

「えっ!?これは敵に放つもので、人に向けるものでは……」

「いいから早く！」

ペリーヌは小野里の気迫に気圧されるように、自身の魔法力を発現させる。青白い放電現象を可能な限り弱めて人体に用いることを懸念した上で放出する。

「トネール」

放たれた電撃系の魔法は、ヴィットマンの身体を駆け巡り身体を跳ねさせる。その光



景に魔法を放った本人ですら驚く中、その後の経過を全員が厳かに観察する。そして、その効果は数秒の後に発揮されることになる。

「ゴホツゴホツ！」

「そんなまさか……」

「やりました……本当に助かった！」

あまりの光景を目にした時、人間は特に大きな反応を起こすことは出来ないと言うが、まさにそれに相応しい光景に皆息を飲んで寿ぐ。宮藤はペリーヌの貢献に抱き着きながら喜び、逆にペリーヌは何が起こったか分からず困惑しつつも、蘇生の成功に涙を浮かべていた。そして、小野里は優しく静かにヴィットマンに歩み寄る。少しの時間とは言え、酸素が供給されなかった身体と言うのは非常に危険な状態である。そのことを踏まえて、蘇生したばかりのヴィットマンの顔を覗き込む。

「ヴィットマン少佐？」

「・・・はあ、だれか俺になんかしたか?! 戦車で撃たれたのか?!」

無事なことが確認できるほど戦車バカの様子に小野里はクスリと笑ってしまふ。そして、その微笑みは次第に涙へと変換されていく様子に、周囲はアインザッツ・グルツペンの兵士と言う認識を改め、当の本人であるヴィットマンは何のことか分からず困惑しているが、小野里の様子を見て自分の置かれている状況を瞬時に理解する。

「小野里少尉、いや、正子・・・すまなかつた」

「・・・本当に、バカな人です！」

「心配させてしまったな」

「二度も私を戦車から放り出しましたねっ！」

「あれは緊急事態だったからだな・・・はっ・・・」

相変わらず話しが食い違うヴィットマンに呆れた小野里だったが、その馬鹿さがどうしても嫌いになり切れず涙を浮かべながら吹き出してしまふ。その光景を間近で見ってしまったヴィットマンは、再び体中に電撃が走ったような感覚に襲われる。小野里は優秀な軍人である前に、顔立ちの整った美少女であることを失念していたヴィットマンは女神のような笑顔を前に屈服する。

「どうかしましたか？」

「・・・女神か」

「へ？」

「正子……さん。俺と結婚してくれ」

「……いいですよ」

「「ええええ!!」」

突然の告白と突然の了承にその場にいる全員が同様の反応を見せる。ヴィットマンらしく、一本気な告白にその場にいる少女ら全員が赤面するも、当の二人は大真面目だった。

「いいと言いましたが、私はまだ15歳です。結婚にはまだ早いです」

「待つ！正子が結婚できる歳になるまで待とう！」

「ちよつと待って！小野里少尉！あなたはこの人の素性を知らないわ！それに年の差だつて……」

ミーナが話を進めようとする二人の間に割って入ると、小野里は何事もなかったかのようにヴィットマンの素性を諳んじる。

「1914年バイエルン州オーバーファルツのフォーゲルタールの農家生まれ。現在32歳、元アインザッツ・グルツペンの戦車大隊の副長を務め、心優しき戦車バカで、私に撃破されたおバカさんです」

「そ、そう・・・そういえば小野里少尉は情報部出身でしたね・・・」

がつくりと項垂れて引き下がるミーナをバルクホルンが優しく慰める。そんな傷のなめ合いが起こる中、宮藤がふと思いつたように呟く。

「勇さんはどうしたんでしよう」

宮藤のそんな心細い声に小野里が顔を上げる。真剣な顔に一時の雰囲気はがらりと変わる。ヴィットマンとの語らいは終わりだと、小野里は決然とこれまでの経緯について語る。

「勇中佐は、この戦いが始まる前に私たちを集めてこう言いました」

『これから俺は一切の攻撃をしない。それは降伏をするわけではなく、力を蓄えるためだ。先日のフラックフルト攻防戦で俺の魔法力は枯渇した。そして、アイヒマンらに対抗するには秘策が必要だ。そのために最後の力を残しておかなければならない』

小野里は勇の言ったことを鮮明に記憶していた。そして、その言葉が嘘であったことも、アイヒマンの乗る白鯨を見たこともない機動の攻撃は明らかに普段の魔法力量では扱えないし、あんな攻撃ができることも知らなかったことを考えれば、勇のついた嘘だと言うことが明らかとなる。では、なぜ勇は嘘をつくなんてことをしたのか。それを小野里は話し出す。

「私は、勇中佐に『平和への近道を走らせてやる』と言われました。この言葉はまさに正しく、私にとってはそうではあり得ませんが、平和へ王手をかけました」

「平和への王手……」

「そう、彼はこの世のすべての要求を飲むつもりです」

小野里の説明を聞き、ある者は他の者の反応を伺い、ある者は考え、ある者は辿り着く。その後者はミーナだった。

「まさかつ!?ユウが本物のネウロイになるって言うの?!」  
「……おそらく」

ミーナの言葉にその場にいる全員が答えに辿り着いた者の顔を凝視する。あまりにも荒唐無稽な話に口をもごもごとしか動かせず、言葉が纏まらないようだった。そんな様子を見て、小野里は掻い摘んで解説をしてくれる。



「勇中佐はベルリンにいた、彼の姉の咲さんの影響でネウロイ化を始めました」  
「優雨作さんのお姉さん……」

「そうです、徐々にネウロイ化が拡大してきた勇中佐は悟ったのです。自分が追われている理由と、最も早いその終結の方法を……」

「自分がネウロイになることで、アインザッツ・グルッペンを目論見を覆し、世界の敵として葬られること……まったく、今も変わらず独善的な思考ね……」

小野里の言葉を継ぎ、ミーナが勇の答えを導き出す。これまでを振り返れば、勇は足掻き、苦しみながらも501と協力して目標を成し遂げて来た。また、これまでの勇の人生としてはあまりにもウィッチと関わり過ぎていた。知らないだけで至る所の統合戦闘航空団も関りがあり、それまでに築いてきた関係性が、ウィッチの存在に具議が掛けられる遠因になってしまっていたのだ。501としても二人三脚とまで言ってしまう、世間体が悪い。そこでミーナは気づいてしまう。

「もしかして、ユウは私がユウを撃つことも織り込んでいた……?」

ミーナは小野里を見る。すると、小野里も同じ結論に達したのだろう、沈黙を貫く。正解を導き、勇に踊らされていたと分かったことで緊張の糸が切れてしまう。その場で膝が崩れ、地面に手をつく。宮藤がすかさずミーナを気遣うが、全てが繋がっていく度に自分の行いを教師の立場から評価され、勝手に採用されているようで妙な気持ち悪さがあった。その元凶はやはり勇だったのだと、自分は勇に利用されたのだと、そう考えると吐き気と共に心の奥底から湧き上がる悔しさが込み上げてきた。

「ミーナ中佐、その気持ち、私も良く分かります。私もあなたの仲間です。私も……本当に悔しい!!」

小野里はミーナの涙に共鳴して涙を流す。これほど悔しいと感じる感情は悔しいとはまた別の分類になると考えられるほど、国土を踏みにじられた時よりも、人にばかにされた時よりも別の悔しさがあつた。ワイルドカードだと思つていた手札が、まさか自分から歩き出し、持ち主を手札にするかのような番狂わせに全員が騙され、そしてそれに気づくことができるのは、世界でもほんの一握りなのである。その事実は遅効性の毒である、とミーナは絶望する。

「まんまと世界を騙したわね・・・ハイドリヒ長官」

ミーナの言葉にバルクホルンが黙つてはいない。飛びつくようにミーナに本質を聞き出そうとする。しかし、ミーナの言葉はどこまでも的確に『彼ら』狙いを捉えていた。

「どうしてそこであいつの名前が出るんだ！あいつは当の昔に死んだじゃないか！」

「忘れたの？ハイドリヒの狙いは『世界を変えること』なのよ？」

「違う！あいつは自分が神になりたいとほざいた大罪人だ！世界を変えるのも、己が理想の世界を、自分の都合のいい世界を作りたかっただけなんだぞ?!」

「いいえ、彼の狙いは世界を正しく守ること、よ。アイヒマンはさておき、ハイドリヒはその目標をユウに……赤松勇中佐に託したの……いいえ、彼がそれを背負ってしまった」

ミーナの説明にバルクホルンは絶望する。勇は、バルクホルンが知り得る限りの勇はどこまでも強大で、それでいて仲間想いの家族さながらの仲を築いてきたはずの人物である。そんな人間が諸悪の根源たるハイドリヒの思惑を汲んで行動していると思うだけで寒気が止まらなかつた。しかし、これまで多くの人物が勇と関り、勇に注目せざるを得なかつた事実がミーナの言葉を肯定してしまうようだった。だからこそバルクホ

ルンは聞かざるを得ない。

「もし……もしもだ、ユウがハイドリヒの意思を継いだとしたら、これからどうなる？」

この疑問は、瓦礫と混乱の中でだけ501の隊員の心に静かに染み渡った。そして、その答えは小野里が代表して答える。もはや答えることのできるのは、混乱期を共に駆け抜けた小野里ただ一人である。

「これからどうなるのかではありません、バルクホルン少佐」

「どういふことだ……」

「我々がこれからどうするか、なのです」

「私たちにはもうこれ以上どうすることも……」

「いいえ、勇中佐は既に任務の最終段階を、ほぼ完遂した状態にあります。あとは勇中佐によつて齎された世界の中で、我々がどう生きるかです。故に、彼の最期のメッセージは……」

「『君らの明日は』」

小野里と答え合わせをするかのように、ミーナの言葉が重なる。だれもが勇を追いかけ、勇に注目した混沌の世界の中でただ一人違う目線で立つ存在として勇は君臨したのだ。それはさながら神のようでもあり、悪魔のようでもあった。交差する思惑はただの一度も交わることはなく、ねじれを醸し出したことで勇の目標は達成される。世界が変わる瞬間に501の隊員たちは立ち会う榮譽に招待されたのだと、遅まきながら気づかされる。

「ここにいては旧世代に取り残されます。移動しましょう」  
「ここで見ていることは・・・できないのでしょね」

小野里がこれから起きるであろう世界の変革に巻き込まれる可能性から退避することを提案する。しかし、ミーナはどうしても見てみたかった。いつの日か勇に告白した時の願いでもある、世界が変わるその瞬間を勇と見ていたい気持ちは淡くかつ儂く裏切られる。約束はいつだって必ず守ってもらえるとは限らないことだけを教訓として、ミーナは隊をまとめて退避する。そして、アルプスの崩れた山の中に今もいるであろう存在は、今この瞬間に世界を変える。501らが退避し終わったその時、世界は変わったと歴史に残らない歴史が胎動したのだった。

そして時を遡り、501がヴィットマンを捜索している間、勇とアイヒマンは暗闇の中にいた。

「出せっ！ここから出せ!!」

「全てはお前が望んだことだ」

「俺はこんなことを望んじやいない！俺の目標は・・・」

「いいや、お前の目標はこれだよ」

勇の言葉にアイヒマンは薄暗い中の勇を目を凝らして見る。その姿はほとんどネウロイ化しており、直接脳内に語りかけていた。そんなネウロイとなった勇の言葉を必死に否定したいアイヒマンは、混乱に脳がついて行けず、勇の言葉に上手く反応ができなかった。または不思議と逆らえない雰囲気には押されていたと言った方が正しいかもしれない。

「俺はお前たちが世界に宣伝した通りの化け物になった。世界の敵としての俺・・・ネウロイにな。ネウロイを最も憎み、ネウロイから最も嫌われているこの俺がネウロイにな



るなんて、笑い話もいとこだが、案外ネウロイは心が広いらしい。俺を素直に迎えてくれるらしい」

「ネウロイなら駆除され、排除されるのが仕事だろ！俺の目標の妨げになる者は何であつても排除する！俺はそうしてここまで来た！だからお前もここまでだ！」

精一杯の虚勢も話がかみ合わずに勇の肩を落とす感情が脳内に流れ込んでくる。そんな否定された気分が血が上る。アイヒマンは山崩れの際にも離さなかつた小箱を開けようとする。暗がりの中で緊張も重なりぎこちない動作に、自分が今恐怖を感じているという事実気づく。自分は畏怖されるべき存在であり、他に恐怖する存在がいることはあつてはならないのだ。だからこそ勇に嫉妬にも似た憎悪が湧く。

「貴様のような世界に害悪を撒き散らすやつがいるから俺がこうして動かなければならないんだ！他が無能だから俺が自ら指揮を執っている！それなのに！どうしてお前如き人間にもなり損ねた出来損ないの悪が、俺の前に平然と立ちはだかろうと言うのだ

「!?」

「悲しいだろうがこれが現実だ。人間はいつかは死ぬ。死ぬために存在するといっても過言ではない。それに人の理を創造するなどといった大それたことをするならば、なおのこと人の理を越えなければならぬだろう。お前にはその覚悟があつたのか？」

「黙れ黙れ黙れ!!!」

勇の無機質ながらも全ての感情を含ませたような説教は、アイヒマンの神経を逆なでする。自分の手にある物は世界を破滅に追い込むことも可能な爆弾、原子爆弾である。未だ日の目を見たことはないが、これを世界の面前で咲き誇るといふ栄誉を自分の戴冠式としたかったアイヒマンは、今この場で咲かせようとする。これを使用するときには上空からその景色を眺める計画だっただけに、この場で炸裂させてしまえば自分もただでは済まない。それも織り込み済みで起爆スイッチに指をかける。

「お前の野望こそここで終わらせてやる！この俺が！赤松勇という大悪党を討伐した勇者であり！この世で一番力を手にした男、アドルノ・フォン・アイヒマンだっ！」

勇の焦る様子が目に浮かぶようだったが口早に勇を消し去りたいがために、起爆スイツチを強く押す。カチリと音を発した装置は、アイヒマンの栄光のように輝きを放って煌めいた。それが世界の輝きであるかのように、アイヒマンと勇のいる空間を照らし出す。これまでの集大成を理想の形で実現できなかつたにせよ、アイヒマンという名詞がこの世で覆ることのない歴史の立役者としてそびえ立つことを思えば、アイヒマンは満足だった。しかし、そんな輝きはネウロイ化した勇を強く照らし出す。まるでスポットライトを奪われるかのように光が勇に吸い込まれていくようだった。

「な、なにをしている?！」

「俺の物を返してもらっているだけだ」

「なんだとっ！これは！この光は！この輝きは俺の・・・俺だけのものだ！お前なんか

!!

「かつて、この光と共に俺の中に消えた人がいた」

光を集めながら語り掛ける勇の姿はまるでアイヒマンを介在させなかつた。数多ある虚数空間に誘われるように、勇の思い描く世界に座らされる童のごとく聞かなければならぬならない、そんな気がアイヒマンを包んでいた。

「その人は誰からも見えなくなり、忘れ去られてしまふ存在だつた。そんなちつぽけな存在は端から見れば一つの点に過ぎない。しかし、それは点と点を繋げ線となる。その線はいくつも重なり、面となった。その面はいつの日か俺の目の前に突然現れ、壁として立ちはだかる。しかし、その壁はそれまでのたくさんの忘れられた記憶から蓄積され、立体となつていた。そして、その空間を俺と共有したことにより彼女はようやく解放されたんだ」

勇の脳内の記憶には数々の戦いの光景が映し出され、映画館のように臨場感のある光景が感情を運んでくる。今どんな気持ちを抱き、どんなことが起きたのか、今まで考えたこともなかった人の気持ちがありありと溢れると言う不思議な感覚にアイヒマンは歴史の駒としての存在を強烈に叩きこまれる。それでも勇の映像は止まらなかった。

「解放された彼女は概念としての存在として、入れ物を求めた。共通点のある存在を、近い誰かに寄り添う形で俺と繋げることを選択した。俺は人間とその概念の狭間をうっかり見てしまった間抜けなのかもしれないが、それを見てしまったからには動かざるを得ない。だれもが走り出したくなる衝動に駆られて、俺は自分を覆う殻を自ら脱ぐことができたんだ」

勇の語りはネウロイとなった勇の姉である咲を映し出しながら、その姉の意思が勇に乗り移るかのように一体となっていた。原爆と共に消えた彼女は勇を模倣したために勇となろうとしてしまったのだ。つまり、原爆は勇の中で息づいており、勇自身が原爆と言っても差し支えの無い事実、アイヒマンは笑いを抑えきれなくなる。

「あはは・・・アツハツハツハ!! 貴様が、貴様自身が原爆だったとは！それは世界からも恐れられるわけだ！俺と同等の存在と言うのも領ける！どうだ？俺と共に世界を掴んでみないか？」

アイヒマンは原爆の有無が自分のこれからの人生を左右することを嫌と言うほど理解していた。それが目の前に完全な形として存在しているのだ。もはやアイヒマンには勇が道具としてしか見えていなかった。しかし、勇は明確な否定を示す。

「俺はそんな大層なもの望んじやいない。俺はただ、ここに、この世界にいたんだという、証がほしい……いや、欲しかつただけなのさ」

「証ならいくらでも残せるぞ！俺と一緒にならな！」

「お前と？」

「ああ！俺以上に適任はいないぞ！貴様と原爆を用いれば、世界を統一し、その統一された世界で英雄として覇者になれる！人類史上初めての共同体としての世界の上に俺たちは立つに相応しい、そうは思わないか？」

アイヒマンはビジネスのように相手を追い詰める。恐ろしいと思えた存在はただの怯えた少年であり、世界から孤立した存在である。それを救う体を装い、世界を作り替え、最後には勇も始末すれば完全無欠の自分だけの世界が手に入るのだ。形勢逆転の機会が訪れたこの好機を逃すわけにはいかなかった。

「これまででは敵同士だったかもしれないが、お互いの目標は繋がっている！俺は世界を変えたい、お前は世界から抜け出したい。お前が抜けた世界にはその穴が必要だ。俺ならその穴を埋められる。お前と言う献身的な改革者を世界では英雄と呼ぶだろう。俺はその上で唯一無二の不変の平和を担おう。それがお前と俺の無しうる最高の変革じゃないか？」

自身の持ちうる最高の弁舌を奮い、勇と言う歪な器を優越感で満たしてやる。これまでもこうしてへりくだる輩を始末してきた身としては最高のシチュエーションだった。あとは餌にかかる魚を待つように、舌なめずりをする。食いつくまで後寸でと言うところ、その魚は餌を吟味する。



「世界は俺を覚えてくれるだろうか？」

「もちろんだとも！この俺だけは約束しよう！」

「そうか・・・そうなら」

完全に餌に食いついたと内心両手を上げた瞬間だった。原爆は光を失い、みるみる内にその活動を停止させる。一体何が起きているのか分からなかったが、脳内でクツクツと嗤う声が響いてきた。その声は無機質でありながら、自信に満ちた嘲りだった。

「お前では役不足ということだ」

「な、なんだとっ!？」

「ハイドリヒの腹心だというから期待していたが、残念だ」

勇の言葉で自分のこれまでの工作が全て勇の手のひらで踊らされていたと知り憤慨の表情を隠そうともしない。さらにその表情を見て勇の感情が高ぶっていることも伝わり、脳内は沸騰寸前だった。

「貴様が・・・貴様と言う存在が大嫌いだっ!!!」

「当たり前だ。俺はこの世の全てと縁を切ったんだぞ？今更嫌われたところで俺は止まらない」

「死ね！お前だけで十分だ！俺には！俺にはまだやることが・・・！」

「アイヒマン中佐、ようこそ、終末の世界へ・・・」

アイヒマンの悲痛な叫びも無視して、勇の中に蓄積された青白い輝きは大きく膨らみだす。やがてその目映いばかりの光は勇とアイヒマンを包み込む。灼熱の熱量が岩を

も溶かし、浄化していく。世界に残る小さな小さな染みを洗い流す様に、アルプスの崩れた岩の中で静かに猛烈な熱量を発散させて消える。そして、勇と言う存在が世界から消えた瞬間、世界に確定した事実が飛び交う。

『世界は平和になった』

## 不滅の翼 第十二話

勇という存在が消えてから数週間、あれから忽然とネウロイの攻撃は止み、世界は混乱に包まれた。突如として全戦線でネウロイが戦闘行動を停止し、連合軍はその意図を測りかねつつもカールスラント全域を掌握。同時に全世界でネウロイの停止した姿を確認しながら避難民が祖国の地を踏みしめる。不思議な出来事に一様に困惑しつつも、人類は遂に平和を享受したのだと、臆げな疑惑と共に嘯みしめる。この世界を巻き込んだネウロイと人類の世界大戦は急速な終焉を見せたのだった。未だに活動を停止したネウロイに恐怖を覚える者も多いが、平民の多くは戦争が終わったことを寿ぎ、軍官双方は頭を悩ませつつ、戦争復興のための事業に取り組み始める。穩健派曰く、祖国再建に向けた新たな世界共同体を模索し、強硬派はネウロイ活動再開時に向けた戦略計画の立案に全力を向けている。そんな急激な時代の胎動の中、歴史を見つめる者が出始める。そんな人物の多くは軍人であり、この戦争に多大な貢献を遂げたウィッチの存在があった。とある会議室でそのウィッチは、上官に意見具申所を提出していた。

「ミーナ中佐、これは一体？」

「見ての通り、統合戦闘航空団の解体申請書です」

「なぜ今これを？」

ミーナの意見書を怪訝な目線で空かして見る上官を前に屹立として立ちはだかる。ミーナはゆっくりと意図を説明する。

「ネウロイとの戦争は終結いたしました。これをもってウィッチによる統合戦闘航空団の存在意義は終了したように思えます。これからは各国で復興支援要員としての活用を提案いたします」

「しかし、いつネウロイが再び動き出すか分からんご時世だ。すぐに解体するのは時期尚早だと思うが？」

「いいえ、ウィッチはこれまでよく世界に尽くしてきました。空で、地上で、砂漠で、泥

「凜で……ネウロイと第一線で戦ったからこそ確信するものがあります。それは平和です。確固たる平和です。これから世界には新しい時代が拓くのです。我々ウィッチはその礎になりたい、そう思えてならないのです」

静かな会議室にはミーナの提案が染み渡る。まるで確定事項であるかのような物言いに上官は腕組をして背もたれにもたれ掛かる。指で机をトントンと叩き、暫しの時間を要することを暗喩する。そして、その豊富な時間を消費した上官は最終判断を下す。

「ウィッチ総監のガランド少将の判断は？」

「概ね私の意見に賛同頂きました。同時に私にはウィッチの統括運用の指揮官としての推薦も戴きました。ご覧になりますか？」

「いいや、彼女が言うなら疑うまい……それにしても、ミーナ中佐」

「なんででしょうか」

「貴官はちと鼻が利きすぎる。これからはもう心配はなかるうが、一応留意しておくように」

「・・・過分なご配慮痛み入ります」

ミーナは上官に一礼すると会議室を後にする。言葉の意味を十分すぎるほど理解しているミーナは、光の差す静かな廊下を自分の靴音を響かせて歩く。爽やかな日差しは心を洗い、空気はまどろみを生み出している。窓の外では行き交う兵士が酒瓶片手に軍用車に乗り込むところだった。ミーナの情報網では、近々連合軍が正式にネウロイとの完全終戦を発表することだった。そんな時代の流れを横目で眺めるミーナは窓に反射する自分の顔を見て、一言呟いてしまう。

「すべては日常によって置換されていく・・・よね」

誰もが望んだ平和を享受したのだと、つくづく分からされる陽気に反してミーナの心は陰っていた。心に残る棘は平和を肯定させる度に毒を生み出す。その毒も平和な日常によつて置換されていくのだと思うと、ミーナ自身の表情の暗さを深めてしまう。誰もが「本当に戦争は終わったのか」と疑問に思う中、ミーナを含めた一部のウィッチは自信をもつて「そうだ」と肯定できるほどには信頼できるものなのだ。しかし、その背景にあることにほとんどの者は気づかない。確固たる平和を構築した人物の存在を知ることもなく、ひっそりと世界平和を成し遂げたのは噴飯ものながら最大の敵であるネウロイなのだ。世界はこの事実を知るべきではないし、知らせる必要もない。知ってしまえば、そう考えるとミーナは再び世界を恐怖の渦に巻き込んだ敵側に回ってしまうのだ。だが、ミーナは人の心を持っている。だからこそ、先ほどの自分の言葉に疑問を呈さざるを得ない。

「明日がある、それが日常……じゃあ、あなたの明日は？」



その一言は麗らかな日差しに溶けて消え、この言葉を蒸し返す人間をも、悠久の時間、それも憎たらしいほど欲した時間という概念によって馴染ませる。時は1947年、全世界においてネウロイとの完全な終戦宣言が発表された。全世界で平和を盛大に寿ぎ、世界は再び結束を唱える。友好的な助け合い精神により、戦災に遭った国への復興支援が行われ、その返礼として民間の交流は活発化する。誰もが争いなどを避け、平和を作り上げるために遮二無二なつて動いていく。その一環として、ウイツチによる慰霊訪問や、慈善活動などが行われ、ウイツチは平和の象徴としての活動域を広げていく。その責任者には馴染みのある人物は就任していた。その人物とはミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ大佐。彼女は自ら戦闘航空団の地位を降り、その枠組みを急速に転換させた立役者として政治の世界にも顔を持つ存在となった。彼女は常々こう口にはしている。

「だれしも役割があり、その役割は姿形を変えても本質は変わることはありません。た

だ、目に見えて変化した理由を見ようとしなければその役割を理解することは出来ません。願わくば理解する努力だけは終わらせないでいただきたいのです。あなたが見ていないどこかでは、誰かがその礎を担っていると言う潜在的合理性を私たちは普通と言うのですから」

そして、元501の面々も世界の方々に活躍を開始していた。初めに元501副司令のゲルトルート・バルクホルン中佐（終戦特進）は、終戦とともに軍を除隊。妹のクリスの回復を機に、カールスラント復興省に名誉軍人として入省。その堅実な性格と愛国精神により瞬く間にカールスラントの一地域ではあるが、復興が進み、その地域は「奇跡の街」として彼女の名を冠する道ができたほどであった。そんな彼女にも口癖があった。

「忠実に勤勉に実直に、家族を仲間を友人を大切にすること。周りに急ぐ者がいれば、急

ぐ者以上に急ぐことだ。聞きたいことがいつも聞くことができるとは限らないのだから」

元5001統合戦闘航空団であり、バルクホルン中佐と肩を並べて世界最多の撃墜数を誇るエーリカ・ハルトマン大尉は、戦後復興したカールスラント空軍に入隊。軍を去った旧友のバルクホルンの後を継いで部隊を率いた。しかし、官僚主義的な軍構造に度々抵抗的な態度を示したため、ウィツチの寿命である20歳を機に除隊、最終階級は少佐となった。その後、家族の仕事である医者を目指し、猛勉強に励んでいるとのことである。そして、彼女は軍を去るとき、部下にこのように語ったとされる。

「私は世界最多の撃墜王なんかじゃないよ。世界にはもつとすごい人がいて、私はその人の崇高な行動を見てその後を追っただけに過ぎない。ただ、その人の行動は残念ながら私には背負うことのできないほど、背中で語ることでできたすごいことだったんだ。私は今もその背中を探している」

数々の伝説を残したと言う点では、この人物も語らねばならない。スオムス空軍所属の無傷のエースこと、エイラ・イルマタル・ユージェイライネン大尉である。戦後、スオムスに帰還した彼女は数々の後人ウィッチの育成に当たり、その不思議な魅力で多くの優秀な人材を育成し、その功績も相まって特級昇進措置として若くして中佐に上り詰めた。また、元501で親友と仰ぐサーニャ・リトヴァク少佐の両親の搜索に尽力し、後年もその関係は続いていると言う。その彼女はスオムスで取材されたときは、決まって記者の質問に応えないことで有名だったが、そんな彼女が珍しくきちんと応対したものがあつた。それはサーニャ少佐が両親と邂逅した時にされた質問の時であつた。

『今、こうして親友の喜びの邂逅に立ち会えたことですが、今あなたがもう一度会うことができるのならだれを思い浮かべますか?』

「501の仲間だナ」

『仲間と言いますと、501で活躍されたどの方でしょうか?』

「二人に絞るのは難しいんだナ．．．でも、叶うのなら今度は勝ちたいんだナ」

同様に、サーニヤ・リトヴァク少佐はオラーシヤ国内で家族と再会。その後、オラーシヤ陸軍内でも屈指の評判と名高い女性解放部隊の部隊長に就任し、最年少で中佐に昇進。今後のオラーシヤのウィツチと女性兵士の希望の星の象徴となった。そして、女性だけではなく、その白百合的な美貌に拍車がかかり男性陣からのファンも多く獲得した。軍広報にも引つ張りだこな彼女に対し、理想の男性像を聞かれたとき、彼女の回答にすべての男性ファンが頭を抱えた。

「孤独に暗闇を彷徨う中、優しく照らしてくれるような、幽霊のような人」

そして、ロマーニヤからはフランチェスカ・ルツキーニ中尉が501を振り返る。彼女は終戦後、ウィッチとして501で培った部隊思想を取り入れ、部隊長である大尉に昇進。親友のリベリオン陸軍のシャーロット・E・イエーガー少佐とは、その後も交流を持ち慕い続ける間柄である。さらに、マスコミ受けする彼女にはいつも記者が取り巻き、その中で大戦中で最も印象に残った瞬間を尋ねられ、ロマーニヤの解放と予測していた記者たちの予想外の反応を示した事例を紹介しよう。尤も、この質問に対する回答は国家レベルで極秘とされている内の検閲を済ませたものである。

『大戦中最も印象に残った瞬間は？』

「もちろん××中佐と××がキスしたのを覗き見た時かなー！」

ルツキーニ中尉と親友のリベリオン陸軍、後のリベリオン空軍少佐であるシャーロット・E・イエーガーは終戦後本国に帰国すると、すぐに取り掛かったプロジェクトとして最も有名なのが最速への挑戦だろう。ライバルでもあったバルクホルン中佐が乗っ

たジェットストライカーに対抗すべく、音速を突破すべく取り掛かった彼女は自伝『最速のウィッチ』でこう記している。また、注釈として501隊員のだれかを指し示すであろう主語に誤りが見つかり、後に自伝は一部訂正が施されたが、初版の原文をそのまま掲載する。

「この世で一番気持ちのいいことはスピードを出すことだ。あのスピードを楽しむことのできるのは501でも私の他に二人だけだった。ただ、その中でも彼だけは速度を火力として活用した唯一の人物だっただろう。我々の知り得る中で速度を純粋な火力に転換したのは後にも先にも彼だけだ。私にスピード違反を取り締まるのなら誰かと問われたら、迷わず彼を推薦する」

また、東洋の列強である扶桑からこちらにも名の知れたエースウィッチであり、戦後の出版ブームで大当たりした坂本美緒中佐も紹介しよう。彼女は国を問わずウィッチの育成指導にあたり、その徹底した指導を模倣しようとした軍関係者まで訓練に駆り出し

たことで有名にもなった。そして、彼女の著作である『大空のサムライ』ではネウロイとの戦闘を生々しくかつ勇猛に詳細に書かれており、その後のウィツチ志願者を増加させるほど影響を及ぼした。その著作の中では、謙虚にも先の大戦中に亡くなった全ての兵士に追悼の一文が残されている。

「海で陸で空で散った全ての将兵へ、私たちはあなた方のことを決して忘れない。見知らぬ場所で無念にもその勇気を奮って天に返りし兵よ、今あなた方の軍務は終わりました。あなたを待つ場所へ無事な帰途へ着くことを望みます。そして、私の個人的な懺悔として、私の言葉が背中を押してしまった。吐いた言葉は戻らないが、君が創った世界は素晴らしい、素晴らしいが完璧ではない。最後の一欠けらは間違いなく君だろう」

ブリタニアから新人ながらも精鋭の501の部隊の中で立派に職務を全うしたりネット・ビショップ少尉は、戦後欧州全土の戦災孤児支援部隊として活躍。民間にてそ



の活動域を広げた彼女は、ガリアで活躍するペリーヌ・クロステルマン少佐と親交を持ち、度々会食に参加するなどブリタニアとガリアの親善ウィッチとしてもその名を響かせた。また、扶桑の宮藤芳佳軍医少尉や服部静夏中尉とも交友があり、手紙などをやり取りする仲だと言う。また、リネット・ビショップ少尉は501部隊配属直後、ブリタニア上空で危険な状況に遭遇しており、その時初めて501隊員の姿を目撃したとされ、生涯その光景を忘れることは出来ないと言う。

「輸送機で敵を発見したとの報告を受けた時、私はなにもできませんでした。その時、私の護衛に就いてくれたのが501の初めて会った仲間でした。絶望的な状況にもかかわらず仲間を信じ、最後には敵を倒した姿を見た時、私はこの部隊で強くなりたいと思えました。正直、あの時あの人は死亡したように思えるんです。私も良く分からないんですが……でも、一つ言えることはあの人がいたおかげで今の私があるんだってことです」

リネット・ビショップ少尉と交友を持つガリア共和国のペリーヌ・クロステルマン少佐は、様々な場所でその勇名を轟かせている人物の一人である。その一つに、戦後形骸化していた506統合戦闘航空団の司令となり、各国の思惑を柔軟に対応し、その人格者ぶりから人気はガリア国内に留まらない。また、501時代に築いた関係から各国のウィッチとの連絡手段を多く有しており、今なお世界のウィッチと会談と称した私信をしているらしい。その中の一つを秘密裏に入手することができたため、今回紹介しよう。なお、会話の相手や内容は判断しかねることを先に断っておく。

『お久しぶりです。最近忙しくなつてしまい連絡が遅れて申し訳ありません』

『いいえ、それがあなたのお仕事ですもの。それで何か変化はありましたの？』

『はい、上はどうやらカールスラントで戦後復興を兼ねた平和の祭典を行うことに決定したそうです』

『ということは、やはり私たちも踊ることになるのでしょうかね』

『私はダンスが下手なので、キッチンで料理人ということになりますね』

「納豆は勘弁して頂きたいですわ。医者が必要になりますもの」

『その時は私もう一人が処置しますよ?』

「いいえ結構ですわ。では私も私にできることをしますわ」

『ノーブレスオブリージですね』

「いいえ、高貴もなにもあつたものじゃないですもの」

そして、精銳の501に最後に配属された扶桑海軍の服部静夏特務中尉も紹介しよう。彼女の初陣もまたさまざま、欧州各地で突発的に発生したネウロイの大奇襲作戦で初陣を飾った。さらに、数々の戦闘で501の面々の技量に圧倒されながらも、最終作戦であるベルリン奪還作戦にてパットン將軍を救出する献身的戦果を上げる。最終時には他と劣らぬ技量に成長した彼女は、帰国後扶桑へ凱旋を果たす。その時に記者にされた質問では、緊張しつつも戦場の臨場感を語ってくれた。

「戦闘では最終的には自分の決断が雌雄を決します。例えスピードが秀でていても、火

力に優れていても、天才的な戦闘センスがあらうと、最後には本人の決断のみが全てを変えてしまうのです。私はたくさん精銳の501の諸先輩方のすごくすごい技量を目の当たりにしましたが、中でも群を抜いて秀でていたのは各自の確固たる意志だと思えます。私は若輩でその足元に縋りつくのがやっとでしたが、私は幸いだったかとも思うことがあります。何も分からずに終わった戦争は、私にとつて無垢な平和を運んできのですから。しかし、寂しいことかもしれませんが、人は変わってしまいます。私も今になつてあの戦争は何を生み出したのか、それだけが日々私を奮い立たせるのです」

最後に紹介するのは、501で数々の伝説を打ち立てた扶桑の若き英雄、宮藤芳佳軍医少尉である。終戦と同時に彼女は本来の欧州留学の任に戻り、ヘルウエティア医学学校で学生生活を送った。そんな彼女はウィッチとしての能力だけではなく、本来の医学にも精通しており、戦場から戻った彼女の勉強の遅れをもろともせず、周囲の生徒や教師を驚かせた。彼女曰く、「私が唯一周りの人に負けないと思うのは、誰かを助けたいと思う心じゃないですかね」と話している。また、彼女の豊富な魔法力から導き出される回復魔法は、戦争で受けた傷を兵士の治療にも多大な貢献を果たし、欧州にて赤十字従事

勲章を授与された。さらに、扶桑では名誉の従軍医療従事者に送られる名誉看護勲章と三等金鷄勲章乙を授与され、一躍時の人となった。その授与に当たり、インタビュールされた際には人当たりの良さから謙虚な姿勢が評価され、映画製作も検討されたほどの人氣ぶりだった。そして、彼女は当時の戦争を振り返り、坂本美緒海軍中佐と再会を果たした際にこう語ったとされる。

「私は戦争が嫌いです。当時の私はただ漠然とそう思っていました。ただ、今でもやはり戦争は嫌いです。誰が英雄だとか、だれが悪いとか、私はそんな物差しが争いを産むんだと分かりました。あの戦争で私たちは一人の、たった一人の人間としてみんなの平和のために戦いました。ただ、それだけなんです。だから実は私、今のこの平和な世の中が分かりません。ぽっかり空いた穴がまだ塞がらないこの感覚はきつと平和と呼べないんじゃないか、そう考えると私の中に息づく力が少し暖かくなるんです。私は平和な世界になるまで諦めません。きつと、きつと忘却の彼方に葬られた記憶が、私たちの前で実を結ぶまで、私は諦めることはできないでしょう」

そして、終戦から6年が経過した頃、世界は徐々に復興を遂げた。その祝福として、戦後初めての平和の祭典であるオリンピックピックがカールスラントのベルリンにて行われることが決定した。空前の祝福ムードの中、カールスラントと良好な関係を結んできた扶桑の横須賀で、カールスラントとの親善交流が行われていた。来賓として、元カールスラント空軍大佐で、現在はカールスラント防衛省次官であるミーナ・デイトリンデ・ヴィルケが来訪した。それを迎えるのは、かつての仲間で親友の坂本美緒海軍大佐である。港に寄港した船から降り立つミーナを拍手と共に迎える坂本を見て、ミーナはついに扶桑の地に足を付ける。

「ミーナ、ようこそ我が扶桑へ。歓迎するぞ」

「ありがとう、美緒。久しぶりね」

「まだ名前で呼んでくれるとは嬉しいぞ。随分と出世してしまったから畏まらなければならぬかと恐縮してしまった」

「私は変わっていないわ。それにしても、ようやく扶桑に来ることができたわ」

ミーナの観る景色は穏やかな港に華やかにミーナたちを歓迎する景色だった。喜色満面に咲いた桜の花びらは、色づいた世界を祝福するかのように風流に扶桑を彩っていた。ミーナはそんな景色にしばらく五感を済ませ、匂いや肌を撫でる風を浴びる。暫しの時を坂本は何も言わずに見守り、それに気づいたミーナは坂本に優しく微笑みかける。

「扶桑・・・とてもいいところね。あれが桜？」

「ああ、ちょうどいいときに来た。満開の桜は壮観だろう？」

「ええ、とても、とても」

「・・・ミーナ？」

「ごめんなさい。久しぶりに風情を感じた気がしたものだから」

「デスクワークばかりなんだろう？扶桑で風呂に入って疲れを癒すといい。本物の風呂

をミーナに見せてやろう」

「それは楽しみだわ」

その会話の後は、流れるように扶桑の内閣や皇族への謁見など目白押しの行事をこなす。ようやく日が暮れたころにはミーナが主役となる祝賀会となった。ミーナはこの席で扶桑とカールスラントの親善大使としてスピーチをすることとなっており、それを大勢の賓客が見守る形で 식사가始まっていた。立食の形で行われるパーティーは、入れ替わり立ち代わりで人がやってくるためミーナは休みなく挨拶を繰り返していた。しかし、坂本が気を利かせて休憩と称した中断を申し入れ、ミーナは渡りに船とばかりに坂本の後続く。

「主役は大変だな。座る暇もない」

「気の置けない仲間がいるだけ本国よりもマシなのよ……うふふ」



「どうしたミーナ？」

不意に笑い出したミーナを気遣い、坂本はグラスを差し出す。中身はもちろん酒ではないが、明らかにミーナは当時よりも肝の据わった雰囲気か漂っていた。そのことに坂本は無言の称賛を送る。

「やはり変わったな。戦時は非常時とはよく言ったものだ」

「線路は続くよどこまでも……景色は変わっても、私のいる場所は変わらない。ずっと席に座って景色を眺めているの。だれかが白黒の景色に色を付けたものを見ていることも知らずにね」

「……ミーナ、お前まだ悔やんでいるのか？」

坂本のその言葉を聞いたミーナは、その表情からスツと明るさが消え失せる。坂本も先の大戦のことにはまだしこりが残っているし、踏ん切りがつかないこともままある。しかし、6年と言う時間は少しずつだが着実に大戦と言う世界混迷の時代すら悠久の彼方へと押しやろうとしていた。だが、目の前にいるミーナは終戦の時から未だに心が帰ってきていないのだ。坂本はミーナを少しでも慰めるべく目線を合わせるように膝を折る。

「ミーナ、私たちはあの時でできるだけのことはした。だからこそ、今の私たちがあるんじゃないか。例え継ぎ接ぎだらけの世界だろうと、この世界は私たちが動かさなければユウだって報われないだろう?」

「・・・美緒、あなたは忘れることができるの?」

「忘れること等できるものか。だが、もう戦争は終わつたんだ。心の中の戦争だって、誰と争うと言うんだ?」

「つまり、こう言いたいのか? 『時効だ』、と?」

坂本はこの瞬間のミーナの目つきをよく覚えていた。それはいつの日か、自分に拳銃を向けてきた時の覚悟を決めた目だった。しかし、明らかにあの時と違うとすれば、矛盾を超越していると言う点だった。

「そうは言わないが・・・」

「美緒、私たちは決して繰り返してはいけないの。特に、私は過ちを犯してしまった。それは人間として贖いきれない大罪・・・」

「ミーナ！自分だけを責めるな！それこそ時間が必要なんじゃないか！」

「いいえ、時間だけがいつだって敵だもの。私たちが事実に対して知らん顔することがもう許されることではないの。それを警鐘していたのが皮肉にもハイドリヒだった。この世界にはもう抑えとなる人がいなくなってしまうた」

「それならお前や私でも十分に担うことができるはずだ！」

坂本の言葉にもう遅いとばかりに首を振るミーナは、微かに震える手を抑えて涙を浮かべる。その光景を見て坂本は何も言うことができなくなっていた。

「いいえ．．．いいえ、あの二人は曲がりなりにもこの責任を十全に、いやそれ以上にこなすことができた逸材だった。一人は圧倒的なカリスマ性と知性によって、もう一人は絶対的な力と恐怖によって世界を変えてしまうほどの力を有していた。じゃあ、この世界にはあれほどの人材がいるのかしら？」

「．．．彼らは、戦争が生み出した」

「その通りよ。今の世界のままではやがて平和が蔓延つて根腐れが起きてしまいかねない。でも、それを望んだのが今を生きる私たちなの。そして、それを黙認してしまった、一番近くで止めることができたのが私．．．皮肉な話しよね」

少し疲れたような顔をするミーナに、坂本は手を差し出すことができなかつた。月日は6年が経過しており、風化しつつある戦争を、人々は忘れることに努めて久しい。嫌なものには蓋をして来たこの年月を度し難く思つて生きた人が目の前にいることを坂本自身ですら見落としていたのだ。坂本はこの親善交流と言う場ですら、忘れていない者にとつては場違いなものだと知り、自分が恥ずかしくなつていた。

「ミーナ・・・すまない」

「謝らないでちょうだい。おかげでこうして扶桑にも来ることができたのだから、全てを否定する気はないわ。それに・・・」

「？」

「最近、夢を見るの」

「夢？」

ミーナは思い出したかのように窓を見る。夜の影を電気が照らし出し、明るさが夜を

なくし始めた外を眺めるミーナの目は強い想いを秘めていた。

「不思議な夢でね、私とユウが喧嘩する時の夢なの。私が初めて彼の怖さに触れた時の夜もこんな感じの月明かりのある夜だったわ。彼とは二度大きな喧嘩をしたわ。どちらも大切なものを守りたくて衝突したわけだけど、その時の彼の目がどうしても忘れられずに夢で私に語り掛けてくるの」

「ユウと喧嘩するなんて、よほどのことだったのだろうか」

「ええ、私はあの時彼に恋をしたんだもの」

「……ん？ああ！ええ?!」

ミーナの突然の告白に坂本は狼狽える。坂本はいつの日にかミーナとユウがキスをしている現場を目撃している。その時はそそくさと退散したが、今状況を整理してみるとその状況下で喧嘩していたことが伺え、自分がとんでもない現場に遭遇してしまった

ことを戦後になって知り、笑いが込み上げてきてしまった。

「まさか、あの時の接吻がか！」

「ええ、本当にあなたはタイミングが悪いのよ」

「それはすまなかった。いやそれにしても戦後になって当時のことを知れるとは、これはまたなんとも」

「まったく、私の恋はいつも大変よ。それにしてもあれはいろんな物を奪っていったわ」

「ああ、まったくだ。そうだ、明日今朝言っていた風呂に行こう！桜並木の傍にある温泉なんだ。きっと満足してもらえらるだろう」

「ええ、水に流しでもしないとやっつけられないものね」

そう言うと二人して立ち上がり、会場に戻る。会場に戻るとすぐにミーナはスピーチ

の準備のためまた大忙しとなる。しかし、それでも恙なくスピーチを終え、扶桑とカールスラントの親善交流会の一日はようやく終了した。

翌日、ミーナは坂本と約束した通り桜並木を眺められる郊外の温泉に出かける。この日は午後からの行動のため午前中はゆっくりすることができたのだ。湯船につかると、熱い湯が全身を包み込み、身体の内側に溜まった疲労が液化して流れ出るような快感がミーナを包んだ。懐かしい扶桑式の湯船を堪能していると、坂本が背中を流してくれる。

「風流ね」

「この景色と風呂だけでも扶桑に来た甲斐があったというものだろう」

「ええ、そういえばこの温泉の隣は陸軍の飛行場があると聞いたのだけど？」

「ああ、午後にミーナが来訪する陸軍の飛行場だ。今は大分兵力が削減されてきているが、ウィッチもいるんだ」



ウィッチという言葉に少しだけ懐かしさを感じてしまうミーナは、外の景色の隅に映る小さな点に目を向ける。小さいが明らかに人型で、おそらく飛行訓練をしているウィッチに姿があつた。人類の脅威であるネウロイは今も活動を完全に停止しており、その数も人類側で適切に管理・監視を継続して、その足元にはいつまた起動しても倒せるように爆薬を設置している。そのような中でウィッチを戦力化しておくのは、未だ戦争の名残なのだろう。ミーナは、午後の業務でそのウィッチに会えることを期待して湯船に肩まで浸かつた。

さつぱりして午後からの仕事に取り掛かるべく、ミーナは通常の業務に戻る。先ほど見た陸軍飛行場に見学をするべく足を運ぶこととなつた。飛行場には、最新の技術交換により換装されたジェット戦闘機や新型航空機であるヘリコプターがズラリと並んでいる。カールスラントの技術と、扶桑の造船技術のトレードで製造されたジェット戦闘機は世界屈指の実力を誇るのだ。そんな整備された飛行場にカールスラントのお偉いさんであり、元ウィッチのミーナが訪れたとあつて基地は隅々に至るまで整備が行き届いていた。

「我が扶桑皇国陸軍第三飛行場によろこそお越しくございました、ミーナ防衛次官殿。貴国との更なる発展を心よりお慶び申し上げます。私は陸軍准将の黒江綾香です」

「丁寧な歓迎に感謝申し上げます」

当たり障りのない美辞麗句を並べ、基地の紹介を受ける。最新の戦闘機やヘリコプター、レーダー設備など、様々な紹介を受ける中、ミーナは温泉で見かけたウィッチの姿を探してしまっていた。

「ミーナ次官殿、どうかなされましたか？」

「ああいえ、なんでもありません。ところで、先ほど近くを通りかかった折にウィッチを見かけたのですが・・・」

「ああ、ウィッチですか・・・ミーナ次官殿は501でしたね。いいでしょう。ご紹介さ

せて頂きます」  
「？」

黒江の含みのある言い方に、少しの疑問符が浮かんだミーナが案内された場所は訓練場だった。そこに少数ながらウィッチらしき少女たちが忙しなく動いている。

「現在のウィッチを取り巻く環境はミーナ次官殿が一番お分かりになられていると思いますが、ウィッチの戦時利用は軍縮条約で制限されております。なので、ここにいるのはおおよそ選りすぐられたウィッチが在籍しております」  
「素晴らしい人材たちばかりなのでしょね．．．あれ」

ミーナの目線の先にはウィッチの中で一際目立つ人物だった。ウィッチはほとんど少女たちで構成されている。例外的に勇のような存在がいるが、現在世界で確認されて

いるウイザードと呼ばれる少年ウイツチは確認されていない。しかし、現に目の前にいるウイツチは少年であり、ミーナからすれば目を疑う存在がそこにいた。

「ユウ・・・？」

## 不滅の翼 最終話

ミーナの目の前にはウイザード、さらに言えば勇の姿があつた。ミーナは記憶の欠片に誘われるかのように手を伸ばしてしまふ。

「ユウ・・・?」

「ミーナ次官殿、彼は穴吹訓練生です。お控えください」

「え?」

ミーナの目線の先には確かに勇の面影が立っていた。しかし、よく見ると明らかに当時の勇よりも小さく、あどけなかつた。さらに、苗字も勇の赤松ではなく穴吹だつた。ミーナの困惑した表情を察してか、黒江は彼の紹介をする。

「彼は私のウィッチ時代の友人の子でして、片親ではありますが私の知り合いとよく似ているのです」

「その方を紹介していただけませんか!？」

「ミーナ次官殿、あいにくですが個人的な面会はお控えください。一応ではありますが、彼も厄介な立場にあるのです」

「厄介?」

ミーナの疑問も尤もだと、黒江はどこか疲れたように周りの人間を人払いすると、個室にミーナを案内する。黒江はコーヒーをミーナの分も用意すると、憂鬱な目線を隠す様に話を切り出す。

「彼の名は穴吹未来、母親は穴吹智子です。彼女は父親を公言しませんでした。しかし、

あの顔を見れば誰が父親かミーナ次官殿ならお分かりになるでしょう?」

「まさか……ユウ、いえ、赤松勇なの?！」

「おそらく……智子は私の友人です。その智子は私にも真実は教えてくれませんでした。彼女は『約束したから』の一点張りで、誰と何を約束したのか誰にも知る由もないのですが、彼女は母として彼を育ててきました」

黒江の話にミーナは身体が硬直していた。まさか、勇の子どもがこの世にいるなんて考えらず、勇の子どもが存在すること自体にどこか勇の存在があるのではないかと追憶の欠片を見出してしまいそうになる。あどけなさを残した勇の顔をした小さなウィッチは、確かに記憶の勇と瓜二つと言っても過言ではないほど勇に似ていた。そわそわと落ち着きのないミーナを嗜めるように黒江は妥協案を提示する。

「ミーナ次官殿、普通は一介の訓練生と対面するなんて言うことは公にできないので、あくまで、あくまでカールスラント防衛省次官としての役職の上でお話頂ければ……」

「お、お願いいたします」

「では・・・」

黒江は重い腰を上げると、部屋の外の人を呼び勇の息子を呼ぶように指示を出す。その少しの待ち時間ですらミーナの脳内を引つ掻き回し落ち着かない。部屋の外から聞こえる靴音が、ミーナの過去の記憶を呼び起こす。あまりにもたくさんのことが起きた。あまりにもたくさん関わってしまった。その記憶が今のミーナを形作っているのなら、勇の息子とは会うべきだと確信していた。そして、彼は緊張した面持ちで室内に入る。

「穴吹未来訓練生入ります！」

「おほん・・・入りなさい」



ミーナは穴吹未来と名乗る、若きウィッチをまじまじと見る。やはり顔は勇とそっくりだが、若干目元が最初に勇とあった時のようなきれいな目をしており、さらに言えば勇より少し顔立ちが整って美少年と違って差し支えない顔立ちだった。そして、その少年は緊張した足取りでミーナの目の前までやってくると、正しい敬礼でミーナに挨拶する。

「扶桑陸軍第42戦隊所属、穴吹未来訓練生であります！」  
「・・・私はカールスラント防衛省次官のミーナ・ディートリンデ・ヴィルケよ。あなたのような若いウィッチに会えて光荣だわ。よろしくね」

震える手をやつとのもことで抑えつけ、ゆっくりと手を伸ばす。未来はその手をじっと見てから手を握り返す。

「自分こそ光栄でありま．．．す？」

「へっ？」

ミーナと未来が手を握った瞬間、二人にはわずかに電気が走る。それは静電気と言ってもいいほどの僅かな電気だったが、その電気は二人の記憶を共有する。その事実には、ミーナは涙が零れてしまう。逆に、未来は不思議な体験に眉をピクリと動かしては、すぐにミーナを氣遣う。

「ミーナ中佐殿、大丈夫でありますか？あれ、どうして中佐殿と？」

「私．．．私かわかる？」

「え？いや、自分は初めてお会いした．．．はずなのですが、どうしてでしょう。なにや

ら旧友に再会した気分であります。あついえ！失言でした！お許しください！」

「・・・ふふふ、そうよね。大丈夫よ、穴吹未来訓練生。それより、訓練はどうかしら？不備はない？」

「はいっ！とても良くして頂いております！」

すぐに涙を拭いて元に戻って見せたミーナは世間話を続ける。未来も驚きながらも緊張が優先されたのか気にせずミーナの応対をしていた。

「それはよかつたわ。まだお若いのでしょうか？」

「はい！今年で7才になります！」

「ご家族は心配されているのではないですか？」

「はい、母がいます。母は私を一人で育ててくれました！母は元はウィッチだったと聞き、それと同じウィッチになれたことを誇りに思っています！」

「お父様は……失礼なことを聞いてしまうかもしれませんが、お父様はどこに？」

その答えをどうしても知りたかったミーナは黒江の顔色を伺いながら質問する。黒江はやれやれと言った表情で黙認している。そして、未来はミーナの問いに少し難しい顔をした後、正直に回答を寄こす。

「私の父は……私の母が言うには戦時中は兵士だったと。とても素敵な人だったそうです。その父に私は会ったことはないのですが、私とよく似た顔立ちをしているそうです。母はそのことをとても喜んでくれました。だから、会ったことはなくとも、私は母が好きだと言っていた父を慕っています！」

「そう……そう」

満足のいく答えはそこにはなかったかもしれない。しかし、ミーナの心は氷が解けるようにゆっくりと温かな風が吹いている気がした。真つすぐ過ぎる瞳を向けてくる少年は、どこまでもミーナの心を透過してくる。この6年と言う自分と戦ってきた時間を前に進ませる存在に、ミーナは感謝を隠せなかった。

「私も、あなたの両親が素敵なお父様と会うことができたら、強く思います。あなたはぜひ、健やかに育ってくださいね」

「はい！ありがとうございます！」

「・・・最後に、もしあなたがお父様と会うことができるなら、会いたいですか？」

ミーナの涙を押し殺した声で最後の質問をする。これ以上、未来と空間を共有することはミーナの心が許容できなかった。しかし、それを知らずに6歳という幼い子供である未来は無邪気に自分の心の内を曝け出す。

「もちろんです！会って「ありがとう」・・・そう言いたいと思います」  
「よく、分かりました。ありがとうございます。下がっていいわ」

部屋を後にした未来をミーナは見続けることがもはやできなかつた。視界が滲み、膝はがくがくと力をなくしてどうしようもなく心と頭を熱くする。この熱さは自分が取り戻したかかった『あの頃』という時間である。相対性理論を簡単に説明しようとするときに用いられる、熱い場所に手を置いておく、そうすると一瞬ほどの時間でも長い時間そこに手を置いた気になる、というものがある。しかし、今回のミーナの身に起きていることは全くその逆だった。長い時間が固定化されたミーナの記憶は、感情的熱さによつてようやく原子レベルで時計が膨張を始めたのだ。

「ミーナ次官殿、もしかしてあなたは・・・彼を」

「ええ、恥ずかしながら」

「そうですか。では、私にできるのは一つです。時間は私が作ります。あなたは彼女の  
下に行くといい」

「ご厚意に感謝します」

ミーナは黒江の話に甘え、階段を中断してとある場所に向かう。郊外の閑静な住宅街にポツンとあるその家は周りの環境に溶け込むようにひっそりと存在していた。ミーナは意を決して戸を叩く。静かな家に響く自分のノックの音はだれもその家にはないことを表しているようだった。しかし、その予想とは裏腹に何の音もなくその人物は姿を現す。

「どなたでしょうか？」

「・・・穴吹智子さんですか？」

ミーナは智子の家に上がり、お茶を出されて智子と対面していた。湯気だけがゆらゆらと立ち上るが、二人の間には緊張の糸が今まさに音を出さんばかりに張り詰めていた。しかし、ミーナは本題を切り出すためにお茶に手を出す。渋いお茶が喉を通るのがよくわかる。その行動を見て智子もお茶に手を出した。その瞬間にミーナは話を切り出す。

「先ほど、ご子息を拝見しました。大変聡明なお子さんですね」

「ありがとうございます。見たところ大層お若くしてご立派な職業についておられるようです。私に一体どんなご用件でしょうか？」

「：：申し遅れました、私はカールスラント防衛省次官を務めております、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケと申します」

「やはりあなたでしたか」



分かつていたとばかりに動じない智子は、ミーナの素性などどうでもいいかのようにお茶を啜る。しかし、ミーナにはどうしても聞かねばならないことがあった。

「私は戦時中、501の指揮官として欧州各地で戦いました。あなたのお知り合いの坂本美緒海軍少佐や、宮藤芳佳軍医少尉など扶桑にはなにかと縁があります。そんな折、こうして扶桑の地を踏めたことは僥倖でした。ウィッチとして寿命を迎えても、こうしてウィッチの方と関りを持っていることは非常識ではありますが、戦時での特別な贈り物だと感じてなりません」

「それには同意いたしません」

「私は扶桑のお風呂や桜が好きです。あれだけ勇猛果敢かつ質実剛健の扶桑のウィッチを育んだ祖国がどんなものかと思いましたが、裏腹に四季があり、穏やかな国民性に驚嘆するばかりです」

「全てがあのような人間ばかりではありませんから」

「そうですね。一人一人個性が強くて、よく覚えていきます。どんなに苦しい状況でも足掻き、もがきながらゴールを目指そうとする背中には私自身、何度も励まされました。同様に何度もぶつかりもしました。自分が分からなくなると、本当の心を偽って……私はいつも背中を追っているに過ぎませんでした」

「……追う気持ちはよくわかるわ。私も追つてばかりだった。でも、私は足止めをしたに過ぎないけれど、約束と言う足枷を嵌めることに成功したわ。私も、あなたも戦争はまだ勝負がついていないのね」

「そうですね。私はあなたのように心を振り向かせることは出来ませんでした。でも、最後の最後に追いついてみせました。間に合いはしなかったけれど、追い付いたんです」  
「そう……あの人私以外に追いつかれたことがあったのね……」

智子の相好がようやく柔らかくなったことを見計らい、ミーナは勝負に出る。聞かねばならないことがまだ聞きだせていないのだ。心の底の溜まったへドロのような黒い感情の蓋を開け、智子に見せつける。自分の黒さを見せつけることで相手の余白を埋め

てしまえば、智子の答えは自ずと出てくると考えたからだ。

「私は大罪を犯しました。私は欲張り過ぎたのです。銃を向けて、引き金を絞りました。表情や考えまで全て見えた、あの照準の中には肥大化した私の理想があつたんです。しかし、その理想は風船のように張り裂けてしまった・・・私の思い描いた理想は間違っていたのでしょうか？」

「時間が進むのをだれが止められると言うのでしょうか。それがあなたの質問への答えです」

「それが聞けてよかったです・・・最後に、あなたにしか聞くことのできない質問をしてよろしいでしょうか？」

「それはあなたの質問次第ね」

ミーナは最後の大勝負に出る。ここまで丁寧な下準備をしたミーナの最後の一番温

めておいた質問は短いものだった。

「『未来』とは、どういう意味ですか？」

「……あなた、本当に好きなのね」

「……はい、今は扶桑語を勉強中ですが」

「うふふ……いいでしょう。教えましょう」

智子は初めてクスリと笑った。その笑い顔はどこか遠くで見た笑顔にそっくりだった。そんな少し気持ちが重くなる笑顔の後、智子は真実を語る。その言葉をミーナはしかと心に刻み込む。

「未来……それは今はまだ来ていない、これから来ると言う意味よ」

「・・・その言葉が聞けて、私はようやく私でいられます。ありがとうございます」

「ありがとうございますわ」

「え？」

「あなたにも役割があるのだもの」

穴吹との対談を終えたミーナは即座に動き出す。通常の仕事をごなす傍らで、坂本を通じて宮藤とのコンタクトを確立し、さらには欧州で活躍中のペリーヌにも連絡を付けていた。まずは宮藤である。突然の再会に沸き立つ宮藤をなだめつつ早速話を進める。

「宮藤さん、この世界を治したいと思わないかしら」

「ミーナさん・・・私でいいのでしょうか？」

「あなたがいないと始まらないわ」

「私は何をすればいいのでしょうか？」

「あなたにしかできないことよ」

ミーナは急いで仕事を終わると、名残惜しい扶桑の地を離れる。盛大に船出を祝われ、港には多くの扶桑人や政府高官や軍人が手を振って見送っていた。その中に、一人見覚えのある人物が立っているのをミーナは見逃さなかった。

「穴吹さん……私の役割を必ず果たしてきましょう」

その言葉が聞こえるはずはないが、確かに智子は微笑みを浮かべて頷いたように見えたのだ。ミーナは再び時代の大きな胎動に携わろうとしている感覚に高揚感を覚えていた。航海は順調に進み、カールスラントに向かう一同は紅海に差し掛かってい

た。ちょうどその頃、欧州で連絡を取っていたペリーヌから緊急の通信が入ったことが知らされる。その通信にはペリーヌの緊張具合が伝わるほど状況が変化していた。

『欧州の情勢、複雑怪奇なり』

「これは・・・」

「ミーナさん、これは一体？」

事情の分からない宮藤は不安げな表情を浮かべるが、ミーナはこの時代の不安定さを肌で感じ取っていた。と言うのも、このような時代を変革しようとする時の世界の動きと言うのは一貫して元に戻ろうとする力である、復元力が働くことをミーナ自身よくわかっていたからだった。

「まさか……ここまで急だとは」

「ミーナさん……」

「ごめんなさいね、宮藤さん。私たちの国ではあまり感じられないかもしれないけど、欧州では今少し……いいえ、かなりバランスが崩れているの」

「その、世情に疎いもので……すみませんが、解説していただいてもいいですか？」

宮藤は相変わらず世情に疎いのに変わりないことに少し安心しながら、この状況の變化の危険性を把握してもらおうべく説明を始める。

「今回の私たちカールスラントと扶桑の親善交流の意図が分かるかしら？」

「戦時中の友好関係を記念して、ですよね！」

「その認識が世間で出回っているのですね。しかし、それは表向きよ。本当はカールスラントと扶桑の同盟関係の構築が目的なの」

「同盟？いいことじゃないですか？」



「私たちの国同士ではね」

前置きが長かったことを反省し、宮藤に話の本質を告げる。現在の世界情勢は欧州を中心に戦後社会のイニシアティブの取り合いに明け暮れていた。特に、勇が解放したと言っている地域であるカールスラントや東欧諸国を中心に、欧州では急激な発展と戦後経済の不安定化が顕著になっていた。ウィッチたちが経済支援の援助を行っていたとはいえ、確実に解放の遅れた国とそうでない国では経済の回復度合いに大きな差が表れていた。その差を国同士で背比べに使ったり、差別が副次的に発生したために、急激に欧州事情は関係を悪化させていたのだった。

「そうだったんですか・・・せっかく世界は平和になったのに」

「そうよね。だから、今度こそ私たちが世界を守らなきゃいけないの」

「そのために勇さんに会いに行くんですね？」

「・・・宮藤さん、知っていたの？」

宮藤を世情に疎いと思っていたら、空気を読む能力に長けていたことに少し驚いてしまふ。宮藤は少し大人になった表情でミーナの目を見つめる。宮藤の目にはどこか優しさ以外の何か温かい感情が渦巻いていた。

「私、ミーナさんが勇さんを撃ったときのことをよく覚えています。あの時は、なんて酷いことが起きているのだろうと思っていました。あの時見るべき、考えるべきはミーナさんの心についてだったんです」

「宮藤さん……」

「今なら分かります。あの場で一番勇さんのことを理解していたのはミーナさんだつて。だからこそ、勇さんを撃った時、あんなにも苦しい顔をしていたんですね」

宮藤はぺこりと頭を下げるとミーナに謝罪を示した。あまりにも昔のような話に感じられ、自分でもあの時の感覚を隠してきたのだと、いつの間にか自分も大人になってしまったのだと、感情の区切りがついてしまう自分に悲しくなった。ミーナは宮藤の謝罪を心から受け入れると、目指すべき航路を再設定する。

「進路を変更します！」

「はい、どこにしましょうか？」

「当初の目的地のタラント港から、ジェノバへ！そこからは空路でミュンヘンへ！」

宮藤とミーナはロマーニヤのジェノバに到着すると、とある援軍が到着していた。その人物は現在19歳となり、かなり大人びたフランチェスカ・ルツキーニにだった。ルツキーニは久しぶりの再会に大喜びの状態だった。

「芳佳！それにミーナ隊長！久しぶりっ！」

「ルツキーニちゃん！」

「ルツキーニさん久しぶりね。ここに居ると言うことはペリーヌさんから話は聞いたのね？」

「うん！私にもできることがあれば何でもするよ！」

ルツキーニの成長と心強さに感心しつつ、道中を急ぐ。ルツキーニは既に移動手段を押さえており、ヘルウエティアを経由せず、ヴェネチアを経由して直接カールスランに向かう経路を提案する。ミーナはその案を採用し、すぐに輸送機を手配するようにルツキーニに依頼する。置いてけぼりの宮藤には待機している間にその説明を行う。

「ヘルウエティアは宮藤さんも医学校で通ったから知っていると思うけど、あそこは戦

後も永世中立国よね？」

「はい、その通りです」

「ヘルウエティア連邦を通らないわけは、私たちカールスラントとロマーニヤの国とガリアやブリタニアと言った国が仲が良くないからなの」

その説明で余計に訳が分からなくなる宮藤を、尤もだと思い、もう少し詳しく説明する。

「永世中立国というのはどちらの国と仲良くすると言うことはできないものなの。だから、欧州で勢力が分かれた場合、どちらかの肩入れをしようとか中立とは言えなくなってしまう。だから、私たちがヘルウエティアを通るのは体裁上よろしくないからヴェネチアを通るのよ」

粗方の欧州情勢を説明し終えると、ちようどルッキニーが移動の手続きを終えているところだった。三人が揃うと話もそこそこに輸送機に乗り込む。目指す場所はペリーヌをして危機感を感じさせる、世界で最も熱い場所であるカールスラントはミュンヘン。ここでは今まさに一つの思想がうねりを始め、熱せられた群集の意思は濁流の如く堰を切ろうとしていた。その群集の中に、一際目立つ男がいた。その男は鋭い眼光をきらつかせる。群集の意思を代弁するのではなく、もはや自分の言葉そのものが群集を突き動かしていた。

「もはや我々は我慢できない！世界を平和に導いたのは誰なのか?!それは紛れもなく我々でもあつたはずだ！それなのに！世界は我々を孤立させている！それどころか世界はカールスラントが生まれたての赤子も同然の国家状態であるのにも関わらず、傲岸不遜にも金を筆り、まだ足りぬと宣う！挙句当時の政府は戦時中の戦費を各国から借金していることを期限付きで返済することを決定してしまつたのだ！その期限は既に諸

国によつて短縮され、恐喝にも似た手段でもつて我々の、我々が我が子のために必死に稼いだだけなしの食費までも取り上げんばかりである！これのどこが平和だ！？」

男は激しい言葉を用い、民衆の心を掴み、荒ぶる身振りを持つて言葉を印象付ける。その言葉と仕草に呼応するかのように、次第に民衆の声は同調し、増大する。その圧倒的支持に囲まれた男はさらに躍進を続ける。

「この私がこの国の代表になった今、この国を救えるのは誰か？」

「我が總統！！」

「その通りだ！この瞬間、私は諸君の總統となつたのだ！よつて、ここで議会に私への全権委任法を成立させることを宣言する！諸君らは、世界を正そうとする栄えある歴史の岐路に立っている！全てのカールスラント国民よ、今この場で立ち上がれ！これはミュンヘン一揆であるぞ！」

「「「おおお!!」」」

時代のうねりを熱く肌で感じる中、ミーナと宮藤はミュンヘンに到着していた。いつもと雰囲気異なる熱い空気、宮藤は当てられることになる。

「うわあ、こんなに人がたくさん・・・何かのお祭りですか？」

「いいえ・・・あれは逆のものよ」

「逆?」

「ええ、あの中心にいるのが私の国の新たな統治者・・・エーリツヒ・ヒソラーよ」

ミーナの視線の先には、民衆を扇動し、カールスラントという国を自分の言葉一つで道先を違えてしまうほどの圧倒的な為政者だった。その姿を目撃した宮藤も既に歴史の目撃者という自覚が湧いてきてしまうほどに、今まさに歴史が動くようとしているのが



理解できてしまった。宮藤はそんな感覚に身震いを覚える。隣で立ち尽くすミーナの顔を伺うと、まるで決別とでも言わんばかりの険しい顔つきだった。

「ミーナさん?」

「……宮藤さん、私はこれで本当に当時の私に決着を付けることができるわ。本当に……とても嬉しいことのはずなのに、どうしてこうも自分の国を手放すと言うことがこんなにも悲しいのかしら」

「国を手放す? どういうことですか?！」

「宮藤さん、あなたは私の行いの証言者よ。私は彼がしたことの一端しか実行することできないけれど、私がこれから行うことは、きっと後世では褒められるかもしれないけど、今の人たちには決して良い感情を持たれることはないのだから……だから、宮藤さん。あなたは私のことを見ているだけでいい。ただ、きちんと見定めて」

ミーナはそう言うと、屹立として歩み出す。その行先は迷うことなく先導者、つまりはエーリツヒ・ヒソラーの下だった。宮藤がミーナの行動に予想がついたとき、既に遅きに失していた。彼の前に立ちちはだかるミーナの姿を危険視した護衛によって姿が遮られた瞬間、銃声が響き渡る。宮藤の恐ろしい予想は的中していた。ミーナの行動はすぐさま群集をパニックに陥れる。その喧騒の中でミーナは複数の人間に取り押さえられ、その瞬間の顔は宮藤に託した笑顔だった。宮藤はその表情から真意を正しく読み取ると、すぐさま行動に移る。人ごみをかき分けある人物に駆け寄る。その人物は重傷で激しく出血している様子だったが、すぐに宮藤をどかすべく男たちが宮藤の腕を掴む。

「おい！そこをどけっ！」

「いえどきません！私は医者です！」

「な、医者だど!?早く！早く診てくれ！」

宮藤は急いで治療魔法を発現させると最大限の力を用いて傷を癒していく。その光景を見て、先ほどまで憤っていた護衛達が息を飲んで見守っている。

「ウイツチだ・・・すごい魔法力だ」

「お願い！間に合って！」

宮藤の全力の治療魔法はみるみる傷口を塞いでいく。苦悶の表情を見せていた男は徐々に落ち着きを取り戻したのか、ホッとした顔を見せ、宮藤の顔を見る。

「ウイツチ、いや女神か・・・」

「頑張ってください！」

必死の治療の甲斐あって、致命傷を避けたその男は治療を終えた後すぐに護衛達に抱えられて車に乗り込んでしまう。疲労でへたり込んだ宮藤は空を見上げると、ミーナの

ことを思い出す。ミーナの行動の真意を実行すべく、疲れた脳を活動させて意思を決める。

「行くう……」

宮藤の向かった先はカールスラント南方都市、ヴァイザツハだった。そのヴァイザツハもさらに南方には、密かに終戦の地として語られるアルプス山脈が今もそびえ立っていた。そんな懐かしのアルプスを眺めていると、久方ぶりの、いや少しばかり大人びた声が聞こえてくる。

「国破れて山河在り……ですね」

「小野里さん」

宮藤の目の前に現れたのは、終戦後も欧州に残り、扶桑兵として最後までネウロイを搜索したウィッチの姿だった。そして、今の小野里の姿もまたそれに準じる姿だった。あの日、この場所で世界が胎動した瞬間を目撃し、体験した二人が再びこの場所で再開したことに喜ぶ間もなく歩き出す。

「宮藤さん、ミーナさんは動いたのですね？」

「はい……私に、見定めろ、と」

「そうですか……では宮藤さん、あなたはきちんと見定めてください。そして、決めてください」

「はい」

宮藤が頷くと、小野里は手でどこかに合図を送る。すると、地響きと共に現れたのはカールスラント製の最新鋭戦車であるレオパルト戦車が軽快な歩みでやってくる。小

野里の横でピタリと止めると、中から顔を出したのはヴィットマンだった。少し老いたと言えど、今なお健在な野心をむき出しにした風貌は許可を求める。

「正子、本当にいいのかわか？」

「ええ、ミーナさんは決めました。それに……これであの戦争は終わります。これからは元の世界に戻るだけ。今度こそ私たちの世界は自分たちで決断する。仮初の世界に浸る人世の夢は、今日で終わり。私は……彼をもう一度人間にしてあげたい」

「……わかった。正子が言うなら俺もそうしたい。それで、その場所は？」

小野里は宮藤に向くと手を取る。宮藤はどこか懐かしい魔法力の流れに記憶を呼び戻す。ベルリンで受け取った微かな魔法力の匂いとでもいうべき感覚がアルプスの中から結びつくように沸き立っている。その場所に向けて指を差すと、ヴィットマンは砲塔を指向させる。

「準備よし！」

「宮藤さん、あなたは本当にいいのですね？」

「私、何も分からないまま生きてきました。でも、それだけではみんなを守れないんだってことを知ってしまいました。あの人は、曲がりなりにも自分の信念を貫いてみんなを守ったんです。そして私は、我儘です。私の力を誰かのためではなく、彼・・・勇さんのために使っても罰は当たらないと思うんです！」

「人間、誰だつて我儘に生きています。じゃあ、彼だつて我儘に生きていいと思うのは私だけじゃなかったんですね・・・ありがとう、宮藤さん。本当に、ありがとう」

小野里がそう感謝を伝えると、ヴィットマンは首元のインカムに手をかける。戦車の轟音が空気を切り裂き、その弾丸が岩を砕く。砕かれた岩場は久方ぶりの空気を目一杯吸い込む。二人が急いでその岩場に向かうと、中には微かな赤いきらめきが息を潜める

かのように輝いていた。小野里と宮藤が二人とも魔法力を込める。二人は無意識にかつての記憶を浮かべながら己の魔法力をつぎ込んでいた。魔法力を餌とばかりに吸い込む輝きは、少しづつ輝きを増していく。煌々とした輝きは二人の魔法力を吸い込んで、頭を撫でる。温かな手とは裏腹に、無機質な冷たい手が二人の頭に置かれる。

「・・・ようやく、会えました」

「勇さん・・・」

二人の目の前に姿を現したのは、紛れもなくネウロイだった。しかし、二人とも確信としてその正体が勇であると分かっていた。そして、そのネウロイは二人の頭を通じて言葉を送る。



『オオバカモノ・・・オレニ、ナニヲシテホシイ』

「好きにしてほしい、あなたが思うことを思う存分に」

「あ！その前に！」

宮藤の言葉にネウロイはきちんと話を聞くかのように間を空ける。宮藤は必死に脳内の映像を思い浮かべる。その映像の中にはこれまでのたくさんの人たちの笑顔と、かつての仲間たちの顔に、ミーナの行動だった。その光景を見たのか、ネウロイは溜息をつくように宮藤と小野里の頭を優しく叩く。

『ワカッタ』

その言葉を残すと、一瞬の目映い光を残して姿を消してしまう。傍から見ているヴィットマンが驚いて小野里の下へやってくる。

「彼は?!」

「・・・勇さんは、行きました」

「どこへ?!」

「・・・世界中、です」

小野里は大空へ視線を向ける。それにつられて宮藤とヴィットマンも青い蒼い空を眺める。あのネウロイの行く末はまさに世界中だった。世界各国の首脳部の目の前に突如として出現し、彼らにこう言い残すのだった。

『我はネウロイ……これより10年後に世界へ対し攻撃を開始する。陸や空や海から数多のネウロイが人類を襲うだろう。全ての国を人間を、我々のことを思い出せなくなるその時まで』

この衝撃の光景と言葉に世界中は底をひっくり返したかのように騒ぎ始める。そして、ある場所にもそのネウロイは現れる。その場所は薄暗く、人の尊厳を奪うのにはうってつけの場所だった。月明かりに照らされた小さな窓からの月光を遮る存在に気づいたその部屋の主はむくりと起き上がる。

「だれ？」

「……」

無言が木霊する室内で、暗がりに揺らめく存在に気づく。その姿に目が慣れる頃、その暗がりかゆつくりと近づいて来る。ぼんやりと見えるその姿は、やがて再びぼんやりと姿になってしまう。それはその人物の目に溜まる液体のせいだった。

「何年寝てるのよ・・・バカ」

『・・・』

「こんなに待たせて・・・何とか言いなさいよ」

『・・・』

「私、待つていたわ。でも、待ち過ぎたのね。あなたを待つばかりでこの世界に目を向けようとしなかった。自由気ままなこの世界を好きになれなかった。私は昔のまま、世界はすっかり変わり果ててしまったわ」

『・・・』

「ねえ、知ってる？あなた、息子ができたのよ。あなたに似て真つすぐで・・・愛おしくて。新たな時代を生きようとしていたわ。でも、私は諦められない。あのどうしようもなく手に入れたかった平和までの日常を。本当に手に入れるべきだった本当の世界

を・・・だから、今度は私からあなたを振ってやるわ・・・」

月光に照らされた彼女の目元が微かに輝いた。静かに落ちる液体を床に落ちる前に何かを受け止める。その無機質な受け皿は、雫の跡を優しく溶かすように黒い肌が剥がれ落ちる。そして、ネウロイはそつとその無機質な肌をむき出しにして彼女の目元を拭ってやる。

「なによ・・・あなたなんて最初から私の前に現れなければよかったのよ！」

『・・・』

「あなたさえいなければこの世界も好きになれたかもしれない！」

『・・・』

「私にはもうなにもない！なにもいらない！この世界もなにもかも！」

『・・・』

「・・・嘘、嘘よ！」

自分の気持ちと本心が乖離していることがこんなにも辛く、この何年も苦しみ悩み続けたことをネウロイに打ち明けてしまう自分が嫌いだった。それなのに、涙を拭きつづけたネウロイがどうしても自分の嘘を見透かしてしまっているようで怖かった。しかし、ネウロイは心があるかのように無言を破る。

『……ミーナ』

「!!!……ずるいわ。ずる過ぎるわよ、こんなの……あなたに名前を呼ばれるだけで、覚えていてくれるだけでこんなにも満たされるなんて」

『ミーナ』

「はあ……私、これでもモテるのよ。あなたより優しく、いつもそばにいてくれる人なんてたくさんいるのに……どうして私が好きになった人は私の下を去ってしまうのかしら……だから、あなたも行って。扶桑であなたを待っている人がいるわ」

ミーナは泣くのを止めていた。必死に堪えているだけのやせ我慢に過ぎないが、それでも彼を見送るには必要な感情の制御だった。そして、ミーナの言葉通りネウロイはミーナから距離を置く。聞こえない声で「さようなら」と言っているのが聞こえてくるようだった。だから、ミーナもさようならを言う。もちろん、聞こえないかもしれないからできるだけ近づいて。

「ツ・・・さようなら」

その挨拶はわずかだが確かにネウロイのコアを輝かせて消える。翌日、収監されていたミーナは恩赦により解放され、その後ウィツチ総監を任じられるのはまた別の話である。その頃、時を同じくして朝焼けに燃える扶桑の空の下で、女性となった元ウィツチがふと目を覚ます。春の終わりを告げる柔らかな風を目の前を過った気がしたからだった。

「・・・もう朝？」

寝ぼけまなこを擦り、外を見やる。すると、障子に映る一つの影が揺らめいていた。智子と名がつく人物は夢を見ている気分だった。しかし、そんな夢でも現実よりかはマシだった。

「桜が咲いたわね・・・」

智子の言葉は少し外れていた。と言うのも、桜の季節は既に過ぎており、ほとんど花は散ってしまっていたからだだった。しかし、その落ちた花びらが春風に乗って舞っているのだ。そんな春風に揺れるように障子の先の影は儚げに朧げな影を見せていた。



「しようがない風だこと・・・」

智子が障子を開けると、そこにはネウロイがいた。と言つても、どこかしよげた子どものように小さな気配を晒したネウロイだった。未だ来ない日の出にやきもきしながら、薄暗い景色の中に溶けてしまいそうなネウロイにそつと手を回す。急な行動に驚いたようなネウロイを置いてけぼりにして、智子は口を付ける。

「あなたの明日はこれを覚えてるかしら？」

その瞬間、日が上り、桜の花びらが一齐に舞い上がった。智子は砂埃を防ぐべく目を細める。やがて風が止み、めを開けるとそこにいたのはかつての彼だった。

「明日だけじゃない、その先も、これからも、ずっと覚えているよ」

「約束よ……」

「世界より俺を覚えていてくれてありがとう……君の明日は、俺が守るよ」

10年後、世界が根底から覆されるほどの激烈な戦争が勃発する。彼はその時まで、そしてそれからも生き続ける。生きる幸せを握りしめて。

——  
完——